

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年1月3日

時代の風は、高橋和巳ですよ

(1)無謀にも挑戦してますよ。「三島全集」43巻に…

明けましてお目出度うございます。

今年もよろしくお願ひいたします。

去年は、『ヤマトタケル』（現代書館）と『公安警察の手口』（ちくま新書）の二冊を出しました。その本を書くのに必死な1年でした。おかげ様で、売れてます。特に『公安』ですね。10月20日に発売して、1週間目で2刷。12月20日には3刷目が出ました。皆様のおかげです。

本を出すのは、もうしばらくお休みです。しばらくは「充電」です。だって、二冊を書くのに、キツかったし、本当に大変でした。幻覚を見た位ですからね。それだから、もう、5年位は書くのは休みですわ。と思っていたんですが、松崎明さん（元JR東労組委員長）との対談本のゲラが年末に出てきました。だから、年末年始は、これにかかり切りでした。1月5日が〆切です。1月末には本は出来るのでしょうか。

さて、今年は、「三島・高橋・竹中」ですね。私はこの三人の本を集中的に読み、勉強しようと思つります。

まず、三島由紀夫です。去年の末から、とんでもないことに挑戦してます。『決定版 三島由紀夫全集』（新潮社）に挑戦してるので。全43巻です。1巻が800ページもあります。掛けると3万ページ以上になるでしょう。

今まで縁がないと思ってました。たまに図書館で見かけても、凄いなーと思い、「ホー」とか、「ワー」とか思って、溜息をつくだけでした。これだけのものを書いたんだ、三島は。と、ただただ感嘆、尊敬、でした。

でも、こんなのを家に揃えて、読む人があるんだろうか。いや、たとえ図書館から借りたとしても、読んでる人がいるんだろうか。少なくとも僕の知

り合いには一人もいない。「樋の会」の人だって、読んでる人はいない。右翼だっていない。三島ファンだっていない。じゃ、全国の図書館に「置いてあるだけ」なのか。

今、僕は「月刊TIMES」に毎月、「三島由紀夫と野村秋介」という連載をやっている。1年間の予定で、もう7回目だ。それを書いてる中で、必要があるって、全集にあたって調べることがあった。そして、思った。よし、「じゃ全集に挑戦してみよう」と。

そんで、中野図書館から1冊ずつ借りている。ラストの「討論・座談」から読み始めている。驚いたね。まるで今のことを言ってる。それで、引き込まれるように読んだ。まア、その内容については、ここでも少しずつ紹介していく。

図書館は貸出期間が2週間だ。だから月に二冊だ。全43巻読破には2年の歳月が必要だ。やってやろうじゃないか。まだ、4巻目だが、まるでエベレスト登山に挑むような気持ちだね。又、こんなことでもないと一生読めんだろう。

忙しくて読めないで、「あっ、いかん3日後に返さなくちゃならん」と思って、喫茶店「ルノワール」に閉じこもって、4時間位、集中して読んだりすることがある。深夜あいてる喫茶店やファミレスで読んでることもある。家だと、だらけて読めない。「家では原稿を書く」ことに集中しているし。又、ビデオの「ノルマ」もあるし。今は、「ミス・マーブル」と「金田一少年」を集中的に見ている。「コナン」110巻は全部見た。

しかし、「コナン」で不思議なことがあった。「シリーズ1」が10巻、「シリーズ2」が10巻とあって、「シリーズ11」の10巻で終わっている。日本で一番大きい新宿TSUTAYAではそうだ。

ところが、阿佐ヶ谷TSUTAYAに行ったら、「シリーズ12」が出ていて、その7巻までおいてあった。新宿にはないのに…。こんなことってあるんだね。それで、さっそく借りて見た。しかし、「これで全て征服した」と思っていても、次々と出る。大体、週刊誌、テレビで現在もやってるんだから、次々とビデオも出る。いつまでも終わらん。イラつく。

話を戻す。三島のことだ。この全集の中には、小説、評論だけでなく、「本の推薦文」「手紙」「インタビュー」などもある。普通なら、これだけ全部収めたら必ず〈手抜き〉がある。「つまらんもの」がある。でも、三島にはないんだね。全て、全力で書いている。驚きだ。

でも、こんな膨大な全集を読めるのも、図書館があって、「貸出期間」が

あるから、読めるんだ。つまり、「ノルマ」ですよ。人生は。「月に30冊」読む。あるいは、10冊でも5冊でもいい。ノルマがあるから読める。その中で、これは！と思う本にも出会う。

三島全集だって、もし、金があって、又、家が広くて、全43巻を買えたとする。そしたら、とても読まないだろうね。百科事典と同じで、「家具」になっちゃう。全集揃えたことで安心しちゃう。読む気力なんて起こらん。読書だって、「ハングリー精神」がなければダメなんだよ。

その点、私は、貧しいから本が読める。ありがたいことです。

全集の話だ。今まで、「全集」を読んだのは、夏目漱石、太宰治、芥川龍之介、川端康成…と何人かいる。その人が書いたもの全てを読むわけだ。でも、下らんものも多い。日本最大の文豪、漱石にしてもそうだ。「何だこれは」と思うものもあるし、明らかに手抜きのものもある。手紙や、詩、漢詩など、あそびで作ったものもあり、こんなのも入るのか、と思うものもある。でも、「全集」だから、何でも全部載せるんだ。ご苦労さまだ。読む方だって、ご苦労さまだ。しかし、何度も言うようだけど、三島だけは「手抜き」がない。人生にも「手抜き」がないのだろう。張りつめた45年間の生涯だった。

(2)高橋、三島、竹中労ですね。今年の狙い目は

では、次に、高橋和巳と竹中労だ。高橋和巳は昔、全集を読んだ。竹中労は、ちくま文庫で昔の本が少しずつ出ている。読んでみたらいいだろう。極言するが、三島、高橋、竹中。この三人を読めばいいだろう。そこに「全て」があり、「真理」がある。とすら、思うね。

去年の11月13日(土)のことだった。宮台真司、高岡健両氏と、三人で話した。神楽坂の「牛込簞笥区民ホール」という、面白い名前の会館だった。昔、このあたりには簞笥職人が集中して住んでいたのだろう。といえば、小学校の時、私は秋田市鷹匠町に住んでいた。鷹匠の住んでた町だ。又、中3、高校は仙台だが、「北鍛冶町」に住んでいた。鍛冶屋さんの町だ。でも、今は、鍛冶屋なんて一軒のもない。町名があるんなら、せめて一軒位、市の力で記念に残したらいいのに。

ところで、簞笥区民センターだ。そこで話してる時に、突然、宮台さんが、

「高橋和巳の『邪宗門』を最近、読み返したんですよ。いいですね」

と言った。ビックリしたね。「今時、高橋和巳？」ということもあった

が、あの忙しい宮台さんが、あの長篇の『邪宗門』を読んだのか、と驚いた。それで、私は勢いで、言っちゃった。

「これからは、高橋和巳がブームになります！ 特に『邪宗門』です！」と。

まア、こんなふうに断言することはよくある。「50年後、連合赤軍は新選組になる！」とか。当たるかどうかしらんが、断言してみせる。「…かもしれません」 「…そうあつたらいいな」と不安げに言われるよりも、「なる！」と断言された方が聞いてる方も心地よいだろう。そう思って時々、断言している。

「人生に必要なことは全て『ゴルゴ13』から学んだ！」と昔、どっかに書いた。そしたら、「じゃ、作者のさいとうたかをさんと対談して下さいよ」といわれて、「ゴルゴ学」の本で、話した。嘘から出たマコトになった。

いろんな所で、こんなことを断言している。ほとんど忘れてるが、でも、それで、いろいろと話が拡がることもある。又、いろいろ〈形〉になって実現することもある。言葉の力だ。言霊ですよ。

高橋和巳のこともそうだ。ああいう、真面目な、つきつめた眼をもった作家の本を、皆が読むようになればいいな。そんな時代になれば、と思っていたんだ。でも、言った本人は忘れていた。ところが、だ。「あの時、すすめられたので『邪宗門』を読んでます」という学生がいた。何人もいた。

「えっ？本当に読んでんのかよ」とこっちがビックリした。今の若者には、読みにくいだろう。難しいだろう。それなのに、「面白いです」といっていた。じゃ、私も再度、読んでみなくちゃ。

『邪宗門』は、少し前にも、「桜チャンネル」というテレビにて高森明勲氏と〈神話〉の話をした時にも話題になった。オウム事件の時にも、かなり話題になった、「あの事件は『邪宗門』をモデルにしたのでは…」という人がいたのだ。「いや、リーダーの何人かは、真剣に読んでいて、あれに影響されて、事件を起こしたのだ」という人がいた。誰が言ったんだろう。私かな？

いやいや、オウム信者に会ったら、何人かの口から、『邪宗門』を好きで読んでます、という人がいた。

つまり、『邪宗門』とは、そういう本なんだ。昔、大本教という宗教があった。国家に逆らった。「不敬だ！」ということで国家に弾圧されて、潰された。本部はダイナマイトでぶち壊され、信者は大量に逮捕された。拷問され発狂する者も続出した。

この大本教は、今もあるが、とても昔の勢いはない。国家に反逆し、国家によって潰される。「これが、私達と同じです」とオウムの何人かは言っていた。

この本を読むと怖い。オウムを連想する。又、モデルの大本教を思い出す。それに、僕自身の思想のルーツがここにあるからだ。だから、読み返すのが怖いのだ。

「ルーツ」と言ったが、ちょっと説明する。

僕は「生長の家」の運動を長い間、やってきた。今も自分の中にはその信仰、思想があると思う。

そして、「生長の家」をつくった初代総裁、谷口雅春先生は、実は大本教の出身なのだ。さらに、大本教には、大日本生産党の内田良平も力を貸していた。ここを維新の拠点にしようとしたのだ。又、合気道の創設者・植芝盛平もいた。信仰、思想、武力を備えた大宗教団体だった。又、国家革新の、維新の拠点だった。文武両道の革命運動だった。

しかし、その後、文武は分離した。「文」（思想）の部門は、「生長の家」などとなって別れていった。「武」は合気道として、「宗教なしの武道」として発展した。そして、不思議にも私の中で、「生長の家」と「合気道」は再び帰一し、再統一された。だから、私のルーツなのだ。

大本教の出口王仁三郎は、「私こそ、スサノオの生まれかわりだ」と言った。「スサノオ（らしい）の格好をした写真もある。そんな話を高森明勅氏とテレビでした。「じゃ、ヤマトタケルの次はスサノオですね」と言われた。何年かかるか分からんが、挑戦してみたい。

スサノオは日本人の「原型」だし、「原像」だ。優しい姉のアマテラス。そして、猛々しい弟のスサノオ。これが日本人の原像である。幸田文の名作「おとうと」にも通じるテーマだ。

今、本棚を探したら、「高橋和巳ノート」というのが出てきた。高橋和巳を熱中して読んでた時、ノートまでとて読んでたんだ。大学ノートの左側には、感動した所を抜き出している。右側には、それに対する自分の感想などを書いている（なまいきに！）。パラパラとめくったら、こんな本が出てくる。

「黄昏の橋」

「我が心は右にあらず」

「墮落」

「戦後派作家は語る」

「生涯にわたる阿修羅として」
「人間にとて」
「散華」
「自立の思想」
「白く塗りたる墓」
「日本の悪靈」
「明日への葬列」
「孤立無援の思想」
「高橋和巳作品集7」（エッセイ集1）

と、〈目次〉にある。目次をつくり、さらにページまで打っている。昔は几帳面だったんだ。邦男君も。この「高橋和巳ノート」には、びっしりとメモが書かれ、感想が書かれている。それに「ノート」はこれだけではないようだ。だって、『邪宗門』『悲の器』『わが解体』などの代表作はない。これは又、別のノートに書いてるのだろう。探してみよう。

『世界革命への飛翔』という本もあったな。赤軍派の人達と話していた。又、「内ゲバ」はどうやったら避けられるか、といった本もあった。

（3）『邪宗門』の次は『日本の悪靈』を読めばよかとよ

「『邪宗門』の次は、何を読んだらいいのでせうか」と学生に聞かれたので、私は答えた。

『日本の悪靈』がよか！と。

ドストエフスキイの『悪靈』という本がある。世界最大の文学だと私は思っちょる。日本の天才作家・見沢知廉氏も、これに強く影響された。「例の事件」も、この本の影響でやったのだ、という説もある。だから、「日本のドストエフスキイ」とも呼ばれてるよ、見沢氏は。

そのドストさんの『悪靈』にならって、高橋和巳は『日本の悪靈』を書いた。非合法・非公然の革命運動を書いた小説だ。革命家たるもの、この世の中をぶっ壊すのだ。世の中をぶっ壊すということは、この世の倫理観もぶっ壊すことだ。

革命家は、旧体制と、それを支えた旧道徳をぶち壊すのだ。「前衛」だ。その為には…と、『日本の悪靈』の中では、こう書かれている。

〈革命家は先取的に一切の旧道徳を自己爆破せねばならない。あらゆる既成の道徳、善意、感傷、そして本能的な親子や

男女の愛も。それに打ち勝ちえた者のみが、眞の前衛の名に値する。自己の現社会の道徳からの超越を検証してみせるためには、たとえばお袋を強姦し、父親の脳天をぶち破ってみせることぐらいしてもいい〉

どうです。特に最後の一文だ。ヒヤー、凄いな、と思ったね。それこそ、ガーンと脳天をぶち破られるような衝撃でしたね。又、こんな箇所も抜き書きしている。

〈平和革命、それははなはだしい名辞矛盾でなければ最悪の意識錯乱である。 (...) 合法出版物が平和革命を念仏するのは、それはそれでいい。しかし、革命家が本気でそんなことを信ずるのは、自分からギロチンに首をさしのべて斬ってくれというのに等しい〉

過激ですね。又、こんな過激な所ばかりを抜き出したんですね。私は。こんな所もあります。何のために先人の本を読み、勉強するかだ。

〈だが、その時、問題だったのは、誰の言説が過去の思想家の誰に啓示を受けているかを指摘することではなかった。誰の言説が、すでに決定してしまった行為にふみきるのを励ますか、そして、後退りをはじめた仲間の一人をどう処置するか、その処置を正当化する論理は何かにあった。彼らは胴体に綱を結びあって断崖を跳ばねばならなかつた。その時必要なのは自分を励ます念仏であり、尻込みして重荷になった者をつきおとす決断であった〉

当時の活動家の読書はこれに似ていた。右であれ左であれ、自分のやっていることを正当化できる部分をどっかから引っ張ってくる。「誰々もこう言っていた」と…。都合よく引用する為だけに勉強し、読書したんだ。

それにしても、この箇所は典型的だ。余白の所に、その当時の邦男君の書き込みがある。

「連合赤軍の内ゲバの論理だ。鬼頭正信の思想の中に、今日の連合赤軍を予言していたのではなかろうか」

「なかろうか」と謙虚に書いている。今なら、「予言していた。スゲー」と書くところだ。これは、連赤の直後なんだろう。そうすると30年も前か。この小説の主人公は鬼頭というんだね。昔の武装共産党をモデルにしてたと

思ったが、激しそうな名前だね。名前からして武装勃起だ。いかん、いかん。すぐに下ネタになる。30年の間に私は堕落した。ああ、自己嫌悪！自己批判だ。小説ではこんな所もある。

〈放っておけばいつまでも無明の世界をさまよう者の悪しき因縁を断ち、往生させてやるのはむしろ菩薩の業〉

ウッ、凄いね。今だったら、「オウム事件を予言していた」と書くところだ。じゃ、書いとこう。

こんな調子で引用してたら、キリがない。では最後の切り札だ。高橋和巳の教えの中で、私が一番、感動し、今でも、それを守っている教えとは、これだ。『高橋和巳作品集7. エッセイ集1（思想篇）』（河出書房新社）の326ページに出ている。こう書かれている。

〈読むことと書き述べることの比率が、時間的に八対二ぐらいであるのが一番、精神的に健康であるような気がする。あまり読んでばかりいて表現する場がないと、せっかくの知識や思弁も腐敗するが、書いたり喋ったりする比率が大きすぎても壊れたレコードのように堂々めぐりをはじめる〉

これは真理だ。生活の黄金律だ。

たとえば、1日に3時間原稿を書くのなら、その4倍の12時間は勉強しなさいということだ。蓄積も思索もなしに、喋り書きなぐっている人間ばかりじゃないか。今は、皆、壊れたレコードだ。そう言っている。30年前のことを言ってるし、30年後の今を予言している。そうは思わないかね、諸君！

あっ、こんな文章もあるぞ。

〈苦しみは人を考えさせ、人々に連帯の可能性をあたえるけれども、快樂は人を孤独にする〉

ウーン。そうだね。こうみてくると、私は三島よりも、ずっと、高橋和巳に影響を受けている。和巳教の敬虔な信徒ですよ。ということで、今年も、連帯を求めて孤立を恐れず、本を読み、勉強して行きませう。

【だいありー】

[1] 12月24日(金) 7時からニュース・ペーパーコントの合間に、高橋哲哉さん（東大教授）とトーク。イラクと自衛隊。それに生活保守主義の話をする。マッド・アマノさん達が見に来ていた。打ち上げで一緒に飲む。

[2] 12月25日(土) ニュース・ペーパー公演のラスト。午後1時から。900席の会場（一つ橋ホール）に千人以上がつめかけ、いくら補助椅子を出しても間に合わない。凄い。トークは高橋哲哉さん、斎藤貴男さん（ジャーナリスト）と三人で話す。終わって、4時から6時まで、森達也さん（映画監督）らと打ち合わせ。6時から8時まで、ニュース・ペーパーの打ち上げ。8時から高田馬場に行って、一水会の忘年会に出る。

[3] 12月27日(月) 7時からロフト。「創」プロデュースのイベント。テーマは「イラク・日本・北朝鮮。メディアが伝えない真実」。超満員だった。僕の『言論の覚悟』は売り切れちゃった。「どうせ売れないだろう」と思って、少ししか持てこなかっただようだ。でも、ロフト始まって以来の入りだ。出演者は、綿井健陽、安田純平、森達也、私。司会は「創」の篠田編集長。後半、元「話の特集」編集長の矢崎泰久さん、それに辛淑玉さんもかけて盛り上がった。又、ハプニングもあり、会場に緊張が走った。

【お知らせ】

[1] 1月12日(水) 7時から高田馬場のライブ塾で島田裕巳さん（評論家）とトーク。「オウム事件の教訓」です。

2月9日(水)は三浦和義さんと「ロス疑惑の真実」

3月9日(水)は立松和平さん（作家）と「連合赤軍事件」です。

[2] 1月26日(水) 7時から一水会フォーラムです。高田馬場のシチズンプラザです。講師は民主党衆議院議員の長島昭久氏です。テーマは「日米同盟の新しい設計図」です。ぜひ、ご参加下さい。

[3] 「別冊宝島」（1102号）が送られてきました。「05年1月28日発行」となっておりますから、もうすぐ書店に出るでしょう。タイトルも凄いです。

『日本タブー事件史』です。=誰も触れないあの事件の真相=とサブタイトルがついてます。800円です。「在日タブー」の所で、私も出てます。星野陽平さん（フリーライター）に聞かれて、私が喋ってます。「新井将敬議員が首吊り自殺」の項です。6ページも喋ってます。〈「日本人より日本人」在日コリアン・新井将敬。「自決」の背景にあるもの〉です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年1月10日

大変だ。事件だよ。警察だよ。新年早々…

(1)ゲッ！又もやガサ入れだよ！

生まれて初めて、フィリピン・パブに行った。若くて可愛いフィリピーナが寄り添い、サービスしてくれる。胸やお尻をぐいぐいと押しつけてくれる。嬉しかった。酔った。女の子の中に、戦後の十大事件に詳しい子がいた。推理ファンの女の子もいた。だから、三億円事件や三島事件、連合赤軍事件、グリコ・森永事件などについて話してやった。赤報隊事件の話もしてやった。

酔って気が大きくなつたんだろう。よく分からんが、普段は絶対にしない話もしたようだ。相手は外国のおネエちゃんばかりだ。何を言つてもいいだろう。そう思ったんだ。普段、慎重な私としては珍しい。ペラペラと、秘密の部分も喋ったようだ。「あの事件は実は俺がやつた」「この事件だって俺がからんでいる」「あの時の脅迫状は俺が書いたんだ」と喋ったようだ。ヤバイ！馬鹿な男だ。絶対に言つてはいけない事だ。いくら若い女性にちやほやされたとはいえ、取り返しのつかない事をした。

いかん！いかん！酔っ払って自分を見失っていたんだ。なんせ、可愛いフィリピーナに口移しで酒を飲まれ、舞い上がり、酩酊していた。さらに私は携帯を取り出し、写真まで見せてやつた。携帯を持つことだって皆に秘密にしてるのに、酒と女は気を大きくする。大胆になる。例の事件がらみの写真を見せてやつた。「この事件の時、俺はここにいたんだ」「ほら、これが下見に行った時の写真だ」と得意げに見せた。

脅迫状を投函したポストも写真に撮っていた。プロが見たら分かる。でも、なーに、外国のおネエちゃんだ。分かるはずがない。そう思った。しかし、その油断が命とりだった。「シャチョウサン、スゴイノネ！」「カッコ

「イイネ！」と、女の子に言われて、喋ったのだ。

そして二日後。ぐっすり眠っていたら、明け方にドンドンと玄関の戸を叩く音がする。「警察だ。開けなさい！」という声。ゾゾーッとした。ガサ入るだ。でも何で？あの事件も、この事件も、そしてもう一つの事件も皆、時効のはずじゃないのか。

「ところが、時効が延長されてる事件があったんだな。マスコミには伏せてたけど。フィリピン・パブではいい気になって、ペラペラと自供したようだな。録音もとってあるんだ。酔って、いい加減な事を喋ったと言い逃れるつもりだろうが、犯人でなければ知らない事もあったんだ」と刑事は言う。しまった！と思った。その瞬間、いろんな事が走馬灯のように頭の中をグルグルかけ巡った。

大体、フィリピン・パブに誘われたのもおかしい。あいつが何で、いきなり「おごるよ」なんて言い出したんだ。何で、女たちがあれだけチヤホヤしたんだ。そうか、囮捜査だったのか。公安め、汚い手を使いやがって。と、悔やんでみてももう遅い。

「いや、落ち着け。証拠は何もないんだ」と自分で自分に言い聞かせた。
「でも、酒の勢いとはいえ、重要な事を喋ったからな…。これで一生、刑務所か。へたしたら死刑だな。その時は、北一輝のように「天皇陛下万歳」はやめとこう。

そんな事を冷静に考えていたんだ。こんな極限状況の中で。でも、それほど冷静なつもりなのに、人は時として突発的に、信じられない行動をとる。いきなり、走り出した。相手は20人だ。とても逃げ切れない。それなのに逃げ出した。テレビの犯罪ものの影響かもしれない。こういう場合は、こうするもんだ、とインプットされている。愚かな男だ。そう、私の事だ。簡単に、刑事に阻止された。そして、いきなり払い腰で投げつけられた。

昔、釧路の「日ソ友好会館建設反対闘争」で捕まった時も、刑事に払い腰でぶん投げられたな、と瞬間に思った。そんな事を思い出してどうするんだ。そんな状況じゃないだろうと、自分で自分に腹が立った。さらに、投げられた瞬間、何と、しっかりと受け身をとっていた。条件反射だ。でも、下は畳じゃない。コンクリートの道路だ。思い切り体を叩きつけられたんだ。その痛さに、ギヤー！と叫んだ。悶絶した。

その痛さといったら…。全身の骨が折れ、体がバラバラになると思った。なんせ、その痛さで、思わず目が覚めたほどだ。

そう、夢だった。元旦に見た夢だ。だから初夢だ。夢だけど本当だ。い

や、本当に、こんなリアルで、論理的な夢を見たんだ。

ヤダよね。最近はこんな夢が多い。だから、目が覚めた時にメモを取るようしている。漱石のように『夢十夜』でも書いてみようか。『夢日記』でもいいかな。

しかし、夢の中でも公安に追いかけ回されるなんて、悲惨だ。どうせ夢なんだから、奇想天外にいってほしい。クーデターが成功するとか。私が刑事になって、過激派を追いつめるとか。でも、そんな夢は一度も見たことがない。現実を反映した夢ばかりだ。貧しい夢だ。生活だけでなく、夢まで貧しいやね。

あるいは、推理ドラマばかり見てるから、その影響かもしれない。アガサ・クリスティの「ミス・マーブル」は全巻見た。ほとんど小説で読んでるが、ビデオで見ると又、違う。次は、ポアロを全巻見なくちゃ。見落としてるのもあるだろうから、もう一遍見てみよう。そのマーブルのせいで、夢まで〈事件〉的だよ。

(2) 何も、並んで載せなくても。犯人と真実を…

それと、年末に捕まった奈良の「女児殺害男」のニュースの影響もあるようだ。彼は、フィリピン・パブによく行き、携帯に入っている女の子の写真を見せびらかしていた。許せない。それにしても、馬鹿な男だ。なんで、わざわざ疑われることをするんだ、と思った。そんな怒りや疑問が、私の夢の中に入り、物語を作ったようだ。でなければ、行ったこともないフィリピン・パブが夢の中に出てくるわけがない。と、自分で夢分析しちゃった。

しかし、12月31日の各紙の紙面は奇妙だったね。1面のトップは、「女児殺害 36歳男逮捕」。そして、その隣りは、「紀宮さま婚約内定発表」。何か変だよね。全ての朝刊がそうだった。何も、1面と一緒に並べなくても…。と思っちゃったね。

謀略じゃないのか。嫌がらせじゃないのか、と思っちゃった。だって、延びに延びた「ご婚約発表」がこの日というのは分かってた。だったら、少しズラしてやれよ、警察も。「何としても年内に逮捕したかった」というなら、2、3日前に逮捕すりやいいんだ。どうせ証拠はつかんで、いつでも逮捕できるようになってたんだし。

元々は、宮内庁がドジなんだ。初め、ご婚約発表をしようとしたら新潟地震があったので延ばした。次に、発表しようしたら大叔母様が亡くなった。そして、三度目の正直で12月31日にしたら、「女児誘拐殺人犯逮捕」

と並んで、小さく報道された。昔だったら、こんな紙面づくり（レイアウト）をしただけで、「不敬だ」と言われただろうね。

もう皆、知ってたことだから、新聞にスクープされた段階で発表すればよかったです。又、公式発表が地震と重なっても、それはそれでやればよかったです。むしろ、被災者の人々にも勇気と励ましを与えたと思うよ。

次に、大叔母様が亡くなられた時も、もう1日か2日、頑張ってくれたらいじやないか、と思ったね。そんなことを思うのは不敬かね。あるいは、亡くなつたことの発表を1日か2日、延ばしてもよかったです。たとえ、あとで分かっても、「おっ、宮内庁も粋な計らいをしたな」と国民は皆、思うよ。それなのに…。天皇発言、皇太子発言、秋篠宮発言…とあって、宮内庁も叩かれている。だから宮内庁は嫌がらせをしたんじゃないかと言う人もいる。そんなことはないだろうが…。大体、宮内庁が喜び事の発表を延ばしたりするからだよ。

では又、「女児殺害男」の話だ。彼は36歳。毎日新聞の販売店従業員だった。名前は小林薰。あれっ、同じ名前の俳優がいたよね。私の好きな「美の巨人たち」（12チャンネル）のナレーターもやっちょる。最近、他に仕事がないから新聞配達もしてたのかと思ったら、違う。別人だ。顔はむしろ作詞家の秋元康に似ちょる。

毎日新聞は一体、どう報道するんだろうと思って新聞を買った。一面に、「本紙販売所に7月から勤務」と出ている。又、毎日新聞社社長室広報担当の話として、「痛恨の極み。管理強化指導」と出していた。又、社会面には、小林容疑者を雇っていた福井隆輝・毎日新聞西大和ニュータウン販売所長の「深くおわび」という言葉も載っている。

小林容疑者は、飲み屋で、「残酷な携帯サイトから送ってきたんや」と言いながら、携帯電話の画像を店の女の子や、常連客に見せてたという。毎日新聞の記者にも取材協力を申し出、「近くの居酒屋でよく事件の噂を聞く。今から一緒に行くか」と誘ったりしている。それが12月25日だ。多分、毎日新聞としてはこの段階で知っていたのだろう。だが、自分の社と関係あるだけに、「独占スクープ」はやりすらかったのだろう。

それにしても大胆不敵だ。小林容疑者は、飲み屋で携帯の画像を見せながら、「おれもB型。体形も髪形も眼鏡も犯人に似ているな。困ったな」と笑いながら大声で話していたという。「犯人は俺かもしれないぞ」と思わせぶりな事も言っていた。絶対捕まらないと思ったのか。「証拠がないから大丈夫」と思ったわけではない。だって、家の中に女児の携帯やランドセルがお

いてあった。又、他の女児の下着や服も大量にあったという。常軌を逸している。

又、供述の様子も報道されている。「女児を見ると変な気分になる」「本当は大人の女がいいが、金がかかるから、子供がいい」。全く、罪の意識がない。自分の犯した犯罪が新聞に載る。「又もや、メールをした」とか、「次は妹をもらう」なんてメールもした。それが毎日、デカデカと新聞に載る。それを見て、ほくそ笑みながら、その新聞を配る。本人にとっては〈快感〉だったのか。快楽殺人だし、劇場型犯罪だ。

しかし、この毎日新聞の販売店は、テレビ、新聞にデカデカと写真を出され、それこそ毎日、取材陣がとり囲んでいる。かわいそうに。販売店の責任もあるだろうが、ある意味、災難だ。「毎日新聞が悪い。こんな悪党を雇っていたのか！」と言ってる人もいたが、7月から毎日の販売店に来たのだ。しかも、その前は朝日新聞など他の販売店にも勤めていた。「新聞販売所、転々と」と毎日には出ている。「何も、うちにずっといたわけじゃない。運悪く、事件の時、うちにいただけだ」という弁解にも聞こえる。「管理が不十分だった」というのなら、他の新聞社も同じだ。又、彼はかつて91年に、女児（10才）に対するわいせつ事件で逮捕されたことがある。「こんな前科のある人間をなぜ雇ったのだ」という人もいるだろうが、これは難しい。前科のある人間への差別になってしまふ。

逮捕報道は12月31日の朝刊だが、実際に捕まったのは、30日の朝だ。午前4時30分、朝刊を配り終えた小林容疑者を刑事が逮捕した。この日の毎日の朝刊は、1面で「きょうにも重大局面」「不審人物浮かぶ」と報じていた。

普通なら、「あっ、俺のことだ」「やばい！」と思うはずだ。逃げなくちゃ、と思うはずだ。ところが、小林容疑者は悠然としていた。そして同僚に、「これで俺の疑いが晴れる」と言っていた。何とも理解できない精神構造だ。

(3)同情します。新聞配達員は皆、肩身の狭い思いをしてるのでせう

毎日新聞（12月31日）によると、小林容疑者の経歴はこうだ。大阪市出身で、私立高校を卒業し、卒業後は飲食店やトラック運転手などを経て約8年前から、毎日、朝日などの各新聞販売店で働いた。しかし、勤務態度が悪くて長続きせず、販売所を転々。今年6月には読売新聞の販売所に約1ヶ月働いて辞めている。

そうか、8年間も、新聞配達をしていたのか。それも、毎日だけでなく、朝日も、読売もやってたんだ。しかし、「うちにもいた」と朝日、読売は書かない。最後にいた毎日だけが叩かれる。

「何でいい年したオッサンが新聞配達してるんだ?」と思うかもしれない。しかし、結構いるんですよ、こういう人が。一般の人は、「新聞少年」しか知らない。中学生や高校生や大学生がやってると思っている。たしかに、そんな人は多い。奨学金をもらいながら配達している。健気な人たちだ。でも、大変な仕事だ。僕は、昔、新聞社に勤めていたから分かる。それも販売局だったから、都内や地方の販売店を回って歩いた。集金をしたり、部数を増やすように説得したり。大変な仕事だ。でも、販売店の方が大変だし、配達する少年たちが大変だ。

東京だと朝3時に新聞が来る。それから広告の折り込みを入れて、そして配達だ。冬は死ぬほど寒いし、雨の日なんて行きたくもない。ちょっと置き方が悪かったり、入れ忘れたりすると、すぐ電話で怒鳴られる。もしかしたら、日本中で一番キツく、大変な仕事かもしれない。

僕は、子供の頃はやらなかったが、大人になってやらされた。小林容疑者と同じ位の年か。いや、もうちょっと若いな。27才で、入社した時に、「研修のためだ」とか言われて北区の興野販売店に1ヶ月預けられて、新聞配達をした。又、宮城県の担当員になった時は、車で宮城県の隅々まで回り、販売店のグチを聞き、集金をした。つらくて逃げ出す店主もいる。その時は、そこに泊まり込んで配達もした。

又、産経では「フジ・サンケイ・リビング」という全戸配布の無料新聞を作った。その時は、都内と宮城県で、その仕事をやった。配布するパートのおばさんの募集、管理をやった。ともかく、配達というのは大変な仕事だと痛感した。

今時は、もっと楽な仕事が一杯ある。コンビニの店員のように、冷暖房の効いた所でやる仕事もある。男なら、ホスト。女ならキャバクラもある。楽をして金を得られる仕事に殺到する。そんな時に、新聞配達をする少年たちは本当に偉いと思う。

学生たちと一緒に配達をしてる時、聞いてみた。「朝の3時に起きるのが一番キツイだろう?」と。「それに、寒い朝や雨の日だよね」…と。「たしかにそれもキツイですが、友達付き合いできないのが一番キツイ」と言っていた。朝の早いのは慣れる。寒さや雨も慣れる(僕は全く慣れなかったけど…).でも、夕刊があるから、授業が終わったら、すぐに帰らなくてはな

らない。授業が終わって、「コーヒーでも飲みに行こうか」とか、誘われても行けない。友人付き合いが出来ないので。それが一番辛いと言っていた。

新聞社の販売局には「人買い」という人達がいる。俗称だが、要は、全国の高校を回り、「奨学金を出すから新聞配達をしてくれ」と誘いに行くわけだ。お金がない家庭の子は、大学に入っても新聞配達をしながら学べる。そう言って誘う。でも、さっき言った状況で、今や学生もなかなか集まらない。入っても、やめてしまう。

だから、大人の人を雇う。「やりたい」という人がいたら、誰だって大歓迎だ。学歴がどうの、とか、前はどこの販売店にいたとか、そんなことを聞きやしない。経歴は何だっていい。喉から手が出るほど人はほしいのだ。小林容疑者だって、各販売所を転々としながら、勤めていた。

普通、他の業種だったら、雇わないよ。こういう「流れ者」は。でも販売店では雇う。いや、雇わざるをえない。「これからは管理をもっと厳しくして」と本社では言うが、今だけだよ。そんなことを言ってたら人は集まらない。「だったら、本社の記者が配達してくれよ!」と販売店から言われるだろう。

こんな事件があると、新聞販売所や新聞配達をしている人達が、白い眼で見られ、どんなに肩身の狭い思いをしてるかと思うと、人事とは思えない。そんなわけで、とりとめもない所で終わる。

(「週刊文春」(1月13日号)を見たら、「ホッと胸を撫で下ろした読売、朝日、産経各新聞販売店」と出ていた。産経にもいたんだね。全ての新聞販売店を渡り歩いていたんだ。毎日はご愁傷さまだ)

【だいありー】

[1] 12月29日(水) 一水会事務局で大掃除をやり、そのあとは打ち上げをやる。私は力がないから、掃除は手伝わなかったが、飲み会だけは出た。
「レコンキスタ」1月号をもらった。凄い。20頁だ。内容も充実している。私が代表をやってる時は、出すのがやっとだった。警察に弾圧されてる時は「もうやめようか」と何度も思った。今は、木村代表のもと、皆一丸となつて頑張っている。皆、文章もうまいし、いい新聞になっている。僕も、うかうかしていられない。

[2] 12月31日(金) PRIDEの試合を見に行く。取材をかねて。いい試合ばかりだが、5時半から11時半まで。6時間もやってる。長い。

[3] 1月3日(月) ジョナサンで昼メシを食べながら、『決定版・三島由紀夫全集』(新潮社) の第38巻「書簡」を読みだしたら、面白いし、刺激的だ

し、引き込まれて、最後まで読んじゃった。1009頁もある本だ。5時間もジョナサンにねばって読破した。三島は、手紙一つにしろ、手抜きはない。凄い人だと思った。又、16才の頃の友人への手紙を見たら、日本、世界の主だった小説は全て読んでる。驚きだ。僕なんて、16才の時は、本なんてまるで読んでない。世の中のことは何も知らなかった。日本に天皇がいるということも知らなかった。

[4] 1月4日(火) 『鬼の闘論』（松崎明さんとの対談本）の校正を終えて、深夜、コンビニから宅急便で送る。今月末には出る予定だ。

[5] 1月5日(水) 夢枕獏（作家）、戸田菜穂（女優）、岡本光平（画家）の「新春三人書展」があって、オープニングパーティに出る。獏さんとも久しぶりに会った。僕も、いつか「書展」をやってみたい。何せ、小学校の時は書道5級の腕前だったんだし。「相田みつをの字に似てる」と最近よく言われてるし…。

[6] 1月6日(木) 「例の事件」の共犯者が捕まった。女性だ。「女だけ見殺しにしていいのか。卑怯な男だ」と公安に言われた。初夢のPart2だ。しつこい公安だ。夢を盗聴し、コントロールするなんて。汚い手口だ。

【お知らせ】

[1] 1月12日(水)7時から高田馬場のライブ塾で島田裕巳さん（評論家）とトーク。「オウム事件の教訓」です。島田さんは、最近は『創価学会』（新潮新書・680円）を出して、売っています。他には、『オウム--なぜ宗教はテロリズムを生んだのか』『戒名』『個室』など多数の著書があります。

[2] ライブ塾、2月以降は…。

2月9日(水)は三浦和義さんと「口ス疑惑の真実」

3月9日(水)は立松和平さん（作家）と「連合赤軍事件」です。

[3] 1月26日(水)7時から一水会フォーラムです。高田馬場のシチズンプラザです。講師は民主党衆議院議員の長島昭久氏です。テーマは「日米同盟の新しい設計図」です。ぜひご参加下さい。

[4] 「鈴木さんのお子さんはもう大きいんだそうですね」と、ある編集者に言われた。先月も他の人に言われた。「楽しい噂ですね。他の人もぜひ広めて下さい」と言っておいた。あるいは、本当にいるのかもしれません。知らないのは私だけで。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年1月17日

修正ノルマ主義読書法

(1)去年は412冊、読んだぜよ

人生はノルマです。それで、去年は何冊、読書したのだろう。と思って、私の手帳「HANDY MEMORY」（日本法令）（04年版）を見てみました。左側にスケジュール。右側には、毎月の読んだ本が書かれちります。さながら「読書手帳」ですね。毎年、正月には前年度の読書総数と、月平均読破数を報告しております。では、発表です。ちなみに、その前と、さらにその前と前のも紹介しませう。

	2004年	2003年	2002年	2001年
1月	55冊	50冊	40冊	41冊
2月	31冊	33冊	33冊	31冊
3月	40冊	35冊	31冊	38冊
4月	33冊	45冊	31冊	33冊
5月	31冊	53冊	32冊	32冊
6月	30冊	50冊	31冊	31冊
7月	32冊	38冊	38冊	31冊
8月	31冊	42冊	32冊	31冊
9月	31冊	34冊	31冊	30冊
10月	33冊	40冊	40冊	30冊
11月	32冊	32冊	45冊	32冊
12月	33冊	34冊	43冊	38冊
合計	412冊	486冊	427冊	398冊

(月平均 読破数)	34.3冊	40.5冊	35.5冊	33.1冊
--------------	-------	-------	-------	-------

おっ、毎月、コンスタントに30冊を突破してますね。偉いですね。感心、感心。と、誰も褒めてくれないので、自分で自分を褒めてやりませう。1月と3月は40冊を突破してますね。1月なんて55冊だ。

それで、合計はというと412冊。それを12で割る。何と、この割り算を私は算盤でやっちょります。算盤4級の腕前を見よ！ ともかく、12で割ると、34.3冊だ。これが去年の月平均だ。

03年、02年と比べると、グッと減ってるが、仕方はない。記録を伸ばすのが目的じゃないから。別に、月に10冊でも5冊でもいいんだ。ノルマがないと、怠惰な私は本なんて読まない。勉強もしない。それに、30冊という、「ちょっと厳しいかな」と思う位のハードルにした方が、やる気が起きる。昔は何が何でも、「月30冊」を目標にしてたが、今は、そう固く考えてない。月に10冊でも20冊でもいい。それで、他の月で取り戻し、「月平均30冊」になるようにしちよる。「修正ノルマ主義」じゃよ。

それに去年は、『ヤマトタケル』（現代書館）を8月に、『公安警察の手口』（ちくま新書）を10月に出した。非力無学な私としては、拷問のような1年でした。何度も、書き直しに次ぐ書き直しで、発狂寸前。幻覚まで見た。19才の裸の女まで見た。その話は書いたね。

その2冊の書き下ろしの間を縫って、「月平均30冊」を読破したのだ。これは大変な記録ですよ。さらに、もっと、大変な事があった。「全集」を何冊か挑戦してるので。皆、ぶ厚い。そして長大なものだ。こんなにかかわったら、〈数〉は読めない。〈ノルマ読書法〉の危機だ。！さあ、どうする。どうなる、〈読書法〉だ。でも、「全集」は、図書館から借りて、2週間の間に2冊か、3冊限定にしている。これ以上だと、本来のノルマが達成できない。今、挑戦してる全集は…。

1.決定版 三島由紀夫全集（新潮社）

全43巻ある。1冊が800頁。1月3日は、ジョナサンに5時間もねばって、第38巻の「書簡」（何と1000頁！）を読んだ。これは前に報告したね。

2.司馬遼太郎の『街道をゆく』（朝日新聞社）。これは一体、何巻あるのやら。43巻かな。でもその後もあるらしい。今、15巻目です。とても勉強に

なる。考えさせられます。

3.中央公論社の『日本の詩歌』。昔、読んだのですが、再び、全巻読み直してみようと思って、東中野図書館から借りて月に2冊ずつ読んでます。

4.「新潮現代文学」。全80巻。やっと50巻読んだ。もうすぐだ。頂上は近い。頑張れ！　これも、月に2冊ずつ読んでいる。

5.中里介山の『大菩薩峠』（ちくま文庫）。全20巻。7巻まで読んで中断しとる。ダメじゃないか。ちゃんと読み通さなくちゃ。幸い、ジャナ専図書館に全巻揃ってるので、ここから借りて、全巻読破に挑戦すべえ。

6.ちくま日本文学全集

全60巻だが、文庫の文学全集は他にない。読みやすい。全巻読破したと思ってたら、まだ5冊ばかり、残ってた。きちんと片づけなくちゃ。

（2）「乱」にあって「治」。そして「美」。「少年文庫」から柄谷行人まで読んだ。

他にも、実は挑戦中のものがある。たとえば、吉村昭、山本周五郎、宮城谷昌光などは全部読んでやろうと思つとる。深いですよね。文章の勉強にもなる。

さて、去年読んだ本だ。具体的に、どんな本を読んだんだろう。ザッと見てみる。あれっ？ 驚いた。少年用の読み物がある。それに、昔読んだものも再読している。実にいろんなものを読んでいる。三島全集や司馬の『街道を行く』に挑戦する前だから、いろんな本を読んでいる。それに、歌舞伎や文楽も見に行っている。公安の本を書くのに大変だと思ったが、よく、読んでいる。たとえば、こんな本だ。

1.バジヨーフ『石の花』（岩波少年文庫）

2.中島誠『藤沢周平論』（講談社）

3.ハドソン『夢を追う子』（岩波少年文庫）

4.バーネット『小公子』（岩波少年文庫）

5.藤沢周平『神隠し』（青樹社）

6.紀田順一郎『日本語発掘図鑑』（ジャストシステム）

- 7.新潮現代文学64『辻邦生』
- 8.橋爪大三郎『人間にとつて法とは何か』(PHP新書)
- 9.竹田篤司『明治人の教養』(文春文庫)
- 10.紀田順一郎『日本語博覧人物記』(ジャストシステム)
- 11.橋本治『「三島由紀夫」とはなにものだったのか』(新潮社)
- 12.井上ひさし『馬喰八十八(やそはち)伝』(朝日新聞社)
- 13.吉本隆明『私の戦争論』(ちくま文庫)
- 14.井上靖『夏草冬濤』(上)(新潮文庫)
- 15.竹田青嗣『言葉的思考へ』(径書房)
- 16.竹田青嗣『世界という背理』(講談社学芸文庫)
- 17.佐竹一彦『警視庁公安部』(角川文庫)
- 18.吉田和明『文学の滅び方』(現代書館)
- 19.藤沢周平『喜多川歌麿・女絵草紙』(青樹社)
- 20.永倉有子『万治クン』(集英社)
- 21.阿刀田高『空想列車』(上)(角川文庫)
- 22.阿刀田高『空想列車』(下)(角川文庫)
- 23.斎藤孝『声に出して読みたい日本語』(草思社)
- 24.斎藤孝『三色ボールペンで読む日本語』(角川書店)
- 25.『アラビア物語』(5)(講談社)
- 26.井上ひさし『いとしのブリジット・ボルドー』(講談社)
- 27.永倉万治『男はみんなギックリ腰』(集英社)
- 28.『トルストイの民話』(偕成社文庫)
- 29.吉本隆明・梅原猛・中沢新一『日本人は思想したか』(新潮社)
- 30.新潮現代文学2「井伏鱒二」
- 31.斎藤孝『理想の国語教科書』(文芸春秋)
- 32.ドナルド・キーン『日本文学の歴史』(1)(中央公論社)
- 33.柄谷行人『日本近代文学の起源』(講談社文芸文庫)
- 34.朝日新聞論説委員室『朝日新聞は主張する』(朝日新聞社)
- 35.荒井一博『終身雇用制と日本文化』(中公新書)
- 36.内田雅敏『懲戒除名』(太田出版)
- 37.嵐山光三郎『美妙、消える』(朝日新聞社)
- 38.林道義『日本神話の英雄たち』(文春新書)
- 39.岬龍一郎『新・武士道』(講談社+α新書)
- 40.山田俊雄『ことば散策』(岩波新書)

41. 松本健一『谷川雁・革命伝説』（河出書房新社）
42. 鮎田豊之『肉食の思想』（中公文庫）
43. 井上靖『夏草冬濤』（下）（新潮文庫）
44. 司馬遼太郎『この国のかたち』（上）（文芸春秋）
45. 司馬遼太郎『この国のかたち』（下）（文芸春秋）
46. 阿刀田高『頭は帽子のためじゃない』（角川文庫）
47. 阿刀田高『三角のあたま』（角川文庫）
48. 梅崎春生『ボロ家の春秋』（講談社文芸文庫）
49. 渡部昇一『国民の教育』（産経新聞社）
50. 坂村健『ユビキタス社会がやってきた』（NHK人間講座）
51. 北方謙三『三国志の英傑たち』（NHK人間講座）
52. 芳賀徹『みやこの円熟』（NHK人間講座）
53. バーネット『小公主』（岩波書店）
54. ウェブスター『続あしながおじさん』（上）（岩波少年文庫）
55. ウェブスター『続あしながおじさん』（下）（岩波少年文庫）

フーッ。疲れた。

書き写すだけでも大変だ。これが去年の1月に読んだ本だ。55冊もあるよ。子供用の読みやすいのや、NHK人間講座のテキストもある。大衆小説もある。ただ、バラバラに、手当り次第に乱読してるように見える。しかし、乱にいて治を忘れず。私なりに、〈計画〉を持って読んでいる。いろんな分野を体系的に読んでる（つもり）。

子供用のやつは、昔は読んでなかった。だから、今からでも読もうと思ってる。でも、読んでいて、「あれっ？ この部分知ってるぞ」とか、「この挿し絵覚えてるぞ」というのがあった。ということは、小学生の頃、読んでたんだろう。全く忘れていたけど。

55冊というけど、20冊は図書館の本だ。10冊ずつ借りて、2週間で返すからだ。そうすると、残り35冊は買ったのか。いや、そんなことはない。買ったのは、ほんの少しだ。NHKの人間講座とか。あとは、本箱にあって「積ん読」「並べ読」になってたものだ。それらを読んでいる。あと、どうしても欲しい本は万引きした。（冗談ですよ。ガキじゃあるまいし、もうやめた）。

渡部昇一の『国民の教育』は『国民の歴史』『国民の道徳』などのシリーズものだ。これは何と700ページ位あって、凄い本だ。実に読みでがあっ

た。でもな、「あとがき」を読んだら、何と、「語り下し」なんだな。産経の記者を相手に喋ったんだ。エッ、そうだったの。と、ガッカリした。さらに、ホテルで一晩で喋ったと書いている。これも驚き。こんな手の内は明かしちゃまずいよ。「なんだ。一晩で喋って、それで本にしたのか」と、落胆するよ、読者は。

他に、凄い本もある。紀田順一郎の本は文句なしに貴重だ。しかし、金に困って古本屋に売った本も多い。なんせ、書き下しを書いてたから、金は一切入らない。他の仕事もやれない。キツかった。だから、売れる本は、どんどん売った。売る前に、キッチンと読んで、大事なところはノートにとった。手放したくはないが、これも生きる為だ。売る前に、本と別れを惜しんだ。

「この仕事が終わり、印税が入ったら、必ず買い戻してやるからな！」と、本をなでながら、話しかけた。「はい、待ってますね」と本は答える。凶作で生活に困り、娘を売りに出す父親のような気持ちだ。ホロリとした。こうして売られた娘たちは、今、どうしているのだろうか。でも、買い戻した娘はいない。無慈悲な父親だ。オラのことだ。

(3) みんな、心の中には〈過激派〉が棲んでるんだ

去年読んだ本で、印象に残ったものを紹介するつもりだったが、1月だけで終わりになった。そうだ。「今年印象に残った本」として、アンケートにこたえてたな。探したけど、ちょっと見当たらん。たしか3冊、あげた。その一つは、田原総一郎の『連合赤軍とオウム』（集英社）だった。これは文句なしに、凄い。田原さんの最高傑作だ。そうだ。「週刊読書人」に書評を頼まれたので、書いた。別に、田原さんにヨイショして書いたわけじゃない。又、そんなことをしたら、たちまち本人に見破られる。田原さんは「わが内なるアルカイダ」とサブタイトルをつけている。「自分の問題」として、悩み、考えている。ここに僕は感動した。僕にとっても、アルカイダ、オウム、連合赤軍は他人事ではない。

何人から、「あの書評はよかった」と言われた。それを見て、本を買ったという人もいた。田原さん本人にも礼を言われた。田原さんの本の中では、かなり、批判のあった本だという。僕は、むしろ、これこそが一番、田原さんらしい本だと思った。せっかくだから、それをここで、紹介しませう。ぜひ、皆も、この本を読んで、そして考えてもらいたい。

「理想」が「殺意」に変わる瞬間

鈴木邦男

書票・『連合赤軍とオウム』（田原総一朗）

真面目すぎる若者たちが、なぜ凶悪犯罪を犯してしまったのか--この疑問に田原総一朗が全力で取り組み、取材し、挑戦し、解答を得ようと煩悶する。実にスリリングだ。田原の最高傑作であり、代表作だと思う。連合赤軍、オウム真理教、アルカイダの関係者を取材しながら、「理想」が「殺意」に変わる瞬間に迫る。それに、彼らを犯罪者、テロリストとして冷たく切り捨てるのではない。もしかしたら自分もやっていたのではないか、という地点から出発する。

テロ行為を正当化するつもりはない、と言いながらもこう言う。「テロというのは、絶対的な強者に対して追いつめられた絶対的な弱者が異議申し立てをするための、仕方なしの手段ではないのか」。

ここまで言ってもらいたら、テロリスト達も充分だろう。満足して死ねる。あるいは刑に服することも出来る。「テロリストに甘すぎる」という批判もある。 「ジャーナリストとして中立ではない」と言う人もいる。しかし、そこがいい。ジャーナリストとしての中立性や本分など簡単に逸脱してしまうのが田原のよさだ。

この本は『連合赤軍とオウム』。そしてサブタイトルは「わが内なるアルカイダ」だ。そこまで言い切っていいのかよと思った。文句があったら言って来い、という挑発かもしれない。あるいは、若き日の自らの情熱を思い出しているのか。何せ田原は、戦争中に海軍に入って特攻機に乗ることを考えていた。連合赤軍もオウム真理教、アルカイダも「他人事」ではない。真面目であるが故に、思いつめる。心情的に同じだ。

僕は長い間、右翼運動をやってきた。テロも必要だと思っていた。いや、この閉塞的な状況をぶち破り、我々の理想を分かってもらうにはテロしかないと思っていた。「テロリスト志願者」だった。だから、本書を読みながら、僕も、他人事ではないと思った。

本書には実に多くの人々が登場する。理想に燃えて突っ走り、思いつめ、犯罪にまで走った人。その手前でやめた人。それを解説する人。しかし圧巻は、「突き進んだ」植垣康博（元連合赤軍兵士）だ。山中では8人の同志殺しにも手を染めている。そして、27年の獄中生活を終え、今は静岡でスナックのマスターをしている。あの連合赤軍事件について、共通の言葉を持って

キチンと話せる唯一の当事者だろう。植垣の話を聞いて田原は衝撃を受け、今年3月の「朝まで生テレビ」の「連合赤軍とオウム」が実現したのだ。あの朝生も、本書も、植垣証言が出発点だった。

植垣には僕も何度か会った。そして連赤事件に関する見方が変わった。70年の「よど号」ハイジャックや三島事件は支持できる。74年の連続企業爆破の東アジア反日武装戦線〈狼〉の闘いも（犯罪は別として）、彼らの思いつめた心情は理解できる。しかし72年の連合赤軍事件は唾棄すべきものと思っていた。これで左翼、いや日本の変革運動は終わったと思った。

ところが植垣は僕に言った。「理解できないから皆、自分の低みに落として理解した気になってるだけです」と。女のヒステリーだ、恐怖にかられた暴走だ、カルトと同じだ…と。そうなのかと思った。理想、夢、革命、愛、裏切り…。全てがそこにあった。植垣は人間の〈極限〉を見たのだ。そう思うと、うらやましくもなった。田原もそう思ったはずだ。これらの教訓をもとに、「では我々はどうする？」と田原は読者に突きつける。そして挑発し続ける。（すずき・くにお氏＝評論家）

【だいありー】

[1] 1月6日(木)、7日(金)。1日、家にいてコタツで本を読んでた。

[2] 1月8日(土)「ゴング格闘技」の原稿を書いた。

[3] 1月9日(日)中野図書館で一日、勉強した。

[4] 1月11日(火)ジャナ専が始まった。正月明けなので、だるい。

[5] 1月12日(水)4:00からJR総連の新年会。7:00からライブ塾で、島田裕巳さんとトーク。「オウム事件の教訓」。超満員だった。オウム事件について、かなり分かった。

【お知らせ】

[1] 月刊「創」（2月号）が発売中。目玉は、「田代まさし獄中手記」。特集は「出版社の徹底研究」。私の連載「言論の覚悟」は、〈『公安警察の手口』その後〉です。いろんな方面からの反響について書きました。

1.公安・元公安

2.記者

3.活動家

4.スパイ

5.電波系

「創」の副副編集長の女性に、「今回は面白かった」と言われた。連載が始まって8年。初めて褒められた。嬉しかった。

(2) 「月刊TIMES」の「三島由紀夫と野村秋介」は今回が7回目で、「死後も闘い生長する三島の精神」です。

(3) 1月26日(水)は7時から一水会フォーラムです。高田馬場のシチズンプラザです。講師は民主党衆議院議員の長島昭久氏で、「日米同盟の新しい設計図」です。

(4) ライブ塾は、

2月9日(水)。三浦和義さんと「口ス疑惑の真実」

3月9日(水)。立松和平さん（作家）と、「連合赤軍事件」です。立松さんは連赤を扱った小説『光の雨』（新潮文庫）を書いてます。又、これを基に高橋伴明さんが映画化してます。

(5) 1月20日(木)、午後4:20から、和光大学のD306教室で「入学拒否問題を悩む」というシンポジウムがあります。麻原の三女の入学拒否問題を中心に、学問の自由、人権、差別などについて考えます。一般の方も入場自由です。和光大学は小田急線・鶴川から徒歩15分。バスで5分です。パネラーは「創」編集長の篠田博之氏、島田裕巳氏（宗教評論家）、森達也氏（映画監督）などです。僕も出ます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年1月24日

22世紀、日本は〈鈴木国〉となる！

(1) 「月30冊読破」の男には娘をあげちゃえ

だって、図書館じゃ無いんだよ。中島らもさんの代表作『明るい悩み相談室』が。中野図書館にも、東中野図書館にも、ジャナ専図書館にもない。そうか、図書館で注文する手があったな。実際、値段が高い本は、よく注文して、他の図書館から取り寄せてもらっている。でも、このらもさんの本は7冊もあるし。それに文庫だ。「文庫ぐらい、買えよ！」と図書館の人に言われそうだ。だから買ったよ。

紀伊国屋書店で買った。2つの出版社から文庫が出ている。集英社文庫が3冊。これを買って、読んだ。これで全部かと思ったら、何と朝日文庫でも出していた。これは全7冊。だから、これも買った。1冊480円。3巻までは集英社文庫で読んでるんだから、朝日文庫は4巻～7巻だけ買えばいいのかもしれない。しかし、1～3巻も、両社で構成が少しずつ違う。朝日新聞に連載した厖大な「相談」の中からセレクトして、文庫にしている。そのセレクトのやり方が両社で少々違う。面倒くさいから、両方買って両方読んだ。1週間で10冊全てを読んだ。

面白かったですね。どこが面白かったかって？ じゃ、2つ、3つ、紹介しませう。まずは第4巻。

〈父は、学者になりたかったが心ならずもサラリーマンをしている、というのが口癖です。私がボーアフレンドを自宅に呼んで楽しくお茶をしているときに、いきなり「君、今月は何冊本を読んだかね」と尋ねるので。どうとりもったらよいのでしよう。〉

これを読んだ時は、ドキッとしたね。この父親は私です。と、思ったほどでしたね。父親になったら、きっとこんなことを口走るでしょうね、私は。「ダメじゃないか。学生なんだから、月に20冊は読まなくっちゃ。右翼のオッサンだって、月に30冊読んでるぞ…」と、娘の恋人に説教しそうですね。説教ついでに、歌まで歌っちゃうだろうね。

「♪ベレットするなよ ヒルマンから

それでは試験に クライスラー

鐘が鳴ります リンカーンと

ワーゲンうちだよ 色恋は忘れて

勉強 セドリック」

…とね。いい歌だよね。小林旭の「自動車ショ一歌」の一節だわさ。昔は、流行歌でさえ、こういう知的・教訓的な香りがあったんだ。高石ともやの「受験生ブルース」には、こんなところがあった。

「一夜（ひとよ）一夜（ひとよ）にひとみごろ 富士山麓にオウムなく
サインコサイン何になる…」

「何になる」といいながら、これも、アカデミックな歌だわさ。ルートいくつはいくつとか、円周率とか、そんなことも歌で覚えられる。しかし、30年以上前の歌だと思うが、今は本当に、富士山麓の上九一色村ではオウム（真理教）が鳴いていた。だから、この歌は〈予言〉してたんだよ、現代を。いや、「ルートに秘められた謎の予言」だ。

しかし、円周率とか、ルート3とか、ルート5とか覚えたけど、社会に出てから使ったことなんて一度もないな。こんなもの、暗記する必要があんのかね。ないよ。「いや、頭の訓練だ」というんだろうな先生は。でも、「頭の訓練」だったら、ポワロやミス・マーブルを読ませた方がいい。こっちの方が、ずっと訓練になる。それに、社会に出てから役立つ。「こんなことをしたら捕まるよ。だからやめなさい」「やるんなら、こうやんなさい」…と。私は、それで随分と助けられました。下手したら、犯罪に巻き込まれ、捕まり、一生刑務所暮らしかもしれんかった。ルートや円周率は私を助けてはくれなかつたが、ポワロやマーブルは助けてくれた。命の恩人だ。アガサ・クリスティは国民栄誉賞をあげたらいい。日本人じゃないけど、いいだろう。

ルートで思い出した。林家三平の落語があったな、と突然、思い出した。

受験生が勉強している。色恋なんか忘れて勉強セドリックしている。でも隣りの家のラジオが聞こえてくる。うるさい。メロドラマをやっている。

「奥さん、いいじゃありませんか。こんなに愛してるんです」「あら、いけ

ませんわ。夫が帰ってきますわ」…と、ラジオ。

「うるさいなー」と受験生。頭も混乱する。「えーと。ルート3角関係は…」「いかん、いかん」若いうちだよ。色恋を忘れて勉強せにやならんのに…。そして、たまりかねて、窓をガラリと開けて、叫ぶんですね。

「すみません！ ラジオの音を低くして下さい！」

ところが、お隣りさんもガラリと窓を開けて、「あら、失礼ね。ウチにはラジオなんかないわよ」

それがオチですね。「じゃ、テレビだろう」って？ まだテレビが無かった時代ですよ。あったかな。あったけど、各家庭には普及してなかった。だから、お隣りさんは、「実演」だったんですね。

では再び、らもさんの「明るい悩み相談室」に戻る。私だったら、娘のボーイフレンドにこう言うな。

「本も読まない人間にうちの娘をやれるか！」と。

「いえ、まだ結婚とかは考えてないんです。お付き合いをしてるだけです。お父さん」と、そいつは言うだろう。

「お父さんなんて、まだ呼んでほしくないな」と、私は言うんだろうな。そして、革命的な提案をする。

「月10冊だったら、手を握ってもいい。月20冊なら、接吻も許可しよう。月30冊だったら、もう何をしてもいい。全て許す」

男もビックリするだろうね。「じゃ、がんばって月に30冊読みます！」と言うだろうよ。「でも、マンガや週刊誌はダメですか？」「ダメだよ。そんなものは。ちゃんとした本で30冊だ」。大体やね、30冊読む人に悪い人はいない。というより、30冊となると、読むことに必死で、「悪いこと」をしている暇がない。時間がない。ウソだと思うなら、私を見よ。私が証人だ。

でも娘は文句言うだろうな。「月に10冊で手を握れる。20冊で接吻なんて、ハードルが高いわ。2冊か3冊にしてよ」と。何を言っちょるか。見てくれだけで頭の空っぽな男と一緒にになってどうするんだ。娘は反論するかもしれない。「それに、月30冊の男は何をしてもいいなんて、ヒドイ！ 自分の娘を勝手に売り渡すなんて！」と。しかし、考えてもみんしゃい。生活苦のために泣く泣く売られて行った娘たちのことを考えてみろ！ 「売られた娘」というのは（先週書いたけど）、古本屋に売られた可愛い本たちのことだけだ。

…と私の「回答」ばっかり書いちゃったけど、らもさんは何と回答してるんでしょうか。冷静に答えてます。そして、いくら本を読む人でも、お父さ

んと趣味が違ったら、話が合わないんじゃないか、と心配してます。月に30冊読んでも、それでいい、とはならんというんです。私は、それでいいと思いますが。何故か、らもさんも「月30冊」にこだわって、こう回答しちります。

〈たとえあなたのボーイフレンドが月に三十冊は読む人であっても、読んでいるのがフランス文学ばかりで、お父さんの方が物理学の本ばかり読んでいるのなら、話すことは何もありません。もっと困るのは、お互いに考古学が好きで、ヤマタイ国九州説と畿内説などに分かれていたら、これはつかみ合いのケンカになります。

やはり、彼とお父さんの間で、完全に意見が一致する事柄を何か見つけることでしょう。その点で共通することといえば、たぶん二人ともあなたを好きだということです〉

うん、うまくまとめてますね。でも、あなたのどこを好きか、という点では二人は対立しますよね。同じ点が好きで、二人で執着したら、これこそケンカになりますよね。それに、フランス文学を30冊だったら、いいじゃないですか。文句なしです。娘をやっちゃえ。たとえ自分と読書の分野が違っても、いいじゃないか。あるいは、分野が違うからこそ、話もきける。教えてもらえる。ヤマタイ国がどこにあろうと、そんなことは問題じゃない。違う考えだからこそ、会話も成り立つし、討論も出来るんだよ。何も、わざわざ考えの一致する人間を見つける必要はない。赤軍派の同志獲得のオルケじゃないんだから。

(2) 皆が、鈴木姓になるなら、いいじゃんか

さて、ここまでが序論です。枕です。これからが本番です。『明るい悩み相談室』の第3巻に、こんな相談が載っている。52頁だ。見出しを見て、私しゃ、のけぞりました。だって、

「日本中が『鈴木姓』になる日がくる！」

オッ、一体これは何だ、と思いましたね。鈴木一族が革命を起こし、天下をとり、創氏改名し、全国民を鈴木姓に変えるのか。そう思ったら、ちょっと違う。そんな血なまぐさい革命やクーデターをやらなくとも、「無血革命」で、自然と、そうなるという。

「新婚一年目を迎えた新米妻ですが、夫とは十年来のつき合いでお互いの姓に親しんでいたため、どちらも姓を変えず（戸籍を作らず）今日に至って

います。私は二人姉妹で、姉はすでに義兄の姓に変えています。つまり私が姓を変えると築田（やなだ）の姓はこの一家においてはなくなることになります。一人っ子が増えつつある現在、姓の数は確実に減っているわけです。いつの日か、日本人全部が「鈴木」なり「田中」なりになるのではないでしょうか。心配です。

東京・築田淳子・30歳

いいことじゃないか。素晴らしいじゃないか。パッと世の中が明るく見えてきましたね、私は。日本中が鈴木姓になる。理想の国になる。もともとは、日本には姓なんてなかった。「鈴木」というのは「日本人だ」ということだった。その太古の理想に戻るんですよ。日本人全体が鈴木姓ですよ。家族ですよ。全員が鈴木になったら、日本も、やさしく、寛大な国になるでしょう。だって、統計学上、「鈴木姓」の犯罪は一番少ない。大体、鈴木というのは、多いし、覚えやすい。だから、悪いことをするにもブレーキがかかる。又、ありふれた姓だから、人間も、ありふれた、温厚な性質になる。つまり、「鈴木姓」は犯罪予防効果があるんだ。鈴木姓の凶悪犯なんていないし、悪徳政治家もいない。言靈ですな。これは。

鈴木姓は元々は、熊野の神社がルーツだ。元々は神様だ。そこから日本中に広まった。神社の鈴もある。それがりんりんと響いて、人々の心に届き、正しく、清く、美しき心を持ち続けなさいよと、呼びかけるのだ。

魚に「スズキ」というのがある。あれだって、味が淡泊だし、邪心がなく、やさしいから、スズキと名付けられたのだ。他の魚を襲うこともない。キレることもない。日本全国が鈴木姓に統一されたら、魚の名前も全部、スズキになるでしょう。

そうだ。「鈴木」は元々、神様だったが、魚のスズキも神の魚だった、と書いてた本があったな。

〈スズキは熊野の神の神魚とされる。熊野の神が川に落とした巻物を拾ったのがスズキであるといい、熊野の神職の流れである鈴木氏の者は、スズキを食べてはならないという伝説がある。スズキは川にも上る大きな魚として神聖視され、愛知県加茂郡の山村には、川を上ってきたスズキを築でとて食べたところ、祟ったので、これを祀ったという神がある〉

そうか、食べちゃいけないんだ、スズキは。いっけねえ。昔、食べたことがあるよ。ああ、懺悔しなくっちゃ。

ところで、この出典だが、知る人ぞ知る、隠れた名著だ。塔島ひろみ『鈴木の人』（洋泉社・1500円）だ。1999年4月25日に出た本だ。というと、6年前か。とにかく、これは凄い本ですよ。鈴木姓でもないのに塔島ひろみさんが、全国を取材し、「鈴木のルーツ」「鈴木の意味」を考えた本だ。圧巻は、ラストの「鈴木討論会」だ。学生、デパートの店員、サラリーマン、右翼の「鈴木さん」を一堂に集めて話をさせる。私も出ました。姓が同じだから、じゃ名前で呼び合うのかと思ったら、「鈴木には個性がない」とばかりに、鈴木、鈴木、鈴木で通している。こんなもあり？と私は思ったんだけど、鈴木姓は「やさしく、気が弱い」から、文句を言えんかった。討論会（座談会かな）の一部を紹介しよう。

（司会）著者の塔島は、一般に鈴木さんは地味、真面目、オタク、気丈、依怙地、人を傷つけない、無責任な行動をしない、などの仮説を立てていますが、これについてどう思いますか。

鈴木 そう。当たってるんじゃないって気がする。

鈴木 平凡だ。何か一般的な日本人の特徴…

鈴木 鈴木姓がつけられた時に、みんな諦めちゃうんですよ。

鈴木 へへへ。

鈴木 そういう風にならざるを得ないんですよ。鈴木の呪いですよ。

鈴木 そうですね。「どうせ」っていうのがありますね。

私の発言はどれか分からん。「呪い」かな。「へへへ」かもしれない。

そして、塔島さんは「エピローグ」で、〈結論〉として、こう言う。

1.鈴木さんは基本的だ

1.鈴木さんは本質的だ

1.鈴木さんは頑固である

1.鈴木さんは質素である

1.鈴木さんは真面目である

1.鈴木さんには信念がある

1.鈴木さんは争わない

（3）その前に、「鈴木対佐藤」の世界最終戦争が…

つまり、日本人としての「いい点」「美点」を全て持っているのが鈴木さんだ。だから、日本人全てが鈴木姓になれば、平和で、理想的な国になる。

さらに、塔島さんは言います。

〈「ちやほやされたい」「おいしいものを食べたい」「出世のためにこのおやじを殺したい」…そんな、常人がいだく卑俗な欲求の数々が、鈴木さんには気持ちいいほど欠如している。

そして鈴木さんには結局、ただ一つの欲求しかない。

「種族保存の欲求」

鈴木さんはそのために生まれ、そのために生きている。鈴木さんはつまり、「ヒト」という生物が遺伝的に持つ自然の摂理、その正統の継承者なのである。

それは何故なのかは、わからない。が、それが鈴木さんの道である。鈴木さんの道はヒトの道だ。

そして鈴木以外の人間は、黙って鈴木さんについてゆけばよいのである〉

凄い結論ですね。この『鈴木の人』は本当にいい本だ。

100年後、日本人全てが鈴木姓になった暁には、この本は日本の「聖書」になる。そして、鈴木家の家紋が「国旗」になる。「鈴木さんを讃える歌」が「国歌」になる。でも、その前に、鈴木vs佐藤、鈴木vs田中といった〈最終戦争〉がある。そして、鈴木が勝利し、日本国は、「鈴木国」になる。宗教も「大鈴木国家教」になる。天皇制だけは不变だ。天皇は姓がないからだ。天皇だけは鈴木vs佐藤などの姓同一性闘争からは超越している。無私だし、神聖だ。 ということで、日本にもやっと夜明けがくる。明るい未来が見える。

ところが、中島らもさんは、こんな明るい未来に水をかけるんよ。「日本中が全て、鈴木姓になるのでは」という相談に対し、「おそらくそうならないでしょう」と冷たく答えている。いかんよな。この時だけは、私にかわってくれりやよかったのに。らもさんは、「養子制度」があるから大丈夫という。（何が「大丈夫」だ。早く鈴木姓に統一した方がいいんだ）。

さらに、らもさんは言う。「子供は少なくなる。ただ、男の子は育ちにくいため、自然の摂理で出生率は男子が女子をいつも上まわります。いま現在、日本中で五十万人の適齢期男性が余っているそうです。

つまり、いつでもそうした姓の在庫ストックが余っていくわけです。加えて外人姓を継ぐ女性も増えています。そんなわけで大丈夫なのです。たぶん」

そうか。結婚しないで独身のままの男がいるのか。じゃ、「鈴木以外の独

身禁止令」を作るか。それとも、鈴木機関の「くの一」（女忍者）が、そんな男たちを誘惑し、結婚し、鈴木姓にむりやりさせる。そういう手もある。でも、男が余ってるのは。じゃ、「一妻多夫制」にする。鈴木姓の女は5人でも10人でも夫を持てることにする。そして、全員を鈴木姓にする。「自分の姓を守りたい」と思っても、誰も、結婚してくれない。といって、幼児に手を出せば、逮捕、極刑だ。「鈴木に改姓か。しからずんば死か」。こうなつたら皆、改姓する。そして、日本中が鈴木姓になる。万万歳だ。正月から目出度い話だ。おわり。

【ふろく】

『公安警察の手口』の書評が河北新報（04.11月21日）にも載っていました。紹介しましょう。

新書の愉しみ

=情報収集と分析考察=

情報収集で疑わしきは追及せよ、という国家権力の姿を鈴木邦男氏の「公安警察の手口」（ちくま新書・714円）は生々しく伝える。

刑事警察は、お巡りさんのように私たちの日常生活でも身近だ。それに対して公安警察は右翼、左翼はじめ思想的、宗教的な集団の過激な行為を監視し「公の安全を守る」ために日夜情報を収集し、公に姿を見せるることは少ない。

公安警察がどう情報を収集し、“ガサ入れ（家宅捜索）”や尾行をし、犯人をあげるか、を右翼活動の経験がある著者は自らの過去を踏まえてつづる。思想活動を実際していなくても、何かのきっかけで公安が嫌疑を持ったら最後、有無を言わせぬ“ガサ入れ”をされても市民は文句も言えない。増える監視カメラなど監視社会化は、公安の権力強化と同義のようだ。（ノンフィクション作家・小林照幸）

【だいありー】

[1] 1月13日(木) 7:30から大塚の萬（よろず）スタジオで、月蝕歌劇団の「家畜人ヤプー」を見る。面白かった。自虐的なお芝居だが、いいでしょう。康芳夫、秋山裕徳太子さんらが来ていた。終わって一緒に飲んだ。

[2] 1月14日(金) 森達也さん（映画監督）、斎藤貴男さん（フリーライター）らと会う。座談会。

[3] 1月15日(土) 上田哲さんの勉強会「哲塾」が始まった。他の仕事があって行けませんでした。すみません。

[4] 1月16日① 1時から東中野の骨法道場で、堀辺正史先生の「武士道セ

ミナー」。武士道を通し、日本の歴史を講演する。とても勉強になった。このあと、二人で「現代における武士道」について、トークした。

[5] 1月17日(月) ロフトに行く。喜納昌吉さんから誘いがあって。岡留安則元編集長プレゼンツ「ポスト噂の真相・外務省無用論」。ゲストは参議院議員になった喜納昌吉さん（ミュージシャン）と天木直人さん（元レバノン大使）。この3人じゃ、人が来ないわけがない。超満員だった。終わって、3人と一緒に飲んだ。

[6] 1月20日(木) 和光大学で「入学拒否を悩む」という集会。麻原の三女が入試に合格したのに、大学側は拒否した。自由と反差別の大学なのに、これはないだろうと、学生が決起。12月15日(水)に続き、第2弾の集会になった。パネラーは島田裕巳（宗教学者）、森達也（映画監督）、篠田博之（月刊「創」編集長）、大塚英志（評論家）、そして私だ。超満員で、活発な討論集会になった。

【お知らせ】

[1] 1月26日(水)7時から一水会フォーラムです。高田馬場のシチズンプラザです。講師は民主党衆議院議員の長島昭久氏で、「日米同盟の新しい設計図」です。混むと思いますので、お早めにおいで下さい。

[2] ライブ塾は、

2月9日(水) 三浦和義さん。「口ス疑惑の真実」

3月9日(水) 立松和平さん（作家）。「連合赤軍事件」です。

[3] 前にちょっと紹介しましたが、別冊宝島（1102）の『日本のタブー事件史』（宝島社。840円）が発売中です。「在日」タブーのところで、私が新井将敬さんについて語っています。又、最後の方で、元連合赤軍兵士の加藤倫教氏が出ています。「あさま山荘にろう城した19才の少年が32年後に明かす最後の謎」です。これは面白かったです。ぜひ読んでみて下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年1月31日

不思議な話

(1) 「朝日とNHKの喧嘩」だと思ってたのに。私まで…

芥川龍之介の『薺の中』みたいだな。と思った。「政治家がNHKの幹部を呼びつけて、放送内容を変更させた」と朝日が報道。翌日、NHKプロデューサーがこれに呼応するように、衝撃の内部告発をした。マスコミは大々的に報道した。特に朝日新聞は連日、キャンペーンを張る。しかし、NHKは、「そんなことはない」というし、政治家も「そんなことはない」という。「呼びつけた政治家」とされるのは、安倍晋三と中川昭一だが、中川は、「NHKと会ったことはあるが、放送後だ」という。これでは「圧力」のかけようがない。

一体、誰が嘘を言っているのか。本当に「圧力」はあったのか、なかったのか。産経や世界日報などは、「そんなことはどうでもいい。あのNHKの番組そのものが問題だった」と言っている。でも、01年1月に放映された問題の番組はもう見れない。4年前のことを、むしかえして騒いでいる。どっちにしろ、国民不在の問題だし、僕にとっても関係のない問題だ、と思っていた。ところが…。

1月20日(木)、和光大学に行った。和光大は、麻原の三女を去年、入学拒否した。試験に合格したのに、入学手続の「家族構成」を見て、三女と分かれ、慌てて入学拒否したのだ。マスコミが毎日殺到するだろうし、学生をオウムに勧誘するだろう。いや、それよりも、「麻原の娘がいる」と知られたら入学希望者が激減するだろう。そう考えての入学拒否だ。

ところが、和光大学は「自由」と「差別反対」を謳い文句にした大学だ。それなのに、自分のことになると、平然と「差別」する。おかしいではないかと、教授や学生が騒いで、12月、1月と連續してシンポジウムをやった。

僕もパネラーとして呼ばれた。学外からも、HPやチラシを見て多くの学生が駆けつけた。ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）からも二人、来てくれた。一人は中国からの留学生だ。この日は、皆の前で発言もしてくれた。

この二人は、「ライター科」の生徒だ。今、ライター科では「時事問題」を、文芸科では「現代史」を教えている。「現代史」というのは戦後の歴史だ。60年安保、70年安保を中心にして、山口二矢、三島由紀夫、森田必勝、野村秋介、よど号、連合赤軍…といったことを教えている。学校で教えない歴史だ。

もう一つの「時事問題」は文字通りの時局的問題だ。北朝鮮、イラク、アメリカ、改憲運動、日の丸・君が代…といった問題を取り上げている。

「『女性国際戦犯法廷』も取り上げて下さいよ」と留学生は言う。「これも時事問題だし、今一番、大きな問題でしょう」と。ジャナ専では、左翼的・進歩的な先生が多い。この「法廷」に関係した人もいる。資料を配りながら、熱く、授業で語っているという。

「専門の先生がいるんだから、いいじゃないか。俺はそのことについては余り知らないから」と、その時は答えた。「でも、それじゃ無責任だな。

『時事問題』の講師として、取り上げるべきだろうな」と、家に帰ってから、思った。そしてテレビを見、新聞を読んだが、よく分からぬ。『薮の中』だ。そんな時、ヤケに分かりやすい解説記事があった。よし、これをコピーして配り、授業で皆と考えようと思った。

「週刊新潮」（05.1.27）だ。なんせ、タイトルが凄い。ズバリと断定しちゃってる。

〈朝日「極左記者」と、NHK「偏向プロデューサー」が仕組んだ「魔女狩り」大虚報〉

これは実に分かりやすい。エッ、これは「虚報」だったのか。それに安倍、中川を狙い撃ちにした「魔女狩り」だったのか。偏向プロデューサーというのは、記者会見し、「政治家の圧力があった」と告発した長井暁氏だろう。では、朝日の「極左記者」って誰だ？ 本多勝一なきあと、骨のある「極左記者」なんていたのか。と思った。

そしたら何と、この「極左記者」は本田敏和記者だという。エッ！ 知り合いだよ。何度も会ってる。それに、「あの時」は大変だったな。と思い出した。たしか、漫画家の小林よしのりさん、部落解放同盟のみなみ・あめん坊さんが一緒だった。そしたら何と、「あの時」について、小林さんが、こ

の「週刊新潮」で証言していた。さらに、「あの時」のことを描いた「ゴー宣」も紹介されていた。ヒヤー、他人事じゃないな。と思った。だから今回はそのことを書こうと思っちょる。

その前に、「法廷」の話からだ。今を去る5年前だ。市民団体が都内で民衆法廷「女性国際戦犯法廷」を主催した。00年12月のことだ。これは従軍慰安婦問題について、昭和天皇や日本政府の犯罪を裁くという模擬裁判だ。

まあ、市民団体が何をしようと、それは表現の自由だし、言論の自由だ。問題は、NHKがこれを大々的に取り上げ、放映したことだ。01年1月30日に放映した。「何で不偏不党のNHKがこんなものを放映するのだ」と不評だったようだ。右翼からも抗議もあった。それに、直前になって、この番組が大幅に変えられた。「自主規制」だったのかもしれない。何らかの外部からの圧力があったのかもしれない。

「安倍、中川両代議士が（01年）1月29日（注：放送の前日だ）にNHKの幹部を呼びつけ、番組について中止を要請したり、修正を命じる介入を行った」

と朝日新聞（今年の1月12日付）は、スクープした。本田記者が書いたのだ。これと軌を一にするかのように翌1月13日、NHKの現職チーフ・プロデューサー・長井暁氏（42）が告発会見を敢行した。「たしかに幹部二人が放送前日、呼び出され、放送は大幅に作りかえられた」と。「私にも家族がある。4年間悩んできたが、事実を述べる義務があると決断した」と涙ながらの訴えとなった。

安倍、中川には、「不当な圧力だ」「政治的な事前検閲」だと、非難が集中し、ブーイングの嵐になった。しかし、その後、この「圧力」はちょっと眉唾ものになってきた。中川氏は、「会ったことは会ったが、番組放送後の2月2日だ」とスケジュール帳を見せて説明。二人とも、「圧力なんかとんでもない」と否定した。

「週刊新潮」はこれは、朝日の「極左記者」とNHKの「偏向プロデューサー」が共闘した「世紀の大虚報」だ！と断定している。産経新聞は、「圧力があったかなかったかなど、どうでもいい。国際戦犯法廷そのものがおかしい。それを批判しろ」と言う。

やはり、「藪の中」だ。NHKが放送当日、直前に変えたのは事実だ。自主規制もあったし、外部からの「抗議」や「注文」もあったろう。特に政治家の「抗議」となると、「圧力」と取られかねない。そんなこんなで、変わった。

そして、4年後の今、朝日の記者とNHKのプロデューサーの二人は、共闘し、これを問題にした。「何故、今ごろ?」「何のために?」という疑問は残る。安倍、中川は北朝鮮に対する強硬派だ。それを叩くために本田、長井は抗議し、立ち上がった…という説だろうが。はたして、「魔女狩り大虚報」と言い切っていいのか。

(2) 「朝日の極左記者」本田敏和氏が「悪の元凶」なのか?

ところで、今回の「大虚報」の最大の元凶とされているのが朝日の本田敏和記者だ。人権、安保問題に詳しい記者だ。又、進んで有名人に議論を吹っかけてゆくことで有名だ。かつて筒井康隆氏が「てんかんの人への差別」問題で、断筆宣言をした時、筒井氏の所へ乗り込んで、喧嘩取材をしている。

又、この断筆宣言に端を発し、小林よしのり、みなみ・あめん坊（部落解放同盟）、そして私の三人で、鼎談で、「差別論」の本を作ろうとした。そこに突然、本田記者は現われて、小林よしのりさんに喧嘩を売ったのだ。

「週刊新潮」では、この時の本田記者のことを「戦火を交えた小林さん」がこう語っている。

〈本田記者の印象は、とにかく思い込みが激しい人、エキセントリックで、常に断定口調です。相手を“悪”と決めつけたら、徹底的に自分の主張を押し付ける。

ワシと会った時も、“差別は経済構造だ”と主張し、作家が金儲けのために本を出すことを否定していた。初めから結論ありきで、取材するタイプです。別の角度から検証するという、記者として当たり前のことをしない人ですよ〉

さらに、小林さんは言う。

〈本田記者は典型的な左翼ですよ。極左といってもいい。国家や資本主義は悪で、権力を批判することこそが表現の自由だと考えているんです。今回の記事にしても、安倍氏や中川氏は対北朝鮮強硬派です。経済制裁論議などを目前に控えた今、何とか2人のイメージを落とそうと考え、わざわざ4年前の出来事を出してきたのだと思います〉

この本田記者と小林さんの闘いは、実は『ゴーマニズム宣言』（幻冬舎文庫）の第6巻に描かれている。その「ゴー宣」の表紙と、本田記者が吠えるカットが「週刊新潮」には載っている。

そのカットを見て、「あれっ、この現場に僕もいたのにな」と思った。それで、「ゴー宣」を探した。あったあった。「週刊新潮」に載ったカットは53ページの一番下のカットだ。その上には何と、その「現場写真」が出ていて。突然乱入して、吠える本田記者と、他の人たちの対照的な写真だ。私も出ている。

「（本田記者は）一人で、よろこんでしゃべってる」

「わしは別の資料よみふけってる」

「鈴木氏はカナモリに向かってこんなことして遊んどる！」

と説明が入つとる。確かに私は、話に退屈したのか、カナモリさん（小林さんの秘書。カメラをとってる）に向かって、ピースサインをしている。

その前のページにも、写真がある。

「わしはおこっとるやんけ」

「鈴木氏は聞いてない」

なんか、私はいつも不真面目みたいですね。まいりますね。

そうだ。せっかくだから、ちと、53ページを参考のために載せよう。



このマンガを見て、思い出したが、「小林vs本田」論争のキッカケは、実

は僕の文章なんだ。

本田氏は言う。

「僕は筒井康隆にインタビューしてみようと思ったのは、週刊金曜日に書いておられた鈴木邦男さんの文章読んで、ああ全くその通りだ、ひじょうに正確だと思ってたんですね」

それに小林さんが反論する。

「ほりや、もうここに問題がある。ユーモアがわかっとらんやんけ。鈴木氏はブラックユーモアで筒井氏を挑発して断筆をやめさせようという愛情あふれるヒネリの効いた文を書いたんだぞ！」

ギャグがわからん。ウイットを解せん。

国語力がないじゃないか、この新聞記者！」

でも、二人から私はほめられている。もう忘れてしまったが、「週刊金曜日」に、「筒井康隆は二度死んだ」という文を書いたんだ。「断筆宣言」をめぐってだ。一体、どんなことを書いたんだろうと思ったら、「ゴー宣」の中で、それが紹介され、文字も読める。

〈悪者にされた「てんかん協会」だが…。（作家は）どんな状況でも闘うべきだ。これは、パロディ小説、ブラックユーモアの絶好のネタではないか。（…）選挙に出てもいい。「反言葉狩り党」もいいし、「言葉を取り戻せ党」もいい。比例代表なら一人くらい通るだろう。

あ、もしかしたら、そこまで考えて断筆宣言をしたのかな。作家としての才能も渇望したし、じゃ国会議員にでもなるしかないなーと思って…〉

へエ、こんなことを書いてたのか。やっぱり、ブラックユーモアだし、挑発だ。それを小林、本田両氏が認めてくれたのはありがたい。

でも何で、我々三人が話してるところに本田記者が乱入したかだ。本当は「乱入」じゃないんだが。

先にも書いたように、小林、みなみ、私の三人で鼎談し、〈差別〉をテーマにした本を作っていた。三五館から出ることになっていた。三五館の応接室で話した。何日も話し合い、何時間も話し合った。中盤にさしかかった時、三五館の社長が言った。

「実は今日は、朝日の本田記者を呼んでます。筒井さんにも直撃インタビューをした人です。そのあたりをちょっとレポートしてもらったら、三人

の鼎談の参考にもなると思いますし…」と言う。別に僕ら三人が呼んだわけじゃない。社長が勝手に呼んだ。でも、鼎談の参考になるかもしれない。10分かそこらだろうから、まあいいか、と思った。

ところが、本田記者は、えんえんと喋る。断定的に喋る。1時間か2時間も喋ったんじゃないだろうか。独断的で決めつけの多い話し方だった。そのことは「ゴー宣」、「週刊新潮」の小林さんの証言でいう通りだ。僕らは、あきれ果て、退屈して聞いていた。

この時のことを、小林さんは「ゴー宣」に書いた。私は横を向いたり、ピースして遊んどった。この「ゴー宣」には、三五館の社長のことも描いた。別に悪く描いてない。ところが、このマンガを見て、社長はヘソを曲げた。そして、「もう本は作らない」と言った。ひどい話だ。何日も何日も話して、龐大なテープを録りながら、一方的に中止になってしまった。

小林さんも、「ゴー宣」のあとがきに書いている（P.58）。

「この章で描いた3人の鼎談本は結局出なかった。一体、何のために出版社で何日も鼎談したのか？ 今でもわけがわからない」

(3) 筒井康隆と同じだ。私も、二度死んだ

本当に惜しい話だ。テープがあるんだから、今からでも遅くない。本を出してほしい。

三人の本は、「差別論ノート」とでも題をつけて出したら、売れただろう（同じ題の本があるかな）。ともかく、マンガ家、解放同盟、右翼…と、この三人が熱く語り尽くしたのだ。売れないわけがない。

でも、本は出なかった。今、冷静になって考えてみる。あの時、社長が本田記者を連れてこなかったら、本は出ていた。又、本田記者が来たとしても、静かに、謙虚に、「筒井さんとのインタビュー」の話だけを10分位やって、サッと帰っていたら、「おう、熱い人だな」「そんな取材もあったのか」と思い、その後の三人の鼎談でも、さらに熱が入って話し合われただろう。

こうみると、本田記者の「圧力」があった為に、「差別論」の本は潰れた。ベストセラーになるはずだった「差別論」を潰したのが本田記者だ。とも言える。自分は「差別反対」と言いながら、「差別論」の出版を潰した。そうとも言えるんじゃないだろうか。まるで和光大学のようだ。

だが、この「ゴー宣」のマンガで批判されても本田記者からは小林さんに抗議はいかなかった（と思う）。又、「この本を出すな」と圧力をかけたこ

ともない。うるさくて、大変な人だったが、根はいい人だと僕は思った。三人の「差別論」を潰したのは出版社だ。単に、「マンガに描かれて、不愉快だった」という理由なのだ。朝日の記者の「圧力」でもない。

その後、この出版社からは僕は書き下し本を頼まれ、1年かけて書いた。ところが、

「出来が悪い」といって、直させられた。さらに、「まだ、まだ」といって今も出してもらっていない。ボツにされたのも同然だ。「筒井康隆は二度死んだ」じゃないが、僕は出版を二度ボツにされた。これが、相手が自民党だと「政治的圧力があった」といって大々的に記者会見が出来る。でも、「マンガに描かれて不愉快だから」という理由で一度目の出版はボツ。二度目は出来が悪くてボツになった。これじゃ記者会見も開けん。泣き寝入りだ。マンガにもならない話だ。

「そんなことがありながら、なぜ、書き下し本を引き受けたんだ」と言われるかもしれない。ただ、僕としては、三五館とは縁を切りたくなかった。関係を持ち、仕事を続けることで、〈差別論〉も出してくれるのではないか。そう思って、自分の原稿を書きながら、「ところで、差別論の本ですが…」と時々、言っていたのだ。だが、蛇蜂取らずになった。二つともダメになってしまったからだ。「勝者」のないバトルロイヤルだったな、と思う。

【だいありー】

[1] 1月21日(金) 志の輔さんの落語会に行く。面白い。それに、勉強になる。松元ヒロさんのパントマイムも楽しい。楽屋に訪ねたら、「公安の本、面白かったです」と言っていた。読んでもらって、ありがたいですね。

[2] 1月26日(水) 一水会フォーラム。民主党衆議院議員の長島昭久氏で、「日米同盟の新しい設計図」。超満員だった。新しい日米関係、今後の防衛、改憲などについて話してくれた。大変に考えさせられた。

[3] 1月27日(木) 午前11時から、田代まさしさんの裁判。弁護側証人として、田代さんの妹、それに月刊「創」編集長の篠田博之さんが証言した。最終弁論と検察側の求刑も。求刑は4年6ヶ月だった。判決は2月7日(月)の3時から。

【お知らせ】

[1] 2月9日(水) 高田馬場ライブ塾。午後7時から。ゲストは三浦和義さんで、「口ス疑惑の真実」です。

3月9日(水)は立松和平さん（作家）で、「連合赤軍事件」です。

[2] 東中野の骨法道場で毎月、「武士道セミナー」が開催されています。2月は13日(日)の午後1時からです。お問い合わせは、03(3362)0010へ。

[3] 2月14日(月) シンポジウム「おかしいぞ！ 警察・検察・裁判所」が開催されます。6:30から、文京シビックホールで。魚住昭、北村肇、篠田博之、大谷昭宏、二木啓孝、斎藤貴男、森達也…氏らが呼びかけ人。私も出る予定です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年2月7日

真面目に、靖国問題を考える

(1)中国にも新幹線を。でも靖国が…

「中国鉄道相、鉄道協力に『靖国』影響示唆」という記事が出でていた。世界日報（1月20日）だ。産経にも同様の記事が出でていた。中国を訪問している北側一雄国土交通相は19日、北京で劉志軍鉄道相と会談した。この席で、中国が進めている高速鉄道プロジェクトに関しての協力を提案した。これに對して、劉鉄道相は、「困難や障害が乗り越えられれば、日中間の鉄道協力はレベルは高くなる」と述べ、小泉純一郎首相の靖国神社参拝などが新幹線採用に影響していることを示唆した。

こんな所にも「靖国」が出てくるのか、と驚いた。中国としては、あらゆる場で、言っておきたいのだろう。

中国では、日本が新幹線を売り込む北京～上海間の高速鉄道計画が進められているほか、今年中に武漢（湖北省）～広州（広東省）間などで時速三百キロ以上の高速鉄道専用線が着工の予定だ。

中国政府は新幹線技術について、「素晴らしい」（吳儀副首相）と評価する一方、靖国問題などで国内の反日感情が高まる中、新幹線採用に慎重な姿勢を見せている。このため北側国交相も大変だ。「分かりました。小泉首相には靖国参拝をやめさせます。だから新幹線を使って下さい」とは言えない。そんなことを言ったら、“國賊だ！”と日本中から批判される。だったら、逆に、反論するか。

「冗談じゃない。内政干渉だ！ それまでして新幹線を使ってほしくない。誰が売るもんか。馬鹿野郎！」

と言って、席を蹴って立ち、帰る。日本の右翼や保守派からは、ヤンヤの大喝采だろうが、まさか、それも出来ない。日本政府としては、中国とは仲

良くしたいのだ。

この新幹線採用だけに限らない。あらゆる問題をとり上げて、中国は、「諸悪の根源は靖国にあり」とばかりに攻撃してくる。でも、マスコミに出る〈強硬論〉だけが全てではないと思う。かつての独裁国家ではなく、徐々に自由な、民主主義の国へと移行しつつある中国だ。民衆の意見や突き上げが大きくなり、無視できなくなる。サッカーだって、民衆が暴走し、「反日的ヤジ」を浴びせ、抗議行動をとる。政府や警察はかえってその〈暴走〉を抑えている。本当は、自分たち（政府）が煽ったのに、「何もそこまでやらなくても…」と、戸惑っている。「こっちは政治家同士のタテマエとして、強硬に主張してるだけなんだから…。それを全部、マジに取られちゃ困るな」という気持ちかもしれない。

だって、中国政府としては、「日本」や「日本の人民」を悪いとは言っていない。あの戦争だって、戦争指導者、軍部が悪いのであって、日本の人民は悪くない。人民はむしろ被害者だ。そう言ってきた。指導者と人民は、そのように画然と分けられるのかどうか。それは疑問だが、ともかく、中国政府はそう言ってきた。そして、そのことで中国国民をなだめてきた。

ソ連は戦後、60万人の日本人を強制収容所に入れ、強制労働をさせ、1割の6万人が死んだ。ところが中国では、「戦犯」を優遇した。それだけでない。「中国人民を何人も殺した」と裁判で証言した戦犯を殺さずに、何年間かの勾留の後に、日本に帰した。中国から帰った人々は、「中帰連」という団体をつくり、自らの罪を告白し、中国側の温情に感謝している。そんな人々の告白は映画「リーベンクイズ（日本鬼子）」でも詳しく紹介されている。

「いや、彼らは“洗脳”されて帰ってきたのだ」「中国の戦略だ」という批判もあった。僕も“洗脳”はあったと思う。又、強制労働はさせなかつたが、毎日、「反省文」を書かされていた。これも「洗脳」の一種だろう。この方が強制労働よりも辛い、と思った人もいた。そんなものは書けない。書くくらいなら殺せと叫んだ人もいる。苦しんで自殺した人もいる。

しかし、中国としては、「悪かったのは日本の指導者・軍部」であり、日本の「人民」は被害者。人民は悪くない。というポリシーを貫いてきた。だから、犠牲になった兵士を靖国神社に祀ることには反対しない。しかし、戦争指導者の「A級戦犯」を祀り、そこに小泉首相が参拝に行く。これは許せない、と中国は怒る。

日本側も必死に〈説明〉はしてるのだろう。「いや、日本では死んだら

皆、神様になるのだ」「戦争を認めてるわけじゃない。反省し、二度とあのような戦争をしないために、参拝に行っているのだ」…と。

でも、中国側は納得しない。いや、少しばかり分かる部分があるのかもしれない。しかし、「悪い指導者」と「よい人民」を画然と分けて考えてきた中国としては、困るのだ。自分達のポリシー、論拠が崩れてしまう。「悪い指導者」と「よい人民」と一緒に祀り、そこへ首相が行く。じゃ、「悪い指導者」を認めることではないか。戦争を認めることではないか。中国本土に侵略し、中国の人民を虐殺した事を正当化することではないか。…そう思うのだ。

(2) 山口神社、三島神社を作ろうという運動もあった

これでは、二分論で日本を考え、中国人民に説明してきた中国政府の立場がなくなる。そう思ってるのだ。「ウルサイ。これは日本文化だ。死んだら善人も悪人もない。内政干渉するな！」と一喝できればいいが、日本政府としては、言えない。中国抜きに、これから外交はないからだ。その点は北朝鮮とは違う。「北朝鮮とは国交なんかする必要ない！」「戦争に訴えても人質を取り戻せ！」と、北朝鮮になら、何でも言える。

でも中国に対してはそんなことを言う人はいない。「中国とは国交断絶せよ！」「もう一度、中国を攻めろ！」なんて言う人はいない。言ったら大変なことになる。そして靖国問題はある。

もしかしたら日本政府は、「そのうち中国は忘れてくれる」と思っているのか。「はいはい。分かりました。そちらの抗議の趣旨は理解しました」と聞きおいて、そのうちに、中国もあきらめるだろう。…と、それを期待してなのかもしれない。しかし、そうはゆかない。

「じゃ、A級戦犯だけを分祀しましょう」とも言えない。そんな事を言つたら、（右傾化の進む）日本では、大騒ぎになる。首相だって降ろされるかもしれない。

年末の「朝まで生テレビ」でも、この問題をやっていた。「実はA級戦犯の遺族に分祀の打診をしたことがある」と、田原さんは言っていた。「これ以上、日中間の友好の障害になるのは故人も耐えられないでしょう。分祀されても結構です」と、ほとんどの遺族は言った。ところが、東条首相の遺族だけは頑強に反対した。それで実行できなかったという。たとえ全員が了承しても、ちょっと無理ではないか。

「分祀」ということはありえないと、神社問題に詳しい人々は言う。それ

に、一旦、神様になって祀られている人々を、そこから、ひきはがし、別に移す、というのは何やら、日本の文化になじまない。昔々、中国ではあったというが、（日本でもあったのかな）。死後、罪が発覚したら、墓を掘り出し、骨になった人間に罰を加える、といった事を連想してしまう。

突飛なことを考えた。もし、僕がA級戦犯の遺族だったらどうするか。言いたいことは山ほどある。明らかに冤罪の「戦犯」もいる。しかし、死ぬ時は、再生日本人の柱として、従容として死んだ。日本を守るために、天皇を守るために、文句も言わずに死んだ。「悪人」として殺されるのにも、甘んじて死んだ。自分たちが「悪人」とされることで、日本が救われるなら、それでも構わない。という気持ちだったろう。靖国に祀られるなんて思ってもみなかつたろう。靈界の彼らと話せたら、きっと、「靖国に祀られるなんて、おこがましい」と辞退しただろう。

実は、靖国神社は、戦争で亡くなった全ての人を祀ってるのでない。乃木さんや東郷さんは祀られてない。乃木さんは日露戦争で死んだわけじゃない。戦争の終わった後になって自決した。東郷さんは、戦争後になって病死した。でも、慕う人が多いから、乃木神社、東郷神社が作られた。

60年に浅沼委員長を刺殺した山口二矢は右翼の間では「救国の英雄」とあがめられた。「山口神社」を作ろうという運動もあった。もし、右翼のクーデターが成功し、右翼政権が出来たら、山口二矢は靖国神社に祀られただろう。

70年に三島由紀夫が自決した直後も、「三島神社」を作ろうという動きがあった。でも、山口神社も三島神社も実現していない。

「いや、二人は外国との戦争で死んだわけじゃない」と言うかもしれないが、元々は国内戦で戦死した官軍のために建てられたのだ。戊辰戦争の戦死者を祀るために建てられたのだ。だから、偉大な大西郷も、西南戦争を起こして「賊軍」になったから靖国神社には祀られていない。

又、近藤勇や土方歳三も祀られてない。「あいつらは賊軍だから当然だ！」というかもしれないが、朝廷を守るために、日本を守るために京都で鬪ったのだ。靖国神社に祀るべきだ。だから靖国神社に祀られている人々だけが、「日本を守った」わけではない。

僕は学生時代に、そのことを強く感じていた。はっきり言って、靖国神社よりも、乃木神社や東郷神社の方がずっと身近だったし、偉大だと思っていた。愛国運動の最前線で闘っていた僕にとっても、そうだった。

(3) 乃木神社、東郷神社の方が親しみがあった

それには理由がある。僕は、生長の家の学生道場に入っていた。その学生を連れて、連日、早大、東大、神奈川大などに行き、左翼の学生と鬭っていた。この学生道場は赤坂の乃木坂にあった。そう、乃木神社の隣りだ。ここは乃木さんの家があったところだ。その跡が残っている。その敷地内に乃木神社がある。だから、よく、ここにはお参りに行った。玉砂利の上で正座し、祈った。「この日本をお守り下さい」「左翼に日本が乗っ取られませんように」「共産革命から救って下さい」…と。

さらに、生長の家の本部は原宿にあった。東郷神社のすぐ隣りだ。昔は同じ敷地内だったのかもしれない。だから、よく、お参りに行った。ともかく、大学時代は、乃木神社、東郷神社に祈り、守られて愛国運動をした。靖国神社には余り行った記憶はない。自分の頭の中では、乃木神社、東郷神社の方がずっと巨大な存在だった。

よし！ だったら、東条神社をつくったらしい。「A級戦犯だなんて、自国民からも批判されるのなら、靖国神社に祀ってもらわなくていい。こっちから分祀してやる！」と言えばいい。まさか、「A級戦犯神社」とはいかないから、一人一人、神社を作る。あるいは、「第二靖国神社」を作る。「こちらこそが本当の愛国者だ。100年後には分かる」と言えばいい。

数年前に、映画「プライド」が作られ、あの中では東条首相は英雄だった。そんな立派な人なのかな、と僕は疑問に思ったが、絶讚する人々が多くた。「こんな立派な人がいたなんて日本の誇りです」なんて言ってる人もいた。じゃ、東条神社を作ったら、ドッと人々も参拝に行くだろう。もしもしたら、靖国神社よりも大きくなるかもしれない。中には、「東条さんの遺志を継いで、もう一度、アメリカと戦おう！」と言い出す人も出るだろう。「その前に中国をやっつけろ」と言う人も出るだろう。

「きっと、そうなりますよ。それでもA級戦犯は分祀した方がいいんですか？」と中国側に言ってやつたらいい。「日本の首相は靖国参拝をとりやめて、東条神社参拝に切り替えましたよ。いいんですか」と言ってやつたらいい。この問題には「スッキリした解決法」なんてない。問題を抱えながら、反省点をひきずりながら、考えてゆく。その方がいいんじゃないだろうか。と私は思います。日の丸・君が代と同じだ。「戦争の血で汚れているから、新しい国歌、国旗を」と言う人がいる。反対だね。全く新しい歌、旗になつたら、過去の国民の苦しい過去も、悲惨な戦争も全て忘れてしまう。「もう、昔のこととは関係ない。我々は新しい時代の、新しい国民だ」なん

て、思い上がってしまう。「中国に侵略した？ そんなの昔の国民がやったことじゃん。昔の国旗や国歌の下でやったことじゃん。私は別の国民だから…」と、しゃあしゃあと、言っちゃうよ。それでいいのかね。

ところで「A級戦犯」はいつ合祀されたのだろう。「戦争が終わってすぐだろう」と思われるかもしれないが、違う。53年（1978年）秋、それまで祭神として祀ってなかった東条英機元首相ら14名のA級戦犯を合祀した。でも、この時は社会党も賛成しているのだ。そこから、近隣諸国の反発を招くことになる。特に、中国の非難、抗議は強いものがある。だから、冒頭の鉄道の話にも「靖国神社」が問題として出てくるのだ。

結論を急がずに、この問題は又、考えてみよう。靖国を、いわゆる〈左右対決〉の争点ではなく、ちょっと別の視点から見た本としては、坪内祐三の『靖国』（新潮文庫）や、島田裕巳の『日本人の神はどこにいる』（ちくま新書）などがある。これらの本も紹介しながら考えてみたい。

【だいありー】

[1] 1月27日(木)午前11時から、田代まさしさんの裁判。求刑は4年6ヶ月だった。

翌日のスポーツ新聞には全て出てました。特に「東京スポーツ」です。「田代公判3大仰天」として、「モヒカン」「美人姉妹」「激太り」と書かれてました。

モヒカンは大川興業の芸人、阿蘇山大噴火だ。裁判傍聴が趣味で来ていた。そして、田代さんの二人の姉妹が出廷。

「傍聴者が驚いたのがその美貌ぶり。上の姉は朝丘雪路の若いころにそっくり。下の妹は麻丘めぐみ似だった」

と東スポ。田代さんの愛人は藤原紀香似だったし。本人は田代まさし似。実際この4人の俳優を使って「田代まさし物語」を作ったらしいね。

もう一つの「仰天」は激太りだ。「12キロの激太り」。正月はお菓子ばかり食べてたので太ったそうな。1週間で18キロ太ったというが、さすがに、この公判のためにダイエットしたそうな。それで、6キロ減。

[2] 2月1日(火) 7:30から「幻想まっしぐら」の反省会、慰労会。岸田秀さん、松尾貴史さんと。司会の美人女子大生とロフトの店長も。

[3] 2月2日(水) 大塚英志さん（評論家）朝倉喬司さん、上野昂志さんを囲んで、ジャナ専生徒と飲む。

[4] 月刊「創」（3月号）が発売中です。僕の連載は、「容疑者」です。赤報隊事件の時効直前に警察が密かに配った、「10人の最重要容疑者」のリス

トを暴いております。

【蛇足】

明治天皇が警察官を殴っちゃいかんがな。と思った。中村勘九郎の二男、中村七之助が、1月20日の夜、酔ってタクシーに乗り、料金トラブルになって、そのまま下車。運転手の通報で駆けつけた巡査が腕をつかまえたとき、振りほどきざまに巡査の顔を殴った。

七之助容疑者は、舞台、ドラマ、CMに出てるほか、一昨年にはハリウッド映画「ラスト・サムライ」で明治天皇を演じた。明治天皇が巡査を殴っちゃいかんざき。父親の勘九郎は、「教育が間違っていたのか…。あんなバカだとは思わなかった」と謝罪。だったら、息子にビンタを食らわして、たたき直した方がいい。

明治天皇の教育係だった山岡鉄舟は厳しく天皇を育てた。若くて遊びたい盛りの天皇は、夜は女官のところへ入りびたり。これでは軟弱な天皇になってしまふと心配した山岡は、途中で待ち伏せし、いきなり柔術で投げ飛ばした。「無礼な！余は天皇だ！」と天皇。それに対し山岡は、「いや、天皇のはずはありません。天皇ならばこんな軟弱な遊びにうつつを抜かしてははずはありません」と言って、又、投げ飛ばした。これで天皇の夜遊びもやんだそうな。

だから勘九郎も明治天皇役の七之助を柔術で投げ飛ばしてやればいい。それにしても、次の日には七之助は、テレビで会見していた。逮捕されても、すぐに釈放されてるんだ。同じことをしても、たとえば左翼や右翼の活動家だったら、最低23日はぶち込まれる。そして起訴される。下手をしたら、1年か2年、ぶち込まれる。何せ今は、ビラを郵便受けに入れた位で1年近くもぶち込まれる時代だ。それなのに、同じことをやっても、役者だから、すぐに出てきた。

オラは昔、釧路で警察官ともみ合ったら、払い腰で投げられ、コンクリートに叩きつけられて、さらに1ヶ月、釧路警察署にぶち込まれた。「幻想まっしぐら」の慰労会でその話をしたら、司会の美人女子大生に、「それは嫉妬です」と言われた。そうかな。でも、その辺のサラリーマンがやったって、厳しくやられるよ。歌舞伎は日本文化だから、警察も手心を加えたのか。と思っちゃうよ。

【お知らせ】

[1] 2月9日(水) 高田馬場ライブ塾。午後7時から。ゲストは三浦和義さんで、「ロス疑惑事件の真実」です。

3月9日(水)は立松和平さん（作家）で、「連合赤軍事件」です。

[2] 東中野の骨法道場で、毎月、「武士道セミナー」が開催されています。

2月は13日(日)の午後1時からです。お問い合わせは、03(3362)0010
へ。

[3] 2月14日(月) シンポジウム「おかしいぞ！ 警察・検察・裁判所」が
開催されます。6:30pmから、文京シビックホールです。私も出る予定です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年2月14日

懲役3年6ヶ月ですよ。田代さんの判決は

(1)23枚の傍聴券を求めて291人が並んだ

マサシです。今日（2月7日）、判決が出たとです。懲役3年6ヶ月です。重かとです。でも、しっかり勤め、中で勉強しようと思っちょります。

マサシです。身から出た鎧です。深く反省しとります。芸能界の夢はきっぱり捨てて、出所後は老人介護の仕事をしようと思っちょります。

マサシです。でも、長年の芸人生活のせいでしょうか。こんな極限状況の中でも、無意識に〈ウケ〉狙いをしてしまう自分が悲しかです。

マサシです。前回の公判で、求刑が言い渡され、「最後に言うことは」と裁判長に言われたとです。つい、言っちゃったとです。「今日は皆さま、お忙しい中を、私の為に足をお運び下さり、まことに有り難うございます」。

マサシです。本当は緊張して、あらぬことを口走っただけですが、「何だ、こいつは」「なめとんのか」「パーティの謝辞じゃねえぞ」と裁判長にも思われたようで、反省しとります。

マサシです。そんな事がもう一回、あったとです。裁判長が聞いたとです。「落ち込み、絶望して覚醒剤に手を出したというが、水道の蛇口をひねったら出るわけじゃないし、手に入れるまでに考えなかったのか？」

マサシです。その時、つい言ったとです。「遠くの蛇口をひねったんで

す」。裁判長はムッとしてましたね。「こんな厳肅な場で、ギャグで返すのか」と。でも、本当は必死で、こらえてたんでしょうね、笑いを。裁判長が笑い出したら、裁判はどうなるんでしょうかね。

マサシです。今は小菅の拘置所です。ベルトは出来んとです。自殺防止の為です。だから、ジャージを着ります。年末年始に甘いものをヤケ食いして18キロも太ったのも、ベルトがないせいです。ベルトがあれば、「あっ、もう穴が足りない」と分かるんですが。

マサシです。拘置所には、ジャージの差し入れがなくて、ズボンを手で持ち上げてる人もいるとです。でも時々、ずり落ちて、お尻が見えるとです。女性のお尻なら、カメラを向けたくなるんですが、男じゃ、いけんです。

マサシです。それで、看守さんに聞いてみました。「あの人、裁判はまだでしょう」「まだだよ」「でも、判決（半ケツ）が出てるよ」。

これには看守さんも大爆笑でした。こんな時でも反射的にギャグが出る自分が悲しかです。

マサシです。そんなギャグを毎日、ノートに書き留めちります。出所したら、美川憲一さんが付け人に雇ってくれるとか。あるいはビデオの監督をやれとか。ニュース・ペーパーに出るとか。いろいろお話しがありますが、私としては、芸能界復帰の夢は捨てて、老人介護の仕事をしたいと思ったります。そう思いながらも、思い浮かんだギャグをノートに書き留めている芸人の性（さが）が、やはり悲しかです。

マサシです。これから刑務所に行ったら、皆さんに会えんで淋しかです。クリスマスの時、愛する女性に電報を打ちました。プレゼントは贈れないし、愛情表現は電報しかなかとです。電文ですが、

「メリー・クリスマス！」
彼女は泣いて喜んでくれたとです。

クニオです。私です。田代まさしさんは多分、こんな気持ちじゃないのかな。と思って書いてみました。あそこまでの芸人根性、芸人魂は見上げたものです。

翌8日(火)の新聞には大々的に取り上げられました。共同通信では、こう出てました。

〈判決理由で上岡哲生裁判官は「執行猶予期間中にもかかわらず覚せい剤を購入し、自己の使用にとどまらず、交際相手にも注射して薬物の害悪を広めた」と述べた。

判決によると、田代被告は昨年の9月20日夜、東京都中野区のホテルで覚せい剤を交際相手の女性(38)=有罪確定=と使用したほか、合成麻薬MDMAも使用し、大麻や覚せい剤を所持するなどした〉

ところで、この日、2月7日(月)は地裁は長蛇の列が出来ました。法廷は23人しか入れないので、傍聴希望者は291人。13倍でした。それを見た時、あっ、これはダメだなと思いましたよ。あきらめちゃいました。でも、そんな無欲な私だからよかったのでせう。何と、当ったんです。13倍の倍率に。「創」から来てた人は10人位いるけど誰も当たらない。それで、当たり券を編集長にあげました。「創」は田代さんのことを毎月詳しくレポートにしているながら、編集長が入れなかったら、意味がないんです。

それで家に帰って、あとで判決の報告を聞いたとです。「連赤カゼ」をひいていて、体もキツかったし、その方が僕にとってもよかったです。

(2) 「連赤カゼ」にかかるて、寝とりやした

では、「連赤カゼ」の説明だ。

【だいありー】を、ここに入れよう。その方が説明になる。

[1] 2月5日(土)、植垣康博さん(元連合赤軍兵士)が静岡市でスナック「バロン」を経営してるが、今度、駅前の大店に移った。それを記念してのパーティ。中村うさぎさん(作家)も来るとのこと。「じゃ、おらも行く」と答えた。なんせ、うさぎさんはNHKにも毎週トーク番組に出てるし、忙しい。東京じゃ、会えないので、静岡まで会いに言った。雑誌の「うさぎが鬼に会いにゆく」の連載は11回で終了したこと。佐川、植垣、三浦和義、そして、僕も入っている。本になるらしい。楽しみだ。

ところで、新しい店を見て、ビックリ！ 今までの5倍の広さがある。この日は80人位がお祝いで来てたが、次の日から来るのだろうか。心配になった。いや、「やっていけます」と植垣氏。でも、うまくいけばいったで心配だ。一生、飲み屋のマスターじゃ、もったいない。早く、ママさんに任せ

て、本を書いてくれよ。と、挨拶した。

そうそう、この日、寒けがして、熱っぽかった。「行くのやめようかな」とも思ったが、「雪山でもっと寒い思いをした人がいたんだ」…と連赤兵士のことを思って、行ったわけですよ。そして、ものの見事に、「連赤カゼ」にかかったとです。最終の新幹線で帰京しましたが、中で、コートを着たまま、震えとなりました。頭はガンガンするし。

[2] 2月6日(日) 1日寝ちりました。まいったなー、原稿書かなくちゃならんのに…と思いましたが。「日の丸君が代」処分反対の集会にも行けんかった。

[3] 2月7日(月) 3時から地裁で田代まさしさんの判決。2時20分抽選。私は奇跡的に当った。という話はしたよね。帰って又、寝る。

[4] 2月8日(火) 全く治らん。よっぽど学校(ジャナ専)を休もうと思ったが、生徒に悪いと思い、必死になって行く。9:00からの「時事問題」と、10:40からの「現代史」。タクシーで帰り、又、寝る。夜中、もうろうしながら、「ゴング格闘技」の原稿を書く。

[5] 2月9日(水) 1時から雑誌の対談。熱があって、ボーッとして、何を喋ったか覚えちょらん。7時からライブ塾で三浦和義さんとトーク。「口ス疑惑事件」について、じっくりと聞く。あれだけのマスコミ攻撃、そして警察の弾圧に会い、13年も東京拘置所にぶち込まれた。そして無罪を勝ち取って生還した。ただ者じゃない。精神の強い人だと、いつも思う。

では再び、連赤だ。連赤の植垣さんの話だ。いや、多分、その話になると思いますよ。実は、去年の12月に「ザ・ニュース・ペーパー」の公演に出た。コントに出たわけじゃないが。高橋哲哉さん、斎藤貴男さんなどとトークをした。その時に、話そうと思ったんだが、ちょっと雰囲気を壊しそうだったので、やめた。ここに書く。

その「ザ・ニュース・ペーパー」のコントで、「熊」というのがあった。熊二頭が出てきて、グチるんです。本物の熊じゃなくて、熊に扮した役者ですが(言わなくても分かるか。蛇足だね。熊に蛇って組み合わせも面白いね)。

「何で俺達こんなに人間に嫌われるんだろう」と話すんだ。「パンダはいいよな。色が違うだけで愛されるし」「月の輪グマは格好いいじゃん。首のどこにナイキのマークがついてるし…」とかいう話をする。最後に一頭が小泉支持演説をぶつ。「年間自殺者3万人。イラクに軍隊出して、おかげで日本人は殺される。延長して、さらに死ぬだろう。アメリカの言いなりに

なって世界中に軍隊を出したら、人間はどんどん減る。我々の敵は人間だ。その人間を減らしてくれるんだから、小泉さんは熊にとって大恩人だ」。という話だ。ギャグとは思えん。本当に熊はそう思っているのかもしれません。あるいは、人間に殺された熊の怨念が小泉さんにとりついて、人間を殺してなのかもしれません。

では、熊に関するお話をさらに紹介しよう。

(3) 熊に巴投げ。そして、「熊vs連赤」

本当はトークの時に話しゃよかったんだろうけど、憲法、自衛隊、教育基本法…など、固いテーマばっかり喋ってた。だから、喋れなかった。では、熊の話だ。

[1] 熊に襲われた時、「巴投げ」で、熊を投げ飛ばしたという話をよく聞く。新聞に時々、出ている。5、6回は読んでいる。たいてい、猟師だ。それも老人だ。そして、興味あることに、柔道をやってない人だ。熊を撃とうとして、銃を構えたが間に合わなかったとか。一発目を撃ったが外れて、次に狙う間もなく襲われたとか。あるいは、銃を持たずに歩いていた時に襲われたとか。

凄いのは、崖のところで襲われ、巴投げで投げたら、崖の下に熊は落ちた。というものだ。誰か、ビデオを撮ってたらいいのに。見たいやね。何も崖でなくてもいい。投げ飛ばしたら、驚いて逃げ出した。というケースが多い。巴投げなんて技を熊も初めて食ったわけだ。あわてたでしょうな。こりや、クマった。と思ったんでしょう。それに受け身も知らない。自分の何百キロの体重がモロにかかる、痛い。「一体、どうなったんだ」と頭の中がパニックになり、逃げ出すんだね。

その猟師の話が載ってたが、例外なく、柔道マンはいない。いくら柔道マンでも、恐くて、かけられないだろう。それに、熊と出会ったこともないし、闘ったこともない。その点、猟師は、熊との出会いは多い。「テレビの柔道の試合で見た技をトッサの時にやってみた」と言ってる。よく知らないからこそ、思い切ってやれるんだ。

昔、極真空手のウイリー・ウイリアムズは熊と闘ったが、あれはサーカス団の熊で、爪もとられていたという。でも、こわいやね。しかし、熊と闘うには空手よりも柔道ですよ。年末のPRIDEとK-1には柔道の滝本と秋山が、参加した。次は是非、熊と闘ってほしいね。

[2] 吉村昭の『熊嵐(くまあらし)』(新潮社)という本を読んだ。北海道開拓に行き、熊と闘った人々の話だ。(前にも紹介したかな。読んだ人はゴメ

ン)。一挙に10人以上が襲われ、食われる。女は全員食われた。でも、男は殺しただけで、食われてない。ベテランの猟師が答える。「なぜか分かるかね」。村人は分からん。「女の方がうまい。女の味をおぼえると、女しか食わない」と。男は殺すだけだ。

女は脂が乗っておいしいのだろうか。又、妊娠中の女性も食われる。胎児も食われる。これも熊には、おいしいのだ。気持ち悪くなる描写だ。でも、人間だって、「子持ちししゃも」や「子持ちカレイ」なんか喜んで食っている。サケの子供なんか、そこだけ、かき出して食っている。我々も残酷だ。

[3] 最後に、とっておきの話。連合赤軍事件だ。事件に参加した植垣康博さんに聞いた。やっと連赤が出てきた。「雪山の中で、熊は出なかつたんですか?」と聞いた。そしたら、「出た」という。小屋に近づいたらしい。朝、雪の上に熊の足跡が残っていたのだ。でも、こんなことは、連赤の本には、どこにも書いてない。「僕も初めて言いました」と植垣さん。「だつて、そんなこと、誰も聞かないもん」。

じゃ、なぜ熊は襲わなかつたのか。中の不穏な空気を察して逃げたんでしょうな。「オラも総括されたら大変だ」と思つて。いや、いや。中で、大声で怒鳴り合つてゐるから、こりや、ヤバイと思ったんでしょう。しかし、度胸のない熊だ。襲えばよかつたんだ。そしたら、中の人間も一致団結して闘つた。そしたら、とても内ゲバで仲間殺しをしてるヒマはなかつた。そうすれば、いまわしい「連赤事件」もなかつた。そうすると、新左翼運動が滅亡することもなかつた。むしろ、熊と雄々しく闘つた勇氣ある人々として褒め称えられた。「プロジェクトX」にも出ただろう。この一頭の熊の逃走、日和見主義によつて、歴史は大きく変わつてしまつた。この熊は、探し出して自己批判、総括を迫らにやいかん。

【お知らせ】

[1] 2月14日(月) シンポジウム「おかしいぞ! 警察・検察・裁判所」が開かれます。6:30pmから文京シビックホール(地下鉄・後楽園下車すぐ)。私も出る予定です。松崎明さんと私の対談本『鬼の闘論』(創出版・1575円)が出来、この日、会場で売られるそうです。

[2] 3月9日(水)はライブ塾で立松和平さん(作家)とトークです。「連合赤軍事件と『光の雨』」です。立松さんは連赤を題材にした小説『光の雨』(新潮文庫)を書いています。これを基に高橋伴明監督が映画化します。連赤への思いを語ってもらいます。

又、4月13日(水)は朝倉喬司さん(ルポライター)とトーク。「日本の自殺」

についてです。

5月11日(水)は大塚英志さん(評論家)とトークで、「これから憲法と天皇制」です。ご期待下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年2月21日

「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」シンポジウムに400人！

(1)補欠から当日、急にパネラーに

2月14日(月)は驚きの連続でした。6時半から、文京シビックホールで、「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」が行なわれました。文京区が建てたあの巨大な建物です。都庁と並ぶ凄さです。地下鉄・後楽園に下りると、左手にすぐに目につきます。ヒヤー、巨大なタワーだなど…。そして右手を見ると、東京ドーム、後楽園があります。

私は、この光景は見慣れちります。だって、文京シビックホールのすぐ隣りが講道館だからです。柔道の練習に来てるからです。

だから、後楽園に下りると、足は自然に講道館に向かうとです。「泣きたかったら講道館の青い畳の上で泣け…」という歌を口ずさんだりして…。あれは、「柔道一代」の歌だったかな…。あっ、いけん、いけん。今日は講道館じゃない。と思い直して、シビックホールへ。

ここでは数年前に、後輩がパーティをした。結婚式だったかな。それ以来だ。二度目だ。6時半から開始だ。「打ち合わせがあるから6時前に来てくれ」と言っていた。でも行ったら、皆、中に入れないでいる。「正確に30分前でないと入れない」という。お役所仕事だから、厳格なのだ。6時になると、あわてて、会場の設営をしたり、受付をつくったり、本売りの準備をしたりしている。一般の人は6:15に入れた。そして、6:30から開会。やけにあわただしい。

この大ホールはよく芝居や歌などに使われている。TV中継車もよくとまっている。でも、僕らの集会は小ホールだ。じゃ、100人位のもんだろう。こうした集会は口フトでもやってるから…と思っていた。

ところがこの小ホール。370人も入る。これじゃ「小」ではない。「中」

だろう。紀伊国屋ホールよりも大きいじゃないか。エッ、こんな大きなところで大丈夫かよ。と思った。ところが驚き。どんどんお客様が詰めかけ、超満員。あわてて、補助椅子を出していたが追いつかない。400人以上が集まつた。

もう一つ、驚きだったのは、僕が急遽、パネラーとして出たことだ。このHPの「お知らせ」にも、「出る予定です」と書いてたけど、本当は「補欠」だった。ベンチの控えだった。「何かあって」「もしかしたら」発言してもらうかもしれない。だから会場に来てくれ。とのことだった。

「創」（3月号）の147ページにこの集会の案内が出ているが、僕の名前は出てない。まだ補欠にも入ってない。

この案内によると、当日の予定はこうだ。

第1部 警察不当逮捕の実態。

立川反戦ビラ裁判被告

JR労組逮捕事件被告

葛飾ビラ逮捕関係者、他

第2部 検察・警察裏金疑惑

大谷昭宏（ジャーナリスト）

三井環（元大阪高検公安部長）

第3部 検察腐敗と国策捜査

魚住昭（ジャーナリスト）

宮本雅史（ジャーナリスト）

この「創」が発表されたのは2月7日(月)だ。集会の一週間前だ。この時、「創」の編集長から、「鈴木さんもパネラーで出てもらう予定だ」と言ってきた。その後「第2部に出てもらう予定だ」という。えつ、あの高名な三井さんと一緒にかよ、と思って、緊張した。元高検の公安部長だよ。対等に喋れないよ。と焦った。

そして当日の2月14日(月)だ。あいかわらず、「連赤カゼ」が治らなくて、午前中は寝ていた。「創」の編集長から、「第2部に出てもらうから」という電話。「二木さんから正式に依頼があったと思うけど…」という。「ありませんよ」と言ったら、直後に二木さん（日刊ゲンダイ）から電話。「パネラーの依頼があったと思うけど」「今、はじめて正式に聞きました」というわけで、当日の昼、「補欠」から「パネラー」に昇進しました。

「何かあったらパネラーで出てもらう」と言ってたけど、何かあったんだ。第3部の宮本さんが出来なくなつた。それで急遽、第2部と第3部の出演

者がかわった。

第2部は大谷さんと僕。

第3部が三井さんと魚住さんになった。当日、来た人は戸惑ったでしょうな。「何で鈴木が急に出るんだ」と思ったでしょう。でも、和光大学や、ジアナ専、ロフト、ライブ塾の常連さんなど知ってる人もたくさん来ていた。ありがたい。

又、この日は、松崎明さんと私の新刊『鬼の闘論』（創出版）が売られていた。25日頃、全国の書店に並ぶ。「本当はまだ売っちゃいけないんだけど」と「創」の人も言っていた。『言論の覚悟』や『公安警察の手口』も並んでいた。何人からサインも頼まれた。だから売れたんだろう。

当日、皆に渡された案内には「本日のスケジュール」が書かれている。ここには僕の名前もちゃんと出ている。3部構成で、各50分ずつになっている。

その前に、この集会の主旨が書かれているので、紹介しよう。

〈このところ、理不尽な逮捕、不当な取り調べと勾留、そして強権的な裁判が相次いでいます。「戦争反対」のビラを配布していただけで住居不法侵入で長期勾留・起訴されるような異常事態です。

一見、偶然に見えるこうした出来事も、実は底流でつながっていて、新しい体制作りの一環ではないか、と私たちは考えています。その一方では警察・検察の不祥事が、勇気ある告発と粘り強い取材で次々明らかになっています。北海道警察の裏金疑惑追及などはその典型です。

全国各地でいったい何が起きつつあり、彼らはこの国をどうしようとしているのか。私たちは討議の中からそれを考えてみようと考えています〉

そうか。「底流でつながっている」のか。それで、司会の二木さんに「公安警察の手口」を喋ってくれと言われた。自分で書いた本だから、いくらでも喋れるが、第2部のテーマは、「検察・警察裏金疑惑」だ。〈公安〉は出てこない。これは大谷さんは詳しい。じゃ、大谷さんに僕が聞くことになるのかな、と思った。「いや、はじめ、二人が15分ずつ喋ってもらって、その後、トーク。そして会場からの質問も受ける。それで50分だ」と言う。でも、二人の話がからむのかな、と思った。「司会の二木さんに任せりゃいい

だろう」と大谷さんはさっさと会場に入る。中で聞いている。

(2) 現実の方が「公安の本」よりも進んでる！

だから、打ち合わせもないままに、開会。第1部の反戦ビラの人は、「以前、鈴木さんとは一緒にデモをしました」と言っていた。予備校教師の会が主催したデモらしい。この立川の市民運動は歴史的にも長い。砂川基地反対闘争からの歴史と実績を持っている。「もはや日本の伝統・文化ですね」と言ったら、笑っていた。この裁判で、検察側は、「この中には新左翼過激派もいる。それを立証したい」と言ったが、裁判官は、「そんなことは関係ない」と却下。立派だ。検察もおかしい。「市民運動ではない。中核派系もいる」と言いたかったらしい。しかし、それはない。たとえ、あったとしても、郵便ポストにビラを入れた位で、逮捕し、一年も勾留したことが違法だし、許せない。無罪判決は当然だ。

続いてのJRの人は、組合員をとりかこんで、会社をやめるように強要した、とされて9人が逮捕されて、1年も勾留されていた。さらに、この9人は、「革マルだ」と新聞には書かれた。公安が発表し、新聞は、検証もせずに、そのまま、書いたのだ。

そして、「葛飾ビラ」は共産党だ。区政だよりを配っただけで逮捕された。公党に対するあからさまな弾圧だ。

しかし、3人3様だ。立川は「中核派だ」「過激派だ」とレッテルを貼られて、JRは「革マルだ」と批判され。「葛飾」は、これだけは本当で共産党だ。普通なら同席できない人々（私も含めて）が一同に集まり、打ち合わせをし、報告をしている。それだけ、弾圧が厳しくなり、情け容赦なくなつた。ということなんだろう。

会場の外には、不審な人たちがうろついている。「すぐに分かりますよ。公安ですよ」と参加者は言っている。じゃ、「不審者がいますよ」と110番したらどうか。「お前こそ不審者だ」と逆に言われちゃうかもしないな。

そうそう。「立川ビラ事件」で無罪判決がおりた。ところが、その1週間後、葛飾で共産党の人が逮捕された。「区政だより」をポストに配っていただけなのに。つまり、警察（公安）は、立川に懲りて、少し、慎重にやろう。なんて考えてないんだ。反省が全くない。次から次と、〈事件〉をつくり、逮捕している。ひどい話だ。

さて、第2部が始まった。7:20～8:10だ。まず大谷昭宏さんが、「検察・警察の裏金疑惑」について20分話す。15分の予定だが、話に熱が入って20

分を超えていた。元々は、S（スパイ）を使う力を使つくるために「裏金」が発生したという。表には発表できないからだ。そこから出発して、警察・検察全体が裏金つくりに精を出すようになる。

大谷さんは元は大阪読売新聞の社会部記者だ。サツ回りも長いことやった。だから警察の内情には詳しい。テレ朝の「サンデープロジェクト」でも、この問題は取り上げるといっていた。サンプロのスタッフ、カメラも来ていた。

大谷さんの後は僕が話す。ドロボー、殺人犯を捕まえるのは刑事警察だ。これは、はっきり国民の目に見える。失敗すれば分かるし、幹部が出てきて謝罪する。ところが、公安警察は、闇にかくれて、一切出てこない。そして、全ては「裏金」なのに、全くボロを出さない。又、「自分たちこそが日本を守り、支えている」というエリート意識を持っている。「人殺しやドロボーが捕まらなくとも日本は倒れない。しかし、左右の過激派を野放しにしてたら日本は倒れる」と公言している。つまり、左右の過激派、オウムなどの宗教を自分たち（公安）が取り締まり、逮捕してるから、日本は守られているのだ。そう思っているのだ。思い上がりもはなはだしい。

又、公安はスパイを使い、莫大な予算を使っているが、それは一切公表しない。新左翼や右翼などの〈過激派〉といわれる人々を見張り、スパイを使ってるだけではない。ちゃんと国会に代表を出している公党の共産党にも、盗聴し、スパイを使っている。これはおかしいだろう。

そんな点も本に書いたから、「赤旗」も僕の本を取り上げてくれたのだろう。おかげで、グンと売れて、今や3刷になった。それだけ、公安に対し、「不気味だ」「不安だ」「何をしてるか分からない」と思ってる人が多いのだ。

それに、この本は去年の10月に出した。今まで公安についてまとめて書いたものは、ほとんどない。だから、公安についての最先端の情報だと思っている。ところが、今や、〈現実〉の方が、この本を超えて進んでいる。

たとえば、ガサ入れと逮捕のことだ。両方とも、令状は裁判所が出す。現場の警察が令状を裁判所に請求するわけだ。大体は、請求された通りに令状を出す。でも、さすがに逮捕令状は慎重にやる。慎重にやるが、結果的にはほとんど、出している。

でも、ガサ（家宅捜索）の令状は、よく見もしないで、全て出している。一度でも考えたり、出ししぶったりしたことはない。全て、ポンポンと判を押す。「まア、逮捕と違い、家搜しなんだから、証拠がなければ本人もか

えって疑いが晴れていいだろう」といった感じで出す。左右の事件があると、「こいつららしい」「じゃ、ついでにこいつらの友人も」「その又、友人も…」と、何十人、何百人とガサをする。でも、全て裁判所は判をつく。

…といったことを僕の本の中では書いた。ところが、この日の集会（第一部）でやったように、「逮捕」だって、ポンポンと令状を出している。郵便ポストにビラを入れた位で逮捕し、1年も勾留するのだ。全くもってひどい話だ。

(3) 「早大の宿敵」大谷さんと、今は平和的にトーク

10年前、20年前ならありえない。ビラ配りなんて日常茶飯事だから、警察もとても捕まえようがない。こんなことで捕まえてたら、全国の警察の留置場は一杯になってしまふ。又、こんなことで捕まえたら、「警察国家だ」「戦前よりひどい！」となって、全国で暴動が起ころ、革命が起きるだろう。

ところが今は、運動が少ないから、こんなことを狙い撃ちにされるのだ。「これじゃ、ビラ貼りをしたら、どうなるか分からないな」と立川ビラの人々に言った。「そうですよ」と言っていた。

僕が現役で運動していた頃は、チラシやビラを街で配ったり、戸毎に配布したり…そんなことは全く〈合法〉だった。厳密にいえば、問題はあるのかかもしれないが、「これは言論の自由のうちだ」と皆、思っていた。警察だってそう思っていただろう。

ただし、ビラ（ポスター）貼りは、見付かったら逮捕だ。だから、夜中、必死になって見付からないように貼る。

でも、見付かって逮捕されても、交番に連れて行かれ、朝までかかって調書をとる。「あーあ。一晩ムダにしたよ」なんて言ってた。でも、それ位だ。それでも「重い」と思ったし、警察は我々を弾圧している、と恨んだものだ。

それなのに、今はどうか。ビラ配りだけで1年も勾留される。ビラ貼りを見付かったら、起訴されて、何年間か刑務所に送られるかも分からぬ。ゾッとする。立川反戦ビラの人々、「ビラ貼りなんてやったら、どんな罪になるか、ゾッとします」と言っていた。 そういえば、右も左も、電柱にビラを貼ってるのは、ほとんどない。やはり、こんなことで警察は威圧し、脅しているんだ。

さらに、前に書いたが、立川反戦ビラに「無罪」判決があったと思った

ら、その1週間後には、共産党の人が、郵便ポストにビラを入れただけで逮捕されている。

公安は不思議な所だ。全く、躊躇しない。反省しない。そこが刑事警察と違うところだ。刑事警察ならば、捕まえた犯人が無罪になったら、警察は批判される。なんで「冤罪」をやったんだ。無実の人を捕まえるとは何事か！と。担当者や、上司も責任を問われる。

ところが、公安は違う。何でも、「やりどく」なのだ。そして捕まえれば、無実であれ何であれ、「よくやった」と褒められる。あとで、無罪になると、冤罪と分かろうとかまわない。「過激派を捕まえた」と発表できればいい。それしか考えてない。

去年、オウムの人間が国松元警察庁長官狙撃事件の容疑者として、逮捕された。今頃、何か新しい証拠があったのかと思ったら何もない。逮捕はしたものの、起訴できずに釈放した。公安の大黒星のはずだ。ところが、捕まえた公安は皆、出世している。「よくやった」「ここまでオウムのイメージを悪くした！」といって、内部で褒められているのだ。「起訴はできなかったが、やはりオウムがからんでいるようだ」「だから警察も逮捕したのだろう」「オウムは恐い」…と。そういうイメージを国民に与えた。それだけで成功だと思っているのだ。

だから、立川反戦ビラも「無罪」になろうと関係ない。「よくぞ捕まえた」と内部では、褒められ、出世なのだ。

昔、僕は、捜索令状を破いたという冤罪で逮捕され、23日間もぶち込まれた。証拠不十分で不起訴だ。本当は、「証拠不十分」ではない。公安が僕の手から奪いとり、そいつが破いたのだ。犯人は公安だ。ところが、そいつは罰せられない。それどころか、「よくやった」ということで、その後、公安三課長に出世している。

…ともかく、僕の本よりも〈現実〉の方が進み、ひどくなっている。という話をした。大谷さんと二人が喋って、その後、トーク。大谷さんは、「学生時代、鈴木さんとは早大で敵味方に分かれて闘っていました」と話す。そうなんだ。大谷さんは早大で社青同解放派の闘士だった。このセクトは今は革労協といって、新左翼の中で最も過激なセクトになってしまった。

大学の時、僕は右翼学生だったから、大谷さんとはよく、殴り合いをしていたし、教育学部のバリケード解除の時は、大谷さんたちは1度は押し返されたのに、舗道の石を碎いて、我々に投げつけてきた。バタバタと仲間は倒れた。僕も投石を受け、ほうほうのいで逃げた。全くひどいやつらだと

思った。

そんな超過激派だった人だ。大谷さんは。「今は、公安に尾行されてないの?」と聞いたら、「いやな人とトークするなー」と言っていた。でも、あとは、仲良く、楽しくトークをした。でも、今だに公安にマークされてたら面白いよね。そのマークし尾行する後ろから「サンデー・プロジェクト」のスタッフがカメラで追う。それをテレビで流す。ぜひ、やってもらいたいね。

「そうそう。喜納昌吉さんと会ったら、“民主党が政権をとったら公安は廃止します”と言ってた」と報告した。一年生議員の喜納さんがやれるのかどうか分からぬが、僕としては大いに期待している。

二人のトークのあと、会場から質問を受けた。そして、終わって10分間の休憩。その時、「赤旗」の記者が二人も来ていて挨拶された。「赤旗のことを喋ってもらってありがとうございます」と。第1部で共産党の区議会議員が喋ったから、取材に来てたのか。ともかく、嬉しかった。「赤旗」に取り上げてもらって本当にありがとうございましたと礼を言った。

そしたら、喜納昌吉さんの秘書も来てたんだね。「喜納のことを取り上げてもらいありがとうございました」と言われた。こちらこそ、喜納さんの発言には励まされたし、期待してるんだ。

そして、第3部が始まる。魚住昭さん(ジャーナリスト)と三井環さんのトーク。「検察腐敗と国策捜査」。実は、これが、今日のメインだ。三井さんは元大阪高検公安部長だ。超エリートだ。だが「元」だ。皆も知っているように、三井さんは検察の裏金作りを告発しようとしていた。ところが、その直前に「口封じ逮捕」された。1年も勾留されていた。03年3月釈放。そのことを書いた『告発! 検察裏ガネ作り』(光文社)は3万部も売れている。まさか自分が逮捕されるとは夢にも思わなかつたようだ。朝日の一面で喋り、国会で民主党の菅直人が質問し、本人が証人喚問で国会に出て証言する。そして、その場で検察のバッジを外してやめる。と自分なりのシナリオを作っていた。ところが、その直前に逮捕されてしまった。その悔しさをこの日は語っていた。そして、検察の謀略についても詳しく証言していた。この話は又、後で詳しく書こう。

【だいありー】

[1] 2月13日(日) 1時から骨法道場で「武士道セミナー」。堀辺正史先生の講演を聞く。塩見孝也さん(元赤軍派議長)も聞きにきて、終わってから先生と一緒に食事する。二人が会うのは二度目。「革命と武士道」について

二人は熱く語り合っていた。どっかの雑誌で対談が出来ないものか、と思っている。もったいない。

[2] 2月14日(月) 6:30から文京シビックホールで、「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」のシンポジウム。本文に詳しく書いた。

[3] 2月15日(火) ジャナ専の授業。今年度の最後だ。レポートを出してもらう。ライター科（時事問題）は、「愛国心について」。文芸科（現代史）は、「戦後60年で失ったもの。得たもの」。

[4] 2月16日(水) 雑誌の対談

[5] 2月17日(木) 河合塾コスモの授業。

[6] 2月18日(金) 3:00から三井環さん（元大阪高検公安部長）と対談。次の「創」に載る予定。

【お知らせ】

[1] 2月24日(木) 7:00から一水会フォーラム。高田馬場シチズンプラザで、城内康伸氏（前東京新聞ソウル支局長）で「北朝鮮とシルミド--拉致事件解決への展望と南北工作の実態」。ぜひ、おこし下さい。

[2] 2月28日(月) 6:30から、「ペンの森」で私が喋ります。「公安警察の手口」についてです。

[3] 3月9日(水) 7時から高田馬場のライブ塾。立松和平さん（作家）と。「連合赤軍事件と『光の雨』」。

[4] 3月11日(金) 6:00から静岡のスナック「バロン」で、私が喋ります。「公安と連合赤軍事件」です。バロンは元連合赤軍兵士の植垣さんがやっている店です。この週は「連赤ウイーク」です。その前に、「連赤カゼ」を治さんことには…。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年2月28日

あるマザコン作家の話。かな？

(1)見たことないよな。こんな変なインタビュー

奇妙なインタビューがあった。えっ、一体これは何なんだ、と思った。だって、インタビューなのにお母さんと一緒にいた。これじゃ、マザコン作家じゃないか。本人が一人で来ればいいだろう。それなのに、心配なのか、母親がくっついてくる。やだねーと思った。

昔、景山民夫がインタビューされた時に、奥さんがついてきた。そしたら、インタビューする人（野坂昭如だったかな）に馬鹿にされていた。「何だ。一人じゃこわいから、奥さんに付いてきてもらったのか」と。

でも、この奥さんは、マネージャーなんだ。だから付いてきたんだ。小林よしのりさんだって、女性のマネージャーはいつも付いてくる。同じことだ。でも、去年の3月、「朝まで生テレビ」の「連合赤軍とオウム」に出た時は、一人で来てたよな。秋に、骨法道場で堀辺先生と小林さんが対談した時には秘書が来ていた。

だから、秘書ならいいんだよ。たとえ奥さんであろうと。それに「秘書」である限り、対談やインタビューに割って入ることはない。お母さんが「秘書」ってことはまアないけど。子供のタレントと違うんだから。作家や評論家ならありえない。

でも、この作家にはお母さんが同伴してきちよる。そして、一緒にインタビューに口を出している。子供の作家だからだろうって？ ちゃいまんねん。作家は27才。若いけど、売れっ子の青年作家だ。子供じゃない。それでも母親が付いてきた。

まア、タイトルが、「息子の文才を伸ばした母親の理解と愛情」とある。このテーマで、このインタビューをやろうと、先に決まってたんだろうね。

だから、編集部は、「ぜひ、お母さんと一緒に」とお願いしたんだろう。でも、いくらお願いされても、普通の作家なら断わるよ。だって、今までこんな変な、マザコン的なインタビューなんて見たこともない。聞いたこともない。

「どうしても母の話を聞きたいんなら、別に取材しなさいよ」と言うだろ。いや、その前に、「母親と一緒になんて、お断わりします」と言うだろ。だって、これじゃまるで小学校の生徒みたいじゃないか。バカな作家だ。

…と思ったんですよ。最初、私も。でも読んだんですよ。ノルマだから。今、「決定版・三島由紀夫全集」（新潮社）に挑戦して書いて書いたけど、そこにあったんですよ。この奇妙なインタビューは。そう、三島由紀夫ですよ。母親（平岡倭文重さん）と一緒にインタビューを受けてる27才の作家は。「全集」は43巻ある。後ろから1巻ずつ読んでいる。今、35巻まで進攻した。その中の「第39巻・対談1」に入ってたんだ。

初出を見たら、「主婦の友」昭和27年12月号となっていた。三島は大正15年生まれで昭和元年とかぶってる。だから、27才だ。新進作家だ。それなのに、ニコニコとして、嬉しそうに、母親に手を引かれて（そんな感じがしたんですよ。私には）、出席している。この母子にインタビューするのは田村秋子だ。「主婦の友」編集部かと思ったら違う。文学座の女優さんだ。ともかく、こんな風にして始まるんだ。

（三島）男の子と遊ぶと乱暴になっていけない、というお祖母さんの意見で、女の子とばかり遊ばされました（笑）。お陰で、女の子って、ずいぶん意地の悪いものだってことを身に染みて知りましたよ（笑）。

へエー、そうだったんか。他の対談やインタビューじゃ、こんなことを喋っていないよね。お母さんと一緒にリラックスしてるので。子供の気分に戻ってんのか。ともかく、女の子って意地悪だって分かったんで、大人になってからも、女性との恋愛はないんですね。多分、ほとんどないでしょう。やはり子供の時は別々に育てて、「異性への憧れ」を育てるべきでしょうね。次いで、母親がこんなことを言う。

（母）中学の終わり頃からやっと席順がよくなって、高等科を卒業するときは、恩賜の時計をいただいたのね。（三島）精工舎の安物さ（笑）

席順というのは成績の順なんでせう。息子の自慢をする親馬鹿ですね。すると、息子はテレちゃって、あんなの、セイコーの安物だよ、と言っちゃう。ほほえましいですね。くやしいですね。僕も言ってみたいね。こんなこ

と。

三島は作家になることを父親には反対されていた。ひそかに書いてると、父親が探し出して、燃やしてしまう。普通、そこまでやられたら、家出しちゃうよね。あるいは父親を消してしまうとか。でも、三島少年は耐えてたんですね。そして、破れたり燃やされる前に母親にだけは見せてたそうな。

(三島) あの自分から、おふくろには何から何まで読んでもらわないと、気分が落ち着かなかった。

(母) とにかく私に読ませたかったのね。ですからその時分から、この人と私の間には何の秘密もございません。この頃、あるの? (と三島さんへ)

(三島) ないよ。何もない。

なんだ、このベタベタしたムードは。恋人同士みたいじゃないか。と思っちゃったね。気色悪い。後半で、田村は三島の女性観を聞いてる。三島はまだ独身だったんだね。

(田村) 三島さんは、お嫁さんにはどういう方をお選びになりますの。

(三島) 丸い顔の人が好きなんです。僕が長いから(笑)。才智が表に出なくて、ぼーっとしていて、それで要所要所にはちゃんと気の付く人…そんなのないかな(笑)。時期は僕が40になったら。

そして、このインタビューは、こうして終わる。終わり方が又、奇妙なんだ。お母さんのインタビューで終わる。主人公は三島だろうが…。

(田村) 最後に一つ、三島さんに恋人は?

(母) それがあるらしいですの(三島さん、黙して語らず。微笑。遠くに郊外電車の音--)

なんなんだ。このラストは。芝居のト書きじゃないんだから、「遠くに郊外電車の音」はねえだろう。と、ムツとしましたね、わたししゃ。それに、恋人が、「私の他に好きな人がいるの?」って聞いてる感じじゃねえか。あーあ。気色悪い。こんなインタビュー、読まなきゃよかったです。

と思った。いや、思ったわけじゃない。これだけ紹介したら、ただの「マザコン作家」のアホなインタビューで、面白くも何ともない。気色悪くて、ふざけんな、と言いたくなる。でも、実はすごいことが言われてたんです。中ほどで。それで、私はのけぞりました。そして、やっぱ三島は凄いなと思いました。実は、こんなエピソードが紹介されてたんです。いえね、このエピソードそのものは僕も何十回も読んでたから知つりました。でも、このあの父親の反応に感動したとです。

(2) 「負ける勇気」って、あるんですね。ホント

三島は、東大を出て大蔵省に勤めたんです。しかし、それだけでは満足せずに、ひそかに小説を書いてたんです。毎日、毎日、夜おそくまで。時には朝まで書いていた。これじゃ、父親が怒るのも当然だ。東大を出て、大蔵省に入ったんだ。出世コースに乗っている。人生は思うがままだ。そして、辞めてからも、国会議員になれるかもしれない。それなのに、何の不満があつて、隠れて小説なんか書くんだ。父親の怒りも当然ですね。しかし…。

(母) ええ、雨の降る日でした。この人、長靴をはいて、役所へ出かけて行つたんです。ところが、渋谷の駅でホームから線路に辺り落ちたんですって。電車が来なかつたから、落ちただけですみましたけど…。明らかに睡眠不足のせいでござりますわ。夜帰ってきたこの人から、その話を主人も私も聞きました。その翌朝、この人と私が主人に呼ばれまして…。

ここからが凄いんだ。あたしゃ、泣けてきましたね。

(母) 主人が申しました。

「ここまできては、もう理論闘争ではない。生命（いのち）の問題だ。俺は無条件降伏する。

今日からは、全力を尽してお前を助けてやる。なる以上は一流の作家になれ。これだけ俺が踏みつけ叩きつけても、なおかつ突き破って作家になろうとするなら、或はものになるかも痴れぬ」と申してくれました。ほんとうに、そのときは…私は…。

(三島) 嬉しかったな。実に嬉しかった。（田村さん、眼をうるませて、じっと聞いておいでになる）家はみんなちょっぴり皮肉屋だから、泣きはしなかったけれど（とお母さんへ）。

いやー、凄いですね。お父さんが。それまでは作家になるのを邪魔ばかりしていた憎い父親と思ってましたが…。「もう理論闘争ではない」というのが凄いですね。「大蔵省を辞めて作家になるべきか」「いや、それは勿体ない」「大体、食っていけないじゃないか」…といった理論闘争が父子の間では毎日のようになされてたんでしょうね。

でも、線路に落ちて、死にそうだったという話を聞いて、決心するんです。あれこれ言ってる時じゃない。「息子の生命」が一番大事だと。いくら大蔵省で出世しても、死んでしまってはたまらない。その頭の切り換えが早いですね。そして、息子に向かって、

「俺は無条件降伏する」

なかなか言えない言葉ですよ。俺は負けたなんて。潔いというか、清々しさを感じましたね。人と論争して、論破するのは、本当は簡単なんです。気分もいいのです。

でも、「負けを認める勇気」。これは凄いですね。「負けを認める強さ」と言ってもいいでしょう。このお父さんが「負け」を認めてくれたからこそ、後の大作家・三島由紀夫は誕生したんですよ。

いい話でしたね。最後に蛇足。ホームに落ちたというので、大変だったでせう。救急車が来たり、駅員が来たり、大騒ぎになったんでしょうね。とても大蔵省に出勤するどころじゃなかったんでしょうね。

と思ったら、すぐに、出勤してるんですね。そして、夕方まで平然と仕事をして。夜帰ってきてから、「こんなことがあったよ」と三島は母に報告した。別に、事故証明書を駅からもらってきたわけじゃない。じゃ、もしかしたら…。だって作家なんだから…。

なんて考えちゃ、いけないんですよね。やはり、負けを認めた偉大な父に感動し、涙を流すべきでしょうね。オワリ。

(3) 『新右翼』（彩流社）の新々増補版が出ますよ

【だいありー】

[1] 2月19日(土) 「連赤カゼ」が治らないで、一日中、寝ちりました。
[2] 2月20日(日) 4時から埼玉スーパーアリーナへ。PRIDEを見に行きました。「ゴング格闘技」の取材です。今月の「ゴン格」の連載は靖国神社の「奉納プロレス」の話を書きました。
[3] 2月21日(月) 『新右翼』（彩流社）の新々増補版を出すんで、新しく30枚書き下した。そして年表の追加を16枚書いた。他に「あとがき」やら、「略歴、著書」の直しやらで、大変でした。本当は15日が〆切だったのに、「連赤カゼ」のせいで延ばしてもらい、やっとこの日に速達で送りました。夜は、志の輔さんの落語を聞きに行きました。

[4] 2月22日(火) 「論座」のアンケートの原稿を校正。「創」のコラムの校正。それに三井環さんとの対談のゲラも上がってきたので校正。なかなか面白い。特に「警察の公安」と「検察の公安」の違いなんて知らなかった。詳しく聞いた。又、今回、検察の裏金を暴露しようとして、「口封じ逮捕」された。その実際の手口を詳しく聞いた。三井さんも心を開いて、話してくれた。「こんなことまで喋って大丈夫なの?」という話もあった。「創」は3月6日発売ですから、ぜひ読んでみて下さい。

それと、私のコラムでは、「天皇映画」について書きました。ロシアのソクーロフ監督が日本の昭和天皇を主人公にした映画を作ったんです。新聞やテレビでも報道されたんで知ってる人も多いでしょう。「ソンツェ（太陽）」という映画です。

実は、5年前にソクーロフ監督は日本に来たんです。そして、「こういう映画を作りたいんだが…」と日本の学者、文化人、映画関係者に聞いたんです。その中に私も入っていたんです。全員、反対したそうです。「危ないからやめろ。命の保障はないぞ！」と皆、言つたらしいです。僕だけが賛成したんですね。「ただ、この二点だけは改めたらいい」と企画書に注文をつけました。その時の話を含めて、ソクーロフ監督のこと、映画のことを書いています。読んでみて下さい。

[5] 2月23日(水) 一日中、月刊「タイムス」の原稿を書いた。「三島由紀夫と野村秋介」の第8回目だ。三島の和歌と俳句。そして野村さんの俳句。さらに、連合赤軍の坂口弘の短歌。そして革マル派の黒田寛一氏の短歌などについて書きました。今まで余り知られてない視点から書いてみました。

三島の「全集」第37巻は「詩歌」になってます。700ページの一冊が全部、詩歌です。えっ、三島は詩歌なんてあったの？と思うかもしれません、あったんですね。そこが、「全集」の凄さです。子供の時から、16冊のノートに、詩、訳詩、短歌、俳句を書きとめてたんです。

短歌は、全生涯で45首作ってます。そのうち二首が辞世です。俳句は11首作ってます。詩、訳詩は511篇あります。そのほとんどが本には出ていません。「全集」ではじめて紹介されるものです。だって、6才や7才に書いた詩も載っている。こんななんじゃ、とても単行本にも文庫にも入らない。「全集」だからこそ入ったんだ。そして僕らも初めて見ることが出来る。

それらのことも含めて、月刊「タイムス」には書きました。そこには書かなかったけど、三島の「詩」の中で、一番有名なのは「凶（まが）ごと」という詩です。15才の時に作ってます。多分、皆さんも読んだことがあるでせう。こんな詩です。

わたくしは 夕な夕な
窓に立ち 椿事（ちんじ）を待った
兇変のだう悪な砂塵（さじん）が
夜の虹のやうに 町並の
むかうから おしよせてくるのを
なにやら、暗示的な詩ですよね。

[6] 2月24日(木) 図書館で勉強しました。夜は一水会フォーラムに行きました。城内康伸氏（前東京新聞ソウル支局長）で、北朝鮮の話でした。満員でした。とても勉強になりました。

[7] 2月25日(金) 昼から河合塾コスモの会議に出ました。夜は、ニュースペーパーを見ました。

[8] 2月26日(土) 母の三回忌で、仙台に帰ってきました。

【お知らせ】

[1] 3月9日(水) 7時から高田馬場のライブ塾です。立松和平さん（作家）と。「連合赤軍と『光の雨』」です。立松さんは、『光の雨』（新潮文庫）で連合赤軍について書いてます。又、これを基にして高橋伴明監督が映画『光の雨』を作ります。なかなかない機会ですので、立松さんの話を、ぜひ聞いて下さい。

[2] 3月11日(金) 6:00から静岡のスナック「バロン」で話をします。

[3] 4月4日(月) ロフトで「創」プロデュースのイベントです。私も出る予定です。

[4] 4月以降、ライブ塾は以下です。

4月13日(水) 朝倉喬司「日本の自殺」

5月11日(水) 大塚英志「どうする憲法。どうする天皇制」

【附録】

2月14日(月) 文京シビックセンターで行なわれたシンポジウム「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」の様子が、「赤旗」（2月15日付）と「社会新報」（2月25日付）に載っていました。私のところだけ紹介しませう。

[1] <ジャーナリストの大谷昭宏氏と評論家・鈴木邦男氏が公安警察の実態について発言。大谷氏は、警察が裏金問題で身内を逮捕しなかったことを紹介しながら、「警察は、自分がないといえば、事件ではなく、『事件だ』といえば無から有を生じると思っている。根本的な体質に問題がある。国民が声を上げなくてはいけない」と指摘しました。

鈴木氏は、「公安は（共産党対策に）一番予算を多くとって、徹底的にやっている。共産党とは考えが違うがこれはおかしい。公安警察はいらない」と話しました。> 「赤旗」（2月15日付）

<第二部では、ジャーナリストの大谷昭宏さんと鈴木邦さんが対談した。大谷さんは北海道警の裏金問題に触れ、「北海道新聞は裏金問題の追及記事で三つの賞を受賞した。それに比べて朝日・毎日・読売は何をしているのか」と語り、道警を除く大新聞を批判した。

鈴木さんはかつて同庁公安部の警察官から、「今、共産党本部に突っ込めば國士として逮捕され、名を揚げられる」とテロを誘われた体験を披露し、「左翼取り締まり」などを名目に予算と人材を独占する同庁公安部を、もはやなくすべきだと訴えた〉「社会新報」（2月23日付）

[2] 2月20日、『格闘技＆プロレス・迷宮ファイル』（芸文社）が発売されました。「私が暴露本を出した理由」を私は書いてます。ちょっと古い話ですが、88年に出した『UWF革命』（エスエル出版会）をめぐる大騒動について書きました。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年3月7日

これは尾崎士郎の「刺客列伝」だね

(1)康芳夫さんと「家畜人ヤブー」の芝居で会った

だから、1月13日(木)なんですよ。大塚の萬（よろず）スタジオに行ったんです。月蝕歌劇団の「家畜人ヤブー」を観る為です。数年前も観たけど、配役も変わり、新鮮でよかったです。終わってから、打ち上げ（飲み会）について行った。役者たちが沢山いた。月蝕の代表の高取英さん、それに秋山祐徳太子さん（元都知事候補）、それに康芳夫さんもいた。



左から秋山祐徳太子氏、高取英氏、康芳夫氏、鈴木

高取さんは元は寺山修司と一緒に芝居をやってた。『寺山修司論』も書いてるし、ここの月蝕歌劇団が一番、寺山の芝居を正統に受け継いでいる、と僕は思う。

秋山さんは、芸術家だ。昔は学生運動をやって暴れていた。都知事選にも出た。敗れた。美濃部が当選した時かな。石原慎太郎も出て敗れている。その後は、日活ロマンポルノにも出ている。畠中葉子と一緒に出てた。タイトルは忘れた。「未亡人下宿。前も貸します。後ろも貸します」だったかな。

さて、康芳夫さんだ。この人は昔から知ってる。でも仕事は何だろう。呼

び屋さんかな。モハメッド・アリを呼んで猪木と闘わせた。人間か猿か分からん「オリバー君」を呼んだ。石原慎太郎を隊長にして、「ネッシー」を探しに行った。そんなことをしてる。スケールの大きい人だ。

三島由紀夫とも親しかった。沼正三の「家畜人ヤプー」を三島が絶賛していた。そして、三島に頼まれて、この本を出版したのが康さんだ。又、康さんは当時、出版社をやっていた。そこに森田必勝がバイトしていた。他の「楯の会」の人間も、金がなくなると、よくバイトに来てたそうだ。（そのことは昔、「タコペ」に書いた）。

この康さんは、文壇にも顔が利く。実は、島田雅彦、福田和也、中沢新一を僕に紹介してくれたのも、この康さんだ。福田和也がまだフランスに留学してた頃から、「この男は日本に帰ってきたら、大物になる」と太鼓判を押していた。それから帰国した福田は、あれよあれよという間に、本当に第一級の評論家になった。康さんは人を見る目がある人だ。

僕と会う時は、いつも飲んでいる。いつも酔っている。じゃ、いつ、本なんか読むんだろうと思うが、国内外の小説、評論をよく読んでいる。

そう、あれは、数年前だったな。尾崎士郎の大河小説『人生劇場』を読破した時のことだった。『人生劇場』は、新潮文庫で全11巻ある。「ある」というよりも、「あった」といった方が正しいかな。だって、「青春篇」しか今は無いんだ。他は絶版だ。刷る気もないらしい。だから、古本屋を探し歩いたり、ネットで探したりして、大変な苦労をして、11巻を全て買い求めた。

今、パソコンで探したが、このHPの02年12月9日号で、その時の苦労話を書いちょる。

「探し続けて40年。やっと見つけた。読破した。大河小説『人生劇場』11巻！」

と、手放しで喜びを表現している。

全11巻のタイトルが又、いい。

青春篇（上）、青春篇（下）、愛欲篇（上）、愛欲篇（下）、残侠篇（上）、残侠篇（下）、風雲篇（上）、風雲篇（下）、離想篇、夢想篇、望郷篇、だ。

これで11巻だ。青春篇と残侠篇は映画にもなっている。でも、小説としてでてるのは「青春篇」だけだ。それで必死で探した。1冊ずつやっと見つけたり、高いものも買ったりして、やっと揃えて読んだ。「愛欲篇」なんて、日本に何冊かしかないとかで、1冊2万円だった。2万円も出したら新宿で、

本物の〈愛欲〉を買えるよ。と思いながらも、小説の「愛欲篇」を買って読んだ。

『人生劇場』になぜ、そんなにこだわるかといえば、これは早大生の話なんだ。早稲田に入り、学生運動に巻き込まれ、闘いがあり、ストライキがあり、ボクシングがあり、愛欲があり…と。でも、昔々の早稲田の話だ。

このあと『人生劇場』に刺激されて、五木寛之は、『青春の門』（講談社文庫）を書いた。これも早稲田の男が主人公だ。門とは早稲田の門だ。そして、もう一つ、あの門だ（と思う）。

こっちは、今のところ第6巻まで出ている。

筑豊篇、自立篇、放浪篇、墮落篇、望郷篇、再起篇、だ。

これで終わったのか。まだ続くんだけど中途でやめたのか。分からん。

私も早大の大先輩、二人にならって、『がんばれ！新左翼』（エスエル出版会）の各巻に名前をつけて出版した。

第1巻 立志篇

第2巻 激闘篇

第3巻 望郷篇

第4巻 墮落篇 …だ。

まてよ。第4巻はまだ本になってないか。どっかの雑誌に連載したら、それが潰れてしまった。だから、そのままだ。

この次は、「地獄篇」「強奪篇」「絞殺篇」「回天篇」…と続く予定だったのに。

(2) 「赤穂浪士よりも来島恒喜の方が偉い」と大隈重信は言った

早大生ならば、又、卒業生ならば、『人生劇場』と『青春の門』は全巻読んでるはずだ。と私は思っていた。自分のルーツだし、アイデンティティだ。ところが、聞いてみると読破した奴はいない。私くらいだ。中には早稲田を創ったのが大隈重信だと知らない人もいる。こんな奴は早大に入れんなよ。

そして、ある時、康芳夫さんに自慢してやった。「ヤブー」を見に行った前の時だと思うよ。私は全巻読んだんですよ！と。そしたら、「ほう、そうですか」。と、それで終わりだ。エッ、と思った。でも、その後、各巻について、解説をしてくれる。スンゲー。ちゃんと読んでるよ。さらに、こう言うんだわさ。

「尾崎士郎の『人生劇場』を読む位だから、彼の『小説早稲田大学』も当

然読んでるよね」

「えっ、知りません。そんなのあるんですか」と私。

「それと、『天皇機関説』。これも傑作だね。アレッ？ 読んでないの？」

さらに、『大逆事件』もいいよ、と言う。又、「人生劇場」には「続」があるということも教えられた。

『人生劇場』11巻を読んだだけで舞い上がっちゃいかんよ。読書道は厳しいもんだから…と教えられたような気がした。

それからですよ。その本を探しましたよ。古本屋に行って。又、ネットで検索して。そして、それら全てを買って、全てを読んだとですよ。

では、尾崎士郎の『小説 早稲田大学』だ。文芸春秋新社刊になっている。昭和28年発行。僕が10才の時だ。まだ僕は、秋田県湯沢市の小学校の生徒だった。早稲田なんて名前も知らんかったやろう。これは、ちゃんとした単行本だ。定価は180円。でも、神田の古本屋で2500円で売っていた。

本の帯には、「東映映画化」と書かれている。こんな題の映画があったんだろうか。知らん。さらに、こう書かれている。

〈祖父から父へ、父から子へと受け継がれる三代の理想--。早稲田大学七十年の歴史は、とりも直さず、日本人の青春の姿を象徴する。本書は読者の夢をかきたて、人生の生き甲斐を感じさせる著者久々の野心大作である〉

帯の文章も、今とは違う。「生甲斐」を感じるために読め！といってるようだ。又、早稲田は「日本人の青春」だそうな。

でも、僕は読んでいて、『人生劇場』の「エピソード」という感じがした。ところがだ。中ほどまで読んだら、突然、「右翼テロリスト」が出てくる。突然じゃないな。大隈重信外務大臣は右翼の来島恒喜（くるしま・つねき）に爆弾を投げつけられ、重傷を負い、片足を失う。その事件が出ている。

〈爆弾を投げた青年が玄洋社員で、福岡から藩閥政府倒壊の志を抱いて上京してきた来島恒喜であることは、すぐにわかった。彼には煽動者もなければ連類者もなく、遺書らしいものさへも懐に忍ばせてはゐなかつた。

しかし、この凶変によって、条約改正問題はまったく立ち流れとなり、二年間に及んだ大隈の努力も水泡に帰した〉

東映映画で「日本暗殺秘録」というのがある。

この中でも、来島は出てくる。確か、吉田輝男だったかな。演じていた。

山高帽をかぶり、フロックコートを着て、外務省の前に立っている。誰が見たって、外務省の役人が、待ち合わせをしてる、としか見えない。落ち着いている。そして、大隈が近づいた時に、ハンカチにくるんだものを投げた。爆弾だ。たちまち大爆発が起こり、見るまに、馬車の周囲は濛々と立ちのぼる白煙にとざされてしまった。

警官が駆けつけた。ここからが凄い。来島は逃げもしないで、そこに悠然と立っている。

〈人品卑しからぬ上に、平然と落ちついてゐる男を見て、これが犯人だと思はなかつたらしい。巡査は狼狽のあまり、咳き込むやうな早口で、

「大臣は御無事でしたか？」

と問ひかけた。すると、その男はすぐ、

「御無事でした」

と言ひながら官邸のある坂の方角をゆびさした。

「犯人はどこへ行きました？」

たたみかけて問ひかける巡査の言葉の終わらぬうちに、その男は、

「あっちです。----虎の門の方角です」

と、落ちついた声で答へた。巡査は彼を外務省の官吏だと思ったらしい。くるりと向きを変へるが早いか濠に沿った道を一散に駆けだした〉

こんなに落ちついた犯人はない。あわてふためく巡査に、「まあまあ、落ちついて」といわんばかりに「犯人はあっちに逃げた」と言う。巡査はそっちに走る。あとは犯人は悠々とその場から去ればいい。完全犯罪だ。でも、テロリストはそうはしなかった。一人になると何と…。

〈石橋の上に立ってゐた青年は突嗟に上衣のポケットに右手を差し込むが早いか、白鞘の短刀を抜いて一気に頸動脈をふかく突き刺し、地にバッタリと倒れた〉

自決したのだ。何と見事な自決か。

安田財閥の安田善次郎を刺殺した朝日平吾も、安田を刺殺した直後、その

場で自決している。凄い。テロリストの鑑だ。映画「日本暗殺秘録」では、この朝日平吾を菅原文太が演じていた。戦後になってからは、社会党委員長を刺殺した山口二矢だ。この三人が、印象に残る。日本の三大テロリストかもしだれない。

いや、テロリストは他にもいる。血盟団の2人もそうだ。しかし、その場で逮捕され、生きて獄を出た。一人は小沼正で、僕も会ったことがある。もう一人は菱沼五郎で、後に茨城県の県会議員になる。人さまざまだ。血盟団のこの二人も、本当なら、テロ決行後、その場で自決したかったのかもしれない。しかし、大勢の人のいる所で決行したのだ。すぐに警察や、居合わせた民衆に取り押さえられた。

山口二矢も大衆の面前でテロを決行し、捕まったが、獄で自決した。他にもそういうテロリストはいる。しかし、テロを行い、その場で自決したのは、来島恒喜と朝日平吾くらいだろう。

テロリストも凄いが、そこまでテロリストを近寄らせた二人も偉い。と、最近は思う。このことは松崎明さんとの対談『鬼の闘論』（創出版）の中でも言った。二人とも、護衛もつけないで、「やるならやれ」という感じで、自分の命など捨ててかかっていた。それは偉い。

安田善次郎は、朝日平吾と自宅で二人きりでいる時に殺された。つまり、右翼だと分かっていて、自宅に上げて話を聞いていたのだ。これも凄い。

安田はただの守銭奴ではない。東大に莫大なお金を寄付した。東大はそれを記念して講堂を建てた。「安田講堂」がそれだ。後に、東大全共闘と機動隊が闘うことになる、あの安田講堂だ。又、日比谷公会堂も、確か、安田が寄付して建てたと思う。

来島と朝日は、相手を殺し、自分もその場で死んだ。テロリストとしては立派であり潔いと書いた。しかし、来島は実は、大隈を殺してはいなかつた。「殺した」と思って自決したのか。いや、確かめてもしないし、とどめも差していない。たとえ、どんな結果になろうとも、決行後、自分は自決する。そう決めていたのだろう。

(3) 普通言えないね。自分を襲った刺客を絶讚したんだ。大隈も中岡も

大隈は重傷を負った。しかし、足を切断しただけで助かった。だが、悔しかっただろう。必死になって条約改正をやってきたのに、これで全てはパーになった。又、足を吹っ飛ばされて、これから後は自由に歩くこともままならぬ。犯人に対し、さぞや恨み、憎んだことだろう。

…と思っていた。ところが違うんだ。そこが大隈の偉いところだが…。自分の足を吹っ飛ばしたテロリストを認め、称賛さえしてるので。

1年後、傷が快癒した大隈を慰労する会が開かれた。黒田内閣が総辞職し、大隈も大臣をやめていた。松葉杖をつきながら大隈は出席した。東京専門学校（早稲田大学の前身）の講堂で、大隈は事件のことを話した。

〈彼は邸宅から運ばせてきた安楽椅子によりかかり、始終微笑を口に湛へながら、そのときの思ひ出を、ゆるやかな例の口調で語りつづけた。〉

それからの話が又、凄い。大隈が来島を「認めていた」という話は前にも聞いたことがあったが、「やせ我慢」だと思っていた。あるいは、「あそこまでやって、自決した。彼もあわれだ」という気持ちかと思った。しかし、違う。そんな消極的なものではない。「小説」にはなっているが、この部分は、全て、真実だと思う。大隈の言葉を紹介しよう。少し長いが。いい言葉だ。

〈「吾輩に爆弾を投げた来島も、愛すべきやつぢゃった。彼は吾輩の倒れるのを見て目的を達したと思ったらしい。哀れなやつぢゃ。」

しかし、吾輩は彼を愛する。彼は爆弾を投げると同時に短刀をぬいて自刃した。来島の最後は赤穂浪士の最後よりもすぐれてゐる。たしかにえらい。彼は人を殺して自分だけが生きようなどといふケチな料簡は持てゐなかった。赤穂浪士は不俱戴天の仇である吉良上野の首級を挙げるとすぐに何故吉良邸で割腹しなかつたか。その動機においては赤穂浪士と来島とは天地霄壤の相違があるが、その結果においては来島の方が天晴れである。

大久保を殞した島田一郎のごときは非凡な豪傑だったさうであるが、現場では腹を切らないで縲縄の恥かしめをうけ刑場の露と消えたのは見苦しき最後である。そこへくると来島というやつは実に眼先きの見えた恥巧なやつぢゃった。吾輩を傷つけるために、わざわざ外務省外の狭いところを選んだごときは馬鹿では到底出来ぬ芸当ではないか」〉

自分に爆弾を投げた来島を、ここまで絶讃している。「赤穂浪士よりも立派だ」と言い切っている。ここまで言われたら自決した来島も本望だろう。

あるいは、来島を支援した右翼の人よりも、狙われた大隈の方が、来島の心を理解していたのかもしれない。

このあと大隈の、「なう、坪内君」といって、小説家の坪内逍遙に語りかける。

〈「君は小説家だから、よく覚えておく方がいい。ああいう狭い道を通るときには厭でも馬車を徐行させなければならんからな。----- あそこに眼をつけたところがなかなかいい。 吾輩はあいつのために片足を奪はれたが、東京専門学校のあるかぎり、吾輩の足のかけ代へは何本でもある。しかし、なかなか可愛いところのあるおもしろいやつぢゃった」〉

感動的な小説だったな、と思った。もしかしたら、康芳夫さんは、この部分を僕に読ませたくて、薦めたのかもしれない。『大逆事件』『天皇機関説』もよかったです。又、いつか紹介しよう。そうそう。この本には、最後に『天皇機関説』と『人生劇場』の広告が出ていた。その文章が、いい。今とは違う。

〈『天皇機関説』…真理と自由を護る老碩学の運命を浮彫りにしつつ、遂に我国が破滅の淵に顛落するに至った悲劇を、極秘の資料を駆使して描く野心作〉

〈『人生劇場』 この小説の誕生や存在には不思議な光芒が搖曳してゐる。…実に我が国では驚異に値する、長編小説らしい。まことの大小説である。

----川端康成氏評

天空にのぼる青春無染のこの人間讃歌！日本人の夢がここに実る〉

「青春無染」という言葉はいいね。初めて知ったけど、早稲田は「日本人の夢」なんだね。ぜひ皆さんも、『人生劇場』を読んでみんしゃい。古本屋で見つかったら、他の本も…。

そうだ。思い出した。もう一人、自分を襲った刺客をも絶讚した男がいた。坂本龍馬と一緒に殺された中岡慎太郎だ。前にもこのHPに紹介したね。もう一度紹介する。死の間際に、自分を襲った刺客をも褒めていたのだ。司馬遼太郎『龍馬がゆく』（文春文庫・全8巻）の8巻目だ。「あとがき」で書

いている。425ページだ。

〈中岡は、卓越した評論家である。かれは難に遭い、死に瀕しつつも、駆けつけた同志の連中にさまざまなことを言った。

「卑怯憎むべし。剛胆愛すべし」

と、自分たち二人を討った刺客の引きあげの見事さをほめている。刺客が二階座敷からひきあげるとき、「一人の男は、謡曲を謡ってやがった」と中岡は医師に介抱されながらいった。〉

中岡も大隈も同じだ。刺客（テロリスト）の剛胆を「愛すべし」と言っている。なかなか言えることではない。

細木数子先生によると私は「靈合星」なんだそうな。運が飛躍的に向上するか。あるいは暗殺されるかどちらかだという。落差が大きすぎるね。まア、「愛すべきテロリスト」だったらいいか。一回位、暗殺されてみても。

【だいありー】

[1] 右翼テロは「歴史」としては評価します。だが、現代の課題ではない。だからHPでも、客観的に書けます。しかし、こんな偶然があつていいのか。この「大隈事件」について書いたら、その直後に、「事件」が起こった。2月27日(日) 一水会の事務局から電話。前日(26日)に一水会の若者が明治神宮宮司・外山氏の自宅に抗議に行き、逮捕されたとのこと。ビックリした。レコンの先月号に宮司の不敬言動については詳しく出ていた。それにしても、そこまで思いつめていたとは。レコンや僕らの言論も含め、「これではだめだ。身体をかけなくては」と思ったのか。彼に、「言論」の力不足を感じさせたとしたら、僕らの責任もある。

[2] 2月28日(月) 猪野健治さんが出す『日本の右翼』に「解説」を頼まれて、必死で読んで、書いた。夜6:30から、瀬下さんの「ペンの森」で喋る。マスコミを目指す学生のための「マスコミ塾」だ。「公安警察の手口」について喋る。学生ばかり30人ほどが熱心に聞いてくれた。

[3] 3月1日(火) 図書館で調べもの。読書。

[4] 3月2日(水) 横山光輝の漫画の「解説」を頼まれて、苦悶しながら、やっと書き上げて送った。4時から対談。7時からニュースペーパーの事務所へ。高田馬場のライブ塾では僕は月一回、第2水曜日にトークをしてるが、塩見孝也さんも月一回、やることになった。第1回目は3月30日で、私がゲスト。テーマは「武士道」。

[5] 3月3日(木) 河合塾コスモの今期最後の授業。3:00から「現代文要約」。5:00から私がプロファイリングして解決した事件についても話してやった。「基礎総合」で、渡辺昭一『犯罪者プロファイリング』(角川oneテーマ21)をテキストに話をする。

【お知らせ】

[1] 3月9日(水) 7時から高田馬場のライブ塾で立松和平さん(作家)とトークです。「連合赤軍と『光の雨』」です。立松さんは連合赤軍を扱った『光の雨』(新潮文庫)を書いてます。力作ですし、考えさせられます。又、この小説を基にして、高橋伴明さんが映画『光の雨』を作って話題になりました。今、レンタル・ビデオ店にあります。

又、「ザ・ニュース・ペーパー」では渡辺又兵衛さんが立松和平さんをネタにしてコントをやっています。いつも喝采を浴びてます。この日は、そのビデオも流し、又兵衛さん当人とも感動のご対面をしてもらおうと思っております。いつもより、三倍楽しめます! ぜひ、いらして下さい。問い合わせは、トリックスター社 03(5331)3261

[2] 3月11日(金) 7:00から静岡市呉服町のスナック「バロン」で話をします。「バロン」は連合赤軍の元兵士、植垣康博さんの店です。「公安警察の手口」について話します。連合赤軍と新選組についても話す予定です。誰でも入れます。「バロン」の電話は、054(221)5233 です。

[3] 3月13日(日) 1:00pmから東中野の骨法道場で、堀辺正史先生の「武士道講座」があります。私も毎月行って聞いてます。とても勉強になります。

[4] 3月30日(水) 7:00pmから、高田馬場のライブ塾で、「塩見孝也塾」です。テーマは武士道で、私がゲストで出ます。

[5] 4月4日(月)はロフトで、「創」プロデュースのイベント「公安の内幕」があります。三井環さん(元大阪高検公安部長)、野田敬生さん(元公安調査庁職員)、そして私がパネラーです。

[6] 3月4日(金)発売の月刊「論座」4月号(朝日新聞社)に「創刊10周年特集 日本の言論」が載ってます。識者43人が「私もひとこと言いたい」です。私も書いてます。「決然と孤高の精神を持って闘え」です。

[7] 2月5日(土)、月刊「創」(4月号)が発売になりました。連載コラムは「ソンツェ(太陽)」です。ロシアで作られた天皇映画について書いてます。又、三井環さん(元大阪高検公安部長)と対談します。「検察のウラ金疑惑と知られざる公安の実態」です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年3月14日

真の革命家とは…

(1) 永江朗の『メディア異人列伝』は凄かですよ！

3月5日(土)、一冊の本が送られてきた。「おっ！待ってました！」という感じだ。これは面白い。凄い。1日中、この本を読んでしまった。

永江朗の『メディア異人列伝』（晶文社・2200円）だ。おっ、あれか、と思い出す人もいるだろう。そうです。「噂の真相」で好評だった連載をまとめたものだ。それも、1993年から2004年と、10年にわたる連載だ。

「右も左も裏も表も網羅した一大メディア年代記」だ。

あの人も、この人も。メディアに出てる人は全て出ている。永江は文章もうまいが、インタビューがうまい。名人級だ。なんせ、『インタビュー術！』（講談社現代新書）という著書もある位だ。それに、『不良のための読書術』（ちくま文庫）、『恥ずかしい読書』（ポプラ社）などもある。私も、こっそり読んで勉強していたんです、実は。

この『異人列伝』には、見沢知廉も、遠藤誠、そして、私までが入っています。それまでは、インタビューなんて誰がやったって同じだろうな、と思っておりやした。要は、インタビューされる人が何を喋るかだ。じゃ、どれをとり、どれを捨てるか。その技術だけじゃないのか。そう思ってたんですよ。

それで永江のインタビューを受けた。出来上がった「噂真」を見て、ビックリした。うまい。永江は天才だと思った。それ以来、この人の本は全て買って読んでいる。たとえば、私だって、人によって、違う話をしてるわけじゃない。でも、話をうまく引き出し、その構成の仕方が芸術的だ。この本では、1人について3ページだ。まず、その人間のキャッチフレーズの付け方がうまい。たとえば、エスエル出版会の松岡利康社長には…。「暴露本で

稼いで新左翼本に注ぎ込む」

遠藤誠（弁護士）は。「ファシズム国家になるなら死んだほうがまし」。その人の特徴、信念をズバリと表現しちります。日本はどんどんファシズム国家になっていってます。だから遠藤さんは死んじゃいました。

見沢知廉氏（作家）は。「8年間の独居生活は文学を支えに」。そして、私は。これは皆、ぶっ飛びますよ。私だって、ギョエー！と叫んで、3メートルもぶっ飛びました。だって…。

「鈴木邦男。

思想の自由、妄想の自由を訴えるアナキスト」

こりゃいいですね。そうだ。オラはアナキストだったんだ。凄い。この人は、私の本質をきちんと捉えてるよ。今まで、何百人もインタビューされたけど、これほど私の本質に迫ったものはない。感動しましたね。感動ついでに、私のとこだけでも全文、紹介しちゃおうかな。

その前に、この10年にわたる連載のトップバッターは誰だったんだろう。と思った。まさか10年も続くとは思わなかつたでしょうが、かなり覚悟を決めて、人選をしたはずだ。長編小説だって、最初の一行で決まるって、いうくらいだから。相当、大物をもってきて、パチンとかませてから行くんだろう。と思った。

ところが、第1回目は何と、外山恒一（とやま・こういち）なんだ。1993年4月号だ。12年前だ。「えっ、外山って誰？」と思う人が多いだろう。しかし、知る人ぞ知る有名人なのだ。闘士なのだ。福岡在住の革命家だ。小林よしのりと並んで福岡が生んだ二大スターだ。僕もよく知っている。

でも、これに取り上げられた時と、その後では、ガラリと人生が変わった。これほど激変した人は他にいない。この時は、

「『制度の変革』から

『意識の高揚感』へ」と書かれとる。

そして外山の紹介が出ている。アレッと思った。こう書かれている。

〈外山恒一

70年。鹿児島県生まれ。

反管理教育運動等で学校体制との対決姿勢を貫いてきた、ライター稼業ながら自称、流しのギタリスト。

02年5月～04年5月まで政治犯として獄中に。その間〈転向〉して現在は、“ファシスト”。著書に『最低ですかーっ！ 外山恒

一語録』など〉

これは93年に「噂の真相」に載った時の文章ではない。今、書き直した文章だ。だって、02年5月～04年5月の獄中の話も紹介されてるし。著書だって出獄後に出来たものだ。

ウーン。これは難しい。永江は、「全て初出誌のままにした」と言っている。一応、本になるので、出でる人には許可をとった。皆、OKかと思ったら、嫌だという人もいた。その頃と考えが違った人かもしれん。他に、「加筆・修正させてほしい」という人もいたが、それは断わった。あくまでも初出誌のままで出したいと思ったのだ。それはいいことだ。

でも、外山のところの「紹介」は、書き直している。これはいいのか。ウーン、難しい。でも、これは書いとかないと、「外山恒一」そのものが伝わらない。

まあ、それはいいか。そこで外山だ。外山は70年生まれだから、35才。でも、ここで取り上げられた時は、23才なのだ。それで、もう有名人だし、著書も何冊もある。週刊「SPA!」にもよく登場していた。凄い。管理教育反対！でその名を轟かせていた。

僕はかつて「週刊SPA!」で「夕刻のコペルニクス」の連載をやっていた。その時にもよく、外山はSPA!に登場していた。ヘルメットをかぶり、革命家だ！といって登場していた。

(2) SPA!で「慰安婦募集！」をやった革命家がいたとです

そして奇妙なことを口走っていた。いや、書いていた。自分は革命をやっている。いっしょに決起しよう！と。さらに、衝撃的なことを書いていた。

「従軍慰安婦募集！」と書いていた。つまり、革命闘争のためには、女性の精神的、肉体的支えが必要だ。だから、自分を支え、ボランティアでさせてくれる女性を募集する！というものだ。

こんなことを書いて、よく、大問題にならなかつたもんだ。あるいは、フェミニスト団体から抗議がきたのかもしれないが、凄い勇気だ。あの日本軍だって、「國の為に闘う兵隊さんのためにボランティアで肉体を提供しよう」なんて、言わなかつた。ちゃんと、金を払つた。

それなのに、外山は、俺は革命家だ。革命的な闘いを支えるために、肉体をただで提供せよ！と言う。「これはパロディだな」と皆、思ったに違ひない。でも、パロディとしてもよく書いた。SPA!もよく、載せた。それに、外

山は本気だったんだ。

その数年後、外山に会った時、聞いてみた。あれで応募はあったの？と。

「おっさんが怒って、言ってきただけですよ」

と言う。けしからん。何てことを言うんだ、と怒ってたんだろう。あるいは、怒鳴る形をとりながら、本当は、「応募」かもしれない。木戸の「従軍慰安夫」かもしれない。「ウーン、どうでしょうね。違うと思いますが…」と本人は言っていた。

「反応は、それ一件だけだったの？ 他にもあったでしょう」と更に私は、しつこく問いつめたわさ。そしたら、とうとう自供した。

「実は、一人、女性が応募してきた」と。

ヒヤー、本当にいたんだ。それで、会って、ボランティアの貴い志を受けたという。しかし、いいのかな。SPA!がそんな媒介をして。でも、「売春」じゃないし、ボランティアだ。いうならば、「捧春」だ。ちくしょう、とうらやましくなった。そんなことなら、オラも「タコペ」で募集すればよかつた。でも、誰もこないやね。オラじゃ。若くて、カッコいい外山だから、応募があったんだ。じゃ、さぞや革命的なプレイだったんだろうと外山に聞いたら、「正常位です」。いかんじゃないか。既成の秩序や、管理教育に反抗する革命家が正常位じゃ。と、オラは、怒って言いましたっけ。

その後、外山は、さらに激しく革命運動を展開する。「仲間」だと思われていた左翼にも喧嘩を売る。そして、暴れまくり、あげくの果てに逮捕され、二年間の獄中生活だ。

こう見えてくると、凄い。でも、ちょっと違う。永江は、外山のことを「政治犯として獄中に」と書いてるが、私の記憶によると、「ストーカー行為」によって逮捕されたんだと思う。それとも、私の記憶が間違っているんだろうか。

そうだ。今年の初め、外山から本が送ってきた。『最低ですかー』だ。その中に、本人の書いた「著者紹介」がある。そこを見てみよう。

〈92年に、SPA!の「中森文化新聞」に〈反教育の革命児〉として連続登場。一躍注目を浴びる〉

とある。

その頃から、僕は知っていたんだろう。そして、「反共左翼革命結社・日本破壊党」を結成。街で演説したりもした。又、97年5月より「福岡版 だめ連」の数次の高揚を牽引。と書かれている。そして、問題の事件だ。

〈99年5月、私的な恋愛問題に周囲のフェミニストたちが政治的な介入をおこなったことへのやむを得ざる反撃戦として、「ストーカー闘争」を開始。刑事事件化するが、裁判闘争を徹底的にエンタテイメント化する戦術が功を奏して、事実上、「法廷侮辱」の罪で2年間の獄中生活を勝ち取り、「まったく新しい政治犯」となる。04年5月、福岡刑務所を満期出所。自称「思想界の北島マヤ」〉

(3) ストーカーではない。思想犯、政治犯なんや！

この問題については、僕も外山本人から何回か話を聞いた。初めは、相思相愛だった。かわいい彼女だった。幸せだった。ところが、周りのフェミニストや左翼が介入しました。「外山なんかと付き合っちゃダメ！」とか言って。そのうち、他の男にもひかれたのだろう。外山から心が離れ、逃げ出した。当然、外山は追う。愛ゆえだ。つきまとい、説得し、時にはいらだって暴力もふるった。それで捕まった。

つまり、本人も認めているように、ストーカーなんだ。そうだ。ストーカーで捕まった公安調査庁の職員もいたな。野田敬生だ。今度、4月4日(月)に口フトで一緒にトークをする。この二人を対談させてもいいな。「ストーカー対談」として。あれ、以前、「創」でやったな。その題で。あの時は、この元公安と、ある大作家のストーカー嬢の対談だったな。

さて、外山の話だ。彼の本の中にはこんな激しい裁判批判も書かれている。

〈「ストーカー規制法」などというゴマカシはやめて、「片思
い禁止法」でも制定すればいいじゃないですか〉

これはいいね。私も賛成ですよ。昔は、武田鉄矢の「101回目のプロポーズ」だったかな。嫌われても嫌われても追いかけるのが、健気で、純情でいいと思われていた時代があった。恋愛は「押しの一手だ」とか教えられた世代だ。ところが、その情熱が今では「ストーカー」になり、犯罪なんだわさ。他に、「外山語録」だ。

〈今回の裁判で裁かれようとしているのは、ぼくのニーチェ的
思想や行動、美意識なのだ〉

〈どうせ違法で不当な判決を出すのなら、私はいっそ死刑判決を望みます〉

ヒヤー、凄いですね。やたらと面白い本だ。外山の『最低ですかーっ！』は去年の12月に出た。不知火書房から出ている。定価1375円だ。私は、一気に読んでしまった。そしたら、本の中に私のことも、チョコチョコ出ている。フーン。こういう風に見てたのか、と思った。今、気付いた所をちょっと紹介する。

〈おれは今後「ぼく」という一人称をやめて「おれ」と云うことにした。12月11日にあるイベントに呼ばれて右翼の鈴木邦男氏と対談したのだが、おれは実は内気なので云いたいこともほとんど云えず、まるで鈴木氏の独演会になってしまった。これでは立派な文化人になれないで、とりあえず「ぼく」を「おれ」に変えることによって気合いを入れようと思うのだ〉

たしか、これが初対面だったわな。どっかの大学だったと思う。1993年。外山が23才の時だったという。僕だって内気なのに、「独演会」になったのか。そうかなー。そうそう、この時は、たしか、他に、「象さんのポップト」というお笑いと、元気いいぞうという芸人が出てたと思う。元気さんはその後も、よく会っていた。「ものまね」が得意で、聖徳太子や藤原鎌足のものまねをやっていた。似てるのかどうか分からない。次は、1995年、外山が25才の時だ。

〈以前、ぼくは新右翼・一水会の鈴木邦男の前で、「スターリニズム」という言葉を真面目に口にして「何を古くさいことを」と苦笑されたことがある。だがぼくの理論では、スターリニズムとは、解放的なベクトルを持つ運動が後退局面に入った時に必ず現れる、もしくは陥りやすいある独特の心情や発想、運動論のことであり、古い新しいなんてレベルでは絶対に語れない問題なのだ〉

なるほど。外山は正しい。その通りだね。「笑った右翼」が悪い。そして現在だ。この本のラストは、「まったく新しい左右対立--イデオロギーX」という革命的な提言になっている。なかなか読みごたえがある大論文だ。この中でも私について触れている。

〈右翼にとって、アナキストは不可解な存在だろう。三島由紀夫は、全共闘の学生たちに熱いラブコールを送ったがそれは片思いに終わった。鈴木邦男は『がんばれ新左翼』という本を第3弾まで書き、現在ではほとんど左翼に取り込まれて、いいように利用されてしまっているように思える。戦前も、左翼にあって一人、アナキスト大杉栄は右翼からも愛された。右翼にとってアナキストは、たぶん敵なんだろうが、しかし何か自分たちと一脈通じるところもありそうで完全に否定しきれないという感じの謎の勢力なのだ〉

うん。外山の「鈴木評」は的を射ている。正しい。左翼に取り込まれている。あわれな男だ。それにアナキストにシンパシーを持っている、どころではない。奴はアナキストなんだ！ そう。永江朗の『メディア異人列伝』で、言ってるふうに、妄想のアナキストだ。えーい。ついでにサービスだ。その部分も紹介しちゃおう。1995年8月だから、今から10年前に喋っている。

思想の自由、妄想の自由を訴えるアナキスト

鈴木邦男

43年、福島県生まれ。

早稲田大学卒。産経新聞社を経て、

新右翼・民族派団体「一水会」設立。

著書『脱右翼宣言』以後、右翼と“決別”し、

現在、マスメディアで様々に言論活動を展開中。

著書に『平成元年のペレストロイカ』

『夢の格闘技・プロレス』などがある。

鈴木邦男は右翼と呼ばれたくないという。

「いろんな話をして、格闘技の話や天皇制の話や、政治の話をして、ああ鈴木は右翼だねと言われるんならいい。でもいきなり右翼のレッテルを貼って、右翼だからどうこうって言われるのは嫌ですね」

これまでの人生、右翼と呼ばれて良かったことなんてひとつもない、とも。

それでも今もメディアは、鈴木に「新右翼の」とか「民族派の」と冠をつけて紹介する。しかも「右翼なのに物分かりがいいね」とか「右翼だけがけっこう優しいじゃないか」といったニュアンスで。

「最近、オレはそういう落差でもってるだけなのかなあと悩んでいるんですよ（笑）。なかなか実力で勝負させてもらえない。ぜひ噂の真相でも連載をさせて戴きたいと思ってるのに、なかなかお呼びがかかりませんね。こういう左翼スキャンダル雑誌でも、右翼に対して偏見をお持ちのようで（笑）」

ははは。そんな鈴木の最近の仕事のなかで、滅法面白いのが『週刊SPA！』連載中の「夕刻のコペルニクス」だ。見沢知廉による内ゲバ殺人事件の一部始終を書いてしまったかと思ったら、こんどはあの赤報隊（と思われる人物）との関わりまで。

どうして鈴木は今になってこれらを語り始めたのだろう。

「書きたくなかったんですよ。でも連載で新日本文学会の批判をした以上、一回ぐらいは自己批判も書かなきゃと思って」

いやいや書き始めたら、面白くなってしまった。反応もよかったです。そのいきがかり上、赤報隊についても書かないわけにはいかなくなってしまった。赤報隊は内ゲバ殺人で逮捕された見沢の奪還を持ちかけてきたのだったから。

ところで、右翼と呼ばれるのが嫌いな鈴木邦男は、現在の自己の思想的立場を「自由主義者、あるいはアナキスト」と位置づける。

「とにかく自由にやれるのがいい。その中にゴチゴチの天皇主義者がいてもいいし、世界同時革命を起こさなきゃと思っている人がいてもいい。それは思想の自由、妄想の自由」

そう考えるようになったターニングポイントが、内ゲバ事件であり、赤報隊だった。

内ゲバ殺人事件で、警察の捜査能力や自白に持ち込む能力を目の当たりにした。国家に勝るテロ機関はない。鈴木は「非合法闘争では勝てない」と悟った。

もうひとつ、事件の過程で鈴木が恐れたのは、非合法活動の過程で精神が荒廃すること。

「だんだん自分は活動家なのか犯罪者なのかわからなくなってしまうんですよ」

非合法行為、暴力行為をしているという感覚が麻痺してくる。他人から金を盗んででも、一般人が活動家にカンパするのは当然だと思うようになる。

「ぼくは非合法活動そのものに限界があると考えた。でも、赤報隊は実行者や実行方法が悪かっただけだと考えたんだと思う」

内ゲバ事件がなかったら、鈴木邦男は赤報隊になっていたかもしれない。自分は何を失い、何を持ち続けているのか、その確認作業が連載「夕刻のコ

ペルニクス」である。

インタビューしながら、私はなんだか元新左翼活動家の話でも聞いているかのような気分になってきた。今でも彼らは連赤について、そうありえたかもしれないもう一人の自分として語りたがるではないか。

かつての右翼には「肉体的言語」なる言葉でテロを正当化しようとする者がいた。「世間は我々の言葉に耳を傾けない。だからテロという肉体的言語によって、我々の主張を世に訴えるのだ。悪いのは発言の機会を与えないマスメディアである」と。

鈴木はこれも誤りだと明言する。「人を殺した瞬間、その言葉は説得力を失いますよ。本当に訴えたいなら、自決すればいい。三島（由紀夫）さんのようにね」

現在の鈴木の思想がよく表現されているのが、オウム報道に対する姿勢だろう。

「いろんな意見があっていい。私見、偏見があっていい」というのが鈴木の基本だ。

「ぼくの考えも偏見かもしれない。生長の家に関わっていた体験から、宗教をやっていた人はそんなひどいことはしないだろうという偏見がぼくの中にもありますからね」

ところがマスメディアは、いろんな意見どころかオウム糾弾一色である。

「容疑が100パーセント固まったときでも、ちょっと待てよと考えるのがマスメディアの役割ですよ。それを警察に先駆けて、あいつを捕まえろと絶叫するとは」

鈴木は50年前のあの戦争を「下らない戦争」と呼ぶ。遺族会が聞いたら逆上するだろう。その下らない戦争をやるハメに陥ったのは、「ちょっと待てよ」と考えるマスメディアがなかったから、と言う。

「これでは町中を戦車が走ろうとミサイルが飛び交おうと、誰も疑問を持たなくなってしまう。怖いと思いますよ」

異論・反論・暴論・珍論の許されない社会は気持ち悪い。みんなが正義の味方じゃつまらない。全く同感である。しかし、オウム問題について語った次の視点に、なんて鈴木邦男は正直な口マンティストなんだろうと私は思った。

「不謹慎だけど、わくわくする気分はありますよね。左翼の人も考えてた国家転覆とか内乱とか。平成の二・二六事件だなんて言われると、そうか麻原は北一輝かなんて（笑）。ぼくも二・二六に憧れたことがありますから」

果たして鈴木邦男は転向したのか、していないのか？よくわからない。

(1995.08)

これを読んだからといって、もうこの本は読まなくてもいいやと思っちゃいけない。もっともっと凄い人たちがいる。宮台真司、宮崎学、与那原恵、宮崎哲弥、高沢皓司、松田洋子、中村うさぎ、森達也、雨宮処凜、重信メイ、田中宇、辛酸なめ子、姜尚中…と100人以上の人が出ている。それらの人々が何を語っているか、又、それを天才・永江がどう料理しているか。読んでいて、ワクワク、ドキドキする。2200円も決して高くない。

【だいありー】

[1] 3月5日(土) 中野図書館で勉強。

[2] 3月6日(日) 有楽町の東京国際フォーラムに行く。「生長の家」の講習会。10時から3時まで。昔の仲間が券を送ってくれたので。よかった。時には、真理の話を聞くのもいい。心がリフレッシュされる。

5時から、横浜文化体育館。パンクラスの試合を見る。面白かった。

[3] 3月7日(月) 2:00から雑誌の対談。おわって、居酒屋へ。嬉しかったので、無理して、お酒を付き合う。「連赤カゼ」で、1ヶ月間禁酒してたので、生ビール半分で、酔う。フラフラ。家に帰ってすぐ寝る。夜中、目がさめて、勉強。夕方寝て、夜中に勉強なんて受験生みたいだな。

[4] 3月8日(火) 2時、韓国のテレビ局の人と打ち合わせ。来週、インタビューされるので。夜、講道館へ。1ヶ月ぶりに柔道の稽古。「連赤カゼで1ヶ月休んでしまいました。すみません」と謝った。「鳥インフルエンザですか？」と聞かれた。「同じようなものです」と答えた。鳥の翼（左翼）に移されたんだから。

オラの体の中に犬がいる。早く散歩に行こうとせがむ。時には他の犬と闘わせてくれと、せがむ。柔道の稽古をして、帰ると、犬の機嫌がいい。キンキンянんといつて喜んでいる。翌朝、目が覚めても、体の調子がいい。犬がご機嫌なんだ。

[5] 3月9日(水) 「ゴング格闘技」の原稿を書く。パンクラスの試合についても書く。夜、ライブ塾で立松和平さん（作家）とトーク。「連合赤軍と『光の雨』」。とてもいい話を聞けた。人も多かった。ライブ塾始まって以来だ。塩見さんも飛び入り出演してくれた。しかし、喋りっ放しじゃ、勿体無いな。どっかに載せたいな。この時の様子は詳しくは、又、書きませう。

[6] 3月10日(木) 夜、松元ヒロさんのライブを見に行く。パントマイムとしては日本の第一人者。元、ニュースペーパーにいた。今は、ソロで、芝

居、パントマイム、コントをやっている。面白かった。

[7] 3月11日(金) 2時から、森達也さんと天皇論で対談。6時の新幹線で静岡に。スナック「バロン」（元連合赤軍兵士・植垣康博さんの店）で、喋る。静岡発夜10時24分の新幹線で帰る。

[8] 6時から、三井環さんを励ます会。三井さんは元大阪高検公安部長。検察の「裏金問題」を告発しようとして、直前に「口封じ逮捕」された。そのことは「創」（4月号）に載っている。

【お知らせ】

[1] 4月4日(月) 7時から口フトです。「公安の内幕」です。三井環さん（元大阪高検公安部長）、野田敬生さん（元公安調査庁職員）と、私もトーク。他に、飛び入り出演の大物の予定も。

[2] 4月13日(水) 7時から、ライブ塾。朝倉喬司さんとトーク。「日本の自殺」です。朝倉さんは犯罪もの、事件ものに詳しいジャーナリストです。日本が自殺しようとしてる、ともとれますか、「自殺者」の歴史について語ります。「死なう団事件」や、いろんな自殺、自決がありました。これも日本文化です。感動です。なかなか興味深いです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年3月21日

9年前「予告」しながら書けなかった「あの事件」について

(1)果たして三億円事件のことだったのか？

本を読んでたり、映画を観てたり、あるいは人と話してゐる時。突然、全く関係のない事が思い出されて、ビックリすることがある。本を読んでる時、文脈と関係なく、喜んだり、涙が出てきたり、急に不安になったりする。本の、どの言葉かに刺激されて、昔のことを思い出した。というわけではない。フロイト的にはどう説明するのか、分からぬ。

あるいは、こうかもしれない。気にかかる事がある。でも、普段は忙しいから忘れてゐる。ところが、本を読んだり、映画を観たりして、自分一人の世界に入る。その時、雑事の裏に隠れていた事が、ポロリと現わされてくる。そんなことかもしれない。

沢木耕太郎（作家）は、外国を、それも砂漠地帯を何ヶ月も旅していた時、偶然会った日本人と、持ってる本を交換した。「これは読んだから、あげるよ」「じゃ、僕はこの本をあげます」と言って。もらたっ本の中に、山本周五郎の「さぶ」があった。初めて二、三行を読んで、もう、いけない。涙がとまらなくなった。小説の内容に入る前に、文章だけで感動した。いや、感動したというよりも、雨、橋、川…といった日本の下町をあらわす「言葉」が日本を思い出させた。雨も降らない砂漠を何日も旅している。その時、しのつく雨の降る日本をあらわす言葉の二つ、三つに触れて涙が止まらなかった。

本を最後まで読み、あるいは途中まで読んで、ジーンとして涙を流す。ということはある。でも、こういうふうに、最初の2、3行で、「言葉」が涙腺を刺激するというのは珍しい。山本周五郎の文体の力なのだろう。ただし、読んだ時の環境もある。その証拠に、日本に帰ってきて、「さぶ」を読んで

みたら、一向に涙も出ないし、感動もしなかったという。

ということは、小説の中の「言葉」が日本を思い出させ、ホームシックにさせたというだけかもしれない。

しかし、「さぶ」はいい小説だ。僕は昔、高校の頃だろう。日活映画で「さぶ」を観た。小林旭と長門裕之が出ていた。男の友情と、気持ちの行き違い。そこに女がからんで、さぶが犯罪者にされ、島送りになる。という〈事件〉を描いていた。フーン。こんな事件があり、でも真相はこうだったのか。と、推理映画のようにして観た。そして、自分の気持ちの中では「解決」した。区切りのついた話だった。

ところが、何十年かたって、「山本周五郎を全部読もう」と思い立ったことがあった。新潮文庫で次々と読んでいった。「さぶ」の番がきた。「いやだな」と思った。「これは映画を観てるし、筋は全て知ってるよ」と思った。

だが読んでみて驚いた。高校の時に観た映画「さぶ」とは全く違っていた。筋は勿論、同じだが。映画によって感じるものと、文章によって感じるものの違いかもしれない。さすがに、初めの2、3行で涙は流れなかった。しかし、何げない描写で、ポロポロと泣いてしまった。凄い小説だと思った。嘘だと思ったら、読んでみたらいい。

さて、ここまで枕だ。話のあたまだ。次に、ある〈事件〉について推理する。自分の心の中に起こった不思議な感情だ。映画を観てるうちに、急に不安になって、居ても立ってもいられなくなり、校正の済んだ原稿を差し替えてもらった。

もし、あの映画を観てなかつたら、あの原稿は「SPA!」に載っただろう。そして、「よくぞ自供した!」と警察に逮捕されただろう。あるいは、今でも、「容疑者」として追われていただろう。

今、本箱から探してきた。『夕刻のコペルニクス』(扶桑社文庫)の第1巻だ。中ほどで、「新右翼内部のリンチ殺人事件」について書いた。次に、「赤報隊事件」について書いた。さらに、「新雑誌X事件」について書いた。東郷健・丸山実襲撃事件について書いた。

そして、調子に乗って、

「日本中を震撼させた“あの事件”予告編」
を書いた。

「あの事件」って、一体何だ。皆に言われた。「噂の真相」は1行情報で、「あの事件は、三億円事件だ!」と暴露した。さすがは「噂真」だ。し

かし、本当かどうか分からぬ。いい線はいっている。

「あの事件」について、自分の関わった部分だけでも、書いてやろうと思った。この「予告編」を書いたのは1996年2月21日号だ。9年前だ。

ところが、「予告編」を書きながら、次の回（3月6日号）では、こうなっている。

「無念だが“あの事件”を書くことを断念する」

そして、すでに書いていた原稿はボツにしてもらった。その時の担当者だけは見ている。だが、今、僕だって持っていない。後々のことを考えたら、コピーでも取っておけばよかった。しかし、いつガサ（家宅捜索）が入るか分からない。実際、「赤報隊に会った」と書いただけで、ガサが入った。だから、「あの事件」について書いた〈1回目〉は処分した。もうない。自分で何を書いたか、ディテールは覚えてない。又、その原稿のどこに危険や不安を感じたのか、それも分からない。ただ、あの映画を観てるうちに、「これはヤバイ！」「捕まって一生、刑務所だ！」「他の人にも迷惑をかける！」と思ったのだ。何とも不思議だ。

「書くことを断念する」の初めはこう書かれている。自分の文章を引用するのは恥ずかしいが…。

〈参った。この2週間は地獄だった。「あの事件・予告編」が出てからだ。変だ。異常だ。脅迫の手紙や電話がひっきりなし。こんなことには慣れてるつもりだ。だが、今回は根本的に違う〉

(2) ヒントはあの映画「ブローケン・アロー」にあるんですよ

そうだった。家に電話や手紙が来た。家の中に「警告文」が置かれていた。留守の間に侵入して、机の上に置いていったんだ。「お前なんかいつでも殺せるぞ」という警告だ。さらに、公安の尾行がついた。一水会事務局と僕の家にはピッタリと公安の張り込みがついている。「異常事態」を察知した、一水会の人間にこう言われた。

「鈴木さんが変な予告をしてハッタリをかますからですよ。これから何を書くか知りませんが、たとえ〈小説〉でも警察はそうは見ませんからね。赤報隊の時だって鈴木さんは〈推理〉でしょうが。警察は真に受けて全国10ヶ所をガサ入れしたんですから。他の団体からも文句言われましたよ。今度、

変な推理を書いたら、それだけじゃ済みませんよ。警察だって何か理由をつけて逮捕してやろうと思っているんですから。一水会だけでなく、他の団体の人たちも迷惑しますよ。こんなことで運動を潰さないで下さいよ」

 そうか。そんな理由もあったのか。と、段々、当時の状況を思い出した。
 そして、最後にこう書いている。

 〈何とも残念だが、今はこのシリーズを始められる状態ではない。僕一人だけならばどうなってもいい。だが、このまま見切り発車すると余りに多くの人々に迷惑をかける。だから、いったん、白紙に戻す。さらに取材し、発表できる状態を考え直してから再出発したい。大口を叩きながらこのザマだ。意気地なし、卑怯者、嘘つき…。何と言われても仕方ない。本当に申し訳ない。〉（96年3月6日号）

 何とも不甲斐ない話だ。その後、「あの事件」について触れたことはない。「SPA!」だけでなく、他でも、一切ない。

 不思議だ。奇妙だ。「予告編」を見ても、ただの「ノリ」や「勢い」だけでなく、かなりの覚悟を持って、「あの事件」について書こうと思ったわけだ。それなのに、映画を観てる間に、「突如として」、これはヤバイ！と思ったのだ。そして映画館を出て、担当者に電話し、会い、原稿を書き直したのだ。映画の名前は覚えている。「ブローケン・アロー」だ。ビデオ屋で探して、今さら、あの時の恐怖や、どうしようもない不安を味わいたくない。そう思ったのだ。

 でも、あれから9年たつ。あの映画の、どこで恐怖、不安を感じたのか、検証してみてもいいだろう。そう思った時だ。不思議なもんだ。僕のそんな気持ちが強力な念波となって、テレビ局を動かした。12チャンネルで上映したのだ。

 3月3日(木)の9:00p.m.からの「木曜洋画劇場」だった。〈1996年アメリカ〉とっていた。日本でも同時に上映されたのだろう。96年3月6日号の「SPA!」に僕は、「断念する」を書いた。これは、一週間前の2月27日に発売された。そうすると、2月22日か23日頃に観たのだろう。吉祥寺の映画館だった。女子大生と観ていた。なぜ、新宿や渋谷じゃなくて、ジョージ（吉祥寺）だったんだろう。分からん。記憶がない。ジョージ（情事）の帰りだったんだろうか。いや、そんな事はしていない。

 とにかく、この映画を観てるうちに、いたたまれなくなって、映画館を飛

び出した。息苦しかった。「大変だ」「ヤバイ」という事だけが頭の中でガンガンと鳴った。一緒に観てた女性はどうしたんだろう。そのまま観てたのか。一緒に出て、家に帰ったのか。分からぬ。自分本位、自己中な男だ。こいつは（私の事だけど）。3月3日付の産経新聞のテレビ欄には、こう出ている。映画「ブロークン・アロー」だ。

〈1996年 アメリカ。ジョン・ウー監督。ジョン・トラボルタ ク里斯チャン・スレータ S・マシスほか
▽核弾頭を奪還せよ・暴走戦士ブチギレ対決〉

とにかく、凄い。アクション映画だった。走る列車の中で闘う。さらに屋根に上って闘う。そこへ、ヘリから攻撃される。そんなシーンは覚えていいる。テレビ欄の下の方に、もうちょっと詳しい紹介が載っている。

〈96年アメリカ。ジョン・トラボルタ。核弾頭を奪って政府を脅迫する空軍の少佐と、それを追う後輩の大尉が死闘を繰り広げる。ジョン・ウー監督〉

そして、観たわさ。ビデオに録って、じっくりと観た。ウーン。分からぬ。そのうち、ハッと気が付いた。ここか！と思われるシーンがあった。でも、書けない。警察だってこの原稿を見ている。「ブロークン・アロー」を観て、「謎解き」をするだろう。彼らもプロだ。あるシーンで、「これだ！」と気が付くだから、もう書くのはやめよう。

まあ、皆さんで、時間があったら、この映画を借りてみて、「謎解き」をしたらいいでせう。昭和史の巨大な謎が解ける。あなたも、日本のポワロになれる！

蛇足だけど、「ブロークン・アロー」って、「折れた矢」という意味ですよね。意味深長なんです。このタイトルは。そして、もとの仲間同士が追い、追われする闘いですね。ここにヒントがあったんですね。さらに、あるシーンを見て、「こりゃマズイ」「一網打尽になってしまう」と私は恐怖に震えたんですな。今となっては、あの時の気分はかなり薄れてしまったけど…。

しかし、「折れた矢」というのは、同じタイトルの西部劇があったんじゃないかな。小学生の頃、観たぜ。ゲーリー・クーパー主演で、クーパーは好きで、よく父親にせがんで、観に連れていってもらった。「遠い太鼓」というのもあったな。アラン・ラッドもよかったな。と、そんな子供の頃を思い

出して、さらに想像と妄想が広がったのかもしれない。まア、ヒントは十分に与えた。あとは皆が自分の頭で考えたらいい。おわり。

(3) 「左右激突。4対4」をテレビでやるんだって！

【だいありー】

[1] 3月12日(土)、6:30p.m.から文京区の弥生会館で、「三井環さんを励ます集い」。三井さんは元大阪高検公安部長。とても偉い人だった。検察の「裏金作り」を告発しようとして、その直前に「口封じ逮捕」された。そして1年もぶち込まれていた。でも、〈国家〉を相手にするには余りにも、人がいいというか、ガードが甘い。酒も好きだし、誰とでも飲む。このことで足をすくわれた。詳しくは「創」(4月号)の僕との対談を読んで下さい。この日も、早々と、出来上がり、酔っ払ってしまった。そして花束を贈呈した女性にいきなり…(これ以上は裁判があるので、書けん)。ともかく、人間的で、開けっ広げで、いい人だ。我々、庶民にも分けへだてなく接してくれるし、まるで、遠山の金さんのような人だ。

[2] 3月13日(日)午後1時から東中野の骨法道場で、堀辺正史先生の「武士道講座」。先生の講演がおわって、塩見孝也さん(元赤軍派議長)と僕を含めて、三人で「現代の武士道」について話す。「では、続きは3月31日(土)に」ということになった。この日、高田馬場のライブ塾で、塩見塾がある。テーマは「武士道」で、僕がゲスト。でも、堀辺先生も急遽、参加して下さることになった。これは凄いですよ。小林よしのりさんも、堀辺先生と対談し、それが今発売中の『ゴーマニズム宣言』に出ている。見るべし。そして、31日に、来るべし。聞くべし。

[3] 3月14日(月) 前日、徹夜で税金の計算をし、午前中に税務署にもっていく。収入なんて余りないんだけど、申告すると、源泉徴収の分が戻ってくるんで…。夜中、眠い目をこすりながら算盤をいたたんです。なんせ、算盤5級の腕前ですから。掛け算、割り算、そして、試し算まで、ちゃんとやって申告書を書きました。夜は、講道館に柔道の稽古に行きました。骨法道場の人も来てたので、ビックリしました。

[4] 『格闘技通信』(ベースボールマガジン社)に堀辺先生が「武士道」対談をやっている。去年秋は小林よしのりさん。そして僕も出た。この日、3月15日(火)は何と、塩見孝也さんと対談。革命と武士道について熱く語った。僕もこの歴史的対談の目撃者になろうと、傍で聞かせてもらった。4月8日に発売になるそうです。読んでみて下さい。

[5] 3月16日(水) ジャナ専（ジャーナリスト専門学校）の卒業式（午前中）。午後1時から卒業パーティ。京王プラザホテルで。生徒の中に、警視庁のマーク（ピカチュウみたいなマーク）を付けた人が2人いた。しかし、よく見ると、それに「×」が付いている。「鈴木先生と同じです。公安の横暴を許さないぞ！という意思表示です」と言う。どこで買ったのかと思ったら、新宿の模索社で買ったそうだ。でも、校門前でビルをまいた位で逮捕される今日今頃だ。そんな挑発的なバッチをつけたりしたら危ないんじゃないの、と老婆心ながら注意しちゃった。

[6] 3月17日(木) 韓国のテレビ局の取材。5人もスタッフが来る。質問も難しいし、私も大変だった。

【お知らせ】

[1] 3月10日、『脅迫状であてましょう＝名探偵になるための必須9項目！』（双葉文庫・638円）が発売された。脅迫状。筆跡鑑定。暗号。鍵。変装。指紋。凶器…などについて詳しく書かれてます。私は、「尾行・張り込み」の章を担当します。いわば『公安警察の手口』の特別編です。「被・尾行歴40年の体験談。警察式尾行の凄まじさとは？」という題です。

[2] 3月11日、「月刊タイムス」（4月号）が発売されました。私の連載「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」は第8回目です。「野村を俳人にした獄中生活＝プロが認めた悲憤慷慨のポエジーはいかにして生まれたか」です。野村さんの俳句だけでなく、三島さんの詩、三上卓さんの俳句も紹介します。そして、連合赤軍の坂口弘の短歌、さらに、革マル派・黒田寛一の短歌も紹介します。それが又、凄まじい。政治的な肅清や内ゲバを短歌による。というのは、ちょっと生々しすぎるし、残酷だと思いますが。

[3] 3月31日(木) 本文にも書きましたが、7:00から高田馬場のライブ塾（トリックスター）です。「塩見塾」の第1回が行なわれます。テーマは「武士道」。ゲストは私。そして、骨法道場の堀辺正史先生が特別出演されます。問い合わせは、tel 03(5331)3261です。

[4] 4月2日(土) 日本文化チャンネル桜で、「左右激突4対4」が行なわれます。夜の9時から12時までの3時間です。塩見孝也、味岡修、パンタ、沢口ともみの左翼軍と、4人の右翼軍が闘うそうです。面白そうですね。ぜひ、見て下さい。

[5] 4月4日(月) ロフトで夜、「公安の内幕」です。三井環さんをメインに、野田敬生（元公安調査庁職員）と私がゲストで出ます。さらに、あっと驚くサプライズ・ゲストが当日、出演する予定です。お楽しみに。

[6] 4月9日(土)、渋谷のシネ・ラ・セットで雨宮処凜とトークをします。

詳しくは次号で。

[7] 4月13日(水) 7:00から高田馬場のトリックスターで、朝倉喬司さん（ルポライター）と対談です。テーマは「日本の自殺」です。いろんな自殺者の歴史から、日本の姿、日本の文化に迫ります。保坂正康の『死なう団事件』（角川文庫）や、高橋たか子の『誘惑者』（講談社文芸文庫）なども、日本の自殺について書かれた名著です。参考に読まれたらいいでしょう。

[8] 「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演が5月6日(金)から11日(水)まで下北沢の本多劇場で行なわれます。（7時から）。その前に、トークが毎日行なわれます。（5時から6時の予定）。塩見さんは10日(火)で、私は11日(水)です。

11日(水)は、はじめは大塚英志さんと、高田馬場のトリックスターでやる予定でしたが、こっちに場所を移します。申しわけありません。詳しくは又、報告します。

【附録】

ロフトプラスワンで出ている「Roof Top」（05年3月号）に、平野悠さんが、私の本について書いてくれてますので、紹介します。

「鬼の闘論」

松崎明vs鈴木邦男（創出版）

「今の時代、アウトローの存在が必要なのだ」

左右両極の論客が現状を憂え、変革を説いた（帯より）

私は「書評」を書くつもりはない。いや、とても書けない。だから私は扱う本の周辺を書いて出来たらみんなに私が紹介する本をただただ手に取って欲しいと願って書いているのである。

私は鈴木邦男さんと宮崎学さんの本はほとんど読破していると自負している。私はこのお二人が出す本や種々の発言にはとても影響を受けている。

この「鬼の闘論」の著者、鈴木邦男さんは日本の新右翼の代表格の人で、その昔は生長の家から右翼になり70～80年代は右翼の武闘派だった人だし、松崎さんは新左翼過激派集団「革マル派」の幹部で労働運動に入った人だ。言うなればお二方ともなんとも「うさん臭い」人なわけだ（失礼）。まっとうな人でないことは皆さんも知るところであろうと思う（笑）。こういったまっとうでない人（アウトロー）が、実は社会をえぐり腐敗し続ける権力に立ちむかうには最適なのだ。いや、もう健全なマスコミなんかなくなつてこういったアウトローの人達が頑張っているだけになってしまったの

かも知れない。

日本は今とてもやばいところに来ている。そしてイラクでの日本人人質バッシングのように、社会の規範から反した人をいわゆる善良な日本国民が猛然としたバッシングを加える。「あんな連中を助けることはない！」ってね。戦前はあの戦争に反対した「日本共産党」や「アジア諸国」を権力だけでなく善良な人々が平気で異質物を見るがごとくバッシングしてファシズムに行き戦争に突入して行った。繰り返すが善良と言われる国民ほど危ない存在はないと思う。異端者を毛嫌いする奴ほど危ない。このアウトローの二人の対談を読んでいてこの二人の発言がまっとうに見えてしまって思わずノートを取りってしまった。果たして私は「まっとう」なのであろうか？ こんな二人の本を薦めていたら私も社会からバッシングされるのか？ この本を出版した「創出版」は出版界最後の良心だと思う。ちょっと誉めすぎ？（平野悠）

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年3月28日

北朝鮮の真実・韓国史最大のタブー

(1) 「シルミド」は特攻隊であり、連合赤軍だった！

この2冊は特別だな、と思った。北朝鮮や韓国に関する本は随分読んだ。ここ数年でも何十冊読んだか分からぬ。100冊以上かもしれない。自分で、対談本を作ってる。『北朝鮮原論』と『こんな日本、大嫌い！』だ。それで少しあは分かった気になっていた。

ところが、とんでもない。何も知らなかつたのだ。と思い知らされたね。この2冊の本を読んで。1冊は、梁東河（サンドンハ）の『わたしは、こうして北朝鮮で生き抜いた！』（集英社・1800円）。もう一冊は、城内康伸の『シルミド』（宝島社・1300円）だ。



後者から紹介しよう。去年、映画「シルミド」が日本で上映され、大ヒットした。又、テレビでも、何度もこの事件は取り上げられた。だから知ってる人も多いだろう。小林よしのりさん（漫画家）も絶賛し、推薦の言葉を映

画ポスターの中に書いていた。

「この映画の凄さは、ワシだけが知る身ぞ！」

なかなかうまい。城内康伸の『シルミド』は、この〈事件〉について、書かれたものだ。といっても、映画の原作ではない。原作は別にある。しかし、それら（原作や映画）は、かなり〈事実〉から遠い。映画用に作られたものだ。城内は、「実尾島（シルミド）事件」の真実に迫る。

「韓国史上最大のタブー。

金日成暗殺特攻隊の悲話」

と本の帯には書かれている。

そう。これは「特攻隊」だ。そして、同時に「連合赤軍事件」だった。このことは、後で触れる。

北朝鮮から韓国に向けての工作員のテロは何度も行われ、大々的に報道された。青瓦台襲撃事件、ラングーン事件、大韓航空機爆破事件…と。日本人拉致だって、これに関係ある。韓国に侵入するために日本人になりすまそうとした。その為だという。

北朝鮮が韓国に潜入させた工作員は、1950年から1999年までで6446人に上るという。1990年代以降だけでも75件、201人の工作員が潜入した。韓国では、これらの工作員のことを、「南派工作員」と呼んでいる。

しかし、韓国は、やられてるばかりではない。やり返している。それを「北派工作員」という。何と、1万人以上いるという。そのうち、7726人が死亡もしくは、失踪した。ほとんどが死んでるんだ。まさしく、「特攻隊」だ。生きて帰れる可能性は、ほとんどない。絶望的な「北派」だ。「シルミド事件」は、その中で起きる。「南派」ならば少しほ分かる。ソウルの雑踏にまぎれ込めば、生きていけるし、工作だって出来るかもしれない。しかし、「北派」となると難しい。ピョンヤンの街に入ったって、雑踏はないし、まぎれ込む大衆も街もない。人のいない整然としたピョンヤンでは、〈異物〉はすぐに見つかってしまう。身をかくす所もない。そこに潜入り、軍事施設をスパイしたり、要人暗殺をするなんて、はじめから無理だ。生還の可能性は、はじめからゼロだ。

「まるで特攻隊ですね」と著者の城内（しろうち）さんに言った。「そうです。シルミド事件の生き残りに聞いても、“特攻隊だった”と言ってました」と言う。

城内さんと会ったのは2月24日(木)の一水会フォーラムの時だった。城内さんは前東京新聞ソウル支局長で、韓国・北朝鮮問題には詳しい。現在は東

京新聞社会部のデスクだ。1962年、京都市生まれ。早大法学部卒業。87年に中日新聞に入社。東京新聞（中日新聞東日本社）社会部を経て、93年から96年までソウル特派員。2000年11月から2003年10月までソウル特派員、ソウル支局長。通算6年間にわたるソウル勤務では、金日成主席の死去や日朝首脳会談、韓国大統領選挙など数多くの朝鮮半島情勢の取材にかかわる。

一水会フォーラムで話した時の演題は、

「北朝鮮とシルミド

--拉致事件の解決への展望と南北工作の実態--」

だった。

これは実に興味深い話だった。一水会の機関紙「レコンキスタ」の3月号に、講演録が出ている。読んでみたらいい。（レコンは年間購読料六千円だ。TEL 03(3364)2015 FAX 03(3365)7130だ）。僕の連載「平成文化大革命」も載っている。又、ライブ塾で立松和平さんと連合赤軍の話をしたが、その要旨も載っている。内容が濃い新聞だ。

この一水会フォーラムでは時間の関係で、北朝鮮の現状や拉致の問題を中心だった。最後の方に、シルミドの話をしていた。この講演のあと、会場下の居酒屋で二次会をした。隣に座ったんで僕はいろいろと話を聞いた。

「初めまして」と挨拶したら、「鈴木さんとは何度も会ってますよ」と言われた。いかんな。僕は記憶力が悪くて。木村代表とは以前から、懇意だ。その関係で来てくれた。「最近はゴールデン街でよく会います」と言う。黄金の友情だ。

では、シルミド事件だ。

事件は1971年に起きた。朝鮮半島の西側、黄海上にある孤島、実尾島（シルミド）で訓練を受けていた韓国空軍の秘密部隊が、3年を越す長期間の収容生活と過酷な訓練に耐えかねて教官や警備員を射殺し、島を脱出してソウルへと攻め上がる。しかし、部隊は軍警の阻止に遭い、激しい交戦の末、最期を迎えた。

これが、シルミド事件だ。城内さんの本から紹介した。韓国は北朝鮮に「北派工作員」を1万人も送り込み、そのほとんどは死んだ。しかし、シルミドは、行く前に潰されたのだ。いや、暴発して潰されたというべきか。捕まったシルミドの隊員は、「金日成の首を取りたかった！」と絶叫した。

(2) 何と、民間人で構成された「金日成暗殺特攻隊」

前にも触れたが、北から韓国に侵入した中で最も大きなものは1968年の

事件だ。北朝鮮の武装工作隊が韓国に侵入し、大統領官邸である青瓦台を襲撃した。これには韓国も驚き、激怒した。「じゃ、こっちでも」と生まれたのが六八四特攻隊（シリミド）だ。

しかし、このシリミドは、軍人ではなく、主に犯罪前歴を持つ人など民間人の部隊だった。なぜか。万が一、北朝鮮側に捕まった時に、軍人であれば国家の関与が疑われてしまうからだ。

それにしても、軍人だって困難な任務だ。僕らが考えても、1%の可能性もない。それなのに、なぜ、そんな部隊をつくり、民間人だけで、訓練をしたのか。多分、韓国の怒りと面子（めんつ）がそれだけ強かったのだろう。

1968年に青瓦台を襲撃した北の工作員は、「われわれは、朴正熙の首を取りに来たのだ」と自白した。

朴正熙大統領の受けた衝撃は大きかった。事件当日、深夜、ポーター駐韓大使を青瓦台に呼んで、動転して叫んだ。

「大使！ 北傀（北朝鮮）軍31人が侵入して私を殺そうとした」

「北を攻撃しなければならない。二日で平壌まで進める！」

ともかく興奮して大使に訴えた。軍を進めようとした。しかし、アメリカが許すはずはない。その結果、「だったら同じ方法で」ということで生まれたのが、金日成暗殺の特攻隊・シリミドだ。

城内さんの本には、当時の空軍参謀総長・金斗万（キムドマン）の証言が載っている。

〈青瓦台襲撃未遂事件に朴正熙大統領が非常に怒った。

「われわれは日夜、このようにやられてばかりいるのか！ 何か方法はないのか。報復する方法が」と。

それで金 旭（キムヒョンウク）情報部長が点数を稼ごうとして、「われわれも一発やります」と言って創ったのが実尾島（シリミド）部隊だった」〉

訓練は言語を絶する厳しさで、何度も何度も脱走事件が起きる。そのたびに、捕らえられ、部隊の皆で批判され、そして殺される。「まるで連合赤軍の総括・リンチ殺人と同じじゃないか」と書いたが、実際そうだったのだ。しかし、「金日成の首を取るまでは」と皆、訓練に耐える。しかし、〈北派工作〉は中止になり、彼らは裏切られる。それならばと反乱を起こす。そして潰される。つまり、「特攻隊」であり、「連合赤軍」だったのだ。

最終的には反乱を起こして、バスジャック事件を起こし、軍警と銃撃戦を

展開し、シルミド側は18人が死亡し、4人が生け捕りにされた。又、民間人が6人、警察官2人が死亡している。

だが、この事件は長い間、封印されていた。といっても、バスの乗客もいるし、重軽傷を負って入院した人も多い。だから、事件があったことは報じられたが、「北のゲリラだ」とか、「刑務所の囚人が脱走したのだ」といった「説明」がされていた。金日成暗殺の特攻隊だったことは厳に秘密にされていた。それが、公にされたのは、やっと最近になってのことだ。

映画は、必ずしも事実そのままではない。城内さんは、当時の関係者に丹念に取材をし、重い口をあけさせ、事件の真相に迫った。民間人をかき集めて、シルミドを作り、訓練をする。何度も脱走、反乱事件が起き、そのたびに血なまぐさい「集団リンチ」がある。民間人の家に逃げこみ、立てこもる事件も起きる。やはり連合赤軍事件だ。そして、最後の反乱で18人が死に、4人が生け捕りにされる。

その後、裁判で4人は死刑になる。当時、公判を指揮した検察部長の金重権が、城内さんのインタビューに答えている。

〈死刑執行日の確定には時間がかかった。動機や背景を勘案すると、決して反乱者だけに罪があるとはいえなかったからだ。彼らを管理し教育する過程で、国家のシステムがきちんと作動してなかつた。さまざまな責任論が浮上し、「彼らを死刑にしなければならないのか」という声まで出た。確かに、死刑執行日の確定までに何ヶ月もかかったと承知している〉

ベトナム戦争に4人を送ることも検討された、という。どうせなら、激戦地に送り、名誉の戦死を遂げさせようという「恩情」なのだろう。しかし、それは実現しなかつた。情状を酌量するには、あまりに多数の死傷者が出ており、死刑の結論は覆らなかつた。

4人は、「大韓独立万歳！」を叫び、立ち合つた金重権に、「金日成の首を撃ち抜けずに死ぬことが恨めしい」と言った。4人の左胸には、黒い標的がつけられ、1人につき3人、計、12人の射撃手があてられた。再び、金重権の証言だ。

〈射撃手には、あらかじめ「君たちの銃のどれかには空砲が入っている」と伝えるんだね。それは射撃手の精神的な負担を減らしてやるためにだ。「自分が撃った弾で死んだのではない」と自

己弁明が可能なように〉

なんとも痛々しい、酷い話だ。あとは本を読んでほしい。ともかく、凄い本だ。

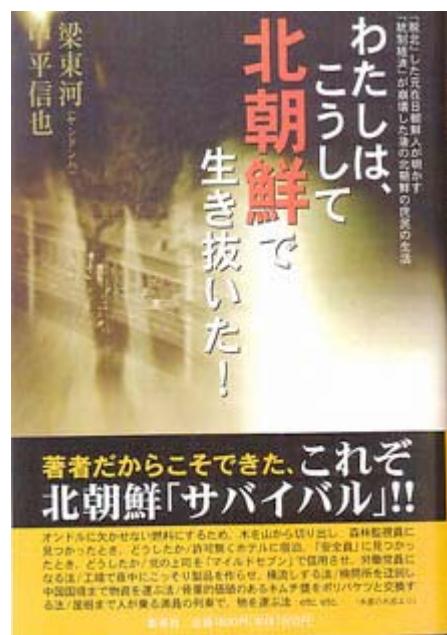
(3) 「フル」だからこそ、北朝鮮で生き延びた！

では、もう1冊の本だ。これは、いわゆる「脱北者」の手記だ。しかし、北で生まれた朝鮮人ではない。母が日本人で、日本で生まれ、育った。1960年代。「帰還運動」というのがあった。在日朝鮮人の人が中心になり10万人ほどが北朝鮮に渡った。マスコミも左翼政党も、大々的に賛美した。10万人のほとんどは、「差別のない国」「労働者の国」で、「理想の国家建設のために働く」と意気込んで行った。この本の著者もその1人だ。

行ってすぐ、「理想」は嘘だと分かった。しかし、何とか、夢や理想を実現しようと必死で頑張る。しかし、ここでは、どうしようもないと思い知られ、脱北する。向こうでは、北朝鮮の女性と結婚し、子供まで作った。しかし、妻と子供は置いて来た。何も言わずに。それは、酷いと思った。しかし、本を読んで、「そういうことか」と分かった点があった。

こう書くと、ただ、きつく、暗く、苦しい北の生活を書いた本だと思うかもしれない。しかし、違うのだ。読んで驚いた。「へエー、北朝鮮でもこんなことが出来るのか」「こんな面もあったのか」とビックリした。

変な表現だが、明るいのだ。そうだな。連合赤軍事件のことを思い浮かべた。事件関係者の書いた本は、永田洋子、坂口弘など全て、暗い。ただ暗い。反省、懺悔、悔恨ばかりだ。ところが、一兵士・植垣康博さんの本、『兵士たちの連合赤軍』（彩流社）だけは異色だ。リンチ殺人の暗さ、陰惨さは勿論書かれているが、革命運動本来の「楽しさ」「面白さ」「明るさ」も十分に書かれている。



つまり、この本は、脱北者の中にあって、唯一の「植垣的本」なのだ。染東河（ヤンドンハ）の『わたしは、こうして北朝鮮を生き抜いた！』（集英社・1890円）が、その本だ。帯には、姜誠（カンソン・作家）が、「超一級の北朝鮮ルポである！」として、こう書いている。

〈本書を読めば、北朝鮮の人々が金正日体制に従順な口ボットや羊の群れではけっしてないことに気づかされるだろう。国家経済が建て前の北朝鮮にあって、著者は党や政府の幹部を巻き込みながら、砂糖からコンブ、焼酎、カレンダー、タバコ、ガソリン、タイヤなど、ありとあらゆるものを作り廻す。そのしたたかさ、たくましさは並ではない〉

そうなんだ。本を読んで驚いた。エッ？こんなことが出来るのか？って。ちょっとでも政府に逆らったり、不正なことをしたら、すぐに摘発されて処刑される。だから人々はただ従順に生きている。そういうイメージを持っていた。ところが、この本の著者は、堂々と「闇屋」をやり、ワイロを使って、商売をし、金をためてゐるのだ。ワイロでいい職場に変えてもらったりする。そんなことが出来る国とは思わなかった。

逆にいえば、著者は「ワル」なんだ。日本にいた時から「ワル」だったし、「ワル」だったからこそ、北朝鮮でも、たくましく生きることができた。そして、金をためて脱北することもできた。

ただ、「ワル」だったから、それだけで生き延びられたかというと、そうではない。同じようなワルで、上と衝突し、捕まり、収容所送りになった人は大勢いる。著者は「ワル」だけじゃなく、実に頭がいいのだ。究極の「サ

バイバル術」だ。やはり、連赤の植垣さんに似ている。

サバイバルといえば、脱北者は北朝鮮から中国に逃げ、そこから日本に来る。そんな脱北者が日本には60人もいるそうだ。北から逃れるのも大変だが、実は、中国にとどまり、そこから韓国なり、日本なりに逃げる方が大変なんだという。中国で見つかったら、容赦なく北に返されてしまう。

ところが、この著者は、中国で、国籍を買った。完全な中国人になった。そして、パスポートを作り、堂々と日本に帰ってきた。 ただ、「本物の中国人」になったから、日本に帰ってきても、日本籍をもらえない。他の脱北者は両親のいずれかが日本人なら日本籍を与えられる。ところが、著者は、日本で生まれ、母が日本人なのに、「中国人」のままだ。そして、妻や子を北に残しているから、本名も名乗れない。これも大変だ。

この本の凄い点は、北に行った人々の〈理想〉や夢についても、キチンと書いている点だ。「だまされて北に行った」「人民は強権で弾圧され、従順になるしかない」といったルポばかりが多い中で、これは異色だ。そして、これは本物だ、と思った。たとえば、向こうでの労働のことだ。

〈仕事は本当にきびしかった。日本では体力で他の人に負けると思ったことは、一度もなかたが、これほどきびしい肉体労働ははじめてだった。特に夏は汗がふきだし、疲労の極に達したが、流れ出る汗の一滴一滴が祖国の発展につながるかと思うと、綿のように疲れても、泥のように眠って翌朝には元気になった〉

ここは感動的だ。「流れ出る汗の一滴一滴が」なんて、いい言葉だ。日本の軍国主義下でも、こんな純真な気持ちで働いた人は多いだろう。「強権でムリヤリやらされた」だけではない。こうした記述があるだけで、あっ、この本は本物だ、と思う。

彼は、理想に燃え、さらに、労働突撃隊に入り、党員にもなる。しかし、無理がたたって、入院。でも休職中には給与の70%が支給されたという。北のいい点は、キチンと書いている。

又、入党審査の時は、マイルドセブン一箱で、審査する指導員の態度も変わったという。結果的に買収したのだ。北朝鮮では、買収のことを「サバサバ」という。どうも日本語からきたようだ。ワイロと買収の国の言葉が入ったようだ。まさか、著者が広めたわけじゃないだろう。タバコやお金をやって、人間関係もサバサバするわけだ。

入党は皆のあこがれだ。党員になると、待遇が全然違う。人々の見る目が

違う。しかし、なるのは難しい。何年も受けつづけ、落ちて泣いている教師もいる。ところが…。

〈ところが、炭鉱労働者であれば、簡単に党員になれる。鉱山労働者は頭をつかった労働をしないので、忠誠心さえあれば党にとって安全な存在であるらしいのだが、インテリには非常に厳しい。私の印象では100対1ぐらいのような気がする〉

これなども、なるほどと思った。初めて知った事実だ。こういうふうに紹介していったらキリがない。あとは本を読んでほしい。ともかく、刺激的な本だ。初めて北の様子、実態が分かった。と僕は思った。だって、こんなことまで紹介されている。

一緒に北に行った男の中に、日本人よりも日本人らしい男がいた。板前で、腕には自信があるし、それ故に、ケンカもした。又、北朝鮮の女性と結婚した。「俺についてこい」といった感じで、うまくいくと思った。ところが何もかも日本と違い、育った環境、教育も違う北の女性だ。問題がおきた。女性は思い余って市の党委員会に離婚を申し出た。離婚の理由は「犬のような亭主だからだ」というのだ。

犬のようにうるさいのか。犬のように暴力をふるうのか。と思ったら違う。つまり、夫婦生活の時に女性器を舐めるというのだ。北朝鮮ではセックスをするときに前戯もないで、日本では愛情表現の一種でも、北朝鮮では想像を絶する変態行為なのだ。「なんということだ！」「許せない！」と板前は党委員会に呼び出された。そして査問。板前はこの「変態行為」の査問で、「プライベートは話す必要がない」とつっぱねた。それが「反抗的」で、同化しようと思われた。今は収容所に入れられるようだ。

しかし、いやだろうな。こんな「査問」は。連赤では、「ネックレスをしていた。ブルジョア的だ」「女にもてようと思って活動をしてるのではないか」といって査問された。これよりも、もっといやだろうな。「お前は本当に舐めたのか？」「お前は犬か！人間の尊厳はないのか！」と罵倒されるんだろう。舐めるのはマルクス・レーニン主義に反する。チュチェ思想（主体思想）に反するものだろう。だから、北朝鮮にはバター犬もいない。（いや、犬はいいのかな。舐めても）。

最後に家族の話だ。日本から北に行った人は、大体、日本人同士で結婚している。気心が知れてるし、床運動の時に「変態だ」なんて党に告発されないからだ。

でも、著者は、北の女性と結婚した。ワルだったし、頭がいいから、「変態行為」はしなかったのだろう。日本に帰ってきて、同じ境遇の脱北者に会った。北の女性と結婚し、妻子を北に残してきたんだ。皆、同じ悩みをかかえている。それは、心ならずも妻や子を向こうに置き去りにしたという罪悪感だ。この本を読んでいて、僕も、それは感じた。

「北に残してきた家族のことを思うと夜も眠れない」とその人々は言う。それは分かるが、違うだろうと著者は言う。そして、こう言ってやる。

〈お前の家で日本の水を知っているのはお前だけなんだよ。お前の女房も子供たちも朝鮮で生まれ朝鮮で育ったんだよ。日本に連れてきて幸せだと思うか。そりや、お父さんが「来い」と言えば、朝鮮人なら来るだろう。「ここで暮らせ」と言えば、そうするだろう。だけど、彼らは心の中で、お前が朝鮮で日本を思いこがれたように、朝鮮を思いこがれるだろう〉

これは彼のいう通りだと思った。一人で脱北した男の「言い訳」「弁解」と思う人もいるだろう。しかし、この本を読んで、「弁解」ではないと思った。彼は今は、闇ルートで、家族に送金している。置き去りにしたが、まさか、事前に相談するわけにもいかない。「別れ」も口に出来ない。そんなことをしたら、「共犯者」として、ひどい目に遭う。どうせ、恨まれるのならば、こういう形で恨まれる方がいい。そう思ったのだ。これも「究極のサバイバル」だ。というところで、オワリ。

近頃にない、衝撃的な本だった。2冊とも。

【だいありー】

- [1] 3月18日(金) 「創」の連載を書く。夜、柔道の稽古。
- [2] 3月19日(土) 夜、スポーツ会場に行く。久しぶりに、ランニングとフィットネス、ウエイトをやる。
- [3] 3月20日(日) 図書館で勉強。
- [4] 3月21日(月) 2時から、志の輔さんの落語を聞きに行く。面白いし、勉強になる。松元ヒロさんのパントマイムもいいね。頑張っている。
- [5] 3月22日(火) 新宿TSUTAYAにビデオを返しに行く。今は、「ウエクスフォード警部」のシリーズを見ている。それから、「談話室・滝沢」に行く。ここは昭和41年から40年も続いたという。それが突然、全店閉めるのだという。池袋やお茶の水にもあるが、全て閉店。ひどいよな。喫茶店はどんどんなくなっている。本を読ませないためのフリーメーソンの陰謀だ。国

家の愚民化政策だ。悔しいから、4時間もいて、豊田穰の『人間機関車・浅沼稻次郎』（講談社）と大塚英志の『戦後民主主義のリハビリテーション』（角川文庫）を読んでやった。

[6] 3月23日(水) 中野図書館に行って勉強。

[7] 3月24日(木) 「週刊金曜日」のインタビューを受ける。公安のこと。

[8] 3月25日(金) 一日中、「月刊タイムス」の原稿書き。夜、柔道に行く。

[9] 3月26日(土) 6時から東京ヒルトン。

睦月影郎の「著書200冊突破パーティ」。悔しい。そんなに儲かったのなら、皆におごってくれるのかと思ったら、1万円の会費をとる。ズルイ。この人はマンガも描く。「ケンペー君」の作者です。

【お知らせ】

[1] 3月30日(水) 7時から一水会フォーラムです。高田馬場のシチズンブルザです。演題は「明治神宮宮司への抗議活動の真実を語る」。講師は犬塚哲爾氏と木村三浩氏。

[2] 3月31日(木) 7時から高田馬場のライブドア塾です。違った。ライブ塾（トリックスター）です。「塩見塾」の第1回で、「日本のレーニン」と言われた塩見孝也さんが主宰します。ゲストは「高田馬場のホー・チミン」と言われた鈴木邦男です。テーマは「武士道」です。又、骨法道場の堀辺正史先生も特別出演します。

[3] 4月2日(土) 夜9時～12時、日本文化チャンネル桜で「左右激突 4対4」。塩見さんたちが出ます。

[4] 4月4日(月) ロフトで7時から「公安の内幕」。三井環、野田敬生氏と僕が出ます。他に、元警察官、元公安、さらにサプライズ・ゲストが登場します。

[5] 4月9日(土) 6:30から、雨宮処凜、土屋豊監督と私のトークです。土屋監督の『PEEP"TV"SHOW』の上映後のトークショーです。この映画は面白い。ビックリしました。だから、きっと楽しいトークになるでせう。渋谷のシネ・ラ・セットです。

[6] 4月13日(水) 7時から、ライブ塾で、朝倉喬司さんとトーク。「日本の自殺」です。

[7] 4月15日(金) 7時から浅草の木馬亭で、「右翼、民族派、テロリストによる魂吐き出しトークライブ」があります。古澤俊一、沢口友美さんらが出ます。

[8] ネイキッド・ロフトでも月に1回、トークライブをすることになりました。 「表現の覚悟」です。第1回目は4月22日(金)の7時から。綿井健陽さん(ジャーナリスト。『Little Birds イラク戦火の家族たち』監督)がゲストです。

[9] 下北沢の本多劇場で、「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演があります。(5月6日~11日。夜7時) ラストの5/11(水)の本公演の前、5~6時に、大塚英志さんと僕のトークがあります。「これから憲法と天皇制」です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年4月4日

「日本の自殺」（その一）＝『誘惑者』と自殺援助＝

(1) 「私の憲法前文」を大塚英志さんは書いている。何回も

朝倉喬司さんとは昔から知り合いだ。新左翼やアナキスト運動をして暴れていたらしい。その後、週刊誌の記者になり、今はフリーで活躍している。犯罪物が多い。だから、「犯罪ルポライター」と言われている。犯罪を扱ったルポが多いのだ。「犯罪者で、かつルポライター」というわけではない。かつては犯罪者だったが。 ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の授業で久しぶりに会った。2月2日(水)に、上野昂志先生の授業のゲストとして呼ばれたのだ。私も聞きに行った。上野、朝倉両氏はかつて「週刊現代」の記者だった。さらに、宮崎学もいた。凄いメンバーだ。この3人が記者だった時は、「週刊現代」も最強の週刊誌だろうよ。

授業が終わって、「じゃ、高田馬場で一杯」ということになった。「だったら、大塚さんも一緒に」と私が提案した。実は、この日は、大塚英志さんと会う予定になっていた。だから、上野、朝倉、大塚、そして、生徒たちで居酒屋に行った。超豪華講師陣と一緒に飲めるとあって、生徒たちも大喜びだった。

この時、「ライブ塾で話してくれませんか」と、朝倉、大塚両氏に打診した。上野先生はすでにやっている。「ああ、いいよ」と二人とも快く引き受けてくれた。そこで、朝倉さんは4月13日(水)、大塚さんは5月11日(水)になった。

大塚さんは、最近、憲法のことによく書いている。護憲なんだが、この憲法を護るために、もっとよく憲法を知り、自分のものにしてもらおうと思い、「私の憲法前文」を蒐集している。そして、たくさん集まった「私の前文」を本にしている。それも何冊も出している。驚いた。

『憲法前文』（角川書店）。『読む。書く。護る＝「憲法前文」のつくり方』（角川書店）などだ。全て、大塚英志さんの編・著だ。又、『戦後民主主義のリハビリテーション』（角川書店）などもある。

これだけ憲法のことを書いてるのなら、じゃ、憲法や天皇制の話をしましよう。となった。「これから憲法と天皇制」といったテーマで話してもらおうと思う。ただし、5月11日(水)は、ザ・ニュース・ペーパーの本公演が下北沢の本多劇場である。だから、こっちに会場を移し、夕方5時～6時まで、二人でトークをする。その後、ザ・ニュース・ペーパーの公演がある。だから皆さん、両方みて下さい。

“高田馬場で7時からライブ塾でやる”というから、行くつもりだったのに」という人には、申しわけない。「仕事があって、平日は5時じゃ行けんよ」という人もいるでしょう。その人のためには、又、機会をみつけて、大塚さんにライブ塾に来てもらいます。さて、朝倉さんの方は、テーマは何にしましょうか、と聞いた。「最近、オレ、自殺に興味があるんだ」という。自殺サイトにはまっているのかもしれない。「いや、最近の練炭自殺じゃなくてね。もっと昔の自殺だ。今、それを書こうとしている。だから、資料を集め、考えている」という。

「たとえば、“死なう団事件”なんてあったよね。あれは凄い。他にも、大宰、芥川の自殺。三島由紀夫、野村秋介の自決もあるし」という。

新井将敬の自殺もあるな。僕も「月刊タイムス」に書いた。柔道金メダリスト猪熊功の自殺もある。これも、「月刊タイムス」に書いた。

「死なう団事件」は保阪正康の名著『死なう団事件』（角川文庫）がある。サブタイトルは「軍国主義下のカルト教団」になっている。保阪さんは他にも、『三島由紀夫と楯の会事件』（角川文庫）という名著もある。保阪さんも昔から知っている。つい数ヶ月前にも会った。「今、“光クラブ事件”について本を書いてるんです。出来たら送ります」という。これは東大生の金貸し、山崎晃嗣の話だ。はじめは、商売はうまくゆくが、最後は失敗して、自殺。これも自殺だ。三島由紀夫は『青の時代』（新潮文庫）で書いている。しかし、これは小説だ。本物の「光クラブ」はどうだったのか。それを書きたいと保阪さんは言う。そして、綿密な取材をして、書いたのが『真説・光クラブ事件』（角川書店）だ。凄い本だ。もらって、すぐに読んだ。保阪さんの本は、この機会に、読み直してみようと思った。

そうだ。『死なう団事件』も、もう一回、読み直してみよう。朝倉さんともその話をした。

思い出した。「もう一つ、自殺を扱った名著がありますね」と、僕は言った。たしか、三原山で女子高生が自殺するんだ。それに付き添いで行った女子高生がいた。「付き添い」だから、友人が三原山の火口に飛び込んだら、確認して、本人は帰る。さらに、この女性は、その一ヶ月前にも同じことをしている。昔、この本を読んだ時は、震えた。ゾゾゾーッと背筋が寒くなつた。しかし、実話だったんだ。自殺志願者に付いて行って、見届けて、帰る。そして平然としている。それを二回も繰り返す。この女に、人間としての感情はあるのか、と思った。高橋たか子が書いていた。大作家・高橋和巳の奥さんだ。

何というか、自殺の「援助」をするんだ。自殺援助か。援助自殺か。今の自殺サイトは、仲間を募って、自分も死ぬ。しかし、三原山のケースは、自分は死なない。同行し、付き添うだけで、自分は帰ってきて、普通の生活をしている。たしか、『同行者』というタイトルだったんじゃないかな。と言ったら、「いや、違います。『誘惑者』という題ですよ」と朝倉さんは言う。エッ？ そうだけ。同行者が、誘惑して、友人を自殺させ、自分は、死なないで、帰ってくるのか。あるいは、自殺志願者が、「一緒に死んで」と誘惑するのに、その誘惑には負けずに、自分だけは踏みとどまって、帰ってきたのか。よし、それも読み直してみようと思った。4月13日(水)、朝倉さんがトークする時のテーマは、「日本の自殺」だ。その中心をなすのが、この二冊だ。だから、事前に読んでおかなくちゃと思った。

(2) 自殺じゃない。世界の底の底の火と合一するんだ！

昔、読んだ本を再び読み返してみるのもいいもんだと思った。新たな発見がある。「えっ、本当に読んでいたのかよ」と思った。当時と今では、問題意識が違うから、全く別の本を読んだような感じだった。では、『誘惑者』と『死なう団事件』だ。

はじめに、高橋たか子の『誘惑者』だ。講談社文芸文庫から出ている。文庫なのに1100円と高い。でも、部数は少なくともいい本を出そうとするから高いんだ。それだけの価値はある。1995年にこの文庫は出ている。僕は20年以上も前に、単行本で読んでいた。文庫本の裏表紙に、本の内容が載っている。〈事件〉の概要も分かるので、紹介しよう。

〈噴煙をあげる三原山に、女子大生が二人上っていった。だが、夜更けに下山してきたのは一人きりだった。ちょうど一ヶ月

前にも、まったく同じことがあった。

自殺願望の友人二人に、それぞれ三原山まで同行して、底知れぬ火口の縁に佇ませた自殺帮助者、鳥居哲代の心理の軌跡を見事に辿り、凄絶な魂のドラマを構築した。高橋たか子の初期長篇代表作。泉鏡花賞受賞〉

うん、泉鏡花賞は分かるような気がする。鏡花の「高野聖」を思い出してしまった。あれだって、「誘惑者」だ。本人が自覚するかしないかは別にして、美女が男を誘惑する。誘惑された男は、皆、動物に変えられる。馬や犬や豚、猪になって、それでもその女のもとを離れない。昔、読んだ時は、幻想的な話で、現実ではありえない話だと思った。しかし、今、思うと、こんな女はいる。そして、心は豚や猪や馬に変えられてしまった男どもいる。本人は人間のつもりでも、本当はもう動物なんだ。だから、(女のために)使い込みもやるし、人と殺しもする。

では、高橋たか子の『誘惑者』だ。あれ?! 女子大生だけ。と思った。それに、昭和25年3月19日に事件は起こったと書かれ、翌日の新聞も引用されている。私が7才の時だ。主人公の鳥居哲代は昭和5年生まれだから、今、生きてたら74才だ。いや、きっと生きてる。こんな凄い体験をした人間だ。そう簡単に死ぬはずはない。

在学中にあんな大事件があったんだ。大学も途中でやめたのかもしれない。70すぎてから、じゃ、もう一度、大学に入り直そうと思って、社会人入学したのかもしれない。そうしたら、今も女子大生だ。そして、「死にたい」ともらす同級生に、「じゃ、附いていってあげるわ」と囁いているのかもしれない。あるいは、最近、急に増えた練炭自殺は、全て彼女が裏で糸をひいているのかもしれない。

ともかく、事件は昭和25年3月19日に起こっている。この時、鳥居哲代は20才。昭和5年生まれだ。そして、京大文学部心理学科の1回生だ。へエー、京大生だったのか。塩見孝也さんと一緒に。同級生かな。いや、塩見さんはもっと若いか。きっと上田哲さんと同じ位だ。今、74才だから、同級生だったかもしれない。今度、上田さんに会った時に聞いてみよう。

昭和25年3月に自殺したのは、織田薰(21才)。同志社大学文学部英文科1年だ。彼女が自殺した時、鳥居は付き添いで、火口まで行って、自分一人だけ帰ってきた。

しかし、実は、この1ヶ月前にも同じことをしていた。砂川富子(20

才）。彼女が自殺した時、鳥居はやはり付き添って行った。砂川は、大学生ではない。同志社女専英文科を卒業したあと、帰郷せず、京都で下宿していた。家に帰ると、結婚させられる。もう自由はない。いやだ。といって、京都にとどまり、（今でいう）フリーターだ。家からは母親が出てきたりして、大変だ。追いつめられて、精神のバランスを崩す。「死にたい、死にたい」と鳥居に訴えるようになる。そして言うんだね。死ぬんなら三原山がいいと。

〈なんといっても火山よ。壮絶だわ。煮えたぐってる炎にむかって垂直に墜落していく。死体は残らない。完全燃焼よ。死ぬというより、世界の底の底の火に合一するみたい。苦しまないで、苦しんでるという意識もなくて、あっという間に死が成就する---〉

いつの世にも、自殺を美化する人はいる。「清い死を夢みた」というフレーズがあったな。ペギー葉山の「学生時代」という歌に。「讃美歌をうたいながら 清い死を夢みた」だったかな。あれも女子大生か。

鳥居は砂川の自殺をやめさせようとする。しかし、砂川富子の夢みる「清い死」の決意が固いことを知って、鳥居は、説得をあきらめる。そして、頼まれて、同行役を引き受ける。でも、死にゆく二人の会話が乾いている。京都から東京に行き、そこから船に乗って三原山に行く。しかし、砂川は、三原山に何と、セーターを持ってきていた。カバンに入れて…。

〈「海は風が強いでしょう。風邪を引くといけないから」と砂川富子は言った。

…死ぬ人が風邪を引くのを心配している〉

(3) 生きてたら、この『誘惑者』本人に会ってみたいね

矛盾している。変な話だ。しかし、人間は矛盾的存在なんです。こんなことは、いくらでもある。死刑囚が病気になったら、刑務所側は、医者を呼び、あるいは、入院させる。必死になって治そうとする。治して、元気な体にして、それから死刑にする。だったら、重病の時に、死なせてくれよ。と思っても、そうはゆかない。そんな不人情なことはしない。いや、自由勝手なことは許さないんだ。

でも、砂川富子がセーターを持ってきた、という話は、ウソだと思った。ありうる話だが、高橋たか子の考えた小説家としてのフィクションだと思った。本当にこんな会話があったのか。警察の調書にあったのか。僕は違うと思う。

関ヶ原の合戦で敗れた石田三成は、刑場に引かれる時、沿道の人が柿をくれようとした。しかし三成は受けとらなかった。「柿は体を冷やす」といつて。「柿は消化が悪い」だったかな。三成を引きすえていた役人が言ったんだな。「どうせすぐ死ぬくせに。体の心配をしてる」と。そして笑った。ところが三成は言った。「燕雀いすくんぞ鳳凰の志を知らんや」

小さな鳥は、大きく立派な鳥の志など知らんのだ。アホめ、と言った。武士は、たとえどんな時でも、最後の最後まで、体を大事にし、闘うもんだ。そういうことなんだ。

その話を、ちらっと思い浮かべた。高橋たか子だって、この話を思い浮かべながら、砂川富子のセリフを書いたのではないか。こういう推測や、深読みはいけないのかもしれない。もっと純真な心で小説を読まなくちゃいかんのかもしれない。砂川はさらに言う。

〈「もうすぐしたら、この時計あげるから」

砂川富子は腕時計を持ちあげて見せた。

「いいわよ。気持ちがわるい。あなたがいなくて、時計だけうごいていれば」〉

これも凄い会話だ。でも、本当は小説家の考えた言葉だろう。砂川や、鳥居が乾いていて、恐ろしいというのは、作者が乾いていて、恐ろしいからだろう。

だって、高橋たか子は、この事件を昭和40年に初めて知って、衝撃を受け、「これは私だ！」と思うのだ。それは、この本の「解説」に書かれている。山内由紀人が書いている。「朝日ジャーナル」の紹介記事で高橋たか子はこの「三原山」事件を知る。そして、こう言ってる。

〈「その内容が、私の存在全体を巻きこんだ。…その時、私とともに、私の中に、いのちの魂のような誰かがすっと一直線に立ち上がった。その自殺帮助をした女学生だ、という気がしたし、私はその女だと私は思った〉

山内は書いている。「この、私はその女だ、という理不尽な、強い、一体

感は、ただちに、その女を主人公にした長編小説を書こうという意図へと移行した」。

「理不尽な一体感」と山内は言っているが、理不尽ではない。似ている。いや、そっくりだ。だから、自殺者と同行者の会話もはっきりと分かるのだ。

あるいは、高橋たか子は、本当は、「その女」だったのかもしれない。年だって合う。本当は鳥居哲代だった。その後、作家の高橋和巳と結婚し、姓も名も改めて、「高橋たか子」となった。学生時代の嫌なことは全て忘れていた。ところが…。

そんな運命的なことがあったら、面白いのに。ところで、何で「同行者」じゃなくて、「誘惑者」なのか。これは、鳥居が砂川に言われたんだ。「あなたが、私を自殺に追い込んだのよ！」と。「あなたが、自殺するように誘惑したのよ！」と。話を聞いて、相談に乗るふりをしながら、無視したり、私の願いを裏切ったりした。だから私は死ななくちゃならない…。そういう叫びなのだ。詳しくは、本を読んでもらいましょう。

二人目の織田薰の時も同じだった。そうそう。この三人は同志社の高校の同級生だった。仲良しの三人のうち二人は自殺。一人は、その二人の死をみとった。

三原山の自殺というのは、砂川が言うように、きれいなものではない。「清い死」ではない。火の中にストンと落ちないで、途中の岩か何かに落ちる。そこで煙にまかれながら、苦しみながら、じわじわと死ぬんだそうな。やだね。鳥居は、そのことを知人から聞くが、あえて二人に教えない。

砂川の場合、黙って、飛び込むのを見つめていた。しかし、織田の場合は、頼まれて、背中を押してあげた。本当の「援助自殺」だ。

〈鳥居哲代は、何でも出来る----と自分に言い、織田薰を押し
た。「火口の中は、ぱあっと明るい」と、さっき無理に言わされ
たことを、今度は自分から言ってみた。〉

これが、この小説のラストだ。「火口はぱあっと明るいわよね。そうよ
ね」と言われて、「そうよ」と鳥居は言ったんだ。「優しい」気持ちで。

これで終わりだ。『死なう団事件』は次にしよう。ともかく、この鳥居哲
代は凄いよね。生きてるだろうから、会ってみたいね。もしかしたら、高橋
たか子本人なのかな。と思っていた。しかし、これは違った。嘘だった。

「解説」を読んで分かった。

全てが嘘ではない。三原山で自殺した女性がいた。又、それに付いていた女性がいた。二度も。これは本当の事件だ。しかし、実際は昭和8年の事件だった。それを高橋たか子は、敗戦後の昭和25年にした。又、東京の女子高生の話なのに、京都の女子大生の話にした。高橋は自分に引きよせて、話をつくり変えたのかもしれない。

そうすると、鳥居哲代はもう生きていないのである。昭和8年（1933年）に20才だとすると、1913年生まれだ。そうすると、生きてるとすると93才か。案外、しぶとく生きてるんじゃないのかな。本人は手記を書いてないのだろうか。あるいは戦後史の本にこの事件のことはもっと詳しく出てるかもしれません。図書館で探してみよう。そして、4月13日(水)には、朝倉さんにも、もっと詳しく聞いてみよう。

【だいありー】

[1] 3月27日(日) 喫茶店を三軒ハシゴして、「決定版 三島由紀夫全集」（新潮社）の（第32巻）を読む。800ページもあるから、読むのも根気がいる。「第一の性」という奇妙な、でも面白い論文も載っている。前田日明さんが読んでたっけ。

[2] 3月28日(月) 3時半から映画美学校で、綿井健陽さん監督の映画「Little Birds--イラク戦火の家族たち」を見る。イラク戦争の直前から、イラクに渡り、戦争中もずっとカメラを回していた。イラクの事は少しは知ってると思ったが、全く僕は知らなかったと思った。これは凄い映画だ。真実のイラクが描かれている。映像の前には活字なんて無力だと思った。4月23日から新宿K's Cinemaで上映される。そして前日、4月22日(金)にはNaked Loftで、私と綿井さんのトークがある。ぜひ来て下さい。

[3] 3月29日(火) 週刊金曜日の取材を受ける。憲法について。夜、柔道の稽古。

[4] 3月30日(水) 大塚英志さんと会う。5月のトークの打ち合わせをする。終わって、一水会フォーラムに行く。

[5] 3月31日(木) ライブ塾で第一回「塩見塾」。ゲストは私。テーマは「武士道」。満員だった。骨法道場の堀辺先生も特別出演してくれた。大学生など若手もトークに参加し、盛り上がった。

【お知らせ】 [1] 4月4日(月) 7:30からロフト。「公安の内幕」。三井環、野田敬生、そして私が出ます。元警察官、元公安も来ます。凄いメンバーです。これだけが一堂に会することはもうないでしょう。

[2] 4月9日(土) 6:30から土屋豊監督、雨宮処凜と三人でトーク。映画

「PEEP"TV"SHOW」について。これは映画を観たが、文句なしの傑作です。現代日本をよく、表わしている。問題提起であり、又、エンターテイメントにもなっている。渋谷シネ・ラ・セットで。（東急本店前、シネ・アミューズ下）。

[3] 4月10日(日) 午後1時から、東中野の骨法道場で堀辺正史先生の「武士道セミナー」。

[4] 4月13日(水) 7時から高田馬場のライブ塾。朝倉喬司さんと「日本の自殺」。

[5] 4月22日(金) 7時から、Naked Loft。tel 03(3205)1556。綿井健陽さんとトーク。テーマは「Little Birds--戦争を伝える覚悟」です。

[6] 5月11日(水) 下北沢・本多劇場で、大塚英志さんとトーク。午後5時から6時。「これから憲法と天皇制」。6時半から、「ザ・ニュース・ペーパー」の公演です。

[7] 6月8日(水) ライブ塾。元連合赤軍兵士の植垣康博さんが登場します。ご期待下さい。それに何と、中村うさぎさん（作家）も一緒に出ます。さらに、風見愛さん（ストリッパー）も出ます。

[8] 私の『新右翼・改訂増補版』（彩流社・2200円）が、4月10日発売です。355ページです。グンと厚くなり、内容も充実しました。1988年に出した時は220ページですが、改訂を重ねるたびに、どんどん増えて、今は、130ページ以上も増えてます。又、表紙もグンとよくなっています。歴史的資料的価値もあります。

[9] 現在発売中の「わしズム」（第14号）に一水会代表の木村三浩氏の論文が載っています。また、「サピオ」の「新ゴーマニズム宣言」に木村氏のことが出ています。

[10] 月刊「創」（5月号）は4月6日発売。「月刊タイムス」（5月号）は4月11日発売です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年4月11日

「死なう団事件」と三島由紀夫 =「日本の自殺」その二=

(1)余りに純粋で非妥協的だったから、弾圧された

2.26事件の翌年に、この事件は起こっている。「死なう団事件」だ。何とも奇妙で不気味な事件だ。「死のう！死のう！」と叫びながら、次々と自殺する。別にテロではない。他人は傷つけない。ひたすら自殺する。そして、自殺を試みる。アメリカの「人民寺院」のようなものか。ちょっと違う。今の「集団自殺」と同じか。これとも違う。あくまでも純粋な宗教だ。それも、「イエスの方舟」を思わせるような、小さな、ほのぼのとした宗教的集まりだった。それが既成宗教への批判を通して、自分たちは「死ぬ気でやる」と思いつめる。「死を賭して」「死ぬ気で」という言葉は、今の右翼や左翼もよく使う。

2.26事件直後の不安な世相の中、「うさんくさいもの」「反体制的なもの」と思われ、権力から徹底的に弾圧される。しかし、反抗手段もない信者たちには、「死ぬ気でやる」という決意・覚悟だけが残った。そして、それを実行するしかなかった。眞面目に、思いつめていたが故の決死行だった。久しぶりにこの本を読んでみた。それが私の感想だ。

たぶん、30年ぶりに読んだ。保阪正康の『死なう団事件・軍国主義下のカルト教団』（角川文庫・619円）だ。30年前に読んだから、もう内容はほとんど忘れていた。不気味な集団がいたんだな、と思っていた。ところが、今、読み返してみると、かなり身近に感じられた。田中智学とも関係があるし、日蓮宗を基にした北一輝、井上日召をも想起させる。それに、この本を書いた動機が三島事件だった、と保阪は言う。これにも驚いた。

保阪が、この『死なう団事件』の単行本を刊行したのは、昭和47年2月

だ。三島事件の2年後だ。今から33年前だ。出た時に僕はすぐ読んでいる。当時は、産経新聞の無能記者だった。あっ、記者じゃなかった。広告局に勤めていて、青い服を着て、広告欄の割り付けやら、校正をやっていた。

この保阪の本が文庫本になったのは平成12年9月だ。4年前だ。その「文庫本のまえがき」には、三島事件との〈関連〉が書かれている。

〈私がこの書を書こうと思いたったのは、幾つかの稿でもふれたことがあるのだが、昭和45年11月25日の三島由紀夫事件に触発されてのことだった。当時、私は一編集者であった。この日の事件を耳にしたときも思想的、社会的にはとくべつの感想はなかった。三島の思想にはほとんどといっていいほど関心はなかつたのである。それなのに、この書を書くのを思いたったのは、その檄文にある。三島の撒（ま）いた檄文のなかに、「共に死なう！」という一語があったからである。「死なう」という語をどこかで見たことがあったなと思いだし、そういえば昭和初年代から十年代にかけて「死なう団事件」と称する奇妙な事件があったと気づいた。それからの一年、まだ世間では知られていなかったこの事件について、関係者を探し出し、新しい資料を発掘し、そして一冊の記録としてまとめたのである。私にとっては、この書は旅立ちの書にもなった〉

保阪は1939年生まれだから、今は65才だ。31才の頃にこの『死なう団事件』を書いた。彼のデビュー作だ。三島事件には特別に関心はなかったというが、「死なう団」を書き、さらに「楯の会」の阿部勉と出会いによって、どんどんと、のめりこむ。そして、名著『三島由紀夫と楯の会事件』（角川文庫）を書くことになる。（阿部勉との出会いについては、この本の後書きに詳しく書かれている）。

さて、三島事件に触発されて保阪はこの死なう団事件」を書いた。ところが出版された時（1972年）は、連合赤軍事件の年だった。この本は、サブタイトルとして、「軍国主義下の狂信と弾圧」と書かれていた。反権力闘争という視点が強い形で著された。軍国主義に傾いていく不安な世相におののく庶民が信仰に救いを求めたのも当然だった、と保阪は推論する。

〈先の時代背景のもとで、当然ながら本書は刊行時には反権力闘争という読み方がされた。連合赤軍の自閉的な武力闘争と共に通

するところがあるのではないかと私はコメントを求められた。
しかし、私はこうした暴力的な革命路線に反感をもっていたので、そうした取材には応じなかった。

過激派の勉強会でこの事件を語るよう求められましたが、私は関心がないという理由で断わったという記憶もある。死なう団の人びとは、暴力による革命を求めていたわけではなく、自らの信条にもとづいて自らの生命を武器に使って権力の不当な拷問や弾圧に抗していたというのが真実だったからである〉

(2) 弾圧した国家の方が「死なう団」ではなかったか！

ちょっと、逆になったが、「死なう団」の説明をしよう。この本の裏表紙に書かれた文が、一番分かりやすい。引用ばかりで気がひけるが、紹介してみる。

〈「死のう！死のう！死のう！」。

昭和12年2月17日、国会議事堂、外務次官邸、宮城前、警視庁、内務省で、5人の青年が「死のう！」と叫びながら次々と自決を試みた。さらに翌13年3月、盟主が病死したとして、団員5名が殉死した。当時、日本中を震撼させた、“死なう団事件”である。

既成宗教の墮落を批判した彼らは、なぜカルト化していったのか。どうして死を選ばなければならなかったのか。そして事件発生から60余年後の今、明らかにされた新事実とは…。気鋭のノンフィクション作家が〈昭和史の謎〉に挑んだ名作！〉

今、読み返してみると、ただただ、かわいそうな教団だ。社会に反抗したわけではない。反社会的事件を起こしたわけでもない。必死に信仰に生きようとした人々だ。死ぬ覚悟で宗教生活をした人々だ。しかし、その余りの純粋さ、非妥協的純粋さが、まわりから恐がられた。権力からは「うさん臭いもの」「危ないもの」と見られた。そして、何もしてないのに逮捕され、拷問される。「何かやろうとしてるんだろう」「吐け！」と。中世の魔女裁判のようだ。そして、「死なう団事件」という不気味な名前だけが残った。彼らが名乗ったわけではないのに。この保阪の本がなければ、僕だって、知

らなかった。「あっ、昔、そんな恐ろし気な集団がいたんだな」と思うだけだ。

さらに、不気味な事に、何か、陰惨な事件が起きるたびに、「昔も死なう団事件であったね」と思い出される。連合赤軍事件の時に。オウムのサリン事件の時に。そして、練炭しちりんの「集団自殺」があるたびに…。保阪は、それらとは「天と地ほどの開きがある」と言う。しかも、「死なう団」の場合は、誰も強制していない。盟主の江川桜堂はそうした死を戒めていたのだ。

国家権力は、彼らを「うさん臭い」「不気味だ」と思って弾圧した。そして、「死なう団事件」という名前まで付けて。しかし、そんな弾圧をした国家の方がむしろ、「死なう団」ではなかったのか。と保阪は、凄いことを言う。この部分は、読んでいてハッとした。

〈もうひとつ重大な事実を汲みとってほしいと思う。それは昭和十年代の日本は、国家それ自体がカルト教団と化していたということだ。とくに昭和8年ごろからの偏狭なナショナリズム、国際社会での孤立、天皇神権説に傾倒していったあぐくの臣民意識、生命に対する軽視、事実や事象を自らに都合のいいように解釈する主觀主義、こうしたカルトに共通する社会をつくりあげ、そしてあの太平洋戦争に突入していった。

三年八ヶ月つづいたあの戦争も、仔細（しさい）に分析していくれば、カルト教団にも似た解体への方向に走っていったことが理解できるはずだ。「一死報國」という国家スローガンは、まさに「死なう」ではないか〉

これは、まさに本当だ。ズバリと本質を衝いている。

「死なう団」とは彼らが名乗った名前ではない、と言った。はじめは、「日蓮会」といった。大正14年、東京・蒲田駅前の広場から始まった。学生風の男たちが辻説法をしていた。いわば、原理研究会（統一教会）のような感じだったのだろう。

日蓮会は教団という大きさではない。勉強会のグループに名称をつけた程度だ。全員、黒い袴（はかま）に黒い羽織を着用し、太鼓を打ち鳴らし、白地に墨で「日蓮聖人直参」の旗を掲げた。

街頭演説は、蒲田から始まり、主に、池上、川崎、横浜の駅前で行なわれた。そこは京浜工業地帯の中にあり、底辺の労働者が支柱を求めてさまよっ

ていたからだ。時々は池袋や上野にも行ってみたが、そこでは人々は関心を示さなかった。だから、又、蒲田に戻っていった。

彼らの演説は過激だった。ちょうど日蓮の辻説法がそうだったように。日蓮は他の宗教を全て否定し、そんなものを信じていたら地獄に落ちるぞ！と人々を脅した。この攻撃性は初期の創価学会も引き継いでいる。

日蓮会もそうだった。こう演説した。

「大部分はもう看板に偽りありだ。偽法華となった宗門を眞の法華と信じて、間違ってこそ当たり前となってしまった。そして何ということだ。何としたことだ。奴らは、“南無妙…”“私は法華の僧侶でござい”“これが法華だ”などと言っているのだから開いた口がふさがらぬではないか」

火を吐くような演説だ。そして既成仏教への激しい批判。まるで日蓮のようだ。まるで、マルチン・ルターのようだ。そう。彼らも「宗教改革」をしようとしたのだ。

「自分たちの正しさを主張したいのなら、それだけを言えばいいだろう」「何も、他宗、他派を罵倒する必要はないだろう」。…と、今の僕らなら思う。冷静に、客観的に見たら、そう思う。しかし、当時の彼らの熱情、激情は、そんな「常識論」を超えている。真面目で、信仰心あついが故に、他の宗教の堕落が許せなかつたのだろう。そして、自らの正しさ、熱心さを証明するものとして、「死ぬ覚悟」を言う。さらに、挑発的な「腹切り」の覚悟まで口にする。たとえば、こんなふうに。保阪は書いている。

〈日蓮会を名のった以後の、彼らの説法はすこぶる挑戦的であった。説法の前に、「私があなたがたに負けたら、この場で腹を切ります」とか、「私がいうのが間違っていたら、数珠（じゅず）を切ってしまう」とい、聴衆の毒気を抜くのを常とした。説法の内容も、理づめにじゅんじゅんと説くのではなく、どぎつい侮辱の言葉を吐きちらしながら、聴衆を説得していくので、一部の人びとには人気があった〉

(3) 左翼は魚。右翼は鳥。そして「死なう団」は…

今ならば、こんな、どぎつい演説は、最初から毛嫌いされると思うが、当時としては人気があったのだ。そういうやり方が、「はやり」だったのかもしれない。でも、今から見ると「異常」だ。議会でも、「自分が間違ってい

たら腹を切る」と啖呵を切った議員がいたが、「腹を切る」という表現は、正しさの証しだったのだろう。

今は、そんな、どぎつい言葉は使わない。いや、待てよ。運動家のスローガンにはあるか。「…絶対阻止」「…死守！」「…粉碎！」とか。思い出した。一水会の集会に野村秋介さんが来て話したことがあった。こうしたスローガンに対し、「バカなことを言うな！」と叱られた。

「死守というのは、死んでも守るということだ。守れなかったら死ぬということだ。じゃ、死んでみろよ！」と。

これにはビックリした。乱暴なことをいうと思った。「これはスローガンじゃないか。少し位、大袈裟に言うのは仕方ないだろう」と、心の中で思った。でも口には出せない。それを見透かされたようだ。

「スローガンだから、いいと思ってる人もいるだろうが違う。言葉は軽々しく使ってもらっては困る。言ったことはやる。やれないなら、景気のいいスローガンを書くな！」と叱られた。

今、考えると確かにそうだ。「死なう団」は、「切腹してみせる」「死ぬ覚悟だ」といつも言い、結局、その言葉で引きずられた。そんな気がする。そして、権力の弾圧や、他宗派の妨害があり、追いつめられる。自分たち本来の活動は出来なくなり、「死ぬ決意」だけが残り、それだけが暴走した。そんな気がしてならない。

この保阪の本を読む前は、「いくら何でも、次々に自殺することはないだろう」と思った。不可解だったし、不気味だった。しかし、この本を読んで、かなり納得した。弾圧されて、本を出すことも出来ない。印刷所でひそかに刷っても、すぐに押収されてしまう。左翼や右翼も弾圧されたが、同じように、彼らも徹底的に、目をつけられ、弾圧された。「機関誌をつくりたい」という夢すらも、粉微塵に碎かれる。その時に、右翼、左翼の例も出ていている。

〈桜堂は機関本『死なう!!』の出版を画策するようになった。

青年党でつくり、売るのである。内務省のいう「安寧秩序の妨害」とならなければ許可されるのなら、筆を曲げてでもとにかく出版し、全国に配布するのだ。情勢が厳しいのなら秘密出版でもよい。彼は印刷所を密（ひそ）かに探し始めていた。

「左翼はびくの中にいる魚である。搜しだすのが難しい。それに比べて右翼は木に止まっている鳥である。見つけるのは易しい

が、飛ぶ瞬間につかまえなければならない」と特高側の著作物は述べているが、桜堂は「われわれは木に止まる鳥で、飛ぶふりをして飛ばず、飛ばないふりをして飛ぶかもしれないのだ」と口走り、機関本の出版は青年党が飛躍するためには絶対に欠かすことのできないことなのだと強調した〉

フーン、特高は面白いとえをするものだと思った。左翼は魚で、右翼は鳥か。本来なら、両方とも鳥だ。フランス革命の議会は、ちょうど鳥が羽を抜けたように見えた。右の翼（=右の席）には保守派がいて、左の翼（=左の席）には急進派がいた。そこから右翼、左翼という言葉は生まれた。だから、右翼も左翼も、元々は鳥なんだ。

そして、最も鳥らしいのは右翼だ。いつも木の上にとまっているから、すぐに分かる。でも、とまってるだけでは逮捕できない。飛ぶ瞬間に捕まる。時には特高が誘ったりして、飛ばすのだろう。「誘惑者」だ。でも、飛ぶ気のない右翼も多い。飛ぶ気力もない。そして毎日、酒におぼれ、千鳥足で家に帰る。なきな鳥たちだ。「人は昔々、鳥だったのかもしれないね」という加藤登紀子の歌があったね。だから、こんなにも空が恋しいんだ。…と歌っていた。

鳥の話になったところで、今回のお話も、これがトリ。では4月13日(水)の朝倉喬司さんとのトーク「日本の自殺」で会いましょう。「死なう団」、そして、三原山自殺、「誘惑者」。さらに、現代の「集団自殺」などを通じて、日本と日本人について考えてみます。

【追記】

松崎明さんと僕の対談本『鬼の闘論』（創出版）が、話題になり、売っています。朝日新聞、毎日新聞、東京新聞などにも大々的に広告が出てました。又、出版業界専門紙の『新文化』（3月24日号）と、『レコンキスタ』（3月号）に、書評が出てました。紹介しましょう。

A horizontal row of 20 empty rectangular boxes, likely used for a survey or form where respondents can draw or write their answers.

『新文化』（3月24日号）

『鬼の闘論』 いでよ変革者！

松崎明、鈴木邦男/著、創出版/刊

松崎明：元革マル派・国鉄動労幹部、鈴木邦男：元一水会代表--かつての左右両陣営の論客が相対し、現在の日本が抱える諸問題について語り合ったのが本書。ただしタイトルから想像されるような、シノギを削る烈しいやり

とりはそこにはない。人生の円熟期を迎えた二人が、現実認識にたって闘いに区切りをつけ、しかし変革はあきらめないというスタンスで、5つのテーマ（公安警察とメディアの責任/ナショナリズムと愛国心/護憲か改憲か・イラク戦争と自衛隊/民主主義と戦後革新の限界/時代を変革する力は）について対論する。

「今回の討論を通じて『右翼』『左翼』という概念、レッテルは何の意味も持たないと考えさせられた」という松崎と、「右と左があるのではない。話し合える人と話し合えない人がいるだけだ」という鈴木。そして「左翼は死滅し、右翼は乗り越えられた」（鈴木）いま、形式的な論争ではなく中身に入った論議こそが大切だと説く。新たな保守化、階級化が進む日本の現状を見れば、それは正しいのだろう。従来の二極対立では対応できない大きな変容が、二人の穏やかな対話によって浮き彫りにされた感じだ。

A horizontal row of 20 empty rectangular boxes, likely used for input fields or placeholder text in a form.

書評『鬼の闘論』

『レコンキスタ』（3月号）

革マル派ナンバー2の地位にあり、動力車労働組合東京地本委員長時代に「鬼の勤労」と呼ばれた労組を率いてきた松崎明氏と、弊会鈴木邦男顧問との対談を収録した本が、本年二月に発刊された。『鬼の闘論』（創出版）である。

左右大激突になるかと思いきや、そうはならない。考えてみれば両氏とも、左右両陣営の中では異端者だ。革マル派という左翼内で孤立した異端党派の中から、さらに異端として抜け出したのが松崎氏だ。かたや鈴木邦男顧問も、『腹腹時計と〈狼〉』の上梓以来、異端的存在とみなされている。

異端者同士でウマが合うと言いたいのではない。四十年あまりの活動歴の中で、極限状態におかれたこともあるだろうが、常に自己を失わなかつたことで、少なくとも一般大衆が持ち合はせている良識を保ってきた。その良識を共有しているからこそ、罵倒し合うこともなく、真摯な対談が可能になつたのだろう。松崎氏はこう言う。

〈私と鈴木さんの討論があんまり闘いにならないのは、形式論議ではなくて中身でつめているからですよね。真面目に考えてる人間同士なら、形式論議でぶつかって中身に入らないというふうにはならない気がするんです〉

単なる「ものわかりのいい右翼・左翼」ではない。どんなに自我の確立し

た人間でも、党派の論理に埋没しがちな中で、自分を見失わずにいるのは容易ではない。それは、次の鈴木顧問の発言に示されている。

〈同じ考え方の人たちが集まると、どうしても言葉の激しい方が勝ちますよね。それが運動に対する真面目さだと真摯さの表現だと思われますよね。

右翼の方でもそうなんです。共産党とかどことか、やっつけろ！殺しちゃえ！という激しいのが勝つんですよ。「いやみんなで話し合いで」とか「議会に出よう」とか言うと、それは敗北主義だと。それよりも、今ある危機の中で、倒せとか殺せとか、テロだとかクーデターだとか。具体性は全くないんだけど、そういうのが潔くてやる気があると思われちゃう。「いや待ってよ」なんて言うと、それは日和見だと逃げだとか。松崎さんたちの方もそうなんでしょうね。武器をとれ！革命だ！と（笑）〉

大衆に対する姿勢について、松崎氏はこう言う。

〈民衆が権力者の側に立つ。これはファシズムだと思うんです。ファシズムは一党独裁のイメージが強いけど、これは権力による民衆の組織化です。ヒトラーだって、国会で多数派になるわけですから、そういう民衆の愚かさというか、マスコミ等の宣伝に乗せられるというか、そういう事態の中で彼らが歴史の真実を見失ってしまって、結局権力の側で動いてしまったわけです〉

大衆を侮らないが礼讃もない。等身の大衆と向き合っているのだ。労働現場に身を置いていたから得られた姿勢だろう。鈴木顧問も会社員や教師の経験を通して、大衆と向き合ってきた。そんな両氏の対談である。運動論としても必読の書だと言えよう。（成島健二）

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

【だいありー】

[1] 4月1日(金) 猪野健治『日本の右翼』（ちくま文庫・840円）の見本誌が出来た。僕は「解説」を頼まれて欠いた。とても勉強になったし、考えさせられた。4月10日、発売なので、ぜひ買って下さい。

[2] 4月2日(土) 午後3時から、「立川談慶真打昇進披露パーティ」。赤坂プリンスホテルで。凄い人だった。志の輔さん、高田文夫さん、松元ヒロさんらに会った。慶應大学教授の小林節先生にも会った。談慶さんは、慶應大

出身の唯一の落語家だ。卒業後は、ワコールに勤め、そこを辞めてから、落語家の道に。初めは「立川ワコール」だった。長い前座、修業時代を経て、やっと真打ちになった。努力の人だ。さらに大きく飛躍するだろう。

[3] 4月3日(日) 本の校正があって前日、徹夜。さすがに徹夜はもうキツイ。夕方、塩見同志と会う。密談。国家転覆の謀議。

[4] 4月4日(月) 7:30からロフト。「創」トークライブ。「公安の内幕」。ゲストは5人。三井環（元大阪高検公安部長）、野田敬生（元公安調査庁職員）、真田左近（元静岡県警公安警察官）、黒木昭雄（元警察官・ジャーナリスト）、そして僕だ。

大盛況だった。この手の集まりは、初めてだ。一人一人の話が濃い。「取り締まり」の現場にいた人たちだから、説得力がある。司会は「創」の篠田さん。僕は司会補助という感じだった。この時のダイジェストは次の「創」に載るそうだ。

[5] 4月5日(火) 午後2時。日本ジャーナリスト専門学校入学式。中野ZEROホールで。元NHKの日高義樹氏（国際ジャーナリスト）が記念講演。午後6時から、「論座」10周年パーティ。朝日新聞社で。「論座」には時々、書かせてもらってる。2年ほど前、「噂の真相」の岡留さんと対談したのは印象に残っている。「言論の自由」「言論の覚悟」について話し合った。国会議員や大学教授、評論家、ライターなど、大勢の人たちが来ていた。

[6] 4月6日(水) 中野図書館。いろんな全集に挑戦している。三島由紀夫全集（全43巻）は9冊読んだ。「新潮現代文学」（全80巻）は56冊。司馬遼太郎「街道をゆく」（全43巻）は26冊読んだ。中里介山の「大菩薩峠」（全20巻）は7巻まで読んだ。「日本の詩歌」（全31巻・中央公論社）は10巻まで読んだ。さらに今、「吉川英治歴史時代文学」（全80巻・講談社）に挑戦している。まだ3冊目だけど。

夜、講道館。肉体的にも挑戦している。

[7] 4月7日(木) 新橋演舞場で「ヤマトタケル」を観る。19年前にも観たが、あの時はよく分からなかった。去年、『ヤマトタケル』（現代書館）を書いたので、今、見ると、分かる。又、新たに考えることがある。

[8] 4月8日(金) 午前10時、河合塾コスモの入塾式。その後、ゼミ。会議。

[9] 4月9日(土) 6時半から、映画「PEEP"TV"SHOW」の土屋豊監督、雨宮処凜とトーク。渋谷シネ・ラ・セットで。面白い映画だし、現代社会への

問題提起にもなっている。そんなことを話し、盛り上がった。

[10] 4月10日(日) 午後1時より東中野の骨法道場。堀辺正史先生の「武士道セミナー」を聞く。いつも勉強になる。100人以上の若者が熱心に聞いている。他では見られない活気ある光景だ。

【お知らせ】

[1] 4月7日(木) 「創」(5月号)が発売されました。僕は、立松和平さんとのトーク。連赤のこと、そして、立松さんと出会った「激論・全共闘」の話を書きました。21年前、文芸座で、中上健次、高橋伴明、前之園紀男、立松和平と激論しました。司会は田原総一朗です。この激論が基になって、2年後、「朝まで生テレビ」がスタートします。歴史的な討論会でした。

[2] 4月11日(月) 「月刊タイムス」(5月号)発売。僕は連載で「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」を書いてます。今回は、「朝生」の話です。14年前、「朝生」に出ました。「憲法」がテーマの時でした。そしたら、本番中に、いきなり野村秋介さんが入ってきて、僕は叱られました。「新右翼の内ゲバか」と、スタジオは騒然となりました。今だから書ける、その時の真相を書いてます。

[3] 4月13日(水) 7時から高田馬場のライブ塾。朝倉喬司さん(ルポライター)と「日本の自殺」について。三原山自殺、死なう団事件、三島由紀夫、そして、最近の不気味な「集団自殺」…。それらの〈自殺〉を取り上げながら、日本とは何か。日本人とは?に迫ります。濃い話しが聞けると思います。乞う御期待。

[4] 4月22日(金) 7時半から、新宿のNaked Loftです。tel03(3205)1556です。イラク戦争の真実に迫ったドキュメンタリー、「Little Birds---イラク戦火の家族たち」の監督・綿井健陽さんとのトークです。翌日、23日より、新宿K'cinemaで、映画は公開です。

[5] 5月11日(水) 下北沢の本多劇場で、大塚英志さんとトーク。午後5時から6時。テーマは、「これから憲法と天皇制」です。7時からは、「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演があります。

[6] 6月8日(水) ライブ塾。元連合赤軍兵士・植垣康博さんがゲスト。

さらに、中村うさぎさん(作家)、風見愛さん(ストリッパー)も友情出演します。

[7] 現在、発売中の「週刊金曜日」(4月1日号)は特集が「公安警察の“裏の顔”」です。「大手メディア記者覆面座談会」も載ってます。私も、「公安と右翼」について書いてます。右翼は木にとまつた鳥なんですね。どこから

でも見える。しかし、飛び立つ瞬間でないと、逮捕できない。公安は何も事件がないと困る。。適度に事件が起こり、「だから公安は必要だ」と思わせたい。だから、飛び立たない鳥に対しては、わざと、誘いをかけたり、エサをまいたりするんです。そして、「飛び立て！」と〈援助〉するんです。そんな「公安の手口」について書いてます。

[8] 今発売中の「格闘技通信」（5月8日号）に堀辺正史先生（骨法道場）と塩見孝也さん（元赤軍派議長）の対談「武道待望論」が載ってます。濃い内容です。ぜひ読んで下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張・2005年4月18日

「左右激突！4対4」は面白かった。画期的だった

(1) 桜版の「朝生」だね。ただし、機会均等の

「左右激突！4対4」を見た。よくやったもんだと思った。なかなか、こんな企画はない。4月2日(土)、日本文化チャンネル「桜」で、夜の9時から12時まで、3時間行なわれた。

この「桜」は、かなりの日本のというか保守的というか、国粹的なテレビ局だ。自衛隊の時間。邦楽の時間、靖国の時間とあり、保守派の論客がよく出ている。西村眞吾の「眞吾十番勝負」なんてのもある。高森明勅氏（新しい歴史教科書をつくる会」前事務局長）が司会をする番組もある。

去年、僕はそこに出た。僕の『ヤマトタケル』（現代書館）を高森氏が読んでくれ、「これは面白い。ぜひ歴史と神話についての話をやりましょう」と言ってくれた。それで、高森氏と二人で話をした。実に楽しかった。

それが終わって、「桜」の代表・水野裕さんに会ったら、「今度は、左翼の人も登場させたい」と言っていた。「ぜひ、お願いしますよ」と僕からも頼んだ。「朝生とは一味違ったものにしたい」と言っていた。「もっと皆さん、十分に喋ってもらう。そんなものにしたい」と言う。僕も大賛成だった。

そして、4月2日に、実現した。桜版の「朝生」だ。「創」の荒井副編集長が録画してくれて、そのビデオを借りた。彼は、この「4対4」を見るためだけに、「桜」に加入した。偉い。それなのに僕はタダで借りて見た。申し訳ない。

さて、「左右激突！4対4」だ。実はこれは通称で（というより、塩見さんと僕だけがそう呼んでる）。正式のタイトルはこうだ。

闘論、倒論、討論

「日本よ、今」

=戦後思想とこれからの日本=

これで3時間だ。左右の4人は以下だ。

まず、左側。塩見孝也、三上治、椎名礼仁、沢口友美。

塩見、三上は全共闘時代のリーダーだ。三上さんは「味岡修」という名前も持っている。どっちかがペンネームだ。番組では「三上」と出てるのに、塩見さんは盛んに、「味岡は…」「味岡は…」と言っている。見かねて、司会の水野さんが、「実は…」と解説していた。

椎名礼仁さんは出版社をやっている。名前は「レーニン」と読む。お父さんが共産主義者だったのだろう。沢口友美さんは元自衛官。そして現役ストリッパー。かなり右翼的な人だと思うが、何故か「左側」に入っていた。

「反戦ストリッパー」と紹介されることが多いからか。だったら、僕だって「反戦」だから左だ。そうだ、塩見、椎名、沢口は一昨年、イラクに行った（僕も行ったけど）。その時の「同志」だ。それで、集められたのだろう。だったら僕も「左側」として出してほしかった。

対する右側の4人は、これらの人々だ。

高森明勅、遠藤浩一、潮匡人、河内屋蒼湖堂。こっちは4人共、若くて、元気がいい。物おじしない。レーニンだろうが、「日本のレーニン」（塩見孝也）だろうが、遠慮なく喰ってかかる。漬しにゆく。4人とも30代なのだろう。対する左側は、沢口さんだけは若いが、あとは60代。礼仁さんは分からん。40代か50代か60代だろう。

それに左側は足並みにも乱れがある。老人2人も、戦略・戦術が違うし、憲法、安保、天皇制についても、考えに違いが出る。沢口さんなんかは、「自衛隊は必要です」という。元自衛官としては当然だが、他の3人とは違う。塩見さんなんて、「軍隊はいらん」「活人剣で闘え」という。たとえ軍隊を持ったとしても、戦争しないで勝つことを考えている。国家的な「真剣白刃取り」を考えているようだ。柳生但馬守のようだ。最近は、武士道に凝っているので、そうした方面から説明する。

あっ、忘れるところだったが、司会は水野裕さんだ。「桜」の代表だ。テレビ局の社長が自ら司会するなんて、なかなかない。それに社長の後ろには、「草莽崛起」と書かれた額が…。これは「社是」というか。社のモットーだという。幕末に、全国各地から、志士たちが出てきて活躍した。それを今、思い出して、我々も志士にななろう。という思いを込めているのだ。

左右に分かれた8人の出演者も草莽なのだろう。朝生と違い、司会者が「では皆さん、4分ずつ」とか、「次は○○さん」と、指名し、平等に発言

の機会を与える。これは上品でいいと僕は思った。右側は若いし、年代的にも同じだから、チームワークがいい。4人が次々と、果敢に攻める。リズミカルだ。特に、東京裁判や、南京虐殺問題では、攻めまくる。南京虐殺では、「いや、数の問題じゃない。たとえ数千人でも大虐殺だ」と左はいう。しかし、左は、かつて、そんな言い方はしてなかった。「30万人殺された」「いや、それ以上だ」と、〈数〉にこだわって言い立ててきた。日本の悪いことは、いくら大袈裟に言ってもいい、というムードがあったからだ。

そのムードを今、右側に叩かれ、足をすくわれている。そしたら急に、「いや、数の問題じゃない」と言い出す。〈後退〉なんだよ。だったら、今までのダメな、嘘っぽちな左翼の言いようを自己批判し、反省し、その上で、「数の問題ではない。数千人だって大虐殺だ」と言うべきだ。僕が左側に座っていたら、そう言うね。

東京裁判だって、右に押されっ放しだった。「A級戦犯なんてアメリカが勝手に決めたんだ。A級戦犯のどの人も責任はない。あると言うなら、言って下さいよ」と攻める。ここまで言われても左側は答えられない。逃げ回っている。だらしがねえ。そんで、何か難しい専門用語に逃げている。

「A級戦犯のうち、誰一人として責任はない。あたら言ってみて下さいよ」というのは、ちょっと言いすぎじゃないのかな。と僕は思った。「戦争犯罪というなら、東京大空襲や広島・長崎をやった米軍こそがある」という。これはそうだ。しかし、「日本のやったことは何一つ悪いことはない」という感じのもの言いには、「おいおい、そこまで言うかよ」と思ってしまった。でも、ここまで言われても左翼は反論できない。ダメだよな。

左側は、塩見・三上という60代だけが喋りまくり、あの二人には「言論の場」を与えない。共喰いだ。司会の水野さんも必死に平等に喋らせようとするが、(左翼の)親鳥二羽が、どうしても前に出る。しゃしゃり出る。

あとは、戦後政治の話もしてたな。吉田茂をどう見るか。日の丸・君が代の話。学生運動の話。でも右側は、学生運動世代はいない。左側の二人だけが、回顧的に喋る。〈そんな話ばかりしてるからダメなんだよ〉と、言わんばかりに右の若鳥たちに攻撃されていた。ネットを見ても、「右の若鳥の方が圧倒していた」という書き込みが多かった。時間的にみたら、むしろ左側の老鳥の方が、長々とさえずっていたような気がするが、どうも、その声は〈人民〉に届かんのだな。難しい言葉を使ったり、観念的、抽象的に喋っちゃうから。

それに、日本の戦後の問題を全て論じるというのは無理だ。だから次は、

「憲法」とか、「天皇制」とか、「国防」あるいは「東京裁判」に絞って3時間やってみたらどうだろうか。そうしたら、さらに実のあるものになるだろう。

「朝生」と違って、『発言の平等』を保障した番組だ。そこがいい。でも、ラストに近づくと、白熱し、司会を無視して皆がワーッと喋り出す。相手をさえぎったりかぶったりして喋る。まさに「朝生」状況になっちゃった。これは、議論が白熱したからだが、それだけではない。

キチンと順番通り、礼儀正しく喋っていると、NHK的になって、白熱しない。「見てる人はつまらないんじゃないかな」と思う。出演者が肌で感じるのだ。無意識のうちに、「盛り上げなくては」と思う。だから急に怒鳴ったりする人も出る。朝生の場合は完全にそうだ。「桜」も、そうなったのだ。

ともかく、「桜」は大したものだ。よく、やってくれた。と思った。次回に期待したい。僕も、いつか出てみたいな。「左翼側」で。これは無理か。じゃ、司会なんて面白そうだ。いや、かえってキツイか。左右の鳥たちに、「お前はどっちの味方だ。はっきりしろ！」「コウモリめ！」と罵倒されそうだ。

そうだ。何も「激突」しなくてもいい。「左翼の話を聞く時間」にしてもいい。今はほとんど死滅した左翼の人を呼んで、じっくりと話を聞く。ひたすら聞く。これも、「自然保護」だ。日本の伝統・文化を守ることだ。これだったら、僕でもやれるな。

あるいは、ロフトやライブ塾でやっているトークを生中継する。これなんか面白いんじゃないだろうか。と要望を出したところで、オワリ。

(2)睦月影郎の「200冊突破大パーティ」では私も荒れた！

次は、3月26日(土)の話に戻る。今週から「主張」はやめて、ブログにする。この日、睦月影郎の出版パーティに出た。不愉快なパーティだった。ふざけてると思った。

大体、案内状を見て、度肝を抜かれた。「睦月影郎 著書200冊突破記念パーティのご案内」とある。これまで、カッとなつた。ムカムカした。「どうだ。ざまーみろ。オレは200冊も出してんだ」とエバリ散らしているようじゃないか。日本人はもっと謙虚だったはずだ。こいつにはそんな日本人の美德がないのか。謙遜てものがないのか、と思ったね。

でも、「200冊突破は皆様のおかげ…」と案内状に書いている。それで感謝の為に小宴を催したいという。だから是非お越し下さいと書いている。こ

ここまで読めば、「おう、感心だ。皆様にお札を込めて、ご馳走するのか」と思う。200冊も出して、お金が余ってるので、皆様に、食べてもらい、お帰りには「ご祝儀」を配る。そうするのかと思った。

それで、喜んで行ったわさ。3月26日。午後6時。西新宿の東京ヒルトンホテルだ。ところが、行ってビックリ。1万円の会費をとられた。えっ？ 200冊も出して、儲かったからお礼に食事に招待したんだろう。約束が違うよ。と思った。でも、そんな〈約束〉はなかったんですね。チクショ一。

「この世は、貧乏人が金持ちに貢ぐシステムになっている」と私は思い、世を呪いましたね。

知り合いの右翼青年で、女にもてなくて、生理上しかたなくソープに通つてた人がいた。ソープ嬢は高給取りだ。右翼青年はフリーターで、貧乏だ。そのくせ通う。必死に肉体労働で稼いで、通う。ソープ嬢も肉体労働だ。でも、取る金が違う。「この世の中は、貧乏人が金持ちに貢ぐようになっている」と、彼もこぼしていた。

こんな不条理は許せないよな、と思った。別に、ソープの話じゃない。「著書200冊男」に対してだ。

えっ？ 瞳月影郎を知らないって？ そんな人がいるのかよ。200冊も出している超売れっ子作家だよ。当日、もらった本がある。『大江戸しびれ草紙。艶色ひとつ禰（しとね）』（徳間文庫）だ。どんな小説なんだろう。もらったけど、まだ読んでない。裏の表紙に話の紹介が書いてる。

〈「眞の女の秘所は春画とは別物よ。ほら、ね」…頃は幕末。剣の修業は怠れど、枕絵研究に怠りなし。まだ見ぬ女体に日夜、股間の刀を研ぐ誠二郎を易しく誘ってくれた兄嫁殿。

彼が開眼したのは、友の土方、沖田らとは異なる枕絵師の道であった。〉

あれ、じゃ、いわゆるエロ本なのか。それに、「友の土方、沖田」というから、これは新選組の話なのか。じゃ、読んでみなくっちゃ。この日は、もう一冊、もらったな。『追憶の真夜中日記。24年間の日記録』（マドンナメイト文庫）だ。「超人気作家による射精の全記録。ここに堂々公開！」と書かれている。つまり、毎晩、誰を思いながら射精したかという記録なんだ。女優、タレント、友人、テレビの子役、高貴な人…と、いろいろだ。

そうか。瞳月さんは「官能作家」なのか。「エロ小説家」というと、差別的だが、「官能作家」となると、偉い。立派だ。さ、プロフィールだが、

〈瞳月影郎（むつき・かけろう）1956年、神奈川県生まれ。多くの職業を経て、80年に官能作家デビュー。独特のフェティッシュな作風で読者の圧

倒的な支持を得ている〉

しかし、200冊とは凄い。今、49才か。何でも、7年前に「100冊突破」のパーティをやったそうだ。「この分だと、もう2、3年で300冊突破パーティを開けそうです」と本人の弁。まだやる気なのかよ。400冊、500冊、1000冊…と。悔しいな。誰が来るもんか。一人でやってろ。

でも、何で、「官能作家」と知り合ったんだろう。本なんか読んでないのに。と、考えたが分からん。そうか、作家の佐川一政さんだった。彼が紹介してくれたんだ。毎年、春に佐川さんが開催する焼肉パーティで会ったんだ。

と思い出してたら、「では次に右翼の鈴木邦男さんからご祝辞を」と言われた。だから言ってやったよ。思いのたけを。グチを。嫉妬を。「誰が“おめでとう”なんて言うか。バカヤロー」と。「大金稼いでいるくせに、会費とるなんて何事だ。ケチ！こんな邪道を許すな！」と。そして、言ったわさ。

「こんな奴をのさばらしておいていいのか！ケンペー君に叩き斬ってもらいたい！」

と吠えた。そしたら受けましたね。大拍手でした。だって、睦月影郎は、実は、「奈良谷隆」という名で漫画「ケンペー君」を書いている。昔の憲兵が現代によみがえって、悪党や軟弱な連中をぶった斬るという漫画だ。あっそうだ。単行本が出た時は、僕が帯の言葉を書いたんだ。学校の生徒で、それを読んだ人がいた。驚いていた。「そんな過激なマンガは読んじゃいけないよ」と私は注意しつきました。教育者として。

ともかく、200冊だ。「200冊も書いた人なんて他にいますか！」と唐沢俊一に聞いた。パーティに来てたんだ。ものしり博士だ。「司馬遼太郎や井上ひさしでも、200冊は書いてないんじゃないの？」と私は聞きました。唐沢さんは言ってました。「あんな大家は、そんなに沢山、書く必要ないの」

「松本清張は書いてそうですね。200冊」

「ウーン、どうかな」

「じゃ、睦月は日本一ですか？」と聞いたら、

「いや、梶山季之は生涯に500冊書いたというからね。彼が一番でしょう」

ヒヤー、上には上がいるもんだ。でも、睦月はまだ49才だ。3年後には300冊だという。そうすると、500冊も間近だ。じゃ、目指せ、1000冊！だ。そうしたら、「日本一の大作家」と友達だよ、オラは。

このパーティのあと、睦月さんの部屋（広いスイートルーム）で二次会。

夜中まで、付き合いました。「7年前もやったなら、やっぱり人がこんなに集まってんですか」と睦月に聞いたら、「鈴木さんも来てましたよ」。エッ?全然おぼえちやん。不愉快なことは忘れてしまうものなのかな。「あの時も、二次会まで来てましたよ。そうやって窓に絵を描いて遊んでましたよ」。たまたま、窓がくもってて、つい指で絵を描いて遊んでたんです。そうしたら、言われちゃった。オラは記憶喪失になったんかいな。

と、いうことでハッピーエンドでオワリ。

【だいありー】

[1] 4月19日(火) 7時からライブ塾で、第2回「塩見塾」。骨法道場の堀辺正史先生が再びゲストです。私も行きます。

[2] 4月11日(月) ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）が始まった。今年は月曜日の1時からの授業。「現代史」。文芸科1年だが、去年よりも生徒が多い。ビックリした。それだけ、ライターになりたい人が多いのだろう。第1回目だから、「現代史を学ぶ意味」について話をした。おわって、スポーツ会館にいく。夕方、雑誌の打ち合わせ。

[3] 4月12日(火) 家で原稿書き。夜、講道館。

[4] 4月13日(水) 7時からライブ塾。朝倉喬司さんとトーク。「日本の自殺」。『誘惑者』『死なう団事件』は読み返したので、そのことを言った。30年前とは全然別な感動を得た、といったら、「年をとらないと分からない感動ってあるんですよ」と言う。なるほど。朝倉さんは、自らも「死なう団」について書いてみたいと言っていた。

[5] ここで、ニュース!『鬼の闘論』(創出版)が、「模索舎の3月度売上No.1」に輝きました。凄いですね。売れてるんですね。

【お知らせ】

[1] 4月22日(金) 7時半から、新宿のNaked Loftです。tel 03(3205)1556。イラク戦争の真実に迫ったドキュメンタリー。「Little Birds--イラク戦火の家族たち」の監督・綿井健陽さんとのトークです。これは、実にいい映画です。又、勇気をもって撮った映画です。熱い話が聞けると思います。

[2] 5月11日(水) 下北沢の本多劇場で大塚英志さんとトーク。午後5時から6時。テーマは、「これから憲法と天皇制」です。7時からは「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演があります。

[3] 6月8日(水) 7時からライブ塾。元連合赤軍兵士・植垣康博さんがゲス

ト。さらに、中村うさぎさん（作家）、風見愛さん（ストリッパー）も友情出演します。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張4月25日

〈自殺〉は世界の歴史と思想を読み解くキーワードだ

(1)なぜキリスト教は自殺を禁じたか

さすがは「犯罪ルポライター」だと思った。朝倉喬司さんは、詳しい。よく調べている。4月13日(水)、ライブ塾でトークをした。というより、僕は聞き手で、朝倉さんの話を聞いた。面白かった。テーマは「日本の自殺」だ。明治、大正、昭和のいろんな自殺を取り上げ、それを通して日本の近代を語る。

実は、朝倉さんは、今、「日本の自殺」についての本を書いてるのだ。「6月が〆切で、もうほとんど書いた」という。書き下し大作だ。楽しめた。だから、詳しい。特に「死なう団事件」や「三原山自殺」のことは、僕も興味があったので、しつこい位に聞いた。

自殺というのはいつの時代もある。今なんて、年間3万人も自殺者がいる。昔に比べ、社会が豊になり、自由になっている。でも自殺は多い。いや、貧しく、苦しい時代の方が自殺しない。生き抜くのに必死だからか。奇妙だ。放っておいたら、豊かさの中で、人間はどんどん自殺するのか。だから、「自殺は罪だ」とキリスト教は無理に、〈教義〉を作って、自殺防止にやっきになった。その効あってか、「キリスト教では自殺が禁止されてるから…」と、それが昔々から、キリスト教の教えにあったように思われている。

しかし違う。たとえば、モーゼの「十戒」には、ない。「殺すなけれ」「盗むなけれ」などはあるが、「自殺するなけれ」はない。自殺は罪ではない。ということは、自由に自殺していたのか。あるいは、自殺する人など少ないから、こんなことを言う必要もなかったのか。たぶん、後者だろう。エジプトの圧制から逃げ、モーゼに率いられて旅をする。それまでは奴隸のような生活だ。だから、つねに監視された。自殺など出来なかった。エジプト

にとっては、奴隸は大切な労働力だ。だから、勝手に死ないように、注意したのだ。

モーゼの「十戒」に、「自殺するなれ」はなかった、と言った。イエス・キリストの教えにも、実は「自殺するなれ」はない。「山上の垂訓」でも言ってない。

つまり、キリスト教の教えには「自殺するなれ」はないのだ。朝倉喬司さんに聞いたら、「ローマでキリスト教が国教にされてからでしょう」と言っていた。国家運営の手段として、そういう政策が打ち出されたのではないかと。司馬遼太郎は『街道をゆく』の中で、やはり同じことを言っていた。奴隸が勝手に自殺したら、労働力がなくなつて困るから国家が禁じたのだ、と。

とすれば、奇妙なことになる。モーゼに率いられ、エジプトを脱出した人々は、エジプトでは、自殺を禁じられていた。いや、労働力がなくなるから、自殺しないように厳重に見張られていた。そして、今度は、キリスト教が国教になると、奴隸が自殺しないように、自殺を禁じた。かつて、やられたことを今度は、自分たちからやつた。そして、「キリスト教では元々自殺は禁じられている」と言って、いわば、教義をねじまげて…。

日本では自殺は禁じられなかつた。むしろ、切腹のように、自殺は日本の〈文化〉だった。心中は禁止された時代があつた。それは死ぬのが悪いのではなく、時として、心中は既成の社会秩序を壊すからだ。愛は身分社会を超える。「どうせ死ぬんだから」となつたら、なおさらだ。近松の心中ものが上演されると、真似して心中する人間も続出する。今のネットで一緒に自殺してくれる人を探すのと同じだ。

いや、今の方が不気味だ。全く見も知らぬ同士が、出会い、自殺するのだ。

そんな話も朝倉さんに聞いた。「今書いている本の中では、集団自殺まで書けるかどうか」と言っていた。昔からの「自殺」を紹介していったら、どこで切るかが、難しい。それに、自殺といつてもいろいろある。平凡な自殺もあるし、奇妙な自殺もある。「これは！」と思うものを取り上げて朝倉さんは書いているようだ。あるいは、「これは時代を映す鏡だ」と思えるものを取り上げているのだろう。

今、思ったが、心中は江戸文化の爛熟の時代に起こつてゐる。元禄時代だ。そして、時代が下り、「昭和元禄」の時代にも自殺は多い。世の中が豊かで自由で平和であると、かえつて自殺が増える。貧しいと「自殺してゐるヒ

マがない」のか。いや、社会全体に目標があり、「人間はこう生きるべきだ」というものがある時代は、人は自殺しない。その価値がなくなり、「自由だよ。何でも好きにやりたい」と突き放されると、ドッと自殺が増える。

(2)誰が自殺者の背中を押すのか

社会学者のデュルケムは「自殺論」の中で言っていた。（昔読んだんだから、ほとんど忘れたが）。社会の紐帯が強い時代だと人間は自殺しない。つまり、国に目標があり、人々の連帯感が強い時は、自殺は少ないんだ。日本だって、アメリカと戦争してる時なんて、自殺者は少ない。ところが、世の中が平和になって、何をしてもいいよ、何にでもなれるんだよ、と言わわれると、自殺者が急増する。希望、可能性が無限にあると思って、ちょっと試してみるが、失敗して、簡単にあきらめて死んじゃうのか。とにかく、いくら自由で豊かでも、社会の紐帯がなくなると自殺は増える、と。グラフなども多用されていた。

30年ほど前に読んだ。なるほどな、と思った。だから「社会の目標」は必要だと思った。天皇を中心とした強固な国家をつくり、皆、そのもとに理想と使命感を持って生きるべきだ、と思った。そうすれば、自殺者も出ない、と。アメリカと戦っていた戦争中は、日本人が皆、生き生きとしてた。目標を持って生きていた。だから自殺者もいなかった…と。

あれから30年たって、今、考えると、随分と都合よく読んでたように思う。それに、戦争中は、皆一丸となって戦っていたから自殺者は少ないとあっても、戦死者は多いのだ。もしかしたら、自殺よりも、もっとむごい死を強制されたのかもしれない。だから、「自殺が多いかどうか」だけを、基準にしてはならない。と、今なら思う。

それにしても、「年間3万人」という自殺者は異常に多い。朝倉さんが言ってたが、「世界でもトップだろう」と。又、「こんなに多いのは日本の歴史上ないだろう」と。奈良時代や江戸時代の統計がないから分からないが、もしかしたら、そうかもしれない。

それに、「時代の変わり目」に自殺が多い。というか、時代が変わり、新しい時代に適合できなくなった人が自殺する。又、保険の存在も無視できない。前は、「自殺でも1年たら、保険が下りた」。そうすると、かなり増えた。リストラされ、どうあがいてもダメだと思う。その時、自分が死んだら保険が下りて、残された家族は助かる。そう思うと、安心して自殺す

る。

又、中小企業の経営者が、自殺することにより、残された社員が、保険で助かる。そういうこともある。つまり、自殺しかないかな、と思ってる人間の背中を押すんだ。「そうだ。それしかないよ」と励まして、「死ぬ勇気」を与えてくれる。

そんな気がする。全てがそうとは言えないが、そんなケースが多いのではないか。だから、今は契約して2年以上たたないと、自殺で保険は下りない。そうなったら、急に自殺は減ったそうな。だったら、「自殺では下りない」とすればいい。

ヨーロッパでは昔、自殺した人間には罰則があった。自殺した人間を捕まえて、死刑にするわけじゃない。自殺したら、財産を没収するとかだ。日本じゃ、そんなことは出来ないだろうが。

『鬼の闘論』（創出版）で、松崎明さん（元JR労組委員長）と、自殺の話をした。日本では、自殺といったらJRに飛び込む人が多い。富士の樹海よりも多いだろう。家で首を吊るのよりも多いかもしれない。「人身事故で電車が遅れます」とアナウンスがあるが、あれは全て自殺だ。自殺する人は、一番手っ取り早いし、確実だと思うからだ。

でも、飛び込まれた運転手は大変だ。手を合わせて飛び込む人もいる。その人と目を合わせる。しかし、ブレーキを踏んだって間に合わない。いやなものだ、という。中には、1日に2回も自殺者にあった運転手がいるという。これも凄い。そうなったら、とても運転手をやってられないで、やめてしまうと言っていた。

(3) 『誘惑者』の秘密。作者・高橋たか子の秘密

そこで、『誘惑者』（講談社文芸文庫）だ。前に何回か紹介した。高橋たか子の小説だ。三原山での自殺を書いた小説だ。でも、実際の事件をモデルにして書いている。

死にたいという女子高生がいる。一人じゃ怖いから、付いてきて、と頼まれて、友人が付いてゆく。「付き添い」だから、その人が死ぬのを見届けたら、自分は帰ってくる。ゾッとする話だ。しかし、彼女は、同じことを二度もやっていた。事件当時は、新聞に「死の案内人」と書きたてられ、大変な騒ぎだったという。昭和8年の事件だ。東京の女子高生だ。

その事件を高橋たか子は、モデルにして書いた。ただ、時代は戦後にし

た。そして、京都の大学生にした。今でも本屋にあるから読んでみたらいいだろう。

朝倉さんは、昭和8年の、本物の事件について語る。当時の新聞などを丹念に読み、取材した。

まず、なぜ、この「死の案内人」が、明らかになったかだ。小説では、奇妙な人間を大学生が目撃し、警察に知らせるのが発端になっている。三原山に上った時は二人だ。なのに、下山の時は一人しかいない。おかしい。それで、大学生は奇妙に思った、と。推理小説にありそうな発端だ。そういえば、1ヶ月前にも同じことがあったという。これはおかしい…と。

でも、実際は、そんな推理をする大学生は出て来ない。三原山で、ふらふらして挙動不審な少女がいた。三原山の管理人（というのかな）が、「危ない。自殺しにきたのか」と思って保護する。それが発端だ。考えてみりや、つまんないが、その方が、自然な話だ。

自殺した女子高生は、「自分が死んだことは5年間隠してくれ」といった。家族なども「失踪した」と思うかもしれない。ただ、こんな秘密を胸に抱えて生きるのは大変だ。付きそい人は、つい、家族に、それらしいことをほのめかす手紙を書く。家族はあわてて、彼女を問いつめる。そして、隠しきれなくなり、「実は…」と全てを「自供」する。さらに、「もう一人の友人にも付いていきました」と自供する。

しかし、逮捕はされない。「自殺幇助」だと思うが、犯罪性はないと思われたんだ。でも、死なれた家族にしてはたまらない。「なぜ、事前に一言いってくれなかったのか」と恨む。もし僕が「付きそい」を頼まれたら、多分、親に言っちゃうよな。普通なら、そうするだろう。でも彼女は、だれにも言わずに、付いていってやる。自殺の「援助」だ。

「それで、“死の案内人”はどうなったんですか」と朝倉さんに聞いた。それほど非情に徹し、「付きそい」をしたような人間だ。よほど、意志の強い人なんだろう。もしかしたら、今も生きてるかもしれない。昭和8年に女子高生だったら、今は90才位かな。

「いや、それがかわいそうなんです」と朝倉さんは言う。「大騒ぎになり、マスコミの餌食になって、体調を崩し、間もなく死んじゃうんです。

エッ？ そうなのか。自殺したのか。どうも違うらしい。自殺するんなら、友人と一緒に死んでいる。病死だという。自殺された両親が殺したんじゃない。推理小説ではないから、そんなことはない。

でも、マスコミっていって、今とは違うだろう。テレビはないし、ワ

イドショーも、写真週刊誌もない。それなのに、と思うかもしれないが、「昭和8年は新聞、ラジオもあるし、今と変わらないんです」と朝倉さん。メディアが少ない分、それに皆が飛びついて見る。だからかえって、全国民が知ることになる。ノイローゼにもなるわさ。詳しくは、朝倉さんの本が出たら読んで下さい。

そうそう。高橋たか子の小説で、疑問だったことがある。主人公（死の案内人）の女子高生が上京した時、「悪魔学」の権威の作家を訪ねている。

「悪魔学の松澤龍介」と出ている。この家に行ったら、奥さんや、友人たちがいて、皆が、自殺や殺人の話をしていた。気持が悪い。

でも、この松澤龍介は、どうみても、実在の作家Mだろう。それ以外にはい。でも、なぜ、Mが唐突に、出てくるのか。それを朝倉さんに聞いた。そしたら何と。

「それは簡単です。作者の高橋たか子とMはきわめて親しい関係にあったからです」

エッ？ 本当ですか。と叫んじゃった。作者の高橋たか子は、まだ生きてるよ。そんなことを暴露していいのかな。高橋の夫は高橋和巳だ。小説家だ。

『邪宗門』『悲の器』など名作を何冊も書いている。赤軍派の学生と話し合った本も出している。学生時代、僕らは、三島と高橋和巳を熱狂的に読んだ。三島よりもむしろ高橋だった。僕は、一番好きな作家だった。それなのに…。高橋和巳もかわいそうだと思った。朝倉さんの本には、そんなことも書いてあるのだろうか。楽しみだ。

【だいありー】

[1] 4月18日(月) 斎藤貴男さんの本の「解説」を頼まれ、やっと書き上げて送る。猪野健治、横山光輝、斎藤貴男と、今年は「解説」だけで三本も書いた。それと、雑誌の対談の校正をする。午後1時からジャナ専の授業。他の科の人がもぐりに来た。和多田進さんとの対談、『僕が右翼になった理由、私が左翼になったワケ』(晩声社)を読んで来たという。昔の本だ。でも、これは、時々、読んだ、という人がいる。あまり売れてないと思ったが、けっこう読まれているのか。

[2] 4月19日(火) 7時からライブ塾で、第2回「塩見塾」。堀辺正史先生がゲストで「武士道」。凄い人だった。入り切れない。途中で休憩して、イスを増やした。充実した話だった。とても勉強になった。僕は司会だった

が、司会が口をはさむ余地はなかった。二人の白熱した討論が聞けて、実に、スリリングだった。

[3] 4月20日(水) 図書館で勉強。夜、J-WAVEの「JAM THE WORLD」に出演する。遙洋子さんと話す。「中国反日デモと愛国心」について。

[4] 4月21日(木) 河合塾コスモが始まる。3時から「現代文要約ゼミ」。5時から、本を読む、「基礎教養ゼミ」。終わって食事会。

[5] 4月22日(金) 「月刊タイムス」の原稿を徹夜で書く。いつもは25日〆切なんだが、連休の前なので、〆切が繰り上がった。夜7時から、ネーキッド・ロフト。綿井健陽さんの映画「Little Birds」についてトークする。ネーキッドには初めて行った。重信メイさんも特別出演してくれた。

【お知らせ】

[1] 4月28日(木) 7時から、一水会フォーラム。講師は四宮正貴氏で、「憲法を語る」。高田馬場のシチズンプラザです。

[2] 5月5日(木)から11日(水)まで下北沢の本多劇場で「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演があります。7時から。その前に、毎日、トークがあります。僕は最終日の11日(水)に出ます。5時から、大塚英志さん（評論家）と、「これから憲法と天皇制」です。

[3] 5月8日(日)は、ネーキッド・ロフトで「中国の反日デモ」についてトークします。急に決まりました。

[4] 6月8日(水)は7時から高田馬場のライブ塾です。元連合赤軍の植垣康博さん、作家の中村うさぎさん、ストリッパーの風見愛さんがゲストです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張5月2日

皇室の危機。日本の危機。僕達の危機

(1) 『皇位継承の危機』は実に挑発的で、スリリングな本だ

「皇室本」が、今、どこの本屋にも、ズラリと並んでいる。女帝、是か非か。天皇制はこのまま続くのか。危機なのか…と。そして憲法改正論議とからんで、単行本、新書、文庫が、そろって、皇室本を出している。

その中でも、とりわけ目立つのがこれだ。「別冊歴史読本」の『皇位継承の危機』（新人物往来社）だ。4月25日(月)、店頭に並んだが、売れている。もう売り切れる店も多い。1600円と、安くはない。新書や文庫なら3冊は変える値段だ。でも、売れている。出版社にも在庫はなくて、増刷にかかるそうだ。

本屋に並んでも、この本だけは、すぐに目立つ。カラフルで明るい。テーマは重いし、深刻な問題だが、表紙は明るい。そして、内容が実に充実している。サブタイトルには、「皇室典範改正に向けて皇統の本義に迫る！」だ。その心意気やよしだ。そして、その通りになっている。

しかし、よく、これだけのことを調べて書いたものだと思う。又、これだけの人を集めてきて、書かせ、喋らせたものだと思う。その中に、私一人、未熟な人間が入っていて（光栄であると共に）恥ずかしい。

まあ、自分のことはどうでもいいが。ともかく、この本は詳しいし、今の「皇室問題の全て」が、ここにある。全体は大きく分けて5部から成っている。

第1部 「皇位継承のゆくえ」

「こうなる！20XX年。愛子さまご即位！

「皇位継承・徹底シミュレーション」という凄いレポートがある。他にも、3つのレポート。

第2部 「天皇と国民」を語る まずは、橋爪大三郎が語る。「日本人にとって『天皇』とは何か？=グローバル化が進む社会における皇室の未来」。これはこの本の中でもメインだ。さらに、この第2部には、次の3つの対談がある。

1.天皇家と天皇制…齟齬する三つのメカニズム（船曳達夫×島田雅彦）

2.いかに天皇を妄想するか…報道のタブーと自由な議論（鈴木邦男×森達也）

3.近代天皇制の超越的な身体…権威はいかに共同体に浸透したか（大澤真幸×原武史）

第3部 天皇制への視座

9つの論文・レポートがある。「隠蔽された仏教と天皇のつながり」「天皇陛下への片想い…磯部浅一の悲痛なる叫び」「クマザワ・エンペラー」「表現のテロリズム」などが面白い。

第4部 皇位継承の歴史をたどる

第5部 天皇125代と皇位継承のドラマ

ざっと目次を紹介しただけでも、この本の凄さは分かるだろう。一つ一つの論文・レポート・対談が実際に興味深い。僕なんてなにもしらなかったんだな、と痛感させられた。この本は、皇室問題についての「教科書」だ。

いや、「教科書」というには余りにも危険な部分を含んでいるかもれない。たとえば、第3部の「表現のテロリズム」は「我々を魅了する暗殺のストーリー」とサブタイトルが付いている。書いたのは鈴木義昭氏だ。彼は『風のアナキスト竹中労』（現代書館）などの著書がある。竹中労については一番詳しい。

竹中労が夢野京太郎の名で書いた（そして、かわぐちかいじ画）『黒旗水滸伝』（皓星社）が取り上げられている。又、かわぐちかいじの『テロルの系譜』（ちくま文庫）、映画「日本暗殺秘録」なども取り上げられている。天皇を守るためのテロがある。あるいは天皇を倒すためのアナキストのテロがある。それらが映画、小説、マンガにどう描かれてきたか。そこに迫っている。かわぐちの『テロルの系譜』は僕が「解説」を書いてるが、それについても紹介してくれていた。

さて、最後に森達也さん（映画監督）と僕の対談についてだ。

タイトルも凄いね。「いかに天皇を妄想するか…報道のタブーと自由な議論」。天皇については、「こう思え」という強制、定義はない。国民各人が自由に想い、あこがれ、支持してきた。神だと思う人もいる。国家の機関だという人もいる。いや、文化的統合のために存在するという人。人間だから親愛の情が持てるという人。さまざまだ。勝手な思い入れだ。ある意味で、それは〈妄想〉だ。いい意味での妄想だ。里見岸雄は、「ブルジョワではなく、プロレタリアにこそ天皇は必要だ」といった。

森達也さんは、テレビ局に頼まれて「天皇」をテーマにしたドキュメントを撮っていた。5月3日を中心に、「憲法」特集で、「前文」「天皇」「9条」…などを、いろんな監督が撮る。という画期的なものだった。ところが、途中で中止になった。「天皇はやはりタブーなのか」と嘆く。そして僕は、ソクーロフが撮った天皇映画「ソンツェ（太陽）」の話をした。そこから、「天皇タブー」「表現」「右翼」…といったことを語り

合った。かなり、突っ込んだ対談になったと思う。

この対談は、今年の3月11日(金)の午後2時から4時半まで行なわれた。赤坂プリンスホテルだった。あっ、今、思い出した。このあと、あわてて、東京駅に行ったんだ。そして静岡に行った。元連合赤軍兵士・植垣康博さんの店「バロン」で、公安について喋ったのだ。元公安の真田さんにも来てもらい、体験的公安論を喋ってもらった。

この本は、緊急に出版するということで、かなり急いでいた。それにしても、スタッフが優秀だ。3月11日に対談をして、3月22日にゲラがきた。24日に校正して戻した。その間、スタッフは大忙しで、さらに多くの対談、インタビュー、取材をやって、1ヶ月後の4月25日(月)には全国の書店に並んだんだ。たいしたものだ。それに、こここのスタッフの人が、かなり詳しいレポートを書いている。それが又、読みごたえがある。ぜひ、買って読んでほしい。対談した時は、本の題名は『皇位継承と天皇の歴史』です、と言っていた。でも、『皇位継承の危機』になつた。こっちの方が、ズバリと言ってのけるし、ショッキングで、いい。

(2) 反日デモはかえって、中国政府の首をしめるよ

5月8日(日)にネーキッド・ロフトで「中国反日デモ」についてトークをする。「これは早くやらないと」と言ってたが、デモはもう沈静化したようだ。でも、歴史教育、靖国問題はまだまだ尾をひく。それらをからめて話すのだろう。

その前に、4月20日(水)に出演したラジオ、J-WAVEの「JAM THE WORLD」だ。そこで、「反日デモと愛国心」について遙洋子さん(タレント)と話したのだ。「JAM THE WORLD」って、意味が分からんかったが、JAMは動詞なんだね。「ジャムにする」だ。つまり、いろんなものをピンに集め、ギューギューにする。そんでジャムは出来る。だから、この番組は、この六本木のスタジオに世界中のニュースを集めて、ギュウギュウと押し込めて、料理する。…ということなんだろう。

出演依頼があったのは、当日だ。昼頃だ。原稿を書いてたら、「今晚、出てもらえないか」と言う。あいてたんでOKした。それに、遙洋子さんだというし。遙さんは去年の3月に、「朝まで生テレビ」で一緒した。「連合赤軍とオウム」の時だ。「あの時は面白かったですね」と打ち合わせでも話が弾んだ。

「これは中国政府に跳ね返ってきます」と僕は言った。中国政府こそが追いつめられる。だつて、反日デモをやらせ、あるいは黙認し、それをもって日本への抗議に利用している。他のデモや集会は許可しないで。「反日」だけは許可したのだ。しかし、政府の思惑通りにはいかない。

だって、デモを規制する警察官に向かって「非国民！」と叫んでいるんだ。こりや、ないよと思った。警察官だってムッとするわさ。上の指示で、「投石くらいは大目に見

てやれ」といわれて、警備してんのに、そりゃないだろうと思う。

又、北朝鮮で、サッカーの試合の時、自国が敗けて、北朝鮮の人民が騒いでいた。中には警備の警察官の胸倉をつかみ、突っかかっていく人もいる。普通なら考えられない。でも、「愛国心」ゆえに見逃されているのだ。普通なら、警察官に向かったら、すぐに逮捕、収容所送りだろうに。

中国でもそう。これは「愛国心」の発露だから、大目に見よう、ということだ。人民の方も図に乗って、「愛国無罪」と叫んでいる。文化大革命の時は、「造反有理・革命無罪」だったが、今は「革命」はない。今の中国で、革命なんか起こされちゃたまらない。すぐに弾圧してしまう。天安門事件だって、血の弾圧だ。今は、「造反無理・革命有罪」だ。これじゃ、スローガンにもならん。

その代わり、「愛国」なんだよ。「愛国心」ならば何をしてもいい。殺しちゃったらマズイけど。日本大使館にペットボトルや石を投げる位はいいだろう。その辺の日本車を蹴飛ばしたり、日本商店のガラスを割る位もいいだろう。そう思って、政府は黙認してるんだ。いや、煽っているんだ。

それを日本に見せて、「ほら、わが国の人民は、日本に対してこんなに怒り狂ってるんだぞ！」と言う。対日交渉を有利に進めようとする。又、「反日」ということで、国民のエネルギーが外に向かえば、自分たちの内政のマズサは誤魔化せる。そう思っているんだ。

そして成功したように思えた。ところが、(たとえ一部であろうとも)、デモや暴動の〈自由〉を認めることは諸刃の剣なのだ。自分たちにも向かってくる。その証拠に、警察官に向かい、「非国民！」と叫んでいるんだ。政府にだって、すぐ向かう。

こりや、ちょっとやりすぎたかな、と政府も思い出し、デモを取り締まり出した。そしたら、すぐに沈静化した。何のことはない。人民の自然な盛り上がりではなかったからだ。自発的なデモではなく、「官製デモ」だったんだ。

「うん、60年、70年の日本の学生運動にも似てますね」と私は言った。ただし、日本の方は、投石したらすぐに捕まった。又、もっと思想的に深かった。と言った。たしかに、中国の真似をして、「革命無罪」と叫んでいた学生もいた。しかし、そのうち、全共闘は「自己否定」を言い出した。内省的、哲学的な問い合わせだ。又、東大生が「東大解体」を言い出した。

多分、こんなことだろう。国家権力や大学の権力に向かって自分たちは闘っている。しかし、その自分たちだって「完全」ではないし、「無罪」ではない。こんな大学の学生であることが特権階級の証拠だ。恥ずかしい。…といった事だった(と思うよ)。

じゃ、東大生が皆で、学生証を焼き捨てて、東大をやめたか。というとそんなことはない。他の大学生もそうだ。だから、「言ってみただけ」って気もするけど。でも、そ

ここまで「自己否定」「大学解体」を叫んだのは、少しあは偉いのかもしれません。

その点、中国の反日デモには「自己否定」がないやね。と、遙洋子さんに言ったわさ。だって、デモに出てる人は、家に帰ると、日本製の携帯、パソコン、テレビに囲まれて生活している。「反日」「日本製品排撃！」と言うんなら、まず家の中にある日本製品を叩き壊せよ。それが筋だろう。しかし、そんなことはしない。「だって、これは自分のもんだから」という。「自己否定」がないやね。

それに、反日デモには無理に誘われた人が多い。躊躇してたら、「じゃ、愛国心がないのか！」と言われ、しかたなく、参加した人もいる。こうなると「愛国心」は強制だし、暴力だ。それに対抗して、日本でも中国大使館や、関連施設に投石したり、火炎瓶を投げ込んだり、銃を撃ち込んだりする人が増えてきた。

「やられたら、やり返せ」「オレたちは愛国心でやってるんだ」と、こっちも「愛国無罪」なんだ。たまらない。

「大体、愛という言葉が、こわいんじゃないですか」と遙さん。「いい点を衝いてる」と私。「お前を愛してんだから、言うことをきけ」、「愛してんなら、この位のことをしてくれてもいいじゃないか」…と、愛は、強制の口実に使われる。「そうそう。愛してるんなら、仕事をやめて俺の両親の介護をしろ！とか」と遙さん。うん。そんなことを言われて離婚した女優もいたな。

つまり、〈愛〉という言葉自体が押しつけがましいし、うさん臭いのだ。という話で一致しました。

ところで、J-WAVEはあの六本木ヒルズの33階にあります。スタジオからは東京タワーが見え、東京が一望できる。ヒヤー、凄い。と私は感動してました。

(3)ポール牧さんが死んじゃった

驚いた。どうしてこうも、死ぬんだろう。知り合いの人が自殺するのは、たまらない。ポール牧さんが、4月22日(金)の午前4時頃、自宅マンションから飛び降り自殺をした。出家して坊さんになっていたのに、「何故？」と思った。

ポールさんとは野村秋介さんの出版パーティなどで何度か会い、話をした。出家するだけあって、いろいろ人生、政治について考えていた。そして、週刊誌で一度、対談した。どこかにあったはずだが、と探してみたら、やっと見つかった。「実話プレス」の96年5月24日号だ。今から9年前か。野村さんが自決したあとか。だから、野村さんの話から対談は始まっている。

「ポール牧の『指パッキン・乱れ打ち！』」というタイトルになっている。毎週、ゲストを呼んで話しているようだ。僕の回は「第22回」となっている。じゃ、これで一冊の本になるじゃないか。せっかくだから、出したらいいのに。

この時のテーマは、

「国民に見捨てられるぞつ
情けない政治家を叱る！」

だった。野村さんの自決、「風の会」のこと。横山やすしのこと、右翼のこと…など、いろいろと話した。ポールさんは言っていた。「日本の山河を守ろうとした意味で、かつての日本社会は全てが右翼だったんじゃないかな」。たしかに、そうですね。

野村さんが立ち上げた政党「風の会」では、ポールさんも候補者になってくれと言われた。それだけは断わって、「支援者」として、宣伝カーに乗った。僕も一緒に渋谷などで選挙演説をしたことをおぼえている。

ポールさんは僕が出た「朝生」を見て、「右翼の人はもっともっと言論の場に出るべきですよ」と言っていた。「今ままでは、右翼はずっと誤解され放しだ」「全ては言論でやるという鈴木さんの姿勢に賛成します」とも言っていた。元々、北海道のお寺さんの子供だった。だから小さい時から、仏教の中で育った。この時も、宗教の話、政治の話ばかりだった。真面目な人で、よく考えている人だなと思った。コメディの話やテレビの話などは一切しなかった。僕よりも2才上だった。まだ若いのに、もったいない。残念だ。

【だいありー】

[1] 4月25日(月) ジャナ専。現代史。中島らもと吉村昭を好きな生徒がいたので、その話もする。

[2] 4月26日(火) 慶應大学の小林節教授に呼ばれて、木村三浩氏と僕が、先生の授業で喋る。憲法について。…という予定だったが、前、先生から電話。カゼで中止。いや、延期だ。連休明けになるでせう。夜、講道館。学生と、ムキになって鬭ったんで、体が痛い。

[3] 4月27日(水) 夜、スポーツ会館。

[4] 4月28日(木) 午前中、雑誌の打ち合わせ。3時から河合塾コスモ。夜は一水会フォーラム。

【お知らせ】

[1] 5月8日(日) ネーキッドロフトで「中国の反日デモについて」のトークをやります。いらして下さい。

[2] 5月11日(水) 5:00pmから下北沢の本多劇場で、大塚英志さん（評論家）とトーク。「これから憲法と天皇制」です。又、あの植草元早大教授も特別出演する予定です。7:00～は「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演です。

チケットは現在発売中。トークは前売り2000円（当日2500円）。本公演は前売り

4000円です。問い合わせ、申し込みは、(株)トリック・スター社に。TEL 03(5331)3261。FAX 03(5331)3262です。

[3] 6月8日(水) 7時高田馬場のライブ塾。植垣康博さん(元連合赤軍兵士)、中村うさぎさん(作家)、風見愛さん(ストリッパー)がゲスト。テーマは、「連合赤軍の眞実」です。

【さらにお知らせ】

[1] 皇室本コーナーには、いろんな本が出てます。今回取り上げた『皇位継承の危機』の他に、もう一冊、推薦しておきましょう。

吉本康永さんの『ひざまずく天皇』(三五館・1500円)です。まず、タイトルで、びっくりします。一体、何だと思いました。その時は、本屋でチラッと見ただけでした。ところが、家に帰ってきたら、何と、その本が送られてきました。本の帯にはこう書かれています。

〈新潟県中越地震を見舞う姿を見て、「天皇がひざまずいている！」

私は感動のあまり、TVに叫んでました。「皇太子発言」「天皇の地位規定を含む憲法改正問題」「女性天皇は是か非か」…近ごろさまざまに囁かれる「開かれた皇室」の未来を問う〉

「ひざまずく天皇」とは、そういう意味だったのかと分かりました。又、「まえがき」を読んで驚きました。だって、「今上天皇」は「革命家」であると書かれてた。又、こんな凄いことも。

〈もしかすると「今上天皇」の視野には「天皇制の無化」や「天皇制の消滅」そのもののさえが入っているのではないかと考える時、こう書いている私自身がある種の戦慄を覚えざるを得ません〉

僕も、うすうす感じていたが、ここまで勇気をもって断言はできなかった。うん、それはあるよな、と思って、とりあえず読もうと、東中野の喫茶店に入りました。そして、3時間近く、そこにいて、一気に読んでしまいました。近頃、こんな一気読みは余りありません。それだけ、いい本だし、教えられました。皆さんも是非、読んでみて下さい。このHPでも、又、ゆっくり紹介したいと思います。そうそう、本に手紙が入ってたので、夜、電話をしました。このHPも読んでくれてるといってました。ありがとうございました。現在の天皇論について、かなり話し込んでしまいました。とても教えられました。

[2] 三島由紀夫が自決して今年で35年。いろんな本が出てます。中でも、この二冊は特によかったです。

まず、中条省平編・監修の『三島由紀夫が死んだ日』(実業之日本社・1800円)。

猪瀬直樹、吳智英などが書いている。篠田正浩の「『日本』という病」は衝撃的な論文だった。

もう一冊。松藤竹二郎編の『日本改造案・三島由紀夫と楯の会』（毎日ワンズ・1300円）だ。三島が改憲の叩き台を書き、楯の会の人々が論じ合い、「試案」をまとめるプロセスが書かれていて興味深かった。「憲法研究会」は13人。代表は阿部勉氏だ。三島は女帝を認めていたし、阿部氏も認めていた。しかし、認めない会員もいて、激論が闘わされている。「今の話か」と思ったが、違う。36年前の「楯の会」の例会だ。これには驚いた。皆も読んでみたらいい。

[3] 猪野健治『日本の右翼』（ちくま文庫）が売れている。出たばかりなのに、もう重版だ。それだけ関心が高いのだろう。僕は「解説」を書いたが、ゲラで読んでた時から、凄い本だと思った。教えられた。ちくまの人は、「右翼」と題名について文庫本が出たのは初めてでしょう、と言ってた。そうだろう。単行本は多いが、文庫本は一冊もなかった。それだけ猪野さんの本の内容が素晴らしいということだ。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張5月9日

日教組の委員長と、対談をした！

= 「論座」 6月号で。憲法、教育、日の丸、君が代をめぐつて =

(1) 日教組結成以来58年。初めて実現した対談だ！

この対談は、もはや〈革命〉だ。だって、日教組の委員長と対談したのだ。5月6日発売の月刊「論座」（6月号）に、その対談は載った。日教組と右翼は「宿敵」だった。今でも右翼の街宣車には、「日教組打倒！」と書かれている。日教組大会、教研集会には全国の右翼が抗議に結集する。何百台という街宣車が押しかける。

その「対決姿勢」は今でも変わらない。その中で、この対談は実現した。だから、革命的なのだ。日教組は終戦の2年後に結成された。今年で結成58年になる。そしてずっと右翼の攻撃にさらされてきた。

1945年（昭和20年）が終戦だ。47年に日教組が結成される。しかし、右翼だって、占領軍に弾圧されたから、運動は出来ない。50年代になり、その中頃になると、日教組攻撃が激しくなる。襲撃事件も増える。

そして60年から攻撃は激増する。60年10月に社会党の浅沼委員長が山口二矢に刺殺された。この時、山口二矢の「暗殺リスト」には、浅沼だけでなく、日教組の小村武委員長、共産党の野坂参三議長の名前も入っていた。つまり、日教組は「暗殺対象」だったのだ。実際、歴代の委員長は何度も襲撃されている。

僕らだって、「日教組は悪の元凶だ！」と言ってきた。「子供に革命教育をしている」「彼らさえいなくなれば、日本は素晴らしい国になる」と思ってきた。だから、日教組の集会となると全国から右翼が押しかけた。右翼団体を作った人がまずやることが、「日教組攻撃」だった。それだけ、日教組は右翼にとっての〈主要敵〉だったのだ。

日教組大会には、全国の右翼が押しかけたといった。この日は、「民族派の祭典」と呼ばれた。ドイツ（ナチス時代）のオリンピックが「民族の祭典」と呼ばれたが、それ

を真似たのだ。誰が言い出したのか分からぬが、言い得て妙だ。（私が言い出したという説もある）。

日教組反対運動が激しい時は、日教組が大会を開けなくて、開催地が二転、三転することがあった。本来なら、どこだって歓迎のはずだ。全国から教師が集まり、泊まってくれる。ところが、そこに右翼がやってくる。機動隊も来る。右翼はガナリ立て、暴れる。さながら、〈戦場〉になる。一般の人は逃げ出す。これではたまらない。だから、「大会を開きたい」と打診されても、どこも断わったのだ。

お互い、「宿敵」「不俱戴天の敵」と思い、それが58年間も続いた。しかし、不思議な話だ。その間、「話し合おう」ということはなかった。何も、「ボス交」ではなくても、「公開討論会」を要求してもよかつた。テレビや新聞を呼んで大々的にやってもよかつた。僕が日教組だったら、やるね。「こっちが4人、そちらも4人、代表を出せ。それで3時間討論しよう。そのかわり、街宣車を押し出して邪魔するのはやめろ！」と言うね。

でも、そんなことを考える人はいなかつた。右翼側にもいなかつた。他人のことは言えん。僕だって考え方なかつた。公開討論会をやるよりも、街宣車で押しかけてマイクで怒鳴る方が、「男らしい」からか。その方が、雄々しく勇ましく見えるし、スッキリする。

警察・公安だって、両者の「対立」だけを煽ってきた。「日教組大会にはぜひ行くべきですよ」「がんばって下さい」と餞別まで渡していた。昔、僕なんて、公安に言われた。「他の団体の人は鈴木は口先ばかりだと悪口を言ってますよ。だから、どうです。日教組本部に突っ込みませんか。なーに。10日位で出れますよ。そしたら、『さすがは鈴木だ』と皆、絶讚しますよ」。ヒデー公安だと思った。悪魔の囁きだ。

あるいは、そんな悪魔の誘いに乗って、日教組に突っ込んだ人もいるんだろう。

右翼の抗議、襲撃が多かったから、日教組本部もガードは固い。今回の対談の前に、打ち合わせのために日教組に行った。「論座」の編集部の人も一緒だ。3月2日(水)だった。インターネット越しに話し、こちらを確認し、やっと入れてもらった。

「ガードが固いですね」と言ったら、「だって右翼が襲ってきますから」。「ピストルで足を撃たれた人もいるんです」。「そうですか。すみません」と、自分のことのように謝ってしまった。どうも自虐史観だな、私は。「じゃ、こうして正式に入ったのは僕が始めてですか」と聞いたら。「そうです。招待されて入った右翼は初めてです。この58年間で」。じゃ、これも革命的なんだ。

でも、打ち合わせは、なごやかに進みましたよ。「私は鈴木さんの本を読んでたんですよ」と、森越康雄委員長。岩手の中学校で先生をしてた時に読んだという。和多田進さん（元「週刊金曜日」編集長）と僕の対談。『僕が右翼になった理由、わたしが左翼

になったワケ』（晩声社）だ。それを読んで、「鈴木さんが日の丸・君が代の強制に反対してたので、あっ、私も同じだと思ったんです」と言う。

エッ、この本は10年以上も前の本だ。その頃から「日の丸・君が代の強制反対」なんて言ってたのかな。私は。

「打ち合わせ」なのに話が弾んで、「本番の時、いうことがなくなるから、もういいでしょう」と編集部の人止められたほどだ。

(2)あわや中止か？と思って、心配したが…

委員長と話したのは初めてだが、会ったのは2回目だ。実は、去年の9月18日(土)日比谷公会堂で、「教育基本法 改悪ストップ！全国集会」があった。そこに私は行った。コント集団「ザ・ニュース・ペーパー」も出るので、それを見に行ったのだ。それと、この大会で、「日の丸・君が代をどう思いますか」というビデオが流れたが、それに私が出演していたのだ。ビデオは、ニュースペーパーが、あらかじめ作ったものだ。渋谷の街で若者に聞いて。さらに「附録」で私にも聞いた。たまたま渋谷を歩いていたら、若者と思われ、聞かれたのだ。そんなことはないか。高田馬場の「ライブ塾」の時にインタビューされたんだ。

日比谷公会堂に行った時のことは、「創」（04年11月号）に詳しく書いた。全国から日教組の人達や、革新団体の人達が来ていた。超満員だった。会場に入る時、いろんなチラシを渡された。赤いはちまきをした人が、「我々は右翼と闘ってます！」と言いかながら、チラシをよこす。ビクッとした。

多分、地方の中学校で、日の丸・君が代の強制に反対し、処分された人だろう。さらに右翼からも攻撃されたんだろう。そのことを言つてるようだ。でも、僕と知つて言ったのか？とも思った。

ともかく中に入る。大会が始まり、ビデオも流された。私は日頃の持論を言いましたわさ。そしたら、拍手が起つた。一番大きな拍手だった。嬉しかったね。そして、終わってから、委員長に紹介された。この時は、名刺を交換しただけだった。

でも、「話し合えるな」と思った。純朴そうな人だし、又、同じ東北人というのもいい。

さらに今年の1月28日(金)の「朝まで生テレビ」に委員長は出ていた。テーマは教育問題だった。朴訥とした話し方で、印象がよかった。

そんなこんなで、「日教組の委員長と話し合ってみたい」と思った。58年間の宿敵関係はあっても、今なら出来そうだと思った。そんな時に、「論座」の話があった。でも、日教組は断わるだろうな、と思った。だって、僕は右翼の落ちこぼれだから、右翼から何と攻撃されてもいい。しかし森越さんは現職の委員長だ。全国の組合員から何と

言われるか分からない。「我々は、日々、右翼にいじめられて、鬪っている。それなのに右翼と対談するとは何事だ！」と批判が集中するんじゃないかな。あるいは、直前に中止になるとか。「会議にかけたら、否決されてダメでした」となるんじゃないかな。そう心配した。

ところが、委員長は承諾してくれた。そして、3月2日(火)に打ち合わせをして3月7日(月)に朝日新聞社で対談。となった。

「4月6日発売号(5月号)に載せます。この号は『教育特集号』ですから、その目玉になります」という。

…しかし、4月6日発売号には載らなかった。ウーン、問題があったのかな。どっかから圧力がかかったのかな。日教組内部からも、「やっぱり、右翼との対談はまずいよ」となったのかな。…と思った。しかし、違っていた。何とか入れようとしたが、ページの遣り繰りがつかなくて、次号回しになったのだという。ホッとした。それで、5月6日発売の6月号に、載ったわけですよ。もう読んだ人もいるとは思うけど、まだの人は読んでみて下さい。

僕も今まで対談は何回もやった。いろんな人とした。何十回じゃきかない。百回以上やっただろう。しかし、その中でも、最もいい対談になったと思いますね。いい対談になったのは、森越委員長の人柄のおかげでしょうね。

委員長は相手の話をちゃんと聞いて、その上で、自分の考えを話す。自らの反省もきちんと言う。だから、手応えのある対談になった。

普通、対談、討論会というと、「相手に喋らせない」「叩きつぶしてやる」といった感じで臨む人が多い。それじゃ、何も生まれないだろう。その点、森越委員長は、朴訥で、控え目だ。じっくり考えて話す。だから、ひとつひとつのテーマが噛み合って討論が進んだ。もちろん、憲法問題、防衛問題など、反対のところも多いが、それも冷静に話せたと思う。

(3) 3年前には岡留さんと「論座」で対談した。それも単行本に入るそうな

「論座」6月号では、日教組委員長との革命的対談をやったが、前にも一回、凄い対談をやった。2年半前になる。「論座」(02年12月号)だ。「尊の真相」岡留編集長との対談で、「言論の覚悟を問う」だ。これも、ガチンコ対談だ。岡留さんは、よく会ってるが、「対談」をしたのはこれが初めてだ。岡留さんが「尊真」をやめる決意をした時で、この真意も聞けたし、覚悟も聞けた。この対談があったので「論座」も日教組委員長との対談を考えてくれたのだ。

その点では、今回の日教組対談が実現したのは、岡留さんのおかげでもある。それと、ザ・ニュース・ペーパーが「日の丸・君が代」のビデオを作ってくれたおかげでも

ある。ありがたい話だ。感謝したい。

と、思っていたら、一本の電話。何と、「『論座』に載った岡留さんとの対談を単行本に収録したい」と、ある出版社からのお話だ。もちろん、了承しました。岡留さんは、「尊真」をやめてから、本を次々と出して、ベストセラーになっている。今度は、「尊真」に載った原稿を中心にまとめ、最後は「論座」の対談を載せるという。5月末には出版するというから楽しみだ。

「対談本は売れない」というが、岡留さんは別だ。それにこれは、対談本ではなく、岡留さんの原稿の最後に、対談が収録されるのだ。だから売れるだろう。

「対談本」で思い出した。4月22日(金)、ネーキッド・ロフトで綿井健陽さんとトークをした。綿井さんがイラクで撮った映画、「Little Birds」について話した。この時、後半、重信メイさんが来てくれたので、「おじいさんに昔、インタビューしたんですよ」という話をした。

メイさんのお母さんは、あの革命家・重信房子さん。そのお父さんは重信末夫さん。何と、右翼の闘士だった。血盟団事件のメンバーだった。僕が産経新聞をクビになって、すぐにインタビューしたと思う。その時の新聞もコピーしてもらっていき、メイさん、綿井さんなどにあげた。会場の皆さんにも見せた。

当時、「やまと新聞」という日刊紙があった。右翼系の日刊紙だ。この前は、「帝都日々新聞」という名前だった。この「やまと新聞」の昭和49年(1974年)3月15日号に載っている。1面トップだ。今から31年前か。

「重信房子はなぜアラブへ。元右翼の父が語る女闘士の素顔」

というタイトルだ。「“女闘士”というのが凄いですね」と綿井さんは言っていた。たしかに、今だったら、こんな書き方はしないだろう。「時代」を感じさせる。

見出しへは、というと。「口マンを求めて。北一輝などを高く評価」「連合赤軍。唾棄すべきもの」「極右と極左は一致。ただ天皇觀だけは違う」…とある。

メイさんは末夫さんとは会っていない。日本に帰国した時はすでに亡くなっていた。「それなのに鈴木さんは会っている。うらやましい」と言っていた。ロフトでも、このコピーを見せたら、「ぜひ、ほしい」「コピーさせてくれ!」という人がいたので、あげた。余分にコピーしていったので、よかった。

それと、この末夫さんのインタビューは、実は、僕の本に収録されてある。鈴木邦男対談集『右であれ左であれ』(エスエル出版会・1600円)だ。1999年9月25日発売だ。6年前か。いい本だと思うし、僕としては愛着があるが、あまり売れなかつたようだ。大きな書店ではまだあるので、ぜひ手にとってほしい。

このタイトルは、ジョージ・オーウェルの有名な『右であれ左であれ わが祖国』からとった。17人との対談、座談会が収録されている。本の帯にはこう書かれている。

〈ここに登場した人々は時代を見通す目を持っている。そしていまを予言していた。読み返してみてそれは驚きだった。震えた。あるいはこうも言えるだろう。五年経ち、十年経って読んでみて、その時よりもさらに訴えるものがあるもの。それだけが本当の対談だろう〉

なるほどと思った。そしたら、下に、〈「はじめに」より〉と書かれている。アレッ！僕の文章なのか。昔は、気のきいたことを書いていた。やだな。どんどん文章が下手になっていくよ。出版社が書いた宣伝文（キャッチ・コピー）はこうだ。

〈時代を“挑発”する!!

右翼・左翼、保守・革新、硬派・軟派の呪縛を超えて、新たな思想像を探究する。

闘う対談集〉

うん、これもいいね。さて、どんな人が登場してるかというと…。

桂文珍、小阪修平、富岡幸一郎、猪瀬直樹、デーブ・スペクター、岩國哲人、井上章一、佐々隆三、松本健一、大前研一、関曠野、塩見孝也、テリー伊藤、植垣康博、松崎明、青木哲、重信末夫。

この17人だ。最後の青木、重信だけはかなり前だ。でも歴史的、資料的価値があると思って、無理に入れた。

最後に、「論座」の「右翼vs日教組」対談のリードだ。なかなか、いい。

〈対極にいた二人が、初めて1対1で向き合った。教育を語り、「君が代」「日の丸」を語り、憲法や自衛隊を語り合った。そしていま、58年続いた「vs」の関係から、「&」を築こうと一步を踏み出した〉

【だいありー】

[1] 5月2日(月) 生長の家の全国大会に行く。武道館。昔の同志が券を送ってくれたので。真理の話、宗教的な話を聞くのはいい。心が洗われる。谷口雅宣先生の『神を演じる人々』『足元から平和を』『歴史から何を学ぶか』を買って、読む。夕方、5時から吉本康永さんに会う。吉本さんの『ひざまずく天皇』（三五館）は、とてもいい本だと先週紹介した。連休で上京してるので新宿で会った。昔から僕の本を読んでくれてるという。嬉しかった。天皇問題について、いろいろと教えてもらう。勉強になった。

[2] 5月3日(木) 新宿のジュンク堂で本を探してたら、何と隣りに赤坂氏（元管理人）がいる。「ファルコンさん（現管理人）が入院してるんで、見舞いにいかない？」。そこで、行きました。じゃ、『皇位継承の危機』を差し入れしよう、と本を買って。本人は元気で、2日後に退院だといいました。よかったです。

[3] 5月4日(水) 新宿。イッセー尾形さんの芝居を観る。その後、紹介してもらい、

マネージャーたちと飲む。

[4] 5月5日(木) 河合塾コスモの授業。連休中だけど受験生は休みじゃないんだ。

[5] 5月6日(金) 「論座」(6月号) 発売。夜、本多劇場。ザ・ニュース・ペーパーの公演を見る。その前の、斎藤貴男さんと松尾貴史さんのトークを聞く。よかったです。

[6] 5月7日(土) 「創」(6月号) 発売。今月の連載は「宿敵」です。

[7] 5月8日(日) 1時から骨法道場で堀辺正史先生の「武士道セミナー」。

夜、ネーキッド・ロフトで「中国反日デモ」についてのトーク。

【お知らせ】

[1] 5月11日(水) 5:00p.m.から下北沢の本多劇場で、大塚英志さん(評論家)とトーク。「これからの憲法と天皇制」です。がんばってやりますので、聞きに来て下さい。又、最近逮捕されて話題を呼んだ、あの植草元早大教授も特別出演する予定です。

この後、7:00からは「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演です。問い合わせ、申し込みは、(株)トリック・スター社に。03(5331)3261 FAX 03(5331)3262 です。

[2] 6月8日(水) 7:00p.m.高田馬場のライブ塾。植垣康博さん(元連合赤軍兵士)、中村うさぎさん(作家)、風見愛さん(ストリッパー)がゲストです。知られなかった連合赤軍事件について語ってくれます。

[3] 7月12日(火) 7時から高田馬場のライブ塾。日本兵の戦争犯罪を告発した映画「日本鬼子(リーベンクイズ)」のダイジェスト版を上映し、その後、松井稔監督とトークします。

【補足】

森越日教組委員長は今年の1月の「朝まで生テレビ」に出てました。でも、聞いたら、日教組委員長がテレビの討論番組に出るのは20年ぶりなんだそうです。文部大臣は何人も出てるのに。これはひどいですね。僕らは、「日教組は偏向教育をしてるからけしからん!」と攻撃してました。しかし、マスコミは、日教組の発言を取り上げず、言論の場を奪ってきたんですね。マスコミも偏向してました。

それにしても、「20年ぶり」だなんて。じゃ、20年前には誰が出たかというと、槇枝(まきえだ)元文さんです。しかし、この時は、もう委員長を辞めていて、「元日教組委員長」でした。

この時の番組ですが、KBS京都をキー局にして、二元中継でやりました。僕らは、TVK横浜のスタジオに出ました。そうです。私も出ました。タイトルは、「5時間闘論。教育は変えられるか」でした。その時の記録は未来社から単行本になってます。司会は田原総一朗さんです。

出席者を見て、驚きました。山本コウタロー、灰谷健次郎もいる。俳優の穂積隆信も

いる。「積木くずし」で、ブームになった後だったんですね。それと、今、活躍している高橋史朗もいる。元警視総監の秦野章もいる。凄いね。他には、こんな人だ。

屋山太郎、俵萌子、大槻健、鵜川昇、宮田義二、保坂展人、丹羽健夫、太田昭臣、和田重広、木村喜七、樋口恵子。

全部で18人か。「朝生」よりも多いよ。それに二元中継だ。あっちを呼び、こっちを呼び…で大忙しの討論会だったような気がする。「論座」の対談では、まず、この20年前の討論会の話をした。あの時は、「詰め込み教育はダメだ」といった意見が多かった。しかし、今は、どうも「ゆとり教育は無駄だった」といった論調が多い。20年で、ガラリと変わってしまった。

…という所から二人の対談は始まってます。では、続きは「論座」で読んで下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張5月16日

思想が音をたてて、力チッとかみ合っていく

(1)日教組の森越委員長は、右翼を泣かしちゃったんだって

5月8日(日)は、午後1時から骨法道場で堀辺正史先生の「武士道セミナー」を開きました。毎月1回、第2日曜日にやってます。歴史の見直しになり、とても勉強になります。「論座」(6月号)の日教組委員長と僕の「革命的対談」も紹介してくれました。「いい対談だから、皆さんも読んで下さい」と。「それにしても、時代が変わりましたね」と言ってました。そうですね。10年前は考えられませんでした。いや、5年前でも出来なかったでしょう。

前日の7日(土)の朝日新聞には「論座」の広告が大々的に出てました。驚きました。森越委員長と私の写真入りで。だから、「朝日で出てたね」と皆に言われています。本屋で「論座」を買った人はまだ少ないのでしょうが、皆、朝日新聞で見てるんです。

そうそう。「論座」の最後のページ「編集手帳」に、この対談を担当した高橋万見子さんが、こう書いてました。いい文章で、感動しました。

〈鈴木邦男氏と森越康雄氏の対談は、とにかく刺激的でした。双方、東北弁の残るほんわりとした口調での「論戦」は、組み合わせに反して時折爆笑さえ伴う和気藹々としたものでしたが、各々の経験から導かれた思想が音をたてるように力チッとかみ合っていく様は、「向き合い語る」という行為が極めて知的な作業であることを改めて思い起こさせるものでした〉

いいですね。特に、「力チッとかみ合って」という所は。僕も話していて、そう感じました。対談しても、「ともかく相手をつぶしてやろう」「自分だけ喋ろう」という人が多い昨今ですが、森越さんは、ちゃんと相手の言うことを聞いて、同意できる点は同意する。違うところは、違うという。そこが凄いと思いました。それに、森越さんは岩手出身。東北弁が残って朴訥な人柄が出ており、好ましかったです。

しかし、僕は、東北弁なんか残ってねえど。東京に出てきて40年。もう

すっかり、東京弁だべさ。もう、江戸っ子だよ。「コーヒー」だって、「コーチー」と江戸弁なまりになってるし…。「ルノアール」だって、「ルニヨワール」と江戸弁だよ。

それなのに、「双方、東北弁の残るほんわりとした口調での…」と書かれちゃった。ウーン、そうかな。ショック！

森越さんは以前、日教組の青年部長で、「右翼対策」をやってたんだそうです。右翼が抗議に来ると、代表して抗議を聞き、抗議文を受けとる役目だ。

「お前らは都民に迷惑をかけている！出て行け！」なんて、いきなり言われる。初めのうちはカーッとして「迷惑かけてんのはお前らじゃないか！」と言い返したら、喧嘩になった。そこに警察がバーッと中に入り、注意されたそうです。「すいません。黙って話を聞くと帰るので、刺激しないで下さい」と。

まるで目に見えるようですね。今だって、繰り返されている光景でしょう。

でも、いい話もあります。深作清次郎さんという人が、よく抗議に来た。選挙にいつも出てた人だ。例の如く、抗議し、抗議文を読み終わり、そのあと、「何か言うことはあるか！」と言う。森越さんは、「体に気をつけて頑張って下さい」と言った。思いがけないことを〈敵〉から言われ、深作さんも吃驚。そして感極まって、ポロポロと泣いた。「お前はいい奴だ。槇枝みたいになるなよ」と言ったという。

いやー、いい話だと、聞いていて私も涙がこぼれそうになった。又、右翼でもいろんな人がいる。狂暴な人もいるし、純朴な人もいる。涙もろい人もいる。夫婦二人でかいがいしくやってる人もいる。夫が抗議文を読むと、妻がそれを写真にとり、テープにとっている。きっと、自分の機関紙に載せるのだろう。

そして、森越さんはこう言っていた。

「はじめは私、鬼か悪魔みたいに考えていて、相手も同じだったと思うんだけど、話をしていくうちに、立場は違っても一生懸命さみたなのが伝わってきましたね」

なかなかいいですね。他にも、カチッと歯車がかみ合った話が沢山ありました。14ページも対談を載せてもらい、ありがたかったです。本当に革命的な対談になったと思います。

(2) 「村上春樹に前文を』『国民は自由から逃走したい』…国會議員の迷言集！

この「論座」6月号は「憲法特集」で、こちらも読みであります。 「クール！な憲法の論じ方」と銘打って、冷静に論じています。今時、珍しい姿勢です。「改憲は当然だ！」と熱くなる人。「許せない！戦争をする気か！」とヒステリックに叫ぶ人…。そうした、カッカと熱くなり、いきり立つ人の多い中にあって、この「論座」の特集は異色です。

「浮遊する日本の立憲主義」（長谷部恭男）「改憲という名の『自分探し』」（小熊英二）「9条削除で眞の『護憲』を」（井上達夫）…などです。

そして、「資料編」が又、よかったです。 「自民党議員はこんなことを言っている！」です。自民党の改憲草案づくりは、2004年の自民党憲法調査会憲法改正プロジェクトチームの議論から始まったが、その中から「特徴的」な意見を紹介している。読んで驚いた。えっ？こんなことを言っているのかよ、と。それも、「こんなことを言ってたらしいよ」ということではない。ちゃんと、公表しているし、自民党のHPにも載っている。だから、言った本人たちも、決して「暴言」や「失言」だとは思っていない。当然だと思い、堂々と公表している。そこが怖い。ちょっと抜き書きしてみよう。

「前文は日本語の上手な人に書いてもらいたい。村上春樹とか宮本輝とか。間違った平等、人権が日本を毒している。男は男としての力がいるんだという気持ちをどこかに出してほしい」（谷川弥一衆議院議員）

「国防の義務とか奉仕活動の義務というものは若い人たちに義務づけられる国にしていかなければ」（盛岡正宏衆議院議員）。

でも、「奉仕」や「ボランティア」というのは自発的なものだろう。それが「義務」になら、違うだろうが。三島由紀夫は、改憲草案を36年前に書いてたが、「国防は名誉ある権利である。義務ではない」と書いていた。徴兵制にも反対していた。

「義務」として、いやいや国を守る、なんてことになら困ると思っていた。又、義務にすることによって、「聖なる権利」が汚れてしまうと思ったのだろう。

「多くの国民は自由を求めているようでいながら、実は自由から逃れたいと密かに思っている。この国の国民はこういうふうにものを考えれば幸せになれるんですよということをおおまかな国の中で規定してほしいというのは、潜在的にマジョリティの国民が持っている願望ではないか」（伊藤信太

郎衆議院議員）。

これは歴史に残る「迷言」だ。元防衛庁長官・伊藤宗一郎（宮城県選出）の息子だ。ずっとおやじの秘書をやっていた。こうした過激な発言をする人は二世、三世議員が多い。自分のアイデンティティを示さなくては…と思い、激しくなるのか。あるいは、生まれた時から、議員になると思って育ち、一般の人々の生活や考えを知らないからか。

学生の時に、エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』を読み、うろ覚えで、それを口に出したのだろう。まア、一部には、「自由」よりも「安定」だ。と思っている人もいるだろう。公安だって、そう言ってる。しかし、政治家は、自由で安全な社会づくりをするために仕事するのではないか。又、幸せになるための方法なんて、議員に期待しないよ。思い上がりだ。傲慢だ。あるいは、「皆、自民党に入り、自民党に投票しなさい。そうすると幸せになります」とでも言うつもりなんやろうか。

「現行憲法は、日本人の魂を否定するための憲法であったわけです。憲法とは何かと言えば、やはり愛国心の一番の発露なのではないか」（西川京子衆議院議員）。

ヒヤー、こんなタ力派の女性議員もおられるんですね。知らんかった。愛国心を持つのはいい。しかし、それを政治家が強制しちゃいけんだろう。

実は、5月10日(火)に慶應大学に行ってきた。改憲派の大御所・小林節教授に呼ばれて、授業で話したのだ。木村三浩氏と三人で、話した。二人が呼ばれたキッカケは「愛国心」だった。小林先生は、改憲派の中心人物でありながら、最近は、「改憲を言う自民党のアホさかげんに、うんざりした」と発言している。「変節ではないか」と一部には報じられた。先月、会った時に、「自民党の何が一番嫌だったんですか?」と聞いた。そしたら、「愛国心を押しつけることだ」と言う。

「改憲し、愛国心を書けば、それでいいと思っている。しかし、政治家のやることは、愛国心を持てるようないい国にすることだ。それを忘れて、ただ、書けば済むという話じゃない」と。これには感動した。三島由紀夫も、「愛国心という言葉は嫌いだ」と言っていた。僕も、愛国心は各人が心の中で思っていればいいと思う。口に出したり、他人を批判する道具として使うべきじゃないと思っている。そのことを言ったら、「いいね。じゃ、私の授業に来て、学生の前で喋って下さいよ」ということになったのだ。その時の話は又、改めて書く。

他にも、自民党議員の迷言、放言、暴言はある。紹介しきれない。「論

座」を読んでほしい。見出しだけ書くと、こんなのがある。「武士道の再確認を」「目指せゼネコン、自信過剰でいこう!」「天皇陛下に敬礼、神道復活」…etc.だ。

(3)赤軍派議長・塩見孝也の「プロ独憲法」草案を見よ!

では、ここで、塩見議長の「改憲試案」だ。と、突然、話は変わる。塩見さんは元赤軍派議長だ。5月8日(日)、骨法道場の武士道セミナーのあと、新宿のネーキッド・ロフトに行った。私の「表現の覚悟vol.2」だ。高田馬場のライブ塾では月一回、トークをしてるが、このネーキッド・ロフトでも月一回、やることになった。その2回目だ。テーマは「反日とは何なのか?」。ロフトの「案内」にはこう書かれちよる。

「中国、韓国で激化する反日デモ。歴史問題に遡る各国の主張は真っ向から対立している。反日デモを巡る状況分析と解決への糸口を徹底討論!」

ただ、トークの相手が決まらなかつた。直前になって、「『創』の篠田編集長に決まりました」と言う。はい、分かりました。と言つた。篠田さんなら情報を一杯持つてゐるし、面白い話も聞けるだらうと思った。「篠田さんと鈴木さんの話なら、実のある話も聞けるだらう」と大学生も大勢、聞きに来てくれた。ところがだ。店に行つたら、「急に篠田さんが来れなくなりました」とロフトの人が言う。奥さんが病気で入院したという。(後で聞いたら、違つていた。奥さんのお母さんが病気で、実家に帰つていて、大変で、来れなかつたそな)。

だったら、今日は、一人でやるのか、と思っていたら、「それで、ピンチヒッターで塩見さんが来ます」。「エッ?じゃ、いらないよ」なんて言えない。わざわざ、来て下さつたのだ。お礼を言ったわさ。「約束が違う!」

「金を返せ!」と騒ぐ人もいたが、納得してもらいトークを始めた。

結果的には、「塩見vs鈴木」対談では一番いい出来でしたね。と、自分で思いました。思い起こせば、塩見さんとは、河合塾での「左右激突対論会」をはじめ、何十回と闘つた。長州vs藤波戦と同じように、「名勝負数え歌」と言つられた(誰も言ってないか)。その中でも最高のものだった。このトークも革命的だった(かもしれん)。

だって、今日はかなり、前向きの話をしたからだ。憲法をどうする。靖国神社をどうする。日中関係をどうする…と。マルクス主義を超えて、塩見さんが新しい方向を模索し、提言したのだ。

最初に、チャンネル「桜」の話もした。4月に、「左右激突!4対4」を

やった。その第2弾をやったという。だから、その話を聞いた。前回は、若手右派論客にメッタ撃ちにやられたんで、今度は、「左翼側」メンバーを一新し、強化した。塩見さんの他に、荒岱介（ブント代表）、森達也（映画監督）といったメンバーだ。右側は、高森明勲氏や河内屋さんなど。塩見さんは、「圧倒的勝利だった」と言うが、ビデオを見てみたい。

「その時、荒が改憲論を言ってた」という。荒さんは、もとの「戦旗派」代表。今はブント代表だ。彼が、9条を改めて、自衛の軍隊を持つべきと言った。そして、1条から8条も改正し、天皇制を廃止し、共和国にするという。ビデオを見てみないと、正確には分からぬが塩見さんの説明はそうだ。

「塩見さんはどうなんですか」と言ったら、「俺は、改憲には反対だ」という。「9条を守る」という。うん、左翼だから当然だろうな、と思った。でも、「待てよ」と思った。昔は、世界革命、武力革命を目指したんじゃないか。ということは、この国を根本的に改めて、自分達の憲法を作ろうとしたはずだ。それはどんなものだったのか。何回か聞いたけど、なかなか言わない。もう過去のことは言いたくないのかもしれない。しかし、わたしや、ねばりましたよ。そして、とうとう「自供」させた。

「うん、プロ独憲法を作ろうとしたんや」と、渋々、認める。

「プロ独」とは、プロレタリア独裁だ。この人は時々、専門用語を使う。大体、僕は分かるつもりだが、前なんて、「ブルてん」といった。これは分からんかった。どっかの天ぷら屋かと思った。「ハゲ天」という店もあるし、「エビ天」「イカ天」もある。それで、「ブルてん」は、ブルジョワ用の豪華な天ぷらなのか。

ところが違う。「ブル転」だ。「ブルジョワ転向」のことだという。プロレタリアからブルジョワに転向することだ。だから塩見さんは家では「力力天」（力カア天下）なのかもしれない。

だから、「プロ独憲法」だ。70年を目指し、日本に革命を起こそうとした。「東京戦争」で首相官邸を占拠し、革命政府を樹立する。そうしたら国名も変わる。憲法も変わる。「日本民主主義人民共和国」になるんだろう。

「いや、日本民主主義共和国ですね」という。そしてプロ独憲法だ。勿論、軍隊は認める。赤軍だ。国内で、右翼反動が反人民的クーデターを起こしたら、鎮圧しなくっちゃならん。天皇制は当然廃止だ。「でも、ギロチンにかけたり、国外追放にはしない」と言う。「一般の市民になってもらう」。それに、大企業の国有化だ。私有財産制も根本的に見直す。「奥さんの私有も

禁止する。共有にする」と言うのかと思ったら、「そんな馬鹿なことは考えない」。一夫一婦制は守るんだろう。封建的だ。

「赤軍をつくって、ソ連のワルシャワ条約軍に加盟するんですね」と私は聞いた。社会主義協会派の向坂（さきさか）逸郎は、そう言っていたからだ。

「それも考えません。大体、ソ連はスターリニストの国やから、敵なんや」と言う。じゃ、自主独立の赤軍か。だったら、その「プロ独憲法草案」を今、出したらしい。「今の憲法を守る」なんて、保守的、敗北的なことを言ってるよりも、ずっといいよ。どうですか。

【だいありー】

(1)5月9日(月) 次に出す本の校正をやり、それに「あとがき」を書く。徹夜で頭がボーッとしている。1時からジャナ専の授業。夕方、柔道。

(2)5月10日(火) 午後3時から三田の慶應大学に行く。40年前に受験で来て以来だ。懐かしい。小林節先生の憲法の授業で、木村三浩氏と僕が喋る。

(3)5月11日(水) 5:00p.m.から、本多劇場で大塚英志さん（評論家）とトーク。「これから憲法と天皇制」について。7時から、ザ・ニュース・ペーパーの本公演を見る。

(4)5月12日(木) 河合塾コスモで授業。

(5)5月13日(金) 愛知県の刈谷市に行く。元連合赤軍兵士の加藤倫教氏の取材。刈谷も40年ぶりだ。昔、兄貴が住んでたんで来たことがある。刈谷駅の近くの喫茶店で話を聞いた。日帰り。「創」の副編集長と一緒に。

(6)5月14日(土) 1時半から東アジア反日武装戦線〈狼〉逮捕から30年の集会。4時から渋谷区勤労福祉会館。「戦場体験放映保存の会」の勉強会に遅れて、出る。

【お知らせ】

(1)5月13日発売号の「週刊金曜日」に私が出ています。「わたしと憲法」シリーズの3回目で。「難しく考えなくてもいいのでは」。

(2)「月刊タイムス」（6月号）が発売中です。私の「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」は第10回目です。他に、日教組の森越委員長へのインタビュー記事

もあります。

(3)6月8日(水) 7:00p.m.から高田馬場のライブ塾。元連合赤軍兵士の植垣康博さん、作家の中村うさぎさん、ストリッパーの風見愛さんがゲストで出ます。連合赤軍事件の真実について語ってくれます。

(4)6月15日(水) 7:00p.m.から高田馬場のシチズンプラザで一水会フォーラムです。右翼運動に詳しい堀幸雄さん（評論家）が講師です。

(5)7月12日(火) 7時から高田馬場のライブ塾です。日本兵の戦争犯罪を告発した「日本鬼子（リーベンクイズ）」の上映後、松井稔監督と私がトークします。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張5月23日

四書五経と中国の歴史ですよ。日本人を作ったのは

(1)日本人の若者は殻に閉じこもり、一般教養がない

さすがはNHKだと思いましたね。いろいろと批判、問題はあっても、やはりNHKは必要だ。だって、こんないい番組をやるんだもん。と思いました。

5月14日(土)のNHK教育テレビ、夜10時から11時半のETV特集「ロシア・アニメの巨匠ノルシュテインの世界」だ。NHKが、よくぞやってくれた、と嬉しかった。テレビ欄では、こう書かれている。

「小林一茶からイッセー尾形。そして高畠勲とアニメの未来を語る。日本の若きアニメ作家たちを怒る」

ノルシュテインさんは凄い監督だ。日本にもよく来ている。親日家だ。松尾芭蕉や小林一茶が大好きだ。僕も何度か会って、話をした。その時のことは、「創」(03年1-2月号)に書いた。2年前だ。この号では、ソクーロス監督のことも書いた。「ソンツエ(太陽)」という、昭和天皇を扱った映画を撮った監督だ。2人は親友だ。ノルシュテインさんの方が年齢的には先輩だ。「もう、撮影に入るそうですよ」と、この時点では聞いた。そして、今、完成した。主演(つまり昭和天皇役)はイッセー尾形だ。

この「ソンツエ」のことは最近の「創」にも書いたし、このHPにも書いた。今回はノルシェティンのことだ。監督は、日本のアニメ作家のために、「ノルシェティン大賞」をもうけ、育成し、激励している。

NHKでは、その作品も紹介されていた。又、それに対する批評も、若者たちの前で言う。

僕はアニメについては無知だから、若者たちの作品のどれを見ても、「よく出来るじゃないか」と思った。しかし、監督の目は厳しい。「形式主義であって、自分の殻に閉じこもっている」と言う。

「個性」だと、 「感性」だと、そんなものが一番大切だと思ってるんだろう。そして、自分をいかに表現するか。それだけを考えている。しかし、そんな小さな殻に閉じこもっていてはダメだと言う。これは若者だけで

ない。今の日本人全てに言えることかもしれない。

次に、監督は言う。「教養が足りない！」と。基礎的教養がないという。絵がうまい。ストーリーの作り方がうまい。それにおぼれている。それ以前に、「教養」がなかったら、多くの人の心を打たない、と。才能さえあればいいじゃないか。他の教養なんか必要ないだろう、と思うだろうが、違うという。若者がそれでは困るという。

20人ほどの若者を前に、監督は問う。「今、日本ではピカソ展をやってますが、この中で見た人は？」。手をあげたのは一人だけだった。「それでは困りますね。好きでなくても、見に行くべきです」。そして、歌舞伎、文楽なども行きなさい。そして、必ずスケッチをしなさい、と言う。

「では、『タイタニック』を見た人は？」と監督。「それなら見たさ」とばかりに、ほとんどの若者が手をあげる。でも監督の言葉は意外なものだった。「こんなことではダメですね。みなさんも一緒に沈んでしまいますよ」

つまり、流行だけを追ってもダメだ。教養を身につけなくては、ということだろう。NHKでは、日本滞在中の監督と、ロシアで仕事している監督を紹介する。日本では、若者に教え、小林一茶のゆかりの寺を訪ね、さらに、イッセー尾形の芝居を見て、二人で演劇論--アニメ論を語り合う。イッセー尾形は、「ソンツエ」の主演をやっている。そのことから、訪ねたのだろう。ゴーゴリの「外套」をぜひ、舞台でやってほしいと監督は言っていた。

実は、監督は、20年以上も、この「外套」に取り組んでいる。貧しいアカティイが、ある日、外套を新調する。しかし、はじめて着ていった日に強盗に奪われる。それを気に病み、本当に病気にかかる。そして死んでしまう。その日以来、街行く人の外套を奪う強盗が現われる。アカティイの幽霊だとう。

そんな話だ。簡単な話だが、示唆に富む話だ。人間は自分の生活スタイルを変えてはいけない。物に執着してはいけない、…と、いろんな〈教訓〉を読みとれるかもしれない。監督にとっては、もっと深い意味があるのだろう。だから、20年以上も、これに取り組んでいる。

勿論、ユーリー・ノルシュテイン監督の作品はそれだけではない。未完の作品だけでは、「アニメ界の巨匠」とは言わない。「霧につつまれたハリネズミ」「おやすみなさい、こどもたち」「アオサギの話」などがある。どれもいい。ラピュタ阿佐ヶ谷では5月14日からレイトイショード、監督の作品が上映されている。ぜひ、見たらいいだろう。

油絵のような重厚なアニメで、その油絵が動く。「アオサギの話」は、一

転して、あわく、日本の墨絵のようだ。監督に僕の感想を言ったら、「そう思いましたか。嬉しいですね」と言っていた。

監督と会ったのは2年前だ。この時は、「芭蕉の世界をアニメにしようと思ってる」と言っていた。芭蕉の歌仙「冬の日」をテーマに、その一句ずつをアニメにする。日本のアニメ作家27人、世界の作家8人が作る。日本からは川本喜八郎さん（人形師）や林静一さんらが参加する。これはアニメ界の大事件だ。

そして、「冬の日」は完成し、去年見た。素晴らしいだった。その時も、監督と会った。監督は、芭蕉の俳句を読み、衝撃を受け、それ以来、一日も句集を手放せない、と言う。

でも、それをアニメにするなんて。日本人では誰も考えつかなかった。「それは私がロシア人だからでしょう。それだけ客観的に見れたんです」と言う。僕らは、俳句は日本の文化だと思い、いわば当然のものだと思い、完成されたものと考えていた。だから、アニメ化なんて考えてもみなかった。

2年前に会った時は、監督の歓迎会で、林静一さん、川本喜八郎さんにも会った。林さんは、ロマンチックなアニメを描いてる人だ。「小梅ちゃん」のCMにも出ている。川本さんはNHKの人形劇「三国志」「新平家物語」を作っている。「三国志」は全23巻。1巻が2時間近い。だから、全て見るには時間がかかる。しかし、僕はTSUTAYAで借りて全部見た。感動した。

多分、世界一のアニメだろう。それに勉強にもなったし。という話をジャナ専の授業でしたら、一番前の学生が、「あっ、島田紳助が出てるやつでしょう」と言っていた。嬉しいね。見てる人がいて。そう、紳助が解説で出ている。この頃はもう一人、相方がいた。松本竜介だったかな。二人は解説をやりながら、人形劇の登場人物にもなっている。「紳々（しんしん）」「竜々（ろんろん）」だったと思う。二人は下っ端の兵士だ。曹操の所に行ったり、諸葛孔明の所へ行ったりして、フラフラ、ウロウロする。端役だが、その目から見た英雄・豪傑の姿も見てとれる。

ほう、三国志とはこんなに壮大で凄い話だったのか、と思った。皆さんもぜひ見て下さい。その上で、本を読むのもいいでしょう。川本さんに会ったので、もっぱら、「三国志」の話を聞いた。「僕は、本当は曹操が好きなんです。だから、曹操にばかりいい着物を着せちゃったりして、他のスタッフに文句を言われました」と笑っていた。

「新平家物語はビデオにならないんですか」といったら、「いろいろ問題があったけど、なる予定です」という。楽しみだ。

この時、画家志望の女子大生が何人か来ていた。初対面だが、川本さんとノルシュテイン監督を紹介してくれという。仕方ないから紹介した。本人は、自分の描いた絵を持ってきていた。それを見せて、感想を聞く。パーティの席で、ちょっと失礼かな、と思ったが、紹介したあとだから、後の祭りだ。それもかなり前衛的な絵だ。モモセクシャルの絵だ。僕も横で見ていて、ウッ！と唸った。でも、優れたものかもしれない。

川本さんは厳しく批評していた。監督や林さんは優しいから、「なかなかいいね」「かわってるね」と言っていた。

(2)前田日明が語る。三島由紀夫と太宰治と中国の歴史を

三国志で思い出した。前田日明さんも中国の歴史書が好きなんだ。「格闘伝説」の6月号を見たら、「中国の歴史書ばかり読んでる」と言っていた。前田さんは皆も知るように、元プロレスラーだ。新日本プロレスにいて、その後、UWFに移り、一度は新日に戻り、さらにそこを出て第二次UWF、さらにリングスをつくる。しかし、リングスがつぶれてからは、しばらく、浪人中だった。ところが、今回、K-1から声がかかり、「HERO'S」の総合プロデューサーになった。「前田がマット界に帰ってきた！」とファンも大歓迎だ。

前田は、読書家として昔から有名だった。日経新聞には「読書日記」を連載したこともある。又、三島由紀夫が好きで、ほとんど読んでいる。太宰治、シュタイナーも好きだ。さて、『格闘伝説』だ。趣味の読書について聞かれて、こう答えている。

〈中国の戦国時代の歴史書を片っ端から読んでいくのが好きですね。例えば「史記」「呂氏春秋」「春秋」「春秋左氏伝」。あと兵法関係の本ですね。昭和10年ごろに発行された全集本なんですが、そういうのが好きですね。そういう史書というのは40才を過ぎて読むと胸にしみるんですよ。

人間というのは今も千年前も変わりがなくて、四千年前にも前田日明のような人間がやっぱりいるわけです。そして、そこに、その失敗例と成功例が書いてある。そういうのを讀んでいるとなんだから熱くなるんですね〉

凄いね。格闘家でこんなに本を読んでる人はいない。いや、評論家やライターだっていない。私だって、讀んでない。

「では、中国の歴史上の人物で『自分と似ているな』と思われる人というのはどういう人なんですか」と記者に問われて、こう答えている。

〈「ああ、この人の失敗はオレと似ているな」と思ったのは、前漢の時代

にいた『李広將軍』ですね。その人の境遇を読んだときに、ちょっとグッとしましたよ。歴史というのには余韻があるんですよね。それが誰かが経験したものであったとしても時空を超えて伝わってくるような気がするんですよ。自分にとってはそれが一番役に立つ何かだと思ってるんですけどね〉

いいですよね。私も、インタビューされたら、こういうことを言ってみたいですね。それにしても前田さんはよく勉強している。「鈴木さん、四書五経を読まなくちゃダメですよ。それらを読んで、日本人は日本人になったんですよ」と言われた。彼が浪人中に言ってたんだ。ということは、四書五経を読んで、苦しい浪人時代を耐え、乗り切ったのだろう。

恥ずかしながら、四書五経とは何か、知らなかった。うっすらとは分かるが、どれとどれかは正確には分からんかった。家に帰って調べてみて、儒教の重要な書、教典のこと、四書とは、「大学」「中庸」「論語」「孟子」を言う。五経とは、「易經」「書經」「詩經」「春秋」「礼記」だという。これらを全て前田さんは読んでるんだ。多分、漢文の先生でも読んではいないぞ。

(3)“手鏡事件”の植草教授とトークする予定だったのに…

と、ここで週刊「SPA!」が送られてきたので見た。「夕刻のコペルニクス」の連載はクビになったが、それでも「SPA!」だけは毎週送ってくれる。ありがたい。そして、バラバラと頁をめくっていたら最後のところで、アッと声をあげた。「エッチな人々」という連載がある。いや、「エッチな人々」だ。そこで何と、あの「手鏡事件」の元早大教授・植草一秀さんが出ていた。

「“手鏡事件”は断じて冤罪です！

私は戦い続けます!!

と。インタビューは大川豊さんだ。

「やられた！」と思った。だって、5月13日(金)、本多劇場で私は対談するはずだったからだ。

このHPにも予告した。ところが、ドタキャンになって、本人は来なかつた。コント集団「ザ・ニュース・ペーパー」の公演が1週間、下北沢の本多劇場であった。毎回7時からだ。いつもはその中で20分か30分位、ゲストを呼んでトークをしている。ところが、今回は新しい試みとして、7時に始まる前にトークだけを独立して、やった。まあ、本多劇場が昼もあいてたということもある。それで、夕方の5時から6時までトーク。そして一時間休憩。7時から本公演。トークは斎藤貴男、松尾貴史、立川談志、滝大作、塩見孝

也、大塚英志、鈴木邦男が、やることになっていた。

ところが、塩見さんは、なぜか中止。そして5/13(水)は、大塚さんと僕。ところが、突如、植草さんも加わることになった。大塚さんとは、「これから憲法と天皇制」というかたいテーマでトークをすることになっている。突如三人で、やることになると、テーマをどうしようかと、困った。じゃ、最初の30分は、そのテーマで大塚さんと話していく、そこで、突如、植草さんに入ってもらい、「冤罪と公安の謀略」について三人で喋ろうかと思っていた。そのことを、大塚さんには話していない。当日、植草さんが来たら、話して、大塚さんには謝るしかないな、と思っていた。

植草さんは他の雑誌にも少しは出ていた。よく分からないが、どうも「冤罪」くさいとは思う。だって、横浜で講演し、その後品川までずっと、つけられた。手鏡をもって、エスカレーターで前の女子高生のスカートの中をのぞきこんでいる所を捕まったのだと思った。パッと手首を握られて、そこを警察官に写真に撮られて…と。それじゃ、逃れようのない現行犯だ。

ところが違う。何もしなかった。ただ、エスカレーターに乗ってた時に逮捕された。そして、その場で、「ポケットのものを出せ」といわれた。そこに手鏡があった。ということだ。駅には防犯ビデオがいたる所に設置している。逮捕された所にあって、「それを見てくれ！」といったが、調べてくれない。10日して、「もう消してあった」という返事だ。

そうなると、ますます「冤罪」くさい。では、なぜ公安がここまでやるか。「国家」にとって植草さんが邪魔な人間だったのか。竹中平蔵の経済改革に反対してたからだ、とうがった見方をする人もいる。しかし、そこは分からん。

だから、その辺を聞いてみたいと思った。ところが、ドタキャンされた。本多劇場に来た人々も、「ウソつき！」と思ったはずだ。「鈴木のウソつき！」と思っただろう。まいるよなー。なんでも、「まだ、大人数の前で喋るだけの心の準備がないもので」ということらしい。大人数じゃなかったのにね。それに、僕よりも大川豊の方が、ずっとキツイことを聞くよ。（実際、キツイことを聞いてた）。

じゃ、仕方ない。「創」が主催する「反公安」のイベントにでも植草さんを呼んでもらい、来てもらいましょう。しかし、本人も警察から早く出たかったのだろうが、「認めた」のはまずかったよね。インテリの弱さかもしれませんのが、いつか会うこともあるだろうから、その時の心理もじっくり聞いてみましょう。

【だいありー】

- (1)5月15日(日) ちょっとバテて、寝ていた。
- (2)5月16日(月) 1:00p.m.からジャナ専の授業。新しいジャナ専のパンフを見たら、私の本『公安警察の手口』も写真入りで紹介してあった。ありがたい。ジャナ専の生徒は、沢山、本多劇場に来てくれたので、礼を言った。本当にありがたい。
- (3)5月17日(火) 2:00p.m.ジョナサンで雑誌の取材。「愛国心について」。
「そんなもの、いらねえよ」と言ってやった。夜9時、帝国ホテルでゴルニッシュさん夫妻と会う。ゴルニッシュさんはフランス国民戦線の書記長。同時に欧州議員。日本の外務省の招待で来ていた。木村三浩氏から連絡があり、4人で食事。遅くまでE Uの話。国民戦線の話を聞く。
- (4)5月18日(水) 一日中、中野図書館。夜、ザムザ阿佐ヶ谷で、月蝕歌劇団の芝居を観る。「金色夜叉の逆襲」。これはよかった。終わって、代表の高取英さんたちと飲む。
- (5)5月19日(木) 河合塾コスモ
- (6)5月20日(金) 3時、韓国のテレビ局の取材を受ける。靖国神社について。
- (7)5月21日(土)、22日(日)。次の本のために、中野図書館で勉強。

【お知らせ】

- (1)6月8日(水)9:00p.m.。高田馬場のライブ塾。「連合赤軍事件の真実」。元連赤兵士の植垣康博さん、中村うさぎさん（作家）、風見愛さん（ストリッパー）がゲストです。なかなか聞けない話ですから、ぜひいらして下さい。
- (2)6月15日(水) 7:00から一水会フォーラム。高田馬場のシチズンプラザです。右翼運動に詳しい堀幸雄さん（評論家）が講師です。
- (3)7月12日(火) 7時から高田馬場ライブ塾です。日本兵の戦争犯罪を告発した映画「日本鬼子（リーベンクイズ）」を上映し、松井稔監督と私がトークします。
- (4)現在発売中の『ダカーポ』（6月1日号）では巻頭特集「右翼はいま、何を考えているのか」。なかなか意欲的な特集です。読んでみて下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張5月30日

『大菩薩峠』全20巻を読破した！ だから、弱い者イジメをやめろ！

(1) 「がんばれ！新左翼」と、思わず叫んじゃいましたよ、私は

「弱い者いじめはやめろよ！」と思わずテレビに向かって叫んじゃった。弱者はいたわるべきだろう。それに相手は、絶滅寸前の〈左翼〉だ。もっと、やさしく大事に扱い、保護してやるべきじゃないか。そう思い、義憤にかられましたね、私は。

5月14日(土)、「左右激突！4対4」の第2部が放映された。正式には「日本よ、今」で、3時間の討論だ。チャンネル桜が放映した。先月に続いての第2弾だ。先月の第1部は左翼側の惨敗だった。老左翼は長々と喋るけど、全く、「現在」を知らない。過去の学生運動の話、マルクス・レーニン主義の話、階級闘争の話…しか出来ない。「アホだね。こいつらは」とばかりに右翼側の若手4人組に猛襲されていた。みじめだったね。こりや、かわいそうだ。じゃ、ハンディをつけてやれよ、と私は思いましたね。「左4人」と「右は1人」とか。実際、高森明勲氏一人で大丈夫ですよ。それだって老左翼は論破されたでありますよ。

左翼側のリーダー、塩見孝也氏に言ったんですよ。「じゃ次は私を出して下さいよ。左翼側として」と。思わず提言に、ギョッとしてました。「うん、それもいいけど、鈴木君は途中で裏切るからな…」と。ギクッとした。人を見る目がある。

前回の「大敗北」に懲りたのか、左側は第2弾では人員を入れ替えて、パワーアップを計った。次の4人だ。

塩見孝也（元赤軍派議長。「日本のレーニン」と呼ばれたカリスマ議長）

荒岱介（ブント代表。ブントは元は戦旗派といった。皇居にロケット弾を撃ち込んだ過激派だったが、今は合法活動の市民運動に変身している）

PANTA（大物ミュージシャン。何でこんな所に出てきたのか、と疑問。塩見さんに無理に連れて来られたらしい。「渡世の義理で…」と本人も言っとっ

た)

森達也（大物映画監督。この人はさらに疑問。今や、知らない人はいない。
超メジャー。「4対4」の兵士として出てくる人じゃないよ。塩見さんに騙されて強制連行されてきたんだろう。かわいそうに）

そして、対する右側の4人だ。

高森明勅

潮匡人

河内屋蒼湖堂（ここまで前回と同じ）

西村幸祐（この人だけが初めて）

この日のテーマは「反日アジアと憲法問題」だった。又もや、左側はやられっ放しだった。勝負にならない。返り討ちだった。私の家では、チャンネル桜は見れない。NHKしか映らん。（民放も映るかな）。だから、知り合いにビデオを録ってもらって借りた。ビデオを録った人は、「見ちゃおれん」といって最後まで見れんかったそうな。私は、見ましたよ。ちゃんと3時間。そこで、ずっと左側を応援してましたよ。ところが、ボロ負け。勝負になってない。「おいおい！イジメはやめろよ！」と右側4人に文句を言いたくなつた。右側4人は、日本が好きだし、「日本を守る」人々だろう。愛国心があるんだろう。

しからば問わん。「日本精神」とは何か。「誇り？」「強さ？」「不屈の闘士？」。ちゃいまんねん。寛容ですよ。やさしさですよ。それを失つたら日本じゃおまへん。そして、「謙虚さ」ですよ。敬語に表われてますよ。又、「つまらんもんですが…」と謙遜して物を贈るでしょう。その控え目な心です。

それと、弱い者をいたわる心です。ドブに落ちて泣いている犬を蹴飛ばしてはいけません。又、お父さんが小学生の子供と相撲とる時のことを考えてみりゃんせ。いきなり投げ飛ばしたり、大地に叩きつけたりしますか。せんでしょう。しっかり受け止めてやり、「おっ、ボクも強くなったね」とか言って、ズルズルと後退してあげるでしょう。そこで、土俵際で、ちょっとうっちゃったりする。「ではもう一番」といって、今度は、負けてやり…。そうやって、子供のやる気を引き出すようにするでしょう。愛情一番ですよ。

それなのに、何ですか、あの右側4人は。寄ってたかって、手かけんなしに、左側4人をいじめている。かわいそうでしょうが…。「左側4人」といったけど、PANTAさん、森さんは「左側」の範疇に入らん。もっと大物

だ。こんな所に出すのは勿体ない。本人たちだってそれは分かっているから、ほとんど発言しない。というより、塩見、荒の二人だけが喋る。だから、実質、「左翼イジメ！4対2」でしたね。

荒さんはブントを率いる代表で、新聞も出しているし、千人位を集めた集会もよくやっている。僕も呼ばれていたことがある。論客だ。でも、テレビでは、ほとんど発言できない。なんでだろう。こんな「異種格闘技戦」は不慣れなのか。だから、塩見さん一人だけが喋る。喋る時間は長いんだが、内容がない。「現在」がない。「過去」の話ばかりだ。憲法についても、中国についても、何も知らない。「今はこうなんだ」「世界はこうなってる」と、右側4人に「具体論」で攻められると、太刀打ちできない。あはれだ。かわいそうで、涙がこぼれた。

理論的には、僕は右側に近いのだろうが、でも、僕ならば、「弱い者いじめ」はしない。これはよくない。と思った。テレビ局に行って、左側に「助っ人」してやろうかと思った。でも、前に収録したのを、後で流してるのだ。さらに、それをビデオに録ってもらって私は見ている。もう手遅れじゃ。だから、助っ人には行けんかった。

(2)大菩薩峠の福ちゃん荘から出撃し、首相官邸を占拠する計画だったのに…

こんな筈じゃなかったのにな、と思った。「約束」が違うじゃないか、と思った。もっとも、私だけが勝手に思ってる「約束」かもしれないが。

事の起りは去年の10月だ。私は、チャンネル桜に呼ばれて、高森明勅氏と話をした。「神話と歴史について」だ。8月2日、私の『ヤマトタケル』(現代書館)が出た。それを高森氏は絶賛してくれた。そして、呼んでくれたのだ。高森氏は正統派の日本主義者だし、学者だ。僕の本を読んでも、不満な所は沢山あったはずだ。それなのに、「これは面白い」とってくれた。保田與重郎、三島由紀夫と並ぶ三大「ヤマトタケル論」ですよ、と番組でも言ってくれた。とても、そんなもんじゃないですよ。私の本なんて。と赤面した。でも嬉しかった。

しかし、神話の時代から、神々だって間違うし、ケンカするし、殺し合いもある。神の子孫の天皇も間違うし、ケンカするし、殺し合いもある。本当に、神国日本の歴史を書くつもりなら、もっと「清く正しい」神話や歴史を書けるはずだ。ところが、限りなく、アーネーで、アバウトだ。人間なんてそんなもんだよ。と言ってるようだ。

神々だって、天皇さまだって間違うんだ。我々、今の人間が間違うのも当然だ。だから、皆、謙虚に生きてようよ。他人の過ちも許してやろうよ。というのが日本の神話であり、「日本精神」だよ。ちゃいますかね。私はそのことを書いたつもりだ。

高森氏とのトークが終わったあと、チャンネル桜の水島社長と話した。「桜は右翼的テレビ局と思われているが、そんなことはない。自由な言論の場にしたい」という。「だから、左の人でもどんどん出てほしい」という。

「それはありがたいですね」と左翼に代わって私は礼を言った。「朝生のようなハードなものでなく、皆に均等に喋らせるような番組にしたらどうですか」と私は提案した。「塩見さん、植垣さん、荒さん…と、声をかければ出てくれる人はいますよ」とも言った。

「何なら、『左翼の主張』のコーナーを作って、毎日、一時間ずつ、一方的に喋らせるのもいいじゃないですか」と言った。ともかく、僕のイメージでは、「絶滅寸前の野生動物保護」のような感じだった。左翼の人を呼んできて、思い切り、喋らせる。そして、聞き手が、「そうですね」とやさしく聞いてあげる。それだけでいい。質問や反論なんかしちゃいけない。かわいそうだろう。そんなことをしたら。だって、答えられないんだから…。ただただ、やさしく聞いてやつたらいい。イリオモテヤマネコやトキに対し、

「なんで、お前は生きのびる努力をしなかったんだ。バカ！」なんて誰も質問はしないでしょう。ただただ、かわいそうに、うんそうだね、いじめられてんだね、と同情してやるだろう。左翼にもそういう温かい心で接してやれよ。それが日本精神だろうが…。

と、私は怒りに燃えましたね。こいつら右側4人には日本精神がない。愛国心がない！

僕だったら、やさしく、ナースのように接してやりますね。相手は病人なんだから。子供なんだから。「なるほど、今時、こんなことを考えている人がいるのか。貴重ですね」「けなげですね」「がんばって下さいね」と一方的に話を聞いてやればいい。ほめてやればいい。それで、後は、テレビを見ている人に判断してもらえばいい。それなのに、左側が何か言うごとに、右側の4人は襲いかかって、論破してしまう。むごいやね。かわいそうじゃないか。中国の文革や、スターリンの肅清を批判してたが、でも、右側4人のやってることは、「言論の肅清」だよ。血も涙もないよ。

これはもう、法律を作るしかないね。「左翼保護法」とか「左翼絶滅阻止法」とか。「生類憐みの令」とか。だって、100年後には、バカな日本人も

目がさめるよ。「しまった。あの時、鈴木の言うことを聞いて左翼を保護しておくんだった」「こんなひどい世の中になるとは思わなかった」「やはり、反対勢力がいないと言論は堕落しますよね」…とか言って反省するだろう。その時ではもう遅いんじゃ、バカタレが！

仕方ない。100年後に備えて、こんな案はどうじゃろう。少しは残っている左翼をつかまえてきて、精子を保存する。そして、100年後に、「うん、反対勢力も必要だよね」と思った時に、左翼をつくる。「私が左翼を生んでみたい」という奇特な女性も現われるだろう。その時、「塩見」「荒」…といったブランドのサンプルから選べるんじゃ。楽しいでしょう。

そして、もう一度、革命をやればよかよ。大菩薩峠の福ちゃん荘に立てこもって、ここから一気に東京に攻め入り、首相官邸を占拠し、革命政権樹立だ。1969年、塩見議長の指導のもと、本当に、こうやって日本革命をやろうとしたんだよ。惜しかったね。実現していたら、「日本民主主義人民共和国」になっていた。プロ独（プロレタリア独裁）憲法も生まれていた。天皇制は廃止。私有財産も廃止。9条も廃止して、全国民徴兵制の「赤軍」をつくる。そして、ソ連のワルシャワ条約軍に加盟する。さらには、もう一度、アメリカ帝国主義と戦争だ！血湧き肉躍る戦争だ。

でも、1969年には、大菩薩峠の福ちゃん荘に結集したところで、警察に急襲され、一網打尽にされてしまった。首相官邸占拠も夢。日本革命も夢。日本民主主義人民共和国樹立も夢。初代共和国・塩見大統領実現も夢のまた夢。すべては夢に終わったのでありました。

(3)日本で一番長い小説を読んだんで、人間が大きくなりましたわい

そんな時に、私は、中里介山の『大菩薩峠』（ちくま文庫・全20巻）を読み終えたのでありますよ。大菩薩峠で終わった日本革命の夢。しかし、ここは、元々は中里介山の小説で有名な所なんです。赤軍派の人々もその小説にひかれたんでしょう。そこで軍事訓練をして、東京に攻め上る。首相官邸を占拠する。というマンガ的なことを考えたんですね。魔力を秘めた所ですよ、大菩薩峠は。一水会でも、昔、ここで合宿をやったことがある。小説にひかれ、又、赤軍派の決起にひかれて。ただし、福ちゃん荘ではなく、隣りの民宿でしたが…。

小説、『大菩薩峠』は、日本一長い小説といわれている。それを私は読破した。周りには、ちょっといい。ジャナ専に行った時も、教員室で皆に自慢してやった。文芸科の先生だって、全巻読んだ人はいない。左翼や右翼

だっていないだろう。日本では私一人かもしれない。そんなことはないか。書いた人はいるし、本を作った人はいる。

この小説は、「日本一長い」と書いたが、書かれた期間も長い。30年も書きつがれている。その上、未完のままで終わっている。まずは、作者の紹介から始めよう。

〈中里介山（1885～1944）

東京都下西多摩村（現在羽村市）生まれ。15才で上京。電話交換手・小学校教員を経て木下尚江らの社会主義運動に加わる。〉

学校も口クに出ていない。苦労して、プロレタリアの生活をするわけだ。その中で、勉強をし、社会主義運動に加わる。そういう青年が多かったんでしょう、当時は。しかし、文才があったんですね。小説を書いて世に出るんです。

〈明治37年（1904）都新聞社に入り、同39年に処女作「氷の花」を発表。続いて「淨瑠璃坂の仇討」他を都新聞に連載し文名をあげた。〉

大正2年（1913）29才で「大菩薩峠」連載を開始。都新聞連載中絶後は、毎日新聞、国民新聞、読売新聞などに昭和16年（1941）まで書き継がれ、この間29年に及ぶがついに未完に終わった〉

約30年間も書き継いだんですね。29才からだから、一生の半分以上は、この小説にかかり切ったんだ。それに、都新聞、毎日新聞、国民新聞、読売新聞…と四紙に續いて連載されたなんて。今ならありえない。朝日で連載が終わり、その後読売、産経で連載するなんて…。でも、それだけ、大ヒットした連載だから、どこでも欲しがったんだろう。

ちくま文庫の他に、単行本でも出ている。挿し絵入りの豪華な本もある。僕は文庫を8巻まで自分で買ったが、そのあとは、ちょうどジヤナ専の図書館にあったので、そこで借りて読んだ。かえって、図書館の本だから、返却日があって、必死に読んだんだと思う。もし、金銭的余裕があって、全20巻をパンと買って本棚に並べたら、多分、読めないとと思う。「うん、いつでも読めるや」と思って…。その点、貧乏な方が、本を読めるというわけだ。

ところで、『大菩薩峠』は何度も映画化されている。僕は学生時代に見た。東映の片岡知恵蔵が主人公の机竜之助を演った。たしか第4部まであった。その後、市川雷蔵が演った。これも4部ほどあった。さらに仲代達矢が演った。これは第1部で終わった。

全20巻を通してやった人はいない。なぜなのか。資金的に続かなかったのか。どうして、こんな面白い所で終わるのか、と思ったが、違う。多分、映

画化された部分が面白さのハイライトなのだ。中里介山も、初めの部分にパワーを集中させたのだ。

初めの方は、本当にスリリングで、目まぐるしい展開だ。それまでの小説にないテンポだろう。嘘だと思ったら、読んでみたらいい。あるいは、映画をTSUTAYAで借りて見たらいい。時代劇なのに、今のハリウッドのようなハイスピードの展開だ。

アナーキーな剣士・机竜之助は、大菩薩峠で、老巡礼をいきなり斬り殺す。全く理由はない。理不尽な殺人だ。まるで、カミュの小説のようだ。竜之助はこの後、御岳神社の奉納試合で宇津木文之丞を打ち殺した上、その妻お浜をさらって江戸へ出奔する。文之丞の弟兵庫は竜之助を仇とねらい、追う。殺された巡礼の孫娘お松は盗賊・裏宿の七兵衛に助けられた。

江戸に出た竜之助は、ささいなことからお浜を斬り捨て、その後は新撰組に加わったり、天誅組に参加したりする。その中で、爆弾で目を失明する。盲目となつたが、剣の腕はさらに鋭く冴え、夜な夜な辻斬りをする。そんな時に、お浜そっくりな女お豊に出会う。

そして、悪徳旗本や、遊女、盗賊、はては外国人のマドロスまでもが次々と出てきて、大河ドラマは続く。5、6巻くらいまでは息をつかせぬ面白さだ。ハラハラ、ドキドキだ。しかし、その後は、ちょっと落ちつく。話も錯綜する。竜之助が全然出てこないで、脇役だけが活躍する巻もある。あるいは作者のウンチク話が長々と書かれてる巻もある。不思議な小説だ。

当時の読者はどう讀んだんだろう。知らないが、多分、都新聞に載った時の感動が忘れられずに、時をおいて他の新聞に載った時も、「おっ、あの続きか！」と飛びついたんだろう。でも、今讀んでる私はつらかった。長い。長い。もうやめようか、と何度も思った。しかしせっかく讀んだんだから…と思って読み進めた。もう、泣きながら讀んでいた。何で俺はこんなことをしてるんだろう…と思って。

でも、努力は報われた。5月22日(日)。とうとう全巻讀破しました。バンザイ！大変だったけど、でも、「日本で一番長い小説」を俺は讀破したんだ！という自信はつきましたね。そこに高い山があるから登る。そして征服する。そんな、登山家みたいだね。そこに長い小説があるから讀む。次は、「世界一長い小説」といわれるブルーストの『失われた時を求めて』だね。これもキツそうだ。『大菩薩峠』に輪をかけて大変そうだ。

そうそう。『大菩薩峠』では、差別用語が沢山出てくる。本人が盲目になるんだし、身分、職業、身体障害に関わる語句・表現が散見される。しか

し、当時の時代・雰囲気を知ってもらうためにそのまま出版したという。本人には全く差別意識はない。差別用語をとってしまうと、当時は差別なんかなかったのか、と、逆に誤解される。そういうことなんだろう。昔の本には、こういった「ことわり書き」が必ず書いている。ところが、「大菩薩峠」は、さらに踏み込んでこんなことを記している。「編集付記」のことだ。差別用語はあるが、と前書きして…。

〈社会主義運動に身を投じた介山の作品が、「人間界の諸相を曲尽して、大乗遊戲の境に参入するカルマ曼陀羅の面影」を捉えることを目指し、その中で介山が民間信仰の基層に思いをこらし、疎外された人々の姿を共感をもって描き出したのは当然なことであった。ある表現が差別的であるかはその語句の存在によるのではなく、具体的な文脈に即して読まれる必要がある。…〉

だから、当時の表現のままにした、という。「疎外」なんて言葉も出てくる。そう、介山は、社会主義者なんだもん。人民を差別するはずはない。差別を糾弾するために、あえて、当時の語句、表現を用いたのだと。なるほどと思った。社会主義者だから…と、別に、それを隠れ蓑にしてるわけではない。これは20巻読んだ私が言うのだから確かだ。

でも、いろんな事が分かるね。世の中のこと、人間の考え方…と。全20巻読破の感動は今も尾をひいている。これで人間が大きくなつたような気がした。スポーツ会館で計ってみたら身長が3cm伸びていた。体重も5kg増えていた。本当だ。くやしかったら、皆も、読んでみなせえ。

【だいありー】

(1)5月23日(月) 1:00ジャナ専。夜、スポーツ会館で計量。

(2)5月24日(火) レコンの原稿を2本書く。夜、トリックスター。

(3)5月25日(水) 月刊タイムスの原稿を書く。他にも原稿あって、ヘロヘロ。

(4)5月26日(木) 河合塾コスモの授業。5:20p.m.からの授業では、高橋哲哉さんの『靖国問題』（ちくま新書）をテキストにやる。とてもいい本だ。夜、ライブ塾に。塩見塾。とてもいい話でした。

(5)5月27日(金) 1:00p.m.皇室の本の打ち合わせ。4:30p.m.からジャナ専の会議。6:00p.m.から生徒とのコンバ。

(6)5月29日(日) 3:00p.m.から一水会物故七同志慰靈祭。

【お知らせ】

(1)6月8日(水) 7:00p.m.から高田馬場のライブ塾。「連合赤軍事件の真実」。元連合赤軍兵士の植垣康博さん、中村うさぎさん（作家）、風見愛さん（ストリッパー）がゲスト出演です。ライブ塾は 03(5331)3263です。

今、発売中の『文芸春秋』（6月号）は特集が「三島自決からあさま山荘まで」です。久能靖が「連合赤軍・植垣康博と山岳アジト巡礼」を書いてます。読んでみて下さい。

(2)6月15日(水) 7:00p.m.から一水会。高田馬場のシチズンプラザ。堀幸雄さん（評論家）が講師です。テーマは「改憲の必然性」です。堀さんは『戦後の右翼勢力』（勁草書房）などの著書があります。

(3)7月12日(火) 7:00p.m.から高田馬場ライブ塾。映画「日本鬼子」を見て、その後、松井稔監督とトークします。

(4)新しい格闘技雑誌『UPPER』（vol.1）（白夜書房発行）が、「前田日明は格闘技界の救世主（メシア）である」を特集しています。僕も、「前田の眼力」を書いてます。

(5)横山光輝が日本人馬賊を描いた名作『狼の星座』が文庫になりました。講談社漫画文庫で全4巻です。（各680円）。売れてます。その4巻目に私が「解説」を書いてます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張6月6日

だから、「史記」に学ぼう。李広将軍に学ぼう

(1)三島由紀夫の「第一の性」と、「史記」が前田日明を支えた

さて、李広（りこう）将軍のことだ。

前漢の時代の将軍だ。元プロレスラーの前田日明が評価し、グッときた、と言っていた偉大な将軍だ。5月23日(月)にアップした「主張」に書いたので覚えているだろう。前田は自らが主宰する格闘団体「リングス」がつぶれてからは、〈浪人〉をしていた。前田にとっては、長い、苦しい浪人時代だった。

今回、K-1から声がかかり、「HERO'S」の総合プロデューサーになった。前田がマット界に帰ってきた。ファンも大喜びだ。格闘技雑誌は、どこも「前田特集」だ。『UPDER』では僕も「前田の眼力」について書いた。苦しい時代があったからこそ今の前田がある。そして、サムライはサムライを知る。世界中に彼のネットワークもある。強豪を発掘してくれるだろう。格闘技界をグンと面白くしてくれるだろう…と。

前田は、格闘家として天才だが、人を見つける天才でもある。又、勉強家でもある。三島由紀夫、太宰治、シュタイナーは好きで全部読んでいる。又、中国の歴史書や、四書五経も読んでいる。それが、前田をつくった。苦しい時代の前田を育てた。

特に、三島由紀夫の「第一の性」だ。男が男らしく生きるにはどうしたらいいか。それを考えた本だ。僕は前田に教えられて、初めて読んだ。さらに中国の歴史書だ。中でも、史記だ。この前も紹介したが、前田は、今発売中の『格闘伝説』の中で、趣味の読書について聞かれ、こう答えている。

〈中国の戦国時代の歴史書を片っ端から読んでいくのが好きですね。例えば『史記』『呂氏春秋』『春秋』『春秋左氏伝』…。そういう史書というのは40才を過ぎて読むと胸にしみるんですよ〉

なるほどと思った。若い時に読んだら、「へエー、中国にはこんな将軍がいたのか」「凄い人がいたんだな」と驚くが、それで終わってしまう。自分の人生とはクロスしない。ところが、40過ぎて読むと、自分の人生と比較して読む。「うん、俺にも似たことがあったな」「そうか。彼もこんなことで悩んでいたのか」…と。前田は言う。

〈人間というのは今も千年前も変わりがなくて、四千年前にも前田日明のような人間がやっぱりいるわけです。そして、そこに、その失敗例と成功例が書いてある。そういうのを読んでいると、なんだか熱くなるんですね〉

「では、中国の歴史上の人物で『自分と似てるな』と思われる人はどんな人ですか」と記者に問われて前田は言う。

〈「ああ、この人は失敗例はオレと似ているな」と思ったのは、前漢の時代にいた『李廣將軍』ですね。この人の境遇を読んだときに、ちょっとグッとしましたね。歴史というものには余韻があるんですよね。それが誰かが経験したものであったとしても、時空を超えて伝わってくるような気がするんですよ。自分にとってはそれが一番役に立つ何かだと思ってるんですけどね〉

凄いね。内容が濃いね。深いね。でも、李廣將軍ってどんな人だろう。分からん。これを読んでる格闘技ファンも分からんだろう。分からんながら、

「うん。前田は凄いな。「勉強家だね」と思う。納得する。それで終わりだ。

だが、私は終わらない。木曜日、河合塾コスモに行った時、漢文の先生にきいた。生徒になって聞いたのだ。前田のこの文を見せて、「それで、李廣將軍はどんな人だったんですか。將軍のどこに前田は感動したんでしょうね」…と。

そしたら、漢文の先生は言っていた。「李廣將軍は勇敢で、偉大な將軍でした。部下の人望も厚いし…」と言う。「詳しい資料を来週、持ってきてましょう」と言ってくれた。

さて、来週。漢文の先生は、李廣將軍について書かれたコピーをくれた。18ページあった。『史記』（岩波文庫）に出ていた「李將軍列伝。第49」だ。小川環などが記している。読んで驚いた。知らなかった。こういう人だったのか。それで前田が「似てる」という意味も分かった。悲劇の將軍だ。いわば日本の義経に似ている。戦いは連戦連勝だ。しかし、軍功を認めてももらえない。不器用なんだ。行き方も下手だ。そして、最後は…。

では、「李將軍列伝」だ。初めにこう書かれている。

〈(李広は) 敵に向かえば勇敢であり、士卒には愛情深かった。命令は煩雑でなく、部下はかれを慕った。ゆえに李將軍列伝第四十九を創る--太史公自序〉（注：太史公とは「史記」を書いた司馬遷のことだ）

孝文帝の14年（前166年）、匈奴（きょうど）が大挙して爵關（しょうかん）に侵入したとき、李広は従軍し、匈奴を討伐した。馬上の弓術が上手で、次々と敵を射殺した。又、人間だけでなく、戦場に迷い込んだ猛獸とも格闘し、たおした。そこで文帝が言うには…。

「残念だなあ。きみは時勢にめぐりあわなかつた。もしきみが高祖さまの時代に生まれていたなら、一万戸の大名となることくらい問題ではなかつたのだが」

(2)李広將軍は、まるで義経のようだ。そして、ヤマトタケルのようだ

孝皇帝が即位すると、さらに李広は重く用いられ、匈奴との鬭いに赴く。連戦連勝だ。しかし、失敗もする。だが、その切り抜け方がうまい。猛将だが、智将でもある。

ある時、李広と部下百人の騎兵だけが、戦場で取り残された。敵の真っ只中だ。味方の大軍とは数千里も離れている。普通ならば、何をおいても、そこへ逃げ帰るべきだ。それしか方法はない。でも、それでは、敵に、すぐに討ち取られてしまう。

李広は命令した。「進め！」。たった百騎で敵の大軍の前に進んだのだ。さらに言う。

「全員馬からおり、鞍（くら）をはずせ」

逃げれば、敵は追いかけて、自軍は全滅だ。しかし、立ち止まれば、敵は、「これはおとりか」と思う。「大軍をうしろに控えたおとりか」と思う。さらに、鞍を外し、たった百人で進んでいけば、なおのことだ。

「これで、おとりの軍というやつらの疑いをいっそう確かにやってやるのだ」。

賭けだ。危ない賭けだ。しかし、その賭けに李広は勝った。敵の大軍は「おとりに違いない」と思い、襲ってこない。そして何と、大軍をひきあげてしまった。

又、元光6年(前129年)、將軍となって匈奴を攻撃した時は、圧倒的な敵軍の前に、敗北した。李広は生け捕りにされた。敵の单宇（ぜんう=匈奴の王）は、李広の勇猛・賢明さを知っていたから、「必ず生きたまま連れてこい」と命令してたからだ。李広は、傷つき、馬の上に乗せられ、連れて行か

れた。

李広は死んだふりをしていた。横目でそっと見ると、近くに良い馬に乗った匈奴の子供がいた。李広はいきなり、飛びあがって子供の馬に乗り、子供をつき落とし、その弓を奪いとて、何人かを射殺し、かけ出して、味方の軍に逃げ帰った。

都に帰った李広は裁判にかけられた。役人は李広が兵卒を数多く失ったうえ、敵に生け捕りにされたことを罪状として斬刑に相当すると判決したが、金を出して罪をあがない平民となった。

それから数年後、匈奴が侵入すると、李広は再び天子に召し寄せられた。匈奴は数年の間、彼を避けて侵入しなかった。

李広は狩猟に出かけた時、草の中にある石を見て虎だと思い込み、弓で射たところ、石に命中した矢じりは石に突き刺さった。そこでもう一度、あらためてやると、二度と石には突き刺すことが出来なかった。

李広は清廉な人で、恩賞や下賜品を受けるといつも部下に分け与えた。飲食は士卒と同じ物をとった。家には財産は残らず、死ぬまで家の経済について触れなかった。

李広は訥弁（とつべん）で口数少なかった。戦場では、水を発見すると、兵卒たちが飲み終わるまで李広は水に近づかなかった。兵卒たちが食べ終わるまで、李広は食事をとらなかった。寛大で些細なことをいわなかつた。部下は、彼を愛し、喜んで命令をきいた。

何度も何度も匈奴と戦い、勝った。連戦連勝だった。どんな絶望的な状況になっても、切り抜けた。しかし、なぜか、上に認められることはなかつた。日本で言えば、義経のようだ。いくら勝ちいくさが続いても、頼朝には認められない。そして最後は、頼朝に討たれてしまう。

李広はあるとき占師の王朝とくつろいで雑談しているとき、訊ねたことがある。

「漢が匈奴を討伐しはじめてから、このわしはそれに参加しなかつたことはなかつた。校尉（部隊長）以下の連中で、中等くらいにならぬ才能でありながら、匈奴征伐の軍功を認められ、侯の位を手に入れたものが数十人もおる。ところがこのわしは人におくれをとったことはないにもかかわらず、領地を受けるだけのわずかの功も認められなかつた。なぜだろう。」

オレの人相は侯爵になるにはふさわしくないのだろうか。それともすべては運命というものだろうか？」

李広としては珍しく、弱音を吐いている。彼の物語の中では、ここは異色

だ。元プロレスラーの前田日明も、ここにグッときたのかもしれない。自分には才能もある。よく戦った。どんな時でもあきらめず戦い、勝ってきた。しかし、認められることは少ない。他の、口クに戦わない連中はどんどん出世していってるので…。オレは将となる器ではないのか。徳がないのか。そういう考え、悩んだに違いない。

李広の悩みに対し、占師の王朝は言う。

王朝「將軍はご自分でよくよくお考えなさいませ。今までにお悩みになることがございますか」

それに対し、李広は意外なことを言う。

「わしは以前、隴西（ろうせい）の太守であったころ、羌族（きょうぞく）がそむいたことがある。わしはよびかけて降伏させた。降伏したのは八百人余りだった。わしはだましてその日のうちにかれらを殺した。いまでも実に心がいたむのは、この事ひとつなのだが」

王朝が言う。

「すでに降伏したものを殺すことより大きな禍（わざわい）のもとはございません。正しくこれが將軍が公爵におなりになれない原因ですな」

エッ、そんなことで悩むのか、と驚いた。戦争なんだから、清も濁も合わせのんで、戦う。裏切りもあるだろうし、やりすぎることもある。そんなことは気にしないで戦う男だと思っていた。「三国志」や「史記」を見ても、そんなことにはコセコセしない豪傑ばかりが出てくる。そんな気がする。日本よりも何十倍もスケールの大きな豪傑たちだ。日本じゃ、信長や秀吉クラスでも、どれだけの人間を殺し尽くしたか分からない。しかし、それに悩んだりはしない。天下平定の為には当然と思い、いささかも動搖しないし、悩まない。

ところが、中国の豪傑は悩んでいる。横山光輝の大作『狼の星座』（講談社コミックス文庫・全4巻）を読んだ時にもそれを感じた。主人公は日本人だが、大陸にわたり、馬賊の大頭目となる。いわば、中国人として生き、中国の人民を護るために鬪う。卑劣な戦いはしない。自ら正しいと信じる戦いばかりだ。ところが、夢にうなされる。自分が殺した人間たちが夢に出て来て、恨みごとを言うのだ。自分は正義だ。だったら、放っておけばいい。しかし、そんな悪霊に日々悩まされる。そして、禅寺に入って、修業する。

馬賊という荒々しいイメージからは考えつかない。いやに人間的だ。なんか、鶴屋南北の「東海道四谷怪談」や、中里介山の「大菩薩峠」を彷彿させる。

それが又、『狼の星座』の内容に深みを与えていた。そんなことを含めて、「解説」を私は書いた。

(3)自分で自分の首をはねた。壮絶な最後だった

さて、李広将軍だ。年をとったが、相変わらず戦いつづけている。常に前線での戦いを願い出ている。しかし、年も60だ。もう前線ではないだろうと上からは止められる。しかし、李広は命令を無視して、前線に行く。そして道に迷い、本隊に合流できなかった。

この経過を文書にして報告するようにと大将軍から言わされた。李広は言った。「校尉たちに罪はない」そして部下を集めて言った。「このわしは髪を括って元服したときから、匈奴と大小あわせて七十何回も戦った。いま幸にも大将軍に従って出陣し、单宇の兵に立ち向かえると思ったが、大将軍はそれがしの任務を変え、進路は廻り道で遠いうえに、道に迷ってしまった。天命ではあるまい。それにこのわしは、年も六十余りだ。いまさら文書を扱う小役人の相手をするのは、まっぴらだ」

かくて刀を引き抜き、自分で首をはねた。李広の軍の将校以下全員がみな声をあげて泣いた。

これで、悲劇の将軍・李広の生涯は終わる。李広の子は三人あった。李当戸（りとうと）、李椒（りしょう）、李敢（りかん）だ。李当戸の息子は李陵（りりょう）といった。彼も悲劇の将軍として有名だ。匈奴と戦い、敗れ、捕虜になった。捕られた单宇は、李陵の名声を聞いており、とどまるよう説得し、自分の娘を李陵にめあわせて高い身分にしてやった。漢はそれを聞いて李陵の母や妻子を処刑した。日本の小説家・中島敦（1909～1942）はこれを基にして、名作『李陵』を書いている。そして実は、司馬遷は、この李陵を弁護し、帝の怒りにふれ、宮刑に処される。死ぬよりもつらい刑だ。しかし、司馬遷は生き抜き、「史記」を書く。だから、李陵にも李広にも特別の思いがあったはずだ。

「史記」の中の「李將軍列伝」の終わりごろにこうある。

〈太公史曰く、古い言葉に、「その身正しければ、令せずして行なわれる。その身正しからざれば、令すといえども従われず」とある。それは李將軍のような人をいうのである〉

〈諺に、「桃や李はものをいわないが、木の下には自然と蹊（こみち）ができる」とある。この言葉は小さいことだが、大きいことにもたとえることができよう〉

李広將軍は義経のようでもあり、ヤマトタケルのようでもある。「史記」を初めとした中国の武将の生き方、死に方をみて、我が日本の武士たちも生きる手本としたのだ。皆も、「史記」に挑戦してみましょう。読みましょう。それに、横山光輝もマンガ「史記」を書いてた。まず、手始めに、これから読もうかな。

【だいありー】

(1)5月27日(金)に、ジャナ専の会議があり、その後、生徒と一緒に「和民」で飲み会がありました。中里介山の『大菩薩峠』（ちくま文庫・20巻）を全部読んだのは僕だけかと思って広言していたら、高沢秀次先生（文芸評論家）が、「私だって読んだ」と言ってました。又、このあと、新宿の文壇バーに行ったのですが、NHKのプロデューサーが来ていて、「私も読んだ」と言ってました。何でもNHK衛星で5時間半の「大菩薩峠」特集をやったそうです。凄いですね。じゃ、これで3人になっちゃったよ。日本で『大菩薩峠』を読破した人が…。

(2)5月29日(日) 3:00p.m.から一水会事務局で、「一水会物故七同志慰靈祭」。一水会結成以来33年で、亡くなった同志が7人おり、その人々の慰靈祭をしたのです。

(3)5月30日(月) 1:00からジャナ専。7:30からネーキッド・ロフト。「包丁妻」のライブを聞きに行く。

(4)6月1日(水) 夜、柔道。

(5)6月2日(木) 河合塾コスモ。

(6)6月4日(土) 5:00から、退院した沢口友美さんの復活祭。

【お知らせ】

(1)6月8日(水)午後7時から高田馬場のライブ塾（トリックスター）で、「連合赤軍の真実」。元連合赤軍兵士の植垣康博さんとトークします。中村うさぎさん（作家）、風見愛さん（ストリッパー）もゲスト出演します。沢口友美さん（ストリッパー）もこられます。植垣さんは貴重な「歴史の証人」です。ぜひ、いらして下さい。

ライブ塾は、03（5331）3263です。

(2)6月15日(水) 7:00p.m.から一水会フォーラムです。高田馬場のシチズン
プラザです。堀幸雄さん（評論家）の「改憲の必然性」です

(3)7月12日(火) 7:00p.m.からライブ塾。映画「日本鬼子」を見て、そのあと松井稔監督とトークします。

(4)8月10日(水) ロフトプラスワンで、松尾貴史、齊藤貴男、そして私でトークをします。

(5)「尊の眞相」編集長だった岡留安則さんの『尊の眞相イズム』（WAVE出版・1300円）が出ました。ラストには私との対談「激論、言論の覚悟を問う」が載っております。6月6日(月)全国発売です。

(6)齊藤貴男さんの『不屈のために』（ちくま文庫・740円）が6月10日(金)発売です。とてもいい本です。「階層・監視社会をめぐるキーワード」とサブタイトルがついてます。「勝ち組」「構造改革」「グローバリゼーション」「適者生存」「愛国心」…といった危ないキーワードを中心に、この日本を読み解き、糾弾します。読んでいて、ふるえがきました。頼まれて私が「解説」を書きました。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張6月13日

『史記』と『夕陽と拳銃』。そして『狼の星座』

(1)文章は千古の事、社稷は一戎衣

まずは、マンガから挑戦しようと思い、横山光輝の『史記』の第1巻を買った。小学館文庫で648円だ。内容も濃い。巻末の「解説」を見て驚いた。伊達宗義さんが書いている。段一雄著『夕陽と拳銃』の主人公のモデルとして知られる伊達順之助の長男だ。（海軍で終戦。戦後は防衛庁、拓殖大学教授など歴任。現在もお元気だ）。そして、伊達順之助は横山光輝の『狼の星座』（講談社コミック文庫）のモデルでもある。

いや、『狼の星座』は、モデルとなった人が二人いる。日本人で、大陸に渡り、馬賊の頭目となった伊達順之助。そして、小日向白朗だ。伊達は、団一雄の小説で有名になった。又、戦後、中国で捕らえられ、処刑された。だから、悲劇の英雄でもある。皆、熱狂して、この『夕陽と拳銃』を読んだ。処刑される時「お前は日本人だろう。日本人なら助ける」と言われたが、それを拒否し、中国人として、従容として死んだ。中国人として、中国の為に死んだ。そこが何とも潔い。

だから、なおのこと、伊達は死後も英雄として生き、伝説になった。

もう一方の小日向白朗（おひなた・はくろう）だ。彼は、戦後、日本に帰ってきた。そして右翼の人たちとの付き合いもあった。僕も学生時代、右翼の先生に紹介されて会った。この人があの伝説の馬賊王か、と感動した。しかし、右翼の中にあっても、異質だった。とけ込めなかつたようだ。若者を集めて組織を作ろうとか、運動をやろうという欲もなかつた。

『狼の星座』は、伊達、小日向の二人をモデルにしたが、主に小日向のようだ。横山は、小日向に実際に話を聞き、取材し、その話が基になった。僕も、もっともっと話を聞いておけばよかった、と思った。小日向が大陸で馬賊から拳銃をもらい、それを日本に帰ってきて、右翼にあげた。それが、時

の首相を暗殺する拳銃として使われた。という話もある。知り合いの右翼の人に聞いた。伊達に劣らず、小日向も伝説が沢山ある。僕も、少し調べてみよう。

小日向について書かれたものは、今ではほとんどない。彼自身が本を書いてるのだろうか。それも分からぬ。『狼の星座』の「解説」を頼まれて書き始めた時、あっ、昔、『馬賊戦記』という本があったな、と思った。それが小日向の書いた本かと思ったが、調べてみたら違っていた。朽木寒三が書いたものだった。だから、小日向白朗が現代の我々の眼に触れるのは『狼の星座』だけだ。

その点、伊達順之助は幸いだ。壇一雄の『夕陽と拳銃』がある。この本と共に、不朽だ。不滅だ。僕も、胸を熱くして読んだ。そして作者の壇一雄も、伊達のように、凛々しい、男らしい人物だと勝手に思っていた。

ところが、どうも違う。壇一雄は、『火宅の人』とか『リツ子・その愛』、『リツ子・その死』のように、奔放、破滅的な愛を書いたものが多い。『夕陽と拳銃』は、むしろ例外的作品なのだ。そして、今では絶版となり、どこにもない。図書館にもない。探すとしたら、ネットで古本で探すしかない。いい本だ。読みたい人は探したらいいだろう。

ちなみに、『辞林21』（三省堂）で壇一雄を引いてみたら、こう書かれていた。

だんかずお【壇一雄】1912～1976。小説家。山梨県生まれ。東大卒。私生活の体験を清冽な魂の記録として描き、浪漫的な放浪精神を發揮して最後の無頼派と称された。代表作「花筐」「リツ子・その愛」「リツ子・その死」「火宅の人」。

これだけだ。「夕陽と拳銃」は完全に忘れ去られている。彼は、無頼派の作家だ。家庭があり、子供がありながら、ほったらかしで遊び歩き、女にうつつを抜かし、酒に狂う。どうしようもない人間だ。家は滅茶苦茶。火事にあった家の人間だ。それで「家宅の人」だ。そして、その恥すべき行いを、小説に書く。次々に書く。家族もつらかったろう。そして、娘が壇ふみだ。女優になっている。お父さんの血を継いでるから文才もある。阿川佐和子と対談本を何冊も出している。阿川も作家の二世だ。戦記ものを書いている阿川弘之の娘だ。昔は、女子アナをやっていた。TBSだったかな。テレ朝だったかな。その時、僕は会ったことがある。筑紫さんの番組だったかな。忘れた。

さて、『史記』だ。『夕陽と拳銃』の伊達順之助の息子、伊達宗義さんが

「解説」を書いている。

〈中国の古諺に「文章は千古の事、社稷は一戎衣」というのがある。文章は永遠の命を保つが、社稷（くに）の命ははかないものだ、という意味をもつ。さしも偉容を誇った漢王朝も四百年にして亡んだ。だが『史記』は、二千年以上を経たいまもなお二十四正史の筆頭に位して、不朽の史書として光彩を放っている〉

(2)死刑か宮刑か。究極の選択だ

社稷（しゃしょく）とは、社会、国家のことだ。一般の人はお目にかかることはない言葉だ。しかし、右翼の人は皆、知っている。「昭和維新の歌」に出てくるからだ。「社稷を思う心なし」という一節がある。右翼が、その心がない、と言うのではない。政治家や財界人は、自分のことだけ考えて、国を思う気持ちがない、と言うのだ。だから、我々が立ち上がり、昭和維新を断行しなければならない。そう思い、大声でこの歌をうたったものだ。戎衣（じゅうい）は軍服・軍衣のことだ。文は長く残るが、社稷は脱ぎ捨てる服のように、一瞬だ。という意味だろう。

前回のこの「主張」でも書いたが、司馬遷は『史記』を書いたが、それは、一つの大きな悲劇から始まった。この横山のマンガも、伊達の「解説」も、そこからズバリと斬り込み、踏み込んでいる。例の「李陵事件」だ。元プロレスラーの前田日明が好きで、「これは俺だ」と思ったのが、漢の時代の李広将軍だ。勇将であり智将だが、軍功は上に認められず、最後は自刃する悲劇の将軍だ。この将軍の孫が李陵だ。日本人にとって中島敦の名作『李陵』で知られる人物だ。この人も悲劇の将軍だ。

司馬遷は李陵と同時代の人だ。面識はない。しかし、尊敬していた。司馬遷は父のあとをつぎ、史書をまとめていた。ところが48才の時に、思わぬ災厄が彼を襲う。「李陵事件」だ。

匈奴征伐に出かけた李陵は、戦いの中で、本隊と離れ、十倍を超す匈奴にかこまれ、戦うが、ついに捕らえられる。匈奴の单于（ぜんう・王）は、李陵の武勇に感服し、自分の娘を娶（めと）らせた。勿論、そこにゆくまでは、李陵の、想像を絶する苦悩がある。いっそ殺してくれと願う。それが何故、匈奴の王の娘をもらうのか。その辺の事情は中島敦の小説を読んでほしい。司馬遷は『史記』では書いてない。自分も又、〈事件〉の当事者になるからだ。

さて、李陵が匈奴に屈したという報が長安に届くや、武帝は激怒し、李陵

一族の謀殺を命じた。ことごとくが殺される。帝の側近の者も、皆、李陵を非難攻撃した。今までには、李陵こそ武勲第一の人と讃めたたえていたのに。

その中にあって、司馬遷一人が李陵を弁護した。「李陵は戦いに敗れたりとはいえ、漢朝に対する赤心は烈々たるものがある」とかばったのだ。しかし、このことで武帝の怒りを招き、司馬遷にも死刑の命が下った。

ここで死んでいれば、悲劇の歴史家として終わった。本人は、そうしたかったのだろう。でも、それでは『史記』は生まれない。残らない。帝は死刑を命じながらも、助かる道を残していた。これは、ある意味、もっと残酷な道だ。殺すなら、さっさと殺せばいい。しかし、いや、助かる道があるよと、囁くのは、もっと残酷だ。

死刑を免れる二つの道とは何か。ひとつは金で刑を贖（あがな）うことであり、もうひとつは宮刑を以て死刑に代えることであった。だったら、金を払えばよい、と思うかもしれない。しかし50万銭という途方もない金だ。途方もないと書いたけど、僕もよく分からん。どんなことをしても司馬遷は集められる金ではない。一生かかってローンで払うというわけにもいかない。今だったら、「史記が出来てベストセラーになったら印税で払う」ということも出来るが、そんな選択肢は当時はない。刑の執行までは10日だ。それまで金が出来なければ死ぬしかない。

もうひとつ的方法は宮刑だ。腐刑ともいう。男のシンボルを切り取る刑だ。こんな刑にされるよりは、死刑の方がいいと思う。誰だってそう思う。ところが、司馬遷は父の遺志を継いで「史記」を完成する義務がある。それが親への孝だ。又、これは自分でなければ出来ないという自負もある。考え、悩み、苦しんだ末に「生きる」ことを選択する。

李広将軍は不器用な人だった。李陵もそうだ。そして司馬遷もそうだ。もうちょっとうまく立ち回ったら、栄耀栄華も思いのままだったろうに。しかし、そんな生き方は出来なかった。余りに正直すぎた。「李陵事件」のような時、果たして、司馬遷のような態度をとれるか。多分、誰もとれないだろう。李陵を弁護したら武帝の怒りを買うことは分かっている。司馬遷も、まさか死刑を宣告されるとまでは思ってなかったのかもしれないが…。しかし、怒りを買い、罰を受けることは想像がついたのではないか。生き方が下手だ。まわりの人々はそう思っただろう。「ここは武帝の怒りを買わずにじっと耐え、嵐が去ってから、正しい歴史を書いてやろう」と思った人もいたはずだ。しかし、その時、生きのびた人は、その後も、何も残していない。

そうみると、『史記』には、恨みが籠っている。怨念がある。だからこそ二千年以上も、人々を魅了し続けているのだろう。日本の「国民作家」といわれる、司馬遼太郎は、ペンネームを、この司馬遷からとった。彼の『龍馬がゆく』や『燃えよ剣』は、若者の血を燃えたぎらせ、行動へと駆りたてた。60年代から70年代の学生運動に参加した人々は、右も左も、皆、司馬の作品を読み、司馬の小説に駆りたてられるように走った。

しかし、名言だ。「文章は千古の事、社稷は一戎衣」か。と再びこの言葉を噛みしめた。でも、『史記』を書くためには死ぬよりつらい宮刑を司馬遷は引き受けた。とても出来ることではない。マンガの中では、宮刑を申し出た司馬遷を獄吏が軽蔑して笑うシーンがある。

「文官てのは意気地のねえもんだ。恥をさらしてでも生きていたいのかう」

本当に、こんなことを言った獄吏もいただろう。いや、当時のほとんどの人がそう思い、軽蔑しただろう。それを分かりながら司馬遷は生きる。そして「史記」を書く。前田日明が言うように、それを読んで、多くの日本人は自分たちの生き方を教えられた。「史記」に描かれた武将たちの戦い方、生き方、死に方をみて、自分の生き方にしたのだ。「史記」をはじめとした中国の歴史書が日本人を作った。と言っても過言ではない。

(3)命を賭けた「言論の覚悟」があるのか！と人々も問われている

今は勿論、宮刑のような残酷な刑はない。いや、死刑は全て残酷かもしれないが、わざわざ辱めを加えて殺すという刑はない。又、どんなことを言っても、日本は自由だ。誰かをかばって、それで捕まる事はない。でも、それにも拘わらず、タブーはある。言えないことはある。自己規制もある。

「こんなことを書いたら、逮捕されるのではないか」「殺されるのではないか」、という恐怖ではない。「こんなことを書いたら、もう注文がこないのではないか」という恐怖だ。だから、世間の暗黙の大勢・流れに沿ってものを書こうとする。

森達也さん、齊藤貴男さんと会った時、「自分たちは左翼といわれてるんです。変ですね。マルクスなんて読んだこともないのに」と言っていた。そうなんだ。左翼はもういない。消えた。あるいは右旋回した。又、危ないテーマについては誰も書かない。ところが、何でもズバズバと二人は言ってるし、書いてる。気がついたら、取り残されて「左翼」といわれている。

そんなことだろう。しかし、二人は貴重だ。「こんなことを言ったら、注

文はこないかも」「警察に目をつけられるかも」…と思っても、勇気を持ってやる。そういう勇気を持ったライターが少なくなったのだ。岡留安則さんがやっていた『噂の眞相』がなくなったのも、影響が大きい。

6月6日(月)、岡留さんの『噂の眞相イズム』(WAVE出版・1300円)が発売された。『噂の眞相』の「編集長日誌」を中心にまとめたものだ。勿論、「今」の問題もある。果たして、復刊するのかどうか。今、何を考へているのか。についても書いている。

さらに、巻頭と巻末に、対談が載っている。巻頭では、気鋭のジャーナリスト・斎藤貴男さんとのロングラン対談が収録されている。現代の言論封殺状況について二人は熱く、鋭く語り、糾弾する。「絶望的な小泉ソフトファシズム政権の行方」「日本の新・階層社会形成を撃つ」などが語られている。

そして、巻末は、岡留さんと私の対談だ。でも、この雑誌のために対談したのではない。3年前に「論座」で対談したものを作録した。「伝説の対談。激論、言論の覚悟を問う！」と銘打たれている。ありがたい話だ。「伝説の対談」なんていってもらえて。

「それにしても、『論座』では、凄い対談を二度もやってますね」とWAVE出版の人に言われた。一つは、岡留さんとの対談で、もう一つは、先月号の日教組委員長との対談だ。こっちの方は、出て一ヶ月なのに、もう「伝説」になりつつある。

先週、学校に行ったら、生徒が一枚のビラをくれた。「街で革マルがこんなビラを配ってましたよ」と。「憲法第九条の改悪を絶対に阻止せよ！」

「日教組・自治労の『改憲支持』方針決定を許すな」と大見出し。「革マル派」とちゃんと書いている。そして、何と、日教組委員長と私の顔写真がデカデカと出ている。「論座」の対談の写真だ。タイトルは「この対談は革命的だ！」と書かれていたが、そこに、「裏切り」を入れている。つまり、「この対談は革命的裏切りだ！」となる。手のこんだことをする。しかし、うまいね、と笑ってしまった。さらに、森越・日教組委員長の次の発言をとらえて、これは「改憲支持」宣言だ、という。

〈憲法についても、不磨の大典ではないと思っています。いまのところ前文と9条は変える必要はないと判断しています。（『論座』6月号）〉

この中の「いまのところ」に傍点を打っている。「まさしくそれは、“今後は、前文と9条改悪を認めます”と政府権力者どもに頭を垂れたことの言い換えだ」と革マルは言う。これはちょっとひどいね。言いがかりだ。

でも、革マル派も「論座」を読んでくれたのか。嬉しいね。無視されるよりは、ずっといい。しかし、元革マル派No.2の松崎明さんとだって対談して、『鬼の闘論』（創出版）を出してるのにな。そっちは批判しないのかな。

この革マルのビラを持ってきた生徒が言ってた。「本屋で右翼の新聞があつたで、見たら、鈴木さんの悪口が出てましたよ。『売国奴だ！』と書かれてましたよ」と。

これも嬉しかったね。右翼の人も読んでくれたんだ。日教組と対談した位で「売国奴」か。凄いな。でも、本屋に右翼の新聞なんてあるのだろうか。よく見つけたもんだ。

「右翼からも左翼からも攻撃されてるんだから、私が中立だということだよ」と生徒に言ってやった。「そうですかね」と納得はしてなかったようだけど…。

6月10日(金)、斎藤貴男さんの『不屈のために』（ちくま文庫・740円）が発売されました。私が「解説」を書きました。司馬遷のように、不屈の志を持って書かれた本です。何度か読み、そして「解説」を書きましたが、読むたびに、震えがきました。ぜひ読んでみて下さい。この本については、又、来週でも書きましょう。

【だいありー】

(1) 6月5日(日) 1時から代々木。まいちゃん、ともみちゃんのライブに行きました。歌をうたってました。楽しそうでした。

(2) 6月6日(月) 1時、ジャナ専。夜、スポーツ会館で、ランニングをしました。帰ってきたら、塩見孝也さんから電話。明日、テレ朝の昼の番組に出てくれとのこと。二人で「左右激突」をするそうな。尊敬する塩見議長の提案なら全て従います、と言いました。

(3) 6月7日(火) 朝、10時半にテレ朝の車が迎えにくる。11:00から3:00まで4時間も二人で討論。勿論、生番組じゃない。明日（水曜）の夜、山本晋也監督のコーナーで。このうち何十分かをやるという。憲法、靖国、中国問題、愛国心、右と左…などについて4時間も話す。疲れた。夜、テレ朝から電話。「明日やる予定でしたが、他のニュースが多くて、一週のびました」とのこと。6月15日(水)の昼にやるのでしょうか。又、のびるかもしれません…。

(4) 6月8日(水) 夕方、5時、骨法道場へ。植垣康博さんを堀辺先生に紹介しました。そして、7時から、ライブ塾。植垣さんの他、中村うさぎさん、風見愛さんがゲスト。何と、植垣さんの奥さんも来てくれました。超満員でした。熱いトークがかわされました。そしてハプニングも…。

(5) 6月9日(木) 河合塾コスモ。

(6) 6月10日(金) 7時、池内ひろ美さんの『妻の浮気』出版パーティ。椿山荘で。凄い人でした。アッと驚く人にも会いました。詳しくは次週に。

(7) 6月11日(土) 4:00p.m.ロフトで本を出すとのことで、インタビューを受ける。5:00p.m.映画「日本鬼子（リーベンクイズ）」の松井稔監督と会う。9月12日(火)のライブ塾の打ち合わせ。

(8) 6月12日(日) 1:00から骨法道場。堀辺正史先生の「武士道セミナー」を聞く。

【お知らせ】

(1) 「創」（7月号）が発売中です。僕の連載では「改憲無罪」を書いてます。慶應大学の小林節先生の授業で憲法について喋ったこと。本多劇場で大塚英志さんと憲法問題で対談したこと。などを中心に書きました。漫画家の山本直樹さんが、連載「探りながらいってみよう」で連合赤軍の加藤倫教さんを訪ねた話を描いてます。来月号では加藤さんと僕の対談が載ります。角度を変えて、加藤さんに迫ります。

(2) 6月15日(水) 7:00p.m.からシチズンプラザで一水会フォーラム。堀幸雄さんの「改憲の必然性」です。

(3) 6月29日(水) 7:30p.m.ロフトプラスワン。マッド・アマノ、岡本聖司さん、そしてあの植草一秀さんも出ます。私も出ます。司会は「創」の篠田編集長です。

(4) 7月4日(月) 公開シンポ第2弾。「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」6:30p.m.から文京シビックホール。

(5) 7月12日(火) ライブ塾。7:00p.m.から、映画「日本鬼子（リーベンクイズ）」の上映後、監督とトーク。

(6) 7月19日(火) 7:00p.m.から、一水会フォーラム。原嘉陽氏（文明史研究家）の「インド独立の志士と日本人」です。

(7) 8月10日(水) ロフトプラスワン。松尾貴史、斎藤貴男、そして私のトークライブです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張6月20日

椿山荘でホタルを見ました。世の無情を感じました

(1)何故か、『妻の浮気』の出版記念会に出た

今、一番売れている新書だ。池内ひろ美さんの『妻の浮気・男が知らない13の事情』（新潮新書・680円）だ。発売は5月20日だが、3週間もしないうちに、もう3刷だ。凄い。池内さんは若くて美人のコンサルタントだ。その写真が表紙にドンと出ている。そして、衝撃的なタイトル「妻の浮気」。うん、こりゃ、売れる。それに、担当者は、養老孟司の『バカの壁』を担当した人だ。卖れないわけがない。本の帯には、こう書かれている。

〈他人事ならいいのだけれど…。夫婦問題コンサルタントが綴る。おかしくも恐ろしい現代浮気事情〉

6月10日(金)、この本の出版記念パーティが目白の椿山荘(Chinzansou)で行なわれて、出席した。池内さんは「夫婦問題コンサルタント」だったのか。僕は、「離婚コンサルタント」かと思っていた。悩み、苦しんでいる妻たちに、「じゃ、離婚しなさい」と言ってるのだと思った。「裁判になるなら弁護士を紹介しますよ」と言って…。でも、違う。

1997年から7年あまりの間に、延べ9千人の男女の相談に乗ってきた。女性ばかりではなく、男性の相談もある。（4割くらい）。相談内容で多いのは、(1)浮気 (2)暴力 (3)親子関係だという。「じゃ、別れなさい」と言うだけでなく、まとめることがあるという。本を読み始めたばかりだから、その辺の詳しいことは分からん。読み終わって報告しよう。

そんな美人の夫婦問題のコンサルタントと何故、私が知り合いなのか。と皆も疑問に思われるだろう。実は、私も相談に行ったのです。妻の浮気と、妻の暴力について。困り果てて、池内先生に相談に行ったのです。

あっ、いかん。未来が見えてしまった。5年後。自分が池内先生に相談に行くんだ。これは事実だ。それが見えてしまった。それで池内先生とは知り

合いだ。

な、訳ないです。本当は、遠藤誠弁護士の出版記念パーティで会ったんです。お二人はテレビの法律相談のコーナーに出演して、それ以来の友人。

「遠藤先生はとても池内さんを可愛がっていましたよ」と出席者の一人に聞いた。どんなふうに可愛がってたんだろう。いやいや、変な意味じゃない。優秀なコンサルタントとして、信頼し、評価してたのだ。

池内さんのパーティに行ったら、「キャー！鈴木さん。久しぶり！」と池内さんが駆け寄ってきた。「今日はチレンちゃんも来ますよ」と言う。誰？チレンちゃんって。チキンちゃんじゃないの。ケンタッキーの。と思ったら、あの天才作家・見沢知廉のことだ。「いや、彼は来ません。体調が悪いですから」と僕は即座に断言した。

そんな話をしてる時に、出版記念会は始まった。そして、開会の挨拶は何と、元最高検検事の土本武司さんだった。だから、挨拶が終わって、すぐに土本さんに話に行きましたよ。「あっ、鈴木さん」と覚えていてくれた。一回しか会ってないのに。

去年の3月だったかな。「朝まで生テレビ」で、「連合赤軍とオウム」をやった。その時に一緒に出たのだ。植垣さん、宮崎学さん、宮崎哲哉さん、森達也さん…などが出てた。土本さんは唯一、「体制側」の人で、初出演だった。僕は隣りだった。資料をたくさん持ってきていた。そして、赤や青のサインペンで線を引いていた。重要度を分けていた。「まず、これから喋ろう」という意気込みがあった。でも、全然喋れない。他の人がベラベラ喋り、土本さんがちょっと喋ると皆、つぶしてしまうからだ。「土本さんにも喋らせろよ！」と怒鳴りつけてやろうと思った。でも、出来なかった。僕自身が、何とか喰い込んで喋ろうと必死だったからだ。

土本さんは今、白鷗大学大学院の教授だ。名刺をくれた。「おととい、植垣康博さんと会ったんですよ。高田馬場でトークしました」と僕が言ったら、「今、静岡でスナックをやってるんでしょう」と言う。情報が早い。それで、結婚、出産の最新情報を教えてあげた。

しかし、もったいなかったと思う。朝生の話だ。土本さんは、あんなに準備して、オウムと連赤について話そうと思ったのに、何も喋れなかった。何を言うつもりだったのか。一度、ゆっくりと聞いてみたい。ロフトかライブ塾に来てもらってもいいな。

今でも覚えているが、朝生の時、「なぜオウムはいけないんですか」と田原さんに聞かれ、土本さんが答えていた。「人を殺したからです」。その瞬

間、「何言ってんだ。キリスト教も仏教も皆、殺してるぞ！」「そうだそうだ！」と言う声。声。声。それで、バシャッとつぶされてしまった。まア、それはそうだけど。せっかく発言したのに、何もつぶすことはないじゃないか。「この犯罪者どもめ」と、きっと思ったんでしょうね。だって、植垣さんは獄中27年。その他、宮崎学、私、…と逮捕歴のある人間ばかりでしたよ。この機会だから「体制側」を糾弾してやろうと考えた人もいたのかもしれません。私はそんなことは考えませんでしたが…。

朝生のことを思い出して、ボーッとしてたら、「やあ、久しぶり」と肩をたたかれた。水口義朗さんだった。よくテレビに出てるし、本も書いている。「ダメじゃないか。今こそ君たち民族派が活躍すべき時なのに」と言われた。つい、「すみません」と謝ってしまった。「木村氏にも言ってるんだけど、もっともっと、発言すべきだよ。今の状況は決して民族派にいいわけじゃない。どこが違うのか、その点もふくめて発言しなくっちゃ」と。

(2)あの天才作家に会った！ビックリした

それから、いろんな人に会った。挨拶した。テレビによく出てる山田秀雄弁護士に会ったら、「僕も三島由紀夫が大好きなんですよ。本は全部読んでます」という。さらに、「自決の一週間前に会ったんです」。えっ、「楯の会」にいたのかよ。と思ったら、違う。池袋の東武デパートで三島由紀夫展が開かれた。そこに行って三島当人からサインをもらったのだという。凄い。これは貴重な話だ。又、ゆっくり聞いてみたい。

その時だった。「キャー、鈴木さん！」といって女が抱きついてきた。テ口かと思って、体をかわし、瞬間に払い腰で投げ飛ばした。いやいや、投げはしなかったが、戸惑った。「私よ。私！知ってる？」「知りません」。

「ウワー、冷たい」。名前を聞いて、やっと分かった。河合塾コスモに昔いたフェローだ。フェローというのは職員というか、生徒の面倒を見る人だ。私もお世話になった。それなのに全く忘れていた。「きれいになったんで全く分からなかったですよ。コスモの時はきたなかったから」と言ったら、喜んでいた。

彼女は今、フリーのライターだという。女性週刊誌に書いてることが多く、池内ひろ美さんともよく一緒に仕事をしているという。「あれからいろんなことがあったんです」と身の上話をする。結婚して子供が生まれた。

でも事情があって夫と別れた。じゃ、初めは池内さんの「患者」だったのかもしれない。「クライアント」というのかな。でも日本語訳して、患者

だ。コスモのフェロー出身では、もう一人、プロレスの記者がいる。彼も活躍している。たいしたものだ。

「あれっ？ あの人、見沢さんじゃない」と彼女。馬鹿な。彼は来るわけないですよ。ギャラをもらえる講演会や対談だって、ドタキャンする男ですよ。今回のように8千円を払う会へわざわざ来ますか。と、僕は自信をもって言った。ところが、見沢氏だった。驚きましたね。健康そうだ。来月には新しい本も出し、出版記念会もやるという。「じゃ、ライブ塾かロフトでやろうか。でも、又、ドタキャンするからな」と言ったら、「もう大丈夫ですよ。今日だって、雨の中、こうして来たんじゃないですか」。そうか。じゃ、こっちも真面目に考えてみよう。

見沢氏は、いろんな人から声をかけられ、人気者だ。「私、『天皇ごっこ』読みました！」とか、「『囚人狂時代』とっても面白かったです」と、若い女性たちに取り囲まれていた。ちくしょう。悔しい。

池内さんも喜んでいた。そして三人で写真を撮った。池内さんは、嬉しそうだけど不安そうだった。「この写真、変などこに使わないでよ」。何を恐れてるんだ。それに変などこってなんだ。じゃ、変などこに送ってやろうか。

7時から始まったパーティは、9時すぎまで続いて、終わり。「帰りにはぜひ、ホタルを見ていって下さい」と司会者。見沢氏は「疲れたから帰る」。だから元コスモのライター達と、私はホタルを見に庭園に下りた。いるいる。ホタルが光ってる。スッと光の尾をひいて飛ぶ。「しまった。願い事を言うんだった」と隣りの女の子。それは流れ星のことじゃないか。でも、何十年ぶりだろう。ホタルなんて。…と、子供時代を思い出しながら、ホタルに見入っていた私でした。

ホタルに見とれているうちに、10時。庭園は閉園になりました。「螢の光」が流れました。そして帰りました。

(3) 『不屈のために』を読んで、皆も、屈せずに雄々しく生きて下さい

では、話変わって、斎藤貴男さんの新著『不屈のために』（ちくま文庫）です。僕は「解説」を書いてます。斎藤さんの本はかなり読んでるつもりだった。でも、この本は知らなかった。元は『日本人を騙す39の言葉』（青春出版社）という題名だった。03年8月10日に出ている。2年前だ。タイトルは長いが、分かりやすいタイトルだ。文庫にするに当っては、かなり書き加えたり、とったりした。タイトルも変えた。短く、スッキリと『不屈のた

めに』となった。

僕は「解説」を書くために何度も読んだ。驚いた。斎藤さんのエッセンスが詰まっている。コンパクトにまとまっている。と思った。最近の、何気なく使われている「言葉」に徹底的にこだわって、書いている。それらの言葉が使われる裏に何があるのかと読み解く。たとえば、「ひとり勝ち」「住基カード」「グローバリゼーション」…などだ。本の帯には、こう書かれている。

〈心地よい言葉の裏に隠された危険な潮流（トレンド）とは何か。作られた“非常識”をいま、怒りで読み解く！〉

さらに、城山三郎、苅谷剛彦、森永卓郎三氏との対談もある。豪華な本だ。これらの人との対談だけでも一冊の本ができる。三人だから三冊出来る。それに、「39の言葉」を入れたら、「四冊分の本」になっている。そう考えただけでも、豊かな気分になれる。

この「解説」を書くために、斎藤さんの本を読み返してみた。内容も鋭く、問題提起になっているが、まず、タイトルが凄い。「うまいなー！」と思わず唸ってしまう。たとえば…。

『「非国民」のすすめ』（筑摩書房）。これなんて、「やられた！」と思った。悔しかったね。僕がやりたかった。この挑発的、戦闘的姿勢がいいやね。

それに、『国家に隸従せず』（ちくま文庫）。『安心のファシズム』（岩波新書）。『カルト資本主義』『機会不平等』（文春文庫）。『プライバシー・クライシス』（文春新書）。『絶望禁止！』（日本評論社）。そして、高橋哲哉との対談は『平和と平等をあきらめない』（晶文社）だ。そして今月末には、又もや凄い本を出すそうだ。これは期待していい。

出版社は変わっても、「一つの意志」を感じる。斎藤さんの不屈の闘志を感じる。これは斎藤さん自らが付けたタイトルだろう。でなかったら、これだけ一貫不惑の戦闘的タイトルは付けられない。たいしたものだ。まず、タイトルで勝っている。「おっ！何だこれは」と思って、手にとっちゃう。そして内容も凄い。だから、今や、最前線で最も華々しく闘っているライターだ。

斎藤さんはコピーライターの才能もあるね。これだけ、刺激的で、ハッとするタイトルを次々と付けるんだから、最近出た『噂の眞相イズム』（WAVE出版・1300円）の巻頭では、岡留安則さんと斎藤さんが対談している。岡留さんも僕と同じことを思ったようで、こう切り出している。

〈斎藤さんとお会いするのは2年ぶりですが、最近の過激なスタンスはすごいよね。出版する書籍のタイトルじたいが『「非国民」のすすめ』『国家に隸従せず』『安心のファシズム』…だもの。今の日本でこれだけ刺激的なタイトルをつけた本を次々出してることに感動しているんだけど〉

ところが、これに対する斎藤さんの発言にはビックリした。エッ？と思った。だって、こう言ってるんだ。

〈斎藤　どのタイトルも僕がつけたんじゃないですよ。編集者に任せっきりです〉

そんな馬鹿な、と思った。だって、出版社は変わっても、〈一貫性〉があるし、不屈の闘志がある。一人の人が信念をもって付けたとしか思えない。斎藤さんが自分で付けていたのだと思っていた。「きっとそうだ！」と僕は他の人にも説明し、「解説」していた。ところが違っていたんだ。

じゃ、各出版社の人々が、（勿論、連絡もなく）バラバラにタイトルを付けたのに、「一貫したもの」になったのか。どう理解していいか分からなかつた。「見えざる手」が働いたのか。いや、それだけ斎藤さんに対する〈期待〉が大きいのだろう。「斎藤さんならやってくれる」「ほら、この本を見なよ。それが分かるだろう」という「斎藤像」があるんだ。それで、競って、斎藤貴男らしい過激なタイトルを付け合うのだろう。じゃ、いい編集者に恵まれた、ということでもある。

あとは、斎藤さんの本を実際に読んでほしい。「解説」にも書いたが、全ては〈言葉〉なんだと思った。人間が生きる希望を持つのも、絶望し、死にたいと思うのも…。全ては〈言葉〉なんだ。聖書にも、「はじめに言葉あり。言葉は神なりき」とある。それなのに、（僕も含めて）、言葉をいい加減に使っている。「住基ネット」「構造改革」「適者生存」…と。今ならば、さしづめ「愛国心」であり、「改憲」だ。そして、「国益」だ。

そうした言葉へのこだわりを斎藤さんは書いている。又、今、何気ない風景のように思われている事にも鋭い目を向ける。たとえば、どんどん監視社会が進んでいる。これは僕だって感じる。だから、『公安警察の手口』（ちくま新書）を書いた。ところが、斎藤さんは、さらに、その奥を見る。こんなことを言う。

〈警察庁は、かねてコンビニを“第二の交番”として位置づけようとしてきた〉

〈効率化のための自動改札機は、そのデータを集め、人の居場所を知らせる『関所』に変わりつつある〉

えっ、まさか！と思った。それに「関所」だなんて、江戸時代に戻ったのかよ。ところが、読んでみると、なるほどと納得する。たとえば、コンビニでは、どこも監視カメラがある。いや、今は「防犯カメラ」というらしい。困ったことだ。それと「顔認識技術との連動も検討中」だという。つまり、カメラは店内で、防犯のために使われるだけでなく、直に、警察に通じる。そして、指名手配の左翼などがいたら、たちどころに分かるようになる。それを検討してるらしい。もしかしたら、もうやってるかもしれない。

この前、口フトに行ったら、外に出たところに監視カメラがある。いわゆる、カメラ型ではない。小さい球形のレンズだ。「これはドーム型防犯カメラというんですよ」と、隣りにいた人が教えてくれた。一方方向だけでなく、360度、どこからでも監視出来るのだ。「きっと警察にも直に通じてますよ」と言う。「だからもう、公安が張り込みなんてしなくてもいいんです。このカメラがやってくれますから」と言う。

別に、口フトの前だからという訳ではない。歌舞伎町全体がそうなんだ。あらゆる方向からカメラがとらえている。「だから安心だ」と思う人もいる。困ったことだ。

それから、我々が毎日使っている「SUICA」についても、実は、恐るべき裏があると斎藤さんは言う。あとは、本を買って読んで下さいませ。

【だいありー】

(1) 6月13日(月) 1:00p.m. ジャナ専。夜、柔道

(2) 6月14日(火) 5:00p.m. 出版社との打ち合わせ

(3) 6月15日(水) ジャン・ユンカーマン監督の「映画・日本国憲法」を見た。よく出来ている。これを基に、大いに論争したらしいだろう。

7:00p.m.一水会フォーラム。講師の堀幸雄さんが急病のため、急遽、塩見孝也さんが講師に。

(4) 6月16日(木) 河合塾コスモ

(5) 6月18日(土) 一水会の横山氏が釈放されて出てきたので、歓迎会。

(6) 6月19日(日) 午後4時、電撃ネットワークのギュウゾウさんの結婚式。

【お知らせ】

(1) 6月15日(水)の昼にテレビ朝日で放映予定でした塩見さんと私の「左右激突--靖国神社」は若貴兄弟の喧嘩報道のため、又、延びました。6月22日(水)になる予定です。又、延びるかも？

(2) 「月刊TIMES」(7月号)が発売中です。僕の連載「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」は11回目です。前田日明氏のこと。そして、ポール牧さんの自殺について書きました。

(3) 6月29日(水) 7:30p.m.からロフトプラスワン。マッド・アマノ、岡本聖司さん、そしてあの植草一秀さんも出ます。私も出ます。司会は「創」の篠田編集長です。

(4) 7月4日(月) 公開シンポ第2弾。「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」。6:30p.m.から文京シビックホールです。

(5) 7月12日(火) 7:00p.m.から、高田馬場のライブ塾。映画「日本鬼子(リーベン・クイズ)」の上映後、松井稔監督と私のトーク。

(6) 7月19日(火) 7:00p.m.から、一水会フォーラム。原嘉陽氏(文明史研究家)の「インド独立の志士と日本人」です。

(7) 7月24日(日) 7:30p.m.、新宿のネーキッド・ロフト。東条由布子さん(東条英機のお孫さん)と私のトーク。靖国神社について。

(8) 8月9日(火) 7:00p.m.、ライブ塾。浅野健一さんが出ます。「マスゴミの犯罪」。「マスコミ」ではなく、「マスゴミ」だそうです。

(9) 8月10日(水) 7:30p.m.、ロフトプラスワン。松尾貴史、齊藤貴男、そして私のトーク。

[**1999年**](#) [**2000年**](#) [**2001年**](#) [**2002年**](#) [**2003年**](#) [**2004年**](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張6月27日 驚きの連合赤軍。驚きの『comic 新現実』

(1)植垣さんが33才下の中国美女と結婚！

驚きましたね。もう週刊誌に出てましたよ。植垣康博さん（元連合赤軍兵士）の結婚です。6月16日(土)発売の「週刊新潮」（6月23日号）です。それも、何と、「結婚」というコーナーの中です。各界有名人の異色カップルを取り上げて、人気のあるページです。以前は一水会代表の木村三浩氏が取り上げられていました。「新婚旅行はイラクに行った」と書かれていた。左右の活動家としては、木村氏に続いて二人目だ。

さて、植垣さんだ。

〈33歳年下「留学生」と元連合赤軍・植垣康博氏の「総括」〉

しかし、結婚というお目出たい話なのに、なぜ「総括」なんて言葉が出てくるのだろう。これじゃ33歳下の奥さんが植垣さんに交際の「総括」を迫り、結婚したようじゃないか。でも、これは記者が軽い気持ちで使ったんでしょう。本当は熱烈な恋愛の末に結ばれたんですから。

植垣さんは56才。4年前から静岡市でスナック「バロン」を開いている。前は駅からちょっと離れた狭い店だったが、今年、駅のそばの中心地に移転した。店も、前より5倍ほど広い。何人の店員を使っている。

新妻の李紅梅さん（23）は、この店で働いていた。これも「職場結婚」なのか。紅梅さんは中国・黒竜江省の朝鮮族出身で、一昨年、日本語の勉強のために来日。1年前から、「バロン」でバイトしていた。日本語はペラペラ。「むしろ僕よりもうまい」と植垣さん。「口喧嘩したら負ける」という。冬山の連赤の「総括」を切り抜けてきた植垣さんだ。まさか、奥さんに言い負かされることはあるまい。それに、アツアツの新婚さんいらっしゃいだ。口喧嘩なんかするはずがない。

彼女とは今年の4月に入籍。7月30日に静岡市で盛大な結婚式をする。全

国から同志・友人が集まる。中国からは紅梅さんのご両親もくる。ご両親は植垣さんよりもずっと若い。「じゃ、お母さんと結婚すりやいいじゃないか」と言ってた人もいたが、そうもゆかない。

この話は、6月8日(水)に、植垣さん夫妻がライブ塾に来た時に出たのだ。

でも、入籍の時は、怪しまれた。この年の差だ。そして、スナックの店長と女の子。「偽装結婚」ではないかと怪しまれたんだ。僕も以前、話を持ちかけられたが、こういう例は多い。でも、植垣さんは本当の結婚だ。でも、担当者は、はじめから怪しんでた。それに植垣さんの履歴書を見て「何ですか。これ?」と言った。大学に入って、そのあと27年間が空白だ。そして、4年前のスナック開店だ。「この間、何をしてたんですか。怪しい」と言う。刑務所にいたことなんかは書いてないからだ。

仕方がないと植垣さんは腹をくくった。

「あなた、連合赤軍事件って知ってる?」と聞いた。「はい。知っていますよ」と、その公務員。

「それなんだよ。僕は」。

それで、担当者もやっと分かって、「ハハ一」と平伏し(はしないか)、「申しわけありません」と、すぐに婚姻届を受理してくれた。

まるで水戸黄門の印籠のようだね。連赤は。

連合赤軍事件は1972年だ。それから27年獄中にいて、1998年に出所。出所して7年目か。はじめは鳥取について、4年前に静岡でスナック「バロン」を開く。そして結婚。10月には子供も生まれる。

「週刊新潮」によると…。

〈33歳も年下の妻を迎えた植垣氏。23歳で逮捕され、27年の獄中生活を送ったことを考えれば、実社会年齢は“まだまだ若い”。それにしても、

「自己批判ものかな。犯罪行為だ。今度こそ死刑もんだ」と周りに言われます。同世代には元気を与えるのかもしれません、結婚して子供ができるけど、自分のスタンスが変わるわけではない。彼女にとっては、不満な面もあるかもしれないけど。まあ、ボケてはいられませんね〉

「子供が生まれるのは楽しみだ」と本人は言っていました。子供が成人になる時は76才。もう80だ。でも、元気でしょうな。しかし、小学校の授業参観や運動会に行ったりするんでしょうか。我が子が走る姿をビデオにとって、「見て、見て!」と周りの人達に言うのでしょうか。

「楯の会」一期生の伊藤好雄氏は植垣さんと同じ位の年です。やはり、遅

く結婚しました。子供は二人います。保育園に預けていました。夕方、迎えに行きます。保母さんが子供に言うんだそうです。「よかったわね。おじいちゃんが迎えに来たわよ」。ガーン、と本人はショックを受けたそうです。植垣さんはどうでしょうか。スキンヘッドだ、年齢は分からんかもしれません。「ほら、お兄ちゃんが迎えに来たわよ」と保母さんに言われるかもしれません。なんてことは、ほぼないでしょうが…。

野村秋介さんは千葉刑務所に12年。府中刑務所に6年。計18年、獄中にいました。東京拘置所では、植垣さんと一緒に、話もしたそうです。それが、民族派の人々と知り合う始まりでした。野村さんは、出所しても、すぐに、出来たそうです。「12年間、冷凍保存してたようなもんだ」と言ってました。だから新鮮だし、強度も失われていないと。植垣さんもそうなんでしょうね。「週刊新潮」の“まだまだ若い”という表現には、そのことを感じてしまいました。

(2)誰かが「連赤事件外伝」を書くかもしれませんね

「同世代に元気を与えるかもしれません」という植垣さんの言葉もいいですね。はいはい。私も「元気」を頂きましたわいのう。歌舞伎役者の中村富十郎は70才を過ぎて子供を産んでます。こっちも、同世代の鑑です。

「彼女にとっては不満な面もあるかもしれないけど」と言ってますが、愛妻家の植垣さんには何の不満もないでしょう。だって、「週刊新潮」では、こう言ってます。

〈紅梅さんは、「ダンナさんとしていいところは、ほかの夫婦と一緒に。優しい所じゃないんですか。でも、中国で暮らした方が楽かもしれない」〉

そう、優しいんですよね。6月8日にトークした時も、常に奥さんことを気づかっていました。7時から高田馬場のライブ塾で話したのですが、この前に、骨法道場の堀辺正史先生に紹介しました。「ライブ塾に聞きに行く」と先生は言ってたのですが、用事ができて、「じゃ、その前に紹介します」と、ご夫婦を連れていったのです。お寿司をごちそうになりました。妊婦だからでもあります。植垣さんは、常に心配し、気を使っておりました。本当に優しい旦那さんがありました。6時半になって、「では」と席を立ちました。車で行くよりも、JRの方が早いと思い、新宿で乗りかえて高田馬場に…。ところがラッシュの時間。しまった、と思いましたね。だって、妊婦だし。押しつぶされたら大変だ。二人に総括されちゃう。それで、必死に二人で奥さんを守りましたよ。イザとなったら、「妊婦です！連赤の

ご夫人です！席をかわって下さい！」と大声で叫ぼうと思いました。そしたら、黄門さまの印籠だ。いや、周りの人も気遣ってくれるわさ。でも、幸にも、そんなことをするまでもなく、無事に高田馬場についたとです。

「ほかの夫婦と一緒に、優しい」と新妻は言いますが、「ほかの夫婦」は優しくないですよ。こんな優しい夫は日本では例外的です。だから、しっかりと、つかまえておきましょう。「おとなしくて、かわいくて、いい奥さんですね」と僕が言ったら、「これで結構、気が強いんです」と言う。何をおっしゃる。そんなことはないでしょう。信じられません。でも、奥さんの「中国で暮らした方が」は意味深ですね。そのうち、「ねえ、中国に帰りましょうよ」と甘い声で言われそう。「うん、帰ろう、帰ろう」と言って、行っちゃうかもしれませんね。優しい人だから。それだけが不安ですね。植垣さんは、日本で、もっともっとやってほしい事があるのに…。

「週刊新潮」には、中村うさぎさん（作家）のコメントも出ています。

〈良くも悪くもシンプルで誠実な、愛すべき人物だと思います。様々な非難を浴びながらもマスコミに出て、あの事件の総括と贖罪に務めている姿勢には人並み以上の誠実さが窺え、いわゆる“世間並みの幸福”を享受する資格のない人間だとは、私には思えません〉

いいコメントです。「世間並みの幸福」を享受して当然です。27年も獄中にいたんです。何でもしていいんです。“連赤無罪”です。連赤の印籠を差し出せばいいんです。

「世間並みの幸福」っていったけど、こりや、「世間以上の幸福」ですよ。だって、33才下の、心優しい、美女と結婚できたんですもの。

でも、なぜ、中村うさぎさんのコメントが載ってるかですね。実は、6月8日に、会場で私が紹介したからです。「えっ？『週刊新潮』の記者が來たの？」と驚きましたか。そうです。來てたのです。でも、前日に、「行っていいですか」と電話があったので、「いいです」よ、と言いました。「実は、『結婚』のコーナーに書きたいので、植垣さんの了承をとりたい」と言う。そこで、植垣さんの携帯の番号を教えてあげた。植垣さんには僕からも、「ぜひ出た方がいいよ。これから、連赤について発表し、語り合うためにも、いいことだから」と説得しました。「うーん、こんなの嫌だけど、でも、鈴木さんがそこまで言うなら、じゃ、出てみようか」と言ってくれました。次はぜひ、「新婚さん、いらっしゃい」に出てもらおう。私が勝手に応募しちゃおうかな。あるいは、「キスいや」という手もあるな。「週刊新潮」の記者に、「次は鈴木さん、お願いします」といわれた。「いいよ。80

までは結婚して子供つくるから。その時には載せてよ」と言つときました。

「週刊新潮」の記者は、この日、取材しようとしたのかもしれません。でも、途中で奥さんが体調を崩し、新郎の植垣さんは、あたふたと後を追って帰ってしまいました。だから、第二部は中村うさぎさんが中心で進みました。「週刊新潮」の記者は、この二日後あたりに静岡に行って話を聞いてきましたといいます。植垣さんと奥さんのツーショットの写真も出ています。幸せ一杯の二人です。でも、気のせいか、お二人の顔がこわばっています。まさか、早々と夫婦喧嘩をして、その直後に写真をとった。というのではないでしょう。そんなことはありません。

「週刊新潮」に載るというので、お二人とも緊張しまくっていたんです。だから、表情もついつい、固くなっちゃったんですね。僕がいたら、「チーズ」とか言って、笑わせてあげたのに。

でも、この欄は、普通は「結婚式」の直後に出るんです。木村氏の場合もそうでした。右も左も、いろんな人がお祝いに駆けつけた。そして新婚旅行はイラクに行った。といったことも書けるし。

植垣さんに限っては、7月30日の結婚式まで待たないで、載せました。待ち切れなかったのか。他誌でスクープされる前に、書いとこうと思ったのか。それとも…。結婚前の今、載せた意味がちょっと分かりません。いやいや、お祝い事だから、早くした方がいいのでしょうか。

「週刊新潮」は、ラストでこう書いてます。

〈植垣氏の「総括」は、今後どんな展開を見せるのか〉

めでたし、めでたし、で完結じゃないの。童話だと、お姫様と王子様は結婚し、めでたし、めでたし、で終わりだ。後の物語はない。「お二人はずつとずっと幸せに暮らしましたとさ」で、ハッピー・エンドになる。でも、このお二人は、さらに「総括」が続くという。奇妙だ。何か、秘密があるのだろうか。「週刊新潮」の記者は何かをつかんでいるが、書けないので、曖昧にしたのだろうか。「火曜サスペンス劇場」の「6月の花嫁特集」のようではありませんか。

もしかしたら、「連合赤軍事件。語られない秘密」があるのかもしれません。そこで、誰かが、「連合赤軍外伝」を書くのかもしれません。

いやいや、これは考えすぎですね。幸せ一杯の二人にそんな秘密はありません。結婚後に「総括」すべきこともありません。

末永く幸せになって下さい。

(3)大塚英志さんとのセメント・マッチが活字になった

驚きましたね。もう出たんですね。宅急便が来たので、ビックリしました。5月11日(水)に本多劇場で大塚英志さん（評論家）とトークしましたよね。「これから憲法と天皇制」のテーマで…。こっちは力不足で大塚さんには太刀打ちできず、一方的にやられてしまいました。でも、あの時、角川書店の人が来ていて、『comic新現実』にぜひ今日の対談を収録させてほしい。と言うんですね。この雑誌のことは知らなかった。無知なもんで。それよりも、「えっ、こりや対談になってませんよ」と言った。大塚さんだけが一方的に喋っている。私は、ほとんど反論も出来ないし、喋ってもいない。インタビューのような形になった。だから、とても「対談」として雑誌には載せられませんよ、と言った。

「いや、お願ひします」と言うので、断わる理由はない。いいですよ、と言った。あの時の「惨敗の記録」が再び活字になるのか。悪夢だな。とも思ったが。それは私の勉強不足、実力不足ゆえだ。誰を恨むわけにもゆかんとです。

「もう一つ、ベアラさんの記事も転載させて下さい」という。これも、「いいですよ」と言った。ベアラさんは、日本国憲法の「女性の権利」を書いた人だ。この時、22才だ。今も日本に来て、よく講演をしている。岩波ホールでは「ベアラの贈りもの」という映画もやっている。10年ほど前、僕はベアラさんの講演を二回、聞いた。そして、今の憲法の中でも、いい点はあるんだ。と思った。そのことを一水会機関紙の「レコンキスタ」に書いた。大塚さんと対談する前は、憲法について書いた本、雑誌、新聞のコピーなどを参考のために送った。そしたら、ベアラさんの記事を、「これは面白い」と大塚さんは言ってくれたのだ。

それからしばらくして、多分、6月の上旬だと思う。ゲラが送られてきた。「対談」と「ベアラ論」だ。見るのがおっくうだった。やだなーと思った。惨敗の記録を読むのに耐えられんかった。でも〆切があるので、ギリギリになって、見た。

驚きましたね。ちゃんと「対談」になっている。「活字になると何とか見えるじゃないか」と思った。いや、編集者が優秀で、バランスをとって、まとめたのだろう。でも、向こうの発言を大幅に切ったように見えない。勿論、大塚さんの方が圧倒的に多く喋っていて、私の方は少ない。でも、本多劇場でやった時とは全然違うのだ。編集者の腕を感じましたね。

それから、2週間ほどたった。6月16日(金)、宅急便が届いた。角川書店

だ。早いな。もう出来たのか。と思った。親切に4、5冊送ってくれたようだ。だって、ふ厚い。厚さが5cm位ある。フーン。どんな本なんだろうな、『comic新現実』って。と思って封を切った。ビックラこきました。4、5冊だと思っていたのが、違うんです。一冊でした。一冊でこの厚さでした。530ページだし、紙が厚いから、まるで広辞苑のような厚さだ。

そこに出でましたよ。対談が。「新右翼と護憲を語る」として。対談とベアラ論が載っている。18ページも載っている。嬉しいですね。

まずは、「対談」のリードから紹介しよう。

〈思想的、政治的立場もまったく違えば、やってることだって接点がなさそうに見える鈴木邦男と大塚英志。

だが、下北沢の劇場に登場した二人は、ステージ上で激しく、憲法、天皇制、愛国心について語り合った。シナリオなし、まったくのセメント・マッチを繰り広げたトーク・バトルの行方は…?〉

うまいですね。この本は、こんなに厚くて、933円です。今月27日に発売ですので、ぜひ買ってみて下さい。ついでに、「対談」の見出しだけでも紹介しましょう。

- 1.アメリカの意向で9条を変えて日本の自主独立と言えるのか
- 2.憲法ぐらい自分で書けなくて改憲を主張できるのか
- 3.村上春樹が書いたら憲法は悪文ではなくなるのか
- 4.天皇制に寄りかかったままで有権者の役割を果たせるのか
- 5.「自分の言葉」を取り戻さなくてアメリカから自主独立できるのか
- 6.憲法に愛国心を、と言う連中は本当に天皇を尊敬しているのか
- 7.大塚英志の説得を受けて鈴木邦男は護憲運動を始めるのか

漫画雑誌で、よくこれだけのことをやれたもんだ。それに、ただの漫画雑誌ではない。勿論、漫画も多いし、吾妻ひでお、貞本義行などが載っている。又、樹村みのりの「冬の薔 ベアラ シロタと女性の権利」という社会派の漫画が67ページでも掲載されている。さらに、樹村さんに大塚さんがインタビューする。「少女まんがと日本国憲法」だ。

又、保坂正康さんの連載「まぼろしのアナキストたち」があるし、若松孝二（映画監督）もインタビューに応じている。ほんと、盛り沢山で、お得な933円だ。ぜひ買ってみて下さい。

【だいありー】

(1) 6月20日(月) 今日〆切の原稿が三本あったので、徹夜で、ヘロヘロに

なって、そのまま1時からジャナ専の授業に行く。

(2) 6月21日(火) 夜、志の輔さんの落語会。

(3) 6月22日(水) 昼、テレビ朝日のワイドスクランブルでやっと放映されました。塩見孝也さん（元赤軍派議長）と僕の討論です。靖国、改憲、反日…についての「左右激論」と銘打って、20分。よくまとまりましたね。

夜は、8時から六本木ヒルズの中にあるJ・エーブ（ラジオ局）へ。

「ジャム・ザ・ワールド」で遙洋子さんと。「日韓問題」について話す。

(4) 6月23日(木) 河合塾コスモ。

(5) 6月24日(金) 斎藤貴男さん、森達也さん、そして私の三人の鼎談本『言論統制列島・誰も書かなかった右翼と左翼』（講談社・1500円）が送られてきた。すばらしい出来だ。そして過激な本だ。27日(月)に一般書店に並ぶそうです。ぜひ、お手にとって見て下さい。

(6) 『GQ Japan』（8月号）に「20人の“日本人”が語った『私の愛国心』」が出ています。鈴木宗男、福島瑞穂、土井たか子さんらと共に私も出ています。

【お知らせ】

(1) 6月29日(水) 7:30p.m.からロフトプラスワン。マッド・アマノ、岡本聖司さん、そしてあの植草一秀さんも出ます。

(2) 7月4日(月) 「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」。6:30p.m.から文京シビックホールで。

(3) 7月12日(火) 7:00p.m.高田馬場のライブ塾（トリックスター社）。映画「日本鬼子（リーベンクイズ）」の上映後、松井稔監督と私のトーク。

(4) 7月19日(火) 7:00p.m.から一水会フォーラム。高田馬場のシチズンプラザ。原嘉陽氏（文明史研究家）の「インド独立の志士と日本人」。

(5) 7月24日(日) 7:30p.m. 新宿のネーキッド・ロフト。東条由布子さん（東条英機のお孫さん）と私のトーク。靖国問題について。

(6) 8月9日(火) 7:00p.m.ライブ塾。浅野健一さんと「マスゴミの犯罪」について。

(7) 8月10日(水) 7:30p.m.ロフトプラスワン。松尾貴史、齊藤貴男、そして私のトークです。

(8) 9月13日(火) 7:00p.m.ライブ塾。PANTAさん（ミュージシャン）とトーク。「頭脳警察の時代と革命」です。そして何と、あの天才作家、「日本のドストエフスキイ」見沢知廉氏も出席してくれることになりました。お楽しみに！

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張7月4日 「日本の呪縛」からの解放を試みたんやね…

(1)カラフルで、劇画チックで、セクシーな本だよ。『言論統制列島』は
今年度の決定版が出ました。だからこれで今年の仕事は打ち止めです。6
月27日(月)に全国書店に並びますので、もう見た人がいるかもしれません。
斎藤貴男・森達也・鈴木邦男の『言論統制列島』(講談社・1500円)で
す。



サブタイトルは、「誰も言わなかった右翼と左翼」です。えっ！と驚くと思
います。はっきり言って、カラフルです。そして過激です。
グラビア写真もたくさん入ってます。表紙は、不良中年3人組が、拳を突

き出して吠えてます。今までの3人のイメージと全く違います。スタジオでこの写真を撮る時は、他の2人は嫌がってました。「そこまでする必要があるの」「マンガになっちゃうよ」と。でも、1人だけ（私ですが）、「面白いじゃないの」「いいじゃん。やろうよ」と楽しんでました。まア、私は、いつもこうなんです。面白けりゃいいじゃないか主義者ですし、悪くいえば無責任なんですね。

ところで、この本、凄いのは表紙だけじゃないんです。表紙をめくると、やはり、写真。今度は3人が手を合わせている。タッチしている。「団結」の印なんでしょうか。ジャナ専の生徒に見せたら、「かわいい！」と言われました。女子生徒だ。さらに、ページをめくると、又もや3人が拳を突き出している。

そして、「レッテル貼りしてはいけません」と注意書き。さらに、3人の顔の横にコメントが載っている。

3人の一番言いたいことでしょうか。

鈴木邦男 「あんな右翼をなぜ呼ぶ。ばか野郎！」って、学生が教授に怒鳴られた。「右翼は人殺しをやっているんだぞ！」って。

（注：これはある大学で、僕を呼んだ学生が教授に言われたんです。ひどいですね。60年間、私はこうした不当な非難、差別を受けてきちょうどです。

「右翼の原罪」を背負って生きとるとです。）

斎藤貴男 僕の考えは昔と特に変わってない。変貌する世の中から取り残され、気がつけば“サヨク”なんだってよ。

森達也 今も僕のことを「オウムの幹部らしい」と言う人がいる。それもメディアで。別に何と呼ばれようといいけどさ。

そして次のページで、4枚目の写真だ。今度は3人が天に向かって拳を突き上げてます。エイ、エイ、オー！と叫んでいるようですね。「なんで国家が人の生き死にを決めるんだ」と。さらに3人のコメントが…。

森達也 縛られていることに、みんなが気づかないままに縛られている。だれに縛られているかといえば、自分たちです。北朝鮮みたいな独裁者国家のほうが、支配されているという自覚がある分、まだましたと思う。

鈴木邦男 やっぱり政治家になるっていうのは人の生き死にまで左右できると思ってて、快感なのかな。もう神になれると思うんじゃない。

斎藤貴男 親の七光りだけで生きてきたお坊ちゃまが、自分の力で必死に生きている人間に向かっておまえたちの生き方をおれが定めてやるとホザいてるわけです。

そして中味は更に過激です。「こんなこと言っていいの?」と私は聞いていて、不安になりましたよ。3人で話すのは鼎談というんですね。鼎談本は、もしかしたら、初めてかもしれません。楽しい本になりました。だから、今年はもうおしまい。あとは、遊ぶんですよ。だって、遊びたい盛りなのに、今年はずーっと、原稿ばかり書いていた。原稿、それに対談、鼎談…と。だから、おしまい。

と思ったんだけど、まだまだありますね。進行中のお仕事が。でも、僕なんかに書かせてやる、という出版社があるんですから、ありがとうございます。頑張ってやらなくっちゃ。とりあえず、今年の上半期のお仕事はこれでおしまい。ということですね。

だって、本当に半年がかりの仕事でしたよ。これは、お話をあったのは、去年の暮。そして、今年の1月から2月にかけて、4回。鼎談をしました。電子手帳を見ると、こういう日程になっていた。

第1回 1月14日(火) 6:30 新宿の居酒屋

第2回 1月31日(月) 3:00 講談社

第3回 2月9日(水) 1:00 講談社

第4回 2月16日(水) 2:00 講談社

2月16日は、終わって、写真の撮影がありました。もしかしたら、それが一番大変で、時間がかったのかもしれません。

驚きましたね。さすがは日本一の出版社ですよ、講談社は。会議室やインタビュールームは何十とあるんです。大きいビルです。一階には巨大な庭園もあるんです。むしろ、ジャングルといった感じです。「じゃ、、ここに絶滅寸前のサヨクを放し飼いにして、保護したらいいじゃないですか」と私はつい放言してしまいました。

1回目は居酒屋ですが、との3回は、広い、きれいな部屋で、話し合いました。それに、写真撮影ですが、「スタジオ館」といって、撮影だけの別館ビルがあるんです。一階も二階も、…ずーっと全て、撮影用の部屋があるんです。何十とあるんです。日本で出版社は多いですが、スタジオ・ビルを持っているのは講談社だけでしょう。出している単行本も多いし、月刊誌、週刊誌も多い。いちいち、外のスタジオを借りていては大変だからでしょう。スタジオは全て、フルに使ってました。調理の一切がそろって、料理の出切るスタジオもあります。料理の本もあるんでしょう。全く新しい〈体験〉でした。

(2) 考え、吠え、そして無頼する。不良中年3人組の暴走列島雪景色だよ

鼎談の最後は2月16日でしたが、この後の編集作業が大変でしたね。僕らが大変というより、テープをおこし、それをテーマごとに分けて、読みやすくするために、編集部では、大変なご苦労をされたようです。校正も、3度くらいやりました。話がポンポンと流れて、面白いなと思った。でも、校正の段階で、ガバっと書き足す人もいて、「あら、話がつながらないわ」と編集者も困ったりして、大変ですよね。

そんなこんなで、大変な編集・校正も終わり、「あとがき」を書きました。その〆切が5月9日(月)でした。でも、400字で7枚。さらに、「国家から離脱せよ！」という統一テーマを与えられる。こんな「あとがき」は初めてだ。普通、「あとがき」といたら、せいぜい2~3枚。「とても楽しい鼎談でした。いい本ができました。これも編集者のおかげです」…と、そんなことだけを書けばいい。しかし、「そうはさせるか」という感じで統一テーマがある。それに3人がラストに並ぶ。小論文の試験を出され、その答案が発表されたようで、嫌でしたね。必死になって考え、書きましたよ。こんなに苦労した「あとがき」は初めてです。鼎談よりも気を使い、頭をふりしぶったとです。

そんな苦労の甲斐もあってか、6月22日(火)に見本が送られてきた。イヤー、目立ちますね。本が一杯ある中でも、これは、すぐに分かります。「オッ！」と思って、皆、手にとってくれるでしょう。

そして、グラビア写真をみて、思わずニッコリ。あるいは爆笑。そして目次を見るんでしょうね。この目次がいい。うまい。勿論、編集者がつけたんですが。例えば。

もっと自由に言わせてくれ

森達也、斎藤貴男を左翼と呼んではいけません

絶滅左翼の組織論はどっこい生きていた

悪党は愛国心を語るなよ

あってもなくとも、日の丸・君が代

「徴兵しません」の落とし穴

カメラは見ている「密告の街」

「独身税」は笑い話じゃないらしい

ジェンダーフリーのホンネとタテマエ

自由に耐えられない日本人

「表現」は、偏向して当然
その教育改革、ちょっと待った

どうですか？見出しがうまいでしょう。ヒネリが効いてるでしょう。編集者が優秀なんです。ラストには「人名・事件・用語辞典」も付いております。とにかく、カラフルで、過激で、少々劇画チックで、そして、手の込んだ本なのです。贅沢な本です。本屋で手に取って下さいませ。ついでに、本の帯も、紹介しておこう。

新右翼の考えるひと 鈴木邦男
無頼派ジャーナリスト 斎藤貴男
吠える映像作家 森 達也

この鼎談はジャーナリスト・斎藤貴男がある評論家に「左翼のダッヂハズバンド」と名ざされたことから始まった。映像作家・森達也は「僕はオウム以降、〈社会の敵〉呼ばわり」と憤り、ガチガチの右翼だった鈴木邦男は、「僕は本来の左の人から追い越されてリベラルになってしまった」と笑う。異色の顔合わせで、天皇制・個人情報保護法・愛国主義・右翼と左翼の迷走など「日本の現実」を喝破する！

なんか、やたらと挑発的なコピーですね。中味を読んでみたら、もっと驚くでしょう。この2人に比べたら、僕なんて、おとなしいもんです。「えっ、ここまで言っていいの？」と何度も思いましたよ。それは、中味を読んで感じて下さい。驚愕して下さい。

(3) 「愛国心なんていらねーよ！」と社民党・共産党の前で言っちゃった

では次に、ビジネスマンのファッショントレンド誌『GQ JAPAN』（8月号）です。大判のカラフルなグラビア雑誌です。「ビジネスセレブが夢見る“リッチな休日”とか、「最高級の着心地が味わえるコストパフォーマンスのいいスーツ」「今、軽井沢に住むということ」…とかいった企画が並んでいる。その中に、何と、政治的な「解放区」がポツッと出現してるんです。

20人の“日本人”が語った
「私の愛国心」
という特集です。

この雑誌の中で、ここだけが完全に別個な空間です。ビジネスマンも、スーツや住宅や仕事のことだけでなく、ちゃんと〈国家〉に向かい、愛国

心についても考えてみるや！ということでしょう。なにやら、自己否定・自己解体的な〈大提言〉といった感じがします。

この特集のリードがよかったです。こう言っています。

〈4月、中国で巻き起こった反日デモ騒動。彼らが掲げていたのは「愛国無罪」という言葉だった。隣国の中にある愛国心を目の当たりにして、改めて自分たちの国を振り返ったとき、「私たちにとって愛国心っていったい何だろ？」という疑問にぶち当たった。少なくとも表面上は、60年余りを平和に過ごしてきたこの国で、私たちは「日本」について、ましてや「愛国心」について教育されたことが果たしてあっただろうか。そこで、さまざまな立場にある人々20人に、改めて問い合わせてみた。「あなたはこの国を愛してますか？」そして「愛国心って何ですか？」〉

このリードを読んで、突然、関係のないことを思い浮かべた。今回、講談社から出した『言論統制日本列島雪景色』のことです。あれっ？違ったかな。タイトルに石川さゆりが入っちゃった。えーと、『言論統制列島』でしたね。自分の本なんだから、ちゃんとおぼえなくっちゃ。後々、〈代表作〉として残るでしょうから。「あとがき」の中で僕は、今の日本はむしろ『言論封殺列島』じゃないか。と書きました。そんなこともあって、タイトルも、いろんな思い入れがあるんです。

えーと、そんな話じゃなかったかな。そうだ。この本のタイトルは初め、『日本の呪縛』だったんです。編集者が優秀な人で、それに遊び心もある人なんです。だから、表紙は日活ロマンポルノの白川和子の緊縛写真を入れて、それに、森、斎藤、私の3人の顔をからませる。日本が縛られているし、美女も縛られている。そして3人は…？ というショッキングな構図だったんです。初めの予定は。

我々3人は、ただただ、びっくりして、「ハ？」といつておりました。だから、そのまま企画が通ったかもしれません。でも編集者が、「うーん、これじゃマズイか」なんて、勝手に自問自答して、今のタイトルになったんです。じゃ、次は又、3人で鼎談して『日本の呪縛』にしてもいいですね。そんなことも思いました。オフリ。

あっ、オワッちゃいかんな。「愛国心」だ。この「愛国心の特集」を見て、又、そのリードを見て、これも『日本の呪縛』じゃないのか、と私は思ったんです。僕は80年間も愛国運動をしてきました。生まれる前からしてました。じゃないか。40年間、愛国運動をしてました。「君が代」は5千回歌いました。「日の丸」も5千回、掲揚しました。だから「愛国心の絶対

量」は軽く、クリアーしました。

そんな、超愛国者の私が言うのです。思うのです。愛国心は心の中に収めておけばいい、と。「俺は愛国者だ。文句あっか！」と言葉にしたら、嘘になる。偽者になる。だから私だって、偽者です。本当の愛国者ではありません。要はその人間が、何を叫んだかではありません。何をしたかです。

だから、その人の行動を見て、（うそさな。死んでからでもいいや）。この人の一生は「愛国的だったな」「いや、ちがったな」と後世の人が評価したらよいんです。「俺は愛国者だ！」と言ってるから、その人が愛国者なのではありません。「愛国者だ！」と公言する人に、本当の愛国者はいません。40年間の私の経験からこれは言えます。

そんなことを6月29日(水)の「朝日新聞」(夕刊)には書きました。「ふざけんな！」と思った人も多かったでしょう。でも、いいんです。バッシングにはなれちりますけん。どうせ自虐的な人間ですけん。

そこで、『GQ JAPAN』の「愛国心特集」でも私は言ってやりました。

〈愛国心なんて、いらねえよ！〉と。

取材にきた編集者はビックリしました。同じページでは、土井たか子、志位和夫、福島瑞穂…といった人々も出ています。でも皆、自分なりの〈愛国心〉を必死になって訴えています。「愛国心なんていらねーよ！」と叫んでいるのは、私だけです。今や、私は社民党、共産党も超えて、超左翼です。アナキストです。反日です。売国奴です。非国民です。

大体、「愛国心は必要だ」「私こそが本当は愛国者だ」なんて、言い合っているのは「呪縛」です。愛国心という言葉に呪縛されてます。これこそが「日本の呪縛」です。違いますか。

そうそう。この「愛国心」特集のトップは、鈴木宗男さんです。この人だけは2ページにわたって、デカデカと出ています。日本で一番の愛国者だと、と『GQ JAPAN』が認めたのでしょうか。

そして、この本が出た次の日、何と私はこの鈴木宗男さんに会ったんです。別にこの雑誌が仲を取り持ってくれたわけじゃありませんよ。ましてやNo.1の「愛国者」と、最低の「売国奴」の対談というわけじゃないんです。全く別の本の対談でした。そこで、6月28日(火)の午後に会ってきました。

同じ鈴木だから、「じゃ、宗男さんと呼んでいいですか」と私は勝手に、なれなれしく、「宗男さん」と呼んでました。向こうは、あくまで礼儀正しく、「鈴木さん」と呼ぶんですね。参りましたね。失礼なことをしちゃったと反省してます。でも、キチンと答えて下さり、話は実に論理的で納得しま

した。

それに、この2人はルーツは近いのです。元々は宮城県なんです。宗男さんは、お父さんの代に北海道に渡ったんです。代々、宮城県で、仙台のそばなんです。それで、「伊達政宗のようになれ！」と「宗男」という名前を付けたんです。だから生き方も、まさに風雲児・伊達政宗そっくりじゃありませんか。と、私は言いました。そこから、話はスタートしたのでありました。オワリ。

【だいありー】

(1) 6月25日(土) 神田の本屋に用事があったので、ついでに岩波ホールで映画「ベアテの贈り物」を見る。よかったです。ベアテさんは私も二度、講演会に行って聞いた。だから、憲法の話だけかと思ったら、違った。その「贈り物」を日本人はどう生かしているか、という社会的・政治的な映画だった。よかったです。次のHPにでももう少し、詳しく書いてみつか。

夜は柔道に行った。それから、深夜、「バットマン・ビギンズ」を見た。文化的な一日だった。

(2) 6月27日(月) 1時ジャナ専。夜、朝日新聞の校正。

(3) 6月28日(火) 1時、鈴木宗男氏と対談。夜、朝日新聞の再校。

(4) 6月29日(水) 朝日新聞(夕刊)の「女帝・議論のために」の欄に載る。

タイトルが…

「乱臣賊子」としての日本人。

限度越す皇室への期待」

ショッキングなタイトルだ。読んだ人もおるでしょう。これは不定期な連載コラムで、今まで、こんな人たちが書いてきた。

原武史、芦沢俊介、安丸良夫、橋爪大三郎。そして5人目が私だ。

この日は、7:30からロフト。マッド・アマノ、岡本聖司、植草一秀さんが来る。私も出演して植草さんと対談する予定だったが、降ろされた。何を聞かれるか不安だったんでしょう。信用してもらえんかったんです。すみません。私の不徳の致すところです。対談を楽しみに来られた人にはおわびいたします。でも、植草さんとは終わって話をしました。そして、第2部では、私も喋りました。

(5) 6月30日(木) 河合塾コスモ。その日の読売新聞の朝刊に『言論統制列島』の広告が大々的に出ていました。

(6) そうそう。書きわされた。6月27日(月)の朝刊を見て驚きました。「ゆき

ゆきて神軍」の奥崎謙三さんが亡くなつたんですね。

それも、「神戸市の病院で今月中旬死亡していたことが二十六日、関係者の話で分かった」とあります。淋しいですね。85才でした。

出所後、すぐにロフトで会ったことがあります。すごく、ハイになってました。奥崎さんには、会ってじっくりと話を聞きたいと思っていたのに、残念でした。

【お知らせ】

- (1) 7月4日(月) 6:30p.m.文京シビックホール「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」の第2弾。
- (2) 7月7日(木)「創」（8月号）発売。「あの事件」のあの真相について私が書いちります。
- (3) 7月12日(火) ライブ塾（トリックスター）の私のトークライブは今月から、「毎月第2火曜日」になりました。その第1段です。
- 日本軍人の証言映画「日本鬼子（リーベン・クイズ）」の上映後、松井稔監督と、私のトークです。
- (4) 7月19日(火) 7:00p.m.、一水会フォーラム。シチズンプラザ。原嘉陽氏の「インド独立の志士と日本人」
- (5) 7月24日(日) 7:30p.m.新宿のネーキッド・ロフト。東条由布子さん（東条英機のお孫さん）と私のトーク。靖国問題について。
- (6) 8月9日(火) 7:00p.m.ライブ塾。浅野健一さんと。「マスゴミの犯罪」。
- (7) 8月10日(水) 7:30p.m.ロフト・プラスワン。松尾貴史、斎藤貴男、そして私のトークです。
- (8) 9月13日(火) 7:00p.m.ライブ塾。PANTAさん（ミュージシャン）と見沢知廉氏（作家）。そして私のトーク。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張7月11日

「朝生」の「元帝国軍人が語るあの戦争」はよかったです

(1)僕らも30年後は、ああやって出るんでしょうか

7月1日(金)の「朝生」はよかったです。今までとは全く違った、異色の朝生だった。この日の朝刊のテレビ欄にこう出ていた。

「激論。敗戦60年・元帝国軍人があの戦争を語る」

「朝生」だからと思い、つい「激論」と付けちゃったんでしょう。でも、本当は激論していない。つとめて、淡々と、冷静に話し合っている。だって、皆、もう、ご老体ばかりだ。若い論客と一緒にになって、怒鳴り合ったりなんて出来んわさ。

だから、ハンディを付けたというか、かなり形態を変えてやった。そりや、そうだろう。60年前に敗戦になった。この時、25才の若者でも、今は85才だ。そんなに偉い人はいない。そうだよね。偉い人は年もくっている。敗戦の時に45才だったら、今は105才だ。ちょっと出れない。だから85才前後の人はばかりだ。13人かな、軍人は。あとは、遥洋子さんら3人の女人。ギャーギャー、責め立てるから男は呼ばない。この配慮は成功したと、私は思いましたね。それに、一人一人、順番に田原さんが話を聞いてゆく。これもよかったです。「さあ、喋りたい人は勝手に喋れ！」じゃ、又、戦争になっちゃうわさ。

実は、この企画は、10日ほど前に聞いていた。だから、いろんな人に教えてやった。特に、7月12日(火)には、ライブ塾(トリックスター)がある。そこでは、戦争体験をめぐる映画の上映とトークをやる。だから、その関係者に教えてやった。「12日の参考になるから…」と。でも、「ホントなの?」と皆、半信半疑だ。というより、全く信じない。「いつも嘘ばかり

りつくから」と言う。まいったなー。いつ私が嘘をつきましたか。言ってみんしゃい。

それに、朝生のテーマは、当日まで分からぬ。秘密だ。「テレビガイド」などにも一切出てない。テーマが洩れて、右翼や左翼が抗議に来るのを恐れているのか。いや、そんなことはない。変転極まりない世相、政局だからだ。今月は「少年犯罪のテーマでやる」と思い、企画を進めていても、同時多発テロのような事件があると、あわてて、それにテーマを変える。そんなことがよくある。それで、事前には発表しない。当日の朝刊で初めて人々は分かるわけだ。

少し前から分かる人もいるが、それはゲストとして声をかけられている人だ。「じゃ、10日前に、知ってたってことは、お前も声をかけられたってことか」とお思いの皆様。そうです。その通りです。私も元帝国軍人として出演の依頼を受けたんです。あの戦争はつらかったですね、と体験を語りましたよ。

…なんてことはありません。別な筋から聞いた。当然ですよね。当日の朝生には、85才位の人達が次々と出てくる。この年にしては元気だ。背筋がピンと伸びている。でも、中には、局の女の子にかかえられて歩いてくる人もいる。

ウッ、これは俺たちの30年後だな、と思った。いや、25年後かな。「昔々、学生運動というものがあって、全共闘がありました。赤軍派がいました。中核、革マルもいました。右翼学生もいました。楯の会もいました。火炎瓶を投げたり、ゲバ棒で殴り合ったり、機動隊と闘ってました。

そうした、旧帝国ゲバ学生たちの登場です。着席順にご紹介いたします」といって、出てくるんだろうな。杖をついたり、車椅子に乗ったり。中には、やはり局の若い女の子にかかえられて。でも、女の子の肩ごしに、しつかり乳をもんでたりして…。老いても盛んな塩ジイさんでした。さらには、宮崎学、荒岱介、見沢知廉、PANTA、大谷昭宏…と続々と、ヨロヨロと歩いて出てくんでしょうな。私も、是非出たいですね。

そうそう、7月4日(月)にテレ朝の人に会ったから、そう言ったんですよ。文京シビックホールで。反警察シンポジウムがあって、そこに各局が取材に来ました。そこで、「この前の朝生、よかったです」と言ったんです。「30年後は僕らですね」と。そしたら、「面白いですね。その時は、ぜひ鈴木さんも出て下さいよ」というので快諾した。30年後の7月1日(金)に出ることに決まった。だから皆も、手帳にメモして、見て下さい。

さて、なぜ10日前に朝生のタイトルが分かったか、です。ほら、6月22日(水)に、J-WAVEの「ジャム・ザ・ワールド」に出演した、っていったでしょうが。その時、遙洋子さんとお喋りをしたとです。そしたら、「7月1日の朝生に出るんよ」と言う。「旧帝国軍人ばっか13人だって」という。「軍人というから、偉い人ばっかりなの?」と私に聞く。別に偉い人に限らんとよ。偉い人も、偉くないひとも、戦争に行った人は皆、軍人ですよ、と教えてやった。それに、偉い人は年が上だったから、もう、ほとんど死んでんじゃないの。そうそう、フィリピンで見つかった日本兵が、当日、特別出演しますよ、と言ったら、「ホントですか?」と言う。ジョークですよ、ジョーク。それにねあの日本兵はどうしたんでしょう。いなかつたんですかね。ガセネタだったんでしょうか。

まあ、そういうことで、遙洋子さんから聞いた話だから、確実だったんです。だから皆に教えてやったのに、「ホントなの? 鈴木さんは嘘つきだからな」と言うんよ。ワシャ、悲しか。そうそう、30年後は、日本にいる、学生運動の「生き残り」だけでなく、中国からも植垣康博さんが来るよね。嫁さんが中国人で33才年下。溺愛している。「週刊新潮」の「結婚」欄にでてたが、嫁さんは、「日本は暮らしにくいから、中国に帰りたい」と言っていた。優しい植垣さんは、そう言われたら、「うん、帰ろう、帰ろう」と中国に行っちゃうよね。だから、30年後は、中国から帰国しての出演だ。「絶縁」されている私も、30年たって、やっと会えるのでしょうか。感動的な再会だ。

なぜ「絶縁」されたかって?月刊「創」(8月号)を見て下さいな。私の連載に書いている。「連赤事件・外伝」として。M作戦(資金獲得作戦)や、総括、リンチ、殺人。そして、捕まってからの知られてない事件。出てからの意外な事件…と。それらの「外伝」を書いている。50年後、連合赤軍が「新選組」になって、NHK大河ドラマになる時には、この「外伝」もどっかで放映されるだろう。テレビ東京のお正月10時間ドラマになるでしょう。私が植垣さんから絶縁された〈事件〉も。まア、人生はドラマチックです。読んでみて下しゃんせ。それに、「創」の今月号は警察・公安の告発記事やら、「和歌山カレー事件」の林真須美被告の獄中手記やら、盛り沢山だ。林被告の手記は、テレビのワイドショーでも紹介されとった。

(2)池部良(86才)も出てたのには驚きました

では、30年後じゃなくて、今の朝生だ。7月11日(金)の深夜だ。いや、本

当は深夜じゃない。夕方に収録して、深夜に流した。生放送じゃない。ご老体が危ないから、それも仕方ないやね。

それに、「激論」じゃなくて、「激白」になっていた。「激白！元帝国軍人があの戦争を語る」。この中に、加藤六月さんが出てたのには驚いた。それに名越二荒之助さんも出てた。この人は昔から知ってるし、一水会フォーラムにも何度か来てくれたことがある。夕力派だが、なかなか、ユーモアがある。

もっと驚いたのは俳優の池部良が出てたことだ。元軍人なんだね。元ヤクザかと思っていたら。あっ失礼、高倉健と一緒に、東映のヤクザ映画にいつも出ていた。その印象が強いんだ。年を聞いて驚き。86才だって。それにしても若い。髪は黒いし、しゃきっとしてるし、声もハリがある。とても86とは見えない。そうか。僕らが学生の時、映画を見ていた。すると、40年近く前か。その時、池部良は40代後半か。「日本侠客伝」「日本残侠伝」によく出ていた。高倉健が、単身殴り込みに行くと、その途中の路地から池部良がスーツと出て来て、二人で歩く。なぜか雪が降り、二人は相合い傘で行く。そして殴り込み、健さんは長ドスを振り回し、池部良はピストルと短刀だ。そして、いつも、死ぬ。健さんの胸の中で息絶える。

こうした映画の印象が強いから、元ヤクザかと思ってしまったんだ。そうそう。ヤクザ映画を見に行くと、右も左も暴力学生で一杯だった。ここだけは左右仲良く見ていた。健さんが殴り込むと、「イギなーし！」なんて掛け声が飛び。懐かしいですね。

ともかく、よかったです。ヤクザ映画が。いやいや、7月1日の「朝生」は。あっそうだ。奥崎謙三も出しゃよかったんじやないか。あの人大って、元軍人だ。それに85才だ。池部良より若い。でも、朝生の直前に死んじゃったか。声をかければ、「よし、やってやる！」と思い、朝生の日まで必死に生きてたかもしんないぞ。

さて、それを見て、「日本の戦争」を考えた人は、7月12日はぜひいらして下さい。ライブ塾です。朝生を見なかった人も来て下さい。

考えさせられる映画です。この「日本鬼子（リーベンクイズ）」は。なかなか見れない映画です。ビデオも出てませんし、貴重な戦争の証言です。そして、それを基にして、松井監督と私がトークです。

(3) 7月18日(月)に三省堂本店で出版記念トークをやります

【本のお知らせ】

(1)斎藤貴男、森達也、そして私の『言論統制列島』（講談社）は、売れてます。どこの書店でも平積みです。表紙に三人の写真が出てるし、ハッとなります。カラフルで過激です。「ここまで言っちゃっていいの？」と読んだ人は皆、言っちります。

三人が、拳を突き出したり、タッチしたり、「エイエイオー！」をやってたり。なにやら劇画っぽいですね。他の出版社の人が言ってました。「鈴木さんなら分かるけど、斎藤、森さんは、よくやりましたよね」。僕なら、なんでもやると思われとかね。

それで、この本の出版を記念して、7月18日（月・祭日）の午後3時から、三省堂本店で、トークイベントをやります。勿論、三人が出て喋ったり、サイン会をしたりするんでしょう。書店でトークなんて、実は、私は生まれて初めてです。今から、ドキドキして、アガってます。

(2)何と、月刊「ゴルフダイジェスト」（7月19日号）に私が出ています。「ゴルフなんか全く知らないくせに、ズーズーしい」とお思いのあなた。そりや、違います。隠れて、ゴルフ番組は見てるし、隠れて、ゴルフもしてるんです（してないか）。

全米女子オープンで、23才のバーディ・キムが世界を制した。それで、「なぜだ！強い韓国。弱い日本」の特集。そして、「各界30人に緊急アンケート」。で、私もその1人として答えちよるとです。

(3)格闘技雑誌「UPDER」（vol.2）は、「K-1 MAX」の特集。「魔裟斗と小比類巻」の比較評を私が書いちります。

(4)月刊「論座」（8月号・朝日新聞社）は、「特集・やっぱり本屋が好き」です。「115人に聞く“私がイチ押しのお店”」。そこに書いてます。400字一枚の短いアンケートなんですが、苦労しました。大変でした。

(5)「創」（8月号）は、「カレー事件・林真須美獄中日記」「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」「警察裏金疑惑とメディアの攻防」と、盛り沢山の内容です。私は「連赤事件・外伝」を書いてます。なお、連赤事件の加藤倫教さんと私の対談は、来月号になりました。

(6)「月刊TIMES」（8月号）は、三島由紀夫の「憲法改正草案」について書いてます。特に三島は36年前に、なぜ女帝を認めていたのか。当時は、誰

も女帝なんて考えてもいなかった。それなのに何故?と、三島「最大の謎」に迫ってます。

(7)あと、せかされてる原稿があって、焦ってやってます。頭が悪いし、筆は遅いし、苦行です。少し形になったら報告します。

【だいありー】

(1)7月4日(月) 1時、ジャナ専。6:30p.m.から文京シビックホール。「おかしいぞ!警察・検察・裁判所」の第2弾。又しても超満員。斎藤貴男さん、大谷昭宏さん、三浦和義さん、そして、私は、「会場からの発言」をしました。終わって、二次会で又もや盛り上がってました。元警察、そして新聞記者と、いろいろと話しました。

(2)7月5日(火)、次につくる本のために対談。楽しかった。アツという間に3時間が過ぎた。

(3)7月7日(木) 河合塾コスモ。前期は今日でおしまい。生徒は夏休み。私は、それから、仕事がたくさんある。

(4)7月10日(日) 1:00骨法道場・堀辺先生の「武士道セミナー」を聞く。

この日が〆切の原稿があって、今週は、フラフラになって書いた。10日で一冊分書いた。

夜中、ボーッとしてたので、テレビドラマ「冬の輪舞」(ダイジェスト版)を見た。昼メロをまとめたものだ。愛する二人が結婚し、赤ん坊が生まれたら、お母さんは死ぬ。知り合いにあづけたら、うっかり熱湯をかけちゃって、足に大怪我をさせる。申し訳ないからと、自分の子供と取り替えで、返す。そして15年。その秘密を知る父親が母をゆする。母は思い余って刺し殺す。子供は他の人にあづけて入獄。その子は幸せに育つ。しかし、ある日、子供は「自分は殺人犯の子供だ」と知ってしまう。これでもか、これでもか、と極限状況が襲いかかる。「殺人犯の子供じゃ、生きてても仕方ない!」と崖から身を投げる。死ぬ。いや、助かる。と、次から次と、降りかかる悲惨な運命。凄いですね。

でも、「私は殺人犯の娘だ!」と知って自殺をはかるって、他にもあったね。あ、そうだ。三浦綾子の「氷点」じゃないか。いやいや、他にもあるぞ。お父さんは立派な作家だと思ってたのに…。お父さんはスナックのマスターだと思ってたのに…。でもある日、父の秘密を知ってしまったのです。

娘は…。勿論、小説ですけど、現実にありそうな気もしますね。こんなことは。怖いですね。

【お知らせ】

- (1) 7月12日(火) 7:00から高田馬場のライブ塾（トリックスター）です。日本軍人の証言映画「日本鬼子（リーベンクイズ）」の上映後、松井稔監督と私のトークです。これは考えさせられる映画です。ぜひ見て下さい。そして聞いて下さい。
- (2) 7月18日(月) 3:00から三省堂本店で、『言論統制列島』（講談社）の出版記念トークです。斎藤貴男さん、森達也さん、私が出ます。
- (3) 7月19日(火) 7:00p.m.、一水会フォーラム。高田馬場のシチズンプラザです。原嘉陽氏の「インド独立の志士と日本人」です。
- (4) 7月24日(日) 7:30p.m.、新宿のネーキッド・ロフトです。東条由布子さん（東条英機のお孫さん）と私のトークです。靖国問題について。
- (5) 8月9日(火) 7:00p.m.、ライブ塾。浅野健一さん。「マスゴミの犯罪」。
- (6) 8月10日(水) 7:00p.m.、ロフト・プラスワン。松尾貴史、斎藤貴男、そして私のトークです。
- (7) 8月15日(月) 喜納昌吉さん（ミュージシャン・参院議員）が中心になって、戦争と平和を考える大シンポジウムを開きます。僕も出ます。
- (8) 9月13日(火) 7:00p.m.、ライブ塾。PANTAさん（ミュージシャン）と見沢知廉氏（作家）。そして私のトーク。

鈴木邦男・7月以降の予定

- (1) 7月18日（月・祝）『言論統制列島』（講談社）刊行記念トークイベント。斎藤貴男・森達也・鈴木邦男。3:00p.m.から三省堂・神田本店4階。問い合わせは（03-3233-3312）。
- (2) 7月24日(日)7:30p.m. 新宿のネーキッド・ロフトで、東条由布子さん（東条英機のお孫さん）とトーク。靖国問題について。
- (3) 8月9日(火) 高田馬場トリックスター社（ライブ塾）で浅野健一さんと

トーク。「マスゴミの犯罪」について。

(4) 8月10日(水)7:30p.m.ロフトプラスワン。松尾貴史、斎藤貴男、鈴木邦男のトーク。

(5) 8月15日(月) 喜納昌吉さん（ミュージシャン・参院議員）らと戦争と平和を考えるシンポジウムに参加（詳細は後で発表します）。

(6) 9月13日(火)7:00p.m.高田馬場トリックスターで。PANTAさん（ミュージシャン）、見沢知廉さん（作家）とトーク。



1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張 7月18日 やはり、言論統制列島になっちゃった！

(1)名譽棄損で逮捕なんて、あるかよ！

「宮崎学です」と電話。7月12日(火)の朝だった。「あっ、いつも本を送ってもらい、ありがとうございます」と礼を言った。そしたら、

「松岡氏が逮捕されたよ。今、ガサ入れ（家宅捜索）をやってますよ」と言う。ビックリした。「えっ、何の容疑ですか？」と聞いた。「暴露雑誌」を出して問題を起こしてることは知っている。しかし、それは「言論」だ。そんなことで捕まるはずはない。何か、もっと大きな〈事件〉に巻き込まれたのか、と思った。しかし、違う。

「名譽棄損だよ」と宮崎さん。またまたビックリした。「そんなことあるんですか」と絶句した。名譽棄損で逮捕なんて、普通はない。今まで一度もないだろう。『噂の真相』も何度か名譽棄損で訴えられたが、裁判で闘ってきた。名譽棄損の裁判全てに言えるが、訴える方だって、別に「逮捕してくれ」と言って訴えるわけではない。「謝罪し、間違いを訂正してくれ」といって訴えるわけだ。さらには、それによって精神的に打撃をこうむった。だから慰謝料を払え、といった要求だ。だから、それらの訴えを聞いて、警察が調べ、裁判になり、両者の言い分を聞いて、裁判所が決定する。そういうことだ。

それなのに松岡さんの場合は、いきなり逮捕だ。

「これは酷い話だ。言論に対する弾圧だ。何とか支援し、対抗策を考えなければ」と宮崎さんは言う。「分かりました。一緒にやりましょう」と言った。夕方、知り合いの出版社社長から、FAXが来た。松岡氏の逮捕について新聞やテレビに載った内容が書かれていた。彼も、「言論弾圧だ」と怒っていた。

このHPを読んでる人は、松岡氏といわれたら、「あっ、鹿砦社（ろくさいしゃ）の社長か」と分かるだろ・、知らない人のために説明する。松岡利康さんは53才で、鹿砦社、エスエル出版会の社長だ。昔は、新左翼の本を専門に出していた。大体、鹿砦社（ろくさい）という意味も、闘いの拠点・砦という意味だ。反権力、反体制の出版社としてスタートした。僕にとっては、「エスエル出版会」の方がなじみがある。ロシア革命の時にSR党（エスエル党）という革命党派があった。そこからとった名前だ。

実は、僕もこの出版社からは、随分と本を出している。一番多い。『がんばれ！新左翼』（全3巻）、『赤報隊の秘密』『闘う日本語』『宗教なんてこわくない』『右であれ左であれ（対談集）』…などだ。僕の名前を聞いて、「あっ、『がんばれ新左翼』の鈴木さん」と言う人が多い。それだけ、僕の代表作だ。そして、お世話になった出版社だ。

そうだ。『プロレス・ファン』という月刊誌も出していた。ここにも毎月のように書かせてもらった。いろんな人と対談もした。アニマル浜口、ナンシー関、大阪プロレスのスペル・デルフィン、松浪健四郎、景山民夫、と多くの人に会って話を聞いた。プロレスを通して話を聞くと、松浪さんも、景山さんも、又、違った話を聞けた。神取しのぶにも会ったな。

プロレスの雑誌を作ってる時からこの会社は、過激だった。UWFともめたこともある。元々、革命出版社なのだから、覚悟はあったし、闘いはお手のものだ。『噂の真相』なきあとは、『紙の爆弾』を創刊して、過激な言論活動を展開していた。

「紙の爆弾」という言葉にしても、元々は左翼用語だ。活動家がよく使った。僕ら右翼学生も真似て、よく使った。爆弾になりうる「言論」こそが理想だった。今、ものを書いてる人は、全て、それを望んでいることだろう。武器をもって闘うのではない。そんな時代は終わった。あくまでも言論だ。その言論が、体制にからめとられたり、腰のひけたものではなく、覚悟をもって、果敢に闘う。それが「紙の爆弾」だ。

松岡さんは政治的なことは勿論、芸能界、スポーツ界の「タブー」に挑戦し、書きまくり、闘った。人が、「暴露出版社」と呼びたければ呼べ。それでかまわない。と居直っていた。スキャンダル出版社なんて言われていた。SMAPの「追っかけ本」を出したり、宝塚のタブーに迫まる記事も次々と書いた。そして、大手パチスロメーカー「アルゼ」、阪神タイガースの元職員にかみついていた。彼らは名誉棄損で訴えた。

多分、アルゼだって阪神だって、松岡氏を「捕まえてくれ」と言ったわけ

じゃない。又、そんなことが出来るとも思ってない。なのに、訴える人の上をいって、「好都合だ。捕まえたる」と検察はやったわけだ。

事件について読売新聞はこう書いている。

〈阪神球団元職員らを中傷、名誉棄損で出版社社長逮捕。

阪神タイガースの元球団職員や大手パチスロ機メーカー役員らを雑誌や本で中傷したとして、神戸地検特別刑事部は12日、兵庫県西宮市内の出版社「鹿砦（ろくさい）社」社長・松岡利康容疑者（53）を名誉棄損容疑で逮捕した。同容疑で出版社社長が逮捕されるのは異例〉

保守的な読売でさえ、「異例」だと言ってる。検察の暴挙だ。弾圧だ。何度も言うように、名誉棄損で逮捕なんて、今まで一度もない。大体、雑誌や本に書いたことで問題になっている。内容が過激であり、中傷にあたるという人もいるだろう。でも、出す方は、店に出る本で「堂々と」闘っている。逃げ隠れしてるわけではない。それなのに、いきなり逮捕だ。

(2)異例だよ、と各新聞。球団の死亡事件と「アルゼ」

読売の記事を続ける。

〈調べでは、元阪神選手の球団スカウト（当時65才）が1998年5月、神戸市内のビルから転落したことを巡り、兵庫県警が自殺としたのに、松岡容疑者は2002年から03年に出版した季刊誌で当時の球団職員2人の実名を挙げて「殺害された可能性が高い」などと主張するスカウトの長女（47）の記事を掲載、元職員の名誉を傷つけた疑い。

地検は長女についても任意で事情を聞いており、同容疑で立件する方針〉

球団スカウトがビルから転落死した。不審死だ。その前に、いろいろ問題があった。肉親（長女）としては、自殺ではない。殺されたんだ、と思ったとしても不思議ではない。それで書いた。実名をあげたのはマズかったのかかもしれないが、そこまで思いつめる肉親の情も分かる。

長女は、お父さんを殺された被害者だ。いや、殺されたかどうかはっきりしない。ともかく父を失った。それで書いた。球団としては、「そう思いたい気持ちは分かるが、誤解だ」と、キチンと説明すればいい。あるいは抗議すればいい。反論文を載せてもらえばいい。それを受けつけてくれなかつたら、はじめて訴訟だ。ところが、いきなり訴えた！そして、待つましたとばかりに、検察は捕まえた。いや、何度も事情聴取に応じていたんだ。それなのに逮捕された。

そして、被害者のかわいそうな長女も取り調べを受けた。この阪神だけで

なく、もう一つ、アルゼの件も逮捕の理由になっている。さらに読売の記事だ。

〈また、松岡容疑者は03年4月と9月、大手パチスロメーカー「アルゼ」（本社・東京）の経営方針を批判する本を出版。自らのホームページでも役員の私生活に触れるなどして、名誉を傷つけた疑い。地検は「公益性がなく、著書の中には事実と認めるに足る証拠もない部分がある」と判断。証拠隠滅の恐れもあることから強制捜査に踏み切った〉

でも、全ては単行本や雑誌に書いたことだ。今さら証拠隠滅もない。出版社を構え、社員をかかえ、堂々と闘いを挑んでいる。勿論、逃亡の恐れもない。それなのに、いきなり逮捕だ。又、この本は「公益性がない」というが、それは読者が判断することだ。球団、アルゼの事件は社会的大問題であり、徹底的に追及しろ、と思う人もいるだろう。

それに、百歩譲って、「公益性がない」と判断されたとしよう。しかし、今、書店に出回っている本なんて、ほとんど全部、「公益性」がない。違いますかね。むしろ、女の裸を見て、ムラムラと変な気持ちにさせる本ばかりじゃないか。又、犯罪に関する本もやたらと多い。それを読んで、「これをやろう」又は、「これならダメだな。俺ならこうしてやる」と思い、犯罪に手を染める人もいる。

事実、麻薬の特集をやった雑誌の社員が、「これは儲かる」「俺でも出来る」と思い、出版社をやめて、麻薬の売買を始めて、捕まった。そんな例もある。この本だって「公益性」はない。そして、害毒を流している。しかし、この本が悪いわけじゃなく、それで、麻薬の売買を決意した人間が悪い。

つまり、世の出版物に「公益性」なんてないということだ。面白ければいい。気持ちよければいい。…そんな本ばかりじゃないか。

読売以外の新聞では、「神戸新聞」（7月11日）も、「出版社の代表を名譽棄損で逮捕するのは異例」と書いている。批判している。

もし同じ記事を「週刊文春」や「週刊新潮」が書いたらどうか。絶対に逮捕されないし、ガサ入れもない。あるいは、もっと、ひどい、えげつない記事も多い。名譽棄損の訴えもない。でも逮捕はされない。

それなのに、松岡氏だけが、逮捕された。神戸新聞によると、

〈神戸地検は「人権侵害が著しく重大で、現在も名譽棄損行為を継続させている悪質な事実」としている〉

でも、暴力行為をしてるとか、脅迫をしてるとか、身に迫る危険ではな

い。それなのに逮捕だ。ひどいやね。又、神戸新聞では…。

〈地検は共犯として、記事を執筆した遺族の女性（47）も任意で取り調べており、女性は容疑を認めているという〉

これもひどいね。お父さんが殺された被害者なのに、「共犯」と書かれている。たとえ、殺人ではないにしても不幸な死だ。「父は殺された」と喋ったとしても遺族の気持ちとしては分かる。たとえば過労死で死んだ父について、娘が、「会社に殺された、社長が殺した」と批判しても、逮捕なんてされない。記事では、娘を「同容疑で立件する方針」と書いている。

まるで「火曜サスペンス劇場」のようだね。こんな時、正義の女性弁護士が出てきて、被害者の女性を救ってやるんだよね。

この異例の逮捕について朝倉喬司さん（作家）は、こうコメントしている。

〈出版社の社長が名誉棄損で逮捕されるのは、非常に異例だ。これまでの出版物の傾向や社長自体の何かが問題にされた可能性もある。法律の厳密な適用より、主観的判断が入ったのではないか。当局の恣意（しい）的判断で逮捕するのは、いい傾向ではない。出版物などで批判するときは、私生活に触れたり踏み込んだりすることもある。批判と名誉棄損をどこで線を引くか。非常に難しい問題だ。今後、どんな影響があるか分からぬが、こういった取り締まりが強化する可能性はある〉

そうだよね。エスエルは、元左翼だ。体制批判をしている。それが気にくわないのだろう。赤報隊事件と関係があるので…と疑われたこともあった。その関係の本を出してるし、場所も朝日新聞阪神支局の近くだ。暴露雑誌は、たくさんあるが、ここまで徹底的にやるとこはない。それと、前身が新左翼だ。それで狙われたのだろう。

出てきたら、松岡さんはひるまず、さらに過激に闘うことだろう。この逮捕事件の裏事情もばらしてくれるだろう。

(3)映画「日本鬼子」を見た。橋本真也、玉川信明さんが死んだ

7月12日(火)は、松岡さん逮捕で、衝撃的な日だった。午後は、別な仕事だが二件取材があった。夜は高田馬場トリックスターで、「ライブ塾」。元日本兵の激白映画「日本鬼子（リーベンクイズ）」を上映し、その後、松井稔監督とトークした。

はっきり言って、暗い映画だ。面白く、楽しい映画ではない。それに長い。ただ、歴史的には貴重な映画だ。第一級の資料だ。映画は4年前に渋谷

のイメージフォーラムを皮切りに、全国で上映された。2時間40分の映画だ。

12日(火)は、それを1時間40分に短縮した特別版を上映した。それでも、見る人はキツイだろうなーと思った。映画館で見るので、長いのはキツイ。ライブ塾は、普通の長イスだ。ベンチだ。背もたれもない。これじゃ、短縮版とはいえ、1時間40分の映画を見るのは辛いだろう。とても耐えられないと思い、お客様も来ないだろうな、と思っていた。5、6人しか来なかつたらどうしよう、と不安であった。

ところが何と、超満員。60人も来てくれた。あわてて補助イスを出したほどだ。それに、過激なパフォーマンスで有名な「電撃ネットワーク」のギュウゾウさんも来てくれた。HPを見て来てくれたのだ。「こういう問題は関心がありましたので」と言う。「エッ？ ギュウゾウさんかよ」と皆、びっくりしていた。田所さんたちの「戦場体験放映保存の会」の人たちも多数来てくれた。

上映中も、帰る人もなく、皆、喰い入るように見ていた。ジャナ専の生徒も来歩いて一番前で真剣に見ていた。嬉しかった。皆感動していた。「凄い映画ですね」とびっくりしていた。質疑も活発に行なわれて、僕のイベントの中では一番人が集まつたし、一番活発に皆質問が出たと思う。

今年の8月に、渋谷のイメージフォーラムで再上映するという。ぜひ見てほしい。貴重な歴史の証言だ。あの戦争を肯定するにせよ、否定するにせよ、見ておくべき〈真実〉だ。

その他、いろいろ書きたいことがあったが、紙面がなくなった。

7月11日(月)には、プロレスラーの橋本真也が亡くなった。40才だ。これはショックだった。ジャンボ鶴田が死んだ時も驚いたし、ジャイアント馬場が死んだ時も驚いた。しかし、橋本は40才だ。まだまだこれからやれたのに…。

「脳内出血」だという。怖いね。しかし、あんなに頑丈だと思われたプロレスラーでも死ぬのか、とビックリした。12日(火)の「東スポ」は、一面で取り上げていた。

〈橋本のバカヤロー！

なぜ死んだ。残念。悲しいぜ〉

ファンの思いを代弁している。オラも悲しいぜ。

そして、その2日ほど前、玉川信明さんが亡くなかった。評論家で、左翼というよりアナキストに近かった。75才だった。ジャナ専の講師もしていた。

70才で定年になり、家で原稿を書いていた。新聞には、「老衰のため死亡」と書かれとった。そりゃないだろうと思った。

玉川さんのお通夜は7月9日(土)、7時から、神奈川県の藤沢で行われた。亡くなったのを聞いたのは8日(金)の夜だ。9日は他の仕事があったが、無理をいって変えてもらった。藤沢は遠かった。雨だったし、淋しかった。玉川さんには、いろいろとお世話になった。去年10月に出した『公安警察の手口』にも玉川さんのことが出ている。革マルについて、いろいろ話を聞き、取材した。

玉川さんは、『内ゲバにみる警備公安警察の犯罪』(あかね図書出版)という本の編著者になっている。別に本人は革マルではないし、シンパでもない。でも、元代表の黒田寛一氏とは若い時からの友人だ。学校が同じだったらしい。それで編著者を引き受けた。又、巻末には黒田氏との対談もやっている。1冊が5000円。それが上下巻だから1万円だ。

やたらと詳しい本だ。革マルと中核派の内ゲバでは何十人も殺されている。しかし、「中核派がやったといってるが、本当は、権力の謀略機関(公安)がやったのだ」という。中核はそれに基づいて、自分がやったと犯行声明を出しているだけだ。やってるのは公安だという。

ウーン、そんなに公安はやれるかな。と思った。詳しい本だし、厖大な資料もある。しかし、この本はどこからも無視だ。どこの書評欄も取り上げない。僕ぐらいだろう。自費で買って、「創」で取り上げた。さらに『公安警察の手口』で書いた。読んでみてほしい。玉川さんには又、じっくりこの話を聞いてみたいと思ってたのに残念だ。

【だいありー】

(1)7月11日(月) 1:00 ジャナ専。今日で前期の授業が終わり。後期が始まるのは9月26日(月)だ。2ヶ月以上も夏休みなんじゃ。「その間に私は二冊、本を作るんじゃ」と言ってやった。今、必死にやってるが多分、そういうじゃろう。「では、いいお年を」と言ってしまった。「年は越さないよ」と生徒に言われた。

夜10時、ジョナサンで原稿を出版社に渡す。一冊目の単行本の分だ。生涯で一番キツイ思いをして書いた。ヘロヘロだよ。

(2)7月12日(火) 昼、雑誌の取材が二つ。夜7時、ライブ塾。映画「リーベンクイズ」を見て、松井稔監督とトーク。人も随分と来てくれた。ありがた

いです。おかげで、いいトークになったと思います。何より、私自身が勉強になりました。

(3) 7月13日(水) 午前中、「レコン」の原稿を書く。7時から、神楽坂。

『言論統制列島』（講談社）の打ち上げ。斎藤貴男、私、そして編集者。（森さんは肋骨を折って欠席）、それと賞をとった江頭徹さん、姜尚中さんも参加。ただ酒を飲むだけじゃ、もったいないね。テープをとったら、一冊の本になるのに。贅沢な打ち上げ会がありました。

夜、昔、「SPA!」の担当者だった人から電話。昔、僕の連載が松岡さんに抗議され、謝罪したこともあった。「私も鈴木さんも批判されましたね」と。そう、僕なんて、「ボケ老人」と言われた。でも、名譽棄損なんて思わんし…。今回の検察のやり方はひどい、と憤慨してた。

(4) 7月14日(木) 夏に出すもう一冊の本のために3:30p.m.対談。7:30p.m. 全日空ホテル。田原総一朗さんの出版記念会。

(5) 7月15日(金) 2:30p.m.から対談。

(6) 7月16日(土)午前中、中野図書館。2:00p.m.「ペンの森」の10周年パーティ。

【お知らせ】

(1) 「月刊TIMES」（8月号）の連載「三島由紀夫と野村秋介」は、第12回目です。三島の「憲法改正草案」について書きました。36年前に三島が原案を示し、「楯の会」の「憲法改正研究会」で学生が討論しました。三島は「女帝」を認めてます。36年前に。よくそこまで書いたものだと思います。三島の予見性とその謎に迫りました。

(2) 7月18日(月) 3:00p.m.から神田の三省堂本店で、『言論統制列島』（講談社）の出版記念トークとサイン会です。斎藤貴男さん、森達也さん、私が出ます。そして、もう二人、超ビッグな飛び入りも…。

(3) 7月19日(火) 7:00p.m.一水会フォーラムです。高田馬場のシチズンプラザです。原嘉陽氏の「インド独立の志士と日本人」です。

(4) 7月24日(日) 7:30p.m.新宿のネーキッド・ロフトです。東条由布子さん（東条英機のお孫さん）と私のトークです。靖国問題についてです。

(5) 8月9日(火) 7:00p.m.トリックスター（ライブ塾）です。浅野健一さんとです。「マスゴミの犯罪」です。

(6) 8月10日(水) 7:30p.m.から、ロフトプラスワン。松尾貴史、斎藤貴男、そして私のトークです。

同じ日、7:00p.m.から、高田馬場のシチズン・プラザで、一水会フォーラムです。山浦嘉久氏（評論家）です。

(7) 8月15日(月) 喜納昌吉さんとシンポジウムをやります。

(8) 8月23日(火) 7:00p.m.から浅草の木馬亭で民族派の若手によるトークライブがあります。見沢知廉、針谷大輔、古澤俊一、横山孝平と、豪華メンバーです。

(9) 9月13日(火) 7:00p.m.ライブ塾。PANTAさん（ミュージシャン）と見沢知廉氏（作家）そして私のトークです。

(10) 『言論統制列島』、売れてます。発売2週間目で、重版になりました！嬉しいです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張7月25日

三省堂でサイン会をした。オーストラリアで骨折した森達也監督も出席しました

(1) 「レッテル貼りはいけません」と、トーク&サイン会

生まれて始めての体験でしたね。書店でのトークライブなんて。その後、サイン会までありました。7月18日（月・祝）ですよ。嬉しかったですね。「でも、鈴木さんは50冊も本、出してるんだから何回もあるでしょう」と森達也さんに言われた。でも、ないんです。「普通、出版社がやってくれるでしょう」と。それが、ないんです。

7月18日（月・祝）午後3時から、神田三省堂本店です。その8階でトークライブは行なわれました。1時間、トーク。それから質疑応答。そしてサイン会です。

午後3時から始まる。開場は2時半だ。三省堂のHPを見たら、4階で整理券をもらって並んで下さいと出ていた。僕も並ぶのかな、と思ってたら、「直接会場に来て下さい」と講談社の人々に言われた。それで、3時ちょっと前にトーク会場に行けばいいんだな、と思った。思い込みというのは恐ろしいやね。まア、こっちが、ちゃんと時間を確認しないのが悪かったんだ。3時からだから、2時に家を出るやいいな。悠々と3時に着くよ、と思って家を出た。

さて、九段下で降りて半蔵門線に乗って神保町で降りるんだな、と思った。前夜、送ってもらった地図を取り出した。そしたら地図の他に、あれ、もう一枚、紙がある。「何だこれは」と思ってみたら、「当日のスケジュール」と書かれていた。3時からトークで、質疑、サイン会だろう。知ってるよ、と思って、ポケットに入れようとしたら、あれ、前にもらったものとは違う。

何と、「14:20集合・打ち合わせ」と書かれている。ヒヤー！と叫んでし

まいましたね、私は。電車の中で。慌てて携帯でかけた。「すみません。そんな訳ですから、遅れます！」…と、普通の人ならそうするところじゃ。でも、おらには携帯がない。又、講談社の担当者も携帯を持ってない。（いかんな。編集者が携帯持てないなんて）。しようがない。地下鉄を途中で降りて、公衆電話をかけようか。でも、今は公衆電話なんてあまりないしな。それにどこに電話すりや、いいんじやい。三省堂本店の電話を調べて、そんで、「あのー、サイン会の係の人につないで下さい」と言うのかいな。

でも、そんなことしてたら、時間だけが経っちゃう。もうトークライブもサイン会も終わっちゃう。今、一番にすべき事は何か。ともかく、早く三省堂に着くことだ。そんで、電話はあきらめて、一路、三省堂に向かったのでありました。

そうそう。先月の22日(水) J-WAVEの「ジャム・ザ・ワールド」に出た。遥洋子んの番組だ。その2ヶ月ほど前にも出た。場所をたずねたら、「渋谷からタクシーに乗って、六本木ヒルズに来て下さい。2番入口です。車が着く直前に電話下さい。迎えに出ます」という。ハイハイ、と承知して、車に乗った。着く直前に電話しようとした。電話はない。タクシーにもない。アッと気がついた。〈皆、携帯持ってるもんだ〉という前提でプロデューサーは話していたんだ。貧乏で携帯も持てないオラは、人間じゃないんだ。

じゃ、着いてから電話すればいいじゃん。と思って、入口の警備の人に聞いたら電話はないという。「君の携帯貸してくれよ」と言っても、ダメですという。じゃ、公衆電話はどこあんの？と聞いたら、「今どき、そんなのあるかなー」という顔をしている。でも調べてくれた。このビルの向こうに行って、その2階のはじっこにあります。必死に走っていった。やっと見つけた。しかし、普通の電話じゃない。ICテレカ専用だ。ダメじゃんて思ったら、横にICテレカのカードを売る機械がある。チクショーと思いながら、たった一回電話するために千円のテレカを買った。

そして、カードを入れたら、かからん。何回やってもかからん。途方に暮れていた。そして、ハタと気がついた。もしかして、右下を切り取るのか？そんで、やったら、やっと通じた。バンザイ。現場に着くまでに大変な苦労だった。「ロード・オブ・ザ・リング」みたいだった。向こうは恐縮していた。でも、携帯持てない人のことなんて全く考えてないんだ。

このビルはガードが厳しくて（それはそれでいいのかもしれない）、他の階に行くことも出来ん。同じフロアでも、一旦部屋を出て、トイレに行ったら戻れない。社員はIDカード（というのかな。身分証だよ）を機械に差

し込んで通る。われわれのような外部から来た人間は、入れない。だから、トイレに行く時は、手をあげて（何も手をあげる必要はないが）、スタッフの人についてきてもらうしかない。自由にトイレにも行けないんじや、警察の留置場を思い出しましたね、あたしゃ。「担当さん。トイレお願いします」「担当さん。お水流して下さい」と大声でお願いしたっけ。

まア、最先端のビルだし、安全対策はバッチリだけど、おらみたいな古い人間には、めんどくさくて、いけないな。そんな、大変な思いをして、行ったんだけど、J-WAVEの放送は楽しかったですよ。

では、話を戻す。トークライブとサイン会のお話です。神田は余り来たことがないから、地図を片手に必死に探しましたよ。駿河台下にあるって書いてたから、あっこれかと思って信号を渡ろうとしたら、「あっ、鈴木さん」と、若者に呼び止められた。サイン会に行くらしい。「そこじゃなくて、こっちが本店らしいですよ」と教えてくれた。助かった。三省堂は二つも大きなビルがあるから、分からんす。

それで、エレベーターに乗ったら、斎藤貴男さんがいた。よかった。遅れたのは私だけじゃない。遅れたといっても、開会の3時には間がある。「打ち合わせが2:20p.m.だったんですね。今日、気付いて、あわてて走ってきたんですよ」と言ったら、「僕もですよ」と言う。綿密な取材で定評のある斎藤さんだって、気がつかなかったんだ。じゃ、私も仕方なかよと安心した。

三省堂本店7階の応接室に行き、打ち合わせをした。「おそいよ！」と講談社の岡部さん、森達也さんに言われた。「二人とも来なかったら、森さんと私だけでやろうと思ったんですよ」と言う。うん。それも面白いんじゃないのかな。

「今日は、こんなふうにトークしてもらいます」とレジメが渡された。えっ、テーマがあんのかよ。あの時の話は楽しかったね。撮影は恥ずかしかったね。…と、そんなことだけお喋りしてればいいと思ったのに。大変だ。喋るべきことは、こんなテーマだった。

「言論統制列島 レッテル貼りはいけません」

「言論統制列島」刊行記念トークライブ

15:00～16:00 トークライブ

16:00～16:20 質問

16:30～ サイン会

1.国民の自主規制の問題点は？

天皇制タブー

個人情報保護法・監視カメラ・迷惑防止のためのマナー条例

2.共謀罪をどう捉えるか？

最近話題になっている共謀罪の内容とは？

凶悪事件を計画しただけで逮捕される

3.二極化するメディアの言説をどう思うか？

右と左というレッテル貼り

危険な二分法にはまる日本

4.靖国に象徴される戦争責任をどう捉えるのか？

小泉首相の靖国参拝について

日本の戦後の戦争責任のありかたとA級戦犯合祀について

5.泥沼化するイラク戦争について

英テロも「アルカイダの仕業」でいいのか？

香田証生さん殺害事件について

(2)ロンドンは「14人に1人」の監視カメラ。でもテロは防げんかった

今、こうして書いていて気が付いたが、これだけの話をしたら、第2冊目の本が一冊出来るよ。でも、そこまで広範囲な話は出来んかった。1と2を、ちょっと話した位かな。5のイギリスのテロの話もしたか。あと、鹿砦社社長の逮捕の話だ。皆、怒ってましたね。

ロンドン自爆テロについてだ。新聞で見たら、ロンドン市内には監視カメラ（CCTV）が50万台設置されていて、市民14人当たり1台になる。凄いやね。「14人に1台」だって。嬉しかないね。だったら、一人一人持っていたらいいじゃないか。自分専用の監視カメラを。そういう問題じゃないか。いや、「それはいい。全員、頭の上に取り付けよう！」なんてことになるかもしれない。イヤだね。

でも、不思議だと思ったが、日本では新聞は監視カメラとは書かない。「防犯カメラ」と書いている。だけど、ロンドンのは皆、「監視カメラ」と書いている。これは何だろう。「外国のはそう書いていいんですよ」と斎藤さんが説明してくれる。日本だけは、〈自主規制〉なのか、お上のお達しなのか知らんが「防犯カメラ」と書くくせに…。

新聞を見ると、「14人に1人」の監視カメラがあったから「犯人4人」は分かった。イギリスは凄い。という記事が多くて。それも、犯人の4人の若者は監視カメラにバッカリ映っている。リュックサックを背にして、ハ

イギングにでも行くように。ごく普通に。楽しそうに地下鉄に乗る。その様子が映っている。

さすがはイギリスだ。さすがは50万台の監視カメラの威力だ。と言っている。しかしだ。「50万台。14人に1人」の監視カメラをもってしても犯行は防げなかった。多くの人が死亡し、犯人も死亡し、そのあとで、犯人が分かっても余り意味はないんじゃないかな。国家が「復讐」してくれるから、それで満足しろということか。それに、犯人の4人も自爆して死んじゃった。

いや、4人は使われただけで、指令した人物がいる。それを捕まえるのだ、という。最近の「週刊新潮」を読んだら、4人は、本当は生還するつもりだった。ところが、「司令官」が、爆発する時間をわざと教えないで、むりやり、「自爆」させたんだ。という。その証拠に、4人は、「帰りの切符」も買っていたし、友人や家族に、「帰ってくる」と言ってたという。しかし、時間を正確に教えないで、爆発に巻き込んで殺すなんて出来るんだろうか。「口封じ殺人」だ。だったら、その4人も被害者なのか。ちょっと難しいと僕は思うけど。あやしまれないために、「帰ってくる」とは言うし。又、帰りの切符もわざと買ったのかもしれない。覚悟の自爆テロのような気がするけどな。

次の話。「50万台。14人に1人の監視カメラ」でもテロを防げなかつた、という点だ。多分、日本でもこれは考えている。「ロンドン並みに防犯カメラを大量に設置しろ!」という声は出てる。でも、テロは防げなかつた。じゃ、飛行機のように一人一人、荷物検査をするか。そうしたら、大渋滞になる。だったらどうする。入口で、巨大な荷物検査機を置いて、武器や金属を持った人間だけを瞬時にピックアップして、つみとる機械が発明されるかもしれない。やっぱり、逆ユートピアの社会だね。近未来は。

ニューヨークでは、大きな荷物を持った人だけ検査されてる。日本もそうなるかな。すぐに真似するから。

鹿砦社の松岡社長逮捕の話も出たね。トークの時は。斎藤さんが事件のあらましを説明する。すると森さんが、「この中で、一番、鹿砦社と関係が深いのは鈴木さんだから…」と私にふられた。確かに、深い。もう20年近くの付き合いだ。「がんばれ!新左翼」「赤報隊の秘密」をはじめ、20冊位を鹿砦社から出している。プロレスの本も5冊出している。

ここで、好きに本を出すことが出来、訴える場がグンと拡がった。それまでは、「どうせ右翼には言論の場がない」と思って、諦めていた。「だから、テロや非合法をやって、問題提起をするしかない」と思った。たとえ、

〈犯罪〉として、新聞の社会面に載っても、それだけで意義がある。「あれっ、右翼は何でこんな事件を起こすのだ」と一般の人も考えてくれる。つまり、思想戦争の問題提起になると思ったのだ。

ところが、犠牲が大きい。どんどん捕まつたら、運動をやる人間はいなくなる。又、世間の人々も、必ずしも〈問題提起〉と受け取ってはくれない。

「何だ。暴力団か」「やっぱ過激派だダメだ」と批判される。運動は孤立する。孤立するから、ますます過激になる。「これでも世間の人々は分かってくれないのか!」と思う。悪循環だ。

そんな時に、鹿砦社に出会った。非合法やテロをやらなくても、直接人々に訴える手段があったのか、と思った。この〈発見〉は大きかった。それ以来ですね。

私たちも運動方針が変わったのは、まあ、「査問事件」などの苦い反省もありましたけど、鹿砦社との出会いも大きかったでしょうね。「テロはいけない。全ては言論でやろう」という路線になったのは。

その、鹿砦社の社長が逮捕された。本を出し、HPに書いたことが「名誉棄損」だといわれて。過激な文章かもしれないが、それも〈言論〉だ。言論で闘おうとしている僕らも、ショックだ。「何だ。言論でやっても捕まるのか。だったら…」なんて考える人が出たら恐い。

そういう意味でも今回の検察のやり方はまずいでしょうね。

トークライブでは、そんな話もしました。そして、質問。そうそう、超満員でした。僕のHPを見て来てくれた人もいました。でも大半は三省堂のHPを見て来たんでしょうね。ありがとうございました。

(3) サイン会。私の悲壮な「作戦」が成功しました

そしてサイン会です。どうやってサインするんだろう。実は、これが一番、心配してた事です。悩みの種でした。だって三人が座っている。「サインしてほしい人の前に並んで下さい!」といったら、斎藤さん、森さんの前にはズラーッと並ぶ。でも、僕のところは誰も並ばない。「ペッ、右翼のサインなんかいらねーよ」「けがらわしい」と思って。

だから、打ち合わせの時に必死に皆を説得しましたね。「来た人は三人全員のサインがほしいんでしょう。だから、一冊の本に、三人がサインしましょう。それが親切というもんです」。お二人とも賛成してくれた。一人だと、「誰々さんへ」とか、日付も書かなくちゃならん。スペースがあいちやうから、「何か一言書いてほしい」と言われるかもしれない。その点、流れ

作業で三人が書くと、名前だけですむ。省エネだ。クールビズだ。それに、お客様は「ひゃー、三人のサインをもらった！」と喜んでくれる。皆がハッピーになる。僕の自虐的なコンプレックスは見破られることはない。よかったです。ホッ。

実は、この日、香山リカさんも来る予定だった。それに、「打上げ会」で姜尚中さんが、「じゃ、時間があったら僕も行きます」といっていた。だから、このHPでも、「特別ゲストが来ます」と予告した。けど、来れんかった。場所が分かんなかったのかな。でも、この二人が来たら、「サインお願いします」と、その二人の方にドッと人が並んだりして。「そんなことになつたら悪いから」とお二人は遠慮したのかな。

「でも、香山さんが来たら、斎藤、森、鈴木と4人とも『創』の連載陣ですよ」と森さんが言う。そうか。じゃ、「創」主催でやってもよかったんだ。（それはないか）。

サインの時、見てたら、森さんのサインだけがやけに格好いい。よほど練習したんだろう。「サイン屋に頼んで、つくってもらったんじゃないの」と僕は聞いたが、「そんなことはない」と言う。芸能界には、サインをつくる人がいる。こういう風に書きなさいと、サンプルを作ってくれるんだ。何万円か、何十万円かとるんだろう。タレントはそれを見て、必死に練習し、自分のサインにするわけだ。

森さんも、それじゃないかと思ったが、「違います。自分で考えたんです」という。「それに、森達也の也はサインとして書きやすいし、カッコよく、まとまるんです」という。有利な名前だ。ズルイ。じゃ、我々も「也」をつけようかな。斎藤貴也、鈴木邦也だ。これだったら、サインの時、キチンとまとまりそうだ。

そうだ。アバラ骨を折ったといってたな、森さんは。大丈夫なんだろうか。それほど苦しそうじゃなかったが。

7月11日(月)に森さんはオーストラリアから帰ってきた。その日、携帯に電話したら、「今、成田です。着いたばかりです。ヘロヘロです」と言っていた。12日(火)にライブ塾で「日本鬼子」の松井稔監督とトークした。「もし時間あつたら来ませんか」と誘ったのだ。二人は香港の映画祭で一度、会ってるというし、きっと又、会いたいと（私は勝手に）思ったわけだ。でも、ヘロヘロで、「行けそうにありません」。まア、仕方ない。それに13日(水)はどうせ会えるんだと思ってた。それが、本の「打ち上げ」だ。

しかし、森さんは来なかった。講談社の担当者が言ってた。「今電話が来

て、肋骨を折ったので行けないと言ってました」

「でも、おとといは何も言ってませんでしたよ」と私。「きっと、今になつて発見したんじゃないの」と担当者。まあ、肋骨の骨折は、そんなこともある。

「原稿の〆切が迫つてて、その理由づけに言ったんじゃないですか」と言ってた人もいた。それだったら、もっとまともな理由を考えるだろう。じゃ、骨折が本当だとして、何で、折つたんだろう。

「私も聞いたんですけど、言わないんですよ。恥ずかしくて言えない理由だと言うんです」と担当者。

そうか、オーストラリアの金髪白人女と無理な体位で恥ずかしい事をして、肋骨を折つたのか。じゃ、言えないよな。とも思つたが、違うだろう。それだったら、「骨折」そのものを隠す。熱があるとか、何か別の病名を考える。

それで、皆で、「恥ずかしい理由」を考えた。一番多いのは、バンジージャンプに挑戦して、骨折したという説だ。今回は、何でも、オーストラリアにいる人と対談して本をつくるために行つた。表紙の写真のために、「今度はバンジージャンプをして下さいよ」と頼まれたのかもしれない。腕を突き出すだけじゃ芸がないからと。

第二の説。海で泳いでいて、岩かなんかに当つたんじゃないかな。

そして私の説。カンガルーとボクシングして、アバラを折られた。みんな爆笑してたね。私はありうると思った。カンガルーのパンチは強い。グローブをつけて、人間とやることもあるが、観光客はよく挑戦をしている。好奇心旺盛な森さんのことだ。きっとこれだろう…と。

さて、「解答編」だ。サイン会の時、皆に問いつめられて、森さんは、自供してました。「実は、珍しいトカゲがいて、触ろうとしてアバラを折りました」

うわー！鈴木さんが一番近いよ！と皆、驚いてましたね。「動物と闘つて骨折した」という点では同じだ。何か賞品をもらえないかな。

でも、よく聞いてみると、必ずしも僕が近いわけじゃない。大トカゲに触ろうとして、ピシャリと尾っぽで叩かれて、肋骨を折つた。まるで、異種格闘技戦じゃないか。凄いな。と思った。でも、でも。ちょっと違う。

オーストラリアの動物園に行った。そこに珍しい大トカゲがいた。柵越しに手を伸ばせば届く。これは触つてみなくっちゃと思った。そして手を出した。その瞬間、トカゲの尻尾でピシャリと回し蹴りをされた。ウッと、脇腹

をおさえて倒れる森監督。そのシーンを誰かが映画に撮っていたのだろう。
見てみたい。

あっ、話が先走った。巻き戻す。トカゲに触ろうと、手を伸ばした瞬間だ。何と、寄り掛かっていた柵が崩れて、バッタリと地面に倒れた。それで、肋骨を折ったのだ。情けない。全然ドラマチックじゃないよな。

大トカゲと闘い、回し蹴りをされたと思ったのに。さらに森監督はその尻尾に食らいついで、喰いちぎる。あわてた大トカゲは切られた尻尾をそのままに、逃げ出した。これが本当のトカゲの尻尾切りだ。という話だったら面白かったのに、ドキュメンタリー監督のくせに、全然、ドキュメントにならん。

というわけで、私の推理は近かったのやら、遠かったのやら。あとは皆が考えて下せえましナ。「そんで、トカゲは謝ったんですか。骨折させてごめんなさいよ」と。そう聞いたら、「トカゲは知らん顔してました」ふてえトカゲだ。

【だいありー】

(1) 7月18日(月) 今週書いたけど、3:00p.m.から三省堂本店で出版記念イベントとサイン会だ。

(2) 7月20日(水) 中野図書館。「創」〆切。

(3) 7月21日(木) 1:00p.m.ジャナ専生の取材にこたえる。4:30p.m.ジャナ専の会議。7:00p.m.放火された山岡俊介さん（ジャーナリスト）と、「放火対談」。僕も2年前に放火されたことがあるので、その「恐怖」を体験した者同士で語り合った。

(4) 7月22日(金) 徹夜して、原稿を渡す。これで8月10日には本が出る。7月はまさに地獄だったな。この本を書くために、口クに寝とらん。熱は出るし、目がチカチカするし。目の前でホタルが飛んだ。と思ったら、チカチカしてたんだ。こんなに集中的に仕事をしたのは初めてですよ。力不足だけど、でも、必死でやった。面白い本になると思う。乞御期待。

(5) 7月23日(土) 3:00p.m.対談。これで7月に4人と対談が終わった。これをまとめて、8月に本を出す。だから8月には本が2冊出るわけだ。暑さでただ、ボーッとしてただけではない。頑張って仕事してたんですよ。私だって。

(6) 7月24日(日) 7:30p.m.ネーキッド・ロフト。東条由布子さんとトーク。靖国問題について。貴重な話が聞けて、勉強になりました。又、詳しいことは次のHPでもお知らせします。

【お知らせ】

(1) 8月9日(火) 7:00p.m.高田馬場のトリックスター（ライブ塾）です。浅野健一さんと、「マスゴミの犯罪」について話します。

(2) 8月10日(水) 7:30p.m.からロフトプラスワン。松尾貴史、斎藤貴男、そして私のトークです。

(3) 8月15日(月) 4:00p.m.牛込簞笥（たんす）区民ホール。シンポジウム「終戦・被爆 60年のニッポンを評定する」。パネラーは喜納昌吉、高野孟、保坂展人、五十嵐敬喜、ほかです。私も出ます。

(4) 9月13日(火) 7:00p.m.トリックスターで、PANTAさん（ミュージシャン）、見沢知廉さん（作家）とトークです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張8月1日

現代「皇居」考

(1)江戸城、千代田城、東京城、皇城、宮城。そして皇居になった

学校で生徒に本を読ませていた。「親鸞」という字が出てきた。生徒は、何と、「おやわし」と読んだ。まあ、確かに信徒にとっては、「おやわし」とも「おやばと」とも仰ぐ偉い人だろうが…。

本当は、「親鸞（しんらん）」と読むんだぞいな。鸞（らん）は、やはり鳥だ。想像上の大きな鳥なんだ。だから、「おやわし」でも「おやばと」でも、よいのかもしれないが。ついでに、日本史のおさらいだ。『辞林21』（三省堂で）で、親鸞を引いてみた。

親鸞（しんらん）1193～1262。鎌倉初期の僧。浄土真宗の開祖。初め比叡山で天台宗を学び、のち法然の専修念佛の門に入る。1207年念佛停止の法難に遭い、越後に流罪。赦免ののち関東で布教と著述を行う。絶対他力による極楽往生を説き、悪人正機を唱えた。主著「教行信証」。唯円編の法語集「歎異抄」は有名。妻は恵信尼。

法然は浄土宗、親鸞は浄土真宗なんですね。師の法然を信じ切り、たとえ念佛をして地獄におちても構わぬと言い切っています。又、「悪人正機説」は有名で、終戦直後はGHQが「危険思想」だと取り締まろうとしたようです。東京裁判で「悪人」として処刑された人々が大往生をとげ、後に日本の英雄として甦ることを心配したのでしょうか。だったら、いま、その傾向はありますね。

さて、別の日。「戦後史」の授業をしちりました。敗戦前後、人々が宮城前に集まり、土下座し、慟哭し…という記述がありました。そこを読ませてやりました。「宮城前」というところを、「みやぎ」と読んでましたね。ウーン、確かに「みやぎ」とも読める。実際、そんな県がある。私の故郷だ。まぎらわしいよね。統一したらよかったのにね。統一は無理か。じゃ、

おそれおおいから、「宮城」は、「きゅうじょう」だけにして、「宮城（みやぎ）」は、やめにする。「私は仙台県で結構ですけん」と自虐的に申し出るやよかったです。ところが、後で触れるけど、あったんですね。そんな申し出が。宮城県の人はやっぱ皆、謙虚なんじやい。ところが、「そんなに気を使わんでもよいのじゃ」と、宮城（きゅうじょう）側はおっしゃった。そして何と、あろうことか、「宮城（きゅうじょう）」の方を変えて「皇居」にしてしまった。話が先走った。今回は、この「江戸城」から「宮城」そして「皇居」への変遷について書いてみよう。

天皇陛下の住んでおられる所は「皇居（こうきょ）」という。皆さん、知っていますよね。ところが、昔は、「宮城（きゅうじょう）」と呼んでいた。「宮様の住むお城」だったんだ。今でも、年配の人では「宮城」と言う人もいる。宮様が入る前は、徳川様のお城だった。江戸城だった。千代田城とも言う。

つまり、同じ場所が、江戸城→宮城→皇居と呼び変えられてきた。出世魚のようだ（違うか）。江戸城は「闘いの象徴」だ。武力で全国を統治した徳川幕府の居城だ。城だから、お濠がある。簡単には攻め込ませないぞ、という決意だ。

天皇さんは前は京都におられた。御所にはお濠もない。堀だって、すぐに乗り越えられるような低い堀だ。その昔は、貧乏で、堀も朽ち果て、夜盗がちょくちょく忍び込んだという。その天皇さまが、明治維新のあとに、江戸に行かれた。「遷都」ではない。ちょっと江戸へ巡幸に行かれた。すぐに京に帰ってきますよ、ということだった。だけど、そのまま居着いてしまわれた。だから京の人は、「天皇さん、まだ京都にお帰りにならへんな」と言って、今も、お帰りを待っている。

一方、江戸だ。天皇さんに居てもらうのに、「江戸城」ではマズイ。名前がマズイ。大体、徳川江戸幕府は潰れたんやし。旧敵の本拠なんだから。いっそ、潰そうか。と思った人もいたんだろう。でも、そのまま使った。名前は「宮城（きゅうじょう）」にした。宮様が住む所だ。新・御所と呼べばいいのに、京都への遠慮があった。それに、誰が見ても〈城〉だ。それで「宮城」と呼ばれるようになった。

しかし、1945年、日本が戦争に敗けて、武装解除された。天皇も象徴になった。じゃ、〈城〉という表現も変だ。軍隊はいないんだし。というわけで、「皇居」になった。

つまり、同じ所が、

江戸時代には江戸城と呼ばれ

明治、大正、昭和（戦前・戦中）は宮城と呼ばれ、戦後は皇居と呼ばれる
ことになった。

こういうことだろう。戦後でも、まだ「宮城」という人はいた。島倉千代子の「東京だよお母さん」だったか、「九段の母」だったか、「ほら、あれが宮城（きゅうじょう）よ」というセリフが入っている。

不思議だな、と思う。「宮城」という言葉だ。宮様が住む〈御所〉の〈平和〉の意味と、幕府の武力の城。つまり〈戦争〉の意味の両方を兼ね備えている。〈宮城〉は、そのまま「戦争と平和」だ。

それに、奇妙なことに、宮城（みやぎ）という県もある。じゃ、宮城（きゅうじょう）が先で、それにあやかって、宮城（みやぎ）県が生まれたのか。と思うかもしれないが、違う。明治の廃藩置県で、宮城県が出来た。その後に、江戸城を「宮城」と呼ぶことになった。困ったのは、宮城県民だわさ。そう、私たちだわさ。あの時は困ったね、僕らも（まだ生きてないか）。

「これは畏れ多い。宮城県人は皆、天皇様と同じ宮城（きゅうじょう）に住んでるみたいだ。わしらは皇族みたいじゃ。申し訳ない」と思ったに違いない。「じゃ、いっそ、宮城県という名を返すべーか」という話もされた。つまり、第二の大政奉還だ。うん。きっと、こんなことがあったんだろう。

…と思っていた。そんなバカなと思うかもしれないが、これは「宮城県人の勘」だ。宮城県人の「うしろめたさ」だ。

(2) 「宮城」は天子様にお返ししよう、と、宮城県民は思った

ある日のこと。「ルノアール」で講談社の『日本の歴史』を読んでいた。全25巻で、読みやすい。写真やイラストも多くて、楽しい。第20巻の「維新の構想と展開」を読んでいた。東大助教授の鈴木淳が書いている。290頁は「憲法発布式」の項だ。明治22年2月11日、明治憲法（大日本帝国憲法）が発布される。ところが、その前年、21年に、天皇さまの住まわれる所を「宮城（きゅうじょう）」と定めた。日本政府として、キチンとそう定めたのだ。

徳川家から引き継がれた江戸城西の丸の宮殿は、明治6年（1873）5月に火災で焼失し、その後天皇は赤坂の現在の迎賓館、東宮御所あたりの仮皇居を用いていた。江戸城の中を改裝、整備し、そこに天皇様は入られた。

〈新たな宮殿は、21年の10月に落成し、その名称は宮城と定められた〉

現在の感覚だと「みやぎ」と読んでしまうが、「きゅうじょう」であり、これがこの憲法の下での名前であった。

もっとも、宮城県知事はさっそく、さしさわりがあるので県名を改めるべきではないかとうかがいを立てて、その必要はないと指令を受けたという。

「朝野新聞」（21年12月28日）に出ていた。当時も、紛らわしいと思われていたのである。

驚きやした。やっぱ、私の思った通りでしたね。宮城県の人は謙虚だから、「おそれ多い」と「県名変更願い」を出したんだよね。そしたら「構わん」といわれた。そこで、二つの宮城がずっと、並存した。ところが、戦後は、宮城（きゅうじょう）の方が勝手に皇居と名前を変えてしまった。まさかGHQの圧力があったわけじゃないだろう。宮城の城が軍国主義を象徴するとかいって…。でも、そんなら、宮城（みやぎ）も変えさせられるわけだ。「仙台県」とか「伊達県」とか、「すんだ県」とか。でも、それにはお構いなしだった。宮城（きゅうじょう）は、名前だけ仙台に移転したともいえる。

「宮城」から「皇居」への変遷について、もう少し詳しく書かれた本があった。原武史・吉田裕編著の『天皇・皇室辞典』（岩波書店）だ。とてもいい辞典だ。辞典といつても、一冊の本だ。「初めての〈読む〉辞典。歴史がわかる。今を知る」と本の帯に書かれている。定価は3000円が高い。しかし、それだけの価値はある。「皇居（宮城）」の項を引いてみると…。いろいろと歴史的なことが書かれ、次にこう書かれている。

「明治天皇が江戸城に入るや、江戸城が東京城となった。東京城は、皇城、次いで宮城に改称され、1948年以降は皇居と呼ばれている」

随分と名前は変わっている。江戸城（千代田城）から、「東京城」「皇城」「宮城」「皇居」だ。皇城なんて、重々しくていいね。でも戦後は〈城〉をとったんだ。石垣を崩すわけじゃなく、名前から〈城〉をとった。1945年（昭和20年）から48年（昭和23年）までは、まだ「宮城」と呼ばれてたんだ。でも48年に、「これからは皇居と呼ぶように」と言っても、つい昔からの習慣で、「あれが宮城（きゅうじょう）よ」と言う人が多勢いたのだ。

いや、実は、名前だけじゃなくて、場所も変えようという計画があったという。戦争に敗れ、戦争放棄して平和国家になったのに、「象徴」が「城」に住んでいる。おかしいだろう…と思ったのだ。

やはり『天皇・皇室辞典』からだが、

〈敗戦後、GHQは宮城内の施設に全く手をつけなかった。宮中三殿も温存され、1947年に皇室祭祀令が廃止されてからも、宮中祭祀の根本は変わらなかった。

当時、天皇は皇居の移転を考えたことがあった。木下道雄の『側近日誌』によれば、天皇は46年1月28日、「宮城を放棄せられ、砧又は白金の御料地に御移転の御考えを洩さる」が、その2日後に、木下が天皇と相談して作った「皇居の位置」と題する文章では、皇居の候補地を宮城、赤坂離宮、京都大宮御所の3ヶ所に絞った上、「結局宮城を皇居と定めざるを得ず」となっている。48年7月に宮城の名称は廃止され、ここを皇居と呼ぶことで、移転論は消え去った〉

(3)皇居は、実は砧か白金に移転する予定だったんですって

驚きましたね。こんなことがあったなんて。京都にお帰りになる、という選択肢は分かりますが、砧（きぬた）とか白金に移転する計画もあったなんて…。「宮城」の名称は廃止され、「皇居」と呼ぶようになったという。何となく、そう呼び変えられたのではない。キチンと決まったのだ。48年7月に。しかし、「皇室典範」には書いてない。法律でもない。内閣で決めたのだろうか。それに、一体誰が初めに「皇居」という名を考えたのだろうか。

確かに、「象徴天皇」には、「東京城」や、「宮城」や「皇城」はふさわしくない。「城」は敵を前提にしている。敵と闘い、敵から守るためのものだ。又、出撃するためのものだ。明治、大正、昭和（戦前）の天皇ならば、戦争の先頭に立つ闘う天皇だ。だから「宮城」でよかった。しかし、戦後の象徴天皇は、もう戦争をしない。じゃ天皇が居る所という意味で「皇居」と名付けたのだろう。初めは呼びづらくて、何となく、そぐわない感じがしたはずだ。しかし、60年も経つと、「皇居」しかないと思う。他の名前ではダメだと思ってしまう。

ともかく、『天皇・皇室辞典』は、いい本です。とても教えられるし、勉強になります。編者の原武史さんには『大正天皇』（朝日新聞社）という名著もある。読んでみて下さい。それと、島田雅彦さんの『おことば』（新潮社）もよかったです。戦後の、「おことば」を紹介しながら、島田さんが、解説し、自らの天皇論を語ります。これも凄い本でした。

実は、女帝論議を含め、この夏は、必死で天皇問題を勉強しました。一冊の本を書くためです。天皇の歴史や女帝問題について、ほとんど何も知らない私でしたが、何ヶ月も本を読み、ネットで資料を探し、人に聞き、勉強したのです。そして考えたのです。熱が出るまで考え、そして書きました。詳

しくは又、来週でもお知らせしませう。

【だいありー】

(1) 7月24日(日) 7:00p.m.からネーキッド・ロフトで「靖国問題」のトーク。東条由布子さん（東条英機のお孫さん）、それに西岡昌紀さんと。東条さんからは貴重なお話を聞きました。お孫さんでなければ出来ない話でした。この少し前に、「サンデー・プロジェクト」で田原総一朗さんと対談していました。これもよかったです。田原さんも、随分と気を使って対談していました。僕も、どう聞いていいか分からず苦労しました。あれもこれもと聞きたいし。でも、失礼があっちゃいけないし…と。おどおどしてたんでしょう。客席からは、「だらしない！」と批判も受けました。東条さんとは又、お会いすることもあると思いますので、今度はさらに突っ込んで話を聞いてみたいと思います。ありがとうございました。

「サンプロ」でも紹介されてましたが、東条由布子さんは、本を出してます。『一切語るなれ=東条英機一族の戦後』（読売新聞社）です。著者は岩浪由布子となっています。こちらが本名なんだそうです。1992年（平成4年）8月に第一刷が出ています。そして、3ヶ月後の11月にはもう第4刷が出ています。そうすると、この後も爆発的に売れたんでしょう。今は絶版で、僕は古本屋で探してもらって読みました。文庫本にもなっていますが、それもなかなかありません。特に、「サンプロ」で紹介されてからは、書店、古書店にドッと注文が来たそうです。ネットで探したらありますので、読んでみて下さい。とてもいい本ですし、貴重な資料です。

保坂正康さんの『東条英機と天皇の時代』（文春文庫）も以前、読みましたが、今は手に入りません。絶版じゃないのに本屋においてない。古本屋に頼んでます。東条英機が見直され、靖国問題が熱く取り上げられるんですから、きっと、文春文庫も復刊するでしょう。

東条由布子さんは、「今度、貴重な資料が『WILL』に出る」と言ってましたが、7月26日付けの産経新聞を見て驚きました。これだったんですね。

「WILL」（9月号）の広告が出てました。巻頭が「東条英機宣誓供述書」。封印されたG H Q発禁第1号を公開！」と出ています。

「これは近現代の一級資料だ」という渡部昇一さんの解説も載ってます。又、東条由布子さんは上坂冬子さんと特別対談しています。「今こそ知ってほしい祖父東条英機の真実」です。

それと、八木秀次さんの「社会党も賛成した戦犯釈放国会決議」も載って

ます。そうなんですね。社会党が言い出しちゃうんです。それがあったんで、いわゆる「A級戦犯」の靖国合祀も決ましたんで。合祀反対を社民党が言つんなら、このことをキチンと「総括」してからでなくては出来ないはずです。

(2) 7月27日(水) 6:45p.m.文京シビックセンター会議室。「楯の会」の体験を聞く会。

(3) 7月29日(金) 公安問題についてテレビの取材。

(4) 「元気なおっぱい」のグラビアにひかれて、「週刊現代」(7月30日号)を何気なく買ったら、私らの本の書評が出てました。「今週の本棚」で。斎藤貴男、森達也、私の『言論統制列島』(講談社)の書評です。短いので紹介しませう。

〈3人の著者はそれぞれ右翼、左翼、オウム事件のエキスパート。ただ、そのレッテルが信じられないくらい柔軟かつ辛辣に座談は進行し、右翼&左翼問題、皇室、憲法、ネット社会など、今の日本の論点に沿って熱く語られていく。3人に共通するメインテーマは「国家は疑え！」。〉

【お知らせ】

(1) 8月6日(土) 月刊「創」(9月号)発売です。私の連載では鈴木宗男さんに会った話、そして映画「リーベンクイズ(日本鬼子)」の話を書きました。又、連合赤軍事件の加藤倫教さんとの対談も載っています。これは貴重な話が聞けました。「あさま山荘」に立てこもった人の中では、今、唯一、話の聞ける人です。なぜ、立てこもったのか。中での様子はどうだったのか。何を考えていたのか。その時、人質とはどんな話をしていたのか。加藤さんはその全てを語ってくれました。又、皇室との意外なニアミスについても…。これにもビックリしました。

(2) 8月9日(火) 7:00p.m.高田馬場のトリックスター(ライブ塾)です。浅野健一さんと、「マスゴミの犯罪」です。浅野さんは元共同通信の記者で、今は同志社大学教授です(新聞学専攻)。著書には、『犯罪報道の犯罪』(講談社文庫)、『犯罪報道と警察』(三一新書)、『過激派報道の犯罪』(三一新書)など多数あります。

実は、僕とも対談本を出してます。『激論・世紀末ニッポン』(三一新書)です。戦争犯罪、阪神・淡路大震災、オウム真理教などについて論じて

ます。「世界をどう見るか、日本をどう考えるか」と本の帯には書かれています。森川展男さん（大東文化大学助教授）が司会をしています。1995年11月に出ています。ちょうど10年前ですね。定価は750円です。

(3) 8月10日(水) 7:30p.m.からロフトプラスワンです。松尾貴史、斎藤貴男、そして私のトークです。

同じ日、7:00p.m.から一水会フォーラムです。シチズンプラザで、講師は山浦嘉久氏です。

(4) 8月15日(月) 4:00p.m.から牛込簞笥（たんす）区民ホールでシンポジウムです。（この場所は以前、宮台真司さんらとトークライブをやりました。都営地下鉄大江戸線。牛込神楽坂駅A1出口徒歩0分です）。

「終戦・被爆 60年のニッポンを評定する」。パネラーは喜納昌吉、高野孟、保坂展人、五十嵐敬喜、他です。私も出ます。終わって喜納さんのミニライヴもあります。

(5) 9月8日(木) 7:00p.m.ロフト。「創」プロデュースのイベントがあり、私も出ます。

(6) 9月13日(火) 7:00p.m.トリックスターです。PANTAさん（ミュージシャン）、見沢知廉さん（作家）とトークです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張8月8日

今年も天皇本と公安本の8月になりました。国民的な夏になります

(1)『天皇家の掟---「皇室典範」を読む』が発売だ！

今日、8月8日(月)、全国の書店に並びます。『天皇家の掟---「皇室典範」を読む』(祥伝社新書・800円)です。私と佐藤由樹(ゆうき)氏との共著です。型破りの天皇論になったと思います。

佐藤氏は30才。東京学芸大大学院出身の新進気鋭のライターです。『皇位継承と宮内方』(別冊宝島・04年11月)、『皇位継承の危機』(別冊歴史読本・新人物往来社。05年5月)にも書き、その制作にも携わってます。この二冊は、最近の天皇論では一番まとまるし、参考図書として長く残るでしょう。僕も、前者にはインタビュー、後者には対談(森達也さんとの)で参加させてもらいました。光栄だと思ってます。

佐藤氏とは、その二冊の天皇論で知り合いました。優秀なライターです。又、よく取材しています。そして今度、共著を出すことになったのです。というと、「あっ、対談か」思われるかもしれません、違います。「じゃ、1章から4章までを佐藤氏、5章から8章までを鈴木。というふうに分担して書いたんだろう」と思われるかもしれません。それも違います。6月に会って、この企画を聞いた時、私も驚きました。エッ、そんな「共著」があるのかと。

実は、1章から8章までを佐藤氏が書くのです。そして、1章ごとに僕が「解説」を書くというのです。「解説」なんて、ちょっとおこがましいな、と思いました。「じゃ、意見でも提案でもいいです」という。企画案を見たら面白そうだ。それに、「皇室典範」をこの機会に勉強し直すのもいい。そう思って引き受けました。

「8月8日発売ですから、7月15日に原稿をもらって、早急に校正しま

す」という。そんなに早く出来るのかよ、と思った。でも、〆切まで1ヶ月ある。じっくり勉強して、いい原稿を書こうと思った。かなりの本を買って読んだ。メモを取りながら読んだ。思ったより難しい。頭が冴えない。

そのうち、「〆切を7月11日にして下さい。でないと間に合いません」と言う。こっちも間に合わない。焦った。考えがまとまらん。他の仕事もあるし、集中できん。そのうち佐藤氏から原稿が送られてきた。1章、2章…とバイク便で送られてくる。読んで驚いた。完璧じゃないか。今さら僕が「解説」なんか書く余地はない。そう思ったが、やらなくちゃならない。約束だ。

それで必死にやりましたよ。無い頭をふり絞って。7月11日(月)に提出した時は、そのまま倒れるんじゃないかと思いましたよ。それから2日後、もう校正です。さらに、いろんな疑問点を出し合って直したり、調整したり。そして、8月3日(水)には見本誌が出来。8日(月)には全国書店で発売です。

ハードな仕事でした。自分の力不足を痛感しました。でも、やれるだけのことはやったと思います。かなり風変わりな、そして面白い本になったと思います。又、現在の女帝論議の全てが理解できると思います。この本の目次を紹介します。

天皇家の掟---「皇室典範を読む」

はじめに 佐藤由樹

第1章 現代の皇室問題と『皇室典範』

■鈴木邦男の視点（以下・視点） ■誰のための皇室問題か？

第2章 『皇室典範』を読む

■視点■天皇制の顯教と密教---最悪の事態に備えて

第3章 明治以前の皇位継承と八人十代の女帝

■視点■万世一系は今から始まる---希望としての皇室

第4章 旧『皇室典範』の成立過程

■視点■『皇室典範』---不敬なるもの

第5章 現『皇室典範』の成立過程

■視点■三島由紀夫の予言---幻の女帝論

第6章 海外の王位継承

■視点■皇室と国際結婚---海外の王室との共生へ

第7章 新『皇室典範』と皇位継承のゆくえ

■視点■『皇室典範』なんていらない---不敬なる想定問答集

第8章 日本国憲法と象徴天皇制

■視点■最後は陛下にお任せを---皇室の幸せに向けて

あとがき 鈴木邦男

(2) 「お世継ぎ問題」の核心は何か

どうです。凄い内容でしょう。女帝問題だけではありません。皇室問題の全てについて書いてます。外国の王室のことも書いてます。勿論、佐藤氏が調べて書いたものです。資料的価値も高いと思います。ページも予定より、ぐんと増えて307ページになりました。普通の新書より100ページも多いです。ちなみに、僕の『公安警察の手口』（ちくま新書）は206ページです。

僕の書く「解説」が「視点」に変わりましたが、この方がよかったです。資料的、客観的な佐藤氏の文に対し、私のは主観的な意見です。時には暴論もあります。

というよりも、（これは本の「あとがき」にも書いたんだけど）先生に課題文をもらって、それについて必死に考えて、つたない小論文を提出している、その学生が私だと思いました。それだけに、勉強にはなりましたが。

そうだ。時には、カンニングをしたんだ。この学生は。だって、分からぬ事があると先生（佐藤氏）に電話して調べてもらったりしたんだから。カンニングしながら小論文を書いたですよ、この不良学生は。30才も年下の先生には迷惑ばかりかけました。

…と、ここで宅急便だ。実物が来たわいな。と、いうことは。そう、今まではゲラを見ながら書いとったわけじゃがな。

ここで宅急便を破る。バリバリ。おっ！美しか本だ。シックだ。本当に出たんだ。出ると分かってても、やはり実物を見るまでは安心できない。それだけに嬉しい。

鈴木邦男・佐藤由樹…と、僕の方が先だ。申し訳ない。佐藤さんが3分の2以上を書き、苦労して書いたのに。

本の帯を見て、ビックリ。

「人権のない御一家を弄んでいるのは国民だ！」

ヒヤ、凄い。こんなこと書いていいのかよ。過激だ。しかし、うまいね。僕の気持ちを汲んで書いている。又、こうも書かれている。

「お世継ぎ問題」の核心となる法律（典範）を誰が、どう変えるつもりなのか

そうだよね。本当は「皇室典範」をちょっと手直しすればいいといった問

題じゃないんだ。それは本を読んでもらいたい。古いテーマかもしれないが、天皇を信じるか、信じないか。というところまで行くんだ。

皇室典範に限らず、かなり無理なことを皇室にだけ押しつけているんだ。我々、国民は。今回、厖大な資料を読んで、その点を痛感した。

ただ、あまり力タクなっちゃまずいので、僕の「領分」を守って、思い切って、異論、暴論、そして、自分の提言を書いてみた。やさしく。分かりやすく。

書いていて、「あれ？俺ってこんなことを考えていたのか」と思うことが何回もありました。そして、物事の本質が垣間見えてきた。そんな気もしました。

この本には、新書なのに、写真や表や資料が盛り沢山だ。一冊の教科書であり、一冊の参考書であり、一冊の問題集だ。そんなんじの本になった。僕の原稿のところには、三島由紀夫や北一輝の写真も出ている。ということは、この二人にも触れながら書いている。

あれっ、今、この本の表紙を見ていたら奇妙なことに気がついた。表紙の下半分がなだらかな丘になっている。まさか女体の一部じゃないだろう。そして、上半分は大空だわさ。その丘の上を今、一頭の羊が右端から、トコトコと歩き始めた。そして、見てるまに左端まで登りつめた。そして、そこで止まっている。あっ、これは私だ。と思った。だって、羊なんだもん。ヒツジ年の私を象徴しているんだ。他に考えられん。

そうか、私の遅い歩みをここにイラストにしてくれたのか。ありがたい。グスン。でも、待てよ。祥伝社新書全部がこの表紙なのかもしれない。いやいや、それはなか。これは、私の為だけに描いてくれたんだ。と思いたい。それに、8月2日の私の誕生日に出してくれたんだし。（手元に来たのは8月3日）。

(3)自滅願望なんかないのに。でも、エスカレートした

あれっ、こんなこと、去年も言ったような気がするな。そうだ、去年の8月2日は、私の『ヤマトタケル』（現代書館）の出来た日だ。8月2日は、ヤマトタケルと私の誕生日だ。それから、ザ・ニュース・ペーパーの杉浦社長も同じだ。ということを書いたよね。

あれれれ。もう一つ偶然が重なった。去年は、8月に『ヤマトタケル』を出し、続いて『公安警察の手口』を出した。つまり、「天皇」本と「公安」本の年だった。

今年もそうなんじゃよ。不思議な一致だ。8月に『天皇家の揃』を出し、今月末には『公安化するニッポン』（WAVE出版）を出す。全く同じ構図になった。同じじゃないな。さらにパワーアップし、拡大再生産というかんじなんよ。

『天皇家の揃』も、かなり思い切った。無鉄砲な本になったけど、公安本は、さらに凄いよ。今、ゲラを読んでるけど、背筋が寒くなっちゃった。猛暑の中なのに、タラリ、タラリと冷たい汗が流れてきちゃった。こっちの本は又、近づいたら紹介するわ。

「どんどん過激な本を出して下さいよ！」と周りの人たちは言うし。「奥さんも子供もいないし、僕らと違って失うものは何もないんだから、死ぬ気で書い下さいよ！」なんて、皆、無責任に激励する。まいるよなー。別に私は、自滅願望なんかないのに。ささやかな幸せが欲しいのだ。

思い出したよ。以前、「SPA!」に赤報隊のことを書いた。「会った」とちょっと書いたら、それだけで兵庫県警からガサ入れをかけられた。わざわざ兵庫から来るんだよ、ガサ入れに。それも驚いたけど、「週刊誌に書いただけでガサなんて前代未聞だ！人権問題だ！」と言ったら、「鈴木さんじゃ仕方ないよ」と皆、言う。人権派の弁護士までもが、「あそこまで書きや、ガサくらい当然だよ」なんて言う。ヒデ一話だ。

又、赤報隊事件の時効直前に家を放火された。あやうくチャーシュー（焼きブタ）になるところだった。それなのに誰も同情しない。

「活動家だから、何があっても覚悟の上でしよう」と言う。そんな覚悟なんかしてねえよ。中には、「疑いを外らすための自作自演じゃないの」と言う人もいる。自作自演で火をつけるかよ。チクショー。

だから、このことを8月3日発売の『戦後未解決事件史』（別冊宝島）に書いてやった。

…と、いろんなことを思い出しちゃった。でもそれはどうでもいい。本日発売の『天皇家の揃----「皇室典範」を読む』を読んで下さい。「皇室典範」も全文が載ってますし、皇室の歴史、外国の王室の歴史など、勉強になると思います。今まで知らなかったことが分かるでしょう。そして、これから、どうするかです。こんな考えもあるのか。と驚くことが多いと思います。

僕も書いていて、知的冒険心を感じましたし、楽しかったです。皆さんも楽しんでくんまし。

【だいありー】

(1) 8月1日(月) ほら、世界じゃ戦争があるし、テロが続発するし。その「世界の病」を私は引き受けちゃった。責任感が強いから。それで、高熱で3日間、寝込んだ。それに7月一杯で、二冊分の原稿を書くんよ。他に、インタビュー、トークなど10回位あって、バテた。体力がないせいだ。これじゃ、「世界の病」を救えない。でも、自分の病は、病院に行かず信心だけで治した。

(2) 8月2日(火) 今日は私の誕生日らしい。「祝ってやるよ」という人々がいて、行く予定だったが、体がまだ本調子じゃないので、先に延してもらった。

夕方、近くのファミリー・マートに行ったら、やけに目立つ本が並んでいた。大判の黒い表紙で、別冊宝島の『戦後未解決事件史』(840円)だ。パラパラとめくったら、「赤報隊事件」で、僕の原稿が出ていた。あっ、これだったのかと思って買った。いつ出るか聞いてなかったからだ。

事件そのものについて、編集部の人が2ページ書いてる。その後に、私が4ページ書いている。「赤報隊と疑われた私の18年」だ。私にらみをきかせた写真が出ている。又、「時効」直前に「赤報隊」から放火されたアパートの現場写真も出ている。「時効後」でもあるし、今までとは違い、かなり踏み込んだことを書いてやった。見たか、日本人。これが戦争だ！（この部分は「亡国のイージス」の真似）

（この本は、やたらと売れている。初版5万部。さらに、3日間で増刷だそうだ）。

(3) 8月3日(水) 『天皇家の掟・皇室典範を読む』の見本誌が出来た。半分以上は若手ライターの佐藤由樹氏が書いたのだが、非力な僕は苦労した。大変だった。でも、今となっては楽しい仕事になったと思っている。

【お知らせ】

(1) 8月9日(火) 7:00p.m.より高田馬場トリック・スター（ライブ塾）で浅野健一さんとトークです。「マスゴミの犯罪」について。浅野さんは元共同通信の記者で、今は同志社大学教授（新聞学専攻）です。かなり刺激的な話が聞けると思います。ご期待下さい。

(2) 8月10日(火) 7:30p.m.より口フトプラスワン。松尾貴史、斎藤貴男、そして私のトークです。面白い話になりますよ。期待していらして下さい。

なお、この日は7:00p.m.から高田馬場シチズンプラザで一水会フォーラムもあります。講師は山浦嘉久氏です。

(3) 8月14日(日) この日の東京新聞（朝刊）に私の原稿が載ります。島田雅彦『おことば』（新潮社）の書評です。戦後の皇室の方々のおことばを紹介しながら島田が日本のこと、これから天皇制のことを語っています。「臣・雅彦」と思えるほどの本でした。書評を読み、そして、島田の本も読んで下さい。

(4) 8月15日(月) 4:00p.m.から牛込簞笥（たんす）区民ホール（都営地下鉄大江戸線・牛込神楽坂駅A1出口徒歩0分）。

9条まつり。シンポジウム「終戦・被爆60年のニッポンを評定する！」

パネラーは、喜納昌吉、ベンジャミン・フルフォード、高野孟、保坂展人、五十嵐敬喜、そして私です。

このチラシが送られてきました。パネラーの紹介が載っています。私のことは変わった紹介をされてました。さらに、アッと驚きました。

鈴木邦男（評論家）

1943年福島県生れ。早稲田大学政治経済学部卒。1972年民族派の「一水会」を結成、代表となる。たんなる反共右翼からの脱却を主張。テロ、ゲリラなど非合法活動をしない、他人を強要しない、団体の威力を背景に主張を押し通さないの「非暴力三原則」を掲げ、「発言の場がないからテロだ」という右翼の論理を批判、「言論右翼」と呼ばれた。旧ソ連、東欧の共産主義国家の崩壊を目の当たりにして、反共の右翼は最終的に終わったと述べ、民族主義は穏やかな郷土愛に基づくボランティア的な活動に戻るべきだと論じる。著書に「これが新しい日本の右翼だ」（日新報道・93年）等がある。最新作「公安化するニッポン」（WAVE出版）を8月22日発売予定。

うまいし、実に堂々とした立派な紹介文だ。僕だって書けない。それに最後の新刊書には驚いた。秘密裡に出版を進めていたのに。まさか公安に察知されたのか。それに8月22日発売という日時までは僕も知らなかった。でも、これは本当です。

(5) 8月21日(日) 大阪の毎日テレビに出ます。深夜0:30～1:30の「映像'05」です。自衛隊のイラク派遣をめぐる問題等について。

(6) 8月22日(月) 「8・15のビラ」にあるように、この日、僕の本、『公

安化するニッポン』（WAVE出版）が出ます。思い切り過激で、思い切り危ない本です。この猛暑の中、フラフラになりながら本を作りました。同じ日、『おかしいぞ！警察・検察・裁判所』（創出版）が出ます。僕も出ています。

(7) 8月23日(火) 7:00p.m.浅草の木馬亭で民族派若手のトークライブがあります。出席者は見沢知廉、針谷大輔、古澤俊一、横山孝平…らです。ぜひご参加下さい。

(8) 9月8日(木) 7:30p.m.からロフトプラスワン。「創」トークライブ。超豪華な企画です。超豪華なメンバーです。

〈第1部〉 (7:30p.m.～) いま雑誌をめぐる現実。田原総一朗『オフレコ！』創刊を記念して

田原総一朗（『オフレコ！』責任編集長）

花田紀凱（『WILL』編集長）

矢崎泰久（『話の特集』元編集長）

篠田博之（司会・『創』編集長）

〈第2部〉 (9:00p.m.～) メディア・市民・国家『おかしいぞ！警察・検察・裁判所』刊行記念。

森達也（映画監督・作家）

斎藤貴男（ジャーナリスト）

鈴木邦男（一水会顧問）

篠田博之（司会・『創』編集長）

森、斎藤、鈴木の3人は7月18日(月)に三省堂本店で、『言論統制列島』（講談社）の刊行記念トークをやりました。今度は、『おかしいぞ！警察・検察・裁判所』（創出版）の刊行記念イベントです。嬉しいです。

(9) 9月13日(火) 7:00p.m.高田馬場のトリックスターです。PANTAさん（ミュージシャン）、見沢知廉さん（作家）とトークします。

(10) 月刊「CIRCUS」（9月号。KKベストセラーズ）で、特集「都市ゲリラ化するニッポン」。僕も喋ってます。

(11) 月刊「紙の爆弾」（9月号）が怒りの発売。松岡社長への不当逮捕に抗議する本です。宮崎学、斎藤貴男、篠田博之。…そして僕も書いてます。

(12) 月刊「創」（9月号）は凄い内容です。林真須美獄中手記。山岡俊介さ

ん自宅放火の現場写真、等々。僕は連載の他、連赤事件の加藤倫教氏と対談しています。タイトルが凄い。「元連合赤軍『少年A』が語る、あさま山荘事件と皇太子との驚愕“接点”」

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張8月15日

「幽霊」本と「事件」本が売れる夏です。だから私も書きましたよ

(1)コンビニがどんどん書店化しているよ

夏は、「幽霊」と「事件」ものが売れるんですよ。と、言っていた。そういえば、本屋でも、コンビニでも、その関係の本が多い。幽霊の出没地域マップなんてものもある。もう一つの「事件」本だ。これも多い。「別冊宝島」が最近出した『戦後未解決事件史』(840円)は、発売3日目でもう重版がかかった。凄い。

初めは2万部ほど出そうと思っていたら、取次から、「売れる。もっと出せ」と言われて5万部をだした。それなのに、もう重版だ。この勢いなら、10万部は突破するだろう。

他にも、宝島社では、同じような本を一杯出している。売れている。他の出版社でも、似たような本がある。「事件」「タブー」「未解決」…と付くと、売れるのかもしれない。

それに、コンビニが今、急激に書店化している。そこで卖れているのだ。出版状況が今、かなり変わってきてる。その「変化」の中で、「幽霊」「事件」もののムック本が急激に卖れているのだ。

今まで、コンビニに置いてる本というのは決まっていた。週刊誌を中心だ。ファッション誌、情報誌、成人誌とある。さらに、漫画、ゲーム攻略本。そして、最近多くなったのが、大型のムック本だ。セブンイレブン、ファミリーマートなど、どこのコンビニでも本の占めるスペースが大きくなつた。ちょっとした「書店」だ。

そうなんだ。「書店」になっているんだ。コンビニでは今まで絶対に置かなかつた本も置いている。「文藝春秋」もあるし、新書、文庫もある。単行

本もあるし、売れ筋の本も置いてある。大人の勉強術や、本の読み方の本、もある。

「今、まったく書店に行かない人がいるんです」と出版社の人が教えてくれた。書店には行かないが、コンビニには毎日、行く。そして、コンビニで目に付いた本を買う。

この現象は分からなかった。僕が古いのかもしれません。「本なんか興味がないから書店に行かない」というのなら分かる。でも違うんだ。本を読む気はあるし、買う気もある。しかし、書店には行かない。コンビニに面白い本があれば、買う。書店にとっては困るだろうが、でも、こういう新型の「読書人」が増えている。それは知的に上だと下だと、学歴が高いとか低いとかには一切関係ないという。高学歴の人でも書店には行かず、コンビニの本だけを買う。そういう人が急増してるんだ。

だから、コンビニは、どこも「ミニ書店」化している。その中でも、夏は「幽霊」と「事件」だ。「事件」でも、外国の事件はダメらしい。ニューヨークの9.11テロとか、ロンドンの地下鉄テロ、イラク…と、世界中ではテロが起きているし、日本とは比べものにならない大事件だ。でも、その手の本は売れない。「日本の事件」だから売れる。我々の身近にある「未解決事件」「タブー」「凶悪事件」だから売れるのだ。

その中でも、今一番売れてるのが、別冊宝島の『戦後未解決事件史』だ。サブタイトルは、「犯行の全貌と『真犯人X』」。こんなキャッチコピーも踊っている。

- ・迷宮「置き去り」40事件の謎に挑む
- ・「狂気」と「タブー」に満ちた戦後60年の「黒い霧」全史
- ・「時効」「冤罪」事件の真犯人はどこへ消えた？
- ・徹底検証！狭山事件、3億円事件、グリコ・森永事件、「赤報隊」事件、国松長官狙撃事件、世田谷一家殺害事件、歌舞伎町ビル火災、石井紘基代議士刺殺事件ほか。

しかし、迷宮「置き去り」40事件、という表現も凄いやね。そんなに迷宮事件が日本にあったのかと思った。それに、「置き去り」か。どんどん新しい事件、凶悪事件が起きる。すぐ人々から忘れ去られる。犯人が拳がらないまま放ったらかしにされてるものも多い。それで「置き去り」だ。それらを拾い上げて、徹底検証してみよう、という企画だ。

企画を立て、原稿を頼み、取材し、本が出るまで、多分、2ヶ月位だろう。中には1ヶ月で作るものもある。月刊誌のスピードで本を作る。『戦後未

解決事件史』で、僕は「赤報隊」の原稿を頼まれた。初めは7枚だったが、途中で増えて、「15枚をお願いします」となった。

「18年前の事件ですが、全く知らない若者が多い。その人たちの為にも、分かりやすく書いて下さい」という。

それと、赤報隊事件の概略については編集部で書く。だから、その上で、「容疑者としての18年」を書いてくれという。あれっ、『天皇家の掟』（祥伝社新書）に似てるな、と思った。この本では1～8章を佐藤氏が書いた。女帝の歴史、皇室典範、世界の王室…と。それを客観的、歴史的に書いた。その上で、僕が各章ごとに「鈴木邦男の視点」を書いた。これは書きやすかった。「客観的事実」は佐藤氏が書いてくれたんだし、それを基にして、僕は思い切った意見、推測、提言…を出すことが出来る。だから、この形式がこの本の特色になってるし、面白さが増したと思う。

『未解決事件史』でも、その体裁がとられた。

赤報隊事件はいつ起きたか。誰が殺され、誰が疑われたか。その捜査は…と、客観的なことは編集部が書いてくれた。だから、それを基にして、「容疑者」の僕が書く。これは、書きやすい。今まで、赤報隊については何十と原稿を書いてきた。しかし、全て、「事件」について書き、「解説」を書き、それから自分の「意見」だ。中には、説明や解説だけで終わったものも多い。イライラする。その点、今回は、画期的な試みだった。

(2) 「まるごし刑事（デカ）」に挑発されて、赤報隊の真実を書いちゃった

それに、編集者はこんな注文をつける。若い人たちの中では、「赤報隊」を知らない人が多い。ただ、事件に関心のある人の中には、「鈴木は知ってるんだろう」「関係あるんだろう」と思ってる人が多いです。その点、本当の所はどうなのか。ズバリと書いて下さい。と言う。時効後だから書けることを書けという。

だから、今までの「赤報隊」ものとは全く違って、ズバリと書いてやった。それは、本文を読んでもらいたい。もうちょっと「予告編」をやると…。

元警視庁刑事の北芝健さんと最近、会った。彼は人気漫画「まるごし刑事（デカ）」の原作者だ。もう19年も続いている人気漫画だ。僕と対談し、別れる時、「なぜ赤報隊は捕まらなかったんですか」と僕は聞いた。彼はズバリと即答した。「鈴木さんが庇ったからです」。

ゲッと思った。「鈴木さんが犯人だ」と言ったわけじゃない。「鈴木さん

が共犯だ」と言ったわけでもない。「庇った」と言ったんだ。さすがは元敏腕刑事だ。本質を見抜いている。そうだよな。あれは「庇った」と言うんだろうな、と思った。そして、かなり踏み込んだ事を書いた。

そうそう。赤報隊事件の時効1ヶ月前に、アパートに放火された。その時の写真も出ている。ちょうど、「創」の今月号にも出ている。偶然だが、こっちは山岡俊介さん（ジャーナリスト）が最近、放火され、その時の写真が出た。「ついでに」と思って編集部が僕の家の放火写真も載せたようだ。

しかし、あれは悪夢だったな。思い出したくもない事件だ。その「放火事件」も迷宮だ。未解決事件だ。

この『未解決事件史』の中には、赤報隊以外にも、関係のある（じゃない。関心のある）事件がずい分とあった。「国松長官狙撃事件」なんて、本当に謎の謎だ。犯行を自白した「巡査長」は、どうも違うようだ。又、「オレかもしんないぞ」と「老スナイパー」の中村泰は言ってるし。このスナイパーは、かつて殺人をやり、今は現金輸送車襲撃事件で捕まっている。大量の武器を隠し持っていた。なぜ、大量に持っていたかと裁判で聞かれ、何と、「野村秋介に頼まれて武器を調達した」と衝撃の供述をしたのだ。三島事件と同じように決起しようとして野村さんが、中村に武器の調達を頼んだというのだ。

「冗談じゃない。そんなことは一切ない」と野村さんの後輩たちは怒って否定している。「大体、野村先生は中村に会ってもいない」と。ただ、千葉刑務所に2人がいた時期はある。もしかしたら、その時、知り合って、「三島事件に感動した」「オレもだ」といった話をしたのかもしれない。その程度だろう。あとは中村の作った話ではないのか。でも、これも謎の事件だ。

その他、この本には、謎の事件がこれでもか、これでもかと紹介されている。ついつい読んでしまう。暑い夏の夜も、これで涼しくなるでしょうよ。
「幽霊」話なんか必要ないよ。

あれっ、と思い出した。ちょっと前にも別冊宝島に書いたなど。本箱を探してみたら、あった。別冊宝島『日本のタブー事件史』だ。「誰も触れないあの事件の真相」だ。1月25日の発行になっている。本屋には、まだ置いてある。そうすると、半年のうちに2回も私は別冊宝島の〈事件もの〉ムックに書いたことになる。まるで犯罪ライターだね。

この時は、何を書いたんだっけ。新井将敬議員の自殺だ。タイトルはこうだ。

「日本人より日本人。在日コリアン・新井将敬「自決」の背景にあったも

の。

(3)元祖「少年A」に「あさま山荘事件」の真相を聞いた

そうそう、これを書いたんだ。と思ったら、星野陽平（フリーライター）と書いている。そうか。星野さんが書いて私がインタビューされたんだ。忘れていた。いかんな。夏バテだよ。

でも、この雑誌も面白い。皇室、在日、武富士、ユダヤ、警察、東電OL殺人事件、石井紘基代議士殺人事件…とある。今月出た『戦後未解決事件史』と重複するものもあるが、別な角度から切り込み、書いている。又、『日本タブー事件史』では、最後に連合赤軍の加藤倫教氏のインタビューがある。

「山荘にろう城した19才の少年が32年後に明かす『最後の謎』」というタイトルだ。これを読んで、ビックリした。当時は「少年A」と呼ばれていた加藤倫教氏は、あさま山荘の「立てこもり」に参加した。あの実行犯の中で、唯一、彼だけが喋れる。

彼は、テレビや雑誌にも何回か出た。しかし、顔は出てない。後ろ姿だったり、目の所にモザイクが入っていたりする。だが、この別冊宝島では顔を出している。堂々と取材に応じている。記者もかなり厳しいことを聞いている。

「おっ、顔を出していいのか。じゃ、こっちも取材しよう」と思い、「創」に打診した。そして、取材が実現した。それが、今発売の『創』（9・10合併号）だ。

かなり面白い話が聞けた。タイトルも凄い。「元連合赤軍兵士が語ったあさま山荘事件。皇室との“接点”」だ。山荘で、機動隊と銃撃戦をしたが、それまで銃の練習はしていたのか。疑問だった。加藤氏は、一切してなかったという。全く初めてなのだ。山岳アジトで毎日、射撃訓練をしてたのかと思ったら、違うという。山荘ベースの建設や、内部の人間の査問・粛清で忙しくて、銃の練習など出来なかったのか。そう思ったら、それも違う。要するに弾が勿体ないのだ。それに、何よりも銃は大切なのだ。大事なのだ。人間よりも大切だ。「銃さま！」という感じだったという。「唯銃主義」というか、ともかく、銃が最高のもので、それに兵士は近づかなくてはならん。といった感じだったという。銃には、そんなに簡単に触れない。神々しいものだったという。

これは驚きだった。又、人質の牟田さんとはどんな話をしたの？と聞いた

ら、結構、話をしてるんだな。それは本誌を読んでもらいたい。かなり貴重な話が聞けたと思う。植垣さんもそうだけど、加藤さんも、淡々として、凄いことを話してくれる。それに、その辺の左翼のように、わかりにくい言葉を使わない。これはいい。

加藤氏は京浜安保だ。そこから、植垣氏らの赤軍派と合流して、「連合赤軍」をつくる。京浜安保は、かなり中国の影響を受けていた。だから、「反米愛国」なんてスローガンにしていた。当時としては他の左翼から、「バカか！」 「お前ら、右翼か！」と罵倒されたそうな。

「でも、鈴木さんを前にして、失礼ですが、僕らの方がずっと愛国者だと自負してました」と加藤氏は言う。うん、そうだろう。僕ら以上だよ。

その加藤氏、今は「日本野鳥の会」だ。バードウォッキングをする会だ。その会で、何と、皇太子さまや高円宮殿下と「大接近」したこともあるという。詳しくは本誌を読みなせえ。

この時、書かなかったことだが、思い出した。「野鳥の会」というのは、鳥をかわいがるんだ。だから、焼き鳥なんか食べない。「じゃ、籠の中に飼ってかわいがるのはどうですか」と私は聞いた。「それはいけません」という。ポリシーが全く違うんだそうだ。鳥をかわいがるんだから同じかと思ったら、天と地ほどの違いがあるという。

捕まえて、籠に入れるんでは「囚人」と同じだ。連赤の兵士と同じだ。そう思うのかもしれない。あくまで、「野鳥の会」だ。つまり、野に放たれて自由に飛ぶ鳥を、そっと見守るのだ。鳥さんの邪魔、迷惑にならないよう…。

ウーン、そうか。「日共と反日共の違いのようか」と言ったら笑っていた。前に、ここで、「盆踊り」と「よさこい」の違いについて書いた。盆踊りは規則正しく、静かに、型通りにやる。よさこいは、空手のような、踊りのような、ともかく何でもありだ。つまりは、「日共のデモ」と「反日共のデモ」の差だ。そう私は書いた。

そしたら、去年大宮のJR東労組の集会に行った時だ。アトラクションで、よさこいをやっていた。激しい踊りだ。JR東労組は「革マルだ！」と言われて、公安に因縁をつけられ、又、小さなことで逮捕された。このよさこいを見ていて、「ギエ！反日共が反日共の踊りをやっとるばい」と私は思っちゃいました。

もう一つ。新事実。青森では、ねぶた祭りを8月にやっている。正式な踊り手はハネット（跳人）という。ところが、それを邪魔して、革命的に介入し

ようとするグループがいる。カラスハネトという、カラスのように黒い衣装で乱入する。最近は、カラスだけでなく、白い衣装（白鳥族）、黄色の衣装（ヒヨコ）、ピンクの衣装（フラミンゴ）なども出現している。それらは皆、「ねぶたの統一と調和を乱すな！」ということで国家権力は排除する。その闘いが毎年、行なわれているんだそうな。ここでも「日共デモ」と「反日共デモ」の対決だ。ぶつかり合いだ。（勿論、本人たちは日共・反日共という、そんな意識はないだろうが…）。

ということで、終わり。いつまでも暑いですね。憲法を改正して、春の次は秋にすればいいのに。そうしたら涼しくていい。でも、改憲しても夏は変えられんか。どうも思考が夏バテだ。オワリ。

【だいありー】

(1) 8月9日(火) 先週、高熱が出て、寝込み、何と全身に湿疹が出た。顔中、はしかのようになった。鏡を見たら余りの醜さに、失神した。その話をしたら、「それは頸椎が悪いからです。治してあげるから来なさい」と言われて骨法道場に行った。お昼に。堀辺正史先生に整体治療をして頂く。治った。体が信じられないほど楽になった。軽くなった。骨をボキボキとされた時はビックリしたが、頸椎の歪みが直った。ありがたかった。

元学生運動の仲間の吉田良二氏が亡くなった。59才だった。6時から落合斎場でお通夜。家から2分の所だ。早目に行って、ちょっとだけ出て、高田馬場へ。7時からライブ塾で浅野健一さんとトーク。マスコミ界の知られざる内幕が聞けた。有意義だった。

(2) 8月10日(水) 11:00から12:00。落合斎場で吉田良二氏の葬儀。吉田氏は北海道出身。生学連、全国学協の同志だ。「北方領土返還運動」を熱心にやっていたので、「北方良二」なんて言っていた。生学連、全国学協、日学同、ジャスコ、など昔の学生運動仲間が大勢集まった。こういう時しか集まらないというのも淋しい。大島氏は心の広くて、大らかで、いい人だった。誰からも愛される男だった。弔辞を読んでた人が、「北海道の高倉健だった」と言っていた。そうだよな。写真もいい。病気の前に撮ったんだろうか。ニッコリしていて、いい顔だ。私なんて、こんな写真はないよ。私の時は、「創」や『言論統制列島』に出てる相手を指さしている写真や、腕を振り上げてる写真が使われるのでしょうか。

(3) 8月11日(土) 昼、大宮に。格闘技雑誌「アッパー」の取材。パンクラス

を舞台に大活躍している桜木裕司選手（掣圏会）を取材する。

夜6時から、『天皇家の撃』（祥伝社新書）の打ち上げ。この日の産経新聞の朝刊に、この本の広告が大きく出てました。

(4) 8月14日(日) 東京新聞に私の原稿が載った。島田雅彦『おことば』（新潮社）の書評だ。いい本だ。皆さんも買って下さい。月末に河合塾コスモの合宿があるので、これをテキストにしようと思う。あと一冊、東条由布子さんの『祖父東條英機・一切語るなれ』（文春文庫）も使おう。

【お知らせ】

(1) 8月15日(月) 4:00p.m.から牛込簞笥（たんす）区民ホール（都営地下鉄大江戸線・牛込神楽坂駅A1出口徒歩0分）。

9条まつり。シンポジウム「終戦・被爆60年のニッポンを評定する！」

パネラーは、喜納昌吉、ベンジャミン・フルフォード、高野孟、保坂展人、五十嵐敬喜、そして私です。終わって喜納さんのミニコンサートがあります。500人に入る大会場です。大シンポジウムです。ご期待下さい。

(2) 8月21日(日) 大阪の毎日テレビに出ます。深夜0:30～1:30の「映像'05」です。

(3) 8月22日(月) 元公安の人達に取材して、まとめた本、『公安化するニッポン』（WAVE出版・1400円）が発売です。凄い本です。ちょっと寒気がするような本です。公安の内幕をここまで書いていいのかと怖くなりました。

又、『おかしいぞ！警察・検察・裁判所』（創出版）もこの日、発売です。

(4) 8月23日(火) 7:00p.m.浅草の木馬亭で、民族派若手のトークライブがあります。見沢知廉、針谷大輔、古澤俊一、横山孝平らが出ます。

(5) 9月8日(木) 7:30p.m.からロフトプラスワン。「創」トークライブです。

第一部は、田原総一朗、花田紀凱、矢崎泰久で「いま雑誌をめぐる現実」です。

第二部（9:00p.m.）は、『おかしいぞ！警察・検察・裁判所』刊行記念トーク。斎藤貴男、森達也、そして私です。司会は一、二部とも「創」の篠田編集長です。混むでしょうから、早目に入場して下さい。

(6) 9月13日(火) 7:00p.m.高田馬場トリックスター（ライブ塾）です。PANTAさん、見沢知廉さん（作家）と私のトークです。トリックスターの「案内」には、こう書かれちよりました。

あの「頭脳警察」のPANTAを知っている？ 独房で12年間拘束されながらも抵抗した見沢知廉を知っている？

独特の人脈で次々に社会を渾沌とさせるゲストを呼んでくる鈴木邦男。今回は衝撃のロックBAND「頭脳警察」のパンタ。70年安保の時あんなに直接政治メッセージを音楽にしたBANDはなかった。それ以降も勿論ない。左翼から右翼へ、それより監獄で凄まじい抵抗をした男であり、文学者でもある見沢知廉。この三者のトークの行く先は？

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張8月22日

島田雅彦の視点が冴えているね

『おことば』（新潮社）を読んでみたらいい

(1)これは現代の『古事記』だ。と私は東京新聞に書いた

8月14日(日)の「東京新聞」の朝刊に私の原稿が載った。書評だ。島田雅彦『おことば』（新潮社）について書いたのだ。「戦後皇室語録」とサブタイトルが付いている。戦後の天皇、皇后、皇太子、それに皇族の人々の語録だ。「おことば」を右側に書き、左のページは、それに対する島田の解説・意見・提言・疑問などだ。つまり、歴史的・客観的な「おことば」を紹介し、次に「島田雅彦の視点」を書くのだ。

そう、体裁が似ている。私と佐藤由樹氏の共著『天皇家の掟』（祥伝社新書）にだ。東京新聞の原稿を頼まれたのは、7月の中旬だ。この時は、『天皇家の掟』の原稿を書き上げ、校正をしていた時だった。うーん、似てるな、と思った。それと、「やられたな」と思った。実は、漠然とではあるが、「おことば」を紹介したから、僕の視点で天皇論を自由に書いてみたいと思っていたからだ。

まあ、これも偶然だろうと思った。

島田雅彦の『おことば』を読んで、驚いた。まずははじめに書かれた「献辞」を読んで、ぶっ飛んだ。皇室に関心があり、皇室に題材をとった小説を書いてることは知っていた。しかし、これほどの尊皇・憂国の士とは知らなかつた。まるで「臣雅彦」ではないか。そう思ったのだ。「親愛なる陛下、殿下へ」と始まり、こう書かれている。

〈私は陛下、殿下に献上すべき価値あるものを何一つ持ち合わせておりませんが、ここに陛下、殿下への深い尊厳と親愛の意を表することをお許下さい。民の心を汲むのが君主の務めであるならば、君主のお心を理解するのには民の義務であると心得ます。

一人一人の市民の声に耳をお傾けになり、彼らと喜怒哀楽を分かち合う陛下、殿下のお姿勢に君徳の偉大さを学びました。また、戦争、敗戦、占領、そして復興、成長と時代の荒波を乗り越えてこられた陛下、殿下の折々のことばを真摯に受けとめ、そのお心の内を知るにつけ、感銘を新たにいたしました。この感銘を広く読者と共有することをお許し下さい。 (...)

どうですか、この文章。これだけ、天皇尊崇の文章を書ける人はいない。これほどまでに愛国的、憂国的、尊皇的な人だとは思わなかった。

又、（ひねくれた見方をすれば）これだけの大げさな「献辞」を書けば、あとは何でも書ける。そんな気もする。いや、そう考えるのは、島田の〈尊皇心〉〈赤心〉を疑うことになるのだろうか。

いや違うと思う。だって、「おことば」の中には、国民を励まし、力づける「おことば」もあるが、それだけではない。不安や、戸惑いや、又、他の皇族のだが、かなり、意地の悪い「おことば」もある。

これも「おことば」に入るのだろうか。とも思うが、梨本宮伊都子妃の日記が死後発表されたが、皇太子殿下（現天皇）の妃となる美智子さまについて、こんなことを書いている。

〈昭和33年11月27日。

午前10時半、皇太子殿下の妃となる正田美智子の発表。それから一日中、大さわぎ。テレビにラヂオにさわぎ。

朝から空が晴れてあたたかい、もうもう朝から御婚約発表でうめつくし、憤慨したり、なきなく思ったり、色々。日本ももうだめだと考へた〉

梨本宮伊都子妃は昭和51年まで生き、死後、この日記は発表された。よく発表したもんだと思う。プライベートに書き綴ったものを遺族が発表したのだ。ここまで書いていたら普通なら発表しない。あるいは、この部分は省略するか、あるいは発表する前に破り捨ててしまうか。それをしなかったのは大変な勇気だと思う。

この発表があったおかげで、美智子さまも本当に大変だったんだ、と分かる。又、当時、「いじめ」があったといわれたが、単なる噂の域を出なかつた。着用する手袋について嘘を教えられたり。他の皇族の方々にあからさまに批判されたり…と。しかし、この日記を見ると、それらも全て本当だったんだと分かる。

あれだけ国民的には喜び、マスコミも、こんなお目出たいことはないと祝福したのに。皇族の多くは、冷たい目で見ていたのだ。民間人が入ることで、「日本ももうだめだ」と絶望した人もいたのだから。この日記について

島田はこう解説する。

〈美智子妃を選ぶにあたり、後に新宿の歓楽街で亡くなった黒木侍従と小泉信三の二人のみが隠密裏に動いた。その他、お妃選びの相談役を自ら任じ、常盤会会長も務めていた松平信子は蚊帳の外に置かれ、地団駄踏んで悔しがることになった。ご成婚後も容易に怒りは解けず、昭和天皇みずからが頭を下げる了解を願ったという〉

しかし、天皇に頭を下げるとは。常盤会はそんなに偉いのか。そんな旧い体質を壊そうと思ったのだろう。涙ぐましい努力だ。小泉信三も信念を持った立派な人だった。今の宮内庁にはこうした人はいない。又、「新宿の歓楽街で亡くなった黒木侍従」も立派な人だった。島田は、ボカした書き方をしているが、実は、新宿のソープで亡くなつたのだ。それも、従業員のお姉さんたちは少々、年増で、それ故に、入浴料も安いソープだ。当時、週刊誌にはデカデカと出てたから覚えている人もいるだろう。

(2)皇太子さまの結婚は、まさに革命だったんだね

戦前だったら、そんな記事が出ることは絶対になかった。でも、今は隠しておけない。「なんだ、宮内庁の侍従が」と怒った人もいただろうが、でも、型破りで、人間的な侍従だったのだ。

まさか、民間人をお妃にしたのを恨んだ闇の勢力が、ソープ嬢を買収して殺したわけでもないだろう。あるいは、ソープ嬢が「くノ一」で、交わっている時にショック死させたとか。これじゃ、まるで山田風太郎の世界だ。

「平民」から皇室に入った美智子さまは、いじめられて大変だった。同時に、送り出した正田家も隨分と攻撃されたという。島田は言う。

〈正田家を「戦後にわか成金」と見做す華族もいれば、正田家の人々を「皆殺しにする」とすぐむ右翼もいた。一時期、警察は二十四時間態勢で正田家を警備した〉

えっ、そんな右翼がいたのかよ。ウソだろう、と思った。皇太子さまが選んだ人だ。又、天皇陛下も賛成した人だ。天皇の意に逆らってまで正田家に攻撃に行く右翼はいないだろう。ましてや、「皆殺しにする」なんて。それに正田家の人々を「皆殺し」と言ったら、美智子さまも入るではないか。

ただ、この頃はまだ私は右翼ではなかった。だから、よく分からん。僕が中学3年の時に、「ご成婚」が報じられた。勿論、まだ右翼じゃない。ただ、新聞を見て、「ふっくらして、きれいな人だな」と思った。それに、クラスのかつ子さんに似てるな、と思った。やはり、ふっくらとした美人だっ

た。転校して来て、よく事情の分からない僕に、優しくしてくれた。田舎から転校して来た僕は、ドジで、頭が悪くて、皆にいじめられていた。隣りにいた、かつ子さんだけが優しく庇ってくれた。今、どうしているのでしょうか。

ところで、伊都子妃が、「日本ももうだめだ」と考えたのが昭和33年11月27日だ。その4ヶ月前、その皇太子さまも、絶望的な気持ちになっていた。「おことば」はこうだ。

〈昭和33年7月14日。〉

きみ、きっと、これが僕の運命だね。

明仁皇太子〉

どんな運命かというと、「暗殺される運命」だ。島田の「解説」には、こうある。

〈この日、イラク国王ファイサル二世は、軍部のクーデターと民衆の蜂起により暗殺された。ご学友の橋本明氏がたまたま御所に招かれていて、一緒にお茶を飲んでいると、侍従から報告があったという。

「皇太子はその瞬間、蒼白になり、手にしていた紅茶が入った茶碗を膝の上に落として、数秒だったが、口をおききになれなかった」が、自分を取り戻してこう発言されたそうだ。まだ美智子妃の実家、正田家が婚約を固辞していた頃だ。二十二才で暗殺された国王の不幸を他人事とは思えなかつたのだろう〉

(3) 「浩宮の代で最後になるのだろうか」と悲しいおことばを

昭和33年というのは、1958年だ。60年安保闘争の直前だ。左翼の力が強かった時だ。「天皇制打倒！」を叫ぶ人々も多くいた。そうした日本の風潮も知っていたのだ。そこにイラク国王の暗殺の報だ。

しかし、ご学友が遊びに来てる時にわざわざ、こんな事を報告するなんて、侍従もおかしい。島田はさらにこう続けている。

〈のちに、戦後初の国賓として来日し、鴨獵で接待したエチオピア皇帝ハイレ・セラシエも亡くなり、イランのホメイニ革命によりパーレビ王朝も打倒され、アジアからは続々、王制が消えてゆく。

長男浩宮が生まれると、明仁皇太子は学友たちに「浩宮の代で最後になるのだろうか」といったという〉

これも悲しい「おことば」だ。「革命の嵐」によって天皇制がなくなる。そう考えたのかもしれない。今、その心配はない。ただし、男の子がいな

い。そのために皇室典範を改正しようという動きがある。「浩宮の代で」という心配は、むしろそっちの方が大きい。

しかし、エチオピアにしろ、イラクにしろ、王制があった時の方が豊かで、安定していた。「いや、そんなことはない」と、その国の人々からは言われるかもしれないが、外から見ると、そう見える。

橋爪大三郎氏は、朝日新聞で、「お世継ぎがないのなら、天皇制はやめて、共和制にしてもいいじゃないか」と言っていた。昔は「共和制」という言葉も魅力はあったが、今は全くない。それに、天皇制がなくなったら困ると思ってる人が圧倒的に多い。サイパンの慰霊の旅を見ても、左翼の人ですら、「あっ、皇室があってよかった」「小泉とは違う」と発言していた。

今、共和制に何の魅力もないし、ある意味、日本はもう共和制だ。それよりも、この民主主義の暴走をどうおさえるか。それが問題だ。「国民のため」といいながら、監視国家化は進んでいる。政府のやりたい放題だ。これで皇室がなくなったら、それこそ、「日本ももうだめ」になる。

この「おことば」の中には、愛子さまの「おことば」も入っている。宮内庁公開ビデオで。

〈平成16年9月24日

パパも---

敬宮愛子〉

これも、「おことば」になるんだろうか。さすが島田の視点は鋭い。これを見て、天皇を「パパ」と呼ぶとは何ごとか、と怒った憂国の士もいたようだ。しかし、今時、おたあさま、おもうさまと呼ばせるのも変だ。小さな子供にとっては、ママ、パパの方が発音しやすい。

この島田の本には、昭和天皇、今上天皇、皇太子、そして皇族、天皇族の人々の「おことば」が紹介されている。「えっ、こんなことまで言ってるのか」と思えるような言葉も多い。よく調べたものだと感心する。歴史的な史料としても貴重だし、島田の視点、解説も鋭い。

この調子で紹介してたらキリがないので、最後に、例の「人格否定」発言だ。平成16年5月10日の皇太子さまの発言だ。

〈雅子にはこの10年、自分を一生懸命、皇室の環境に適応させようと思いつつ努力してきましたが、私が見るところ、そのことで疲れ切ってしまっているように見えます。それまでの雅子のキャリアや、そのことに基づいた雅子の人格を否定するような動きがあったことも事実です〉

これは、書き写していても、辛い。悲痛な叫びだ。島田はこう解説する。

〈皇太子の問題提起は、すぐ低い次元にすりかえられた。嫁姑のいさかい、宮中でのいじめ、あるいは兄弟げんかなどなど。『渡る世間は鬼ばかり』のような世界を競って書き立てる。確かにそうした要素は良子妃も美智子妃も経験しているが、雅子妃の病状は多少環境を変えて負荷を軽減したくらいでは良くならないだろう。皇太子が“雅子さんを全力で守る”といった時、そこには「皇室のあり方を変えて妻を守る」という覚悟もあったに違いない〉

島田も思い切ったことを言う。しかし、この後、さらに思い切ったことを言う。

〈皇室や皇居に適応できないのならば、その外に出るか、その環境を変えるしかない。里帰りしたり、地方や外国に滞在することで、快方に向かうなら、そうするしかない。皇太子ご夫妻に、このような形の逃避が許されるのか、僕には想像がつかない。

しかし、仕事か家庭か、と悩む女性にとって、今の皇室の問題は他人事ではないだろう。宮内庁では最悪のケースが想定されているのだろうか？　たとえば、別居。たとえば、離婚〉

これは驚きだ。ここまで言った人は、今迄いない。ここまで思い切った、危ないことを言うためには、島田だって、覚悟を決めて書いたはずだ。

又、これだけ思い切ったことを書くためにも、本の「献辞」は必要だったのか。と僕は思った。邪推かもしれないが、そう思った。現代版「古事記」だと思ったのも、その点だ。「古事記」の序で大安萬侶は、これから、神々とその子孫の天皇の美わしくも立派な歴史を書くと宣言する。こんなに素晴らしい歴史は他のどこにもない。神々がつくり、それを受けついだ天皇がいたからこそ、この国はこれほど素晴らしい国になったのだという。

しかし、中味を見てみると、必ずしも立派な話ばかりではない。神々も嫉妬するし、争うし、殺し合いもする。神々の子孫の天皇も嫉妬するし、争うし、殺し合いもする。すさまじい話が多い。

でも逆に言えば、やけに人間的だし、大らかだし、アナーキーだ。学ぶ点があるとすれば、こういう点だろう。神々も、神々の子孫の天皇も間違う。ましてや、我々庶民はしょっちゅう間違う。あやまちを犯す。だから、謙虚に生きようじゃないか。そういうことを教えている神話だろう。去年、『ヤマトタケル』（現代書館）を書いて、そう思った。

島田の『おことば』もそうだ。戦後の皇室だって、諍いがある。嫉妬があ

る。絶望的な悲鳴もある。しかし、それをキチンと見すえるべきだ。そう島田は思ったのだろう。そうした点を思い切って書くためにも、あの「献辞」が必要だと思ったのだろう。そんな気がする。

「いや、違う。島田は本心からそう思って書いたのだ」という反論もあるだろう。むしろ、僕としては、そう論破されることを望む。ともかく、これはショッキングだし、実に大きな問題提起になっている。読んでみてほしい。そして、僕と佐藤氏の共著、『天皇家の掟』（祥伝社新書）も読んでほしい。そして考えてほしい。

【だいありー】

(1) 8月15日(日) 4:00p.m.から8:00まで牛込篠笛（たんす）区民ホール。
9条まつり・シンポジウム「終戦・敗戦60年のニッポンを評定する！」。

五十嵐敬喜、喜納昌吉、保坂展人、ベンジャミン・フルフォード、高野孟、そして私の6人によるパネル・ディスカッション。「憲法」と「これからの日本」の二部構成。その間に、沖縄の歌や踊り。そして、会場からの発言などがある。「電撃ネットワーク」の南部虎弾さんも発言してました。

フルフォードさん、五十嵐さんは初対面で、緊張感をもってやれました。でも、僕自身の力不足もあって、ハードでした。疲れました。又、休憩時間には韓国のテレビ局にインタビューされました。

(2) 8月16日(月) 月末に河合塾コスモの合宿がある。その時、使うテキストをコスモに、持つて行く。島田雅彦の『おことば』と、朝倉喬司の『自殺の思想』（太田出版）。

(3) 8月19日(水) 中野図書館に一日中いる。司馬遼太郎の『街道をゆく』（朝日新聞社）のシリーズ全43巻を、やっと読破した。前に読んでたのもあったが、今回改めて読み直した。やはり深いですよね。考えさせられることが多かった。日本の「街道」だけでなく、アメリカ、台湾、オランダ、モンゴル、中国、アイルランドなどにも行っている。世界的な「街道をゆく」だ。この話は又、書こう。

(4) 8月18日(木) 午後、市民運動の取材を受ける。夕方、『公安化するニッポン』（WAVE出版・1400円）の見本誌が出来る。8月23日(火)に全国発売だ。元公安だった4人の人に話を聞いた。公安を批判し、反省している人。いまも誇りを持っている人。もっと強化すべきだと言う人。いろいろだ。しかし、「ここまで喋っていいのか」と思えるほど核心を衝く発言をし

てくれた。内部告発をしてくれた。聞いていて、人間存在の闇をのぞいたような気がした。ドストエフスキイの小説を読んでるような衝撃を感じた。

(5)久しぶりに講道館に行く。やっと体調が元に戻った。

(6)8月21日(日) 昼、志の輔さんの落語会に行く。

【お知らせ】

(1)8月23日(火) 7:00p.m.浅草の木馬亭で、民族派若手のトークライブ。

見沢知廉、針谷大輔、古澤俊一、横山孝平らが出ます。

この日、『公安化するニッポン』が発売です。

(2)9月8日(木) 7:30p.m.からロフトプラスワン。第一部は田原総一朗、花田紀凱、矢崎泰久。「いま雑誌をめぐる現実」

第二部(9:00p.m.)は『おかしいぞ！警察・検察・裁判所』刊行記念トーク。斎藤貴男、森達也、そして私です。

(3)9月9日(金) 「創」にも出てますが、ジャーナリストの山岡俊介さん宅が放火されました。それで、「励ます会」をやる。2年前に私も放火されている。ついでに励ましてもらいたい。

(4)9月13日(火) 7:00p.m. 高田馬場のトリックスター（ライブ塾）です。PANTAさん、見沢知廉さん、そして私です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張8月29日

この猛暑には最適でせう。全身が凍る怖さです。『公安化するニッポン』発売です！

(1)殺された公安が10人もいる！

『公安化するニッポン』（WAVE出版・1400円）が発売された。衝撃的な本だ。背筋が寒くなる本だ。4人の元公安に僕が話を聞いて、まとめたのだ。「話を聞いただけで本にするなんて、ちょっと安易じゃないのか」と、実は僕も思った。ところが、全く違った。これほど凄い話が聞けるとは思わなかった。よく、ここまで喋ってくれたものだと思った。この内容は大問題になるだろう。特に、「スパイ養成」の具体的な話。それと、新左翼過激派に公安が潜入り、内ゲバなどで死んだ公安がいる。それも10人以上いる。と元公安が証言したのだ。

去年の10月に出した『公安警察の手口』（ちくま新書）では、この「公安殺害」について、「噂」として紹介した。しかし、戦前じゃあるまいし、ありえないと思っていた。だから僕も、「そこまではないだろう」と書いた。それに、「内ゲバ」要員にされた時は、潜入捜査官は、「逃げろ」と指令されている。

全ての任務を放棄して、逃げるのだ。だから、潜入している公安が、「新左翼」として相手のセクトを襲い、殺したことはない。ただ、相手のセクトや警察官に寝込みを襲われ、重傷を負い、死亡したケースはあるという。

「潜入」がバレるので、「新左翼」の活動家として死亡記事が出る。しかし、本当は公安なのだ。

元公安の北芝健氏が『治安崩壊』（河手書房新社）の中で、ちらっと書いていた。それを臭わすことを書いていた。でも、「ありえない」と僕は思った。この『公安化するニッポン』の中で、北芝氏に会ったので、聞いた。

「どうせ、ハッタリだろう。でも念のために聞いてみようか」と聞いたのだ。

そしたら何と、こと細かく話してくれた。やけに詳しいし、具体的だ。機動隊に踏み込まれ、重傷を負った「新左翼」がいた。「俺はサツカン（警察官）だ！」と叫んだが、誰も本気にしないで、殴った。病院にかつぎ込まれ、危篤状況の中でも彼は叫び続けた。「所属はどこで、職員番号は…」と言う。公安の係がいそいで検索すると、何と、本物の公安だった。あわてて、蘇生オペレーションをやるが、その甲斐もなく死んでしまった。

親は怒る。「スパイをさせやがって。それに、同じ警察官が殺したんじゃないか」と。内部で大問題になった。「それはこうやって解決したんです」と、これ又、具体的に詳しい話をする。潜入した公安で、人を殺した人間はない。しかし、殺された人間は10人以上います、と北芝氏は断言する。

「これはホントだ」と思った。話が詳しいし、親との対応もリアルだ。それに、北芝氏は警察をクビになったわけじゃない。今でも友好的だ。よく、テレビに出て、「自分は警察の回し者です」なんて言っている。警察官だったことに誇りを持っている。公安も必要だし、もっともっと強化すべきだという。そういう「公安」の代表が言うんだから、この話は信憑性があると思った。

それにしても、「反公安」の僕に、よくそんな〈秘密〉を話してくれたもんだ。大問題になるだろうに。それほど僕を信用してくれたのか。実は、北芝氏と僕は、かなり古くからの付き合いだ。彼が公安になる前からだ。公安時代は一切、接点がない。やめてから、又、会った。今回も久しぶりだ。彼は公安だったことに誇りを持ってるし、「反公安」の本を出した僕とは会ってくれないだろうと思っていた。ところが、「ぜひ会いたいですね」と言う。それで、急遽、インタビューが実現した。

「鈴木さんとは7回会ってます。一番最近は新宿三丁目の蕎麦屋です」と覚えていた。記憶力がいい。さすがは公安だ。インタビューが終わって、試みに聞いてみた。「赤報隊はなぜ捕まらなかったんですか？」。彼は、ズバリと即答した。「それは鈴木さんが庇ったからです」。ギクッとした。凄い男だと思った。こんな奴が、僕の担当だったら、僕は捕まっていた。赤報隊の時は彼は公安を辞めていた。ホッとした。このことは、『戦後未解決事件』（別冊宝島）の中で、僕は書いた。北芝氏とは久しぶりに会った。前に会った時は、7回とも、公安の話は一切しなかった。それに、「警視庁の刑事をやってたことはある」と聞いていたが、まさか公安だとは思わなかった

のだ。だから、「元公安の北芝氏」とは初対面のようなものだ。そして、いきなり、衝撃的な話を聞かされた。

(2)日共のスパイが自殺した。そして島袋氏は…

この本の中で、もう一人、初対面の人がいる。島袋修さんだ。元沖縄県警の公安で、日本一（といっていいだろう）、やり手の公安だ。スパイを常時、数人抱えていた。スパイを使い華々しい実績もあげた。しかし、スパイの一人が自殺した。スパイは、良心の呵責に耐えられなかったのか。あるいは組織（日共）にスパイ容疑で査問され、追いつめられて自殺したのか。

この事件の後、島袋氏は、公安の体験を発表する。内部告発する。初めは自費出版のような形で。やがて宝島社の『裸の警察』などに載る。去年、僕が『公安警察の手口』を書く時、一番、参考にした本だ。特に、日共のスパイ獲得については、この人の本が一番詳しい。いや、他にはない。だから、何とか会いたいと思ってたが、出来なかった。ロフトで三井さんや、真田さん、野田さんなどと、「創」のイベントをやった時、声をかけた。行くといっていたが、直前に血を吐き、来れなかった。

ところが今回は、体調も回復し、来てくれた。鬼気迫る話を聞かせてくれた。こうしてスパイになるのか、と納得した。スパイにしようとする人間を徹底的に調べ、金、女、趣味など、あらゆる点を検討し、攻める所を決める。そして、いろんな材料を出しながら、相手の反応を見て、落としてゆく。

深い世界だと思った。

金や女を使い、時には弱みを握って、脅してスパイにするのかと思ってたが違う。全人格的なぶつかり合いだ。ドストエフスキイの小説を読んでる気がした。

この時、元公安の真田氏も同席していたが、終わって、感嘆していた。「鈴木さん、島袋さんは本物の仕事をしてきた“班”的人ですよ」と。全身から醸し出す雰囲気、警察関係者とは思えない物腰、そして町並みに溶け込むような迷彩の効いた服装など、本物のプロですよ、という。そうなのか。プロは本物のプロが分かるんだ。

ともかく、本書を読んでみてほしい。「これは売れますよ。すぐ増刷がかかります」とWAVE出版の人は言っていた。この二人の他、真田氏、そして元公調の野田氏にも凄い話を聞いた。「おいおい、そこまで内部告発をしていいのかよ」と、僕の方が心配になった。

公安というのは怖いし、何と深い世界かと思った。それに、こんな優秀な人間がいたんだ。公安の卑劣さ、恐ろしさを強調しようとこの本を書いたが、逆に、公安の優秀さ、凄さを印象づける本になったかもしれない。

「じゃ、公安は必要だろう」と思われるかもしれない。だから、この本は怖い本だ。そんな危ない本になってしまった。

もうちょっと、この本の紹介をしよう。本の帯にはこう書かれている。

〈スパイ養成、尾行、盗聴、24時間監視、不当逮捕…。隠された警察の公安活動の全貌がここに。

日本の秘密情報機関はここまできていた！〉

次に目次だ。4人に話を聞いている。第一部は、元静岡県警公安の真田左近氏だ。去年、僕が『公安警察の手口』を出したが、その直後、電話があって、会った。実は、『Good Bye警察』（文芸書房）という著書があった。とても詳しい。公安について多くのことを教えてもらった。静岡に住んでいるので、植垣康博さん（元連合赤軍）の店「バロン」にも連れて行った。それから、ロフトにも出でもらい、『創』にも載った。その後、『紙の爆弾』『週刊金曜日』にも登場し、今、売れっこの元公安だ。

この本では、「公安警察にも裏金問題がある」と題して語ってくれた。

第二部は、島袋修氏だ。「スパイ養成の様々な手口を明かす」と題し、語ってくれた。「ぜひ聞きたい」と静岡から真田氏も上京して参加した。沖縄からの飛行機、ホテルをWAVE出版が手渡してくれた。ありがたかった。

「スパイにするための基礎調査」「スパイA-6の自殺」「公安警察官が強盗」「国松長官狙撃事件の真相」「スパイの暗号表」「告発者のマスコミ対応」…などについて喋ってくれた。著書には、『公安警察スパイ養成所』（宝島社文庫）、『封印の公安警察・あなたのそばにスパイがいる』（月刊沖縄社）などがある。

第三部は北芝健氏だ。彼は元警視庁の刑事で、公安もやっていた。又、人気漫画『まるごし刑事（デカ）』の原作者でもある。もう19年も続いている超人気漫画だ。刑事時代の体験が随所に出ている。著書も多い。『治安崩壊』（河手書房新社）、『「落とし」の技術』（双葉社）、『まるごし刑事の悪いやつらは許さない犯科帳』（KKロングセラーズ）、『スマン！ 刑事でごめんなさい』（宝島社）

昔、彼とは知り合いだった。あのワルの彼が、警察官になったというのは驚きだった。そのあと、漫画「まるごし刑事」の原作者だと知って驚いた。さらに今回は、快く会ってくれ、公安の内幕を喋ってくれたのに驚いた。

この本では、「今日は公安の代表者として喋ります！」と言った。公安全般について喋ってくれたが、こんなとこが凄かった。

「いかにセクトの人間を懐柔するか」「過激派の内ゲバのなかに公安がいた」「公安はなぜ秘密機関化するのか」

第四部は野田敬生氏だ。他の三人は警察の公安だが、野田氏だけは公安調査庁だ。同じようなことをやっているが、法務省の管轄だし、逮捕権はない。でも、左右両翼の人間、宗教、市民運動の人間を監視し、尾行し、スパイしているのは同じだ。

野田氏は優秀な調査官だった。だが、ある事件で、公調を追われた。もったいない話だ。こんな優秀な人間を追い出すなんて。それ以来、公調の不祥事がドンドンと外部に流れている。野田氏が仕掛けているらしい。又、内部にいて野田氏に同調する人間もいるのだろう。公安もいらない。公調もいらない。多分、遅かれ早かれつぶれるだろう。公安は必要だが、公調はいらない。という声が警察内部にもある。野田氏一人によって1500人の公調は崩壊しようとしている。その公調のデタラメさを、野田氏は余すことなく語ってくれた。

「公安調査庁は国際テロを防げない」「公安調査庁のスパイ獲得作戦」「不祥事が続く公安調査庁」などだ。

著書も多い。『CIAスパイ研修』（現代書館）。他に、『溶解する公安調査庁』『お笑い公安調査庁』を書いている。共に現代書館だ。この二冊はペンネームになってるが、野田氏が書いたものだ。

(3)元「噂真」記者が元公安に仕掛けて出来た本だ！

次に、この本が出来た背景だ。今年の6月7日、WAVE出版から、岡留安則さんの『噂の真相イズム』という本が出た。売れている。岡留さんが「噂真」に書いた編集長日記を中心にまとめたものだ。又、巻頭には斎藤貴男さんとの対談。巻末には僕との対談も載っている。

これを作ったのはWAVE出版の松井さんという人だ。元「噂真」にいた人だ。「噂真」がなくなってから編集者・記者たちは、各雑誌に散って活躍している。松井さんも、やり手の編集者だ。

今年の4月19日(火)ジョナサンで松井さんに会った。この時、『噂の真相イズム』の話が出た。巻末に岡留さんと僕の対談を載っけさせてくれという。勿論、喜んで承知した。これは「論座」（朝日新聞社）の02年12月号に載った対談だ。「言論の覚悟を問う！」と題したものだ。それが再び、陽

の目を見る。ありがたいし、嬉しかった。

この時は、『噂の真相イズム』ではなく、仮題が『噂の真相・編集長日記・最終版』だった。この時、「実は次に公安についての本を出したい」という。去年10月に『公安警察の手口』（ちくま新書）を出したが、それを読んでくれ、さらに発展させた本を出したいという。

じゃ、元公安の人会って、もっと詳しく、内部の話を聞きましょうよ、となつた。ともかく、『噂の真相イズム』が出てからの話だ。そして、6月7日に本は出た。「じゃ、元公安の人と会いましょう。誰がいいですかね。どんな本にしましょうか」と、6月一杯考えた。そして全ての段取りを松井氏がやってくれた。何度か打ち合わせをし、7月一杯で、4人に会って原稿をあげる。すぐに、ゲラが出る。7月一杯で校了にし、8月のお盆前に印刷所に入れて、8月18日(木)に見本誌出来、8月23日(火)に書店に並ぶ。

だから、7月は大変だった。中旬まで、まだ学校はあるし、他の原稿もある。それなのに、この本だ。さらに、『天皇家の掟』（祥伝社新書）が7月11日〆切で、あと、書き直し、校正があった。だから、こんなに仕事をしたことにはなかったので、頭がパニックになった。そこで熱を出し、湿疹が出来てしまったのだ。

では、元公安の人会った日程だ。メモがわりに書いとこう。

- 【1】真田左近氏 7月5日(火) 新宿ルノワール会議室。午後1時から。
- 【2】北芝健氏 7月14日(土) 秋葉原ルノワール会議室。午後3時から。（終わって6時半から全日空ホテルで田原総一朗さんの出版記念会があったので、一緒に出る。岡留さんや鈴木宗男さんに会う）
- 【3】島袋修氏 7月15日(金) 銀座6丁目ルノワール会議室。午後2時半から真田氏も参加。終わって、創の荒井氏も合流して、飲む。
- 【4】野田敬生氏 7月20日(土) WAVE出版本社で。午後2時から。対談中、大きな地震があって、あわてた。

(4)お！『おかしいぞ！警察・検察・裁判所』も出来たよ！

はい、これでオワリです。

と、書いてたら、『公安化するニッポン』がさらに10冊届いた。宅急便を開けてみて驚いた。一冊一冊に、丁寧に、ビニールの袋がかけられている。雨に濡れても大丈夫なように、か。ヒヤツ、「ビニ本」だよ。生まれて初めてですな。「ビニ本」を書いたなんて。書店に出す時も、「ビニ本」のまま売るのでしょうか。内容が危ないから、パラパラと見られないように…。

と、ここで終わろうとしたら、又、郵便だ。あっ、創出版のも届いた。でも、こっちは8月29日(月)に全国書店発売とのことだ。とても丁寧な作りだし、登場人物も多い。

あっ、タイトルから紹介する。『おかしいぞ！警察・検察・裁判所』（創出版・1500円）だ。「市民社会の自由が危ない」とサブタイトル。本の帯にはこう書かれている。

〈相次ぐ「ビラまき逮捕」の異常。公安の暴走が市民社会を脅かす！〉

全部で4部から構成されている。

第一部は、「被害当事者の証言」

ビラ事件、日の丸・君が代強制事件、公園トイレ反戦落書き事件などの証言だ。

第二部は、「公安の暴走」

森達也、山下幸男、斎藤貴男氏らが登場している。

第三部は、「公安警察・検察の恐るべき実態」

ここには私が2回出ています。

まず、三井環さんとの対談「口封じ逮捕された元大阪高檢公安部長が語る公安捜査の内幕」。

もう一つは、座談会「テロ対策名目に強化されつつある公安の実態」。三井環、黒木昭雄、真田左近、野田敬生、そして私が出ている。

三番目に、魚住昭さんの文。

第四部は、「警察vsメディアの攻防」

大谷昭宏、清水勉、鳥越俊太郎、原田宏二、伊藤一…らが登場している。

なかなか凄い内容だ。凄い本だ。今の警察、検察、裁判所の全てが分かる。巻末の「執筆者プロフィール」を見たら19人が出ている。第一部の「弾圧事件被害者は除く」と書かれているから、この人たちを加えると、合計25人になる。25人もが登場して、告発している。そんで1500円だから安い。ぜひ、買ってみて下さい。

【だいありー】

(1) 8月22日(月) 図書館で勉強。

(2) 8月23日(火) 骨法道場で再び整体をしてもらう。8月9日(火)に行った時に、一発で治った。「よかつたら、もう一回、来なさいよ」といわれたので、お言葉に甘えて行った。体がオーバーホールされたようで、とても調子

がいい。

(3) 8月24日(水) 『公安化するニッポン』 (WAVE出版・1400円) が全国書店で発売だ。話題になるだろう。夜。「ペンの森」に集まってる人たちが、私の「誕生会」をしてくれた。本当は8月2日(火)に予定されてたのだが、あの時は、高熱を発し、さらに、全身に湿疹が出ていて外に出れんかったとですよ。

(4) 8月25日(木) 「月刊タイムス」の〆切。夜、スポーツ会館でウエイトをする。

(5) 8月26日(金) 柔道にいく。

(6) 8月27日(土) 夜、パンクラス (於:後楽園) の試合を見に行く。

(7) 8月28日(日)、29日(月) 河合塾コスモの合宿。

【お知らせ】

(1) 9月8日(木) 7:30p.m.からロフトプラスワン。第一部は田原総一朗、花田紀凱、矢崎泰久。「いま雑誌をめぐる現実」。第二部(9:00p.m.~)は『おかしいぞ!警察・検察・裁判所』刊行記念トーク。斎藤貴男、森達也、そして私です。

(2) 9月9日(金) ジャーナリスト山岡俊介さんを励ます会。

(3) 9月13日(火) 7:00p.m.高田馬場のトリックスター(ライブ塾)。PANTAさん(ミュージシャン)、見沢知廉さん(作家)。そして私が出ます。

(4) 10月11日(火) 7:00p.m. 高田馬場のトリックスター(ライブ塾)。「日刊ゲンダイ」編集局ニュース編集部部長の二木啓孝さんです。テーマは「夕刊紙の読み方・読ませ方」です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張9月5日 愛国殺人事件

(1)近いうちに、ありうるよ、これは

ウーン、これはありうるかもしれないな、と思った。赤川次郎の「日の丸あげて」という小説だ。実をいうと、赤川次郎は昔、読みまくった。そして卒業したと思った。だから、お金を出して本屋で買うことはない。でも、図書館で借りた本の中に、たまたま、この小説が入っていたのだ。

「推理作家になりたくて」というシリーズの本がある。文藝春秋から出ている。いろんな人が、自分の作品を紹介し、又、自分が尊敬し、好きな作家の作品を紹介している。さらに、推理小説を書く上での心構えを語る。一冊で、6、7人だ。それが8巻ほどある。その第四巻「謀」だった。赤川の他には、高橋克彦、夏樹静子、西村京太郎、松本清張、森村誠一が書いている。まず、巻頭の赤川の小説を読んで、ビックリした。これは「政治小説」だし、近未来を予言する小説だ。「うん、これはありうるぞ」と、思ったのだ。

元刑事が娘と共に団地に住んでいた。元刑事だけあって、曲がったことは大嫌いだ。それに愛国者だ。最近の人間は、政治に関心がないし、愛国心がない。と、いつも怒っている。テレビを見ては、ブツブツと言っている。祝祭日には日の丸を掲げるべきなのに、掲げない家がある。日教組教育のせいだ。嘆かわしい。

まあ、普通なら、こうして嘆き、怒り、それで終わりだ。あとは、産経新聞に投書したり、「正論」や「諸君」を読んで、「そうだ！ そうだ！」と叫ぶくらいだ。ところが、この元刑事は、黙っていられない。自らの信念を実行に移す。団地の中で、日の丸を掲げない家を回って、「日本人として日の丸を掲げるのは当然でしょう」「日の丸、君が代は国旗、国歌として法制化

されたんですよ」と、穏やかに言って回った。戦時中や戦前ならば、町内会の人が来て、「何だ！非国民！」と怒鳴りつけたんだろう。今は民主主義の時代だから、そんなことは出来ない。だから元刑事も、穏やかに注意する。

穏やかに言って回っても、元刑事の迫力があるし、団地の人々も、次第に、日の丸をあげるようになる。ズラリと日の丸が出ていると、実に気持ちがいい。元刑事も、満足だ。ところが、どうしても言うことをきかない家がある。きっと、左翼だろう。こいつは国賊だ。

何度も何度も足を運び、日の丸の大切さ、愛国心の大切さを訴える。しかし、そのAさんの家はガンとして聞かない。祝祭日の日、団地の一棟全体が日の丸をあげている。しかし、たった一軒、出てない家がある。これじゃ、統一性がとれない。ジグソーパズルの最後のピースが空いている。そんな感じだ。何とも気持ちが悪い。調和がとれん。

そのうち、団地の中に、奇妙な噂が出回る。「Aさんは痴漢だ」という噂だ。だって、現職の刑事が団地に来て、Aさんを聞き回っているんだ。電車の中で、痴漢があり、Aさんが容疑者らしい。あるいは、駅のエスカレーターで手鏡で女子高生のスカートの中を見たらしい…と。変質者だと。

Aさんは、いたたまれなくなる。勿論、元刑事が後輩に頼んでやらせたことだ。動機は「愛国的」だ。いくらいっても分からんから、団地から〈害虫〉を駆除しようとしたのだ。Aさんは、皆の冷たい視線に耐えられず、団地から出てゆくだろう。そうすると、一棟全体が、日の丸をあげる。きれいだ。美しい。これぞ、日本の国民だ。そういう、「純粹」な、愛国的な動機だった。

ところが、噂に悩んだAさんは、自殺してしまう。元刑事が殺したわけではないが、結果的には彼が殺したのだ。「愛国殺人」だ。奇妙なことに、主のいないAさんのところに日の丸がたつ。団地の一棟全体が、きれいに日の丸がはためく。メデタシ、メダタシだ。

ところが今度は、愛国者の元刑事が殺される。それも、日の丸に包まれて。（実は、死体に白い布をかけられただけだが、血がひろがって、日の丸に見えたんだ）。さて、犯人は？あとは、各自、読んでみなせえ。

殺人事件ではないだろうが、ここまでおせっかいな人はいる。今は、多い。一人じゃ言えなくても、集団になると言う。新聞、週刊誌、雑誌なんて、こんな、「おせっかいな愛国者」ばかりじゃないか。僕も、祝祭日に日の丸をあげないから、と言って放火された。（別の理由だったかな。いや、

きっと、この元刑事がやったんだろう）。

(2)君が代を歌ってるかどうか調べて回る。こいつが一番、不敬じゃ！

赤川次郎は、この小説のあとに、自ら「解説」を書いている。「二つの『血』の物語」と題して。

〈「愛」や「尊敬」は、いくら法律や銃口で強制されても、持てるものではない。そんな当たり前のことだが、二言目には「愛国心」と言い出す政治家や知識人の方々には、一向に分からぬようだ〉

そうだよね。三島由紀夫だって、「愛国心という言葉は嫌いだ」と36年前に言っていた。国民の一員でありながら、そこからポンと飛び出して、おもちゃでも愛玩するように、この国をかわいがるなんて変だ、と言っていた。又、それが〈強制〉につながることに反対したのだ。

慶應大学の小林節先生は、改憲論者だが、自民党のアホな改憲論議には愛想がつきたと言っていた。「憲法に愛国心を盛り込もうとしている。それが不満だ」と言っていた。「愛国心」という言葉を入れれば、それで、国民が愛国者になるのか。この国をいい国にし、愛せる国にするのが政治家の務めだろう。それを忘れて、ただ、一言、「愛国心」と書けばいいと思ってる政治家は許せん、と言う。その通りだわな。赤川次郎は、さらに自分の体験を踏まえて、こんなことを言う。

〈その点、私は恵まれていたとも言えるだろう。幼いころから父は外に女を作り、ほとんど家にいなかった。こういう人間を「父だから」というだけで、愛することも尊敬することも、私にはできなかつた。子供心に、私は「血のつながり」を妙に強調するような大人は信用しない、という信念ができてしまったのだ。相手が「国」だろうが、「国旗」だろうが、「国歌」だろうが同じだ。〉

強制してはならないものを法律で強引に押し付ける。その法律が通ったとき、私は小説の形で何か言わなくてはならない、と思った。

「日の丸あげて」はその思いが生み出した一編である。こんなことが、いつかは現実の出来事にならないように、という祈りは、しかし空しいものになりつつある〉

なかなか、示唆的な小説だ。日本はこのままでいいのか。という、憂国小説もある。我なら、この小説のタイトルに『憂国』とつけるね。三島の『憂国』にならって。逆説的だけど、これも憂国だ。国旗・国歌が法制化された時、「これは強制するものではない」と政府は言った。又、天皇陛下

も、「日の丸、君が代を広めたい」と言う将棋さしの言葉に、「強制にならないように」と言って、たしなめられた。

でも、教育現場では、ちょっとでも反対したり、起立しないだけで処分されている。最近出た、『おかしいぞ！警察・検察・裁判所』（創出版）を読んでたら、元板橋高校教諭の藤田勝久氏が、「板橋高校事件」について発言していた。「日の丸・君が代強制に反対して家宅捜索そして起訴」というタイトルだ。これもひどい話だ。

なんでも、03年以降に教育現場にすさまじい強制がされてるという。赤旗が立ち、左翼が強い時はこんなことはしない。今、左翼がいないとなると、かさにきて、徹底的につぶそうとするんだ。又、法律が出来たし、世の中は、どんどん右傾化だ。〈強制〉もやりやすいのだろう。

03年10月23日には、都教委から「入学式、卒業式等における国旗掲揚及び国歌斉唱の実施について」という通達、いわゆる「10.23通達」が出た。反抗する奴は許さないという通達だ。それまでは、ほとんどの公立高校で内心の自由を語ったりして、「君が代」斉唱では板橋高校もほとんど生徒は立っていなかった。と言う。さらに、藤田さんはこんな衝撃的な事実を告発する。

〈03年の秋の周年行事では、都教委は反抗した教員を10人戒告処分しました。そして脅しをきかせて、戒告が3回続けば免職だという噂を流しました。高島高校なんか、広い範囲に教員が散らばっているもんだから、都教委の役人は国歌斉唱時、歩いてチェックして回ったということです。国歌斉唱中にうろつき回るなんて、不敬罪じゃないですかね（笑）〉

(3) 「偽装」を見破るために「音量測定器」を…

たしかにその通りだ。この藤田さんには7月4日(月)に、文京シビックセンターで「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」の集会をやった時に会った。僕の『公安警察の手口』を読んでいて、面白かったと言っていた。

都教委や、さらに右派系の都議などが来て、国歌斉唱の時は、「ちゃんと口を開いて歌っているかどうか」をチェックして回ったという。それも、携帯でパシャパシャと写して回りながら…。これもひどい。写真を撮ってる奴らは、少なくとも歌っていないんだ。じゃ、そいつらを写真に撮って、訴えたらいいだろうよ。「強制してる連中が一番、愛国心がないし、君が代を侮辱している」と。

8月15日(月)、4時から牛込神楽坂の箪笥区民センターで、喜納昌吉さん

主催のシンポジウムに出た。その時、元社民党国会議員の保坂展人さんが言っていた。

都教委はさらに凄いことを考えている。君が代斉唱の時、仕方なく起立して、仕方なく口を開けていても、「偽装」かもしれない。処分を免れるために、起立して、歌うふりをしてるだけかもしれない。写真を撮られてもいいように、口をパクパクしている。しかし、実際は歌っていない。「良心」は売り渡さないぞ。という抵抗の印かもしれない。

これでは困る。心から、本当に歌わなくてはダメだ。それで、「声量測定器」を使って、本当に声を出して歌っているかどうかを測定しようとしている。「エッ？ 本当ですか？」と思わず聞いちゃった。当日、会場に来た人は知ってるだろう。「本当ですよ」と保坂元議員は言っていた。

しかし、嫌だな。こんなふうに「形」だけが、先行する。皆、いやいや歌っている。これじゃ、「君が代」もかわいそうだよ。いい歌なのに。大体、中学、高校なんて、反抗期のガキたちに無理に歌わそうというのがイカン。校歌があるんだから、それだけ歌ってりやいい。20才になったら、初めて「君が代」を歌う権利を与える。それでいい。いいかげんに歌われ、強制されて歌われ、これじゃ「君が代」がかわいそうだよ。

その点、私なんか、高校はミッションスクールだったから、一度も君が代なんて歌ったことはない。日の丸だって一度もあげたことがない。でも、校歌、校旗はあったし、讃美歌ばっかり毎日、歌っていた。日の丸、君が代を強制されなかった。だから、こんな立派な愛国者になった。強制されたら、反抗して、左翼になってたよ。

日の丸も君が代も、平和的で、実にいい旗だし、歌だ。それなのに、そのことを教えずに、ムリに強制しようとする。「賛成」派と「反対」派も間違っていると思う。今年、日教組委員長と『論座』（6月号）で話し合った。ガッチリとかみ合って、いい話が出来たと思う。

ところが、革マル派は、「許せん！」と言っていた。前にビラを紹介したが、委員長が、「今は改憲に反対です」といったら、「じゃ、将来は改憲賛成なんだろう。許せん！」と噛みついていた。変な理屈だ。そしたら、「今度は中核派が文句を言ってました」と、教えてくれる人がいた。

中核派の機関紙『前進』（8月1日号）に、「日教組大会。“委員長発言撤回せよ”。被処分者らビラまき」と大きな見出しが出ている。この「委員長発言」というのが、「論座」で私と対談した時のものだ。こう書かれている。

〈また「日教組・森越委員長の右翼との対談に抗議し、発言の撤回と謝罪

を要求します」という組合員の共同声明も配られた。

森越委員長が雑誌『論座』6月号で新右翼「一水会」の鈴木邦男と対談し、「『歌うな』とか『掲げるな』と言うのはその人たちの思想信条を害することになる」「『君が代』というのは、非常に平和な内容の歌」などと許しがたい主張をしていることに抗議し、撤回を求めるものである。共同声明に連帯する組合員は続々と増えているという〉

森越委員長も大変だね。僕と対談したばかりに、革マル、中核からも抗議されて。しかし、『論座』の全体を紹介したらいいのにね。森越さんは、日の丸・君が代の強制には勿論反対だ。でも、歌いたい人は歌ったらいいという。現に、サッカーに行って、歌ってる人もいるだろう、という。それまで「歌うな」といったら、これも強制になる。そんな当たり前のこと言ってるのだ。それなのに、都合のいい所だけ引いて、抗議し、「謝罪」を要求する。これも変だよ。だったら、委員長と対談した僕の方がずっと悪いわけだから、僕に抗議したらいいじゃないか。あるいは、革マル、中核の集会に僕を呼んで、糾弾したら、いいじゃないか。どこだって行くよ。でも、それはしないんだ。だらしがないやね。

じゃ、オシマイ。と思ったけど、選挙の話題も、ちょっと書いとくか。

(4) 「愛国新党」とか「鈴木新党」にしたらよかったのにね

選挙ですね。知ってる人も随分と出ています。

鈴木宗男さんは、「新党大地」を作ったんですね。宗男氏とは今年の6月28日(火)に対談し、今、発売中の『創』（9、10月号）に書きました。「どうも、地方新党をつくって選挙に出るようだ」と書いたら、その通りになりました。『創』の連載では、宗男氏の「北方領土返還論」などについて詳しく書きました。又、佐藤優氏が『国家の罠』（新潮社）の中で、宗男氏をこう分析している。

「鈴木氏は他人に対する恨みつらみの話はほとんどしない。政界は男のやきもちの世界だ。にも拘わらず鈴木氏には嫉妬心が希薄だ」

「裏返して言えば、このことは他人がもつ嫉妬心に鈴木氏が鈍感であるということだ」

それを感知できなくて足をすくわれたという。なるほどと思った。適格な分析だ。

そして、もしかしたら、「鈴木」姓は皆、そうかもしれない。と思った。そんなことを『創』に書いた。又、「外交とナショナリズム」についても書

いた。

そしたら、何とその『創』を宗男氏のHPで紹介していました。驚きました。

新党は、初め、「北海道新党」とか、「新党青空」とかいろんな案があつたそうですが、「大地」になったんですね。いっそ、「鈴木新党」にすればよかったのに。候補者は全員、鈴木姓の人だけにする。「鈴木姓に悪い人はいない」といわれてるから、これは、「善人党」になるでしょう。そうすると、対抗して、「佐藤党」とか「田中党」も出てくるかもしれないね。

そうそう。宗男さんには、7月14日(土)の田原総一朗さんの出版記念会でも会いました。

この出版会では、社民党の福島みづほさんにも会いました。4月5日(火)の『論座』10周年パーティの時も会いました。又、4月20日(水)のJ-WAVEに出た時も、会いました。僕は、遙洋子さんの番組に出たんですが、福島さんは、隣りのスタジオに来歩いて、廊下ですれ違って、話しました。「私の方が小泉さんより、ずっと愛国者ですよ。沖縄や、イラク問題を見ても分かるでしょう。小泉さんは、アメリカベったりで、本当に日本のことを考えていませんよ」と言ってました。「そうですね」と私は相槌を打ちました。「みづほ」という名前からして愛国者です。瑞穂の国・日本ですからね。

そうそう、田原さんの出版記念会では辻元清美さんにも会いました。「本、読んだでえ。オモロかったわ！」と言われました。森達也、斎藤貴男さんと鼎談した『言論統制列島』（講談社）のことです。嬉しかったですね。わざわざ買って読んで下さったなんて。「鈴木さん。今度、応援に来てよ！」と言ってました。もう、その時から立候補の決心を固めていたんですね。応援に行きたいけど、僕が行ったんじゃ、かえって票が減っちゃう。声をかけてもらったのは嬉しいんだけど…。

それと、「新党日本」の田中康夫さん。この人も田原さんの出版記念会に来てました。でも、この時は、まさか「新党日本」の代表になるとは思わなかつたでしょう。

この「新党日本」に入った小林興起さんも、実は、昔からの知り合いです。昔、ある政策勉強会が月に一回やっていて、それに僕も出てました。彼は当時、まだ役人だったと思います。そんな昔からの知り合いです。でも、何かのパーティで会う位で、最近はじっくり話したことはありません。

他にも、学生時代の友人とか、いろいろ、立候補してる人はいますが、今、一番、注目されてるのは、この5人ですかね。がんばってほしいです

ね。

【だいありー】

(1) 8月21日(日)の深夜、大阪毎日テレビで、夜中の0:30～1:30に「映像105」が放映されました。テレビ局からビデオが送られてきました。よく出来た番組でした。「イラクに行って参ります。05年。反戦運動と自衛隊」です。ここの中で、反戦運動を尾行、張り込みし、潰そうとしている公安のことも触れてました。テレビ局としてはタブーだった公安に触れた画期的な番組です。私も、「公安」についてインタビューされ、答えていました。

「広島では映らなかった」と言った人もいましたが、そこまでは電波が届かなかったのかもしれませんね。関西だけで、中国地方は映らんかったのも。

(2) 8月28日(日)午前11:00。河合塾コスモに集合。28(日)、29((月))と合宿。別に受験勉強の合宿じゃない。ゼミの合宿だ。昼は、牧野剛先生の選んだ本、上原善広の『被差別の食卓』(新潮新書)を読む。3時から、早稲田奉仕園で、カンボジアの学生との交流会。河合塾では、カンボジアに学校をつくりたりして支援している。夜は、オリンピックセンターで本を読む。私が選んだ本で、島田雅彦の『おことば』(新潮社)を読んで、生徒たちと天皇制について語り合う。翌日は、牧野先生の選んだ本、保坂正康の『「特攻」と日本人』(講談社現代新書)を読んだ。これはビックリした。いわゆるお涙ちょうだいの「特攻もの」ではない。実にいい本だ。おススメ。

(3) 8月30日(火) 骨法整体。頸椎が治って、快適だ。「体が固いからほぐしてあげます」といわれ、お言葉に甘えて、又、行った。整体なんて、よほど重症の人が行くのかと思ってた。ギックリ腰で動けないとか、首が回らないとか。「そんな時はもう危ないんです」と言われた。脳溢血で倒れたりするのは、全て、首です、と言う。首が悪いと、脳に血が回らなくなるからだ。助かった。危うく若死にするところだった。「これで寿命が60年のびました」とお礼を言いました。

(4) 週末は、ちょっと手にあまる原稿をかかえて、苦悶しちりました。いくら、本を読み、勉強しても、なかなか、分からんち。いかんな、私は。無能じゃな、と思い知らされました。

【お知らせ】

- (1) 9月8日(木) 7:30ロフトです。第一部は田原総一朗、花田紀凱、矢崎泰久、「いま雑誌をめぐる現実」。第二部(9:00~)は、斎藤貴男、森達也、そして私です。
- (2) 9月9日(金) ジャーナリスト山岡俊介さんを励ます会。
- (3) 9月13日(火) 7:00p.m. 高田馬場のトリックスター(ライブ塾)です。PANTAさん(ミュージシャン)、見沢知廉さん(作家)そして私です。
- (4) 10月11日(火) 7:00p.m. 高田馬場のトリックスター(ライブ塾)。日刊ゲンダイの二木啓孝さんです「夕刊紙の読み方・読ませ方」です。

[**1999年**](#) [**2000年**](#) [**2001年**](#) [**2002年**](#) [**2003年**](#) [**2004年**](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張9月12日 二つの放火事件

見沢知廉氏が亡くなりました

悲しいお知らせから書かなくてはなりません。皆様、ご存知のように、作家の見沢知廉氏が亡くなりました。9月7日、夕方、自宅マンションから飛び降り自殺をしました。突発的な自殺だったようで、遺書もないそうです。8日の朝、その報を聞き、まさか、と思いました。お母さんと電話をして、本当だと分かりました。9月13日(火)には高田馬場のライブ塾で一緒にトーケーをする予定になってたのに。お母さんも、「PANTAさん、鈴木さんと会えるのを楽しみにしてました。体の調子もよくなったり、これからは親孝行をしてもらおうと思ってたのに」と言ってました。残念です。悔しいです。9月13日は、PANTAさんと二人で、見沢氏の思い出を話そうと思っています。

9月9日(金)の午後、家族だけで密葬をし、僕も参列しました。「お別れ会」は出版社や友人たちが中心になり、近々やるそうです。分かったらお知らせします。又、ロフトでも「追悼トークライブ」をやる予定です。見沢氏の自殺について、詳しいことは次週に。(以下は、その前に書いておいた「今週の主張」です)。

(1)台風やカトリーナより「火」が怖い

「台風は大丈夫だったの?」「床上浸水したんじゃないの?」「みやま山荘は流されたんじゃないの?」と、問い合わせやお見舞いの電話・メール・書き込みを頂きました。心配をおかけしましたが、大丈夫です。中野区上高田に避難勧告が出たらしいのですが、神田川から離れてますし、うちは、ちょっと高台になってるのかもしれません。あるいは、近所に火葬場がありますので、守ってくれたのかもしれません。亡くなった方々が。

あるいは、「火」が「水」を弾いたのかもしれません。うん、きっとそうでしょう。そういうえば、中野区上高田が、台風で浸水しても、うちの近くだけはいつも大丈夫でした。ハリケーンの「カトリーナ」が来ても大丈夫でしょう。しかし、今でもハリケーンには女の人の名前が付いてるんですね。昔は台風にも全て女性の名前が付いてました。50代以上の人なら覚えちよるでしょう。「カトリーナ」に似た女性名をどんどん付けてました。アメリカ人の気象台の人が勝手に付けてたといいます。「今回の台風は気まぐれだから、うちのカーちゃんと性格が似てる。じゃ、カーちゃんの名を付けよう」。次の台風の時は、隣の男が、「今回は激しくて、ヒステリー女のようだ。こりや、うちのカーちゃんの名にしよう」とか言って。戦後史の本に書いてあったから、本当ですよ。

でも、台風は次から次と来るから、いちいち名前を付けていたら、キリがない。それでやめたんです。ただし、ハリケーンはそんなに来ない。だから今でも女の名前を付けてるんです。しかし、一体、「カトリーナ」とは誰なんでしょう。アメリカの気象台の人が付けたんですから、そこに勤めている人の奥さんか、愛人か、娘の名前でしょう。その女性もきちんと紹介すべきでしょうね。でも、「お前が悪いんだ！」 「死んで謝罪しろ！」と抗議が殺到しますかね。

日本でも、飛行機の便数が少ない時は、「よど号」「木星号」と、名前が付いてたんです。今でも、寝台列車は付いてますね。でも、飛行機も便数が多くなれば、名前なんか付けてられません。名前のある時にハイジャックしてよかったです、「よど号」も。

さて、台風の話から、ハリケーン、飛行機と話は進みました。数が少ないうちは名前を付けて、かわいがられるというお話です。違うかな。だから、わがみやま山荘は、「水」害には強いのです。近くに火葬場があって、「火」の原理で、「水」を寄せつけないです。これはいいことですが、でも、「火」には弱いのです。「水」害はないのですが、「火」災はありましたから。2002年の3月15日、深夜です。今から3年前です。赤報隊事件の時効一ヶ月前でした。

3年前のことなのに、あの時の放火現場写真が、今発売中の「創」（9・10月号）と『戦後未解決事件史』（別冊宝島）に出ています。前に紹介しましたが、『戦後未解決事件史』の方は、僕が赤報隊事件のことを書き、その関連で載ったのです。「創」の方は、最近、山岡俊介さん（フリーライター）が何者かに放火され、その写真がカラーグラビアで載りました。その

時、ついでに、わが家の写真も出たのです。

「これが山岡俊介さん宅の放火現場だ！」と3ページ出ています。4ページ目が余ったので、ついでに私のも載せてくれたのでしょう。「放火事件は鈴木邦男さん宅にも！」と大きな見出し。そして、こう書かれてます。



「2003年3月、本誌連載執筆者・鈴木邦男さんの自宅も放火された。ドアの前の洗濯機（左下）がドロドロに溶けるほどの火災だった」

山岡俊介さんは、「創」に怒りの手記を書いています。7月3日未明の放火事件への告発手記だ。「卑劣な放火犯よ。私は言論への暴力に屈しない」。

ホント、放火というのは卑劣なテロですよ。そして一番、怖いですよ。山岡さんとは緊急に「放火対談」をした。放火された被害者なんて、なかなかいない。「創」に載る予定だったが、発行直前で間に合わず載らなかった。ただし、勿体ないと思ったのか、山岡さんが「手記」の中で、紹介してくれた。

「本誌で連載をもっている元・新右翼の鈴木邦男さんによると、放火というのは、仕掛ける側はちょっと脅す程度のつもりでも思わぬ大事に至ってしまう怖れがあるのが特徴だという」

私はまるで「放火評論家」のようですね。放火犯の心理が分かるんですね。一回の被害で放火犯の心理が全て分かるのか、と言われるかもしれません、分かるんです。殴ったり、刃物を振り回したり、ゲバ棒で襲ったりした場合は、〈加減〉が分かります。ここまでやったら危ないな。この程度なら大丈夫だろうと。それに、過激派は何度もやってますから、慣れます。

ところが、「放火」は誰もが初めてです。何度もやる人はいません。まあ、政治性・思想性のない「放火マニア」は何度もやるかもしれません、政治的・思想的「放火」は生涯に一回しかやりません。「フリーライターの山岡は書きすぎだ。脅してやろう」「これに懲りて、書くのをやめる

だろう」と、政治的「効果」を狙っているのです。私の場合も、この直後に、政治的「声明文」が届きました。

つまり、政治的放火犯は、皆、「初めて」だということです。だから「加減」が分からぬ。それに、（これは重要なことです）、事前に「練習」することが出来ない。それに、火は生きものです。「ちょっと壁をこがす程度だろう」と思ってやっても、飼い主の手を離れた火は猛獣になります。家を一軒、焼いてしまうかもしれません。隣りの家をも襲うかもしれません。寝ている老人や子供が焼け死ぬかもしれません。そうなったら、放火犯は確実に死刑です。まさか、そこまで覚悟して、放火する人はいません。

だから、「早く発見してほしい」「大きな事故にならないでほしい」という、アンビバレンツな心理を持って放火するのです。

そんな話を山岡さんともしました。山岡さんは、こう書いてます。

〈同じ放火の被害にあった物書きとして鈴木さんはこんなふうに語った。

「僕の場合も山岡さんの場合も、犯人は恐らく中に入りいることを確かめたうえで火を放っているんですね。山岡さんの場合も、まだ電気がついていたのを犯人は分かってやったわけでしょう。だからやる方は殺害までは考えていません。脅しのつもりなんですよ。

でも、ガソリンなどを使うと予想以上の火力で、へたをすると全焼して死者さえ出かねない。しかも周囲にまで延焼して誰か死んでしまったら、こちらは被害者じゃなくて加害者になってしまう。だからテロよりも始末が悪いし、卑劣ですよ」〉

(2) 放火は「手加減」が分からんから大事になるとよ

そうなんです。犯人としては想定外なんでしょう。

たとえば、僕の家。外に洗濯機を出していた。そこに犯人はガソリンを染み込ませた新聞紙を投げ込み、フタをした。フタをしたんだから酸素がなくなり、すぐに火は消える。そう思った。他に燃え移るものもないし。中学の理科の時間で習ったでしょう。酸素がないと火はすぐ消えると。それを覚えてたんですね、犯人は。

ところが、フタをしても、すぐには酸素がなくなる。それに、燃え移るものはないと思ったが、洗濯機そのものが、石油から出来る製品なんですね。簡単に燃える。ドロドロになる。さらに、火は生き物ですから、それだけでは収まらん。ドアを焼き、ガラスを割り、天井を焼き、ブレーカーを全焼させ、窓から部屋の中にまで火が入ってきた。

犯人はそんなことまで考えてない。洗濯機のフタをしたんだし、すぐ消えると思った。次の日の朝でも、私が洗濯しようと思ってフタをとる。中が、まっ黒になっている。「アレ? 何だこれは?」と思う。そうすると犯人からの声明文が郵便受けに入っている。ゾーツとする。ビビる。それで、「もう、赤報隊のことは書きません」と悔い改める。あるいは、更に悔い改めて、「赤報隊事件は私がやりました」と警察に自首する。そんな〈政治的効果〉を考えたのだろう。こうなると公安がからんでいるのかもしれない。そういうえば、時効直前で、私の家を張っていた公安が、なぜかこの日はいなかった。あるいは、いても、わざと見逃したのか。犯人の姿を見ていたても、黙っていたのか。そうなると、国家権力がらみの犯罪だ。

まア、可能性としてはありうるが、公安もそこまではやらないでしょう。「赤報隊」のことで放火したと〈声明文〉には書いてるが、他のことで、頭にきて、いやがらせをしたのかもしれない。

さて、山岡さんの方だ。こちらは、もっと悪質だ。牛乳うけから中に入れたんだ。ガソリンのついた新聞紙を。これはひどい。でも、家全体を燃やそうと思ったわけじゃない。普通、玄関といつたら、何もない。まあ、クツが数足あるくらいだ。だから、コンクリートの床にポンと投げ出された新聞紙は、ちょっと燃えるだろうが、すぐに消える。それに中に人はいるんだし、気づくさ。犯人はそう思った。脅しとしては、それで十分だと思った。

ところが、山岡さんの所は玄関に、読み終わった新聞を山と積んであった。それに火がついた。そして、家の中に火は突進してきた。とても自力で消すどころではなくて、山岡さんはベランダ伝いに、隣りの部屋に逃げて、そこから消防署と警察に電話した。マンションに住んでいたんだが、もう、とても住めなくて、引っ越したという。本当に大変だ。

僕は消防署には電話したが、警察には電話しなかった。山岡さんの「手記」にはこう書かれている。

〈鈴木さんの場合は赤報隊絡みとなると自らが警察の捜索を受ける怖れもあるとの判断から警察に被害届も出さなかったという。「山岡さんのように警察を呼んでマスコミにも抗議の意志表示ができる人はうらやましい」とも冗談まじりに言われた。

いずれにしろ、私は今回の放火事件で筆を弱める気はさらさらない。今後もより一層、大手マスコミが報じない重大な疑惑を追及して行く覚悟だ〉

偉いですね。その点、私の方はどうも腰が引けてる。でも、警察には頼らないと思ったとです。自分の手で犯人を見つけ出す。そして、そいつの家に

放火してやる。自衛だ。自衛戦争だ。そう思ったんです。でも、そいつだけを懲らしめようとしても、他の家にも燃え移るかもしれないし、〈加減〉が分からん。それに、どっかの家で「予行演習」してみるわけにもいかん。だから復讐はあきらめました。それに、「こいつがあやしい」「あいつかも」「フリーメーソンかもしれん」と考えたら、頭がパニックになる。それでなくとも弱い頭が、狂っちゃうよ。それで、精神衛生上からも、やめたとです。

警察に言わんかったのは、〈政治的事件〉だと思われたくなかったからです。自分の家ならいいが、アパートです。こんなことがあったら、「又、やられるのでは？」と大家さんは心配します。出て行ってくれ、となります。それが怖かったです。ですから、「全く心当たりはない」「放火マニアじゃないですか」と弁明してました。消防署の人にも、そう言いました。「そういえば、中野は放火が多いから、気をつけて下さいよ」と言われた。

又、警察を呼んで、家中調べられたんじゃ、ガサ入れとかわんない。その上、「これは、自作自演だ」「赤報隊の犯人と思われたくないで、ヤラセで放火した」なんて言われちゃ嫌だし。

…と、いろいろ考えて、警察には届けんかったとです。山岡さんは、その点、偉かです。テレビにも映ってました。警察が現場検証してる所が。又、マスコミに堂々と喋ってました。私も、家を追い出される不安がなければ、記者会見でもやって、堂々と訴えたかった。

でも、そんなことに構わず堂々と、告発したんですから山岡さんの方が偉いです。立派です。私の方は、事故処理のまづさから、今でも、「売名でやったんじゃないか」「赤報隊で逮捕されそうだから、自分で火をつけたんじゃないか」と思われてます。だから、誰からも見舞いの電話やメールはありませんでした。「自業自得だ」という電話があった位で。その点、台風は、「自作自演だ」「ヤラセだ」なんて言われないからいいですね。よくはないか。でも、少なくとも疑われません。

(3)火の怖さについて、ヤマトタケルと野村さんに詳しく聞きましたよ

「火」のことは、実は去年出した『ヤマトタケル』（現代書館）にも詳しく書きました。ヤマトタケルが騙されて野原で放火され、あやうく焼き殺されそうになった時、火打ち石と草薙の剣で救われたというシーンです。火に放りこまれながら、草をなぎ払い、逆に火をつけて、炎の方向を変えるんです。

実際に出来るらしいのですが、我々シロウトには難しいです。たとえば、アパートに火をつけられた時、逆にこっちからも火をつけて、火の流れを変えるなんて。そんで、他の家が全焼したら、又、大変だ。ともかく、消防車を呼んで、消すしかありません。

この『ヤマトタケル』には、野村秋介さんの話も書きました。生前、聞いたんですよ。河野一郎邸を焼いた時の話を。「河野邸に放火した時、どうだったんですか」と聞いたら、怒鳴られましたね。「バカ！放火とは何だ。焼き打ちだよ」と。放火は政治性がない時に使う言葉で、政治的事件の時は「焼き打ち」と言うんですね。知らなかったです。「引きこもり」と「立てこもり」。「自殺と自決」も、同じようだけど違うんです。前者は非政治的。後者は政治的行為です。だから、引きこもり青年も、自宅の窓から、「憲法改正！」と垂れ幕をたらせば、「立てこもり」になります。借金苦でJRに飛び込む人も、「北朝鮮に制裁せよ！」と書き置きをしたら、「自決」になります。ウーン。そんな簡単なもんじゃないかな。

ともかく、野村さんに聞いた貴重な話は『ヤマトタケル』に詳しく書いているので読んで下さい。やはり、「火は生きものだ」といってました。河野邸で、ガソリンをまき、火をつけた。かなり遠くに火をつけたつもりでも、一瞬にして自分に襲いかかってきたといいます。また、事前に、家の人たちを全部、外に出し、その上で火をつけた。しかし、お手伝いさんが腰を抜かして、逃げられない。放っておいたら死んじゃう。仕方ないので、野村さんはその人を背負って逃げたんです。心温まるエピソードですね。その様子がイラストで描かれています。野村さんは人命救助をしたんです。本来なら警視総監賞です。ところが、表彰されるどころか、12年の刑で、千葉刑務所に送られたんです。日本は、放火は重いんです。西欧のように石で出来るわけじゃなく、木と紙の家ですから。だから昔から、放火は一番、重いんですよ。

「焼き打ち事件」の実行者から詳しく話を聞き、『ヤマトタケル』を書いた時に、さらに「火打ち石」「放火」について調べ、さらには自らも放火の被害者になり。…と。だから、いやでも放火には詳しくなったんですよ。9月9日(金)に「山岡さんを激励する会」が開かれましたが、だから、ここでも、山岡さんと「放火対談」をやりました。次の「創」に載るでしょう。あるいは、この対談だけで1冊の本にしてくれないかな。

と、放火の話だけで今回は終わりだ。最後に、再度、「水」と「火」について。

〈華厳は近年、風変わりな評判をかち得た。模倣者が16件をかぞえた〉

これは、「ベルツの日記」（岩波文庫）に出てたんです。ベルツは明治時代に、東大医学部のお雇い教師として日本に来た人です。明治37年7月5日の日記に書かれています。華厳の滝に飛び込む人が流行した時ですな。でも、次は別な流行が生れました。

〈華厳を「流行遅れ」にした。今では、この流行が、もう「水」から「火」に移っているようだ。今の若い連中は、浅間山の噴火口に飛び込んでいる〉

「水から火」と流行は移ったんですね。火をつけられるのは、こりごりなのに、自ら進んで火に飛び込む人もいるんですね。偉いですね。浅間山だけでなく、三原山に飛び込んだ人もいますね。

「華厳の滝」の自殺をはじめ、三原山、死なう団、光クラブ、奥浩平、斎藤和…などの自殺について、朝倉喬司さんが書いてます。『自殺の思想』（太田出版・1900円）です。ぜひ、読んでみて下さい。以前、ライブ塾でも、このサワリを話してましたが…。

『ベルツの日記』は実は、もっと別な所を紹介したかったのですが、来週にでも。それと、放火被害者の山岡俊介さんの本も紹介しつづけます。『銀バエ。実録 武富士盗聴事件』（創出版・1500円）。それと、山岡さんの奥さんは中国人で、とても美人なんだそうです。そのなれそめから書いているラブ・ストーリー『ぼくの嫁さんは異星人』（双葉社・1500円）も面白い本です。感動しました。では又。

【だいありー】

(1) 9月5日(月) 7:00p.m.から、「PARC自由学校」で講演。PARCとは「アジア太平洋資料センター (Pacific Asia Resource Center) の略だ。設立は、30年前で、いろいろな活動をしている。又、実に、多彩な講座をやっている。20以上のコースがある。「世界を知り、日本を知る」コースの中に、「ジャーナリスト入門講座。メディアと権力の真相を暴く」シリーズがあり、その中で私が喋ったテーマは「警察権力を暴く！公安警察と新右翼」。公安とは何か。それに、新右翼とは何か。その両者について別々に話をしてくれということらしい。「両者の関係」ではない。20人以上の生徒さんがいて、熱心に聞いてくれた。終わって、食事会に行き、深夜まで話し込んだ。

(2) 9月6日(火) 12:30 骨法整体。4回も行った。これで完治した。頸椎を治してもらい、本当は一日で治ったんだが、「体がかたいから柔らかくしましよう」と言われて、お言葉に甘えて、もう三回行った。3時間近く、実際に丁寧に整体をしてくれる。頸椎の歪みを治してもらい、首や頭の痛さがなくなった。よく目まいしてたが、それも治った。背中が冷たかったが、血の流れが戻り、温かくなった。

今年は前半、やたら仕事をした。そして、夏は、整体で、身体をオーバーホールしてもらった感じだ。後期も頑張れる。

骨法整体に行ったら、一水会の若者もいる。あれ? どうしたの、と聞いたら、「肩が痛くて。鈴木さんのHPを見てきました」と言っていた。じゃ、これで大丈夫だ。広島にいる人からも電話で、「近くに骨法整体があるんで行ってみたい」と言ってました。ここにいた道場生が広島で整体をやってるんですね。「せひ行きなさい」とすすめました。

(3) 9月7日(水) 格闘技雑誌『アッパー』(vol.4・10月号) 発売。掣圏会師範の桜木裕司選手に僕がインタビューして書いた。桜木選手は、いつも日の丸と日本刀を持ってリングに上がる。愛国者だ。佐山サトルの秘蔵っ子だ。「男の哲学」を聞いた。

(4) 9月8日(木) 今日から河合塾コスモの授業。3時半から現代文要約。5時20分から、基礎教養のゼミ。夜はロフト。7:30から田原総一朗、花田紀凱、矢崎泰久。「いま雑誌をめぐる現実」。第2部(9時から)に出る。斎藤貴男さん、森達也さんとトーク。公安・警察について話す。超満員だった。

見沢知廉氏が前日、自殺したと聞かされて、驚いた。電話がジャンジャンくる。頭がパニックになり、考えられない。ロフトでも見沢氏の話をした。

(5) 9月9日(金) 2:00から、見沢氏の密葬に参加する。やり切れない。7時からホテルリステル新宿で「山岡俊介さんを励ます会」。超満員だった。同じく放火被害者ということで、二人で「放火対談」をやった。二次会で深夜まで。さらに山岡さんと朝まで飲んで話し込んだ。

(6) 9月11日(日) 1:00から骨法道場で「武士道セミナー」。若い人たちで一杯だった。いつも、とても勉強になる。

【お知らせ】

(1) 9月13日(火) 7:00p.m. 高田馬場のトリックスター（ライブ塾）TEL03(5331)3261で、PANTAさん（ミュージシャン）と見沢知廉さん（作家）、そして私のトーク…の予定だった。見沢氏が亡くなりました。トークはやります。PANTAさんと見沢氏の思い出を語り合いたいと思います。

(2) 9月14日(水) 7:00p.m. 高田馬場のシチズンプラザで一水会フォーラムです。講師は時枝松陽氏。タイトルは「今後の政局と日本の進路」です。

(3) 10月11日(火) 7:00p.m. トリックスター。日刊ゲンダイの二木啓孝さんです。「月刊誌の読み方・読ませ方」です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張9月19日

何で死んだんだ！天才作家・見沢知廉氏を惜しむ

(1)三島賞の最終候補にまで残ったのに。でも…

まずは選挙の話から。まるで戦国時代ですね。裏切り、造反、制裁、刺客、くの一（女忍者）が入り乱れ、壮絶な死闘を繰り広げました。そして、「9.11同時テロ選挙」は自民党の圧勝に終わりました。亀井静香は、「日本は大変なことになる」「仲間を殺すことばかり考えている今の自民党は子供の教育にも悪い」と言ってました。

でも、知り合いの鈴木宗男氏、辻元清美氏は当選しました。保坂展人さんも逆転当選しました。よかったです。それと、驚いたのですが、自民党圧勝のあおりでしょうか。自民の井脇ノブ子さんが当選しました。長い間、選挙に挑戦し続け、「もうだめだろう」「もう、やめたら」と周りからも言われてました。それが、やっと当選です。おめでとうございました。

実は、この井脇さん。生学連、全国学協の同志なんです。私の後輩です。犬塚氏、四宮氏、阿部氏などと、民族派学生運動を闘ってきた仲間なんです。

それに、全国学協が出来た時、私は委員長でしたが、井脇さんは副委員長でした。ただ、僕は活動家としては無能で、人望がなくて、1ヶ月で委員長の座を追われました。二代目委員長になったのが吉田良二氏です。とても穏やかで、人望のある人でした。暴力派の私とは対照的でした。その吉田氏は先月亡くなり、8月10日、落合葬場で葬儀がありました。

全国学協がらみで、明暗二つの出来事がありました。全国学協といえば、中央委員をやっていた衛藤晟一氏も、その後、政治家になり、大分から出ていました。しかし、今回は残念ながら落選しました。でも、実力のある人ですから又、返り咲くでしょう。又、友人の小林興起氏も落選しました。その

上、バッシングの嵐です。かわいそうです。

井脇ノブ子さんの話ですが、彼女は、ずっと水泳をやってました。私が生学連（生長の家学生部）の書記長をやっていた時、よく九州にもオルグに行きました。そして、「ぜひ、自治会選挙に出る！」とハッパをかけました。全共闘に対抗するために、我々民族派学生も自治会選挙に打って出ようとしたわけです。それで、10大学以上で勝利しました。井脇さんも大分の大学で自治会委員長になりました。その時から、〈政治〉に目覚めたかもしれません。

生学連は、さらに大きくなって全国学協になり、それが中心になって、全国の自治会をとる。そして、「民族派全学連」をつくる！という勢いででした。長崎大学自治会の犬塚氏が、「民族派全学連」委員長に予定されてました。ところが、日学同との内ゲバで、それは夢と終わりました。

井脇さんは全国学協の活動を続け、その後は「少年の船」をつくったり、静岡で高校をつくったりと活動し、その間、選挙にもずっと挑戦し続けてきました。しかし、落選につぐ落選でした。又、自分の経営する学校で不祥事があり、マスコミで大々的に叩かれました。又、個人的なスキャンダルも写真週刊誌で報じられました。「井脇さんはもう終わった」と皆に思われました。ところが、不死鳥のように復活しました。国會議員になってしまえば、過去の事件も、消えます。「あっ、そんなこともあったな。よく頑張ったな」と、〈思い出〉になります。

見沢知廉氏にとっては、〈過去〉を消してくれるものは「文学賞」だったのです。過去の不運な出来事にも、それで帳尻を合わせられる。そう思ったのです。さて、ここからが本題です。かつては、新左翼過激派にいて、成田闘争を闘い、火炎瓶を投げ、その後、新右翼（一水会）に転向。そこで「スパイ肃清事件」を起こし、12年間刑務所に。出てきて、すぐに『天皇ごっこ』で新日本文学賞をとりました。もう、ただの「殺人者」ではない。作家です。そして、続けざまに、『囚人狂時代』（8万5千部）『母と子の囚人狂時代』『調律の帝国』（三島賞最終候補になりました）を出します。この4冊は新潮文庫に入っています。合計で20万部、出ております。もう、大作家です。

でも、「スパイ肃清事件の見沢」「過激派くずれ」「右翼過激派」というイメージがついて回ります。右翼のプロパガンタの為に、作家の仮面を被っているのではないか。とも誤解されました。ともかく、まだまだ〈本物〉になってないと、本人は焦っていました。「やはり芥川賞をとらなくては」

「その前に、三島賞だ」という思いがありました。又、出版社も、そう言って励ました。本人には、喜びでもあり、プレッシャーでもありました。活動家時代に書きためた、軽く、楽しい原稿もありました。しかし、「それは賞をとってから出しなさい」と言われたのでしょう。あるいは、本人が自制したのかもしれません。

対談、座談会をやり、もっと軽い、楽しいものをセッセと一杯書けばいいじゃないか、と僕は言ってたんですが、「いや、それで終わりたくない」と言ってました。ともかく、大きな賞をとる。その後ならば、何をしてもいい。そう思ったのです。

大学教授を目指す教員も同じでしょう。国会議員を目指す人も同じでしょう。万人が認めてくれる「もの」が欲しい。「印」が欲しい。それを取りれば、あとは、好き勝手などこができる。政治家にだってなれるでしょう。

今、好き勝手なことをやっていたら、三島賞も芥川賞も、どんどん遠ざかってしまう。だから、それはセーブして、ともかく、純文学を書かなくてはならない。そう思い、身を削り、命を縮めて小説を書いてたんです。又、三島賞は、最終候補まで残り、かなり近かったといいます。それさえ取れば、何をやっても許される。過去も〈思い出〉になる。「こんな大変なことがあり、そんな苦労もあったから、今の三島賞作家の見沢がいる」と、皆、言ってくれる。そこでなら、かつての肅清事件も「作品」として堂々と書ける。早くその日がくればいい。そのためにも三島賞だ。

そうプレッシャーをかけられ、自分でも追い込んでいったんです。大変な仕事だと思います。大変な苦悩だったと思います。それに僕らも気づかなかつたわけじゃありません。分かっていました。でも、「強い男」だと思ってました。あの、スパイ查問・肅清事件の時も、全く弱音を吐かない。ビビらない。「冷静な強靭な精神の男」だと思いました。それは、「週刊SPA!」の「夕刻のコペルニクス」でも、何度か書きました。12年間、刑務所にいる時だって、殺した人間を思い出してうなされたなんて一度もないと言います。冷酷なほど強い男なんだ、と痛感しました。だから自殺するなんて夢にも思ってなかったんです。

(2)前日、見沢氏の死を予言した男がいた

最近は、躁鬱病だったようです。いや、12年獄中にいて、そこで拘禁性の躁鬱病になり、大量に薬を投与され、体を壊したのかもしれません。出所してからも、その後遺症で苦しんでました。時には、妄想を語ることもあり、

電話や手紙で、訳の分からないことを喋り、口走ることもありました。

病院にも入退院を繰り返してました。「もう見沢はダメだよ」と言う人もいました。僕も、トークなどに引っ張り出そうとしたことがありましたが、全て、ドタキャンされてしまいました。

最近では、8月23日(火)に、ドタキャンした話を聞いてました。浅草の木馬亭で民族派若手のトークがあり、見沢氏も予定されてました。ところが、「体調が悪い」とのことでのことで、ドタキャンしました。ただ、電話には出てくれて、見沢ファンの女の子と会話をしたりしたそうです。

「ああ、やっぱり」と思いました。だから、9月13日（ライブ塾）だって、ドタキャンされるかもと思ってました。「その時は二人でやりましょう」とPANTAさんに言ってました。当日、「調子が悪い」と電話があるかもしれません…と。ところが、こんな形でドタキャンされるとは思いませんでした。究極のドタキャンです。最後のドタキャンです。

どうせドタキャンかもしれない。なんせ、体の調子は悪いんだもん。と思ってました。又、時々、変なことを口走るということも知っていました。でも、まさか自殺するとは思ってませんでした。そんな可能性は1%も考えませんでした。だって、何度も言うように、「強い男」だと思ってましたし、あの事件で見せた彼の超人的な強さ。精神的強靭さは、ずっと印象づけられてたからです。

今から思うと、強さと弱さの両極端を持った男だったのかもしれません。それに、賞をとらなくてはと、プレッシャーに苦しみ、本当にきつかったのでしょう。そして、マンションの8階から夕陽をみつめた一瞬、ふっと、死を考えたのかもしれません。

9月9日(金)の午後2時から五反田の桐ヶ谷斎場で見沢氏の密葬が行なわれました。家族と、それに新潮社などごくごく親しい人だけが集まりました。私も参列しました。

お母さんが言ってました。「9月13日はとても楽しみにしてたんですよ」と。これで、リハビリのスタートになると思ったようです。「髪も染め直さなくっちゃ。服は何を着ていこうかな。そうだ、新しい服を買わなくっちゃ」と、ハシヤいでいたそうです。

PANTAさんとは以前、対談をして、それが『暴走対談』（（株）コアマガジン）という本の中に入っています。出所直後です。私も対談しています。

ともかく、PANTAさん、そして私に会えるのを見沢氏は楽しみにしてたそうです。だから、当日も多分、靈は降りてきて、参加してたでしょう。私に

は見えました。

そうだ。思い出した。奇妙な体験があったんです。

見沢氏が自殺したのは9月7日(水)の夕方5時半です。横浜のマンションの8階から飛び降りたのです。即死でした。遺書はなかったそうです。

でも、毎日、大学ノートに書き続けていたものがあるそうですから、それは見せてもらおうと思います。

さて、9月7日(水)の夕方に亡くなつたのですが、実は、その時間、正確に言えば、9月7日(水)の午後5時半に、私のところに電話がありました。見沢氏をモデルにした小説を書いている女性作家からです。そして何とも奇妙な、不思議なことを言うんです。「見沢さんは元気?まさか死んでないでしうね」と。

何言ってんだ、この女は、とムッとした。「見沢は元気だよ。ついこの間も電話で話したよ。なんせ9月13日にトークをすることになってんだよ」と私はぶっきらぼうに答えました。それにしても、何で、そんな変なことを言うんだ、と聞きました。

「だって、きのう、鈴木さんが私の夢に出てきたじゃないの」

そんな…。他人の夢に入って行った覚えはないよ。

「突然、私の夢に出てきたのよ。鈴木さんが。そして、『おい、見沢が死んだぞ!って言ったのよ』

何をバカなことをと、笑ってしまいました。

(3)見沢氏は死後も成長し続ける作家だ

ところが次の日（9月8日）の朝、友人に、見沢氏の死を知らされました。嘘だろうと思いましたが、見沢氏のお母さんと話して、本当だと分かりました。さらに、女性作家から電話が来た時間に死んだんです。驚きました。

もしかして、見沢氏が自殺して、その直後に、何らかの方法で、ニュースを知り、私にかけたのか、と思いましたが、5時半よりも電話が来たのは前のようにです。念のため、今、本人に電話して確かめました。事実経過はこうです。

9月6日(火)の夜、夢で私が言いました。「おい、見沢が死んだぞ!」と。「死んだぞ」じゃなくて、「死ぬぞ!」と言ったそうです。「もう見沢はダメだよ。今月中に死ぬよ」と、私が言ったそうです。

9月7日(水)の朝、起きて、はっきりと覚えていたそうです。「ひどい人

だ。鈴木さんは。見沢さんとは親友なのに、そんなことを言うなんて」。そう思い、ポストをのぞくと、私からの手紙が入っていた。「9月8日ロフト」と「9月13日ライブ塾」の案内でした。奇妙な偶然もあるもんだなと思いました。彼女は、午後3時半にタレントの友人に渋谷で会いました。喫茶店に入って、「そうだ。鈴木さんに電話してみよう」と思いました。多分、4時半か、5時位でしょう。まだ見沢氏は生きてました。

そして、「変なこと言わないでよ。見沢は死ぬぞ！なんて言ってたわ」と私は責められました。その直後に、渋谷から遠く離れた横浜で、見沢氏は飛び降りたのです。

「じゃ、俺が見沢を殺したのかよ！」と私は思わず声を上げてしまいました。何も話をつくってるわけじゃありません。見沢氏の氏の直前に女性作家から電話がきたことは電話局の記録を見れば分かるでしょう。そうか。少なくとも何時だったかは、記録に残って、出てくるんだ。又、盗聴している公安だって、ちゃんと話の内容を記録してるでしょう。

それに、この話は、「証人」も沢山います。渋谷から電話した時、隣りにはタレントの女性がいました。その人も、はっきり、証言してました。

実は、その作家とタレントは9月8日(木)のロフトに来たのです。終わって、近くの「ルノアール」で詳しく聞きました。その場には、「創」「WAVE出版」「家の光」の編集者もいました。だから、本当のことです。マスコミ関係の証人もこれだけいるのですから。

しかし、不思議ですね。それだけ、その女性作家が見沢氏と深く精神的に結びついてたのでしょうか。あるいは私に予知能力があったのでしょうか。前の日に分かっていたら、横浜に駆けつけてやればよかったのにと、悔やまれます。

9月8日のロフトでは、斎藤貴男さん、森達也さんと、警察、公安の話をしたのですが、前半は見沢氏の話ばかりになってしまいました。

又、9月9日(金)は、「山岡俊介さんを励ます会」でしたが、やはり、見沢氏の話ばかりになりました。

9月13日(火)にPANTAさんと会った時もそうでした。見沢氏のビデオも流しました。2002年3月17日にフジテレビの「新・平成のよふけ」に出た時のビデオです。鶴瓶、ナンちゃんと一緒です。話してる内に、いきなり、ナンちゃんの頭をポカリとやっていました。「昔はこんな風にヤキを入れられたんです」と、頭をポカリです。ナンちゃんもムッとしてたんでしょうが、そこはプロ。本番中だし、こらえて苦笑いしてました。

見沢氏と最後に会ったのは6月10日(金)の夜でした。椿山荘で池内ひろ美さんの『妻の浮気』(新潮社)の出版記念会があり、そこで会ったんです。一緒に撮った写真を載せときましょう。この時は元気一杯でした。そのことは、このHPにも書きましたね。その椿山荘で、9月13日(火)のトークのことが決まったのです。自分から、やりたいと言い出したのです。「でもお前はドタキャンの名人だからな」と私が言ったら、「必ず行きますよ」と言う。でも私は不安だったから、「じゃ、PANTAさんと三人でやろう」と提案したのです。これだったら、もし見沢氏が来れなくても、PANTAさんと二人でやれる。そう思ったんです。その時、来れたら、じゃ、次は二人でやろう。そう思ってたんです。



でも、9月13日はやっぱり見沢氏は欠席でした。ドタキャンは予測してたけど、こんな形でのドタキャンは予測してませんでした。ましてや、前日に、「見沢は死ぬぞ」なんて予言するはずはありません。

新潮社の人が言ってましたが、これから、さらに何冊か見沢氏の本が出るそうです。又、他の人たちも書くようです。私も、書きたいです。又、一水会でもレコンキスタに載せたのをまとめようという話もあります。さらに、対談、トークなども、まとめて出るでしょう。DVDなども。

ですから、これからもますます成長し続ける作家です。

ここで最新情報です。

10月3日(月)7:30p.m.より、ロフトプラスワンで「見沢知廉追悼トーク」をやります。見沢氏と付き合いのあったビッグな人々が皆、出でくれます。

又、10月7日(金)発売の小説『新潮』(11月号)に、見沢氏の遺作『実存の愛情省』が掲載されます。作品社からは見沢氏の『ライト・イズ・ライト』が近々出版される予定です。見沢氏について書かれた本も、出るそうです。

【だいありー】

(1) 9月13日(火) 7:00p.m. トリックスター。PANTAさんと見沢知廉氏の思い出を語る。「新・平成のよふけ」に出演した時の見沢氏のビデオも上映する。塩見、雨宮さんはじめ、見沢氏を知る人も多く駆けつけてくれ、思い出を話してくれた。ともかく凄い作家だった。これからますます活躍が期待されたのに…と、皆、残念がり、悔しがっていた。

(2) 9月14日(水) この日発売の「週刊新潮」(9月22日号)の「墓碑銘」のページに見沢氏のことが出ていた。又、福田和也氏の「闘う時評」のページにも「作家が死んだ」と題し、書いてた。いい文章です。

7:00p.m.、高田馬場シチズンプラザで一水会フォーラム。講師は時枝松陽氏。今回の自民圧勝の結果を踏まえての講演。「今後の政局と日本の進路」。終わって二次会では、見沢氏の思い出を各々が語り合いました。

(3) 9月15日(木) 朝、東中野ポレポレ座で映画「山中常盤」(やまなかときわ)を見る。河合塾コスモで授業。「基礎教養ゼミ」では、朝倉喬司さんの『日本の自殺』(太田出版)を読みました。当然、見沢氏の話が中心になりました。

(4) 9月16日(金)、17日(土)、東中野ポレポレ座で映画「歌舞伎役者・片岡仁左衛門」を見る。全6巻(10時間)のうち、4巻を見た。

(5) 9月18日(日) 5:30p.m.より後楽園函徳亭で「関博明さんを偲ぶ会」

【お知らせ】

(1) 「だいありー」でも書きましたが、現在発売中の「週刊新潮」(9月22日号)の「墓碑銘」に見沢知廉氏のことが載っています。読んでみて下さい。福田和也氏の「闘う時評」も、見沢氏の作家、作品論に踏み込んで書いてます。

(2) 10月3日(月) 7:30p.m.からロフトプラスワンで、「見沢知廉氏追悼トークライブ」を開催します。見沢氏ゆかりの人々が総結集し、思い出を語ってくれます。

(3)10月7日(金) この日発売の小説『新潮』に見沢氏の遺作『実存の愛情省』が載ります。

(4)10月11日(火) 7:00p.m.、高田馬場のライブ塾（トリックスター）です。日刊ゲンダイの二木啓孝さんです。「夕刊紙の読み方・読ませ方」です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張9月26日

『街道をゆく』全43巻を読破した！

= 「やさしさ」と「謙虚さ」こそが日本精神だよ=

(1)貧しく、逆境だから勉強は出来る

逆境だから出来る、という事がある。貧乏で、仕事がないから毎日、図書館に通って勉強した。事件に巻き込まれて刑務所に入った。そこで集中して本を読み、小説を書いた。俳句を詠んだ。あるいは、病気で入院し、その時に本を読みあさった。…etc

もし、お金があって、生活も毎日が楽しくて、友達もいて、メールや携帯に忙しく、夜は毎日、楽しく酒を飲み…。そんなハッピーな人達は、本を読まない。読めない。精神的・思想的営為はないのだ。

このHPを毎週読んでるという青年がいる。貧乏だからパソコンはない。漫画喫茶で見て、プリントアウトして保存している。ありがたいし、嬉しい。体調を壊して入院したという。その時に、トルストイを全巻読んだという。いいことだ。そんな時でもないと、読めない。全集を読むと、ひとつの「世界」を征服した、理解したと思う。自信もつく。この山を征服した。他の山にも登ってみたいと思う。

毎日が順調で、友達と遊んでいたら、本も読めないし、ものも考えない。こう考えると、病気や入院も、「逆境」ではなく、人間的に大きくなる為の踏み台だ。

野村秋介さんは、「獄中にいたから、集中して俳句をつくれた」と言っていた。他の欲望は始めから諦めている。友人に電話も出来ないし、酒も飲みにも行けない。ないない尽して、かえって、一つの事に集中できる。つまり、選択肢が多すぎると、何も出来ないので。獄中は、あらゆる選択肢・可

能性を奪う。逆境だ。だからこそ、集中し、本を読み、考える。俳句もつくれる。

「外に出ると忙しくて、俳句を作ってる暇がないよ」と野村さんは言っていた。『銀河蒼茫』など、野村さんの俳句は、ほとんどが獄中で作られている。「いや、全てがそうです」と野村さんの秘書だった蜷川正大氏は言っていた。

「決定版・三島由紀夫全集」（新潮社）の第32巻を読んでたら、「俳句と孤独」という文章があった。野村さんの為に書かれたような文だった。

〈永患ひの病者や囚人などの作った短歌や俳句にはよく、感動的な作品が現はれるが、小説や戯曲の制作には自由な時間も精力も要るから、かういふ不幸な人たちの魂の叫びが、短章のうちに凝結する点では、日本伝統の短歌に如（し）くはないのであろう〉

小説はムリだと言ってるが、見沢知廉氏は、そのムリな逆境の中で、小説を書き、応募し、『天皇ごっこ』で新日本文学賞に入賞した。そして出獄して、作家になった。『母と息子の囚人狂時代』（新潮文庫）にその様子は詳しく書かれている。

連合赤軍事件の植垣康博氏は、獄中に27年いた。その時に、名著『兵士たちの連合赤軍』（彩流社）を書いた。又、素晴らしいペン画を沢山描いた。しかし、出獄してからは、まとまった本を書いてない。「外にいると、仕事が忙しくて。それに酒も飲まなくちゃならないし」と言っていた。スナックをやっているから、仕方ないのかもしれません。さらに、最近は33才年下の中国美人と結婚した。ハッピーだ。幸せすぎて本なんか読んでる暇はない。ますます書けない。「飲み屋なんかやめて、本を書きなよ」と私は言っているが、出来ないようだ。

再び、俳句の話だ。三島由紀夫は、先の文に續いてこう書いている。

〈問題は俳句の制作に当って、いかにして五七五の形式にむりやり押し込められたという緊迫感が得られるかといふことである。俳人すべてが病者であり囚人であるわけには行かないけれど、ただの手なぐさみの俳句ではいつまでたっても素人の遊びにすぎず、その俳人の心の中に、五七五という檻（をり）にふさわしい限界状況がひそんでゐなければならぬ筈である。孤絶の魂がひそんでゐなければならぬ筈である。〉

何か決して人に向って云へない秘密の俳句のみが心の小さな窓であるやうな、そういうふ状況を俳人の心に想像するのは、私があまりに小説家の想像力

であらうか〉

そうか、五七五というのは檻（おり）なのか。それ自体が牢獄なのか。その中に、いかにして自分の思いや、怒りや悲しみ、叫びを入れるか…だ。そして、ガチャリと鍵をかける。そこに我々は凝結した人生を見る。さすがに三島は鋭いと思った。

では、そんなふうにして作られた野村秋介さんの句を少し紹介しよう。

枕には冬の夜空をつめて寝る

陽炎の巨大なる罠 逃げられぬ

轟然と秋の落日 宙にあり

俺に是非を説くな 激しき雪が好き

昂然とゆくべし 冬の銀河の世

世の虚妄青葉光るを信ずるのみ

憂憤を秘めて さみしき冬の虹

(2) 『街道をゆく』には司馬遼太郎の作家生活の三分の二が注がれている

獄中体験は不幸な体験だ。逆境だ。でも、それがあったから、野村さんも、見沢氏も、植垣さんも、自分を見つめられ、集中でき、立派な作品を作れた。病院でトルストイを読み続けた青年にしても同じだ。

だからといって、刑務所に入り、入院した人が全て詩人になれ、作家になれるわけではない。むしろ少数だ。逆境において、それを生かし得る孤絶の魂を持つ者のみが、詩人や作家になれるのだ。

私だって、貧乏だから本を読める。友人がいないから、本が読める。逆境だから勉強ができるのだ。今、引用した三島全集は全43巻だ。中野図書館から借りて読んでる。高くて、とても買えない。買ったら20万円以上だ。たとえ、印税がガッポリ入り、無理して買ったとしても、みやま荘には入らない。無理して、部屋に入れたとしても、それで安心して、多分一生読まないだろう。これは確実に言える。昔は、小銭のある奴が、家を新築した時に、よく、世界文学全集や百科事典をズラリと並べていたものだ。いわば「家具」「インテリア」として並べた。あるいは、インテリと思われたいという「見栄」の為に。でも、誰も読まなかった。一冊も読みはしない。

同じことだ。三島全集43巻がズラリと並んでいたら、一生読まんよ。せいぜい友達を呼んで、「ほらほら、凄いだろう」と自慢する位だよ。

だから、貧乏でよかった。貧乏だから、読める。今、22冊読んだ。もう半分以上だよ。図書館から借りてるから、2週間で返さなくちゃならん。だから、必死で読む。大事な所や感動した所は大学ノートにメモをとっている。

そうそう。8月の下旬に、知り合いの人たちが誕生パーティをしてくれた。その時、何と、三島全集の41巻をプレゼントしてくれた。これは、「音声（CD）」の巻だ。箱入りの本になってるが、CDが7枚ほど入っている。「英靈の声」など、三島が朗読したCDが入っている。高いものだ。ありがたい。これも私が貧しいからだろう。

あるいは、このHPを読んでいて、「図書館ではCDの41巻はないだろう」と思って、下さったのかもしれない。ありがたい。

前にも書いたが、全集は後ろから読んでいる。「対談」「書簡」「詩歌」「評論」「戯曲」と読み進んでいる。これからは小説の部だ。「短編」と「長編」と進んで行く。

「新潮現代文学全集」（全80巻）の方も、進んでいる。今、66巻まで読んだ。今まで全く知らない作者や作品も読んだし、随分と勉強になった。これを契機に、その人の作品を他にも読んだ。

残りは14巻だ。もう一息だ。最後は、濃いのを残している。島屋敏雄「死の棘」、司馬遼太郎の「燃えよ剣」、遠藤周作の「沈黙」、高橋和巳の「我が心は石にあらず」、柴田翔「されどわれらが日々」などだ。私の青春時代に読み、感銘を受け、大きく影響された作品たちだ。今、読み返してみて、又どんな衝撃を受けるのか。楽しみでもあり、又、怖い。だから、最後にとっておいたのだ。

全集では、最近読破して、達成感、充実感があったのが、司馬遼太郎の「街道をゆく」（全43巻）だ。読んだのも多いが、再び通読した。中野図書館のを借りたが、ない時は他の図書館から借りた。それでもない時は、本屋で買って、43巻を読んだ。

これは実に多くのことを教えられた。凄い本だと思った。ある意味では、司馬の〈全て〉が注ぎ込まれている。

本当を言うと、読む前は、ちょっと嫌だった。苦痛だった。面白そうな所だけ、2、3巻読んでみようかと思っていた。でも、どうせ読むなら全43巻を読まなくちゃならんだろうと、「ノルマ主義」「完全主義」の私は思ったわけだ。それにしても、司馬は、こんな旅をしてエッセーを書くよりも、

ちゃんと小説を書けよ！と思った。司馬には、『龍馬がゆく』『燃えよ剣』をはじめ名作が多い。それなのに、小説も書かないで、『街道をゆく』でもないだろう。あるいは老人になって、小説を書けなくなつたから、こんなエッセーで誤魔化してゐるのかな、とも思った。

ところが、違つた。私の誤解だった。勘違いだった。何度も言うように、ここに司馬の〈全て〉があった。

〈もしも後に、私の仕事で残るものがあるとすれば、それは、『街道をゆく』かもしれない〉

そう司馬は語つてゐる。

1971年（昭和46年）1月1日号から連載は開始された。「週刊朝日」だ。三島事件の1ヶ月後から始つたのだ。何かの因縁かもしれない。あるいは、司馬にも期するものがあつたのか。そして、1996年（平成8年）3月15日号まで続く。25年2ヶ月だ。連載回数1147回、訪ね歩いた街道は70。そして25年の歳月は、何と作家生活の中の三分の二を占める。文字通りライフワークだった。取材ノートは100冊が残つてゐる。

そうか、作家生活の三分の二か。と驚いた。じゃ、これを読んだら司馬のほとんど全部が理解できる、ということだ。

「全巻」を読破すると、「やつた！」という達成感がある。征服感がある。と、同時に、緊張の糸がプツンと切れてしまつたような虚脱感がある。もう半分だ。あと10冊だ。あと3冊で全巻読破だ！という時には、人生の張りがある。読んだ後に、ペンテルの赤のサインペンで印をつけてゆく。丸が一つずつ増える。それが嬉しい。

ところが達成してしまうと、達成感と共に、「あれっ、もう読むものはないのか」と思う。本当は、他に読むものはいくらでもあるんだけれど、このシリーズは終わってしまった。淋しい。全巻読破するたびに、こうしたアンビバレンツな感情を抱くのでありますよ。私は。

ところが、『街道をゆく』は、附録がある。

Part2がある。ビデオが出てゐるのだ。NHKスペシャルで以前やってた。司馬が亡くなつた後、司馬が書いた街道をNHKのスタッフが再訪問してゐるのだ。そして司馬の「歩いた道」を紹介している。その時も見ていたが、こうして43巻読破したあとで、再びビジュアルで見るのも悪くない。これは1期が12巻、2期が24巻、計36巻出でている。今、中野図書館から1巻ずつ借りて見ている。

さらに、このビデオ撮影の旅を元にした本が出ている。『司馬遼太郎の風景』（NHK出版）というのが、本の名で、全10巻ほどある。だから、まだまだ楽しみ方がある。47巻の「復習」をしているようだ。

(3) 『韓（から）のくに紀行』には、学校で教わらなかつた感動的な話が書かれとつた

さて、ビデオ第1巻の「河西のみち。韓（から）のくに紀行」を見ていた時だ。アレッ、と思った。こんな箇所があつたっけ、と思った。43巻を読破したと思ったら、もう前の方は忘れている。ビデオで衝撃を受けた部分は以下だ。

韓国のまん中ほどに、倭館（Wae-gwanウェガン）という町がある。何故、韓国で、日本を表わす「倭」があるのか。実はここは、豊臣秀吉の朝鮮の役の時に、日本の兵站基地になっていた。憎たらしい日本の侵略を忘れないように名前を残してるのである。しかし、それだけではない。（あとで知ったが、併合した後に日本が付けたという）。

ここで戦った日本の武将のうち、降伏し、ここに住んだ人がいる。えっ、そんなこと、日本の歴史じゃ習わんかった。兵三千人を率いる日本の武将が朝鮮側に降伏した。のち、武功を重ねて王寵をこうむり、武官ながら二品という大臣相当の官位にまでのぼり、土地を賜り、その族党や家臣が村をなし、その子孫が無事泰平の世を楽しんでいる。そして、今もいるのだ。

『慕夏堂記』という記録によると降伏した武将は、「日本義士。…姓沙名也可」とある。沙という姓で、也可という名だという。沙也可（さやか）だ。不思議な名前だ。さやかなんて、まるで現代日本の女の子のようだ。もしかしたら、降伏する時、恥じて仮名を言ったのか。ハンドルネームを名乗ったのか。あるいは、朝鮮に信服し、朝鮮式の名前に改めたのか。

ここで、原文で確かめてみた。実は図書館にはどこもなくて、紀伊国屋で買った。1階の奥の小説コーナーには単行本もあるし、又、ワイド版もあるし、2階には文庫本もある。『街道をゆく』の2巻だ。「韓のくに紀行」だ。これは、日韓関係を考える上で、実にいい本だ。民族と、そして国際性について考えさせられた。「さやか」について、こう書かれている。

〈主人公の名は沙也可（サイエガ）という。沙也可とは日本名を朝鮮漢字に音（おん）だけうつしたものだが、サヤカなどという日本名はちょっとありそうにない。

サヤカ。朝鮮音でいうとサイエガ。サエカに似る名なら、たとえばサエモ

ンと考えるとどうだろうか。左衛門。可は筆記する場合に門とよくまちがう。初めはおそらく「沙也門（サイエムン）」とでも書かれていたにちがいない〉

これが司馬の推理というか解答だ。では、彼は誰か。加藤清正か小西行長の部下だったのか。いろいろと推測する。それに驚くのは、沙也可は、戦に敗れて、捕虜になって投降したのではない。「史記」に出てくる李陵などとは違う。沙也可は、朝鮮の儒教文化に心酔し、信奉しており、朝鮮に着くやいなや、自分から投降したのだ。部下3千人を連れて。その後は、朝鮮のために、日本軍と戦っている。その当時、武将でこれほど中国や朝鮮の儒教文化に心酔してた人がいたのか。驚きだ。

そして、今も、友鹿洞（うろくそん）という村に、沙也可の子孫は住んでいる。村ごと日本人の子孫なのだ。人口は600人余り。そして他の土地に移った人もいるから、韓国全土ではおよそ、2600世帯、8000人だという。

司馬は、その村をたずねる。沙也可から数えて「14人目」という人もいる。イルボン・サラム（日本人）が珍しいのか近くの村からも人が集まる。威厳のある老翁が近づいてくる。村のおばさんは翁に説明する。「この村がかつての日本武士の村であるというので、このイルボン・サラムたちはやってきたのだ」という意味のことを。

〈それに対し、老翁ははじめて口をひらいた。低い声であった。
「それはまちがっている」〉

エッ？ 日本人の武士が作った村じゃないのか。と思ったら、「間違っている」の意味が違う。ビデオで聞いた時は感動して、胸が熱くなった。だから本から書き移してみる。

〈「それはまちがっている」
と、老翁はゆったりとした朝鮮語でいうのである。「それは」というのは、そういう关心の持ち方は--という意味であった。

「こっちからも日本（むこう）へ行っているだろう。日本からもこっちへ来ている。べつに興味をもつべきではない」

と、にべもなくいったのである。
ミセス・イムの通訳がおわると、私はそのにべのなさが可笑（おか）しく、声をあげて笑ってしまった。老翁がわれわれに語ったのは、それだけであった。言いおわると老翁は私の顔を見て、はじめて微笑した〉

いい場面だ。いい文章だ。ビデオで見ても、ナレーションがいい。名文だ

と思った。お互いに、行ったり来たりしている。特別なことではない。当たり前だ。そんなことにわざわざ関心を持つのがおかしい…と。いいね。こういう、にべのなさは。民族の謙虚さが現われている。

さらに、この本で、もう一つ、感動的なシーンがあった。ビデオで見て、やはり、「あれ？こんな文があったっけ」と思い、司馬の本を探してみたのだ。

かつて、日本は百濟（くだら）を助けるために、海を越えて行った。ところが敗れた。そのことは日本史で習って知っていた。しかし、それだけだ。その時、日本では百濟人を大量に受け入れ、かくまったくなんて知らなかつた。又、その人たちを祀る神社が今もあるなんて。

663年。鬼室福信は百濟再興のための救援軍の派遣を日本に頼んだ。依頼を受けて百濟に

向かった日本の派遣軍は、唐の水軍に待ち伏せされ、またたく間に全滅した。白村江（はくすきのえ）だ。

ところが、鬼室集斯（きしつ・しゅうし）の墓が日本にある。鬼室福信の子か、甥か。滋賀県福生郡日野町小野にある。そして、「鬼室神社」もある。ビデオでは、そこでのお祭りの様子などが映し出されていた。司馬は、そこを訪ねる。千数百年という長い歳月、百濟の亡命者を祀る。彼らは神社になって護持されている。命日には今も、この神社で祭礼が行なわれている。司馬の文を引こう。

〈鬼室集斯。福信の子か、あるいは甥か。いずれにしてもその一族で、百濟国の王族の生き残りである。日本の水軍が白村江で潰滅的打撃をうけ、百濟の独立運動が敗北したとき、敗残の現地日本軍は百濟人たちを大量に日本に亡命させるべく努力をした。さらには当時の天智天皇政権は国をあげてかれら亡国の士民を受け容れるべく国土を開放した

日本歴史の誇るべき点がいくつかあるとすれば、この事例を第一等に推すべきかもしれない〉

いいねー。本当に第一等の歴史だ。こんな、やさしさが日本精神だ。そして寛容さだ。そんな日本を私は好きだ。それを否定しては、日本精神はない。胸が熱くなった。

【だいありー】

(1) 9月18日(日) 午後5時半から、後楽園函徳亭で「関博明さんを偲ぶ会」。元赤軍派の人で、55才で癌で亡くなった。会場の近くで、老人がお巡

りさんに道を聞いている。「もしもしし函徳亭はどこですか。赤軍派の人の追悼集会があるんですが…」。誰かと思ったら塩見孝也さんだった。「何してますか。僕が案内しますよ」と連れて行った。それに、この会場は、本人も出版記念会や白船残念会で何度も使っている。ボケたのか。バカだね。それに、すぐ権力に依存しようとする。いかんな。数年前、ロフトで集会があった時も、「いやがらせのファックスがきた！」といって、何と警察に電話していた。バカだね。

会場には、赤軍、京浜安保、ML派、連合赤軍の人たちが総結集していた。「部外者」は私だけだった。植垣康博さんも来ていた。10月に子供が生まれるそうだ。男の子だと分かった。だから、「植垣連赤」と付けた。いや、違った。「植垣龍一」と付けた。中国の黒龍江から取ったという。右翼の元祖・黒龍会にちなんだのかもしれない。龍二、龍三…と次々と生まれるだろう。

亡くなった関さんだが、時間を全く守らなかったと仲間が証言していた。約束しても、2時間、3時間は遅れる。約束を忘れてることも多い。「これでどうやって世界同時革命なんか出来るんだ」と言う。そうだよね。「同時」といっても皆、時間が違うんじゃ、出来っこない。

塩見さんもよく遅れてくる。「遅いですね」と文句を言ったら、「ウルセー！俺は反帝国（定刻）主義者だ！」と言って威張っていた。

しかし、妬み会では、左翼過激派の錚々たる人が集まっていた。15年の時効を逃げ切って自由の身になった人。パトカーに追わされて160キロでふっ飛ばして、一方通行を逆進し、そんでパトカーを振り切った人。武勇伝の数々が披露された。うらやましい。最後に何故か私が指名されて、締めの挨拶をさせられた。

関さんは55才。それに、見沢氏は46才。他にも若くして逝った人がいる。年若い人が死んでゆくのは悲しい。だから、私は言ってやった。「かわるものならば…」おっ、鈴木も殊勝なことを言ってるな、と皆、注目した。だから、続けた。

「かわるものならば…塩見さんにかわってもらいたかった」

ここで会場は爆笑。大ウケだった。一番前にいた塩見さんが、「お前がかわるんじゃないのか！」と噛みついてきた。いえいえ。大先輩を前にして、私ごときではおこがましい。

(2) 9月19日(月) 東中野図書館で一日中、勉強。

(3) 9月20日(火) 不破哲三『私の戦後六〇年』(新潮社)の書評を頼まれたので、書いて送る。いい本だった。もしかしたら、共産党は日本で一番の愛国政党かもしれない、と思った。夜、久しぶりに講道館で稽古。

(4) 9月21日(水) 原稿が多くて、徹夜で書いてた。朝方、寝ようとしたら、「みやま山荘」の改修で大工さんが入ってて、うるさくて寝れない。そのうち、ヘリコプターの音がする。機動隊のスピーカーが聞こえる。大きな鉄球が運び込まれる。いかんな、ウトウトとしてるうちに、変な夢をみちゃったわい。夜、志の輔さんの落語会に行く。

(5) 9月22日(木) 河合塾コスモの授業。

(6) 9月25日(日) 「生長の家」の講演会に行って真理の話を聞く。夜、ポレポレ東中野で、「歌舞伎役者・片岡仁左衛門」の第5部を見る。

【お知らせ】

(1) 今発売中の月刊「TIMES」(10月号。月刊タイムス社)に「『楯の会』はいまだ風化せず」を書いた。

(2) 「反コンピュータ通信」(コンピュータ合理化研究会)の9月号に私のインタビュー記事が載った。「あの人に聞く!」の42回だ。以前、沢口ともみさんも載っていた。

(3) 今出ている「週刊新潮」(9月29日号)に「自公圧勝の『困った後遺症』」が特集されています。「男にしか見えない」井脇ノブ子さんも出ています。先週紹介しましたが、私が全国学協委員長の時、彼女は副委員長でした。「ニュースステーション」にも出てたようで、関口君が知らせてくれました。「凄い人ですね」と驚いていました。そうです。凄い人です。でも当選して本当によかったですね。彼女のことは楽しいエピソードが一杯あるんで、又、書きましょう。

(3) 10月3日(月) 7:30p.m.よりロフトプラスワンで、「見沢知廉氏追悼トークライブ」があります。見沢氏の単行本『ライト・イズ・ライト』(作品社)の見本誌を何とか間に合わせて、この日に売ると言ってました。楽しみです。

(4) 10月7日(金) この日発売の小説「新潮」に見沢氏の遺作『実存の愛情省』が載ります。

(5)10月11日(火) 7:00p.m.高田馬場のライブ塾（トリックスター）で、日刊ゲンダイの二木啓孝さんとトークです。テーマは「夕刊紙の読み方・読ませ方」です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張10月3日 義経ブームですよ

(1)凄いね。牛若丸と母の物語なんだけど…

「中山常盤（やまなかときわ）」と「歌舞伎役者 片岡仁左衛門」はよかったです。映画ですよ。うちの近くのポレポレ東中野でやっている。10月14日(金)までやってるから興味のある人は見たらいい。（あ、評判がいいんで続映が決まった！）

久しぶりに感動的な映画を見た。そして勉強になった。大体、勉強になる教養的な映画って少ない。刹那的、無意味な面白さだけを求めるものが多い。その点、ここの劇場や池袋文芸座、ラピュタ阿佐ヶ谷などは、時々、オッ！と思うものをやっている。

一般的のアホな客に媚びないという事は、一般の人から見て、「こんなの誰が見るんだ」と思う映画も多い。ということだ。ポレポレ東中野は特にそうだ。何でこんなマイナーで、誰も見ないような映画ばかりを集めて上映してるんだろうと思う。ところが、時々、ビックリするような企画をやる。そして、ハッと気がついた。「中山常盤」にしろ「片岡仁左衛門」にしろ、素晴らしいと私は思い絶讚したが、関心のない人から見たら（多分そういう人が多いだろう）、「誰がこんなものを見るんだ」と思うんだろうな。主客逆転だ。

まず、「中山常盤」だ。牛若丸と常盤御前の物語だ。母と子の物語だ。NHKの大河ドラマ「義経」を見てる人なら知ってるよね。じゃ、「中山」は何だ。これは美濃の「中山宿」だ。そこで常盤は大事件に遭遇する。それを巡って母と子の、語るも涙、聞くも涙の物語が始まる。

この映画はアニメだ。といっても、今のアニメではない。大昔に描かれた

アニメだ。つまり、絵巻物なのだ。近世初期の絵師・岩佐又兵衛が画いたもので、全12巻。全長150メートルに及ぶ極彩色の豪華な絵巻物だ。それを全部見せる。それで2時間。説明があるだろう、と思うかもしれないが、説明は淨瑠璃の語りだ。よく聞き取れない。字幕スーパーも付かない。「分からん人はいいよ」「関心のない人は帰っていいよ。分かる人だけ見て下さい」といった感じの、突き放した映画だ。そこがいい。一般のアホな客に全く媚びない。学校の授業のようだ。そうさな、美術館で絵を見ている感じかな。日本の美術館なら、説明があるが、例えばルーブルとかエルミタージュに行ったと思いねえ。日本語の説明なんかない。でも、いいものはいい。美術品に、芸術に酔うだろう。それと同じだ。

よく分からなくても、必死に淨瑠璃を聞けよ！それで少しでも理解しろよ！という姿勢なんだ。私はよく、国立劇場に文楽を見に行く。淨瑠璃を聞く。でも、イヤホンガイドを借りて聞いていて、それで、やっと分かる。中には、台本を買って、淨瑠璃を聞いてる人もいる。こうなると「楽しみ」というより「勉強」だ。いいことだ。いくつになっても勉強です。

山中常盤を見ながら、あれっ、これは（一部分だが）、テレビでやってたよなと思った。NHKだったのかな。いやいや、12チャンネルの「美の巨人たち」だったと思う。30分だから、絵巻物を少し紹介し、あとは、丁寧に説明している。それを思い出した。それに比べたら、映画は全く不親切だ。でも、こういう高踏的、耽美主義的なものがあってもいいだろう。

さて、この絵巻物のストーリーだ。そんなの誰でも知ってるよ、と思うかもしれない。しかし、僕らが知ってる「牛若丸と母」の物語とは、ちょっと違う。

牛若丸は、鞍馬寺を抜け出し、平泉に行く。藤原秀衛の館へ迎え入れられる。一方、京にいる常盤は、牛若が鞍馬寺から失踪したと聞き、心配する。そんな時、平泉の牛若から手紙が届く。安心したが、でも、はやる気持ちを抑え、わが子に会いたさに平泉に向けて出立する。侍従の女一人を連れて。

ところが美濃の国、山中宿まで着いた時、長旅の疲れで病に臥せってしまう。そこに美しい着物に目をつけた盗賊どもが宿に押し入り、二人の身ぐるみをはがしてしまう。常盤は、「肌を隠す下着だけでも残すのが人の情け。さもなくば命も奪え」と叫ぶ。ならば、と盗賊は命を奪う。常盤も侍従も丸裸にして、殺してしまう。乳もたわわに出し、そこが真赤に鮮血で染まる。そこがリアルにグロに描かれている。凄絶だ。絵物語で、よく、ここまで描いたものだ。

女二人だから、着物を奪い、殺すだけじゃない。その前に犯したのだろう。しかし、そこまでは描いてない。さて、牛若は、胸騒ぎがして、京に旅立つ。途中、偶然にも山中の同じ宿に泊まる。夢で母が現われ、「あだ討ちをしてほしい」と告げる。宿の主人からこのことを聞き、宿の女房の助力で盗賊をたばかり、見事6人の盗賊を討ち取る。母の仇を討ち、供養をする。めでたし、めでたし。というお話だ。この盗賊を殺す場面も凄い。残酷だ。グロテスクだ。でも迫力がある。

はい、おしまい。と、ここで終わってもいいんだが、皆はアレッ?と思うだろう。だって、一般に知られている「牛若丸の母」の話は違う。だから、一般が嘘で、これが実話です。と言いたいところだが、一般の話の方が本當だ。

本当は、常盤御前は、平家に捕らわれ、平清盛の女になる。盗賊に殺されるよりも、こっちの方が残酷かもしれません。清盛の妾になることで、三人の子供を助けたといわれる。だから、頼朝、義経は生き延び、平家を討つことが出来た。

常盤は清盛の妾になっただけではなく、その次は、お公家さんのものになった。清盛があきたので、下取りに出したのかもしれません。牛若（義経）にしたら、いやだろうね。いくら自分たちを助ける為とはいながら、こんな淫乱なお母ちゃんでいいものだろうか。だったら、いっそ自害してくれよ。と、多分思ったんでしょうな。

そんな牛若の心が反映したのが、この絵巻物でしょう。私は、そう思いました。と同時に、作者・岩佐又兵衛の〈母への思い〉も込められていたのであります。

(2)安徳天皇は本当は生きていたんよ

岩佐又兵衛の父は、織田信長に叛旗をひるがえした伊丹有岡城の城主、荒木村重なんです。城は信長によって攻め落とされ、又兵衛の母たちを含め、一族郎党600余人が処刑されたのです。これ又、凄いことです。ひどい話です。ただ一人、乳飲み子だった又兵衛はひそかに助け出され、無事成人して、絵師になるのです。

「この絵巻を見ると、斬殺された母への又兵衛の思いが込められているように思えます。私は絵巻に込めた又兵衛の想いも表現したいと思いました」と、この映画の監督・羽田澄子は言ってます。

自分の母が殺された場面を、直接には描けないので、他の話に仮託して描

いたのかもしれません。又、仇討ち出来なかった自分にかわり、義経に仮託して、仇を討ってもらったのかもしれません。同時に、常盤への反撥や皮肉もあったんでしょう。自分の母は斬殺された。それなのに常盤は敵に殺されず、憎むべき敵の大将に身体をまかせて、妾になった。なんだこれは。許せん。こんな女は死んでしまえ！ そう思って絵巻物の中で、裸にし、乳丸出しにし、なぶり殺しにしたんでしょう。そう、あの絵巻物の盗賊は実は、岩佐又兵衛その人なんです。と思って私は見てしまいました。ひねくれているのでしょうか。

そうだ。東中野図書館には日本の絵巻物の全集があった。かなり大きな本だ。だから貸し出しへは出来ない。あの中にも、このエロ・グロの「山中常盤」はあるのだろうか。調べてみよう。よし、ついでだから、絵巻物の「全集」を読み破してやろう。

普通、日本の絵巻物といえば、「鳥獣戯画」や「信貴山縁起絵巻」「伴大納言絵巻」などが有名だ。小林よしのりさんが骨法道場の堀辺正史先生と、『格闘技通信』で対談してたが、その時、「日本のマンガは鳥獣戯画以来の伝統がある。長い伝統で、日本の文化だ」と言っていた。マンガは日本文化だって。その言葉が印象的だった。

さて、義経がらみで、もう一つ。NHK大河ドラマ「義経」の先週は、「平家最後の秘密」だった。壇の浦で平家は滅亡する。海に飛び込んで死んだ人々の怨念は、「平家ガニ」となって刻まれた。（その話はNHKになかったが）。さらに、幼い安徳帝も海に飛び込んで死んだ。自分から飛び込んだのではなく、平家の女官たちに抱えられて入水自殺した。いわば「無理心中」だ。かわいそうに。

でも、入水の寸前に取り替えられて、死んだのは別人。安徳帝はひそかに生き延びた。それを義経は勘づいたが、見逃した。NHKでは、そういう話だった。勿論、つくり話だが、でも、根拠のある作り話だ。というより、そんな〈説〉は実際にあったのだ。

この義経だって、平泉で死なないで、脱出し、北海道に渡り、さらにモンゴルに逃れて、ジンギスカンになった。という説がある。西郷隆盛は城山で死なないで、はるかロシアに逃れ、皇太子ニコライと共に日本に凱旋していく。という噂もあった。そうなったら、西南戦争で立てた武勲は全くチャラになると思い、警察官・津田三蔵はニコライを襲い、重傷を負わせた。大津事件である。

何とも人騒がせな「生存説」である。他にも、「実は…」といった生存説

は、かなり多い。中には、本当は生きているのに、「実は死んでたんだ」「死んだらよかったのに」という「死亡説」もある。そう、「山中常盤」のように。でも、こんなのは例外中の例外だ。

さて、そんな「生存説」の一つとして、「安徳帝は生きていた」という説がある。他の子供とすりかえて、壇の浦から逃げ出して、九州に行き、さらに硫黄島まで逃げた。実は、ここは俊寛の流された島だ。俊寛は、平家打倒の陰謀に加わり、鬼界ヶ島に流された。と歴史書にあるが、その島がどうもこの硫黄島らしい。

この島で、安徳天皇は平穏に暮らし、何と66才まで生き、天寿を全うしたという。でも、本当だとしたら、こんな行き方の方が残酷だと思うが。幼くして入水自殺した方が、そのあと何百年、何千年も人々の心の中で生き続ける。永遠の生を得る。

歌舞伎に「義経千本桜」という名作がある。義経の悲劇を基にしながらも、思い切ったフィクションにした作品だ。壇の浦で平家を滅ぼした最大の功労者の義経は、しかし、頼朝に疎まれて、逃亡の旅に出る。その途中、平家の残党たちと出会い、闘う。何と、あの勇将・平知盛が生きていて、義経を襲う。安徳帝も生きていた。知盛は義経と再度闘って、敗れ、錨を体に巻きつけて海に飛び込み自決する。女官が再び安徳帝をつれて、「海の底にも都はござる」といいながら、飛び込もうとする。そこを間一髪、義経は助ける。「平家物語」の名シーンをもう一度、やるわけだ。それに安徳帝は実は女だったというオチまである。これからは寺に入り、平家の菩提をとむらうように、と義経はさとす。そして義経主従はさらに旅を続ける。

つまり、この「義経千本桜」と「硫黄島亡命説」などを念頭においてNHK「義経」の「平家最後の秘密」は出来たわけだ。ここで気が付いたが、義経は似てるね。ヤマトタケルに。いくさは強い。皆に慕われる。しかし、上からは疎まれて、流浪の旅に出る。じゃ、「フォー・ビギナーズ」でやってみてもいいな。もう誰かやってるかな。

そうそう。「義経千本桜」は文楽でも歌舞伎でも、よくやっている。でも、初めて見た時は度肝を抜かれた。何て面白い話なんだろうと、ドキドキした。史実を基にしながらも、そうやって〈物語〉は作られていくのかと感動した。

それと、もう一つ感じたことがある。知盛ら平家の残党たちは、義経に復讐をしようと襲いかかる。しかし、その義経はもう源氏から追われた身だ。だったら、知盛・義経が手を結んで、連合軍となり、頼朝と闘ったらいいし

じゃないか。昨日の敵は今日の友だ。そうしたら、頼朝に勝てたかもしれないのに。敗北者同士小さな闘いをしてる時じゃないだろう、と思った。

(3)『おことば』『美しい魂』…。島田雅彦はいいね。最近。特に。

さて、島田雅彦だ。最近、彼の本を集中的に読んでいる。『おことば』（新潮社）は読んで、東京新聞に書評を書いた。又、例の衝撃の問題作、〈無限カノン〉三部作を読んだ。禁断の恋のお話だ。なんせ、皇太子さまと雅子さまがモデルだ。特に第二部『美しい魂』（新潮社）は読んでいて、ふるえた。9月26日(月)に会ったので、天皇の話をした。天皇論をめぐって今度話をしようよ、と言った。「いいですね」と言ってたので、どこかで実現するかもしれない。「『東京新聞の書評』ありがとうございました。千万の味方を得た思いです」と言われた。そんなオーバーな、と思ったが、あの本は、スリリングで、実にいい本だ。皆も読んでみたらいい。

カタカナで『サヨク』と書いたのは「私が初めてだ」と言っていた。『優しいサヨクのための嬉遊曲』や『僕は模造人間』など代表作は読んでたが、今回の〈無限カノン〉・三部作は、それを抜くものだった。

その他、図書館で借りて、かなり読んだ。以下、書いてみる。

『ルナ』（河手書房新社）。『無敵の一般教養』（メタローグ）。『彼岸先生の寝室哲学』（紀伊国屋書店）。『退廃礼讃』（読売新聞社）。『彼岸先生』（福武書店）。などだ。その中に、実は〈安徳帝亡命説〉の話も出てきて、オッ！と思った。『植民地のアリス』（朝日新聞社）だ。

〈旅の地をささやかな植民地としよう。アリスやガリバーや、ドン・ジョヴァンニのように世界を駆け巡る著者が旅の途上で綴ったエッセイ〉と帯には書かれている。

行った所は、加計呂麻島（鹿児島）、薩摩硫黄島（鹿児島）、神島（三重）、父島（東京）、択捉島（日本？ロシア？）などだ。最後の「日本？ロシア？」が面白いね。

この硫黄島だ。「俊寛」そして「安徳天皇の亡命の地」なのだ。島田は1989年11月に訪ねている。安徳帝は7才で入水して死んだことになっているが、実は硫黄島に亡命したという伝説が今も生きている。安徳天皇陵まである。1185年、硫黄島に来島して、ここで66才の天寿を全うした。

入水という最後をとげたことになってるので、諡号（しごう）はつけられなかった。安徳と呼ばれるようになったのは入水してから三年たった後だ。硫黄島に渡り、入水しなかった安徳天皇は島では雲隠天皇とか、年号をとっ

た養和帝と呼ばれていたらしい。

でも、「くもがくれ天皇」なんて、いやだな。変な名だ。前に言ったけど、くもがくれで66才まで天寿を全うしても、こっちの方がかわいそうだ。

「亡命伝説」によれば、これを画策したのは知盛で、帝の身代わりに総君(すなぎみ)という七つの女の子を立てたという。ということは、海に入水するためだけに、身代わりにされたんだ。こっちもかわいそうだ。この島には俊寛堂もある。しかし、安徳天皇と俊寛が出会うことはなかったという。

ということで、オシマイ。おつかれさまでした。

【だいありー】

(1) 9月26日(月) 夜7時。PARC自由学校で島田雅彦さんの話を聞く。〈無限力ノン〉三部作の話。「サヨク」の話。など面白かった。終わって、いろいろと話をした。直前に『新潮』(10月号)に載った中沢新一さんとの対談を読んでいった。タイトルが凄い。「列島文化防衛論」。二人とも三島になってるよ。かなり難しい話だった。でも、講演はやさしく話してくれたので、頭の悪い私にも分かった。よかった。

(2) 9月27日(火) 今日からジャナ専は二学期。7月中旬から休みだったから、何と長い夏休みでありますか。二学期は、授業が二時間。午前9時からライター科で「時事問題」。10時40分から文芸創作科で「戦後史」。両方とも、この日は、「天才作家・見沢知廉氏の死」について話した。

(3) 9月28日(水) 2:00から格闘技雑誌の企画で、須藤元気さんと対談。K-1、ヒーローズなどで大活躍だ。さらに映画、テレビCMにも出てる。とても勉強家で、哲学書を読んでいる。試合が終わると、いつも「We are all one (我々は一つ)」という横幕を掲げてアピールしている。

世界平和を訴えながら闘っている。ガンジー、キング牧師、石原莞爾の本も読んでいる。ニール・ドナルド・ウォルシュの『神との対話』も愛読書だ。僕も影響されて、紀伊国屋で買って三巻読んだ。

この日は、他に、取材やら、打ち合わせやらで一日中、走り回っていた。疲れた。

(4) 9月29日(木) 河合塾コスモの授業。朝倉喬司の『自殺の思想』(太田出版)をテキストにやる。又、僕の『言論の不自由』(ちくま文庫)に、見沢氏が「解説」を書いてくれたので、それもテキストにして読み、生徒と話し

合った。

(5) 9月30日(金) 昼、池袋の新文芸座で「戦争と平和」を見る。4時間半の大作だ。かなり昔に見たのだが、戦争シーンはよくおぼえていた。7時からPARC自由学校で、高橋哲哉氏の話を聞く。

【お知らせ】

(1) 10月3日(月) 7:30p.m.ロフトプラスワンで「見沢知廉氏追悼」の大集会です。見沢氏を知る多くの人が駆けつけてくれます。

(2) 10月5日(水) 月刊『論座』(11月号・朝日新聞社)発売。不破哲三『私の戦後六〇年=日本共産党議長の証言』(新潮社)の書評を書きました。なかなかいい本ですし、考えさせられました。

(3) 10月7日(金) 『新潮』(11月号)に見沢知廉氏の遺作『実存の愛情省』が載ります。『創』(11月号)も発売です。

(4) 10月9日(日) 1:00p.m.骨法道場で堀辺先生の「武士道セミナー」があります。

(5) 10月11日(火) 7:00p.m.高田馬場のライブ塾(トリックスター)。日刊ゲンダイの二木啓孝さんがゲスト。「夕刊紙の読み方・読ませ方」について語ってくれます。

(6) 『en-taxi』(11月号・扶桑社)木村三浩氏が見沢知廉氏の追悼文を書いてます。「『神意』のままに」。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張10月10日 金ちゃん奮戦記

(1)思い出した。学生運動の「M作戦」はダンスパーティだった

昔の仲間が脚光を浴びてるを見るのは嬉しいですね。ちょっとなり嫉ましくもありますが。あの井脇ノブ子さん（59才）はテレビ、新聞で毎日のように取り上げられてますね。「男にしか見えない」とか、「顔は洋七」だとか。

「ノブ子」じゃなくて、「野武士」だとか。皆に、「金ちゃん」と言われてたんですね。僕は学生時代からの知り合いですから、その時はもう、「金ちゃん」と呼ばれとった。「ノブ子」だから、「ノブちゃん」のはずなのに変だなと思ってたら、金太郎に似とるからなんですね。女性なのに金太郎かよ、と思いました。

「あっ、こんなことがあったな」と思い出しました。「週刊文春」（10月6日号）を読んで…。「歴史の見直し」を迫られました。民族派学生運動史にもこんなことがあった。と昔のことを思い出した。私の『増補改訂版・新右翼』（彩流社）をさらに改訂しなくっちゃ、と思いました。それは、「社交ダンス」のことなんですよ。「週刊文春」の見出しが、こうなってます。

〈ピンク野武士・井脇ノブ子の趣味はドレスで社交ダンス〉

いつもピンクを着てるわけじゃなくて、普段は「男らしく」、いつも男物の服を着ている。そうそう。辛淑玉さんも、男物の服を着ている。これは陰口じゃない。札幌で一緒に講演した時に、自分で言っていた。「服は全部男物でコナカで買ってます。靴もそうです」と。男物の方が、ゆったりしていて、着ていて楽なんだそうだ。

井脇さんも男物の服です。男物の背広を着て、男物の靴をはいて、さらにネクタイまでしている。それに顔も「男」だ。これじゃ、どう見ても男にしか見えない。さらにパンツもブラジャーも男物なんだろう。

「秋葉原で女装用のブラジャーやパンツを売ってました」と教えてくれた人がいる。井脇さんもきっとそんな所で買ってるんだろう。だってデパートの婦人下着売場で買ってたら、「変態」だと思われる。「男のくせに何をしてるんだ」と思われる。その点、男が女装する店なら不審がられない。自然だ。堂々と変える。「この乳バンド、買うぜよ」とか言って。昔は、ブラのことを乳バンドといったんです。この方が言葉に風情があって、よろしゅうおますな。「三島由紀夫全集」を読んでたら、「乳あて」という言葉が出て反射的に線を引いてしまった。これもブラのことでしょう。

図書館から借りた本に線を引いちゃいけんのですが、大丈夫。鉛筆です。大学ノートに写して、その後、消しゴムでちゃんと消してから返します。だから心配しないように。ちなみに、私は乳あては持ってません。女装趣味もありません。ただ…。いえ、これ以上書くのはやめときましょう。

さて、井脇ノブ子さんの話です。「週刊文春」にこんなことが書かれてました。

〈「ノブ子」ならぬ「ノブシ」と呼ばれる男性的な風貌の井脇氏だが、意外にもセクシーな趣味をお持ちである。

「私は大学時代、自治会の委員長をやっていましたね。当時はダンスパーティが流行って、それを主催したんよ。私もダンスが好きになって、普段に習いにいった」

「ジルバ、ワルツ、タンゴ、ブルースいろんな種類があるけど、一通り出来るよ。自分で『東京マンボ』というダンスもつくってね。昼休みや音楽の時間に生徒に教えたこともある」〉

そうだった。社交ダンスだった！と思い出したんよ。これは民族派学生運動史にも、全共闘の歴史にも書かれていない。エアーポケットだった。「歴史の空白」だった。

全国的に流行っていたんですよ。社交ダンスが。60年代後半は。全国の大学でストライキが打たれ、学園闘争が始まる直前だった。いや、始まってからも、まだ流行っていた。大学のサークルが主催して、ダンスパーティをする。ダンパン（ダンスパーティ）の券を売る。それが又、売れるんだわさ。それをサークルの運営費にする。

そのサークルというのが、皆、左翼っぽいのばかりだ。当時は、そうでしょう。学生は皆、左っぽいんです。日共も反日共も、アナキストも。そして右翼まで、皆、ダンスパーティを主催したんです。それが「M（マネー）作戦」だったんです。生学連、日学同、全国学協だって、やりました

よ。私もやりましたよ。

主催するんだから、自分たちも覚えなくちゃならん。イヤだったけどこれも「M作戦」のため。民族派運動のため。天皇陛下のため。と思って、ダンスを習いましたよ。プロについて。そういうと、何か、大変なことのように思えるけど、ちゃいまんねん。当時は、「ノバ」のように、あるいは「パソコン教室」のように、どこにでも「ダンス教習所」があったんです。そうだ。教習所だ。車の免許をとるように、ダンスを習った。いや、それも違うな。当時は車の免許を持ってる奴なんて、ほとんどいない。勿論、車を持つてた学生もいない。そんな奴がいたら、「ブルジョワ階級だ！」と思われ、全共闘に襲われてしまう。

(2)あの人もこの人も。オラもダンスを習いに行つただよ

ともかく、説明しづらいが、「ダンスブーム」だったんだ。右も左も。学生はダンスをしていた。毎日のように、ダンスパーティがあった。そのブームの中に、学生運動のブームが乗っかってゆく。明治維新前夜を思い浮かべたらいい。「ええじゃないか」「ええじゃないか」と踊り狂う「おかげ参り」が全国で突如、大流行した。天からお札（ふだ）もふってくる。そして、明治維新の動乱だ。血戦の前には踊りが流行るのかもしれません。武闘の前には舞踏が流行るんよ。

そう思うと、あのダンスブームも分かる。読み解ける。「楯の会」の学生長で三島と自刃した森田必勝だって、我々と一緒にダンスパーティに行っていた。習いにも行った。又、右翼サークルの主催するダンスパーティの券を売っていた。信じられんだろうが、本当だ。

私も勿論、ダンスを習いに行った。たしか新宿のコマ劇場の傍だったと思った。どこも若者で一杯だった。そこでまず、ブルースから教わる。「スロー、スロー、クイック、クイック」とやる。それから、ジルバ、ルンバ、マンボだ。井脇さんのように、タンゴ、ワルツまでは行かんかった。でも、ブルースしか知らないでもダンスパーティでは通用する。その曲の時だけ踊ればいい。勿論、皆、学生服で踊ってましたよ。当時は、ブレザーとか、背広なんて持っちゃいないし。

なんであんなことばかりしてたのかな、と今となつてみれば思う。左右両翼の「資金かせぎ」ということもあるが、多分、「娯楽」がなかったんでしょうね。それに、異性と知り合うチャンスがなかった。ましてや、手をつなぐなんて…。だから社交ダンスが爆発的に流行ったんですよ。

それに、我々の世代は、小学校、中学校は「フォークダンス」ですからね。それくらいしかなかったんよ。女の子と手をつなぐのは。そして大学に入ってからはそれが社交ダンスに進化したわけだよ。

でも、学生運動（前夜）に咲いた徒花のようだったね。あのダンスブームは。だってその後、一度もやったことがない。ステップも皆忘れた。酔った時に、たわむれに、ダンスをやろうかと思うが、組むと、女に「投げないで！」なんて言われる。柔道のくせが出て、投げそうになるのかもしれません。ベルトの所に手を回すと「まわしを取らないで！」と言われるし。相撲やつてんじゃないのにな。

そんなわけで、40年近くもダンスをやっとらん。井脇ノブ子さんは「週刊文春」の記者の前で、「私、ステップだけはすごくうまいんよ！」と披露したという。

「こうやってね。ワン、ツー、スリー、チャチャチャ」

そうだ。チャチャチャとか、チャールストンとかいうのもあったな。モンキーダンスとかいうのもあったような気がする。〈ダンスと学生運動〉についてはもう少し、調べて、ちゃんと書いておかなくちゃいけないな。これも「歴史の見直し」だ。井脇さんは議員会館で記者の前でステップを披露する。そのあとだ。「週刊文春」によると…。

〈ピンクスーツを着たまま、吉本新喜劇を彷彿とさせるステップを、披露してくれたのである。

女を捨てたわけじゃなかった？

「そんなわけない（笑）。心は女の子よ。男性政治で漏れたものを、私がすくっていこうと思ってるよ」〉

うん、いいですね。そうそう、「女の子」といえばですね。ちゃんと結婚しようとしたことがあるそうです。これは私も知りませんでした。ウーン、ちょっと聞いたかな。「週刊新潮」（9月29日号）で、こんなことを言っています。

「28歳の時、母親に結婚したいと話したら、“孫はもう大勢いるから要らない”といわれてね。当時、すでに教育の仕事に携わっていた私は、母の言葉を聞いて結婚を諦め、仕事に専念することに決めたんです」

偉いお母さんですね。でも、「結婚したい」と言ったって、相手があることでしょう。誰だったんでしょう。いえいえ、私じゃありません。それにしても、見る目があったお母さんです。もしも、（あるいは、「きっと」）結婚したいなんて思っても、失敗するかもしれない。その時、ヤケになって世

界同時革命なんて言ひだしてはまずいと思ったんでしょう。本当は、娘に結婚してもらいたい。孫の顔も見たい。親としては当然です。でも、心を鬼にして、「孫はもう要らん」と言ったんですね。涙が出ますね。

それで井脇女史は、決断するんです。女を捨てて、教育、政治の世界にいきるんです。前にも書きましたが、井脇さんは「生長の家」でした。今でも、その信仰を基にして活躍してるのだと思います。彼女が別府大学の学生だった時、私は生学連（生長の家の学生部）の書記長でした。全国をオルグして回ってました。全国の大学でサークルを作り、自治会選挙に出て、闘え！と言ってアジってました。

その生学連が中心になり、広範な民族派を集めて、「全国学協」を作りました。その時、私は委員長、彼女は副委員長でした。今、考えると、〈最強のコンビ〉でしたが、彼女の方が存在感が強く、私は、「鈴木クン！」なんて呼ばれてました。僕は3歳年上なのに。それに、委員長なのに。僕だけでなく、他の先輩たちにもクンづけしてました。その時から大物だったんです。

(3) タックルした警察官もビックリ。「ゲッ！ オナゴかよ！」

「週刊現代」（10月15日号）には、グラビアで出てました。「スクープ入手！ 井脇ノブ子センセイの「セクシー水着姿」です。凄いですね。連日、テレビ、新聞、週刊誌に取り上げられています。

水着姿は、`65年別府大学時代の写真です。



〈40年前、うら若き女子大生時代は写真のようにカワイらしい乙女だったのだ。それでもなぜ水着でナベを持ってるのだろうか。昔から凡人では理解できないでたちが得意だったんだろう〉

と書かれています。豊満な肉体をスクール水着で包み、何故か、ナベを持っている。もしかしたら、貧しい家計を助けるためにアワビとりをしてたのか

もしれません。40年前は、ほんとうに、カワイそうな、いや、カワイらしい女だった。この頃、私は出会ってたんですね。大分には何度もオルグに行き、「大学の自治会選挙に出ろ！」 「左翼と闘え！」 「民族派全学連をつくろう！」とハッパをかけてました。

私のハッパに応えて、井脇さんは別府大学の自治会選挙に立候補。見事、当選したのです。多分、その頃からでしょう。〈政治〉に目覚めたのは。だから、全ての原点は私なんです。他にも、別府女子短期大の学生も自治会選挙に打って出て、当選しました。全国で10大学以上で自治会を取ったんです。それで、「民族派全学連」をつくるところまで行きました。今から考えると、よく、あれだけのことをやったと思います。今と違い、私も燃えてましたし。火の玉でしたよ。

さて、井脇さん。大学を出てから、拓大大学院に行き、それから「少年の船」をつくり、国際開洋高校の校長になります。生長の家では「生政連」（生長の家政治連盟）があって、玉置和郎さんを先頭に何人かが政治家になりました。〈革命阻止〉〈政界浄化〉を目指したわけです。それがあれば井脇さんもスンナリと国会に出れたでしょう。しかし、生政連は解散したので、井脇さんは自力でやるしかありません。

それから苦節10年。出たたびに負けてました。「もうダメだろう」と皆、思ってました。ところが、不屈の精神と、根性ですね。それに「生長の家」の信仰でしょう。とうとう国会議員です。嬉しかったでしょうね。おめでとうさん。

それに、苦節10年の間には、実にいろんなことがあったんです。女性の秘書と歩いてるところを写真に撮られて写真週刊誌に出ました。何だ。当たり前の写真じゃないか。と思ったら、「レズだ！」と見出しをつけられて…。又、自分が校長をしている国際開洋高校の生徒の部屋で覚醒剤や大麻が発見される事件もありました。

当時を振り返り、井脇さんは言います。

「私の追い落としを図った者が仕組んだ嫌がらせ。誰かが生徒宛の手紙の中に薬を入れて送ってきたんです。事実、それがわかった警察も捜査を止めてますよ」

又、

「私がレズだとか変な噂も流されているようだけど、そんなこと一切ない」

そうですよ。失礼ですよね。

そういえば思い出した。学生運動をしてた時は、よく、チラシをまき、ビラ配りをしていた。ある時、お巡りさんに見つかって、皆、必死で逃げた。不幸にも彼女は捕まった。後ろから抱きついて捕まえた警察官が、「ゲッ！おめえ、オナゴか！」と叫んでました。思い出しました。

それに合宿では、「何だ。男のくせに髪を伸ばして！」とか「こら、男のくせに女便所に入っちゃいかん！」と言われてました。今となっては笑い話です。又、思い出したら書きましょう。それよりも、どっかで対談かインタビューをやりたいですね。

【だいありー】

(1)10月2日(日)民族派運動の大先生で、僕も学生時代から大変お世わになつた中村武彦先生が亡くなられた。午後6時から多摩靈園でお通夜。92才だった。先生を知ったのは僕が学生道場にいた頃だから、もう40年前だ。生学連、全国学協の時も教えて頂き、お世話になった。又、一水会を創る時も、第1回一水会例会に先生の講演をしていただいた。「民族派の良心」と言われ、誰からも慕われる先生でした。

(2)10月3日(月) 7:30p.m.から口フト。見沢氏追悼の夕べ。見沢氏を知る多くの人々が集まり、天才作家見沢氏のことを語った。木村三浩、雨宮処凜、深笛義也、切通理作、佐伯紅緒、土屋豊、…など。会場も超満員。見沢氏のファンサイトを作ってる青年は地方から上京して、見沢氏への熱い思いを語っていた。又、他にも福島など、地方から駆けつけた人がいて、さすがは見沢氏だと、その人気の凄さを思い知りました。

又、この日、見沢氏の『ライト・イズ・ライト』（作品社・1500円）が発売されました。一水会時代の過激な闘争を、楽しく明るいタッチで書いてます。ぜひ読んでみて下さい。傑作です。

(3)10月4日(火) 午前中、ジャナ専で授業。2コマ。「時事問題」と「現代史」。

(4)10月5日(水) 7:00p.m.からザムザ阿佐ヶ谷で。月蝕歌劇団を見る。「新撰組in 1944。=ナチス少年合唱団」。いやー。面白かったです。土方や沖田がタイムスリップし、ドイツに行って、レームを肅清するんですね。それから…。奇想天外、驚きの展開です。私もいつか、「新撰組in 1972。連合赤軍」を書いてみたいですね。

(5)10月6日(木) 午後は河合塾コスモで授業。

(6)10月7日(金) 7:00p.m.から新宿でこのHPのオフ会。大阪からもお客様がいらして、久しぶりに皆さんに会って楽しかったです

(7)10月8日(土) 3時から、PARC自由学校に。アルカイーダと疑われて逮捕されたイスラム・ヒムさんの話を聞く。終わって皆で痛飲した。

(8)10月9日(日) 午後1時から骨法道場。堀辺正史先生の「武士道セミナー」を聞く。とても勉強になった。先生に借りていた鹿島昇の『裏切られた三人の天皇』をお返しする。孝明天皇は暗殺され、さらに明治天皇は南朝の末裔（大室寅之佑）とすりかえられたという説だ。初めて知った。月蝕歌劇団、『新撰組in 1944』にも、この〈説〉が出てきて驚いた。主宰者の高取英さんに聞いたら、「有名な説ですよ。鹿島昇の本はずい分読んでますから」と言っていた。夕方。SAW（サブミッションアーツ・レスリング）の試合を見に行く。

【お知らせ】

(1)『論座』（11月号。朝日新聞社）に不破哲三『私の戦後六〇年＝日本共産党議長の証言』（新潮社）の書評を書いてます。又、『創』（11月号）には「追悼！『言論の覚悟・ワイド版。畏友・見沢知廉の自殺に涙が止まらなかった』を6ページ書いてます。

(2)『新潮』（11月号）に見沢知廉氏の遺作『愛情省』が載っています。ぜひ読んでみて下さい。

(3)10月11日(火) 7:00p.m.から高田馬場のライブ塾（トリックスター）です。日刊ゲンダイの二木啓孝さんがゲストです。「夕刊紙の読み方、読ませ方」です。

(4)10月16日(日) 7:00p.m.からネーキッドロフトに出ます。斎藤貴男さん、篠田博之さんと「共謀罪」について。

(5)10月26日(水) 7:00p.m.から一水会フォーラム。高田馬場のシチズンプラザです。「見沢知廉氏を語る」です。木村三浩氏他、見沢氏を知る多くの人に語ってもらいます。私も出ます。ぜひ、いらして下さい。

(6)11月8日(火) ライブ塾です。切通理作氏（評論家）の「見沢知廉の〈世

界〉です。切通氏は『宮崎駿の〈世界〉』『山田洋次の〈世界〉』(ともに、ちくま新書)などのベストセラーがあります。

(7)知り合いの人が送ってくれて、「パニック障害」の本を読みました。この病気については無知で知らなかったのですが、大変なんですね。でも、暗くならず、明るく、立ち向かい、つぶれそうな心がふっと軽くなる一冊です。

彩木美月子さんの『治さなくともいい?=パニック障害のお話』(新風舎。1200円)です。

読んだ僕らの方が励まされる本です。本屋に行ってみたら、「パニック障害」の本だけでもかなりあるんですね。ビックリしました。こんなに苦しんでいる人がいるんです。でも、この本は、病気の中にありながら、「ハッピーに生きるためのコツ」をアドバイスしてくれます。せひ、読んでみて下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張10月17日

信念と信仰の人間国宝「片岡仁左衛門」を13時間見た

(1)大長編の「仁左衛門」映画を見たよ。これも勉強です

映画「歌舞伎役者 片岡仁左衛門」を見た。ポレポレ東中野だ。6部から成り、全11時間だ。「特別プログラム」を入れると、全13時間だ。それを一挙に見たわけではない。2部ずつを一週間上映する。だから、4週かけて、全部を見た。本の全集を読破したような充実感と達成感だ。

内訳はこうだ。「若鮎の巻」「人と芸の巻」（上）（中）（下）、「孫右衛門の巻」「登仙の巻」。そして、「特別プログラム」だ。今、見ておいてよかった。ビデオにはなってないし、いつ又、上映するか分からないからだ。

何も、今回が初めてではない。平成4年（1992年）に岩波ホールで、8時間にして、一挙上映された。一日に一回しか上映できない。これも凄い。この頃は、僕はまだ歌舞伎のことをよく知らなかったので、映画を見ようとは思わなかった。歌舞伎も見に行ってなかっただし、もし、この時、この映画を見ても、分からなかっただろう。その点、今回は実にタイムリーだ。ありがたい企画だった。

ポレポレ東中野では、4週にわたって上映されたといったが、午前中は「山中常盤」だ。そして午後からは「仁左衛門」だ。

十三代の仁左衛門で、今の仁左衛門（前は片岡孝夫）のお父さんだ。90才まで生きた。最後の6年を取材し、舞台、稽古、日常生活、後輩への指導…。全てにわたって撮り続けている。驚くのは、90才まで現役で、日々勉強なのだ。家人だって大変だ。「醜態をさらさなければいいが」とハラハラのし通しだ。しかし、そこは人間国宝。一步、舞台に上がれば、シャキッとし、役になり切る。たいしたもんだ。

仁左衛門は、明治36年（1903）生まれだ。2才で初舞台を踏み、平成6年（1994）90才で亡くなった。この映画は、84才から90才で亡くなるまでの舞台、稽古、指導、生活などを記録し、まとめたものだ。とすると、岩波ホールで全8時間を上映した時は、まだ生きてたんだ。88才の時だ。だから全5部だ。今回は、それに「登仙の巻」（つまり、昇天の巻）も入れてるから、全6巻で、11時間なんだ。とすれば、こっちの方が〈完全版〉なのだ。

仁左衛門は、2才の時に京都南座で初舞台を踏む。凄いね。芸歴88年なんだ。生まれた時から、そのまま歌舞伎役者だ。「山田小卒」とある。学校なんか出なくとも、歌舞伎から学び、歴史から学んだんだ。1951年（昭和26年）に十三代片岡仁左衛門を襲名している。48才の時だ。1972年（昭和47）、重要無形文化財（いわゆる「人間国宝」）に指定され、芸術院賞を受ける。ちなみに、この年は連合赤軍事件の年だ。

1981年（昭和56年）、国立劇場で演じた『菅原伝授手習鑑』の菅丞相は高い評価を受ける。「この頃から緑内障を患い、視力をほとんど失ったが、現役歌舞伎役者として舞台に立ち続けた」と略歴には書かれている。78才の時だ。だから、最後の12年間は、ほとんど視力を失った中で、舞台に立っている。

これは信じられないが、本当だ。奥さんや子供たちに台本を読んでもらい、それで確認する。舞台稽古の時は、ここが階段、ここから何歩で舞台の中央…と、体で覚える。淨瑠璃や三味線の音で、自分はどちらに向かってると分かる。凄い。普通なら、やらない。やれないよ。それに、一度は、花道から落ちたこともある。「ここから花道ですよ」と、特別にランプをつけたが、それも見えない。それで落ちた。

そんなことがあっても、さらに舞台に立つ。手を引いてもらって、楽屋に入り、化粧して、舞台に立つ。人間国宝なんだし、歌舞伎界の最長老だし、もういいだろう。と、普通なら思う。ところが、目が全く見えなくても、舞台に立ち続ける。そして出る前は「ここはおかしい」「ここはどうだったかな」と調べる。又、新しく挑戦する。一生、勉強なんだ。弟子に教えながら、自分でも、さらにさらに勉強し、進化する。

目が見えなかったら、普通、癇癩を起こし、周りの人に当ったりするだろう。ところが、それが全くない。まるで、神のような人だ。目が見えなくなったことについて、こう語っている。

「悪くなつたのが目で良かった。耳がきこえなくなつたら芝居ができない」

うーん、ここまで物事をよい方に、よい方にと、積極的に考えられる。ポジティブ・シンキングだ。なぜか。多分、信仰深かったからだろう。と、私は思った。何があつても、いい方向に考える。光明面を見て、暗黒面を見ない。実際、仁左衛門は、信心深い人だった。毎日、神仏に祈っている。旅に出る時も、スーツケースの中に、ご神体を入れ、ホテルの部屋で拝む。神ながらの生活だ。舞台で自分の出を待つ間にも、じっと手を合わせて祈っている。もう、ここまで来た人だ。歌舞伎界の最長老だ。神に祈ることもないのに。と思うが、違うのだ。どこまでも謙虚なんだ。

映画では、朝晩、神仏に祈る姿が何度も出てくる。でも、特定の宗教の名は出てこない。しかし、日めくりがチラッと出てたが、「生長の家」の日めくりに似ていた。知り合いの人からもらって、掛けておいたのかもしれない。

(2) 「生長の家」 谷口雅春先生との親密なお付き合い

生長の家で、歌舞伎にも詳しい人がいる。「仁左衛門の映画を見たよ」といったら、「あの人は生長の家なのよ」と言う。エッ！まさかと思った。「だって雅春先生が亡くなつた時も、弔辞を寄せてたよ」と言う。

お互い、偉い人だから、弔辞ぐらいは寄せるかもしれない。しかし、「生長の家」の信者とは限らないだろう。「でも、本を読み、雅春先生のことをとても尊敬してたんだよ」と言って、一冊の本を送ってくれた。

『生長の火をかざして。永遠の谷口雅春先生』という本だ。昭和60年11月に、生長の家から発行されている。生長の家の創始者で初代総裁の谷口雅春先生は明治26年生れ。昭和60年6月に亡くなられた。91才だった。その直後に、この本は出ている。昭和60年といえば、1985年か。今から20年前だ。仁左衛門は82才だ。

この本の中に、「谷口雅春尊師を讃える。各界から寄せられた追悼の言葉」が載っている。仁左衛門の他には、こんな人たちだ。葦津珍彦、植芝吉祥丸、加瀬英明、樋口清之、黛敏郎、山野愛子…などだ。その中に「永遠生き通しの生命」と題して、仁左衛門が書いている。

〈新聞で谷口先生の御逝去を拝知しました時、私はかつてその事に行き当つた時のことを想像しただけで言い知れぬ悲しさと不安にうろたえました

のに、それが現実となった今、誠に心静かに合掌している自分が不思議でなりませんでした。心の片すみでは涙が出ないのが不満でもありました。

しかし考えますと長崎へ移られて此の方毎朝夕、御神前において先生御夫妻に感謝のよいのりを捧げて久しい私には、先生はすでに生死を超えた神であり御仏であられたのだと気がつきました〉

いい文章ですね。そして驚きました。毎朝夕に谷口先生御夫妻に感謝のよいのりをしてたなんて。やっぱり生長の家なんだ。そう確信しましたね。この映画にもよく出ていたが、毎朝夕、かなりの時間をとって神仏にお祈りをしていたが谷口先生御夫妻にも感謝して、お祈りしていたんだ。生長の家の信仰を得、その運動をしてきた私としては、とても嬉しいし、ありがたい気持ちでした。

仁左衛門は、谷口先生の本を読み、教えを受けただけでなく、個人的にも親しくしていたようだ。こんなふうに書いている。

〈それが聖使命紙で御最期の御様子や御葬儀の事など拝読いたしますに及んで悲しさ懐かしさがひしひしと胸にせまって來たのでございます

何年か前のお正月、家内が御年始にお山へうかがいますと、二日程前に長崎へお移りになったとの事で大変残念がっておりましたが、その頃はお芝居へご案内申し上げますとおいそがしいなかよくお出かけ下さり最後まで楽しそうに御見物下さいました〉

エッ、谷口先生は歌舞伎にもよく行かれたんだ、と驚きました。僕は知らなかった。谷口先生もそんなことは書かれてなかった。いや、書いてられたが、（当時は）僕が歌舞伎に全く関心がなかったから、読み飛ばしていたのかもしれない。

ここに書いてある「聖使命」とは生長の家の機関紙のことだ。新聞だ。雑誌は「生長の家」「理想世界」「光の泉」「白鳩」と月刊の機関誌が出ていた。ともに、〈神誌〉〈神紙〉と呼ばれていた。

又、「お山」とは、谷口先生のお住まいのことだ。原宿の本部の近くにあった。閑静な住宅地で、ちょっと小高くなっている。階段を登って上がってゆく。だから、「お山」と言っていた。学生時代、「お山の集い」というのがあった。月に一遍、学生道場生がお山にうかがい、先生のお話を聞くのだ。30人の道場生で出かけて行き、先生のお部屋で、直々にお話を聞き、質問をする。学生道場生の〈特権〉だった。それだけ、先生も、学生道場生には期待をかけていたのだ。本部の先生方でも、そんな機会はなかった。大

層うらやましがられたものだ。

(3)果たして怪猫の復讐なのでせうか

それにしても、先生はお忙しい中、歌舞伎を見られ、又、仁左衛門の奥さんもお山に行かれる。そんなに親密なお付き合いだったんだ。谷口先生御夫妻は鰻がお好きだということで、歌舞伎の幕間に用意した話なども仁左衛門は紹介している。いい文だ。そして、こう結んでいる。

〈何や彼や思い出しつつ私は懐かしさに先生のテープをおかけしました。

先生はやはり私達の中で生き通してお導き下さるのだとしみじみ有難さでいっぱいになりました〉

ホロリとしましたね。これほどまでに谷口先生に傾倒していたのかと。生長の家の信徒であろうと、なかろうと関係ないね。本を読み、信心し、朝晩、谷口先生の健康と幸せを祈っている。祈られる人も、祈る人も〈神〉だ。と思いましたね。私は。

今まで書いてきた仁左衛門は十三代だ。今は、その三男の孝夫が襲名している。当然、十四代目かと思ったら、十五代目なのだ。十四代目は片岡我童に追贈されている。こんなことがあるんだ。それに孝夫は長男ではない。長男、次男ともに歌舞伎俳優だ（我當、孝太郎）。長子相続ではない。三男が継いでいる。孝夫の方が華があると思ったのか、実力があると思ったのか。それにしても、快く三男の襲名を祝ってやった長男、次男は偉いと思いましたね。そういえば、十三代目仁左衛門も三男で、継いでいる。三男が一番華があり、継承する習わしなんだろうか。

皆さんも、ぜひ歌舞伎座に行って、日本の伝統芸術を堪能して下さいませ。今月は、「加賀見山旧錦絵」「河庄」などをやってます。又11月の国立劇場は「絵本太功記」。そして新橋演舞場は「児雷也豪傑譚話」です。共に通し狂言です。楽しみです。

こうした長いものは、最近、少ない。だから嬉しい。「番町皿屋敷」や「東海道四谷怪談」など、見応えがありましたね。又、見たいですね。

と思っていたら、10月9日の新聞を読んで驚いた。これは「怪談だよ！」と思った。歌舞伎だよ。だって、老人ホームで入所していたお年寄り（88才）が猫に足の指を食い切られたという。書き写していても、気持ちが悪くなる。何でそんなことをやるんだ！と猫を查問にかけ、糾弾したい気持ちだ。それも、右足の指、全てをかみ切ったという。この猫は。ひどい話だ。

新聞（産経新聞）によるとこうだ。10月6日午前5時過ぎ、このご老人の

うめき声に気づいた入所者が職員を呼んだ。そしたら何と、その女性は両足から大量に出血していて、119番通報した。病院に運ばれたが、右足の全ての指を第一関節付近から失い、左足にも深いひっかき傷があった。新聞はさらにこう書いている。

〈女性の部屋の窓が約三十センチ開いて網戸の一部が破れており、シーツなどに猫の足跡があった。中庭にいた、口に血がついた猫が保健所に捕獲された。〉

最後の一行。ゾーンとしますね。化け猫ですね。化け猫は行灯の油をなめるとは聞いていたけど、人間様を食うなんて。許せん。まさか、このご老人が子供の時に猫をいじめたわけじゃないだろう。「動機」は分からんが猫の「復讐」ではないようだ。じゃ何だ。人間の指がおいしかったのか。それともキャットフードか。かつおぶしか。食べ物の残りかすが付いていたのか。何とも謎だ。

しかし、管理のズサンな老人ホームだね。これじゃ不安で我々も、おちおち入所できんよ。やっぱ、みやま山荘の方が安全だ。でも、何物かが放火するからな。これは困る。

それにしても、口に血をつけた猫がうろつき回っているなんて怖いな。でも、猫は犯行を自供してないそうだ。もしかしたら、冤罪かもしれません。同僚か看護婦にケンカかイジメでやられて、猫に罪をさせるために、口に血をつけた。そうかもしれません。そうなったら、これはドラマだ。でも、2時間ドラマならありそうだが、ちょっと無理か。それに、日本の警察は世界一優秀だ。こんな「工作」をしてもすぐにバレるわさ。では終わり。

【だいありー】

(1)10月9日(日) 午後1時から骨法道場で堀辺正史先生の「武士道セミナー」を聞く。今期の最後だ。又、来年の春から新たに始まる。今日は、締めとして僕が指名されて、先生と対談をする。武士道のこと。さらに、「現代において、サムライとして生きるとは」について話し合った。切腹、戦死…など、男の死に方についても。生の終え方としては残酷だが、これ以上に「名誉ある死」を近代人は考えつかなかった。と思う。そんな疑問を含めて、先生に聞いた。

(2)10月10日(月・祝) 12時半から青山会館。阿蘇敏文さんの『現場からの道』(新教出版社)の出版記念会。阿蘇さんは河合塾コスモの先生。「農場

ゼミ」を担当していて、生徒には圧倒的な人気がある。又、キリスト教関係の人、アジアの友人たち…と、幅広い交流を示すように600人ほどの参加者があった。びっくりした。

(3)10月11日(火) 午前中はジャナ専の授業。「時事問題」と「現代史」。午後7時から高田馬場のライブ塾。「日刊ゲンダイ」ニュース編集部部長の二木啓孝さんがゲストで、「夕刊紙の読み方・読ませ方」。

二木さんは学生時代には学生運動をやり、その後「週刊ポスト」に入り、その後、日刊ゲンダイに入社。日刊ゲンダイの「顔」だ。政治評論家としても著名で、テレビにもよく出ている。

この日は、「夕刊紙戦争」の実態を詳しく話してくれた。夕刊紙は、日刊ゲンダイ、夕刊フジ、東京スポーツ、内外タイムスの四紙が鎧を削っている。その中でも日刊ゲンダイと夕刊フジだ。僕らから見ると、夕刊フジは「体制的」で、「日刊ゲンダイ」は「反体制的」だと見える。しかし、「そういうわけではない」と二木氏は言う。批判精神、職業的懐疑主義はあるが…と言う。

又、これから新聞の宅配制がなくなったら、駅売り即売紙の天下になるのか。フリーペーパーとの闘いはどうなるか。といった質問にも、丁寧に答えてくれた。さらに、夕刊紙の見出しの付け方や、抜きつ抜かれつの闘いの現況報告なども詳しく話してくれた。

(4)10月12日(水) 午前中、有名な『中州通信』の取材をうける。この雑誌は、博多・中州のクラブ「リンドバーグ」のオーナー藤堂和子さん（編集者）が主宰する月刊誌だ。でも全国誌だ。僕は5年前に、「三島由紀夫特集」で取材された。又、「竹中労特集号」などもやっていて、面白い。今回は「言論統制列島」について。午後は中野図書館で勉強。夜は講道館。

(5)10月13日(木) 午前中、出版社と打ち合わせ。今年の前半は、ものすごく仕事をしたようで、そのために体調を崩し、骨法整体で治してもらった。本も随分出した。しかし、対談やインタビュー本、共著ばかりだ。去年のようにじつくりと一人で考えて書いた本がない。『ヤマトタケル』や『公安警察の手口』のような、まとまったものを書きたい。…と、模索している。でも、実力がないし。文章も下手だし。もっと努力し、勉強しなくちゃと思う。

この日は、午後は河合塾コスモ。現代文と読書ゼミ。見沢知廉氏の『囚人

狂時代』（新潮文庫）をテキストにして若者と読み、語り合う。

(6)10月14日(金) 夜7時半からザムザ阿佐ヶ谷。月蝕歌劇団の『盲人日記』を見る。寺山修司の原作だ。よかった。東北人は皆、詩人だ。と思った。（ちなみに、オラも東北人だ）

(7)10月16日(日) 午後1時半から河合塾コスモの全体会議。7時からネーキッド・ロフトでトーク。「共謀罪について」

【お知らせ】

(1)10月19日(水) 7:00p.m.からネーキッド・ロフトで、「追悼。野村秋介・見沢知廉」。針谷大輔、横山孝平、大熊雄次、古澤俊一、正狩炎など民族派の若手たちが大挙参加します。

(2)10月20日(木) 7:00p.m.中野ZEROホールで、日韓共同ドキュメンタリー映画「あんにょん・サヨナラ」が上映されます。日韓間の辛い過去よ、「サヨナラ」がテーマです。

僕も取材されたので、出演しています。多くの人が取材されたので、発言を取り扱うことができない人もいると書かれていた。じゃ、僕は出てないかもしけんが…。

(3)10月26日(水) 7:00p.m.から一水会フォーラム。高田馬場のシチズンプラザです。「見沢知廉氏を語る」です。木村三浩氏、僕などが話します。又、見沢氏を知る多くの人が来て語ってくれます。

(4)11月8日(火) 7:00p.m.から高田馬場のライブ塾（トリックスター）です。切通理作さん（評論家）の「見沢知廉の〈世界〉」です。切通理作（きりどおし・りさく）さんは、1964年生まれ。『宮崎駿の〈世界〉』（ちくま新書）で第24回サントリー文芸賞受賞。著書に『ある朝、セカイが死んでいた』（文藝春秋）、『お前がセカイを殺したいなら』（フィルムアート社）。『山田洋次の〈世界〉』（ちくま新書）など。

又、この日は、山田洋次の「寅さん」シリーズを熱愛する塩見孝也さんも来ます。「寅さんは永久革命家だ！」と力説する塩見さんと切通氏のトークもあります。

【追加・お知らせ】

(1)今発売中の「群像」（11月号）に雨宮処凜さん（作家）が見沢氏の追悼

文を書いてます。感動的な文章です。読んでみて下さい。「見沢知廉に捧げる最後の手紙」です。

(2)「表現者」(11月号)が発売されました。これは、西部邁事務所が編集し、イプシロン出版企画が発行しています。「亞細亞100年」が特集で、小林よしのり、西部邁、保坂正康、上野昂志、川村湊などが書いてます。錚々たる人々に混じって、恥ずかしながら私も書いてます。「玄洋社と日本のアジア主義」です。

(3)11月5日(土) 2:00p.m.から見沢知廉氏を追悼する集まりがあります。詳しくは次号に。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張10月24日 「自虐」こそ「愛国」なんだよ =キミは『ベルツの日記』を読んだか!=

(1)外国人の方がより正確に見ているよ

僕らは日本人だ。だから日本のこととは知っている。今の日本のこととは勿論、昔の日本のことだって、知っている。同じ日本人だから分かる。大昔のことだって、見当がつく。そう思っている。だって日本人だから…。

しかし、これは錯覚じゃないのか。誤解ではないのか。最近、そんなことを思う。30年前の学生運動のことだって、今の若者には話が通じない。全く理解してもらえない。60年前の戦争だって、分からぬ。どんな気持ちで戦争に突入したのか。さらに、戦前のこととも分からぬ。大正時代のことも…。明治はさらに遠い。

「同じ日本人だから」といったって、それだけで簡単に理解できるものではない。あるいは、明治の人間から見たら、今の僕らは、もう「外国人」なのかもしれない。だから、いっそのこと、「外国人」の目で、過去の日本を見た方が、見えてくることもある。そんな気もする。

前にも紹介したが、『ベルツの日記』（上・下巻。岩波文庫）だ。これを読んで、痛切にそのことを感じた。明治の日本を理解するのに、当時の日本人の書いたものを読んでいても、いまひとつ分からぬ。それが、外国人の書いたものを読んで、ハッと気がつくことがある。これは新鮮な驚きだった。多分、明治人にとっては、僕らがもう、「外国人」だからだ。でも、悲しむことはない。「外国人」の目でもって明治の日本を見直す。それによって、日本人がより見えてくる。又、それによって、日本人である僕らが見えてくる。複眼的視点が必要だ、ということだ。

エル温・ベルツ（1849～1913）は、明治時代、東大医学部の「お雇

い教師」として招かれ、以来いく度かの帰国をはさんで滞日29年に及んだ。明治9年（1876年）から26年間、東大のお雇い教師であり、「日本の近代医学の父」といわれた。

ドイツ人だ。これ以降、日本の医学は全て、ドイツに学んだ。日本の医者は必ずドイツ語を勉強し、つい最近まで、病院のカルテは全てドイツ語で書かれていた。今でも書いてる病院はある。明治の前は、日本の医学はオランダだ。蘭学だった。江戸の医者は、長崎に行って、オランダの医者から学んだ。

ところが、明治維新になって、ヨーロッパ人がドッと入ってきた。皆、「お雇い外国人」として、高給で雇われた。さらに、世界の様子も分かってきた。それまでは、オランダの医学が世界で一番進んでいると思ったが、どうも違うようだ。ドイツが一番進んでいる。オランダだってドイツに学んでいたんだ。…と、気付き始めた。そう気がつくと、早いんですね。すぐに手のひらを返して、オランダをやめて、ドイツに学んだ。

では、なぜ、ベルツだったのか。実は、ドイツに医学留学をしていた日本人がいた。その一人（相良元貞であったとされる）が病気になって、ライプチヒ大学病院に入院した。1875年のことだ。彼を診たのがベルツだった。彼はベルツの技量と人柄に打たれて、日本政府に推薦したのだ。そして、ベルツの29年間の滞日生活が始まる。

来日したベルツは、すぐに日本が好きになった。日本人の妻を持ち、日本の武道にも関心を持ち、日本人よりも日本人らしい生活をする。何て素晴らしい国だ、と思う。当時の日本人よりも、日本のこと愛した。これは大事なことだし、驚きだ。あとで詳しい話をしよう。

この『ベルツの日記』で〈解説〉を書いている酒井シズは「エンウィン・ベルツのこと」として、武道との関わりを、こう書いている。

〈ベルツは日本の伝統的武術にも関心を持ち、弓術、剣道を推奨したが、とくに柔術については、維新後ほとんど忘れかけた状態にあったものを国民的スポーツになるまで育て上げた〉

これは知らなかった。日本の武道には並々ならぬ関心があったんだ。でも、柔術のところは、ちょっと分からん。明治になって、柔術はすたれた。嘉納治五郎が、柔術のよい所を取り入れ、改良し、スポーツとしての「柔道」をつくった。では、ベルツは、嘉納に協力して、柔道をつくることに貢献したのか。それとも、古流の柔術を保存し、普及させたのか。「解説」を

書いた人が、その方面には余り関心がないから、さっと流したのだろう。他の本を調べてみて、分かったら報告しよう。

さて、ベルツは、日本に来て、結婚し、子供も作っている。奥さんは、ハツという、大変な美人で典型的な日本女性だった。子供は二人生まれた。長男はトク、長女はウタ。「徳」と「歌」なのだろう。『ベルツの日記』は、この長男のトクが編集し、発行している。娘のウタは、悲しいことに、たった3才で死んでいる。明治29年（1896年）のことだ。日記に、ベルツはこう書いている。

「一度にあまり多くの人々の愛情を受けたためか、わずか3年の短い生涯を終えた」

この時の嘆き、悲しみは大きく、ベルツは、毎日毎日、このウタのことを思い出しては、書いている。岩波文庫の上巻の中で、10ページ以上も、ウタのことを書いている。読んでいても、ついつい泣けてしまう。

「愛するものが死んだ時には、
自殺しなけありません」

という中原中也の詩を思い出しました。

(2)娘の死去に皇后、皇太子のお悔やみが

かわいいウタが亡くなり、悲しみの手記が10ページ以上も続く。それは、驚きだが、何と、皇室からの弔辞が寄せられたのだ。「お雇い外人」が明治日本で、どれだけの地位にあったかを示している。又、どんなに国家にとって大切な人物とされていたかも分かる。明治29年2月28日の「日記」にはこうある。

〈皇太子は沼津から弔電をよせられた。皇后の遣わされた式部宮が見えて、ウタの死去にたいし、皇后の名代として弔辞を述べられました。

わたしたちの不幸にたいし、皇室からよせられたこの篤い同情には、とても感激どころの騒ぎではありません。何しろ皇室と、皇室に関した事がらいっさいにたいする日本人の観念からすれば、このようなことは破格の光栄であるからです。これは、そちらの皆さん（注：祖国のドイツのこと）にはもちろん、理解しにくいでしょう。しかし、誇張ではありませんが、多数の日本人は単にこのような栄誉のために、いつでも喜んでその命を切るでしょう〉

ベルツは〈国賓〉待遇だ。いや、〈国賓〉として来日する外国の元首以上

だ。だって、皇太子、皇后、天皇の生母二位局…などを診察していたのだ。江戸時代なら、考えられないことだ。尊皇攘夷の時なら、なおさらだ。「汚らわしい毛唐」なぞ、顔を見るのもいやだろう。ところが、診察までさせている。びっくりだ。皇室に出入りするのだから、政財界の偉い人たちも勿論、ベルツに診察してもらおうと、必死だ。『ベルツの日記』（下巻）の表紙にはこう書かれている。

「ベルツの交際は皇室や伊藤博文・井上馨ら多くの高官をはじめとしてあらゆる階層の人々に及んだ。それがこの日記を明治裏面史の興味深い記録としているが、ここにはまた内外情勢に対するかれの並々ならぬ洞察力がうかがわれる。だが何よりも我々をうつのは日本を愛してやまなかったベルツその人の姿である」

伊藤、井上だけでなく、大隈重信、西本願寺・大谷法王など日本のトップの人達を診察している。ベルツ一人でそれだけ出来るのかと驚く。ともかくベルツに診てもらいたいと思う。それだけ、ドイツ医学への信頼、憧れが絶大だったのだろう。

いや、医学だけではない。全ての分野に於いてそうだ。憲法はプロシアなどから学び、軍隊制度、教育、体育…あらゆるものを受け入れた。もう、〈日本〉なんてなくなる位に。普通、これだけ外国の文化を無制限に受け入れた。日本なんかなくなる。でも、〈日本〉であり続けた。溶けて流れるることはなかった。日本の咀嚼力なのだろう。

(3) 「日本の『謙遜』」がベルツには分からんし、歯がゆい

ベルツは日本を限りなく愛した。むしろ、日本人以上に。だって、日本人は、この当時、日本よりも外国の方がずっと進歩的で、優れていると思っていたからだ。特にエリートはそうだ。みんな、「外国は素晴らしい」と思い、その結果、「日本は遅れてる」「ダメだ」と思ったんだ。みんな、自虐的だったんだ。自虐と言ったら言い過ぎか。だったら、謙虚だったと言っていい。そして、これは大事な事だが、そういう「自虐的」な人々が、その後の日本を作ってきたのだ。

反対に、「日本こそ世界一」「植民地をもって当然だ」といった「自尊」「尊大」な人々は、何ともたらさなかった。戦争をして、国を破滅させただけだ。外の国に対する「優しさ」と「謙虚さ」。これこそが日本文化なんですよ。

でも、外国から来たベルツには、この日本の「謙虚さ」が奇異に映った。

又、イライラする。明治9年10月25日の『日記』には、こんな記述がある。

〈日本人に対して単に助力するだけでなく、助言もすることこそ、われわれ西洋人教師の本務であると思います。だが、それには、ヨーロッパ文化のあらゆる成果をそのままこの国へ持って来て植えつけるのではなく、まず日本文化の所産に属するすべての貴重なものを検討し、これを、あまりにも早急に変化した現在と将来の要求は、ことさらゆっくりと、しかも慎重に適応させることが必要です〉

日本は余りにも性急に近代化（=西洋化）しようと焦っている。しかし、もっとゆっくり慎重にやりなさいとベルツは言う。外国人の方が「正論」だし、外国人の方が日本のことを見守っている。それに比べて、日本人は…。

『日記』では、続けて、こう書かれている。これは重要だ。しっかり読んでほしい。

〈ところが、なんと不思議なことには--現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくないのです。それどころか、教養ある人々はそれを恥じてさえいます。「いや、何もかもすっかり野蛮なものでした（言葉そのまま！」）と。またあるものは、わたしが日本の歴史について質問したとき、きっぱりと、「われわれには歴史はありません。われわれの歴史は今からやっと始まるのです」と断言した〉

凄いですね。日本には歴史はない。これから始まる。なんて。今、こんなことを言ったら、「國賊！」「賣國奴！」「非國民！」と言われちゃうよ。でも、ベルツの周りの日本人は言ってたんです。ベルツが聞いたんだから、飲み屋で一般庶民に聞いたわけじゃない。酔っ払いに聞いたわけじゃない。政府の高官や、東大の先生、学生たちだろう。そんなトップの人たちが、これほど「自虐的」なことを大声で言っているのだ。

初め、『ベルツの日記』のことは司馬遼太郎の『街道をゆく』（朝日新聞社）で知った。この「自虐的」な日本人の発言も紹介されていた。何と情けない人々か！と思った。許せん日本人だ！と思った。

ところが、数年たった今、『日記』全体を読んでみると、感想が変わった。さっきも言ったように、こんな「自虐的」な人々が、その後の日本を作ったんだ。外国へのコンプレックスをバネにして、日本を近代化したんだ。だったら、彼らこそが最も「愛国者」だ。そう思った。

それに、日本人の「謙遜の精神」があったのだろう。贈り物をするにも、

「つまらない物ですが」と言って差し出す。謙遜だ。自分の家族は、「愚妻」「愚息」であると、謙遜する。自分や、自分の家だけではない。自分の国だって、謙遜したんだ。「愚国は、つまらん国です」「誇るべきことなんて何もありません」「歴史もありません」「おたくらに学んで、これからちゃんと歴史を作ります」…。そんな気持ちだろう。

でも、「日本を愛する」ベルツには、その過度の「謙遜」が分からない。歯がゆい。イライラする。「つまらん物ですが」と贈り物をされると、「つまらん物なら持ってくるな!」と思ったんだろう。文化の違いですね。

いや、当時の日本人は、「謙遜」じゃなくて、本当に、「日本に歴史はない」と思ったのかもしれない。だったら、それでもいいじゃないか。と私は思いますね。「自虐」も「愛国」のうちなんだ。

このことを何人かに聞いた。友人や、学校の先生たちに。ある人はこう言った。「徳川体制を倒してあたらしい国を作ったからじゃないの」と。倒した徳川の歴史は否定する。だから、そう言ったんじゃないのか、と。ウン、それもあるだろう。

「自虐的」な日本人への反撥、苛立ちが『日記』には随所に書かれている。ベルツは日本人よりも日本を愛し、日本の「西洋かぶれ」を心配している。たとえば、明治10年1月1日の日記だ。

〈今日の機会に、西洋の風習の誤った模倣ぶり、しかも粗悪なまでの模倣ぶりが、いつの日よりもはっきりと暴露された。--日本政府は、燕尾服とシルクハットと新年祝賀の公式礼装に制定することを適當だと考えたのである。かくて、喜劇的な点では全く奇想天外ともいうべき姿のものが首都の街路をうろつくことになった〉

なかなか厳しい。

ベルツは、皇室の信頼も厚く、日本を去る時は、特別に皇室から引きとめられた。東宮の侍医として5年の契約（それも非常に有利な条件で）が提示された。でも、それを蹴って、ドイツに帰国する。契約に縛られたくないかった、と言う。それに、30年も留守にした祖国に、一日も早く帰りたかったのだろう。しかし、東宮が病気になると、わざわざドイツから駆けつけてくる。それだけ皇室に信頼され、皇室の奥深く入ったベルツだから、秘密の話も耳に入る。別に悪意はないのだろうが、たわいない話として、こんなエピソードが紹介されている。明治24年6月6日の日記だ。

〈天皇は玉座が皇后の座と同じ高さにあることを、どうしても承服されなかった。それよりも高くせよとのことなのだ。ところが井上伯は、それに反

対だった。

ある時、伯が参内したところ、玉座の下に厚い絹の敷物がこっそり置いてあるのを発見したので、伯はこれを引きずり出して、室のすみに放り投げたが、これがため、大変な騒ぎが持上ったことはいうまでもない〉

(4) 「忠臣」と「乱臣賊子」は紙一重じゃね

エッ！こんなことは全く知らなかった。歴史じゃ習わんかった。何か、人間的というか、子供っぽくて、ほほえましい話じゃないか。明治以前は、天皇は、国民の前に姿を見せるることはなかった。側近に会うのでも御簾の中からだ。それが、明治維新以後、急に、外に出ることになった。ご真影も作られた。そして、玉座にすわる。その時、「外国ではこういう場合、皇后も一緒です」と教えられた。天皇だって驚いただろう。一般庶民だって、夫婦で一緒に出るなんて、しきたりはない。天皇も抵抗したのだろう。でも、重臣たちに押し切られた。さらに、皇后と同じ高さだという。それはおかしいと思った。そして…。

しかし、日本が近代化するにはこれは必要だと井上たちは思い、断固として強行する。（天皇が）そっと置いた敷物も、放って投げ捨ててしまう。凄いね。不敬であろうと何だろうと構わぬ。「お上も、そうしてもらわなくては」という強い信念からだろう。井上を弁護するわけじゃないが、その信念は買うね。

北一輝が言った「乱臣賊子の歴史」ということを思い出した。日本人は天皇を尊敬し、忠良な臣民だけだった。というのは嘘で、天皇に逆らい、時に、島流しにした。「乱臣賊子」ばかりではないかと北は言ったのだ。でも、これは紙一重だ。井上馨だって、「忠良な臣」であり、時には、「乱臣賊子」だった。伊藤博文なんかはもっと複雑だ。アンビバレンツだ。明治33年5月9日のベルツの日記だ。

〈一昨日、有栖川宮邸で東宮成婚に関してまたもや会議。その席上、伊藤の大膽な放言には自分も驚かされた。半ば有栖川宮の方を向いて、伊藤がいわく、

「皇太子に生まれるのは、全く不運なことだ。生まれるが早いのか到るところで礼式（エチケット）の鎖でしばられ、大きくなれば側近の吹く笛に躍らされなければならない」と。そういうながら伊藤は、操り人形を糸で躍らせるような身振りをして見せたのである〉

ひどいことを言ってる。不敬な奴だ。まア、親しさの余りに、〈同情〉してなのかもしれないが。続いて、ベルツは言う。

〈--こんな事情をなんとかしようと思えば至極簡単なはずだが、皇太子を操り人形にしているこの礼式をゆるめればよいのだ。伊藤自身は、それを実行しようと思えばできる唯一の人物ではあるが、現代および次代の天皇に、およそありとあらゆる尊敬を払いながら、なんらの自主性をも与えようとはしない日本の旧思想を敢然と打破する勇気はおそらく伊藤にもないらしい。

この点をある時、一日本人が次のように表明した。「この国は、無形で非人格的の伝統に慣れていて、これを改めることは危険でしょう」と。〉

これは考えさせられる指摘だ。今だって、問題は同じかもしれない。しかし、よくぞ、ここまで書いたものだと驚く。この『日記』は、ベルツの死後、息子トク・ベルツが編集し、1931年、ドイツで出版した。日本では、昭和14年に翻訳が出たが、「大事な所」は出せなかった。今、引用した皇室のこと、軍部のことなどだ。そして、敗戦後、昭和28年になって、やっと、それらが出せるようになった。そして僕らは、この、もの凄い『日記』を読むことができる。読んだ僕らもショックだ。そして、どう感じ、この教訓をどう生かすのか。それは僕らの問題だ。

【だいありー】

(1)10月17日(月) 「楯の会」と三島事件について週刊誌の取材を受ける。
午後2時。

(2)10月18日(火) ジャナ専の授業。ライター科の「時事問題」では、公安、盗聴と「思考盗聴器」について。文芸科の「現代史」では、天皇問題。そして、関節技を教えてやった。柔道3段、合気道3段だ。い言ったら、ホーッと皆、驚いていたので、調子に乗って、生徒を相手に、格闘技の実演をしてやった。これだけ見せておけば、「おじん狩り」されることもないだろう。夜、久しぶりに歌舞伎を見る。

(3)10月19日(水) 出版社と打ち合わせ。書けといわれてるテーマと自分の能力のギャップに悩む。どうも私は未熟だ。無能だ。「でも、運動家としての歴史が40年もあるでしょう。多くの人々にも会ってるし、そこで国のこと、民族のことを考えたでしょう」と言われたが。「いや、私には歴史はありません」「これから歴史が始まるのです」と自虐的に答えてしまった。いかんな。『ベルツの日記』のようだ。

TSUTAYAで「検死医マッカラム」を3本借りる。世界の推理・探偵ものを全て見ようと決意して、実行している。TSUTAYAだけで何百本見たか分からん。そのうち中間報告をするよ。

それと必要があってチャップリンの「殺人狂時代」を借りた。「一人殺したら悪党で、百万人殺したら英雄になる。数は殺戮を聖化する」という言葉は凄いやね。

(4)10月20日(木) 朝、本の打ち合わせ。それから河合塾コスモの授業。7時、中野ZEROホール。日韓共同ドキュメンタリー映画「あんにょん・サヨナラ」を見る。力作だった。私も出ていた。と思ったら、カットされていた。「野中広務さんと鈴木さんのコメントは何とか入れたかったんですが」と取材した人は言っていた。元気のいい右翼の人は多勢出ていたが、我々二人は〈過激〉じゃなかったからか。

(5)10月21日(金) 1時、テレビの取材。夜、志の輔さんの落語を聞く。

【お知らせ】

(1)10月26日(水) 7:00p.m.から一水会フォーラム。高田馬場のシチズンプラザです。「見沢知廉氏を語る」です。木村三浩氏、僕などが出ます。又、見沢氏を知る多くの人が来て語ってくれます。

(2)11月5日(土) 2:00p.m.「見沢知廉さんをしのぶ会」が日本出版クラブ(神楽坂)で行われます。発起人代表は島田雅彦、福田和也、鈴木邦男です。会費は1万円です。遺著『ライト・イズ・ライト』をお持ち帰り頂きます。

(3)11月8日(火) 7:00p.m.から高田馬場のライブ塾(トリックスター)です。切通理作さん(評論家)の「見沢知廉の〈世界〉」です。

(4)今発売中の「週刊金曜日」(10月14日号)に「新シリーズ・この国ゆくえ」の第1回として、「浅沼稻次郎刺殺事件」を特集しています。意欲的な企画で、力作です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張10月31日 猫は知っていた

(1)一水会の若者も出ていた。「ニッポンの愛国心」で

10月25日(火)、TBSの「筑紫哲也NEWS 23」は、「ニッポン人と愛国心」の2回目で、「右翼運動に燃える若者」をやっていた。よかったです。一水会の若者、山口剛君も出ていた。京都に住んでいて、一水会のフォーラム、街宣、活動のたびに上京してるんですね。偉いですね。「右翼らしからぬ」普通っぽいところがいい。

自分の部屋には日の丸は掲げてない。それもいい。心の中にしまってある。弁当を食べながら語っているのもいい。街宣（街頭宣伝）は今まで全くやったことがない。でも、決心して、やる。そのデビュー戦も紹介されている。右翼らしからぬ演説風景もいいです。一水会のフォーラムも紹介されていた。なぜか若い女性が多かった。講師は元赤軍派議長の塩見孝也さん。これも、「右翼らしからぬ」光景だ。一水会の木村代表、横山書記長も出て、喋っていた。

いい番組だった。他の右翼の人達も出ていた。頑張って活動している人たちの街宣風景が紹介されていた。中でも感動的なのは、たった一人で、ハンドマイクを持って歩きながら演説していた人だ。これは凄い。電池がなくなって、コンビニで買っているシーンも、いい。

久しぶりに右翼の活動がテレビで紹介されたような気がする。昔は、よく取り上げられていたのに。あの頃は、時代が激動期だったからか。若者がドッと右翼に入ってきた。テレビでも、右翼がよく特集されていた。一水会もよく出ていた。「トウナイト」では、見沢知廉氏たちがヘルメットを被って出演し、過激な事を言っていた。その頃をつい思い出してしまった。

でも、最近は、又、右翼・民族派が、けっこう取り上げられてる。森達也

監督の映画「A 2」では、後半、右翼が大挙して出演している。対オウムの闘争だが、抗議運動をする右翼の人達の様子が紹介されている。これは貴重な映像だ。

それと、先週のこの欄でも紹介したが、日韓共同で作ったドキュメンタリー「あんによん・サヨナラ」だ。なかなかいい映画だった。ここにも右翼が、かなり出てくる。靖国問題を取り扱った映画だ。在日韓国人の女性が主人公だ。お父さんが戦死した。靖国神社に祀られている。それを聞いて、取り消してくれ、と靖国神社に行く。宮司さんと公開討論をする。よく、靖国神社も撮らせたものだと思った。

又、靖国神社に参拝に来ていた右翼の人達とも討論する。激昂した右翼の人達ともみ合いになる。「朝鮮人は日本から出ていけ！」と叫ぶ人もいる。凄い映画になった。

さらに、韓国人、中国人、日本人などに、インタビューし、それも入っている。日本でも名越二荒之助さんや学者、評論家、右翼の活動家も出て喋っている。皆、元気がいい。私も取材されて2時間ほど喋ったが、映画ではボツになっていた。言ってることに〈元気〉がなかったからだろう。

戦争中、韓国、台湾の兵隊さんもいた。死んだ人は靖国神社に祀られた。それはその時にしたら、当然だし、仕方なかったと思う。植民地にしたのは悪いことだが、台湾の人、韓国の人も、当時は「日本兵」だった。彼らだけを靖国に祀らないとなったら、差別だと言われただろう。

しかし、戦争が終わり、独立した。「靖国合祀」はやめてほしいと言う。それは、やめたらいいだろうと私は言った。又、自衛隊の人などが、護国神社に祀られるのがいやだというならば、それもやめたらいい。いや、少なくとも自衛隊に入る人は、もし死んだら、どこに祀られたいのか、きちんと届け出るべきだ。これからは、きっと改憲されるだろうし、軍隊になるだろう。その時、又、問題になる。

日本の右翼は、戦前、韓国の植民地化に対し反対し、闘った人も多い。対等の友好・連帯を考え、革命運動を支援した。インドや、中国、インドネシアなどアジア各国の独立運動を支援し、闘った。そのことも、キチンと教えるべきだ。だからといって、アジアの国々は日本に感謝すべきだと言うことではない。でも、そうした人々の〈志〉は思い出し、これからのアジアを考えるべきだ。

そういう話をした。必死に、日韓友好、アジアの中の日本を考えようとした。だから、どうも〈元気〉がない。過激じゃない。「つまんない」「暗

い」「右翼らしくない」と思われ、ボツにされたんだろう。それも仕方ない。野中広務の発言もボツになったというし。あの人も、「自民党らしからぬこと」を言い、人権派的なことを言ったからだろう。

でも、文句を言ってるんじゃない。2時間のこの映画は、実によかったし、感動的だ。いろんな人々の意見の違いも浮き彫りにされていたし、皆が考える材料になったと思う。野中さんや僕が入ったら、かえって問題点がぼけただろう。

(2) 「週刊金曜日」では山口二矢が特集されていた

さて、次は「週刊金曜日」（10月14日号）だ。何と、1960年の浅沼稻次郎刺殺事件を特集している。山口二矢（17才）が浅沼委員長を刺殺する写真が大々的に出ている。「シリーズ・この国のゆくえ」の第一回として、山口二矢だ。編集部の成澤宗男さんが4ページ書いている。又、佐高信が、「“人間機関車”ヌマさんの死」を2ページ書いている。

佐高は、「沢木耕太郎の罪」について書いている。山口二矢を扱った本では、二冊が有名だ。沢木耕太郎の『テロルの決算』と大江健三郎の『セヴァンティーン』だ。

佐高は、沢木の本について、こう言う。

〈だが、浅沼を刺殺した十七歳の少年、山口二矢を描いたこの作品では、山口と浅沼の生涯が交互に描かれる。そして、「両論併記」ならぬ「両人併記」で、結果的に山口が格段に持ちあげられてしまう〉

と言う。でも、これは、仕方がないと思うが。佐高にすれば、又、「金曜日」にすれば、「言論を封殺したテロ」としての視点が甘いという不満なのだろう。

実は、この特集のことで、僕も事前に取材された。でも、僕のコメントは出てない。やっぱり、〈元気〉がなくて、つまらなかったのだろう。それは、こちらが悪いのだ。不満に思うことではない。それに、予備取材だから、何もコメントを求めてきたわけじゃない。僕の勘違いだ。しかし、最後の〈注〉のところには僕の発言（前に喋った右翼と公安のこと）が引かれていた。

それにしても、昔、この「週刊金曜日」で、大江健三郎の「セヴァンティーン」について書いたな、と思い出した。山口二矢をモデルにした、「セヴァンティーン」は今、新潮文庫で読むことが出来る。しかし、「セヴァンティーン」第二部の「政治少年死す」は右翼の抗議で絶版になり、読めない。ノー

ベル賞作家の本が絶版だなんて、国辱ものだろうと私は思い、「週刊金曜日」に「復刊を求める」という原稿を書いた。右翼から猛反撃を受けることを覚悟して書いた。この頃は私も〈元気〉があったのだろう。

そうだ。日韓共同ドキュメンタリー「あんによん・サヨナラ」で思い出した。今年の夏は、他にも韓国のテレビ局から取材された。一つは、みやま荘で取材された。もう一つは、喜納昌吉さんのシンポジウムに出た時、休憩時間に取材された。でも、これはどうしたんだろう。やっぱり〈元気〉がないから、ボツになったのだろう。今年の夏は、韓国から三つ取材されて、全部ボツか。3戦全敗だ。日本のテレビ局からも別のことでの取材されたが、これもボツだろう。まア、発言がつまらないし、元気がないからだろう、仕方ないさ。…とひがみながら、われ泣きぬれて猫とたわむれていたのでありました。

西武新宿駅の隣りの100円ショップには「マタタビ」が売っていると聞いて買ってきた。100円で2袋だ。近所の猫にやったら、ガツガツと食べて、うっとりしている。酔っている。それから、毎日、ねだられるようになった。面倒だから、一緒に生活している。私の気持ちを分かってくれるのは猫だけだし…。

(3) 「AERA」では三島由紀夫と「楯の会」の血判状が特集されとった

と思いつつ、25日(火)は、ジャナ専に行った。「あんによん・サヨナラ」と、猫に挨拶をして。そしたら、電車の中吊りに出ていた。「AERA」(10月31日号)の広告だ。

〈三島事件、35年目の真実。
「幻の血判状」を初公開〉

初公開したのは元楯の会学生長の持丸博氏だ。そういえば、その件について私も取材されたな、と思った。でも、どうせボツだろうよ、と思って、念のために買ったら、ちゃんと載っていた。嬉しかった。初めて、メディアに載ったよ。家に帰って猫に報告したら、猫も喜んでくれた。猫だけがオラの気持ちを知ってくれちょる。

そうそう、あの井脇ノブ子さんがらみで面白い記事が出とった。「週刊新潮」(10月20日号)だ。

〈井脇ノブ子の「元婚約者」と噂された「衛藤晟一」の困惑〉

井脇さんは、男と見紛う容姿とド派手な衣装で注目を集め、マスコミにも

出まくり、自分の半生を語っている。その中で、かつて婚約を諦めた人がいたと明かした。これは一体誰か、と「週刊新潮」は取材したのだ。

「以前、彼女が言ってたよ。相手は地方議員だったけど、国会議員になるというから泣く泣く別れるしかなかったの。とね」とある自民党関係者が言ったそうな。又、こうも言うとる。

「そこで噂になっているのが衛藤晟一氏なんだよ。というのも、井脇さんは別府大学の学生時代、生長の家の学生組織『生学連』に所属し、右派系の運動に参加していた。同じ頃、大分大学で『生学連』に所属して後に大分市議、県議と進み、国会議員になった男がいる。それが彼女より一つ年下の、衛藤氏といいうわけなんだ」

おっ、「生学連」が初めて出てきたな、と思いましたね。私はこの「主張」では何度も書いてるが、井脇さん、衛藤氏は「生学連」の活動家で、この時、私は生学連書記長で、何度も大分県にオルグに行った。その後、生学連を中心にして「全国学協」が出来た。私は委員長で、井脇さんは副委員長だった。衛藤氏も中央委員だった。でも、私は無能だから、一ヶ月でクビになった。

という話は何回か書いた。でも、マスコミでは、どこも、「生学連」「全国学協」という名前は出てこなかった。宗教のことは書きづらいのかな、と思っていたら、この「週刊新潮」は、バッカリ書いていた。

それにしても名指された衛藤氏、喜んでいるかと思ったら、言下に否定。迷惑してるんだそうな。では、果たして誰なんでしょう。少なくとも私じゃありませんよ。私なんて、どうせ皆から無視され、嫌われ、馬鹿にされてましたから。

さて、25日、ジャナ専に行ったら、生徒が、「あの猫はどうも冤罪ですね」と言って、新聞記事を見せてくれた。10月24日付の産経新聞だ。私も読んだ。埼玉の老人ホームでおばあちゃんが猫に右足の指、5本を全部食いちぎられた。という事件だ。口のまわりに血をつけていた猫が近くをうろついていたので、逮捕された。猫は否認しているが、警察は、彼の犯行に違いないと拘留している。そんな事件だ。

それに対し、産経は、この猫は、「シロかクロか」という特集を組んでいる。特集は大ゲサか。7段の力コミ記事を書いている。シロ（無罪）か有罪（クロ）か。かけているのだ。うまいね。だって猫の名前は、シロかクロかだ。たまに、「タマ」という名前もいるけど。

この記事によると、こうだ。猫に指を食いちぎる力があるのか。又、猫

は、口についたものはすぐに舐める。口の回りに血がついていた、というのは「作為的」だ。じゃ誰がやったか。看護婦か同室の人か。でも、日本の警察は世界一優秀だから、傷口を見たら分かる。刃物で切ったか、動物の歯でかみ切ったか。この程度はコナン少年だって分かる。

でも、たとえ動物の歯だとしても、タヌキか犬か、他の動物が入ってきて食いちぎったのではないか。という説もある。じゃ、猫の腹を割いてみたらいい。本当に指を食ったのなら、胃の内容物にあるはずだ。なかつたら、シロだ。でも腹を割いたら死んじゃうか。死んで無罪を証明されても意味ないか。

それに、専門家で、「まれにだが猫が食いちぎることもある」という人がいた。老人の体が壊死（えし）し、魚が腐敗したようなにおいを発し、感覚が麻痺しているといった条件が重なれば、猫である可能性は否定できないと。

この専門家は『死体は語る』（文藝春秋）などの著書がある元東京都観察医務病院長の上野正彦氏だ。ウーン、果たしてどうなんでしょう。動物愛護団体は反撥してるというし…。

もしかしたら、足の指がピクピクと動き、それを見て、ジャレついたのかもしれない。小さな動くものには、すぐ飛びかかるから、勝海舟は、子供の頃、立小便をしていて、犬にチンチンをかじられ、大怪我をした。これも、プランプランとゆれているので犬が飛びかかったんだろう。オラも子供の頃、クレヨンしんちゃんのように、フルンフルンと回して遊んでいたら猫にジャレつかれ飛びかかられた。危なかった。だからよい子の皆さんには決してマネしないように。

でも、ジャレつきはしても、食いちぎる力はないんじゃないかな。猫には。この問題は、これからも考えてみましょう。なんとか、この謎は解かない。じっちゃんの名にかけても。

しかし、オラも寝たきりになって、プランプランしてたら、同居の猫に飛びつかれ食いちぎられ、それで即死。なんて事になったら嫌だな。かっこ悪いやね。何もいいこともなく、かわいそうな一生だったね、この人は。と暗くなつたところでオワリ。

(追記) これを書いた後、10月27日、又、事件だ。静岡市で保育園の園児の列に車が突っ込み、3人重傷。37人が病院に運ばれた。猫をよけようとしてぶつかったという。この猫も逮捕されたのか。あるいは、例の「冤罪の

「猫」の復讐で犯行を行ったのか。謎だ。

【だいありー】

(1)10月24日(月) 「月刊タイムス」の原稿をやっと書いて送る。三島由紀夫と野村秋介さんの話だ。連合赤軍からみで。野村さんは永田洋子に会いに行っている。そしてチャップリンの「殺人狂時代」を例にひいて連赤論を書いている。三島は連赤のことは知らん。自決後に連赤は起きている。でも〈関係〉はある。という話は書いた。11月12日発表だ。

(2)10月25日(火) ジャナ専の授業。思い切って偏向した授業をしてるから、そのうちクビだろう。山口二矢とテロの話をした。夜は柔道。学生と闘ってナマ爪をはがしたんで、テーピングしてたら、「猫に食いちぎられたの?」と聞かれた。例の猫のことは、どこにいっても話題になってる。

(3)10月26日(水) 昼は図書館でお勉強。夜は一水会フォーラム。「見沢知廉氏を語る」だ。木村代表などと共に私も思い出を話した。見沢氏を知る多くの人々も駆けつけて、思い出を話してくれました。

(4)10月27日(木) 河合塾コスモ。森達也さんと森巣博さんの『ご臨終メディア』を皆で読んだ。

(5)10月28日(金) 7時、牛込簗笥区民センター。保坂展人、辻元清美、辛淑玉、森達也、石坂啓のシンポジウム「憲法危機の時代とどうたたかうか」を聞きに行く。勉強になった。後半、発言させられた。二次会、三次会と付き合い、朝になった。

(6)週休は工作。秘密工作かな。プラモデルの工作かな。謎ですね。この人は。

【お知らせ】

(1)11月5日(土) 2:00p.m. 「見沢知廉さんをしのぶ会」。日本出版クラブ(神楽坂)。発起人代表は島田雅彦、福田和也、鈴木邦男。会費は1万円。

(2)11月7日(月) 月刊「創」発売です。アルカイーダと疑われて逮捕されたイスラム・モハメド・ヒムさんことを書きました。さらに元公安の北芝健さんのことも書きました。

(3)11月8日(火) 7:00p.m.から高田馬場のライブ塾(トリックスター)

で、切通理作さん（評論家）とトーク。「見沢知廉の〈世界〉」です。ト リックスターはTEL03(5331)3261です。

(4)11月10日(木) 7:30p.m.からネーキッド・ロフト。三上治さん（評論家）と、「憲法改正について」。三上さんは元学生運動の大物で、ある党派の代表でした。昔、『保守反動思想家に学ぶ本』（別冊宝島）で、三島について対談しましたが、全く太刀打ちできず、惨敗したことがありました。この日も、そうなるでしょう。勝ち目はありません。敗けるのを知っていて闘うなんて、戦争中の日本みたいです。

(5)直木賞作家の車谷長吉の本を最近、集中的に読んでる。賞をとるまでの苦労は大変なもんじゃね、と思った。

『廣世捨人』（新潮社）を読んで驚いた。彼は、昔『現代の眼』の編集部にいたんだね。編集部員は皆、セクトの人ばかりだったそうな。その時のことは実にリアルにかかれている。丸山実編集長も出てくる。この『現代の眼』に、野村秋介さんと私の対談「反共右翼からの脱却」が載って、〈新右翼を作った対談〉と言われた。しかし、その時は車谷さんは、すでに辞めていたのだ。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張11月7日

長寿大国ニッポンの〈幸せ〉

(1)サプライズです。「百歳以上」は何人いるでしょうか

長寿大国ニッポンについてのお話だ。では、ここでクエスチョン。百歳以上のお年寄りは日本に何人いるでしょうか。

学校の授業の時、生徒に聞いてみました。

「10人位じゃないの」

「100人位かな」

「135人位じゃないの」

と、皆、控え目だ。「早く答えを言えよ」と、ジリジリしている生徒もいる。いかんな。自分の頭で考えなくっちゃ。生きて行くというのは、すべからく〈推理〉なんだよ。ものを書くのも〈推理〉。生きることは、全て「謎解き」なんじゃ。では、ここでヒント。「昭和38年（1963年）には百歳以上は153人でした」

今から42年前ですね。第一次安保闘争から3年目です。安保の年は激動の年です。山口二矢が社会党の浅沼委員長を刺殺し、国会前では樺美智子さんが殺された年です。三井三池闘争では労組員が殺された年です。

そんな「革命前夜」の激動の年だった1960年。それから3年後の1963年。百歳以上のお年寄りは153人でした。では今は、何人でしょう。

「85人」（少なくなるかよ！）

「200人」（もっとこえちよるよ）

「じゃ、800人」

「えーい。面倒だ。1000人」（セリやってんじゃないんだよ）

「いや、42年前に153人だとすると、10倍位いってるだろう。だから1530人！」

「よーし、思い切って、5000人！」

まだまだ正解は遠いですね。では、第2のヒントです。NHKでは落語家の小朝が全国を回って、司会をしてましたね。歌番組だったのか、バラエティか忘れた。「お江戸でござる」だったかな。その合間に、その地方の100歳以上のお年寄りをスタジオに招いていた。毎回、4、5人いたと思う。「元気ですね」「長生きの秘訣は何ですか?」と聞いていた。お年寄りは、「クヨクヨしないことですよ」「偏食しないことですよ」なんて答えている。

各県を回る。いつも、4、5人の「100歳以上」がいる。ということは、その県には、もっともっと「100歳以上」がいるんだ。全国で都道府県は47かな。スタジオに出てる人の10倍はその県にいるとして、2500人は確実にいる。いや、100倍かもしれんぞ。つまり、スタジオに来てる人はその県の「100歳」の1%だ。これくらいが、ありうる数値だろう。と、推理を重ねてゆく。さらに、今、女性の平均寿命は85.59歳だ。とすると、90歳、100歳は、想像以上に多いということだ。

はい。では、解答です。お待たせいたしました。100歳以上は、何と、2万5606人です！　凄いですね。こんなにおられるとですよ。

それにしても、あまり見かけませんよね、百歳は。オラも友達に100歳以上の人はない。犯罪者の友達はいっぱいいるけど100歳以上はいない。もう少し経ったら、皆、「100歳以上の犯罪者」になるのだろうが。又、100歳以上の赤軍派は500人。100歳以上の中核派は1000人とか。でも、今は友達に100歳以上はいない。周りの友達に聞いてもおらんじゃろう。「うちのひいおばあちゃんは100歳だ」とか、「親類に100歳がいる」なんて。周りに全くおらん。100歳以上の「芸能人」はキンさん、ギンさんだけだ。（もう亡くなつたっけ？）。しかし、僕の周りにはおらん。でも、全国では2万5606人もおる。

では、次にクエスチョンだ。「だったら、90歳以上は何人おるでしょう？」。

「うん。親類のおばあちゃんは91歳だ。だから結構いるだろう。5万人位かな」

「100歳以上の2倍じゃ少ない。10倍はいるだろう。だから20万人」「そんないるかよ。10万人位だ」

…という答えが飛び交いました。

さて、解答です。

90歳以上は何と、100万人なんです！

「ゲー！ いすぎだよ」と一番前の女の子が絶叫してました。でも事実なんです。凄いですね。

ここで、再び「100歳以上」に戻ります。42年前は、153人。今は2万5606人。その推移をたどってみませう。

昭和38年に153人。

昭和56年に1000人。

平成6年に5000人。

平成10年に1万人。

平成15年に2万人。

そして平成17年に2万5606人です。

グングンと、元気に成長してます。4年ごとに倍々ゲームで伸びてます。お年寄りの力です。成長期です。頼もしいです。

(2)もうちょっと頑張れば、「平均寿命は百歳」になる！

ここで、平均寿命を見てみます。昭和38年は（女性）平均寿命は71.34歳。それが、平成16年には85.59歳だから、誰だって、85歳までは生きられるとよ。90歳も常識だ。

ちょっと頑張れば、100歳まで生きられる。産経新聞（9月14日付）には、恐ろしい、いや、もとい、喜ばしいニュースが載ってます。このまま行くと、50年後には「平均寿命は90歳」になる。100年後には、「平均寿命は100歳」になると！ つまり、「人生一世紀時代」です。

東京都老人総合研究所（板橋区）の白沢卓二・研究部長は、こう予測する。

「医療の進展とあいまって50年後の平均寿命は90歳。百年後は百歳。今世紀初頭に生まれた、特に女児は来世紀まで生きることになりそうだ」

そうすると、愛子さまは女帝になられて、百歳を迎える。古事記の世界に戻る。あの頃は百歳以上の天皇がたくさんおられた。だから記紀は嘘だという学者もいるが、実は本当だったんですね。平安時代、女帝の時代に死刑は廃止されたから、今度もそうなる。長寿社会だから、死刑はなくして、「懲役150年」とか、「250年」とか宣告される。それで生き抜いたら、無

罪放免だ。いいことだ。

「老人総研」の白沢部長の話だ。さらにこう言っています。

戦前から戦後にかけ上下水道の整備など衛生環境が改善したことや、農業の安定で栄養状態が向上したことが長寿安定の理由だという。

さらに医療の進歩で、結核などの「死の病」を克服。死亡率が低下したことも理由にあげられる。そうだね。一昔前の文学は「肺病文学」といわれる位、肺病（結核）を扱ったものが多く、書く人も、病いを持ちながら書いた。肺病になると、心が澄んで、健常人には見えない世界が見えてくる、と言う人もいる。「文学者になる為には、まず肺病にならなくては」と命がけの決意をした人もあるそうな。

では今、「死の病」というか、大きな病いは何か。現代人の三大死因は「がん」「心疾患」「脳血管疾患」だ。これを克服すれば平均寿命は男性で8.74年、女性で7.54年、それぞれ伸びることが分かっている。という。

エッと思った。たった7歳か8歳なの。この「三大死因」を克服したら、もう人間は死なないだろうに。平均寿命は100歳どころか、200歳にだってなる。そう思ったが、「老衰」はあるんだろう。じゃ、「老衰」を治したらいい。治らんのかな。

ともかく、がんと心臓と脳だ。いくら身体に気をつけていても、病気にはなる。ではどうするか。ストレスをなくす。無理をしない。これしかない。百歳以上の人々、「長生きの秘訣」を聞くと、皆、そう答えている。100歳になると、もう無理をしないだろう。それに、もうストレスもないだろう。でも、寝たきりで100歳というのも悲しい。

と思っていたら、「現役」の人もいるんだね。これは心強い。やはり産経新聞（9月14日付）だ。

〈長寿のお年寄りの中には今も現役の先生もいる。来年三月に百歳になる東京都世田谷区の渡辺直二さんは現役のそろばん教室の先生。今も週三回、自宅で小学生を“熱血”指導し「子供たちが習いに来るうちは続けたい」。長寿の秘訣は「どこに行くにも極力歩くこと」だそうだ〉

そうか。歩くことですか。そして、野菜を食べ、枝豆を食べ、魚を食べる。間食はなるべくしない。インスタント食品も食べない。タバコはやらない。酒はほどほどに。うん、私のようですな。夏目漱石の弟子で内田百?（ひやっけん）という文学者がいる。ユーモラスな楽しい作品が多い。彼がこんなことを書いていた。長生きをしたけりゃ、酒やタバコをやめなさい

と。「子供を見なさい。酒やタバコをやらないから、皆、長生きじゃないか」

これには苦笑した。幼稚園児や小学生は酒もタバコもやらん。女もやらん。バクチもやらん。だから健康で、大人になるまで生きている。長生きだ。ウン。真実だ。じゃ、大人だって、酒、タバコ、女、ギャンブルをやらなきゃ、ずっと長寿なわけだよ。

あれ。更に凄い「現役」がいるよ。113歳の歌人・皆川ヨ子さんだ。この人は、「長寿日本一」なんですね。長寿チャンピオンなんだ。カタカナの「ヨ」に「子」だ。変わった名前だヨ。113歳だから、江戸時代か鎌倉時代の生まれかと思ったら、何だ明治だ。明治26年（1893年）生まれなんだ。

〈3年前に特別養護老人ホームに入所。車いすを使っているが、入所者仲間と一緒に歌うなど施設行事にも進んで参加。食事もまだ自分で取れる。性格は穏やか。耳は遠いが、時折冗談を言って周囲を和ませるという〉（「世界日報」9月14日付）

でも、どこが「現役の歌人」なんだって？ そうですね。すみません。私が勘違いしたんです。見出しに、「歌を仲間と一緒に」と出てたから、てっきり、和歌をよんでもると思ったんです。ほう、113歳の女性歌人か。凄いなと思ったんです。でも、違いましたね。早トチリでした。でも、113歳で、カラオケか何かしらんけど、歌をうたうだけでも立派です。元気です。

(3) 「怖がられる翁」になってやるぜよ

それと、気になったんですが、百歳以上でも、「非公表」の人が14人いるんですね。「公表してくれるな」といえば、今は、しないんです。これも個人情報保護法の影響なんでしょう。「おめでたいことだ。なんで隠すんだ」と疑問に思う人もいるかもしれない。しかし、「騒がれたくない」「静かに暮らしたい」と本人や家族が望んでるんだそうな。

百歳になった時、その時一回だけ、マスコミが押しかけるんならいいか。敬老の日ともなれば、毎年毎年、押しかけられる。それが面倒くさいんだろう。それと、家族のプライバシーも書かれて、嫌なんだろうね。美談だけとは限らんからね。特に、家族全体になると。

「百歳なのに愛人がいた」「百歳なのに元過激派だった」「百歳なのに刑務所に入っていた」…なんて書き立てられたら嫌だ。そんなとこかもしれん。

日本の高齢者対策で一番いけんことは（と、急に真面目になる）、高齢者

に「生きがい」を与えないことだ。高齢者になったら、こんなにいいことがあるんだ。だから頑張って長生きしましょうね。という励ましたよ。たとえば、幼稚園児なら、「小学生になったら。小学生になったら。友達百人できるかな…」と歌って、入学を楽しみにしている。小六になったら、「中学生になったら…」と楽しみだ。高校生は大学生になるのを楽しみにする。「大学生になったら。大学生になったら。百人レイプ出来るかな」と歌っていた人もいた。そして早大のスーパーフリーというサークルに入った。

20歳になったら、堂々とタバコをやれる。選挙権もある。乱交も出来る。これだって、ささやかな楽しみだ。じゃ、高齢者は？　ないんだな。「映画館は割引きになる」。これ位だ。1800円が1000円になる。でも、金をとるんだ。それに、「シルバー」なんて言いにくい。中には、「年寄り！」と大声で言って券を買ってる人もいる。ヤダね。

蛇足ながら。映画館では「60歳以上」がシルバー料金だが、寄席では「65歳以上」がシルバー料金だ。つまり、「老人」の線引きが違う。落語を聞きにくるのは圧倒的に老人が多い。シルバーを「60歳」にしたら、皆、割引きになっちゃう。そういう心配からだろう。その点、歌舞伎や芝居なんて、シルバー料金はないね。70になっても80になっても、一般の大人料金で見てくれ、というわけだ。この方が平等でいいやね。

10月31日、第三次小泉内閣が発足した。18人の閣僚を見たら、60歳以上が10人以上いた。幹事長など自民党三役は、3人とも60歳以上だ。だからといって、誰も、「シルバー内閣」とは言わない。「老人内閣」とも言わない。永田町では、60歳はまだまだ若いのだ。一般社会ではもう「定年」だといわれ、映画館に行くと「シルバー」と言われて、嫌な思いをするのに。永田町では、まだまだ若い。これだけはいい点だね。政治家の。

ここで、ちょっと逆説的な話をする。昔は、「翁」と呼ばれるのは憧れだった。評論家の呉智英さんに会ったら、「早く老人になりたかった」と言っていた。「呉智英翁」と呼ばれたかったという。昔の日本は、その点、老人を尊敬する社会だったんだろう。それだけ、老人に威厳があった。仕事でも生活でも、老人は「知識の宝庫」だった。又、天災、人災の時だって、老人の体験、知識に学ぶしかなかった。テレビもラジオもないし、パソコンもない。昔の情報をすぐに引き出せない。つまり、老人の「頭脳」だけだよ。頼りになるのは。「うそさな。50年前の地震の時はこうだった」「60年前の津波の時はこうだった」と語ってくれるし、「だから、こうしろ」と指針を出してくれる。又、全国のいろんな話を知っている。それを聞きたく

て、人々も集まってくる。

落語だって、大家さんとか、長屋のご隠居さんなんてのは、物知りだ。八つあん、熊さんが、分からんことがあると聞きにくる。いいよね。こんなのは。

そういう、威厳のある老人になりたいやね。そして雨にも負けず、風にも負けず、ガキの「オッサン狩り」にも負けずに、強く生きませう。

【だいありー】

(1)午前中、取材。3時から新宿の美禄亭で、「玉川信明さんを偲ぶ会」。玉川さんは昔から知っていた。多分、竹中労さんに紹介されたのだろう。初め、『中国アナキズムの影』(三一書房)を読み、衝撃を受けた。辻潤、山岸巳代蔵のことも書いている。アナキストだった。リバータリアンだ。又、プロレスが好きで、『新雑誌X』や『プロレス・ファン』で、プロレスについて私と対談したこともある。ジャナ専の先生もしていて、そこでご一緒した。革マル派の指導者・黒田寛一氏と若い時からの友人で、その関係で、『内ゲバにみる警備公安警察の犯罪』(あかね図書販売)の編集人になっている。僕は読んで、「創」や『公安警察の手口』に紹介した。紹介してくれてありがとう、と言われたが、「ここは間違っている」「ここは君の勘違いだ」と、かなり厳しく批判、指摘された。それもなつかしい。

「偲ぶ会」には昔の仲間、大澤正道さん、それに現代書館、社会評論社、こぶし書房、あかね図書出版…の人たちなどが来ていた。

(2)10月31日(月) 午後1時から5時まで東京地裁。日本赤軍の重信房子さんの裁判を傍聴に行く。弁護人の最終弁論もよかったです。大谷弁護士は感極まって涙声になっていた。重信さんの最終陳述も感動的だった。前半はお父さんのことを中心に話す。お父さん(重信末夫さん)は右翼・民族派の運動家で、血盟団に関係した。そのお父さんから、「よき日本人になれ」と教えられた。しかし、「民族主義なんて、反動的だ」と思った。それがアラブに行って、そこの人々が民族主義に根差して鬪っているのを見て、お父さんの考えを理解した。「今は、父の教えが分かります」という。いい話だ。僕は、お父さんに会って話を聞いたがあるので、特に、そう思った。僕のために語ってくれてるようだと思った。お父さんのインタビューは、僕の対談集の『右であれ左であれ』(エスエル出版会)に入っている。読んで下さい。

閉廷の時、重信さんの近くに行って、頭を下げたら、「あっ鈴木さん。あ

りがとう」と声をかけられた。嬉しかった。驚いた。初めて会ったのに、知ってくれた。

重信さんは「無期懲役」を求刑されている。ひどい話だ。「日本赤軍の女頭目」とマスコミに書き立てられ、それに踊らされて、検察側も厳罰で臨んだのだろう。判決は来年の2月23日(木)午前10時から。

(3)11月1日(火) 午前中、ジャナ専の授業。「時事問題」では皇室典範の改正、女帝問題について。「現代史」では、三島由紀夫について講義する。

夜7時から、出版関係の人、5人と会う。「月刊タイムス」で今、「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」を連載しているが、そこの社長が声をかけてくれた。有田芳生さんとも久しぶりに会った。「すごいね。『街道をゆく』を全巻読んだんだって」と言う。このHPを読んでくれたんだ。光栄です。「今、カバンの中には三島由紀夫全集が入ってんの?」「いや、家においてきました。今は新潮現代文学(全80巻)の小島信夫を読んでます。もう10冊で全巻読破です」といった話をした。その他、いろんなことを話した。貴重な話を聞かせてもらった。

(4)11月2日(水) 夜、柔道。

(5)11月4日(金) 7時から銀座ライオン。河合塾の牧野剛先生の還暦を祝う会。沢山の人が集まり祝いました。

(6)11月5日(土) 2時から出版クラブ。見沢知廉さんを送る会。100人以上が集まり天才作家の死を悼み、その人間、作品を語り合いました。私も挨拶をしました

【お知らせ】

(1)11月8日(火) 7:00p.m.高田馬場のライブ塾(トリックスター)で。切通理作さんに「見沢知廉の〈世界〉」を語ってもらいます。切通さんは『山田洋次の〈世界〉』(ちくま新書)を書いており、〈寅さん〉には詳しい。塩見孝也さんも寅さん大好き人間で、「寅さんは永久革命家だ」と言っております。お二人の「寅さん」論も聞けます。

(2)11月10日(木) 7:30p.m.ネーキッド・ロフト。三上治さん(評論家)と私のトーク。「憲法改正について」。

(3)11月24日(木) 7:00p.m.三島由紀夫、森田必勝追悼の「野分祭」。高田

馬場のシチズンプラザです。

(4)12月2日(金) 7:00p.m. ライブ塾。北芝健さんがゲスト。「現代社会と犯罪。国内外の治安情勢。そして公安」をテーマに語ってもらいます。北芝さんは元警視庁刑事。公安もやっていた。人気マンガ「まるごし刑事（デカ）」の原作者でもある。『公安化するニッポン』（WAVE出版）では、公安の衝撃的な内幕を語っています。又、今月号の「創」では、僕の連載で、北芝さんことを書いてます。

ライブ塾は「毎月第2火曜」になってますが、12月と1月は変わります。12月2日(金)と1月17日(火)です（この日は映画監督の若松孝二さんの予定です）。2月から又、「第2火曜」に戻ります。よろしくお願ひします。

(5)元静岡県警公安の真田右近さんも、『公安化するニッポン』で登場してますが、このたび、『平成の防人たちへ』（展転社・1600円）を出しました。真田さんは警察の前には自衛隊にいました。その時の話を書いてます。そして、自衛隊はこれでいいのか！と言います。「かつての仲間を愛するが故に敢えて指摘する情け無い内情」と帯に書いてます。「我々は軍人ではありません。国家公務員です」という自衛隊の幹部がいる。又、「ここは資本主義国家の中における共産主義社会だ」などと言う幹部もいる。国を守る気概はないが、毎日、酒ばっかり飲んでいる。妻が力ゼをひいたから、子供の父兄参観日だから訓練を休みますという隊員。だから、精神的強さもないし、カルトにはコロコロと騙される。「ゴルフに行くから訓練に行けません」という人もいる。悲惨な現状だ。

今、改憲論議が巻き起こり、自衛隊を「自衛軍」にするか「国防軍」にするか論議されている。しかし本人たちは、〈軍人〉としての意識がない。これでいいんでしょうか。憂国の書だ。

私は一気に読んで、「よかったね」と真田さんに電話しました。そしたら、「鈴木さんは猫を飼ってるんですね。僕も6匹飼ってるんです。一匹一匹、性格が違うし、かわいいですね」と言ってました。猫好き同士の猫談義になってしまいました。

(6)『LB中洲通信』（12月号）が出ました。〈特集・戦う男〉で、森達也、斎藤貴男、鈴木邦男の三人が取り上げられます。巻頭20ページの特集です。大きな書店には置いてます。新宿は、紀伊国屋書店、ブックファースト、ルミネ新宿店などです。あるいは、中洲通信編集部へ。03(3235)9214

(7)前に紹介しましたが、彩木美月子さんの『治さなくてもいい？--パニック障害のお話』（新風舎・1200円）は、なかなかいい本です。「週刊金曜日」（11月4日号）では星崎いつきさん（ライター）が書評しております。 「病気でも幸せ」と思えるまで。と題して、この本の内容を詳しく書いています。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張11月14日 「見沢知廉さんをしのぶ会」の報告です

(1)見沢氏は現代文学の過酷な現場で戦死した

「見沢知廉さんをしのぶ会」は11月5日(土)午後2時から日本出版クラブ会館で行われ、大勢の人たちが集まりました。出版社の人、作家、評論家、カメラマン、そして左右の活動家の人々、150人が駆けつけ、見沢氏をしのび、惜しみ、語り合いました。

司会は一水会の木村三浩代表。23年前から見沢氏とは最も親しい付き合いの同志です。「木村氏は自分の身体の一部だ」と見沢氏は言っていました。一心同体の、刎頸の友でした。その木村氏だからこそ出来た、心のこもった司会だったと思います。

中央の祭壇には見沢氏の写真。そして横には、子供時代からの写真が並べられ、又、千葉刑務所で書いた日誌も置かれていた。凄い分量だ。政治論、文化論と分けて書いている。出所してからも、こうしたノートは大量にある。まだ発表していない小説も多いし、これから、どんどん、出るだろう。死後も成長し続ける作家だ。

又、祭壇には、日の丸を肩にかけ、銃を構えている大きな写真が置かれている。「私の中の日の丸」だったかな。雑誌でそんな企画があって、何十人かが登場していた。ある人は「タンスの中にしまっている」。ある人は、「家に常に掲げている」。…といったかんじで、「日の丸」と自分を語っていた。右翼の人も、随分出ていた。(ちなみに、私は、小物だったから声が掛からなかった)。見沢氏は、日の丸を肩にかけて、スナイパー(狙撃手)に扮して出ていた。キマっている。ゴルゴ13のようだ。

写真で見ると、どっかの歩道橋の上から、狙っている。車で通る首相を

狙っていたのか。でも、そんな格好をして、警察に捕まらなかつたもんだ。カメラマンや、反射板を持った人、それにスタッフがいたから、「おっ、テレビか雑誌の取材か」と思い、警察も気に止めなかつたのだろう。ということは、そういう状況を作つたら、「本当のテロ」だってやれるかもしれない。見沢氏本人だって、きっとそんな気持ちがあつただろう。「よく分かるね。これは予行演習だよ」と、写真の見沢氏は語りかけてきた。…ように思つた。

三島由紀夫は市ヶ谷で自決する前に、映画「憂国」を撮つて、自決の〈予行演習〉をやつている。見沢氏は、それを思い出したのかもしれない。ともかく、「スナイパー見沢」は、本人が最も気に入つていた写真だつた。

私にも似た写真がある。タイで、本物のピストルを撃つてゐる写真だ。ライフルもある。あと、みやま山荘で日本刀を持つてゐる写真もある。『夕刻のコペルニクス』第3巻（扶桑社）に載つてたと思う。私の時は、きっとこの写真が使われるんでしょう。でも、人徳がないから人が集まんないし、中止だな。

そんなことを考えてると、始まりました。「見沢知廉さんをしのぶ会」が。まず発起人代表の3人（福田和也、島田雅彦、鈴木邦男）が挨拶をする。福田和也さん（文芸評論家）は、見沢文学について語る。又、死を賭して書き続けた作家の苦闘の足跡について語る。「作家が自殺するというのは近代文学になってからです」と言う。江戸時代などはない。近代になり、社会と葛藤し、その中で作家は闘いあるいは死んでゆく。北村透谷、有島武郎、芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫、川端康成、江藤淳、そして見沢知廉。「それだけ作家という生き方が凄まじいのです」と言う。じゃ、見沢氏も、この世の中に立ち向かい、〈戦死〉したのか。

福田氏は、見沢氏の死の直後、「週刊新潮」に追悼の言葉を書いてくれた。文学者・見沢知廉を最も理解してくれた人だつた。又、いろいろと助言し、相談にも乗つてゐた。こんなによき理解者がいたのに、死んでしまうなんて。〈戦死〉とはいえ、やはり、もつたいない。

続いて、島田雅彦氏（小説家）が挨拶をする。同じ作家仲間として、島田さんはいい兄貴分だったようだ。「でも、無限カノン三部作を書く時は、見沢さんに相談し、アドバイスしてもらった」という。無限カノン三部作は、究極の恋の物語だ。蝶々夫人とピンカートンの恋から始まり、その子、孫…と壮大な物語は展開する。そして、第2部『美しい星』では、舞台は皇室になる。恋人は皇室に嫁ぐという。雅子さまを彷彿とさせる。これで恋は終わ

るのか。「禁断の恋」はどうなる。これは、スリリングな、禁断の恋愛小説だ。

「これを書いても大丈夫かな」と見沢氏に相談したら、「大丈夫ですよ」と太鼓判を押してくれた。さらに、右翼のこういう大物を知ってるし、何も問題はありません。大丈夫です、と言う。又、その大物たちとどれだけ親しいかの〈証拠〉も見せてくれたという。

でも、〈証拠〉って何でしょうね。一緒に写した写真でしょうか。文通している手紙でしょうか。謎ですね。島田氏は、この〈証拠〉に力を得、意を強くして、「皇室小説」を発表し、大評判をとるのです。見沢氏も、いろんな所で貢献してるんですね。偉いですね。島田氏はさらに、『おことば』(新潮社)を書きます。これも随分と思い切った本でした。戦後の天皇、皇后、皇太子さんなど皇族の方々のおことばを紹介し、島田さんが解説、論評した本です。その内容はこのHPでも紹介しました。又、「東京新聞」で僕は書評も書きました。島田さんも命がけで書いたのです。ここも〈戦場〉なのです。

(2)私の言葉は「悪魔のささやき」だったのでしょうか

そして発起人代表の三人目は私です。一番古くから見沢氏を知ってる。ということで発起人代表になったのでしょうか。(と思ったら、戦旗派時代の人気が来てまして、その人たちの方が古かったですね)。

23年前に一水会に入ってきた頃の話を私はしました。新左翼(戦旗派)では、世の中は変えられない。三島自決についても「茶番だ」と幹部は決めつける。ここではダメだと思い、一水会に来たと言ってました。新右翼の方が、自分の好きなことを出来る、と思ったのでしょう。過激に明るく闘い、そして、「レコンキスタ」(一水会機関紙)一面に毎月のように政治論文を書いてました。

「さすが新左翼出身は優秀だな」と舌を巻きました。かたい政治論文だけでなく、やわらかい、面白い文章も得意でした。これは将来凄い人間になると思いました。

だから、例の「スパイ査問事件」の時は、必死になって見沢氏を逃がそうとしました。ところが、捕まって12年の獄中。しかし、中で、死にもの狂いで小説を書く。まさに戦場です。そして、「天皇ごっこ」で新日本文学賞をとる。出所した時はもう、作家になっていました。

そして、出所して3年の間に、次々とヒット作を書く。「天皇ごっこ」

「囚人狂時代」 「母と息子の囚人狂時代」 「調律の帝国」です。この4冊は全て新潮文庫に入ってます。最後の作品は、三島賞の最終選考にまで残りました。

本人としては、取れると思っていたのでしょうか。だから、落胆が大きかったようです。それからは又、三島賞に挑戦し、戦い続けました。そして身体もガタガタになり、精神的にもバランスを崩しました。自分の身体を苛め抜いて、そこで作品を生み出そうとしてたのです。

「そんなに苦労することはないじゃないのか」と僕は何度も何度も言いました「賞なんかどうでもいいだろう。もっと楽しいエッセーを書いたり、対談したり、好きなことを自由にどんどんやつたらいいだろう。50か60歳になって、又、賞に挑戦したらいいだろう」と言いました。

そのたびに、「いや、今しかないのです。賞をとらなくては」と言ってました。「クニさんは、小説家のことは何も分からないんだから」と思ってたんでしょう。でも、自分の身体を苛め、切り刻み、それで賞に挑戦しても仕方ない。もっとリラックスして、楽しいものをやつたらいいだろう。サブカルも好きだし、その方面的論文も随分あったんだし…と僕は思いました。そうしていたら、あそこまで思いつめて、死ぬこともなかつたのに。と思います。

でも、今になってみれば、僕の言葉は、「悪魔のささやき」だったのかもしれません。真剣に道を求める修業しているイエス・キリストに向かい、悪魔はささやきます。そんな苦しい修業なんかしないで、もっと楽な道を行ったらしいだろう。世の中には、もっと面白く、楽しいことがあるんだよ、と。

そんなに神を信じるのなら、この石ころをパンにしてみろよ、この断崖から飛び下りてみろよ、本当に神がいるのなら、助けてくれるだろう…と。

イエスは言います。「神を試すなかれ！」と。そして、「サタンよ、去れ！」と一蹴します。「楽しい道」をささやく私も、きっと、悪魔だったのでしょう。そんな悪魔のささやきには一切耳をかさず、敢えて苦難の道を見沢氏は選んだのです。その結果が死ではあれ、見沢氏は全身全霊で、作家としての苦難の道を歩いたのです。雄々しく挑戦し、そして戦死したのです。

苦難を求めた見沢氏は、新潮文庫に4冊も入り、それ以外にも、本を沢山出してます。『ライト・イズ・ライト』（作品社）も死の直後に出版され、「新潮」には遺作「愛情省」が発表されました。未発表の作品はたくさんありますし、これからも「作家・見沢知廉」はどんどん成長し続けます。イエス・キリストのように、悪魔のささやきに耳を傾けず、敢えて苦難の道を突

き進んだからです。

一方、悪魔に身を売って、楽な道を選んだ私は、転落の一途です。苦難に挑戦する気がなかったからこうなったんでしょう。23年前は、私の『腹腹時計と〈狼〉』（三一新書）を読んで見沢氏は一水会に入り、「自分もいつか鈴木さんのように本を書きたい」と言ってた見沢氏でした。でも、それから12年で立場は逆転しました。それ以来、大作家・見沢知廉氏には、とてもかなわないと思いました。そのくせ、見沢氏の才能と栄光に嫉妬し、僻み続けて来たのです。嫌な奴ですね、鈴木は。最低です。

…と、そんな挨拶をしました。

そして歓談の時間をはさみながら、出席した他の人々が挨拶してくれました。雨宮処凜さんは「作家としての手ほどきをしてもらった」と見沢氏の優しさを語っていました。又、元「噂の真相」編集長の岡留安則さん、康芳夫さん、PANTAさん、阿部譲二さん…などが挨拶し、見沢氏との付き合いを語ってくれました。

(3)名称を決めて毎年、追悼祭をやろう、という声もありました

作家だけでなく、当日は、左右の活動家の人たちも来てました。統一戦線義勇軍の針谷大輔氏、民族の意志同盟の森脇委員長、元赤軍派議長の塩見孝也さんなどが語ってくれました。戦旗派で一緒だった深笛義也さんは19歳の時から一緒に活動をしたといいます。「三島事件を茶番だと斬って捨てた幹部に絶望して戦旗派をやめたというが、一言、私に言つてくれれば…。私も三島が好きだったし、そうしたら別な道があったのかもしれない」と言ってました。他にも、戦旗派時代の同志、設楽さん、早見さんなども来てました。

この日は東京だけでなく、名古屋、郡山、金沢、福岡など遠方からも、ファンが駆けつけました。凄い人気だと思いました。ファンの間で、これからも追悼祭をやりたいという声が出ました。ファンクラブのサイト「白血球」(<http://chiren.sejp.net/>)を見て下されば分かります。太宰治なら「桜桃忌」、芥川龍之介なら「河童忌」、三島由紀夫なら「憂国忌」、野村秋介さんなら「群青忌」とあります。

「見沢さんの本の題名から取ったらどうでしょう」と提案する人がいました。『天皇ごっこ』からとて、「天皇忌」。これはマズイか。じゃ、「囚人忌」。これも変だね。じゃ、「調律忌」か。「ライト・イズ・ライト忌」。うーん、今ひとつだな。私は、見沢氏の優しい性格にちなんで、こん

なのはどうかと提案しましたが、否決されました。

でも、何らかの形で毎年、追悼の集まりをやり、本も出すでしょう。

「しのぶ会」は午後2時から始まって、4時に終わりました。そのあと、名残惜しくて残った人たちで二次会、三次会と流れて行きました。

二次会の時、雨宮処凛さんに声をかけられました。「鈴木さん猫飼ってるんですよね。私も飼ってんの。とってもかわいいの」と言って写真を見せてくれた。30枚位ある。猫好きの僕のために、わざわざ持って来てくれたんだ。感動しました。とてもかわいいニャンコでした。

「鈴木さんとこの猫の写真を見せてよ」と言われました。ハイハイ。分かりました写真を撮って、このHPに載せましょう。

皆で、わいわい喋ってるうち、たまたま中森明夫さんの話が出たんですね。そしたら、金沢から来た見沢ファンの青年が、「工？中森明夫を知ってるんですか。僕、ファンなんですよ」。そしたら、その人が「僕が中森だよ」。驚きましたね。感動的な光景でしたね。マンガ的と言ってもいいですが、こんなことがあるんですね。「俺は顔を知られてないからな」と言ってました。そして、「鈴木さんは小説書かないの？」と聞く。僕なんて、とても、とても。才能はない。それに、あんな身を削って苦闘することなんて出来ないし。大体、雨宮さんに、「小学生の文章だ」って言われたんだし。そしたら、「まだ、あのことを根に持ってる！」と雨宮さんに叱られました。

別に、根に持ってるわけじゃなくて、全くその通りだと感心してるんです。私の文章の本質をズバリと言ってくれたんです。雨宮さんが主演した映画の感想をパンフに載せるからといわれ、原稿を書いたんです。それを見て、「なーにこの、小学生の作文みたいの」と即座に言われたとです。傷ついたとです。これじゃ、小説家どころか、物書きにもなれんと思ったとです。

チクショウ、やけだ。こうなったら、どっかの「小学生の作文コンクール」に応募してやろう。でも、そこでも落とされたりして。そしたら、「幼稚園児の作文コンクール」か。そこでも又、落とされたりして。じゃ、「ネコの作文コンクール」だ。…と、挑戦し続けるのもキツいやね。どうせ私は、悪魔に魂を売って楽な道を選んだ人間ですし、そんな苦しいことはしたくないですよ。だから、「小学生の作文コンクール」への応募なんか、やめた、やめた。

「いやいや、あれは“悪魔のささやき”ではないですよ」と中森さんが言ってくれた。エッ？と思った。そんなに賞にこだわって、自分を殺すことにはな

かったんですよ。サブカルでいいから、どんどん好きなことを自由に書いたらよかったです。今のような文壇なんて、いずれ潰れますよ…と中森さんは言いました。

なるほど。さすがは中森氏。サブカルの帝王だ、と思いました。

【だいありー】

(1)11月7日(月) 月刊「創」(12月号)発売。私の連載は「怖い話」と題し、公安警察のことを書きました。元公安の北芝健さんと、「アルカイダ幹部」と決めつけられ逮捕されたイスラム・モハメッド・ヒムさんのことを書きました。そしたら、本誌の「NEWS EYE」では、〈「アルカイダ幹部」と誤報されたヒムさんがメディア訴訟〉という記事が。別に示し合わせたわけではありませんが、こういうこともあるんですね。鹿砦社・松岡社長、和歌山カレー事件・林真須美、宮崎勤…と獄中手記が多いです。

(2)有田芳生さんのHPに私と会ったことが出てきました。勉強家だと、ほめて下さったので、紹介しませう。

〈鈴木邦男さんがすごいのは、その読書量だ。司馬遼太郎さんの『街道をゆく』シリーズはすべて読み、新潮社から出ている日本文学全集も、もうすぐ読み終わるそうだ。三島由紀夫全集もすでに半分を超えたという。「すごいですね」と改めて言うと「これまで勉強していませんでしたから」と謙遜の言葉〉

おほめにあざかり恐縮です。でも、オラは「謙遜」してるわけじゃないんです。真実です。学生時代から、口クに本も読まず、左翼と乱闘ばっかりしてました。全く内容のないアジ文を書き、アジ演説をやり、同じことばかりやって、進歩がありませんでした。だから、今でも文章は下手です。「小学生の作文のようだ」と言われちります。でも、右翼過激派の時は、俺こそが日本を変えてやるんだと思い上がっていましたね。気概だけはあったんです。「他人の事を書いた小説なんか読んでられるか。バカヤロー。俺の人生が小説になるんだ」と思ってました。今となっては恥ずかしいですが。

有田さんに褒められて気をよくしたら、アッと驚くことが書かれてました。こりゃー、大変だ。

〈いちばん驚いたのは、これまでずっと否定していた赤報隊事件の真相を教えてくれたことだった。朝日新聞を襲撃し、阪神支局の記者が殺害されたこの事件はすでに時効となった。その事件の実行犯は…と鈴木さんは明かしてくれた。時効直前に鈴木さんの住まいの外にあった洗濯機が放火されたの

も、きっと赤報隊の脅しだったのだろう〉

「ゲッ！ まずいな。泥酔して、記憶が飛んでるよ。そんなこと喋ったかな。久しぶりで有田さんに会ったんで、嬉しくなってペラペラ喋っちゃったんでしょうか。この人は。アホだな。まいるな。と又もや自虐です。じゃ、他の時効になった事件についても喋ったのかもしれない。そんなことがバレたら真犯人に消されてしまうよ、私は。怖い話だ。」

(3)11月7日(月)発売の「週刊ポスト」(11月15日号)の巻頭特集は、〈「女帝論の拙速」と「天皇家の不在」〉。〈全国民必読！〉と書かれてます。それだけの重要性のある特集です。私もコメントを求められたけど、どうせボツだらうと思ったら、載っておりました。6ページの大特集で、考えさせられました。

(4)11月7日(月) 1日、東中野図書館で勉強。ばかデカい大きさの「日本絵巻大成」(中央公論社)に挑戦している。大きすぎて、借りられないでの、ここで読む。なかなか面白い。「浦島明神縁起」と「蒙古襲来絵詞」を読む。

(5)11月8日(火) ジャナ専。「時事問題」では、「週刊金曜日」(11月4日号)に出ていた「なんだ！ これは。自民党新憲法案」をテキストにして憲法の話。女帝の話。「現代史」は、60年安保闘争と山口二矢の話。

夕方、大日本生産党・北上清五郎先生のお通夜。学生時代から随分とお世話になり、教えて頂いた先生だ。6時からお通夜だったが、その前に行つてご焼香をする。7時から高田馬場のライブ塾。切通理作さん(評論家)の「見沢知廉の〈世界〉」。見沢文学を語らせたら切通さんが一番だ。こういう理解者がいて見沢氏も幸せだ。教えられることが多かった。第2部で塩見孝也さんとの〈寅さん論〉も面白かった。

雨宮さんから『7つのしぐさでわかる猫の気持ち』(幻冬舎文庫)をもらった。塩見さん、ロフトの平野さんから、猫を飼う心得を教えてもらう。キヤットフードを送つてくれた人もいる。シロも喜んでました。

(6)11月9日(木) 河合塾コスモの授業。夜7時半からネーキッド・ロフト。三上治さん(評論家)と「憲法改正について」。三上さんの話は難しくて、なかなか理解できない。ついて行くのに必死。一方的に私は論破された。でも、三島由紀夫の話はよかったです。三島自決で泣いてたら奥さんが慰めてくれたそうだ。ほのぼのとした話だった。

(7)11月13日(日) アムネスティ・インターナショナル大阪に呼ばれ、講演。死刑制度について。地方に呼ばれて講演なんて、10年ぶりじゃないのかな。それも、アムネスティが呼んでくれたなんて、嬉しいです。光栄ですよ。みやま山荘に引きこもっているから、久しぶりの遠出だ。5年ぶりに新幹線に乗った。富士山がきれいでした。講演会も沢山集まってくれ、活発な質疑応答もありました。

【お知らせ】

(1)一水会の機関紙「レコンキスタ」(11月号)は「見沢知廉追悼特集号」です。見沢氏の未発表の論文、木村氏はじめ多くの人々の追悼文が寄せられ、充実したものになってます。私も書いております。

(2)11月24日(木) 7:00p.m.より三島由紀夫・森田必勝追悼の「野分祭」です。高田馬場のシチズンプラザです。

(3)12月2日(金) 7:00p.m. 高田馬場のライブ塾(トリックスター)。元警視庁刑事の北芝健氏がゲストです。「現代社会と犯罪。国内外の治安情勢。そして公安」です。衝撃的な話が聞けるでしょう。

(4)06年1月17日(火) 7:00p.m.ライブ塾。映画監督の若松孝二さんがゲストです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張11月21日 「君が代」と鯖（さば）焼き

(1) 現代の「踏み絵」と「転向」を扱った芝居です

こんな〈思想的〉な芝居があったのかと驚いた。よかったです。「おかげ様で、いい芝居を見せてもらって」と赤坂細子さんにお礼のメールをした。赤坂さんはこのHPの先代の管理人だ。「鈴木さんの関心のあるテーマだから。ぜひ見るべきよ」と言う。国旗・国歌問題を真正面から扱った芝居だ。

エッ？そんな芝居があるの。と驚いた。でも、タイトルが面白そうだ。「歌わせたい男たち」。二兎社だ。つまり、高校で皆に国歌・君が代を歌わせようと必死になっている人々の話だ。歌わせようとする人々は、具体的には校長だ。又、その上の教育委員会、文部科学省、さらに政府だ。つまり、上の人達だ。いや、違うな。校長の下の人間だって、歌わそうという人はいる。「愛国的」な教師たちだ。生徒の中にも、「歌おう・歌いたい・皆で歌うべきだ」と言う「愛国的」生徒もいる。

じゃ、「歌いたくない人」は誰だ。左翼的な先生だ。そして左翼的な生徒だ。君が代強制によって、内心の自由を侵されたくないという人だ。

こうした「歌いたくない人」と「歌わせたい人」との葛藤、対立は全国で展開されている。それを扱った芝居だ。でも、堅苦しい芝居ではない。基本的にコメディだ。コメディだが思想劇だ。そこが奥深いところだし、ウーンと考えさせられるところだ。ゲラゲラ笑いながら、「じゃ、どうしたらいいんだろう？」と観客も考えなくてはならない。

挾島先生という左翼の先生がいる。といっても、マルクスを読んだわけもないし、デモや集会に出たこともない。内心の自由を守ろうと、君が代齊唱の時に起立しなかっただけだ。そんな人でも今は〈左翼〉といわれる。今年の卒業式も起立しない。そう決意している。それでクビになってしまってもいい

と、悲壮な覚悟をしている。

校長は必死にこの拝島先生を説得する。「君のことを思って言ってるんだ。頼むから起立してくれ」「こんなことでクビになつたら、どうなる。家のローンはどうなる。奥さんは。子供は」「内心の自由は守つたらいい。その上で、起立して、歌つたらいい。そんなことで、内心の自由は侵されないよ」

…と、あの手この手で、必死になって説得する。まるで遠藤周作の『沈黙』のようだと思い出した。キリスト教徒に踏み絵を踏まして棄教させようとする役人のようだ。「ほら、内心なんか誰にも分からない。だから踏んだらいいだろう」「躊躇して殺されたら馬鹿らしいだろう。キリストだって踏んでくれと言ってるよ。それが人を救うということだろう」と、言葉巧みに攻める。

役人や、偉い人だけではない。「転びバテレン」も使う。日本に布教にきて、捕らえられ、転向した宣教師だ。それが、出てきて、棄教をすすめる。実にスリリングな小説だ。この棄教をすすめる「手口」は、戦前、戦中の特高、公安検事が共産主義者を落とし、転向させるのに使われた。そして今や、学校だ。

ただ違うのは、昔と違い、強制する人が役人や警察ではない、という点だ。同じ学校の同僚や上司が強制し、説得してくる。それはかえって辛い。

校長と左翼教師の対立、論戦が中心なのだが、それに、伴奏する女教師や、生徒もからむ。これから芝居を見る人の為に、これ以上内容を紹介してはまずいだろ。だからやめるが、在日の生徒がいて、この生徒は今年は歌うという。生徒が歌わないと、担任の先生が処分される。先生のことを考えて、あえて「転向」する。「あの子の両親は日本をまだ許しちゃいませんよ。それなのに、先生のために歌うという」。泣かせるね。

さらに、「君が代」の「君」とは何か。「代」とは何を指すか。といった激論も闘わされる。勉強になりますね。最後、拝島先生を説得し切れなかつた校長は、屋上にかけ上って、日の丸をバックに全校生徒に演説をする。

「このままの日本でいいのか!」「国家に誇りを持ち、国歌を堂々と歌おう」「立派な日本人として、国際社会で生きていこう」「改革の手をゆるめるな!」と。

まるで小泉首相のようだ。右翼の街宣のようだ。「これだけ言っても起立しない教師がいたら、私はここから飛び降ります!」と絶叫する。凄い演説だ。芝居だということを忘れ、感動して聞いてる人もいる。「この演説がこ

の芝居のいいたいことだと思って帰っていく人もいるんです」という。そう誤解させるだけの凄まじい演説だ。力の入った演説だ。

そうそう。文部科学省と教師の間の板ばさみになって本当に自殺した先生もいた。だから単に芝居として済まされない。又、この校長は、10年前は「強制」に反対して、「内心の自由を守れ」と、雑誌に発表したことがある。それを指摘されて、「10年前のことです。今は考えを改めました。国に誇りを持ち、国歌をうたってます」と言う。これも、いくらでもある実話だという。一般教員の時は、君が代強制反対を貫いた。ところが、校長になった途端、考えを変える。又、校長にならないまでも、「時代の流れ」を読んで、「君が代」派になってしまう。こんな例がいくらでもある。

(2) 難しくて誰も正しく歌えんよ、君が代は

しかし、不思議だね。国旗・国歌が法制化された時、「これは強制するものではありません」と政府や（当時の）文部省は言っていた。つまり、「日本の旗は日の丸ですよ。日本の歌は君が代ですよ」と確認するだけだ、と言っていた。しかし、法律を作ると、急に、それを拡大解釈しようとする人が出る。

「じゃ、国旗・国歌にふさわしい扱いをしよう」「じゃ、公立の中学校では生徒に歌わせよう」となる。さらには、「全員で歌った方がいい」となる。全員が立ち上がり、全員が口を開けて歌う。そこに〈統一美〉を感じるんでしょうな。又、それが「愛国心」だと錯覚する。いかんですね。

さらに、「歌わない人間は困る」「処分しろ」という発想になる。いやいや立っても、「でも歌っていないじゃないか」と責める人がいる。「あら探し」が始まる。前に紹介したが、都内の高校で本当にあった話だが、「実際に口を開けて歌ってるかどうか」を写真に撮って歩いてる人間がいる。教育委員会や保守派の議員だ。やだね。法律が出来ると、こんな人間が出る。でも、写真を撮ってる人間は少なくとも歌ってない。じゃ、そいつが一番、「君が代」を侮辱することになる。「国賊」だよ。違いますかね。

さらに、「口を開いて、歌ってるフリだけしてる人間がいる。だから、本当に声を出しているかどうかを調べよう」という人もいる。つまり、音声を計るわけだ。いやだね。よくこんなことを考えつくもんだ。

これじゃ、君が代がかわいそうだ。ただ「強制」の道具にされているだけだ。左翼教師や「内心の自由」を持った教師を苛める為の道具にされている。「国歌」として大事にされてない。尊重されてない。まるで「拷問の道

具」だよ。「踏み絵」だよ。

それに、「何でもいいから歌え！」と言つてゐるだけだ。いや、「何でもいいから」なんて言つてない、と「強制派」の人は言ふかも知れない。しかし、違う。「君が代」を今まで2千回は歌つてきた私が言ふのだから間違はない。

大体、「君が代を正しく歌つてる人」なんて、まずいない。君が代は難しい歌だ。キチンと歌うのは至難の業だ。皆、音程を外して歌つている。サッカーや格闘技の国際大会の時、歌手が出てきて、独唱することがある。石川さゆりはワールドカップの日朝戦の時に歌つていた。あれだけのプロの歌手でも歌い難そうだった。完全な歌い方とは言えない。

それほど難しい歌だ。集団で歌う時は、どこだって調子を外している。正しく歌つてる人なんて、いない。私は40年間、右翼をやってきて、君が代を歌いまくつた。どんな集会でも、まず君が代を歌う。街宣の前に君が代を歌う。左翼と闘う前にも君が代を歌う。我々は日本人の前衛だ。だから先頭になって君が代を歌わなくてはならん。そんな気持ちなのだ。だから歌う。たとえ、10人でも、5人でも歌う。

その心意気やよし、と思うかもしれないが、これは悲惨だ。大人数で歌つても、バラバラになるのに、10人や5人では、さらに、調子が外れる。音程を外す。私だってそうですよ。正しくなんて歌えない。「歌え！歌え！」といひながら、君が代は正しくは歌われない。かわいそうな君が代だ。

ここで思った。よし、私は、これから教師になってやる。今から大学に入り直し、教職課程をとり、公立高校の教師になる。そこで、入学式や卒業式の時、君が代で起立しない。当然、処分される。しかし、今まで2千回、君が代を歌つてきた「愛國者」である私を、誰が処分できるのか。そう言ってやりますよ。「じゃ、あなたは何回、君が代を歌いましたか？」と。20回ですか？30回ですか。その程度で、「君が代を愛してると言えるんですか」。20回しか歌わん人が、2千回歌つた私を処分できるんですか？と。

それに、「あなたは正しく歌えますか。音程を外さないで歌えますか」と聞いてやるよ。何なら、音程測定器を使って、一人一人調べたらいい。正しく歌つてる人なんて一人もいない。じゃ、皆、非国民だよ。いいじゃないか。非国民同士、小さなことで、批判し合うなよ。

(3)君が代をうたい、日の丸あげて。それで愛國者になるのでしょうか

ここで思い出した。赤川次郎の『日の丸あげて』という小説だ。前にこの

HPで紹介した。これも、〈統一美〉に酔いしれる男の話だ。自分が住む団地で、全員が日の丸を揚げるように運動する。そうしたら嬉しい。きれいだ。見事だ。そう思う。「愛国者」だ。でも、一軒だけ、日の丸を揚げない家がある。いくら説得してもダメだ。そこで思い余って、この男をリセットしてしまう。この世から外すんですね。「愛国殺人事件」だ。そして、日の丸を掲げる。それで万々歳。団地の各棟、全ての家に日の丸が翩翩とひるがえる。「あっ美しい。日本の旗は」となる。

「歌わせたい男たち」の芝居もそうだね。「全員で歌ったら気持ちいいだろう」「統一とれて美しいだろう」と校長は左翼教師を説得する。だが、左翼教師は抵抗する。思い余って、この左翼を殺す。いや、それは出来ないから、「君が立たなかったら自分は屋上から飛び下りる」と言って脅す。命をかける。〈統一美〉を守ろうとする。まるで戦争だね、こりゃ。そんなことで命のやりとりをするなんて、下らんよ。

『LB中州通信』(12月号)は「戦う男」特集で、森達也、斎藤貴男、そして私の三人が取り上げられている。三人にインタビューをしている。なかなかいい。そして、各人の著書や関連書籍を紹介している。

私のところでは、『言論の覚悟』と『夕刻のコペルニクス』を紹介している。そらに驚いたことに、関連書籍というか参考図書として、赤川次郎の『日の丸あげて』を紹介していた。ありがたい。赤川に代わって礼を言いたい。

これを見て驚いたが、この本は文庫になってるんだね。表紙の写真も出ている。日の丸をバックに若い女の子が立っている。うん。いい表紙だ。『中州通信』ではこう紹介している。

『日の丸あげて--当節怪談事情』

赤川次郎 小学館文庫。520円

鈴木氏HP「鈴木邦男をぶっとばせ」で紹介された現代の状況を予見させる赤川次郎のホラー短編。

そう。短編なんだ。だったら、他の短編も入って、一冊の文庫になってるのかもしれない。本屋で買ってみよう。520円だから、皆さんも買ってみんしゃい。考えさせられるよ。

自民党の改憲案には、「愛国心を持て」と、当初入れる予定だった。でも公明、民主の同意が得られなくては国会で三分の二をとれない。それで°外した。

でもいつか、「国歌・国旗法」のように、「愛國法」が出来るかもしれません。 「愛國心を持つのは日本人として当然です。国際人としてのマナーです」

とか言って。 そうしたら、やはり〈強制〉が行われる。 それだけじゃない。 「私は愛國心を持っているが、隣りの家の人は持っていない。 取り締まって下さい」といった密告が急増するだろう。 「祝祭日なのに、隣りの家は日の丸を掲げてない。 非国民です」 …と。

そして、皆、監視し合い、密告し合う社会になるでしょう。 隣り組制度が生まれ、非国民の家庭があつたら連帯責任になる。 だから、隣りの家には強制してでも日の丸を揚げさせようとする。 抵抗する人間は殺してでもやらせる。 やだね。 まるで赤川次郎の小説だ。

これじゃ、かえってあたたかい連帯感や、郷土愛なんて生まれないやね。 みんな、ギスギスし、監視し合い、密告し合う社会になる。かつての共産主義社会だ。

それでいて、本心では他人のことなんてどうなってもいいと思っている。 我関せすだ。 冷たい社会だよ。 町田の高1女子刺殺事件で、それを感じたね。 アパートの下の人は実は気づいていた。 警察に110番しようと思ったが、静かになったんで、電話するのをやめた、という。 静かになったのは、殺されてからだよ。 これはちょっとひどい。 すぐ、上がって行かなくちゃ。 少年を怒鳴りつけ、止めたら、殺されなかっただろうに。

2年前、わが家が放火された。 その時は、わが家のアパートの住民は誰も気づかなかった。 ただ、少し離れた向かいのアパートの若者が見つけて、「火事だ！」 と言った。 そして、アパートの住民を叩き起こしてくれた。 それで助かったのだ。 さらに、消火にも手を貸してくれた。 本当にありがたい。 普段は全く付き合いはない。 でも、こうした事故の時は、助け合う。 ありがたいことだ。 私は涙が出た。 感謝している。

再び、高1女子の古山優亞さん刺殺事件の話だ。 産経新聞（11月12日付）にはこう書かれていた。

〈古山さんの階下に住む65才の男性は10日午後5時半ごろから6時にかけて騒音や古山さんとみられる女性の声を聞いた。 悲しそうに女性が泣く声が聞こえたかと思うと、物を投げつけたり、「ドスン、ドスン」という地震のような音が聞こえたという。

「やだ、怖い」。 古山さんとみられる女性の声や物を引きずるような音が

し、台所の方に音が移っていった。女性の悲鳴しか聞こえなかった。

男性は110番しようかなとも思ったが、6時ごろ、「キャー。助けて」との悲鳴を最後に声がぴったりとやんだ。(中略)

男性は「事件は早期解決してよかったです、古山さんやお母さんことを思うと…」と声を詰まらせた

これが本当だとすると、ひどいやね。「キャー、助けて」といってたんだろう。助けに行ってやれよ。もし、体が動かないのなら、110番したらいい。こういう時こそ、警察に電話すべきだ。声がぴたりとやんだから、安心して、電話しなかったんだろうが、これはないいやね。冷たい隣人だ。

【だいありー】

(1)11月13日(日) 朝9時の新幹線で大阪に。1時45分から、アピオ大阪で、講演。アムネスティ・インターナショナル日本の主催。

〈2005年 世界死刑廃止デー企画。わたしたちはいかなる時代を生きているのか。

鈴木邦男さん、死刑を語る。

国が人の生き死にを決めるということについて〉

というテーマ。

前日に見た芝居「歌わせたい男たち」のことから話を始めた。監視社会、強制社会になりつつある。それが「安全」や「愛国心」の名のもとに。そして、外国を攻撃し、自国が強くなれば自分が強くなったと錯覚する若者。

〈強い日本〉の中心にあるのが、死刑制度かもしれない。しかし、本当の日本は、やさしい寛容な国だった。そして、アナーキーな国だった。日本の神話を見てもそれは分かる。又、平安時代には日本は347年間、死刑が廃止されていた。日本こそ、「死刑廃止先進国」だった。又、鉄砲がありながら、その「進歩」を止めた。「軍縮」の知恵を持った国家だった。そういう話を中心、私の死刑廃止論を語った。さらに、公安や右翼、左翼の話をした。会場は満員だった。質問も活発に出て、楽しかった。サイン会も設けてくれた。ありがたい。

終わって、スタッフの人たちと遅くまで、食べ、飲み、喋った。近くのホテルで泊まった。

(2)11月14日(月) 夕方、帰京。

(3)11月15日(火) ジャナ専。「時事問題」では、〈死刑〉の話をした。

「現代史」では、60年安保の話。夜、新宿の食事会で塩見孝也さん（元赤軍派議長）らと会う。「今日はバンバン食わなくちゃ」と張り切っている。

「なして？」と聞いたら、11月5日の「見沢知廉さんをしのぶ会」の時は、食べられなかったからだという。「しのぶ会」だから当然でしょうが。「いや、鈴木君はガツガツ食ってた。俺は見沢氏をしのんで皆と話してばかりいたから、何も食えんかった」。それで家に帰って、奥さんに「メシ！」と言ったら、「今日は会費1万円渡したでしょう。食べてくると思って、作ってないのよ」。それで夫婦喧嘩になったそうな。「日本のレーニン」ともある人が、やけに「小さなテーマ」で朝まで激論している。なさけなか。

「自分でラーメンでも作りやいいじゃないですか」と言ったら、「そんなもの食えるか。やっぱり、銀シャリでなくっちゃ」と言う。白いご飯のことを刑務所用語で「銀シャリ」というんですよ。20年の刑務所生活の言葉がつい出る。さらに、「俺は日本人だ。銀シャリにサバ焼きだ！ これが一番だ」。「それで、今までの人生、すべて、サバ読んで生きてきたんですか」と言ったら、怒ってた。「バカヤロー！ 俺のどこがサバ読みだ！」

だって「世界同時革命」とか、「世界根拠地論」「前段階武装蜂起」とか、ぜんぶサバ読みじゃないですか。と言ったら、黙ってしまった。別に納得したわけじゃない。「こんな奴と話しても仕方ない」と思ったんでしょう。偉い人です。だから、奥さんも、ちゃんとご飯を作つてあげて下さいよ。でないと、こっちにとばっちりが来るけん。

ちなみに、「サバ読み」の語源だ。サバは安い魚だから、丁寧に一匹、二匹と数えない。「うん。100匹ぐらいだろう」「200匹ぐらいかな」と。それで、「サバ読み」だ。つまり、いいかげんなことを言うようになったんです。

ついでに、旺文社の『広辞林・故事ことわざ慣用句』を引いてみた。「鯖（さば）を読む」は、「自分の都合のいいように、数をごまかしてかぞえる」とある。「用例」として、

「執行部は1万人の大集会などと言っていたが、実際にはせいぜいその半分ぐらいじゃなかったのかな」

「それはまたずいぶん鯖を読んだもんだ」

こんな「用例」が出るくらいだから、元々は左翼用語かもしれませんね。やっぱり。塩見さんの生き方だ。だからといって、これからは、「塩鯖たべよう也」なんて言わないように。「アホダビッチ・サバスキー・タカポン」なんて言わないように。

この「語源」だが、サバは安いからだと思ったら、ちょっと違う。「鯖はいたみやすいので、かぞえるとき急いで飛ばしてかぞえ、実数をごまかすことが多いから」と書いてあった。なるほど、新左翼もいたみやすくて、すぐに腐って、なくなっちゃったよ。サバと新左翼は養殖でもして、保護しなくっちゃ。

(4)元、エスエル出版会にいた中川文人さんが、「僕が編集した本です」と、『身近な人に「へえ～」と言わせる。意外な話1000』（朝日文庫）をくれた。「左翼の知り合いがあると思われる意外な話」という項目まである。へえーと思って読んでたら、赤旗の歴史、レーニン、トロツキー、過激派、活動家の移動方法…などが出ている。メチャ面白い。そして、「テロルの定義」についてこう書かれとった。

〈一水会元代表の鈴木邦男氏は「右翼のテロはミニスカート。左翼のテロはキュロットスカート」と左右のテロを定義している。これは、右翼のテロはすぐ犯人がわかるが、左翼のテロはなかなか真相が見えないという意味〉

ゲッ！こんなこと、オラが言ったのかよ。「確かに言ってましたよ」と中川氏は言うから、じゃ、言ったのだろう。うん。少し思い出した。右翼のテロは名乗り出て、堂々とやる。いさぎよい。その点、左翼は、闇に隠れて、火炎瓶を投げたりして卑怯だ。キュロットも見えそうで見えないから卑怯だ。と言ったらしい。この人は。だから、「テロもキュロットも廃止しろ！。取り締まれ！」と言ってたらしい。オラも「サバ読み人生」かにゃん。あっ、いかん。猫と生活してるから、時々、猫語が出るにゃん。今晚は猫にも鯖をあげましょう。

【お知らせ】

「だいありー」が長くなつたから、もうやめる。このコーナーも短くやる。11月24日(木)は7時から野分祭です。12月2日(金)は7時からライブ塾。元公安の北芝健さんです。1月17日(火)は同じくライブ塾。若松孝二さん（映画監督）です。

「月刊タイムス」（12月号）の私の連載「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」は第15回目です。「三島の予言の彼方に起こつた連合赤軍事件と、野村の衝撃」です。12月9日(金)は一水会フォーラムで、講師は八木秀次さんです。12月27日(火)はロフトで「創」イベントです。私も出ます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張11月28日 右翼と左翼の「意外な話」

(1)キュロットはフランス革命の頃から政治的だったんやね

『身近な人に「へえ～」と言わせる。意外な話1000』（朝日文庫）の続きた。「左翼の知り合いがいると思われる意外な話」が特に面白い。「テロの定義」については、「右翼のテロはミニスカート、左翼のテロはキュロットスカートなのか」と説明している。名言だ。右翼は初めから名乗ってやる。潔い。逃げない。その場で自決するか、縄につく。その点、左翼は、闇の中から火炎瓶を投げて、逃げる。デモの時もヘルメットと覆面で、顔を隠す。潔くない。ズルイ。右翼は、犯人がすぐ分かる。左翼は見えない。真相も分からん。それを、「ミニスカートとキュロットの違い」として表現している。凄い。これを考えた人は天才だ。他にはこんな「意外な話」がある。

〈総理大臣を守る覆面パトカー〉

総理大臣の乗る車の後ろを走る覆面パトカーの後部座席は後ろ向きにつけられている。

（知らんかった。テロリストが追っかけてきて襲撃するのに備えているんだろう。今時そんな根性のあるテロリストや過激派はいないよ）。では次。

〈過激派〉

「過激派」という名称の派閥やグループがあるわけではなく、マスコミがそう呼んでいるだけ。一応、フランス革命時のジャコバン党が元祖といわれている。

（まあ、この程度は常識でしょうね。急進・過激なジャコバン党がフランス議会の左側に座っていたので「左翼」と呼ばれ、稳健派のジロンド党が右側にいたので右翼と呼ばれた。ここから右翼・左翼が生まれた。これも書け

ばよかった。でも一番偉いのは、議会を見て、「鳥が翼を広げてるようだ」と思った人だ。そういえば、フランス革命の時は、「サン・キュロット運動」というのがあった。民衆運動で。貴族がはくキュロット（半ズボン）をはかず、長ズボンをはいた民衆たちだ。やはり、キュロットは元々、政治的なものだ）。

〈日本赤軍〉

通は「JRA」（Japan Red Army）と呼ぶ。

（でも、JRAは日本競馬協会と同じじゃないのかな。JRAと書いたシャツを着て、空港で捕まった競馬協会の人がいた。だから略号なんかはやめまえう）

〈重信房子〉

海外では、オノ・ヨーコと同じく有名な日本人女性。

（『沈黙の艦隊』のかわぐちかいじは、重信をモデルにした劇画『メドゥーサ』を描いちります。読んでみて下さい。かわぐちさんの『テロルの系譜』（ちくま文庫）の「解説」を私が書き、その縁で、お酒を飲みました。昔、重信にはあこがれていたといってました。だから、あこがれと愛情を持って、『メドゥーサ』を描いたんです。尊敬する塩見同志にもこの劇画のことを教えてあげました）

〈ハイジャック〉

もともとは列車や車、船の強盗のことで、強盗が機関士に「ハーイ。ジャック」と呼びかけたことが由来。

（これは蘊蓄王・松尾貴史さんの本にも出てたね。「ジャック」はイギリスではそれだけ多い名前なんだよ。だから、ビルや船を占拠し、立てこもるのも「ハイジャック」なんだ。「ビルジャック」「シージャック」「バス・ジャック」と言うのは間違い。でも間違いが広まっちゃったから、もう正せないやね。まあ、語源そのものがサバ読みというか。アバウトなもんだから、どう呼ぼうと別にいいかな）

〈赤軍派〉

当初の計画では、北朝鮮ではなくキューバに行くはずだった。

（これは見出しが間違っている。「赤軍派のよど号ハイジャック」だろうが。それも一回目は失敗したんだ。電車やバスのように5分前でも乗れると思い、ギリギリに来て、メンバーの半分が乗り遅れた。当時の学生は飛行機

に乗ることなんてなかったから、分からんかった。「次の便をご用意します」と係の人が言ったが、「次の便じゃダメだ」。この辺で係の人も変だと思わなくっちゃ。

さらに、国内便と国際便の違いも知らんかった。福岡行きの国内便をハイジャックして、「キューバに行け！」。行けるわきゃない。そこで、急場（キューバ）しのぎで、北朝鮮に行った。ホントの話だ。ただし、「キューバしのぎ」と言ったのは、デーブ・スペクターさんだ。塩サバさん。じゃない、塩見さんが出獄してすぐに、「週刊文春」でデーブ・スペクターと対談した。その時、デーブが言ってたんだ。凄いね。しかし、出獄してすぐにデーブと対談なんて無謀ですよ。獄中ボケの老人をからかうなんていけんよ。赤子の手をねじるようだね）

〈亡命の国際ルール〉

飛行機に乗って言葉の通じない国に亡命する場合は両翼を数回動かして亡命の意志を伝えるのがルール。こうすれば撃ち落とされない。

（共産国家に亡命する時は、左の翼を特に何回も動かす。自由主義国に亡命する時は、右翼を動かす。ということはない。ウーン。ハイジャックだけで一冊、本が書けそうだ。「よど号」には92才の日野原重明さんも乗っていた。病弱で60才までもたないとと言われてたのにハイジャックのショックで、壮健になり、「ここで死んだと思えば、あとはオツリ」と思ったら、こんなに生きのびた。他の客だって、皆、長寿だ。長寿の秘訣はハイジャックですよ。だから長生きしたかったら、思い切り、怖い体験をしましょうね）

(2)赤旗の起源は？ レーニン、スターリン、トロツキーの本名は？

〈赤旗の歴史〉

赤旗が革命の旗となったのは、フランス革命以降。もともとは暴徒を鎮圧する官憲が掲げていたのだが、いつしかそれが暴動の目印となり、革命の旗に変わった。

（そうか。全てはフランス革命から始まっていたんだな。じゃ、なぜ官憲の旗は赤だったんだろう。目立つからだろう。それと「血の色」だからだ。軍服も赤だし。乱闘、戦闘で血が飛びちっても大丈夫なように赤にしたのか。スタンダードの『赤と黒』で、赤は軍人、黒は僧侶を表わしている。

別説もある。赤は「ブルジョワ階級の血」だ、という説。彼らを血祭りにして革命は出来るのだという。いや、この赤は、敵に殺された我々の「同志の血」だ。という説もある。連合赤軍だと、「同志殺しの血」ですね。本当

は怖い赤旗の歴史、ですね)

では、これからが佳境に入るとです。ゲバラ、レーニン、スターリン、トロツキーの名前の語源です。語源というから、彼らは本名ではないんです。そんなことは知っちるばい。と言う人は飛ばして読んで下さい。

〈チェ・ゲバラ〉

本名はエルネスト・ゲバラ・デラセルナ。「チェ」はゲバラの母国アルゼンチンでは「おい」とか「ねえねえ」と呼びかけるときに使う言葉。ゲバラがよくそう言っていたことから、「チェ」があだ名になった。

(「チェ！」といつも舌打ちしてたからだ。と思ってたが、違った。「おい」「ねえ」だったのか。「ハイ！ ジャック」と同じじか。日本に来て、いつも「もしもし」と言ってたら、「モシモシ・ゲバラ」になってたんか。ちなみに、「もしもし」は「申します。申します」が語源だという。この本に書いとった。では、アホダビッチ・サバスキー・タカボンの語源は何でせうか)

〈レーニン〉

「怠け者を意味するペンネーム。「日本のレーニン」は「日本を代表する怠け者」だ。レーニンの本名はウラジーミル・イリイッチ・ウリアノフ。(隨分と謙虚な人なんだ。どうせオラは怠け者だから、といつもイジイジしてたんでしょう。「偉大なレーニン」は「偉大な怠け者」。「レーニン万歳」は「怠け者万歳」なんですね。よかですね。怠け者のくせにレーニンは巨乳好きだったそうです。米映画「いちご白書」で、学生が言ってました。)

〈スターリン〉

「鋼鉄の男」を意味するペンネーム。本名はヨセフ・ビサリオーノビッチ・ジュガシビリ。

(本名は難しくて呼べんよね。日本テレビのワイドショーに出ている有田芳生(よしふ)さんはお父さんが共産党だったので、「ヨシフ・スターリンのような立派な男になれ！」といって付けられた。芳生少年は、その願いにこたえて立派な共産主義者になり、共産党に入党した。しかし、その後、共産党をやめ、今はテレビのコメンテーターだ。じゃ、名前も変えるべきですよね。でも、愛着があるのか、変えてない。

ちなみに、戸井十月(作家)はロシアの十月革命からつけられた。奥田民

生（歌手）は民青（民主青年同盟）からつけられた。二人とも父親が共産党だったからだ）

〈トロツキー〉

本名はレフ（レオン）・ダヴィッドヴィチ・ブロンシュtein。「トロツキー」はペンネームで、シベリアの流刑地からトロイカ（三頭馬車）に乗って脱出したことにちなむという説と、オデッサに投獄されていた時の看守の名からとったという説がある。

はい、どうでしたか。本当に為になりましたね。「怠け者・レーニン」と「鉄の男・スターリン」。そして「三頭馬車のトロツキー」なんですね。三馬鹿大将みたいですね。さて、これから私の壮大な謎解きが始まります。よく、目を見開いてみりやれ。

この『意外な話1000』は朝日文庫から出ています。天下の朝日新聞です。520円です。増刷に次ぐ増刷で、売れてます。では、書いた人は誰でしょう。著者はJ&Lパブリッシングとなってます。表紙裏にはJ&Lパブリッシングは（有限会社ヨセフアンドレオン）と説明しています。社長は中川文人という人です。

では、「ヨセフ」と「レオン」というのは何でしょう。そうです。賢明な読者ならお気付きですよね。「ヨセフ・スターリン」と「レオン・トロツキー」からとったのです。凄いですね。社長の中川さんは、「ふみと」と読ませてますが、本当は「ブント」です。共産主義のブントです。だから新左翼です。それにこの人、法政大学を中退し、何と、レニングラード大学に入ったのです。そして、エスエル出版会（鹿砦社）に入り、今は独立して、「（有）スターリン&トロツキー社」の社長です。いや違った。「（有）ヨセフ&レオン」の社長です。

前にいたエスエル出版会も新左翼出版社で、SR（エスエル）というのは、ロシア革命の時のテロリスト組織の名前です。（そこから私は10冊以上、本を出してます）今、その社長は阪神、アルゼに対する「名誉棄損」で逮捕され、裁判中です。そんなとこにいた凄い人が中川文人さんです。だから私とも知り合いなのです。

私は、さらにこのお兄さんも知っています。「アイピーシー」という出版社の社長で、主にソ連の本を日本で出してました。この出版社名にご記憶がある人は、マニアです。通です。以前、この出版社から私は二冊の本を出します。『平成元年のペレストロイカ』と『天皇制の論じ方』です。も

う絶版でしょうが、ネットで探したらあるでしょう。

それに、『天皇制の論じ方』は、大幅に書き直し、書き加えて、『言論の不自由』（ちくま文庫）になりました。「解説」をあの見沢知廉氏が書いてくれました。「鈴木邦男って狼？」というタイトルまでつけて…。「鈴木評としては最高だった」と皆に言われました。いい記念になったと私も思っています。

(3)活動家はバイクに乗る。都バスで飛ばす

では、『意外な話1000』は、この辺で終わりましょう。ともかく、面白いし、ためになる本です。デートに、ドライブに、ショッピングに。又、会社で、学校で、役立つ情報がたくさんあります。そうそう、果物で、本当かよ、と思った話を書いて終わろう。

インドリンゴは印度産ではなくて、アメリカのインディアナ州産なんです。マスクメロンの「マスク」は「顔」ではなくて、フランス語で「麝香（じゃこう）」のような芳香がする、という意味。又、これが一番驚いたのですが「アンデスマロン」ですよ。アンデス産のメロンとばかり思ってたのに、違う。「当たり外れがなく、安心です」というシャレなんだ。 「アンシンデス」が「アンデス」になったという。ふざけている。

ふざけたネーミングといえば、昨日、山形の人からこんな話を聞いた。東北地方は、菊を食べる。全部の種類の菊が食べられるわけじゃないが、食用菊がある。山形市内では99円ショップでも売っている。それが、「もって菊」という。山形の人なら知ってるだろう。でも菊は皇室のマークだ。これは不敬になる。もっての外だ。そこから、「もって菊」になったという。これもふざけている。不敬だ。もっての外だと思ったら、食うなよ！と言いたいね。

最後に大阪の梅田の話題だ。梅林があったのかと思ったら違う。じゃ、皆、梅毒だったのか。これも違う。沼地で、埋め立てた所だそうな。「埋めた」が「梅田」になっんだと。聞かなきゃよかった。世の中には、「なんでかな」「不思議だな」と思ってる方がいいこともある。そう感じた晩秋でした。

と、終わろうとしたら、大事な事を忘れてた。もう三つだ。これは使える。

〈活動家の移動手段・その1〉

重要な任務があるときはバイクで移動するのが原則となっている。理由は

Nシステム（ナンバープレートを記録する警察のシステム）をかわすため。バイクは後ろにしかナンバープレートがなく、フルフェイスのヘルメットを被れば顔もわからないので、Nシステムの「死角」になるというわけ。

〈活動家の移動手段・その2〉

普段、都内を移動するときは、原則として都バスを使う。理由は、電車よりも尾行を見抜きやすいから。

〈活動家の買い物方法〉

買い物をするときは、カバンやポケットから財布を出して手に握りながら店に入る。理由は、財布をポケットに入れたまま商品を手にとり、それだけで「万引きの現行犯」として逮捕された人間が過去にいたから。

(ホントかよ。そんなことで逮捕されんの。そうか。書いた本人・中川さんが「逮捕された人間」なんだ。それしかないよ)

【だいありー】

(1)11月20日(日) 4時から朝日ホールで小林政広監督の映画「バッシング」を見る。「モデルはない」といってるが、どうみてもイラクで人質になった女性がモデル。シリアスな映画だった。「たたかれ・強く生きる」女性の物語だ。

(2)11月21日(月) 7時、志の輔さんの落語会に行く。

(3)11月22日(火) ジャナ専。「時事問題」は愛国心について。「現代史」は衛星放送とケネディ暗殺について。

(4)11月23日(水) 中野図書館で勉強。

(5)11月24日(木) 河合塾コスモで授業。7時から野分祭。

(6)11月25日(金) 格闘技の雑誌やら「月刊タイムス」の原稿やら、たまつてパニックになりながら書きました。

(7)11月26日(土) 7時、阿佐ヶ谷。ロシアのアニメ映画監督ノルシュタンさんの歓迎会に出ました。

【お知らせ】

(1)12月2日(金) 7:00p.m. 高田馬場のライブ塾（トリックスター）。元警視庁刑事の北芝健氏がゲストです。「現代社会と犯罪。国内外の治安情

勢、そして公安」.です。『公安化するニッポン』(WAVE出版)の中でも、衝撃的な話をしております。知られざる公安の実態について語ります。なかなかこんな機会はありません。ぜひ、聞いて下さい。北芝さんは人気マンガ「まるごし刑事（デカ）」の原作者としても有名です。

(2)12月9日(金) 7:00p.m. 一水会フォーラム。高田馬場のシチズンプラザです。八木秀次さん（高崎経済大学助教授）が講師で、「万世一系の皇統を守るために」です。

(3)12月27日(火) 7:30p.m. ロフトプラスワンで「創」プロデュースのイベントがあります。森達也さん（映画監督）などが出ます。僕も出ます。

(4)1月17日(火) 7:00p.m. ライブ塾。映画監督の若松孝二さんがゲストです。今年は「17才の風景」が大評判を呼びました。今、連合赤軍の映画を撮るために準備を進めております。事件に参加した17才の少年の眼から見た連合赤軍を描こうとしています。さらに、それを撮った後、今度は、山口二矢を撮りたいといってました。1960年に社会党の浅沼委員長を刺殺した少年です。それで、17才の3部作にすると意欲的です。その辺の話を聞いてみたいと思います。

(5)作家の佐伯紅緒さんからご本を頂きました。ありがとうございました。ほしよりこの漫画『きょうの猫村さん』（マガジンハウス）です。「猫をかつてる人なら、これを読んで猫の気持ちを理解しなさい」とのこと。飼われてゴロゴロ寝てるだけじゃ申し訳ないと、このネコさんは、スックと立ち上がり、エプロンをしてご主人様のためにご飯を作るんです。家政婦ネコになるんです。入れるお茶はちょっとぬるいんですが、「私、ネコ舌だから」。かわいい猫ですね。うちの猫も仕込んで、やらせましょう。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張12月5日 ホントは怖い「作家の眼」

(1)夢枕漠さんに私の心を読まれてしまった

小説を書くというのは大変な作業であり、重労働なのだろう。又、その作業を通じてしか見えてこない〈真実〉もある。そんな事を最近、痛感した。

夢枕漠さん（作家）が以前、僕の『夕刻のコペルニクス』（扶桑社）の本の帯に推薦の言葉をこう書いてくれた。

〈本書は衝撃的な本である。言論を業（なりわい）としている人間、あるいはこれから業としようとしている人間は、本書を一度手に取る必要があるだろう〉

身にあまるお言葉だ。ありがたいと思った。夢枕さんとは口上で一緒に話したことがあるし、格闘技の試合会場でもよく会う。終わって食事をおごってもらったこともある。何かの時に、「鈴木さんも小説を書いてみたらどうですか」と言われた。「いや、とてもとても」と僕は言った。謙遜ではなく、本心からそう思ったのだ。評論やエッセーと違い、使う文章からして全然違う。

一字一句に命をかけ、表現のために身を削るような努力をする。そんな小説を読み、小説家の仕事を見ていると、とても小説なんて書けないとと思う。評論やエッセーとは全く別物だ。それに、フィクションを頭の中で作り上げ、それに命を吹き込み、動かす。そして感動させる。こんなこと、とても出来やしない。

「タコペ（夕刻のコペルニクス）だって、実際にあったことを、ただそのまま書いてるだけですし。だから書けたんですよ」と言ったら、「いやいや、結構フィクションも入ってるじゃないですか」と夢枕さんは言う。ギクッとした。「どの辺ですか」と聞いた。自分でも意識してなかったから

だ。フィクションを書くつもりはなくとも、筆が滑ったり、ついつい話が大袈裟になったりと、そういう事はあるのだろう。夢枕さんは、「ことここと…」と具体的に指摘する。ウッと唸った。凄い人だな、と思った。カウンセラーに自分の潜在意識を指摘されたような気がした。夢枕さんに指摘された中には、自分でも〈真実〉だと思っていた事がある。しかし、自分の思い違いで長い間、〈真実〉と思ってきたことかもしれない。勿論、筆が滑ったり、ちょっと気分がハイになって、遊んでみた部分もある。登場人物との〈合意〉の上で話を作ったこともある。

でも夢枕さんは、それらが全て分かるという。「どうしてですか?」と動揺して聞いた。「だって私は小説家ですから」と言う。つまり、代表作『陰陽師』のように、大きなお話を毎日作り上げていく。そういう作業の中で、他人の書いた〈ウソとマコト〉が自然に分かるようになる。そういうことらしい。夢枕さんだけではない。「小説家は皆そうですよ」と言う。そうすると、このHPで書いてることも、本当かどうか、一瞬にして分かってしまう。小説家は怖いと思った。

三島由紀夫は35年前に死んだが、書いたものを読んでると、皆、予言になっている。たとえば、改憲試案を作って女帝を認めている。自衛隊を二分して、一つは祖国防衛隊、一つは国連警察軍にしろ。…などと言っている。それは、「楯の会」を作り決起に備えた「行動者」の予言だと思っていた。ところが、夢枕さんの話を聞いて、「違うかな」と思った。小説を書くことによって身に付いた予知能力かもしれない。小説を書くことを通じて、世の中の奥の奥まで見えたのだろう。そして、未来のこと。

そういえば、見沢知廉氏にも、よく、心を読まれた。ある時、電話があった。「みやま荘で一部屋、空いたんでしょう。引っ越したいんですが」と言う。「冗談じゃない。空いてないよ。たとえ空いたとしても、やめてくれよ!」と悲鳴を上げた。危険の二乗になる。それでなくとも公安に目を付けられてるのに。…と思った。

思いとどまってくれたからいいものを、こっちは冷や汗ものだった。だって、本当に一部屋、空いた時だったからだ。そんな情報をどこからか得たのか。いや、こっちの心を読まれたのだ。小説家には、見通す力があるのだろう。怖い。

(2)雨宮さんのおかげです。「猫の気持ち」が分かりました

前にこのHPで書いたが、雨宮処凜さん（作家）から『77のしぐさでわか

る猫の気持ち』（幻冬社文庫）をもらった。又、佐伯紅緒さん（作家）から、ほりよりこの漫画『きょうの猫村さん』（マガジンハウス）をもらつた。「鈴木さんは猫を飼ってるんでしょう。だからこれを読んで勉強して下さい」と、くれたのだ。ゾッとした。

だって考えてほしい。このHPを読んで、圧倒的に多くの人は、「また、クニちゃんも冗談ばっかり」「ウソを書いて面白がってんのよね」と思ったはずだ。「誰も振り向いてくれないから、オイタしてるのね」と。本当だと思った人は、ほとんどいなかった。皆そう思うだろうな、と思いながら私も書き飛ばした。

ところが、女性作家二人は、「これはホントだ」とピンときた。遊び半分の文章なのに、どこかに「リアリティ」を見付けたのだろう。「嘘をついてるように見せて、ここは本当だ」と見破られてしまった。一体、あの文章のどこを見てそう思ったのか。不思議だ。「作家の眼」は怖いと思った。

この二人とは、よく会っている。見沢氏の追悼集会でも会った。いつも私は心を読まれてしまう。冗談を言っても、嘘をついても、すぐに見抜かれてしまう。それだけ小説を書くという作業は苦しく、大変なのだろう。それができる人は〈神〉になるのかもしれない。私は何を書いたって、見抜かれてしまう。

コトコトと、FAXから紙が吐き出されてきた。一連なりになって、畳の上に落ちて来る。「何だ、これは」という顔をして、猫がその紙にジャレつく。爪で引っ搔く。噛る。「あっ、いかん。ダメじゃないか」と叱る。「これはオラの商売道具なんだから…」と言い聞かせるが、分からぬ。

又、朝、新聞を読んでると、ジャレつく。新聞を置いて、顔を洗いに行って戻ると、新聞紙の上にどっかと座っている。いや、丸まっている。寝ている。「ちょっと。読みかけなんだけど…」と言ってもどいてくれない。まいったなーと思う。時には、新聞の上にあおむけになって、お腹を見せていく。

でも、『猫の気持ち』を読んだら、あえてお腹を見せるのは、「あなたの前ならばお腹だって見せられるぐらい信頼しています」ということの表現で、これ以上ない友好のしるしだという。お腹を見せて、手足をバタバタさせて、「ねえ遊んで」と誘っているんだ。この本では言う。

〈ここまで強くおねだりされたら、たとえ新聞が読みたくても、ちょっと中斷して遊んであげたいものです。新聞はネコが眠っている間に読めばいい

のですから。知らんぷりをされたら、ネコはしょんぼりしてしまうかもしれません〉

なるほど、そうかと、猫の気持ちは分かりました。それ以来、一緒に遊んでやってます。新聞を読むのは、猫が寝てる時に読みやいいんです。大体、寝てる時間の方が長いですから。猫は、昔々はエジプトで飼われていた。日本には平安時代に中国から来た。仏典を船で運ぶ時に、ネズミに食い荒らされたら大変だ。それで、ネズミ対策として、猫が船に乗せられた。

それで日本に来たんだけど、まだ名前がなかった。いつも寝てばかりいる。「寝（ね）る子」だな、と皆が言い合った。そこで、「ねるこ」が、「ねこ」になった。嘘みたいだけど、本当の話だ。真実はシンプルじゃけん。それに、どんな小さな嘘だって見抜く作家たちが読んでるんだし、嘘は書けませんよ。

この『猫の気持ち』はとても勉強になりましたね。ヒモやコードなど細長いヒモで遊ぶのもそうですね。かまってほしいんです。そんな時は、仕事を中断して遊んでやります。

ただ、FAXの紙を破かれちゃ困るので、新しい機種に変えました。ロール式じゃなくて、スタンド式のやつです。FAXの上に、一枚ずつ出てきて立つんです。これだと破られません。よかったです。

そうだ。この本の135ページと143ページの上の方が折ってあった。「突然部屋の中で走り出す」「気持ちよさそうにしていたのに突然噛みつく」と書かれてます。そんな時にはどうしたらいいかです。「猫の気持ち」は、「たまつたエネルギーを発散している」「急所を強くなでられて危険を感じた」。…というのです。だから、それを分かってあげましょうね、と言うのだ。

フーンと思った。ページを折ってるということは、これは雨宮家のネコのことだ。こんなことをよくやるんだ。原稿を書いてる時に、部屋中、走り回ったり、噛みついたり。「その時はこうすればいいのか」と感心し、雨宮さんは納得してページを折ったんだ。

そう思ってました。今、これを書くまで。でも、ここまで書いてきて、ギョッ！としました。だって、オラの家のネコも全く同じなんです。ゾーッとしました。作家に心を読まれてます。「ネコを飼ってるでしょう」と見破られただけじゃない。「鈴木さんちのネコはこんな仕草をするでしょう」と、見通されたんだ。怖いねー。小説家というのは、そこまで見通す力があ

るのか。まるで超能力者だ。エスパーだ。

じゃ、とても小説家となんて結婚できないね。心は読まれるんじゃ、浮気も何も出来やしない。でも、結婚してる人はいるよね。同じ作家同士で。津村節子と結婚してる吉村昭。曾野綾子と結婚してる三浦朱門。高橋たか子と結婚してた高橋和巳。ウーン、この人たちも偉い。家の中では心の読み合いでしょう。エスパー同士の闘いでしょう。

この『猫の気持ち』を読んだおかげで、本当に猫の気持ちが分かるようになりました。そして、猫と会話が出来るようになりました。夜、外に行くと、小さな公園の所に猫が10匹ほど集まって、よく会議を開いてます。「最近はストレスがたまるニヤン」とか、「人間は理解がなくて困るニヤン」と言い合っています。猫も大変なようです。そのうち、テレビにも猫専門チャンネルが出来るでせう。「猫の主張」とか、「朝まで猫激論」とか、「新婚猫さんいらっしゃい」「猫のど自慢」「猫のダイエット・ビューティコロシアム」などが放映されるであります。

(3) 公安も凄いやね。やっぱり心を読まれちゃう

さて、もう一冊の猫本です。佐伯さんからもらった漫画『きょうの猫村さん』です。いやー、面白かったですね。猫のお巡りさん、じゃない、猫の家政婦さんの物語です。まるで、「家政婦は見た」の猫バージョンです。人に出来ることは猫にも出来るはずだと、健気にも、この猫さんは、家政婦になって働くんです。いろんな家にいって、その家の秘密も覗きます。不良娘にいじめられたりもします。秘密の隠し部屋を覗いたりもします。猫だから、裸にエプロンです。色っぽいです。家の猫も、そう仕付けようと思います。

「ケーブルインターネット」で話題の脱力漫画。ついに登場」と本の帯には書かれています。じゃ、私もケーブルインターネットで猫漫画を描こうかな。うちの猫のことを描きやいいんだろう。「吾輩は猫である。名前はまだない」と書き出して。これは漱石か。いかんがな。

でも昔、『週刊朝日』で、(漫画家以外の)いろんな人に漫画を描かせる企画があった。私は『朝生』のことを四コマで描いた。初め人間にしたけど、うまく描けんので、鳥にした。鳥が激論し、喧嘩する漫画だ。右の翼と左の翼を打ちふるわし、それで叩き合う。人間は元々は鳥だったんだし。始祖鳥というくらいだし。だから、今度は鳥を猫に変えりゃいいだけだろう。でも猫は耳があるし、手足があるし、描くのが面倒だな。鳥と違って。(ア

レッ、「猫」と「描」は字が似てるね。だからどうしたと言われたら困るけど）。

小説家は怖い。なんせ人の心を見抜くから。と言ったけど、公安も怖いやね。元公安の北芝健さんとはライブ塾で話したけど、鋭い人だ。心を読んじゃう。それも瞬時に。『公安化するニッポン』（WAVE出版）でインタビューした時もそれは感じた。終わった後に、たわむれに聞いたんですよ、私は。「どうして赤報隊は捕まらなかったの？」と。即座に答えましたよ。

「鈴木さんが庇ったからです」

ゾーッとしましたね。冷や汗がドバーっと出ましたね。このHPにも前に書いたけど、凄い奴だな、と思いましたよ。「鈴木さんが犯人だから」とか、「共犯だから」とは言わない。「庇ったから」と言った。見抜いている。こんな奴が当時の担当だったら、私は逮捕されていた。のんびりとこうして書いてはいられんかった。

やはり、『公安化するニッポン』で出てもらった真田左近氏も凄いと思った。「鈴木さんは猫を飼ってるんですね。僕も六匹飼ってるんです。一人一人、性格が違うんですよ。面白いですね」と言う。一般の人は、「又、嘘を書いてる」と思ったのに、小説家と元公安だけは、「これはホントだ」と見破った。一体、文章のどこで見破ったのか。じっくり聞いてみたい。

そういえば、私の最も尊敬する革命家、塩見孝也さんにも言われた。「オマエな、猫を飼うっていうのは大変なんだぞ。家族が一人ふえるのと同じだ。お前にその覚悟があるのか」と詰め寄られ、総括されました。又、ロフトの平野悠さんにも、猫を飼う上での注意を懇々と諭されました。ありがとうございます。じゃ、今度は平野レミの料理でも買ってきて、猫に食べさせてあげましょう。

そうそう。本やら、キャットフードやら、たくさん送って頂きありがとうございました。「鈴木さんよりも猫の方が人気があるね」と言われました。その通りですね。お金がなくて、お腹の空いた時は猫に分けてもらって食べてます。キャットフードは塩っ気がないから、人間には食べづらいのですが…。私は日本人だから、やっぱり「塩サバ」が好きですね。私も、シオサバスキーになっちゃいますね。

しかし、猫は、今は高価なキャットフードとかマグロのトロなんかを食つりますが、昔は悲惨でしたよね。人間の食い残したご飯に味噌汁をぶっかけて、食わされてました。それが「猫まんま」と言われてました。でも、猫は本当は、塩からいのが嫌いなんです。塩分はわざわざ取らなくてもいいん

です。「こんな塩っぱいのは嫌だ」といって、ニヤーニヤー抗議したのですが、「そんならやんないよ」と言われるので、仕方なく食べてたんです。嫌いだが、食べないと死ぬからです。体に悪いものを、いやいや食べてたんです。だから、昔の猫は皆、短命でした。私達、日本人が虐待し、虐殺したのです。だから、「申し訳ないことをしました。許して下さい」と、日本人を代表して私は猫に謝罪しました。猫がこうむってきた「虐待の歴史」も書こうと思います。歴史の見直しです。

その点、今はいいですね。塩分なしの、キャットフードはあるし、高価な魚を食べています。うちの猫は、マグロが好きですし、魚介類も好きです。何故か、コンブもワカメも大好きです。舐め回し、クチュクチュ噛んでます。だから長生きするでしょう。知り合いの猫のシオサバスキーも長生きです。人間にしたらもう150才位です。では、オワリです。

【だいありー】

(1)11月28日(月) 美人ライター2人と秋葉原へ行きました。取材で、メイド喫茶に行きました。不純な動機ではありません。あくまで仕事です。取材のためです。そこで、三軒もハシゴしちゃいました。楽しかったです。メイドは猫ですね。ただ、いるだけで可愛い。仕草が可愛い。客もそれ以上を望んでない。と言ったら、「さすが猫を飼ってる人は違いますね」と感動されました。

(2)11月29日(火) ジャナ専。「時事問題」では「5つの君が代」のビデオを見せました。「君が代」にメロディをつける時に、お雇い外人やら日本の役人やらが作り、何と5つも君が代のバージョンがあったのです。私は讃美歌ふうの「君が代」が一番いいと思いました。「現代史」では東京オリンピックをやりました。市川崑の映画「東京オリンピック」はその時代の日本そのものを映し出した映画です。皆さんも見たらいいでしょう。この時が日本の分岐点でした。

(3)11月30日(水) 図書館

(4)12月1日(木) 河合塾コスモの授業。見沢知廉氏の『母と子の囚人狂時代』(新潮文庫)をテキストに読書会をやりました。

(5)12月2日(金) 7時からライブ塾。元公安の北芝健さんが講師。「現代社会と犯罪。国内外の治安情勢。そして公安」。凄い話が聞けました。北芝氏

は決して「反公安」ではない。むしろ、警察・公安はもっと増やすべきだと思います。しかし、昔の縁でこうして来てくれ、話してくれました。ここまで喋っていいのか、と思うほどです。ありがとうございます。

(6)12月3日(土) 元コスモ生、(現・早大生)が芝居に出るというので、見に行きました。東京グローブ座で。「早稲田演劇vsジャニーズ事務所」という謎い文句で、「橙色の星」でした。なかなか、よかったです。早大生はマスコミ志願といいますが、このまま俳優になつたらいいと思いました。

(7)前に、二兎社の芝居「歌わせたい男たち」のことを書きましたが、「週刊金曜日」(11月18日号)で、その作家・永井愛さんにインタビューしました。知り合いの星崎いつきさんが。よかったです。私もインタビューしたかった。東京公演は終わり。これからは地方です。でも又、東京でやってほしいですね。

(8)格闘家・須藤元気さんに先月インタビューしました。来月、出る雑誌に載ります。とても哲学的、宗教的な人です。本屋で彼の本、『幸福論』(ネコ・パブリッシング)が出てたので買いました。やはり、「ネコ」なんですね。幸せのキーワードは。何と、彼は空海の辿った道=四国88ヶ所・お遍路を旅して書いたエッセーなんです。獄中20年で、自分はちっとも幸せじゃないくせに『幸福論』を書いた人もいましたが、元気さんの『幸福論』は、アランの『幸福論』にならったんです。凄いです。思索的です。

(9)筑紫哲也さんから『旅の途中・巡り合った人々』(朝日新聞社)を送ってもらいました。とてもいい本で、一気に読みました。野村秋介さんとの交遊についても書かれています。

又、野分祭の時に、元楯の会の田村司氏から『火群(ほむら)のゆくへ。元楯の会会員たちの軌跡』(柏艤舎)をもらいました。鈴木亜繪美著、田村司監修となっております。よく調べて書いてます。力作です。「楯の会」の歴史としても貴重です。

【お知らせ】

(1)12月9日(金) 7:00p.m.一水会フォーラム。高田馬場のシチズンプラザです。八木秀次さん(高崎経済大学助教授)が講師で、「万世一系の皇統とは」です。

(2)12月27日(火) 7:30p.m. ロフトプラスワンで「創」イベントです。森

達也さんなどが出ます。私も出ます。

(3)1月17日(火) 7:00p.m. ライブ塾。映画監督の若松孝二さんがゲストです。映画「実録・連合赤軍」を撮るために準備に入りました。この映画を撮れるのは俺しかいないと断言しています。そのあとは、山口二矢を撮りたいと言ってます。若松監督のその意気込みを語ってもらいます。

(4) 「News Week」(12月7日号)は巻頭特集で「皇室は本当に必要か」です。8ページの意欲的な企画です。私もコメントしております。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張12月12日 12年前。虚脱感の中で、脱力して書いたんですね。この『脱右翼宣言』を

(1) 「中川家」の革命兄弟にはお世話になりました

あらあら。大事な事を忘れていたわよん。アホですね。ボケてますね。と思いました。 (株) アイピーシー ((株) IPC) からは『平成元年のペレストロイカ』と『天皇制の論じ方』の二冊を出した、と書いたけど、もう一冊出してたんです。『脱右翼宣言』です。衝撃的な本です。こんな大事な本を忘れていたなんて、ダメですね。

ちょっと整理して話を進めましょう。『身近かな人に「へえ～」と言わせる、意外な話。1000』(朝日文庫)という本がある。先々週に詳しく紹介した。「右翼のテロと左翼のテロの違い」「赤軍派」「レーニン」「トロツキー」「スターリン」「ハイジャック」「活動家の移動手段」「活動家の買い物方法」…など興味深い話が満載だ。一体、誰が書いたのかと思ったら、「(有)ヨセフ&レオン」の中川文人さんです。左翼に詳しいわけです。この人が左翼だからです。革命家です。だから私の知り合いですよ。

文人(ふみと)と言いますが、本当は“ブント”です。共産主義者です。革命家を数多く輩出している名門。法政大学に入り、そこではまだ足りないとばかり、本場ソ連に渡り、レニングラード大学に入ったのです。帰国してからは新左翼出版社「エスエル出版会」(鹿砦社)に入社し、今は独立して、「(有)ヨセフ&レオン」の社長です。ヨセフとはヨセフ・スターリン。レオンとはレオン・トロツキーからとったのです。凄い会社です。日本の革命を夢みる危ない会社です。

実は、この中川文人さんにはお兄さんがいて、この人も出版社をやってます。(株) IPCです。そこで私は、二冊本を出します。というのが、前

回までのあらすじです。ところが、三冊も出してたんですね。紹介します。

(1)『平成元年のペレストロイカ』

平成元年というくらいですから、平成元年（1989年）に出たのですね。もう17年も前ですか。そんな昔から、付き合いがあったんだ。

(2)『天皇制の論じ方』

これは平成2年（1990年）です。これを基にして『言論の不自由』（ちくま文庫）が出来、「解説」を見沢知廉氏が書いてくれました。

(3)『脱右翼宣言』

平成5年（1993年）12月23日に出ています。本の帯には、「野村さんの死とともに新右翼は終わった」と書かれている。野村秋介さんの自決（1993年10月20日）の直後に書かれ、急遽出版されたのだ。僕にとっては重要な「宣言」をした本だし、それ以後の転機になった本だ。そんな大事な本を忘れていたなんて…。

この三冊の本を出した出版社は「（株）IPC」という。「（株）アイピーシー」とも書く。出版社らしくない。説明しても分かってもらえない。僕自身だってよく分からぬから無理もない。でも、この「（株）IPC」とは何だろう。ソ連関係の本を多数出してるから、やはり左翼出版社だ。じゃ、Iは「インター」だろう。労働者の歌だ。Pはポリティックかな。パニックかな。Cはコンミューンだろう。この世の中を混乱させ、パニックに陥し、そして暴力革命を起こす。そして理想の共同体をつくる。そういう理想を込めた名前だろう。そう思って、いろいろ考えていたら、あらん。奥付にちゃんと出ていた。「発行所株式会社アイピーシー」の下にカッコしてこう書かれていた。

(INTER PRESS CORPORATION)

あれっ、こんな略だったのか。社長は中川右介さんだ。変わった名前だ。「みぎすけ」と読むのか。「ゆうすけ」かな。でも、バリバリの左翼なのに「右介」だ。変だ。「左介」にすべきじゃないか。お父さんも共産主義者のはずなのに、どうして「右介」なんだろう。不思議だ。つまりですね。兄は中川右介。（株）IPCの社長。弟は中川文人。（有）ヨセフ&レオンの社長。凄いですね。だから、「中川家」の革命兄弟と言われておりました。

さらにこの本の奥付を見ると、「ダストジャケット。表紙設計 府川充男」と書かれています。この人も左翼です。極左です。

そうか、この府川さんが「中川家」の二人を紹介してくれたんだ。エスエル出版会（鹿砦社）の松岡社長に紹介してくれたのも多分、府川さんですね。記憶の糸が段々つながってきました。そうそう、府川さんは装幀家としては一流の人で、仕事のし過ぎで、首や肩が痛いといってたんで、私が骨法整体を紹介したんです。そこに通って、治してもらったんです。そんなこともあります。

今、パラパラと『脱右翼宣言』を読んでみたら、ゲッと叫んでしまいました。とんでもない本ですよ。右介社長自らが私にインタビューしています。そして、「脚注」を付けてるんです。それも、二人で付けてる。一つの言葉に、相反する脚注を（鈴木）（中川）と、書き入れちよる。こんな「注」は画期的だよ。革命的だよ。たとえば、P64。サッカーのサポーターが日の丸の旗をふっていると本文に書かれているが、その下の「注」では、こう書かれちよる。

〈若い人は日の丸・君が代が嫌いかと思っていたら違っていた。サッカーワールドカップ予選の時、応援で日の丸を振り、君が代を歌っているではないか。これには正直、ぶったまげた。右翼以上だ（鈴木）

同じくぶったまげた。サッカーは嫌いになった（中川）〉

(2)学校ではキッチンと教えるよ。レーニンも、「日本のレーニン」も

笑っちゃうね。喧嘩を売ってるね。左翼過激派の意地を示しているのか。P114の「オードリー・ヘップバーン」の注では、左右仲よく〈仲翼〉、こう書いて補い合っています。

〈鈴木さんの話によると、今の天皇・皇后がいちばん好きな映画は「ローマの休日」なんだそうだ。あまりにも出来すぎた話（中川）

ちなみに皇太子さまは、「望郷」とヴィスコンテの「ベニスに死す」がお好きだという。新聞記者に聞いた話だ。ヴィスコンテの映画はお好きなようで、だったら悲劇の国王を描いた「ルートヴィッヒ」もお好きなのだろう（鈴木）〉

革命歌「インターナショナル」の注では中川さんはこんなことを書いてます。

〈革命歌。最近では、中国の天安門事件の時に、学生たちが歌っていた。映画「レッズ」では大音響でこれが聞ける。この歌のところだけが欲しくてこの映画のサントラ盤を買ったし、その後LDも買ってしまった（中川）〉

やはり革命家ですね。僕も「レッズ」のそのシーンには感動しました。皆も、ビデオ店で借りて見たらよかとでしょう。P41の「レーニン」の注では、

〈ロシア革命の指導者。「日本史で受験したから」という理由でこの名を知らない大学生が多いと聞く。日教組は何をしているのだ（中川）〉

そうですね。キチンと教えるべきですよね。「日本のレーニン」と呼ばれているのは塩見孝也さんだ、ということも教科書にキチンと書いて、教えるべきでしょう。そんなに偉い人なのに全く偉ぶらず、塩サバが好きだということも。それで、人民からは「シオサバスキー」と呼ばれていることも。それに、「寅さん」の大ファンで、本人も、しょっちゅう恋をし、ふられていることも。恐妻家だということも。そして、偉大な革命家のほのぼのとした一面も教えてあげるべきでしょう。

さて、「中川家」のお兄さんは、さらにP72で「マルクス・レーニン・毛沢東」の注で、こう書いてます。

〈左翼の好きな御三家。よくマルクス、レーニン主義というので、一人の人間の名と姓だと思っている若者が多いそうだ。そうではなくて二人なんだよ、と教えると「ああ昔の藤子不二雄みたいなものですね」と答える。毛沢東も「もうたくとう」と読める若者は少ない。再び言う。日教組は何をしているんだ！〉（中川）〉

随分と日教組に期待し、叱咤激励してますね。『論座』で日教組委員長と対談した時に、この『脱右翼宣言』をあげりやよかった。でも僕も一冊しか持っていないからな。じゃ、ネットの古本屋で探して、あげようかな。皆さんも、ネットで探して読んでみて下さい。こう見てくると、『意外な話』のテーマと似ちりますね。コンセプトが。書き方が。やはり、『中川家』の文章ですな。IPCのDNAですよね。共産主義者の染色体ですね。だったら、『脱右翼宣言』も朝日文庫で復刊してくれよ。

もうちょっとこの本の紹介をする。基本的には中川右介さんが私に質問をする。それが中心だ。厳しい質問、面白い質問、トンデモない質問…があり、楽しめる。「注」も面白いし、「注」だけ読んでいっても楽しい。全体は4章から成る。

はじめに

第一章 さらばです。野村秋介さん

第二章 右翼は何を考えているか

第三章 右翼との正しいつきあい方

第四章 右翼へのさらなる39の質問

右翼とは何か。天皇、北方領土、中国、天皇の戦争責任、北朝鮮、日教組、日の丸・君が代、ネオナチ、憲法、外国人労働者、クーデター、PKO…と、ありとあらゆることを聞かれている。まア、よく聞いたもんだ。よく答えたもんだ。偉いね。二人とも。第三章は、右翼から抗議された時どうするか。脅されたら警察にいくべきか。右翼はどうやって金を作っているのか。右翼は何を食べ、何時間寝てるのか。右翼はどんな結婚生活をしているのか。結婚していない若い右翼はどうやって性の処理をしてるのか。結婚していない老いた右翼はどうやっているのか。風俗にはいくのか。右翼は猫は好きなのか。本は月に何冊読むのか。…といった話をした。したように思う。だからこれは、「お宝本」になりますね。

(3)革命家だからこそ改憲を言うべきだ！と言っちょります

最後に私は「あとがき」を書いている。でも、「あとがき1」となっている。「あとがき2」は中川右介さんが書いている。そして、「さて、読者の方は僕のことをほとんど知らないだろうから、簡単に自己紹介しておく」と始める。エッ？ 普通、出版社の社長が「あとがき」を書いたり、自己紹介なんかしないよ。でも読んだら、やっぱり、左翼の家庭に育ったんだ。それが分かった。

〈僕は、生まれた家が左翼の家だった。家では天皇は極悪非道の人間だと教えられ、敬うどころか、嘲笑と軽蔑とそして糾弾の対象だった。さらに美濃部革新都政下（何となつかしい言葉！）に公立の小学校・中学校に通っていたので、日教組の組合員たちによる「君が代は歌ってはいけない」という教育を受けた。今では、信じられないが、あの頃の小学校では本当にそういう教育がなされていたのだ。（もっとも、そう教えたその教師も今は校長となり君が代を歌わせているらしいが）〉

カッコの中に注目してほしい。この本は12年前に出た。その頃からもう、こんな問題が起きていたのか。まるで芝居「歌わせたい男たち」の世界だ。この芝居では、「歌え！」と強制する校長が実は昔、活動家で、「君が代」強制反対を言っていた。まあ、中にはそんな特異な例もあるんだろうと思っていたけど、けっこう多いそうな。やだね。「転びバテレン」のような奴ら

だ。「君が代」反対なら、最後まで貫けよ。卑怯者めが。それでクビになつたっていいじゃないか。「いや、家のローンが払えなくなる」「家族を養えなくなる」と言うんだろう。自分の思想を曲げてまで校長になりたいのか。バカタレ！ローンが払えないなら、いいじゃないか。そんな家は捨てたら。木造アパートでいいんだよ、人間は。家族を養えないなら、捨てたらいい。家族なんかいらないよ。皆、放し飼いにしたらいい。かえって、たくましく生きるわさ。

しかし、「君が代」を歌え！ 愛国心を持て！ という連中のほとんどは昔、左翼をやってた奴らだよ。転向者だよ。田原総一朗さんは、「今は右翼の論客の半分以上は元左翼だ」と言っていた。やだね。元左翼だから、後ろめたさがあって、かえって強いことを言う。そのくせ、メンタリティーは同じだ。上昇志向は同じだ。そして、規則でがんじがらめに縛ろうとする。いやだね。さて、中川右介さんの「あとがき」に戻る。

右介さんは、君が代は一度も歌ったことはないし、日の丸は触ったこともない。初詣に神社にいかない。

〈書類は年月日を書くときは西暦で書く。警察の取り調べを受けた時に、西暦で年月日を言うと、刑事が勝手に昭和に直してしまったので、署名を拒否したこともある〉

えっ、じゃ、逮捕されたことがあるんだ。「不敬罪」かな。そんな昔じゃないか。じゃ、学生運動かな。その点をキチンと書いてくれなくっちゃ。（注）をつけて。何で捕まったかを。石を投げたとか、火炎瓶を投げたとか。警察官を袋叩きにしたとか。文脈の流れでは学生運動に読みとれるけど、でも、本当は、痴漢かもしれない。それはないか。

でも、最近、ある活動家らしき人に喫茶店に呼び出された。秘密の話だ。こみ入った話だから紹介するのはやめる。何かの話の時、「あっ、その時は僕はシャバにいませんでしたから」という。ヘエー、刑務所に入ったのか。偉いね、と言ったら、「いやー、麻薬の密輸で捕まってました」と言う。ゲッ、こいつはヤクの運び屋かよ。それでガクッと来た。

では、話を戻して中川右介さんだ。「あとがき2」で自己紹介したあと、急に、「今こそ革命が必要だ！」と言い始める。社会主義は崩壊し、左翼はなくなったといわれた時だ。それなのに、革命の必要を説く。皆金の奴隸になって、高度に発達した資本主義社会である日本だからこそ真の革命運動が始まらなければならないと言う。その革命の中味とは？

〈では、革命とは何か。実務的には「改憲」である。武力による革命なのか選挙による議会主義革命なのかはともかく、革命政府が最初にしなければならない仕事は、新憲法の制定である。したがって、「護憲」を主張する人間はどう考えても反革命なのだ。1946年に制定された今の憲法は天皇制を存続させ、私有財産を無制限に認めている点で、反動的なブルジョワ憲法であるから、これを改憲しようと言うのが真の左翼であるべきだ。第9条など、その革命の大義の前にはどうでもいいことなのだ〉

凄い！　これは大賛成だ。革命家として実に立派だ。左翼も当時からこのようにキチンと〈革命の大義〉を語っていれば、こんなに劣勢になることはなかった。今や自民党だけが改憲案を出し、「改革派だ！」と言っている。護憲を言ってる社民、日共は「守旧派」だと言われてる。

じゃ、この右介さんの問題提起を受けて、もう一冊、革命的な本を作りやよかったです。残念だ。

実は（株）IPCから出したもう二冊の本についても紹介するつもりだった。だが、又の機会にゆっくりやろう。簡単に、本の帯と目次だけを書いておこう

『平成元年のペレストロイカ =がんばれ、ゴルバチョフ=』

なんか、サブタイトルが凄いね。こんなこと書いたっけ。〈帯〉は。

〈新右翼リーダー、鈴木邦男の書き下ろし五百枚。ソ連へのloveコールか。転向の書か。やはり反ソ活動か。朝日新聞で紹介された話題の一冊。大反響！〉

〈目次〉

- 第一章 僕が反ソ青年だった頃
- 第二章 初めて見た社会主义国家
- 第三章 ソ連の国技、サンボを習いに
- 第四章 ペレストロイカは本物だ
- 第五章 みんな同じ人間だ

まあ、この目次を見ただけで、大体の内容は分かるだろう。では、もう一冊だ。

『天皇制の論じ方』

=タブーなき言論、テロルなき討論を=

〈天皇制をめぐる様々な事件と論争の渦中にある新右翼のリーダー鈴木邦男が、あるときは天皇の「お言葉」に涙し、あるときは自らの体験をもとに右翼テロリストの心情に踏み込み、あるときは、左翼の立場になって「天皇制廃止の方法」を考え、またあるときは、もっと穏やかに論じ合おうと呼びかける異色の書き下ろし長編エッセイ〉

なかなかうまい文だね。「あるときは」「あるときは」と、4つの類の男だね。昔、東映映画で「七つの顔の男だぜ」という探偵映画があった。多羅尾伴内という探偵が活躍するシリーズだ。「ある時は片目の運転手、ある時は…」と言うんだ。この帯の文を書いた人（中川さんか府川さん）もそれを意識して書いたのだろう。

それにしても、左翼のテーブルの上に乗って、「天皇制廃止の方法」まで考えたんだね、私は。驚く。「こうしたら、天皇制を廃止できるじゃないか」と教えてやってるのだ。敵に塩を送っているとも見えるが、実は、多いに挑発しているのだ。「面白い。じゃ、もっと語り合おう」と乗ってくる左翼がいると思ったけど、全くいなかつたね。これは淋しかった。では、この本の目次だ。目次のくせに長い。僕の本の中では一番長い目次だろう。

はじめに なぜ話し合いが出来ないのか

第一章 天皇あやうし 赤報隊の怒り、国民の怒り

第二章 僕の初めての「天皇体験」盧泰愚大統領訪日と天皇陛下の「お言葉」

第三章 テロで天皇を守れるのか 生テレビ「日本の右翼」が問い合わせたもの

第四章 左右激突の現場から 挑発する左翼、突っ込む右翼、そして笑うのは

第五章 反天皇論とは何か 天皇制を廃止して、その後はどうする

第六章 より民主的、より平和的な憲法を 「日の丸」「君が代」だって悩み、苦しんでいる

第七章 鬪う天皇 天皇論争もフェアーに、さわやかに
あとがき

15年前に出た本だが、天皇制をめぐる全ての問題について書いている。

「女帝」論議については書いてないかな。じゃ、それを含めて、又、別の角

度から天皇問題は考え、書いてみたいね。来年の課題だ。

【だいありー】

(1)12月5日(月) 東中野図書館。夜7時から岡留安則さんと天皇制について対談。15年前に書いた『天皇制の論じ方』（（株）IPC）を思い出しながら、今の問題点、これからの課題について話し合った。

(2)12月6日(火) ジャナ専。「時事問題」では三島由紀夫の映画を見せてやった。そこで「檄文」を読んだ。「現代史」ではベトナム戦争について話をした。

4時半から帝国ホテルに行く。大河漫画「柔侠伝」を描いて、一世を風靡したバロン吉元さんのパーティ。今は名前を龍まんじと改めて、天女の絵を描いている。柔侠伝は僕の一番好きな漫画だ。連合赤軍でも好きな人がいて、「バロン」というスナックをやってますよと話したら、「うん、聞いたことがある」と喜んでいた。

(3)12月7日(水) 衛星チャンネル「朝日ニュースター」の「テレビウワサの真相」に出る。公安の話だ。

終わって、六本木へ。西部邁事務所で作っている『表現者』の忘年会に出る。岡留安則、小西克哉さんの司会で、佐高信、森達也、野田敬生さんらと出た。放映は1月7日(土)の予定。

(4)12月8日(木) 11時、見沢知廉氏のお寺（白山の光源寺）にお墓参りに行く。

(5)12月9日(金) 夕方、関西テレビに出る。日帰り。「ムハハ noたかじん」だ。12月16日(金)7時半放映予定。7時から一水会フォーラムで八木秀次さんの講演『万世一系の皇統とは』があったので聞きたかったが、残念だった。

【お知らせ】

(1)12月7日(水) 月刊「創」（1月号）が出ました。私の連載では「アムネスティで講演」を書いてます。大阪のアムネスティに呼ばれ、死刑制度について話した時のことを書いてます。

(2)12月27日(火) 7:30p.m. ロフトプラスワンで「創」イベントです。森達也さんが出ます。私も出ます。

森さんからは最新刊、『悪役レスラーは笑う=「卑怯なジャップ」グレート東郷』（岩波新書・780円）を送って頂きました。ありがとうございました。面白かったですね。一気に読みました。森さんはプロレスも好きで、詳しいんですね。驚きました。巻末の「参考文献」のところには私の本も挙げて下さり、ありがたかったです。『アントニオ猪木・過激プロレスの崩壊』（エスエル出版会・1987年）です。ところで、この12月27日のイベントですが、「創」主催なので、また公安の話かなと思ってました。ところが、ロフトで出ている「R o o f t o p」（12月号）にスケジュールが出てました。何と、こういう企画でした。

「秘蔵ネタで振り返る2005年、10大ニュース」

=マスメディアが伝えない真実=

出演：森達也（監督・作家）、綿井健陽（ビデオジャーナリスト）、鈴木邦男（元・新右翼）、大川豊（大川興業元総裁・予定）ほかその他スペシャルゲストも。

司会：篠田博之（「創」編集長）

さらに、『創』（1月号）を見たら、この他に、東條由布子さん、松岡利康さん、阿蘇山大噴火さんも出るという。凄い豪華だ。

(3) 1月17日(火) 7:00p.m. ライブ塾。映画監督の若松孝二さんがゲストです。映画「実録・連合赤軍」を撮るそうです。あの事件に参加した17才の少年の眼を通して撮るそうです。今年は、『17歳の風景』で評判を呼びましたし、連赤のあとは、17才のテロリスト・山口二矢を撮りたいと言ってます。「17歳3部作」です。「俺が宮城県の田舎から家出して上京したのも17歳だったし」と言ってました。山口二矢の事件の時は、私も同じ17歳で、とてつもなく衝撃を受けました。若松監督には〈17歳〉を中心テーマに、連合赤軍、山口二矢を語ってもらいます。

(4) 格闘技＆プロレス『迷宮ファイル3』（芸文社）が発表。私も書いてます。「国際主義こそが本当の、高貴なる愛国心につながるのだ！」

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張12月19日 「日の丸」と「君が代」と「温泉マーク」

(1)傑作だね。『日の丸あげて』と『拒否する教室』は

やっと見付けたよ。赤川次郎の『日の丸あげて』（小学館文庫）を。人気作家の本だから、どこにでもあると思ったが、ないんですね。10軒位、探しやっとあった。前にこのHPで紹介したが、これは衝撃的な小説だ。『日の丸あげて』だが、本当は「日の丸殺人事件」だ。「日本人なら皆、日の丸を揚げよう！」と主張し、隣り近所を説得する愛国おじさんの話だ。まわりの人達は、言われて渋々、日の丸を揚げる。でも一軒だけ頑強に抵抗する。マンション全部が揚げているのに、この一軒だけが揚げてない。〈統一〉を乱している。日本人としての〈団結〉を乱している。愛国おじさんは、思い余って、殺してしまう。

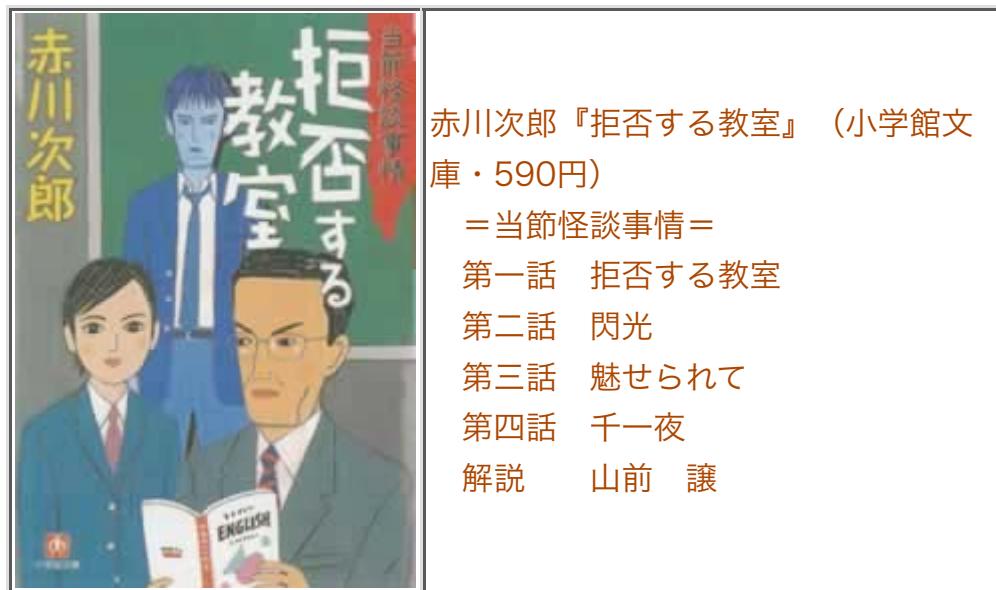
こう書くと、荒っぽくて、ありえない話だと思うかもしれないが、小説を読むと、実にリアルだ。そのうち起きるだろうな、と思わせる。この小説は、図書館で借りて読んだ。他の作家と一緒にミステリーの中に入っていたのだ。凄い本だと思って、この「主張」で前に紹介した。

ところが、『中州通信』（12月号）でこの本が紹介されていた。斎藤貴男、森達也、そして僕の3人が取り上げられ、「闘う男」の特集だった。僕のところに、この小説も紹介されていた。「鈴木さんのHPで書いていた」と。『中州通信』の編集者も読んで、いたく感動したのだろう。そこで、本の表紙も出ていた。あれ、文庫になってたのか。と初めて気がついた。大きな日の丸をバックに若い女の子が立っている。その表紙の絵もいい。それに、この小説は短編だ。じゃ、他の短編も入れて文庫にしたんだろう。じゃ、他に似たような話もあるのかな、と思って、この文庫を探しに行った。

でも、ない。赤川次郎はどこの本屋だってあるさ。と夕力を括ったのがいけなかったね。近所の本屋にはない。高田馬場は4度行ったが、ない。芳林堂にもない。赤川次郎は、他の文庫は一杯出てるが、小学館文庫のはない。大体、小学館文庫その物が少ない。文庫にも力関係があるようだ。新潮文庫、文春文庫、講談社文庫などは広い棚にある。しかし、小学館文庫、扶桑社文庫なんかは、棚も狭い。置いてる本も少ない。

そんで、思い余って、新宿の紀伊国屋に行った。日本一の書店だ。ここではなければ、ネットで探すしかない。でも、ない。もしかしたら、赤川次郎はファンが多いから、出たらすぐに買い占められたのか。あるいは、もう絶版なのかな。いろいろ考えた。でも、新宿に来たついでだからと、もう一軒だけ寄ってみた。ジュンク堂だ。そこであったのだ！バンザイ。

『日の丸あげて』は、その題字の横に、「当節怪談事情」と書かれている。えっ、これは「怪談」なのか。それに、これは「怪談事情」シリーズの二冊目だ。隣りには、一冊目の『拒否する教室』もある。面白そうだったので、これも買った。では二冊の内容を紹介する。



「怪談」だから第一話、第二話になっている。でも、怪談というよりも、もっとリアルだ。特に「拒否する教室」は。やり手の熱血教師がいる。この学校に、アメリカから日本の教育事情を視察に来る。当然、この先生の授業をみる。でも、この熱血・愛国教師には一つの悩みがあった。不登校の生徒だ。一つだけ、ポツンと机があいている。〈統一〉と〈団結〉を乱す。来ないなら来ないで、机を片づければいい。しかし、悪いことに、思い出したように、フラッと来る。そして、教師をからかい、又、フラッと出ていく。

アメリカ人が視察してる時、この「問題児」があらわれては困る。そん

で、殺す。いや、教師が殺すんじゃなくて、クラス委員に、「問題児を説得してくれ」と頼むんだ。そのクラス委員が説得しきれなくて、殺しちゃうんだ。先生思いのクラス委員だ。

これだって、未来予言的だ。と思ったら京都で、塾の先生が、小6の女の子を殺した。自分の言うことを聞かず、逆らう生徒に殺意を持ち、包丁を準備して塾に行き、殺したんだ。この講師は、もしかしたら、この『拒否する教室』を読んでいたのかもしれない。怖い話だ。では、もう一冊の、本命の本だ。



赤川次郎『日の丸あげて』（小学館文庫・495円）

=当節怪談事情・2=

第一話 失われた顔

第二話 日の丸あげて

第三話 路地裏の戦争

第四話 恋するビデオテープ

解説 大多和伴彦

驚いたが、この本の「解説」で大多和伴彦は、こう書いている。

〈“ついに書くことができる”

私は心の中で快哉を叫んだ---本編、つまり赤川次郎氏の解説依頼を受けたのことだ〉

自分が解説者として選ばれたことが本当に嬉しかったのだろう。だって、「解説」は「志願」して出来るものじゃない。著者が「この人に」という時もあるが、ほとんどは出版社が決める。この人なら、この本を面白がってくれるだろう。この本に感動してくれるだろう。その感動を読者にうまく伝えてくれるだろう。…そう思った人に白羽の矢を立てる。いくら長い間、赤川ファンだったとしても、指名されるかどうか分からない。だから、大多和さんの気持ちも分かる。

(2)オラにも「解説」を書かせてほしかった

それに、「解説」は、著者は勿論、出版社にとっても、読者にとってもと

ても大事だ。本屋で、この「解説」をサッと読んで、買うかどうかを決める人も多い。金の話で恐縮だが、著者は印税だ。売れれば売れるだけ入る。2刷、3刷となると、そのたびに金が入る。ところが「解説」は「400字1枚何千円」という原稿料だ。2刷、3刷になっても解説者には入らない。

ところが、「10万部以上卖れたら解説者にも印税契約が発生する」と聞いた。ある文芸評論家が言っていた。全ての本じゃないが、もうやっている出版社もある、ということだろう。10万部も卖れたら、著者の力だけでなく、解説者の力も大きい。と思われるからだ。僕は今まで、猪野健治、畠中純、斎藤貴男、植垣康博、かわぐちかいじなどの本の「解説」をやってきた。しかし、10万部以上出た本はない。だから、その噂が本当かどうかは確かめようがない。

この本の解説者・大多和は手放して喜んでいたが、「悔しいな」と思った。こんな政治的なテーマの小説だ。私にやらせてほしかった。悔しい。大多和氏は、さらにこう書いている。

〈実は本作品（『日の丸あげて』）には、ノベルス刊行時に、“三題嘶「日の丸」「君が代」「盗聴法”というサブタイトルが付されていた〉

〈日の丸掲揚に固執する元刑事が、団地というコミュニティに仕掛けた悪意…人間の心の闇を赤川氏は、ちょうどブラックライトを当てたかのように、巧みな筆致でにぶく光らせて見せてくれる。三題嘶という制約は『芝浜』のような傑作を生み出すきっかけとなることが多い。本作がその新たな実例となったと私は思うのだが〉

知らなかつたですね。『日の丸あげて』が三題嘶だったとは。ここで出てくる「芝浜」というのは落語の傑作だ。かなり昔、僕がまだ落語を聞き始めた頃だ。この話を聞いて、「あれっ、これ前に聞いたことがあるな。何て題ですか？」と隣りにいた高信太郎さん（漫画家）に聞いた。「エッ？ 知らないの。これが有名な『芝浜』ですよ。と教えてくれた。〈何だ。民族派の運動家のくせに日本の伝統・文化を全然知らないじゃないか〉と、きっと思ったんでしょうな。でも高さんは人間が出来るから、そんなことは口に出さん。

つい先日（12月6日）も、あの「柔侠伝」で有名なバロン吉元さん（漫画家）を紹介してくれた。詳しい話は、次の「創」に書いた。

さて、落語の「芝浜」だが、これは客席から出た「酔っ払い」「芝浜」「財布」という三つのお題を折り込んで、名人・三遊亭圓朝が即興で作り上

げたものだ。凄いね。三つのお題をもらい、その場で一つの落語にする。それも傑作といわれ、今でも残っている。天才ですし、名人ですよね。

赤川次郎は、別に読者からお題をもらったわけじゃないが、自分で、三つのお題を考え、あえて「制約」を作って、小説を書いたのだ。これも多分、傑作として、後々まで残るあります。皆さんも是非読んで下さいませ。

表紙が格好いいので、アップしておきましょう。日の丸をバックにして若い女性が立っている。いいねえ。学校でも、「いい表紙だね」と生徒に見せてやった。なんか、爽やかで…。そしたら、「でも、日の丸から血が出てるよ」と女の子に言われた。気がつかなかった。よく見ると、確かに血が出ている。日の丸が血の涙を流しているのか。その血がたまって、海になっている。そこに少女は足をひたして立っている。何やら意味深長な絵だ。

日の丸は、昇る太陽をイメージした旗だ。でも、別な説もある。白は源氏の旗だ。赤は平家だ。武張った、戦闘的な源氏の「白」だけではダメだ。だから、優雅な、貴族的な「赤」を丸にして中央にいれた。それが「日の丸」だ。「武と知」「戦争と平和」を象徴してるんだ。一体誰が言ってるのかって？ 忘れたよ。どっかの学者だろう。もしかしたら、私かもしれません。それともウチの猫かもしれニヤイ。

大体、どこに行っても猫の話をされるのは不愉快だ。たまたま飼ってみただけなのに、私の仕事のことは聞かないで、皆、猫のことばかり聞く。私は猫に嫉妬しちょるとですよ。見沢氏の墓参りの時（12月8日）も、作家の雨宮処凜さんに、「ねえねえ、写真みせて。オスなの？ メスなの？」と聞かれた。どうでもいいだろう。そんなことは。と投げ槍に、「ニューハーフだよ」と言ったら、「あっ、去勢してるんだ」。ギクッとしましたね。凄い。オラの心を読んでいる。怖い。作家は皆、他人の心を読めるんだ。だからもう作家と話すのはやめよう。

(3)国旗・国歌に対する石坂啓さんの革命的提案を聞け！

「日の丸」についてに、今度は「君が代」だ。この原稿も三題漸になりそうだ。芝居の「歌わせたい男たち」のことを前に書いたよね。校長が必死になって「君が代」を歌わせようとする。しかし、一人だけ歌わん教師がいる。歌わないだけで「左翼」と言われる。何とかして歌わせようと、校長や他の教師は必死になって説得する。今月号の「創」（1月号）で書いたけど、11月13日、アムネスティで呼ばれ、大阪に行ってきた。そこでこの芝居

の話をしたら、知ってる人がいた。「今度、大阪に来るので見に行きます」と言っていた。いいですね。全国を回るんだ。

その「歌わせたい男たち」のパンフレットを見ていたら、作者の永井愛さんと石坂啓（漫画家）さんが対談していた。おっ、いいね。と思いながら。でも、悔しいな。オラにさせてくれれば…とも思った。（チョッピリだが）。日の丸・君が代は、私は詳しいし、彼ら（日の丸・君が代）の気持ちもよく分かるんだし。

この対談で、永井さんがなぜこの芝居を書こうと思ったのかについて語ってる。この問題で処分者が出たので、これは何だ、と思ったらしい。「そうなると私は劇作家ですから、その数字の向こうにどんなドラマがあるのか考えてしまうわけです」と。そして、石坂さんは、こんなことを言ってる。

〈私は実際に中学生の息子がいますし、教職員の方たちに呼ばれて講演に行ったりもしますけど、現場の声はもう悲鳴に近いようですね。教職員は必ず国旗と対面式に座らされる。式典の日には教育委員会から各校にふたりずつ派遣されて、不起立者と席を外している者は全部チェックされる。今年の春には、歌うときの声量までチェックする学校も出たそうじゃないですか。馬鹿馬鹿しいったらない。事態はもう、漫画家の想像を超えてるなあと思って〉

そうですね。漫画以上ですね。なぜ声量をはかるかというと、口をあいてるが、歌ってるフリだけで声を出してない人がいる。そんな口パクをチェックするんだそうな。口を開いて歌ってるフリしてるんなら、いいじゃないか。そこまでやるんなら。と、私は思っちゃうね。でも、ダメなんだって。そもそも「国旗・国歌法」が出来た時は、「決して強制するものではない」と政府も文部省も言っていた。しかし、法律が出来ると〈強制〉の嵐だ。いかんよね。石坂さんは、大体、日の丸が嫌いらしい。それで、こんな突飛な提案をする。

（石坂）もちろん、日の丸や君が代が好きだっていう人はそれでかまわないけど、私は嫌なんですね。昔の資料を見るにつけ、国民が喜んで日の丸を振ってた時代には、ろくなことがありませんから。ただ、もっと平和的な、日本の情緒や温かみのある旗であれば、振ってもいいなあと思うんです。それで、最近気が付いたんですよ。イイのがあるじゃー！と。それはですね。温泉マーク。

（永井）（笑）

(石坂) 外国でのマークを目にしたら、「ああ日本に帰りたい…」と愛國心が沸きますよね。そうなれば当然、国歌は「いい湯だな」。

(永井) (笑)

私も永井さんと同じに(笑い)(笑い)ですね。右翼じゃないから、「とんでもない!」「売国奴だ!」なんて思いませんよ。単純に面白がっている。それに前にもこの「革命的提案」は聞いた。何かの集会だった。日比谷かな。読売ホールかな。「個人情報保護法案」反対集会の打ち上げの時だよ。酔っ払って、石坂さんが机の上に上がり、「温泉マークを国旗にしろ!」と叫んでましたっけ。左翼の人ばかりだから、圧倒的拍手で迎えられるかと思ったが、誰も拍手してなかった。皆、無視していた。かわいそうに。じゃ、今度、2人で口フトかライブ塾でやりましょう。「国旗は日の丸がいいか、温泉マークか!」と。

それにしても、国歌はドリフターズの「いい湯だな」にして、セットで考えるところが凄い。じゃ、これを漫画にして出版すればいい。売れるよ。

他にも、いろんな人が〈提案〉を出したらしい。「このままでは日本は軍国主義になる。あの時代に戻ってはならない!」と言うのなら、じゃ、国歌は“この道はいつか来た道”にするとか。その位の提案をしろよ。わが敬愛する塩見孝也さんは、「日の丸の下にハンマーとシャベルを描け」と言っていた。そうすればソ連のような労働者の国旗になるという。これもまあ、面白い。

もう一つ、永井愛さんが語っている。「週刊金曜日」(11月18日号)だ。この芝居について、フリーライターの星崎いつきさんが聞いている。星崎いつきなんて、まるで宝塚のような名前だが、実物も宝塚のようだ。私の知り合いだ。いいインタビューだ。でも、オラにやらせてほしかったな、とも思った。そう言ったら、「じゃ、今度ね」と軽くあしらわれた。その中で、永井さんは、こんなことを言ってる。

〈悪いのは不起立の教師ではなく処分する側のはずですが、それでもみんな黙っている。公権力に対して弱者がものを言えなくなっているんです。他の人は声を上げず、労働組合も動きません。これがおかしいのに、さらに卒業式に警官やパトカーを呼ぶのも普通だそうです〉

さらに凄いことを言う。これが結論だね。

〈自分だけでは済まない。周囲に迷惑がかかるからと皆がスジを曲げていくことの怖さを描きたいと思いました。日本は憲法ではなく「処世術」が最高法規なんだと思います。あとは「長いものには巻かれろ」と、「物言えは唇寒し」ですね〉

うーん、僕もよく考えてみませう。永井愛さん、赤川次郎さんとも、いつか話し合ってみたいですね。どっかの雑誌で企画してくんないかな。

【だいありー】

(1)12月12日(月) 7時から虎の門パストラルホテル。竹田恒泰さんの『語られなかった皇族たちの真実』（小学館）出版記念会。元・竹田宮さまだ。2年前、木村団長のもと、一緒にイラクに行った。「プリンス竹田」と大歓迎されていた。「女帝反対」でマスコミにもよく出ている。「時の人」だ。僕の知ってる「唯一の元皇族」だ。もしかしたら、又、皇族に戻るかもしれない。

途中で抜けて九段会館へ。鳥肌実のライブ「靖国神社で逢いませう」に行く。終わって挨拶。久しぶりだ。月刊「創」で対談して以来かな。今回は、いろんな趣向もあって、よかった。熱烈な鳥肌ファンを鳥肌さんに紹介してやったら、狂喜していた。「もう死んでもいい！」と言っていた。凄いやね。

(2)12月13日(火) ジャナ専。「時事問題」では、三島由紀夫主演の幻の映画「憂国」を見せた。「時事問題」では、〈読書術〉の話をした。午後、骨法整体に行く。寒くなったので、体のオーバーホールをしてもらう。体が軽くなり、スッキリした。夜、「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演を見に行く。こまばエミナース。面白かった。ゲストで自民党の山本一太さん、橋本聖子さんが出ていた。

(3)12月14日(水) 昼、図書館。夜、柔道。

(4)12月15日(木) 3時半から、東京芸大に行く。『「脳」整理法』（ちくま新書）の著者の茂木健一郎さんの授業を聞く。保坂和志さん（作家）と「芸術の自由」について話した。終わって鍋料理をごちそうになった。

(5)12月16日(金) 7時から、このHPのオフ会。新宿の居酒屋で。お世話になっている皆様に久しぶりにお会いでき嬉しうございました。

(6)12月17日(土) 京都に行く。元民主党議員の山本譲二さんの講演を聞き

に行く。京都駅隣りのキャンパス・プラザ。『獄窓記』を読んで感動した。その話を、アムネスティ大阪の時にしたら、「12月に講演しますよ。けーへん」と言われたので、行く。よかったです。京都泊。

(7)12月18日(日) 昼帰京。夜5時から塩見さんの忘年会。7時から又、別の忘年会。

【お知らせ】

(1) 「週刊読書人」(12月16日号)は巻頭で、「アンケート特集。2005年の収穫」です。「今年の収穫」と思われる本、三冊を各分野の人々があげています。私も書いてます。

(2)森達也さんが「創」(1月号)の連載「極私的メディア論」でこう書いてます。

〈いつの日か共謀罪が成立し、そしてさらに、「不気味と判断される人物はその場で検挙せよ」との法案がもし可決したら、僕は多分、かなり早い段階で塀の中だ。他には誰がいるかな。森巣博さんや鈴木邦男さん、アジアアレスの野中章弘さんや宮崎学さんは、法案施行日に捕まるだろう〉

いやー、光栄ですね。ぜひ捕まりたいですね。歴史に名が残りますよ。ワクワクします。でも、猫の世話はどうしようかな。ついでに逮捕してもらおう。世界初の「猫の思想犯」だ。

(3)12月27日(火) 7:30p.m. 今年最後のロフト出演です。「創」イベントです。「秘蔵ネタで振り返る2005年、10大ニュース」です。森達也、綿井健陽、大川豊、東條由布子、松岡利康さんなどが出てる。私も出る。

(4)1月17日(火) 7:00p.m.よりライブ塾(トリックスター)です。ゲストは若松孝二さん(映画監督)です。映画「実録・連合赤軍事件」を撮るべく、始動しました。そのあとは「山口二矢」を撮りたいと言っています。若松監督の決意と壮大な構想を聞きます。

(5)「新刊ニュース」((株)トーハン)の1月号で「作家が選んだこの3冊」の特集をしてます。私も書いてます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

今週の主張12月26日

「安全・平穏」さえあれば、「自由」はなくてもいいのか！

(1)逆転有罪になっちゃったよ。反戦ビラ事件が

「反戦ビラ配布で逆転有罪」と新聞（12月10日付）に出ていた。ひどい話だ。世も末だと思った。ビラ配布くらい、自由にさせたらいいだろう。今時、自分の主張を訴えてビラを配布するなんて偉いよ。そう褒めてやるべきなのに、有罪だ。

立川市の自衛隊官舎敷地内に無断で入り、ビラを投函したとして、市民グループ「立川自衛隊監視テント村」の3人が逮捕され、75日間も勾留された。ビラ配布で長期勾留なんて前代未聞だ。しかし一審・東京地裁八王子支部では無罪となった。「当然だろう」「裁判所には良識があった」と思った。大体、公安が無理矢理にデッチ上げて逮捕したものだ。「おいおい、いくら何でもそれはないだろう」と裁判所は思ったのだ。

だが、無罪判決に検察側が控訴。12月9日、控訴審判決公判が東京高裁で開かれ、中川武隆裁判長は一審判決を破棄し、罰金20万～10万円の逆転有罪を言い渡した。裁判長は言う。「表現の自由が尊重されるとしても、そのために他人の権利を侵害してもよいことにはならない」

一審よりも後退し、反動的なものになっている。一審では、「立ち入りは住居侵入罪の構成要件に該当するが、刑事責任を問えない」と無罪を言い渡した。居住者の被害程度を軽微とした上で、ピンクチラシなど商業ビラ配布が放置されながら、憲法が保障する政治的主張を載せたビラ配布の刑事責任を問うことには疑問を呈したのだ。

一審判決は正しいと思う。敷地に無断で立ち入っている人はいくらでもいる。新聞の勧誘、宗教の勧誘、物売り…と。そのたびに居住者は警察に通報

しないだろう。「いりません」と言えばいいだけだ。先日、寝ていたら、コンコンと戸を叩く音がする。「誰ですか」と言ったら、「上高田3丁目から来ました」と言う。区役所の人か町内会の人かと思って戸を開けたら、怪しげな宗教だ。「あなたは地獄におちる」「最後の審判が下される。悔い改めなさい」と言う。気持ち悪いし、恐い。追い出したら地獄におちるかもしれないと恐怖に震えながら、でも、追い返した。

又、「新聞社から来ました」というから産経の集金かと思うと、他の新聞の勧誘だ。ちょっと開けると、ドアのすき間に足を入れて、ペラペラ喋り出す。これらも全部、私有地の敷地内に無断で侵入した人々だ。法を侵してゐ人々だ。アパートの大家さんに了解を得て敷地内に入ってるわけじゃない。厳密に言えば「犯罪」だ。だからといって、こんなことで警察に通報しない。

ましてや、人を訪ねるわけじゃない。郵便ポストに入れただけだ。ピンクチラシは勿論、「ピザ配達」「いらないパソコンを引き取ります」「引っ越しを安く引き受けます」といったビラ、チラシが毎日入っている。「また入ってるな」と思いながら、捨てるだけだ。誰も、警察に通報しようなんて思わない。当然だろう。

「でも反戦ビラでは居住者が通報したんじゃないかな」と思うかもしれない。しかし、誰も通報しない。「被害」も感じない。それなのに警察は逮捕し、長期勾留した。

こういう手口だ。公安〈警察〉は、一軒一軒を回った。反戦ビラを見せて、「こんなものが郵便受けに入ってませんでしたか」と聞く。「えっ、あったかな」「ビラ、チラシは、すぐ捨てるから分かんないな」と言う人も多い。「いや、本当に配布したんですよ」と警察に言われば、「そうですか」と言うしかない。そして、これを配ったグループは市民団体といってますが、本当は極左過激派が牛耳ってるんですよ、とあることを言う。「ほら、内ゲバで何人も殺してるでしょう。又、爆弾を仕掛けたり、火炎瓶を投げたりしてるグループですよ。そんな奴らが敷地内に自由に出入りしてるんですよ。怖いでしょ」と言う。不安を煽る。

「それに、お宅には小さなお子さんがおりますよね。何かあつたら大変ですよ」とさらに不安を煽る。ここまで言われて、「いや、不安はありません。政治的な表現活動は自由です。警察が介入することではありません。お帰り下さい」と毅然として言える人はいない。それに自衛隊官舎だから、警察には友好感情を持っている。

「そうでしょう。不安ですよね。じゃ、ここに署名して下さい」と公安は紙を出す。ビラ配りによって、居住者がいかに不安を感じ、恐怖におびえているかが書かれている。すでに文書は作られていて、あとは署名するだけになっていたのだ。手回しがいい。そこまでやられたら署名をする。拒否して警察に睨まれたらたまらない。拒否したら、「極左過激派のスパイだ」と自衛隊に通報されるかもしれない。そう思って署名する。

それに、「不安でしょう」と聞かれ、「ええ、そう言われば不安ですね」と答えただけだ。それだけの署名のはずだ。それでもって、まさか逮捕するとは思っていない。居住者は、「逮捕してくれ」なんて一人も思っていないのだ。公安の話術に不安をかきたてられ、「不安です」と言っただけだ。署名をして、市民グループに「通報」するだけだと思った。あるいは、近づけないように警告してくれるのだと思った。

ところが、いきなり逮捕だ。そして長期勾留だ。何気なく署名した住民たちも悔やんでいるだろう。やましさを感じているだろう。「公安の手口」は卑怯だよ。

(2)ビラ配り、デモ、集会、街宣くらい自由にやらせろよ

表現活動くらい、全て自由にやらせたらいいんだ。チラシ配りは無制限に自由にする。デモも集会も自由にする。街宣も自由にする。そうでないと、全く活気のない、死人の国になってしまうよ。この日本は。

デモや野外集会などは全て、警察に許可をもらってやってるのだ。「この時間じゃダメだ」「ここのコースではダメだ」と文句をいわれ、やっと許可してもらう。そのくせ、デモ隊の何倍もの機動隊でサンドイッチにする。たとえば100人のデモなら500人位の機動隊が前後左右をかためる。どう見ても、機動隊のデモにしか見えない。中味のデモ隊は見えない。又、こづいたり、盾を足元に落としたりして嫌がらせをする。「なんだ!」と文句を言うと、すぐさま「公務執行妨害だ!」と言って逮捕する。

これじゃ、誰もデモに行かない。それに、パシャパシャと顔写真をとられ、解散後は尾行され、住んでる所を確認され、ブラックリストに載せられる。これじゃ、表現・思想の自由なんかないのと同じだ。自民党の改憲案では、さらにこの表現・思想の自由を制限しようとしている。だったら今のが「マッカーサー憲法」の方がまだました。

つまり、憲法で保障された表現・思想の自由行使してるだけなのに、こんなふうに弾圧される。合法運動をしてるのに、まるで非合法運動をしてる

かのように弾圧される。じゃ、もうやめようとなる。政府にものを言ったり、集会したり、デモをしたり…なんて、全てやめようとなる。そして、なんとも無気力な人間ばかりの無気力な社会になる。これでいいのだろうか。

デモなんて、好きにやらせりゃいい。別に、歩いてる人や車を襲うわけじゃない。きちんと顔をさらし、団体名を出してデモしてるんだ。人や車を襲ったら、自殺行為だ。万が一、そんなことをしたらいくらでも逮捕したらいい。しかし、そんなことはない。

又、街宣だって、大音響で軍歌だけを流してるのは注意したらいいだろうが、駅前で、演説してるのなんか、好きにやらせたらいい。今時、自分たちの主張を人々に訴えるなんて偉いし、健気じゃないか。だから、各駅には「街宣車優先ゾーン」を設ける。「言論の自由」のためにはこの位のことをしてもいい。そして、どこの団体が一番説得力があるか、聞き比べたらいい。なんならテレビでも、「全日本街宣コンテスト」をやってチャンピオンを決めたらいい。

それが「言論の自由」ってもんだよ。〈言論の場〉を与えないで、言論は必要だなんて言っても空念仏だよ。バカヤロー。と、ついつい怒って言葉が乱暴になっちゃった。

話を反戦ビラまきに戻す。そういえば僕らも自衛隊官舎にはビラを入れたな、と思い出したんだ。見沢知廉氏が一水会に入った頃だ。あの頃は若者がドッと一水会に入ってきた。希望者が多いんで、面接試験や筆記試験をやって、ふるい落としていた。「新左翼じゃ芽が出ないから新右翼になりたい」という人も多かった。新右翼なら、すぐにトップになれるし、雑誌やテレビにも出れる、と言ってた若者もいた。

又、元自衛官の人間もかなりいた。四谷公会堂で、元自衛官だけをパネラーにして集会をやったりもした。「反戦自衛官」に対抗し、「憂国自衛官」の連載をレコンでやったりもした。彼らが、古巣である自衛隊に行って、「自衛隊を国軍にしろ！」「自衛隊員は決起しろ！」「クーデターをやれ！」などと街宣した。又、ビラも配布した。今の市民運動のビラ配布よりもずっと「迷惑」だったし、「不安」だったはずだ。しかし、捕まらなかつた。

別に公安と馴れあっていたのではない。その証拠に、他の件ではいくらでも捕まっていた。当時は、左右の活動も、もっともっと活発だった。だから、公安も忙しくて、そんなことで捕まえてはいられなかったのだ。それに、そんな「卑怯な手」を使ってまでやりたくないと思ったのか。公安にも

少しは良心があったのかもしれない。その前は、ビラ貼りだって、自由にやれた。いや、自由ではないな。見つかったら捕まる。夜やるが、捕まったら警察に連行され、調書をとられる。朝までかかることもある。「ゲッ、5時間もとめられちゃったよ。一日をムダにしたな」と文句を言っていた。

でも今ならどうか。チラシを配ったくらいで75日間もぶち込まれる。だったら、ビラを貼ったら、何年か刑務所に送られるかもしれない。こんな国、民主主義国家じゃないよ。

(3) 困ったな。もっと別の手を考えるか…

「二審で有罪」の翌日の産経新聞（12月10日付）を見ていたら、土本武司さんがコメントをしていた。たしか、元検察だ。今は白鷗大法科大学院教授（刑法）だ。「立ち入りの目的が正当であっても、それが居住者の意志に反し、立ち入りによって居住者の平穏が乱れるなら、罪を問われるのが法の趣旨に合う」とも言う。

うーん。どうかな。敷地に入ったのがいけないのなら、新聞や宗教の勧誘も、ピザのチラシ配りも全て逮捕したらいい。でも、しないのは、〈政治性〉がないからだ。〈政治性〉が怖いから弾圧するのではないか。

だったら今度は、「イラク派遣賛成」のチラシを入れたらどうか。絶対に逮捕しないだろう。「産経・正論を読みましょう！」「愛国心は必要です」と書いたらいい。そして、「お国のために立派に死んできて下さい」と書けばいい。激励してるとか、不安にさせてるのか分からない。反戦ビラも、次は、もっと巧妙にやつたらいい。

と、つい、ズルイことを私も考えてしまう。つまり、この程度のことで弾圧したら、もっとズルイこと、もっと卑怯なことで対抗しようと考える。それはまずいだろうよ。合法デモを弾圧すれば、「じゃデモなんかやってられん」と思い、陰で隠れて爆弾を仕掛けるかもしれない。非合法闘争に人間を追いやるよ。それじゃマズイだろうが。非合法の犯罪をなくすためにも、公然とした活動は認め、大いにやらせる必要があるんだ。

産経新聞では結論としてこう書いている。

〈「表現の自由は尊重されても他人の権利を侵害していいことにはならない」とした判決は重い。「表現の自由」を前にしても、居住者の平穏に暮らす権利が矮小（わいしう）化されるべきではない〉

そして見出しへ、「表現の自由より平穏な生活」となっている。そうか

なー。街中に監視カメラをつけているのも同じ発想だ。「自由」よりも「安全」なのだ。だったら、独裁国家がいいことになる。安全、平穏が保障されたらそれでいいのか。これじゃ「動物園の平和」だ。我々は動物ではない。人間だ。

ここでコメントしてる白鷗大学の土本さんとは今年6月の池内ひろ美さんの出版記念会で会った。見沢知廉氏も来ていた。彼に会った最後だった。

土本さんは会うのが二回目だ。初めて会ったのは去年の「朝まで生テレビ」だ。「連合赤軍とオウム」の時だ。僕は土本さんの隣りだった。資料をたくさん持ってきていた。それに赤や青で線を引いて、「これだけは発言しよう」という決意が感じられた。

初めのコーナーで、「なぜオウムが悪いのか」と田原さんにふられて、「それは人を殺したからです」と土本さんが答えていた。その瞬間、他のパネラーがドッと襲いかかった。「何いってんだ。キリスト教も仏教もイスラム教もみな人殺しをしている」「人を殺していない宗教なんかあるか、バカヤロー！」と。それで土本さんは、シュンとなってしまった。それっきり、ほとんど発言しなかったようだ。真面目な人だなと思った。かわいそうになった。もっと発言させろよ。もっと、静かに聞いてやれよ、と思った。でも、他のパネラーは、うるさい連中ばかりだ。刑務所帰りの人もいるし、逮捕歴のある人も多い。「何でこんな犯罪者から私は怒鳴られなくちゃならんのだ」と土本さんは思ったでしょうね。だから、今度はロフトかトリックスターで、ゆっくりお話を聞きたいですね。よろしくお願ひします。オワリ。では皆様、よいお年を。

【今週の猫のコーナーです】

(1)元静岡県警公安の真田左近さんからメールをもらいました。うちの猫についてです。

〈シロちゃんはお元気ですか。私は先生の身近に猫がいることは、それとなく分かりましたよ。老いて寝たきりになった時、枕元に猫がじゅれつく。面倒を見てくれるのは猫しかいないというところに、心のなかのリアリティを感じたからです。

ところで、先生は人徳がないんですか？そんなことはないと思いますが、私は人望がありません。ちなみに、猫にも人徳。否「猫徳」のあるなしが見られます。十五、六年前に飼っていた雄猫は、おっちょこちょいで落ち着きがなく、椅子から降りるときにもこけたりする間抜けなヤツでしたが、なぜ

か猫徳はあったようです。よその猫が遊びに来たり、庭先で彼を中心に猫の集会を開くなど、そんな光景を目にしました。雄猫は子育てに参加しないものですが、こやつは娘や幼い弟に普段捕らないネズミを与えるなど、お人よしでした。だから慕われたのでしょう〉

やはり元公安の眼力は凄いですね。まいりました。

(2)しかし、猫は迫害されちりますね。日本語では。猫のつく言葉には、いい言葉がない。なしてでしょう。「猫に小判」「猫の手も借りたい」「猫も杓子も」「猫かぶり」「猫かわいがり」「猫背」「猫撫で声」「猫の額」「猫の目のように変わる」「ネコババ」…と。いかんですね。日本語を変えなくっちゃ。

(3)「かくしても、猫を飼ってる人は分かるんよ」と友達に言われました。「ほら、セーターに猫の毛がついてるし…」と。ギクッとしました。自分じゃちゃんと証拠を消してるつもりなのに、猫好きの人は分かるんですね。そんな小さなことにも気付くなんて。怖いです。

(4)プロレスラーの前田日明さんと以前会った時に言ってました。リングスの道場で猫を飼ってたんです。若手レスラーに受身を教える時に猫を使ったんです。「猫は高い所から落ちてもクルリと一回転して、地上に立つんだ。見てろよ」と目の高さから落としました。ところが、ズボラな猫で、回転もできず、立ちもせず、ただ、見苦しくズドンと落ちただけだったそうな。若手レスラーは笑うに笑えず。前田さんは困ったそうです。

(5)12月18日(日) 塩見さんの忘年会で、中村さんが猫の写真を見せてくれました。携帯に入ってました。かわいい猫でした。「鈴木さんちの猫の写真も見せて下さいよ」と言われました。じゃ、携帯を買わにゃならん。「月に一回、ネーキッド・ロフトで猫の集会をやってるので来て下さい」と言う。壇上に猫を並べて、猫が激論する。憲法改正や公安について。と思ったら、猫好きの人が集まって話すだけだという。つまんねえ。壇上で鬪わせたらウチのが最強だけどな。

(6)「猫を飼ってると〈弱味〉になりませんか?」と聞かれた。猫を誘拐されて人質ならぬ「猫質」にされる。「返してほしかったら赤報隊の正体を喋れ!」と言わされたらどうする。ウーン、困るね。どうしよう。

【だいありー】

(1)12月20日(火) ジャナ専は今年最後の授業。「時事問題」では「反戦ビラに逆転有罪」の話。「現代史」では、成田闘争と全共闘の話をした。1時から骨法整体。おかげで体が軽くなり、調子がよくなつた。ありがとうございます。一水会の人も来ていた。

夕方、関口君が「朝日新聞に鈴木さんのが出てたよ」とコピーを送ってくれた。1分後、今度は朝日の人が、うちの新聞に出てたよ、と送ってくれた。謝々。朝日新聞(12月20日・夕刊)の文化欄にノンフィクション作家の朝倉喬司さんが、「便利さとの距離」というエッセーを書いている。朝倉さんはパソコンも携帯も使わんのだそうだ。その最後のところにこう書いている。

〈文章を綴(つづ)るのが私の仕事。パソコンを使えば便利なことくらい、言われなくても分かっているが、そもそも文字というものは、人間の「書き、綴る」動作と不可分に地上にもたらされたものであり、その動作にこそ(言い表すべき)意味を、虚空から呼び寄せる精妙な働きがこもるのだ。それをうかうかと手放してなるものかと頑なに念じながら、この原稿も鉛筆で書いている。携帯電話は、これは必要を感じないだけの話。

「でも、俺んちにテレビはあるよ。電気テレビが」と、あるとき評論家の鈴木邦男に軽口を叩いたところ、即座に「ガステレビに替えてみたら」という返事が返ってきた。いやはや〉

へエー。凄いことを言ったんですね。忘れてました。多分、トリックスターで対談した時でしょうね。うちはガスヒーターもあるし、ガス風呂もあるし、ガス冷蔵庫もあるが、テレビだけはまだ電気だ。遅れている。自分で言ったのに実行しなくちゃいけんね。

(2)12月21日(水) 徹夜して「月刊タイムス」の原稿を書いた。夜、元新左翼のライターたちと会った。

(3)12月22日(木) 中野図書館に雇ひ。夜、亡くなった三浦重周氏をしのぶ会。壮絶な自決だったという。「週刊新潮」(12月29日号)にも出ていた。「壮絶な『割腹自決』を遂げた『三島由紀夫研究会』事務局長」と。

(4)12月24日(土) PANTAさんのライブに行きました。とてもよかったです。感動しました。

(5)見沢知廉氏の死後、『ライト・イズ・ライト』が作品社から出たが、今度は『七号病室』が同じ作品社から出た。1500円。さらに、『改造』も近い

うちに出るという。凄い。

〈天逝の鬼才が獄中で綴った、『天皇ごっこ』以前の衝撃の傑作。殺人犯と天才精神科医の息詰まる神経戦〉

と帯にはある。凄い本だ。読んで下さい。

(6)『BURST』((株)コアマガジン)が復刊し、見沢知廉氏のことが特集されています。新左翼時代の同志・深笛義也さんが「追悼・見沢知廉」を10ページ書いてます。ぜひ読んで下さい。

(7)発売中の『漫画 実話ナックルズ』(06年2月号)に野分祭のことが書かれてました。なかなかいい記事です。

【お知らせ】

(1)12月27日(火) 7:00p.m. ロフトです。「創」イベントです。靖国神社について。今年の10大ニュースについて。等々です。森達也、東條由布子さんなどが出ます。私も附録で出ます。

(2)1月17日(火) 7:00p.m.より、ライブ塾(トリックスター)です。若松孝二監督が映画「実録・連合赤軍事件」への意欲を語ります。

(3)1月18日(水) 7:00p.m.より高田馬場シチズンプラザで一水会フォーラムです。講師は福田逸先生です。明大教授で、福田恆存先生のご子息です。演題は「日本を保守するもの=天皇制と国語=」です。

(4)2月14日(火) 7:00p.m. ライブ塾です。漫画家の石坂啓さんの予定です。前にこのHPで書きましたが、日の丸、君が代そして漫画について語ってもらおうと思ってます。

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年

ページデザイン／丸山條治